

【完結】 ザコの旅

クリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボクっ娘低身長クソザコJK（距離ガバ勢）が、なでリンの間に挟まったり、お汁粉が好きそうな浜松在住のエイブ乗りJKをフォースの距離ガバ面に墮としたりする話。

番外編（ガールズラブ注意）

<https://syosetu.org/novel/268358/>

目次

1話	自賠責保険	原付2年契約	8,
850円			
1	1		1
1	2		11
2話	日清	カップヌードルカレー	1
98円(税込)			
2	1		27
2	2		49
3話	UCC	マンデリン100%	2
00g	504円(税込)		
3	1		69
3	2		94

4話	キャプテンスタッグ	キャンプ	
マツト	2,079円(税込)		
4	1		111
4	2		127
4	3		139
5話	ナビタイム	ツーリングサポーター	
プレミアムコース	月額400円		
(税込)			
5	1		164
5	2		187
6話	イワタニ	ジュニアコンパクト	
バーナー	4,628円(税込)		
6	1		216

9 1	9 話 琵琶湖大橋有料道路 原付通行料	404
1 0 円		
8 2	8 話 モンベル ステラリッツジテント 2	380
8 1	型 3 2, 1 2 0 円 (税込)	361
7 2		324
7 1		292
B 6 君	B 6 君 5, 6 4 0 円 (税込)	
7 話 笑,	7 話 笑, s コンパクト焚き火グリル	
6 3		255
6 2		237

1 3 話	1 3 話 軽自動車税 第二種原動機付自	578
1 2 1	1 2 話 旅の思い出 0 円 (非課税)	555
1 1 2		532
1 1 1		
1 1 1	1, 9 8 0 円 (税込)	
1 1 話	1 1 話 ドンキホーテ サンタスーツ	504
1 0 2		488
1 0 1		
ル 1 5 2 円 (税込)	ル 1 5 2 円 (税込)	
1 0 話	1 0 話 レギュラーガソリン 1 リット	
9 3		456
9 2		432

転車(50cc超90cc以下) 2, 0

00円

13 | 1

598

14話 春華堂 うなぎパイ 徳用袋

230グラム 864円(税込)

14 | 1

620

14 | 2

643

15話 タカラトミー 人生ゲーム

4, 378円(税込)

15 | 1

664

15 | 2

683

15 | 3

708

15 | 4

732

16話 コールマン ルミエールランタ

ン 5, 980円(税込)

16 | 1

762

17話 モンベル ケーブルニットワ

クキャップ 2, 970円(税込)

17 | 1

788

17 | 2

809

17 | 3

833

18話 清水屋 雨畑茶アイス 300

円(税込)

18 | 1

852

18 | 2

872

19話 キタコ ドリブンスプロケット

37T 1, 805円(税込)

19 | 1 | 898

19 | 2 | 918

20話 東京湾フェリー 特殊手荷物料

金 125cc未満 片道 1, 800

円(税込)

20 | 1 | 939

20 | 2 | 958

21話 道の駅潮風王国 真サバ開き2

枚 500円(税込)

21 | 1 | 986

21 | 2 | 1008

22話 ムーンアイズ エマーゼン

シートンク 22, 000円(税込)

22 | 1 | 1044

23話 伊豆オレンジセンター 河津の

桜まんじゅう 15個 1, 400円(税

込)

23 | 1 | 1083

23 | 2 | 1110

24話 モンベル クルピカ55 3,

080円(税込)

24 | 1 | 1140

24 | 2 | 1164

24 | 3 | 1199

25話 ただいま 0円(おかえり)

	25	1
おまけ	ベルメゾン	フォトアルバム
3,	351円	(税込)
	自転車キャンプと春のハンバーガー	1231
	セット(1)	
	自転車キャンプと春のハンバーガー	1266
	セット(2)	
	自転車キャンプと春のハンバーガー	1281
	セット(3)	
	セミとお猿と奥多摩キャンツアー(1)	1306
1341		
	セミとお猿と奥多摩キャンツアー(2)	1355

1 話 自賠責保険 原付2年契約 8,850円

1—1

どこまでも続く海岸線。果てしなく続く太平洋。

伊豆、国道135号。曲がりくねった道路を時速50キロで駆け抜けていく。

容赦なく吹きつける太平洋の海風に負けないよう、両足でしっかりガソリンタンクを挟みこむ。

家を出る前に磨いたばかりの青いタンクが、オレンジ色の西日を反射してキラキラと輝いた。

スロットルを回す。2サイクル単気筒エンジンが毎分6000回転で振動、ブーツの靴底を規則正しく揺らす。

100メートルくらい先に休憩所が見えた。あそこで一旦休もう。

ギアを落とし、バイクを崖沿いの駐車場に止める。

エンジンを切る。火を消したばかりのエンジンは、まだパチパチと音を立てていた。ちよつと高回転で回しすぎた。エンジンが冷めるまで少し休もう。

シートから降りてゴーグルを取り、ヘルメットを脱ぐ。

突き刺すような海風がボクの髪をぐしゃぐしゃにした。

「寒いな」

このぶんならエンジンはすぐにも冷えるだろう。秋はバイクに優しい季節だ。

崖側のガードレールに両手を乗せる。澄み切ったオレンジ色の空の下、大海原がどこまでも続いていた。

水平線、地球の丸みすらわかるほどの大パノラマ。相も変わらずこの世界は美しい。

「そろそろエンジンも冷えたかな」

バイクに跨る。さて、今日はどこに泊まろうか。

「で、道端で寝てたら警察に捕まったと」

「捕まってない！　ちよつと注意されただけだよ！　次は補導なって言われただけだからー！」

今度からもつと人気のないところか、寝てても怪しまれないところで寝るから大丈夫。

「いやそれアウトだろ」

「ていうか、こんな寒い時期に外で寝てよう死なんかつたな」

「あれだろ、身体小さいから体温高いなやつじゃね」

「なるほど、子供体温っちゅうやつやな」

なるほどじゃないよ！　何が子供体温だ！　ボクは16歳だ！　ここにいる二人よりも誕生日早いんだぞー！

なんだよ、大垣さんも犬山さんも二人して。そんなに人が、人が……

「人が野宿して何が悪いんだよー！」

ボクの悲痛な叫びが野外活動サークルの部室に響き渡る。

野宿、それは持たざる金なしクソザコ庶民がブルジョワキャンパーに対抗できる唯一の手段。

お金も道具も必要ない。いるのは人としての尊厳を捨て去る覚悟だけ。

目の前を横切る人たちの可哀想なものを見る目、本当にこんなところで寝ていいのかという不安感。

気がついたら顔の上を這いずり回っている虫。

持ってきた寝具が寒すぎてまったく役に立たなかった時の焦燥感。

それでも頑張つて寝たと思つたけど、目が覚めて時計を見たらまだ一時間しか経つてなかつた時の絶望感。

それら全てを受け入れられるのなら、野宿はいつだって、どこだってボクたちを快く迎え入れてくれる。

だから……

「だからもう正座を解いてもいい？」

「却下」

最近の大垣さん、ひどいや。うう、床が冷たいよお。

色素の薄いボサボサの黒髪と、サイズの合っていない赤ぶちメガネのレンズを通して、二人の視線が突き刺さる。

「あのなあ、わたしらどんだけ心配したと思つてんねん」

明るい茶髪を横でまとめた犬山さんからの容赦のない正論。

相変わらずすごい大きい。何がとはいわないけど。ボクにもわけてほしい。

「ロリ子、正直言うとお前は前のお前のことを高く買っている。色んなところ行ってるし、コーヒー美味しいし、部室でただらだらしてるだけのあたしらにとつちや良い刺激だ」

黒ぶちメガネを光らせ長いツインテールを揺らす大垣さん。いつも思うけど前髪切りすぎな気がする。

「いつとくけど、ほんとだからな。でもな？」

あ、もしかして擁護してくれているのかな？ そんなことを一瞬思ったけれど、声のトーンが低すぎてそんなことはまったくなかった。

「二日も行方不明になるのはちよつとやりすぎじゃないか？ 携帯も繋がらんし、先生が家に電話かけても繋がらんってパニックになってたぞ」

「ごめんなさい。バッテリーもつたいなくてずっと機内モードにしてました」

あまり知られていないけど、地図データを読み込ませておけば機内モードでもナビは使えるのだ。

どうせボクに連絡なんてこないしね！ だって友達いないもんね！ と思つたらこのザマだ。

「それスマホの意味ないやろ。あんな、あとちよつとで搜索願い出すところやったらしいで」

正論やめて！ 反論できないからやめて！ ちくしょう！ 風邪で押し通そうと思つてた昔のボクが憎い！

「ほんま、よかつたなー警察沙汰にならなくて、通報されてたらきつと今頃大騒ぎになつとつたで」

「ごめんなさい、ゆるしてください」

二人の容赦のない正論攻撃に耐えきれず土下座、しようとして額を思い切りロッカーにぶつけた。

うえ、頭痛い。眼鏡ずれた。

「まあ、反省してるみたいだし、今日はこれくらいで勘弁してやろう。でもほんと、絵に描いたみたいなメガネロリなのに、行動力だけは凄まじいよなお前」

「め、メガネロリ……」

確かに身長低いけど、いつも図書室で委員やつてるお団子頭の子よりは高いから……たぶん。

「まったく、親御さんだつて心配しただろーに」

「あ、うちの親仕事忙しくてめつたに帰つてこないから大丈夫だよ」

「お、おう、そうか」

大丈夫だつて言おうとしたら何故か可哀想なものを見る目でみられた。もしかして、

変な勘違いされたんじゃないだろうか。

「あ、二人が思っているようなやつじゃないからね。ちゃんと学費と生活費はもらってるよ。まあ一回だけ月の食費使い切っちゃって飢え死にしかけたことあったけど別に大丈夫だったし」

「いや、それもつとあかんやろ」

単にバイクにつき込みすぎて、気がついたらすつからかんになっていただけなのが、それを言うところんどこそ何されるかわからないので内緒にしておく。

「アキ、わたしこの子の将来が本気で心配になってきたんやけど」

「ロリ子、お前苦労してんだなー！ あたしのことはいつでも頼っていいからなー」

大垣さん、肩をバシバシ叩かないでください、痛いです。

「で、ちなみにどこまで行ってきたんだ？」

「うんと、石廊崎だよ」

「石廊崎……静岡だよな？」

「せやで、伊豆半島のちょうど先端の部分や。ここからやとだいたい130……130キロ!？」

スマホを見ていた犬山さんが何故かすごく驚いたように声を荒げる。

隣でスマホを覗いていた大垣さんも同じようにひどく驚いていた。

「1300って往復いれたらそれ2000キロ超えるじゃねえか！ よく行ったなロリ子」
なんで二人はこんなに驚いているんだろう。

この時は伊豆半島の外周を回って熱海経由で帰ったから、たぶん300キロくらい走っているはずだ。でも、往復300キロなんてコンビニに行くのと同じレベルだしなあ。

うーん、謎だ。

「なんかアニメ見てたら急に海が見たくなっちゃったんだよね。どこもすごい綺麗だったよ。あ、写真もいっぱい撮ったんだ！」

あれは絶景というしかなかった。どこまでも続く太平洋。潮風が吹き付ける国道135号。まさに最高の体験だった。

「いや、そんなコンビニニ感覚で伊豆までいくなよ。まあそれはそれとして写真はあとで送ってくれ」

「うん、いっぱいあるからラインで送るね」

写真を撮りすぎて到着時間が予定より2時間くらい遅れたのは秘密だ。

いい景色を見ると写真を撮りたくなるのは旅人の宿命だと思う。

「マジか！ あ、どうせなら帰りにコンビニで印刷して部屋に貼るところぜ」

「アキー、脱線しとるでー」

「はっ、危うくロリ子の口車に乗せられるところだった」

乗せてないし、勝手に盛り上がっただけな気が。

とうか、この人たちはどうしてこんな心配してくるのだろうか。ボクは別に野クルの部員でもなんでもないので。

「うおっほん、とにかくだ。ロリ子も我らが野外活動サークルの一員である以上、その自覚をもって行動してくれたまえ」

「え、ボク部員だったの？」

【悲報】いつの間にか野クルに入部させられていた件について

「おいおい今更何言ってるんだよ。入部届だってちゃんと出しただろ？」

「ごめん、なんの話？」

大垣さんの顔が女の子がしてはいけない表情で凍りつく。ええ、嘘でしょ？

「……あれ？ 出したよな、イヌ子」

「部長が知らへんのに、わたしが知るわけないやろ」

……

……

……

「やっちった！」

「顔芸してもごまかされへんからな」

このあと滅茶苦茶入部届書かされた。

1—2

ボクは旅をするのが好きだ。

初めての旅は中二の夏。

ひよんなことから荷物を持てるだけもって家を出て、行けるところまで行った。

知らない道、知らない景色、知らない空。

五感で感じる全てが初めてで、全てが新鮮だった。

その日は疲れて適当な公園で眠った。今思えば、よく警察に通報されなかったなと思う。

そしてボクは旅に目覚めた。

ただ自由だった。どうしようもないくらいに自由だった。

そこにボクを縛るものはなにもなかった。

勉強、人付き合い、家族、お金、将来のこと、良いこと、悪いこと。

肩にのしかかっていた全てから一気に解放された。

ほんの一瞬だったけど、ボクはこの世界で誰よりも自由だったのだ。

ボクは旅にのめりこんだ。高校生になっても旅への情熱は衰えることはなかった。

死に物狂いでお金を稼ぎ、16歳になった時、最高のバイクを買った。

おかげでポツチになったけど、それは昔からだから気にしていない。ちよつとしたお金持ちにもなったしね。

まあ、ケチだから旅以外じゃほとんど使わないけどね。

だから、今のところボクの人生は順調だ。

あの二人と知り合ったのは予定外だったけど。

「わりいロリ子、てつきりもう入部してると思ってたわ」

「ほんま堪忍してーや。一応部長なんやからな？」

「一応言うな一応！ 悪かったってーほんとごめんなロリ子ー」

「別に気にしてないよ。というか部員と思われてたことのほうが意外だったよ」

職員室に入部届を提出し、昇降口に向かって三人で歩く。

外はもうすっかり夕方になっていて、遠くでカラスが鳴いていた。

入部届はつつがなく受理され、ボクは晴れて野外活動サークルの三人目のメンバーになったのであった。

拒否権？ あの状態でボクみたいなクソザコが言い出せると思うの？

まあ、部員でもないのに部室に入り浸るのもよくないし、ちようどいい機会だったのかもしれない。

「でも、本当にいいの？ ボク、正直あんまりキャンプ興味ないよ？」

ボクは旅が好きなのであって、キャンプが好きじゃなわけじゃない。

テントなんて野クルにあった980円の安物しか張ったことないし、焚き火も校庭の落ち葉を拾ってやったことしかない。

野宿については一家言あるつもりだけど、キャンプで役に立つとは到底思えなかった。

「今更細かいこと気にすんなって！ なあイヌ子」

「せやでー ゆうてうちらもキャンプ経験皆無やから、気にせんでええよ」

「そうそう！ あたしらだってキャンプしたことないから！ だから気にすんなって、な！」

仮にもアウトドアサークルの部員が自信満々に言っているセリフじゃない。

そういえばこの二人と話すようになってから二人がキャンプしたって話を聞いたこ

と一度もなかった気がする。

あれ、でもたしかサークルを作ったのって4月って言ってたような。もう11月に入っちゃったんだけど……

あと肩痛いから叩かないでください。

「ていうか、興味ないつつつたって、経験でいったらロリ子が一番あるだろ。野宿しまくってんじやん」

「あんなのキャンブなんて言わないよ。ただその辺で寝ればいいだけなんだからさ」

寒さ対策と雨にさえ気をつければ何も心配することもない。道の駅はジャステイス。そうやって話しているとボクたちはいつの間にか下駄箱の前に来ていた。

長く話していたせいもあるか、帰ろうとする生徒はほとんどいない。夕暮れの空に運動部の掛け声がこだます。

「それ、何も簡単やないからな。なんか、いつか帰ってこなくなりそうで、わたしほんま心配やわあ」

「人は見かけによらないっていうか、知り合ったばかりの時は、まさかこんなにアグレッシブな奴だと思わなかったなあ。こんなちっこいのにさ」

なんか二人の間でボクの株がどんどん下がっている気がするんだけど。帰ってこないって、野良猫とかじゃないんだからさあ。

あとちつこい言うな。

「別に、ボクがどこに行こうが二人に関係ないと思うんだけどなあ」

「そりやそうだ。どこに行こうがロリ子の自由だぜ。けど、せめて連絡くらいは入れてくれよな。これでもけつこう心配してたんだぜ」

「せやせや」

二人の心底心配したような顔にちよつとだけ罪悪感が込み上げる。

まさか、知り合つてまだ三ヶ月くらいしか経つてないのに、こんな心配されているなんて思つてなかつた。

少し軽率だったかもしれない。まあだからといってやめるわけじゃないけど。今回はタイミングが悪かつた。

靴に履き替え校舎の外にでる。夕日で暖められたまろやかな空気がボクの肌を包む。今日はバイクが気持ちよさそうだ。

「うん、心配かけてごめんね。じゃあまた来週」

「バイク気をつけろよー」

「ほな、またなー」

校門に向かう二人に別れを告げて、ボクは自転車置き場に向かう。

駐輪場、まばらになつた自転車たち。そのアルミフレームの森の中、青いタンクとシ

ルバーのメツキがボクを待っていた。

「待たせてごめんね、ビーちゃん」

そう言つてボクはバイクのタンクをポンポンと叩いた。

1999年式ヤマハYB-1。

1973年に発売されたYB50ビジネスバイクをベースに、1996年に発売された50ccバイクだ。

ロータリー式4速マニュアルトランスミッション、49cc F5B 2ストロークエンジン、全長176センチ、重量84キロ、タンク容量7.2リットル。

2000年の排ガス規制強化によつて、4ストローク式のYB-1 fourにその名を明け渡し、ヤマハのカタログから姿を消した。

つまりこのエンジンを積んだバイクは、実質これが最後のモデルなのだ。たぶん、この山梨でボク以外にYBに乗っている人は二、三人いれば多いほうだろう。

もう十何年も前のバイクだけど、元がビジネスバイクなだけあつてすこぶる丈夫。ボクよりも年上なのに、ところどころ錆び付いている以外、故障は一つも見られない。

とくにエンジンは極上品だ。フロントプロケットを交換したおかげもあつてか、長

い直線なら70キロは出せる。

カタログスペックだと49ccのはずなんだけど、この子は買った時から51ccだったからナンバープレートは黄色だ。

ボアアップしているわりにエンジンに何も手を加えてないように見えるのはきつと気のせいだ。

気のせいだったら気のせいなのだ。

「じゃ、行こっか」

前輪と自転車置き場の屋根の柱を止めていたチェーンを外し、シートの横のメットホルダーにひっかけていたジェットヘルメットを被る。

顎紐をしっかりしめて、シートの左側に吊るしてあるサイドバッグの中にしまっていたレザーストラップを両手にはめる。

どれも安物だけど原付程度ならこれでも問題ない。

メーター下のイグニッションスイッチに鍵を差し込み右に捻る。
ニュートラルランプとオイルランプが緑と赤に点灯した。

たまにケープルの接触が悪くてオイルランプがつかなくなる時があるけれど、今日は大丈夫みたいだ。

最近交換したばかりのハンドルを握ってバイクを自転車置き場から校門に向かって

押して歩く。

「ねえ、リンあれ」

「どうしたの斉藤、あ」

ふと視線を感じて後ろを見る。昇降口から出たばかりの二人の女の子がボクを見ていた。

一人は短い黒髪の子、もう一人はあのお団子頭の図書委員だ。

二人ともよく図書室でみかける。一緒に帰るところなのだろうか。

目が合ってしまった会釈をする。すると、あろうことか黒髪の子がニコニコしながらボクに近づいてきた。

うえ、勘弁してくれ。

「へえ、最近バイク乗ってる人いるなあって思ってたら、山中さんだったんだねー」

「あ、はい」

何か話そうとすると「あつ」てつける癖なんかならないんだろうか。

野クルの二人とは話せるようになってきたけれど、まだまだボクはコミュ障のままだ。

というか誰だろう。なんでボクの名前知ってるの？ 怖いんだけど。

「あ、いきなりごめんね？ 私斉藤恵那、覚えてるかな？ 図書室でよく会うよね」

ごめんなさい、顔しか覚えてません。

未だにクラスメイトの顔と名前が一致しない奴にちよつとすれ違う程度の人の名前なんて覚えられないわけないだろ！

「で、こつちのちゃんまいのがしまりん」

「おい、人をゆるキャラみたいに呼ぶな。てかちゃんまい言うな」

お団子頭の子は見た目とは裏腹に意外と言葉遣いがクール、というかぶつきらぼうだった。

しまりんさんと目が合いお互いに会釈する。

「えっと、わたし志摩リン。よく図書室に来てるよね」

「や、山中双葉、です。図書室には、はい、その、来てます」

このクソみたいな自己紹介をしたのはいったいどこの誰でしょう？

そう、ボクです。

はあ、これだからボツチはだめなんだ。もうね、一回死んだほうがいいね。

「わあ、すつこいレトロ。近くでみるとけっこう大きいねーこれヤマハ？」

斉藤さんがボクの周りを回りながらバイクをしげしげと観察する。

メーカーがわかったのはきつとフロントフェンダーの風切りプレートにヤマハのステッカーを貼っていたからだそう。

「は、はい、ヤマハの古いモデルで、一応原付です」

「へえ、ヤマハってことはリンが乗ろうとしてる原付と同じなんだ」

「いや、わたしが乗るのスクーターだから。こんなすごいやつじゃないからな」

「どうやら志摩さんはスクーターに乗る予定らしい。この学校じゃとくに珍しくはない。」

「何に乗るんだろう？ やっぱりビーノかな。」

「リン、せつかくなんだし色々教えてもらったら？ うちの学年じゃあバイクに乗って

る女の子なんて山中さんしかいないと思うよ」

「いや、いきなりそんなの迷惑だろ」

「でも最近、学校にかっこいいバイクで来てる女の子がいるって気にしてたじゃん」

「う、たしかにそうだけど……」

「かっこいいって……面と向かって言われると恥ずかしい。」

「というか少し前から目をつけられていたのかボクは。」

「まったく気がつかなかった。でもビーちゃんめちやくちや目立つし当たり前か。」

「外で乗つてるとよく見知らぬおじさんに話しかけられるし。もうしわけないけど話せないから本当にやめてほしい。」

「わたしは心配なんだよー 自転車でも本栖湖まで行くようなリンがバイクなんて乗った

ら絶対遠出するでしょ？ だから最初のうちに色々教えてもらったほうがいいんじゃないかなーってわたしは思うのですよ」

「お前はわたしのお母さんか。でもまあ、たしかに……」

自転車で本栖湖って、前にあそこ走ったけどけっこうきつい峠道だったような。こんなちっちゃいのに意外と体育会系？

それにしても初めてのバイクか、ちよつと懐かしいなあ。

あの時は大変だったなあ。教習所で習ってからいきなり公道だったし。

怖くて、心細くて、誰も助けてくれなくて……

「あ、あのー」

そんな昔のことを思い出したからだろうか、気がつけばボクは口を開いていた。

バクつく心臓を押さえ込み話を続ける。

「べ、別にぼ、わたしなんかでよかったら相談に乗るんで？」

「やばいやばい！ い、言ってしまった。しかもなんで疑問系だし。調子に乗ってるって思われたらどうしよう。」

「ぼ？ えっと、ほんとにいいの？ ありがとうー」

「おい、勝手に話進めるな」

危ない、間違っってボクっって言うところだった。

癖だからしかたないけど、リアルでボクっ子なんてきしよいだけだ。

野クルの二人は気にしないって言うてくれるけど、それはあの二人が特別なだけだろうし。

「リン、こういうチャンスは逃さない方がいいと思うよ」

「たしかに色々聞きたいけど、うーん……」

どうにも志摩さんのほうは乗り気じゃないらしい。わかるよその気持ち！

ボクもどうやってわからないことがあるのにコミュ障すぎて人に聞けなくて詰むこといっぱいあるし。

「ご、ごめんなさい。い、嫌だったらしいです」

「あー、ごめん、別に嫌ってわけじゃないんだ。でも、初対面の人にいきなりこんなこと頼んでいいのかなって」

こんな小さいのになんていい子なんだ。え、ボクもチビだろって？ なんのことかわからないなあ（141センチ）

「だめだよリン、人の親切はちゃんと受け取らないと」

「そりやそうだけど……あの、本当にいいの？」

「ぼ、わたしも、初めて乗った時教えてくれる人いなくてすごく困ったし……こういうのはお互い様だと思います」

もうちよつとうまい説明はできないものなのか。これだからコミュ障は。なんかとんとん拍子に教えることになっちゃったけど、スクーターならそれほど教えることはない。

せいぜい道路を一緒に走って一般道の走り方に慣れてもらうくらいかな。

まあ、そもそもそんな機会が訪れるのかすらわからないけどね。

「そっかーありがとー。じゃあ連絡先交換しよつか？。リンもスマホ出して」

「あ、うん」

「は、はい」

あつという間にスマホを取り出し流れるように連絡先を交換する。

野クルとお母さんの三人しか登録されていなかった友達のリストが一気に五人に増えた。

こ、こいつ、わずか十分にも満たない時間でボクが1年たつてもできなかったことを成し遂げやがったぞ。

斉藤さん、なんて恐ろしいコミュ力なんだ。

1パーセントくらいでいいからぼくにわけてほしい。ついでに身長もわけてほしい。

「じゃあぼ、わたしはこれで帰ります。何かあつたらその、連絡してください」

自分から言い出しておいてあれだけど、その日が来ないことを祈る。我ながら本当に

へタレだなあ。

「そっか、もうこんな時間。帰るところだったのにごめんね？　こんな子ですが、リンをよろしくお願いします」

「だからお母さんごっこやめろ」

「やだもうリンつたら〜」

「やめろ」

「この人たち本当に仲がいいな。なんていうか、お互いに全く遠慮してない感じがする。」

いいなあ、ボクも野クルの二人とこれくらい仲良くなればなあ……

「あの、山中さん、わたしももうすぐ免許取るんだけどさ、もしかしたら相談するかも。その時はお願いしてもいいかな？」

「は、はい、今はバイトもしてないしだいたい暇なんで大丈夫です」

「そっか、ありがとう」

混じり気のない感謝の気持ちを一心に受けてメンタルが死にかけてたボクは、帰るムードを決め込むためにヘルメットに引っ掛けているゴーグルを目にかけた。

「じゃ、じゃあ、ぼ、わたしはこれで」

「うん、またねー」

もう帰るのになんで二人はボクを見ているのだろうか。もしかして、エンジンかけるところまで見るつもりなのか？

は、恥ずかしい。早く帰ろう。

バイクに跨りスタンドを戻す。ハンドル左についているチョークレバーを引き、キックペダルを展開する。

三回ほど軽く踏んで手応えのあるところでペダルから足を離す。

そして、ハンドルを握りしめ思い切り踏み込んだ。

キャブレターで空気と混ぜ合わされたガソリンが、シリンダーの中で爆発。

2ストロークのエンジンが、吸気と圧縮、燃焼と排気を猛烈なスピードで繰り返す。

震えるエンジン。スロットルを回せばエンジンが唸り、マフラーから甘い香りのする白煙があたりに立ち込める。

「おお、かつこいいい」

「へえ……」

頬に集まる熱を気にしないようにしながら、二人に会釈。

チョークを戻しクラッチを握ってギアを1速に上げる。

二回ほど空吹かしさせてアイドリングを安定させ、アクセルを吹かしながらクラッチを徐々に離していく。

進み出す車体に合わせてクラッチを完全に離す。

エンジンの回転がタイヤに伝わり車体を加速させていく。

1速は回転数がすぐに頭打ちになる。早めに2速に上げさらに加速。

サイドミラーに映る手を振る二人を横目に見ながらシフトチェンジ。加速していく車体。シフトチェンジ、さらに加速。

流れていく景色。冬の風を切り裂き走り出すボクとバイク。

ヘルメット越しに聞こえる風切り音。エンジンの振動。遠目に見える家々の灯り。

明日は土曜日、またどこか遠くに行こう。なんとなくそんなことを思った。

2話 日清 カップヌードルカレー 198円（税込）

2—1

日の沈んでいく国道138号を時速50キロくらいで流していく。

エンジンの回転に身を任せ、緩やかな右カーブを切り抜けていく。

ミラーをチラ見、後続車はなし。いまこの瞬間だけは、この道路はボクのものだ。

さらに回転数を上げる。スピードメーターはすでに振り切っていて、何キロ出しているのかわからない。

そもそもこの子のメーターは実際の速度よりも10キロ以上サバを読んでいるせいで、正確なスピードがわからない。

乗り始めた時、制限速度では走っているのに、何故か全ての車に煽られて不思議に思いスマホのGPSで調べてはじめてわかったことだ。

一部の界限じゃこの手のメーターをハッピーメーターと言うらしい。

確かに知らないうちはハッピーでいられるかもしれない。

「でも、このさいどうでもいいけどねー」

S字を切り抜け左のヘアピンコーナー、アクセルを戻しリアタイヤにかかっていた荷重を抜く。

ブレーキペダルを軽く踏んで減速。振り切っていたメーターの針がぶるぶる震えながら下がっていく。

クラッチを握りシフトペダルを踵で蹴り飛ばす。

ガコンという衝撃とともに3速に切り替わりクラッチを戻す。

リアタイヤのトラクションを感じながらアクセルを軽く吹かし、重心を思い切り左に傾ける。

近づくアスファルト、傾く世界。身体の下に向かう遠心力を感じながらコーナーの出口に顔を向ける。

最初は怖くてハンドルと地面ばかり見ていたけれど、気がついたら怖くなくなっていた。

人はそうやってちよつとずつ成長していくのだろう。

コーナーが終わる。アクセルをさらに吹かしながら身体の力を抜くと、遠心力によって車体が自然と真っ直ぐになっていく。

クラッチ、シフトペダルを踏み込む。

4速、クラッチをギアに噛みつかせ白煙を撒き散らしながら車体を加速させていく。今度は右のヘヤピン。しかもさつきよりもきつい。

シフトダウン、減速。

コーナーに差し掛かる直前、ボクはシートに跨っていた身体を少しだけコーナーの内側に向けて突き出した。

車体を傾ける。同時に右膝を思い切り開き、身体を道路に投げ出した。

宙に浮かぶ身体をハンドルを握る両手と車体に引っ掛けた左足だけで支える。

さつきよりも大きく傾く車体。スレスレの地面。ブレーキペダルがアスファルトに擦れ、時折ガリガリと音を立てる。

ハングオン、コーナーを早く曲がるためにレーサーたちが生み出したテクニクだ。

ちなみに公道でやる必要は全くない。ぶっちゃけ速度大して変わらないし。でもかっこいいからやってしまうのだ。

コーナーが終わり身体を元に戻す。ハングオンは個人的にこの瞬間が一番危ないと思っている。

意図的に崩したバランスを戻すわけだから危なくないわけがない。間違ってシフトダウンしてリアがロックしかけた時は死ぬかと思った。

ヘアピンを抜けると今度はタイトなワインディングの連続。右へ左と重心を動かしてバイクを操っていく。

ブレーキポイントを間違えればガードレールに激突するため、一瞬たりとも気は抜けない。

前輪後輪ともに強めに効くように調整しているとはいえ、ビーチちゃんはしよせん原付。普通のバイクのブレーキほど制動性は得られない。

ここは今までに何人もライダーの血を吸ってきた峠。少しの油断が命取りになる。でも、それがたまらない。

このギリギリを攻める感覚がボクの動物的本能を刺激してやまないのだ。

まあ、そんなこと周りに言ったらまた大垣さんに中二あつかいされるから秘密だけだ。

右のコーナーを切り抜けると、ちらほらと家が見えてきた。そろそろ目当ての山中湖が見えてくるだろう。

「あ、見えた」

長い直線の先、木々の向こうに広大な水面が沈み始めた太陽を反射してキラキラと輝いている。

山中湖、富士五湖の中で一番の面積を誇る広大な湖。日本でも三番目に標高の高い湖

らしい。

葉がすっかり抜け落ちた並木道をYB―1で駆け抜けていく。落ち葉がタイヤに巻き上げられ宙を舞う。

山中湖の標高は980メートル。日は出ているとはいえ、山特有の突き刺すような寒さがボクの身体を痛めつける。

ゴーグルから下の鼻と口が冷気でもげそうだ。ネックウオーマーで口元を覆ってはいるがこれじゃあはつきり言つて焼石に水、真夏日の空冷エンジンだ。

革製のグローブに包まれた指先はもはや辛うじて神経が繋がっていると聞いた状況で、自分の指というよりもバイクを動かすためのマニピレータと化している。

というか、それでも思い込まないと寒すぎて耐えられない。

「電熱グローブほしいよー」

ちなみにハンドルカバーをしたら負けだと思っている。

あんなおじいちゃんの原付みたいなものビーちゃんにつけたくない。というか転んだ時危ない。

と、そうこうしているうちに旭日丘交差点に到着。

右折してすぐ目の前にある旭日丘湖畔緑地公園の駐車場にバイクを止める。

エンジンを切ると、さつきまでの喧騒が嘘のように静まり返り、風と木々の騒めく音

だけが辺り一面に鳴り響く。

セピア色に染まり始めた世界で、ただ一人息を吸う。新鮮な冷気が鼻の穴を刺すように通り抜け、縮み上がった肺を満たしていった。

「さ、寒かった」

火を消したばかりのエンジンから聞こえるパチパチという音を聞きながら、両手を揉みしだいて少しでも暖を取ろうとする。

気温はだいたい4度くらいだろうか。息が白くなるほどではないけど、それなりに寒い。

「あ、自販機だ！」

道路を挟んだ向かい側にあるビルの端に自販機を発見。

ヘルメットを被ったまま小走りで横断歩道を渡り自販機に直行。財布を取り出して小銭を出そうとする。

「て、手が動かない……あ、100円落ちた」

かじかんでうまく動かない指のせいでお金を落としたりしたものの、なんとかホットココアをゲット。

「あつ、あつ！ あ、あつたかい」

熱々の缶を両手で何度も握ったり首筋に当てたりして暖かさを堪能する。

寒い季節のバイク乗りにとって、この瞬間はまさに至福の瞬間だと思う。

「あ、そうだ。湖見ていい」

プルタブを開けて暖かいココアで身体を癒しながらふとそんなことを思った。駐車場に戻ってヘルメットをバイクに引っ掛けて、公園に向かつて歩き出す。

湖畔に沿うように生えているちよつとした林を通りぬければ、そこは前方180度一面に広がる銀色のパノラマが広がっていた。

湖岸は絶えず緩やかに水と土のラインを変化させ天然のグラデーションを形作り、澄み切った青い空を茶色い稜線が切り裂いていく。

まさに大自然が生み出した巨大な一枚絵だ。

「やつぱりここは何回見ても綺麗だなあ」

もう何回も走っている道なのに、何回見ても飽きることがない。

どれだけ指がかじかんでも、どれだけ身体が氷のように冷えきろうとも、ボクがバイクに乗ることを止められない理由がここにはある。

「いちおう写真撮つと……ん？」

コートのポケットからスマホを取り出すと、着信が2件入っていた。ここまで3時間

くらい乗りっぱなしだったから気がつかなかつた。

「犬山さんと、斉藤さん？」

犬山さんはまあわかるとして、斉藤さんはなんだろうか。

「とりあえず犬山さんに返信しておくか」

あおい：今日もバイクでどこかいつとるん？

3時間も前のメッセージだ。変な心配かけてないといいんだけど。

双葉：ごめん、ずっとバイク乗ってたから気がつかなかつた。今ここにいますよ

カメラを起動して湖にむかってパシャリ。犬山さんに宛てて送信。すると、一分もしないうちに返信が返ってきた。

あおい：やつと返信きた！ またどつか遠く行ってしもうたと思って心配したやろ！

双葉：ごめん、次から気をつける

あおい：まあちゃんと連絡してくれるんならそれでええんよ

双葉：はい

あおい：にしても双葉ちゃん、今山中湖におるん？ もうすぐ暗くなるし帰る時気をつけてえな。特にトラックには要注意や

双葉：ありがとう、気をつけるね

あおい：追伸、お土産期待しとるで

双葉：ええ……

あおい：嘘やで

双葉：ありがと

あおい：ええで

なんだこのやりとり……まあいいや、次は斉藤さんに返信するか。なんだろう、志摩さんがバイクで聞きたいことでもあるのかな。

斉藤：こんにちは！ 今日バイクでどこかに出かけてるのかな？

双葉：ごめんなさい、ずっとバイク乗ってたから気がつかないかったです。今山中湖にいます。

さつき撮った写真を斉藤さんにも送信する。ほどなくしてピコンという通知音がなり返信が返ってきた。

にしても、年頃の女子高生はどうしてこうも返信が早いのだろうか。それに比べてこのボツチときたら。

斉藤：へえ、山中湖かー 遠くまできたねえ

双葉：めちやくちや寒いです

斉藤：まあ、バイクだもんね。風邪ひかないように気をつけてね

双葉：ありがとうございます

齊藤：そう言えば、リンも今日、本栖湖でキャンプしてるみたいんだけど、よかつたら顔だしてあげたら？　ここにいてるみたいだよー

送られてくるキャンプ場の住所。

こ、この人、なんの躊躇もなく人の個人情報晒したぞ。本当に遠慮しない関係なんだなあ、なんかすごいや。

双葉：わかりました。余裕があつたら寄つてみます

齊藤：じゃあ、車に気をつけてねー　あと、同い年なんだし敬語とか使わなくてもいいからね

双葉：うん、わかったよ

ライン越しですらわかるこのコミュ力……齊藤さん、なんて恐ろしい子なんだ。どっかのクソザコ女子高生にも見習ってほしいものだ。

ピコン！

着信だ。なんだろう。

齊藤：双葉ちゃん！　気をつけてネ！

メッセージと一枚の写真。そこに写っていたのはなんとふわっふわのチワワだったか、かわいい……齊藤さんのペットなんだろうか。抱きしめてもふもふしてみたい。

「それにしても、本栖湖かー」

この時期にキャンプってなかなかガッツがあるなあ。いやまあボクも野宿してるし人のこと言えないけどさ。

どうしよう、行ってみようかな。

どっちにしろ今日は300号走って家に帰る予定だったし。

でもいきなり押しかけても迷惑だろうし、どうしようかな……

「いいや、行つてから考えよう」

とりあえず未来の自分に押し付けていくスタイル。いやまあ実際今考えても仕方ないし。

腕時計を見る。もう4時20分だ。すでに日もかなり傾いている。あと30分もしないうちにこの辺りは真つ暗になるだろう。

夜の峠攻めも悪くない。そろそろ行くとしよう。

バイクに戻りヘルメットを被り直す。冬の冷気でバイクもすっかり冷え切っている。こういう時はエンジンがかかりにくい。

燃料タンクしたの燃料コックに手を伸ばし下を向いていたコックを右に捻る。

こうすることで燃料が常時燃焼室に供給されることになり、ガソリンへの点火が成功しやすくなる。

ガソリンが完全にエンジンに行き渡るまでだいたい30秒くらい待つてからキックペダルを展開する。

チヨークを捻つて混合比を調整。ペダルを二、三回踏んで踏みごたえのある位置で止める。

「お願いだからかかつてよー」

バイクには跨がらず立ったままハンドルを握り全体重をかけて思い切り踏み込む。

エンジンが一瞬だけブルンと唸りすぐに黙り込む。

予想通りエンジンはかからなかった。ビーちゃんは寒いといつもこれだ。ボクと違つて寒がりなんだろう。

チヨークを一回戻し、しばらく待つてからもう一度チヨークを捻つてペダルを踏み込む。

さつきと違う、明確な手応え。この機を逃さずすぐさまアクセルを思い切り吹かす。

マフラーから白煙を吹き出し息を吹き返すエンジン。単気筒の心地よいトコトコ音が寒空の山中湖にこだます。

さあ、出発だ。

「うへえ、さすがに暗くなってきたな」

国道138号を走り富士Qハイランドのある吉田市を通り抜け、富士山北部、139号に入る。

街を通り抜けてしまえばそこはもう峠道だ。

しばらく山道を進めばまばらだった街灯はいつの間にかその姿を消し、果てしなく広がる黒一色の森をヘッドライトの黄色い灯りだけを頼りにバイクを進めていく。

ミラーを見ればそこに映るのは全てを飲み込む暗闇だけ。まるで闇がボクを食べようと真後ろまで追ってきているような、そんな錯覚すら感じるほどの果てしない暗闇。

こうして夜の峠を走っていると、普段何気なく使っている灯りがいかにありがたい存在であるのかが身にしみてわかる。

おまけにボクのバイクのヘッドライトは原付用の貧弱なハロゲンだ。

気休めにワット数の高いバルブを使っているけれど、それでもこの暗闇を前にしてしまえばそんなものはなんの慰めにもならない。

いつそのことLEDにしてしまえば問題は解決するのだろうけど、基礎設計が40年以上前のビーちゃんでは色々難しいだろう。

それになによりLEDはかっこよくない。バイク乗りにとって、納得は理屈に勝るのだ。

「志摩さんよくこんな道自転車で行けるなあ」

志摩さんがどうやって本栖湖に行ったのかは知らないけど、どのルートから行こうとも結局峠道を走らなきゃいけない。

それにキャンプするといふからには当然キャンプ道具も積まなきゃいけない。どれだけ軽くしてもそれなりの重さになるだろう。

想像するだけで疲れてくる。志摩さんってやっぱり体育会系なのだろうか。

「ボクはやっぱり野宿でいいや」

そんなこんなで暗闇を走っていると、山道の向こうから村の灯りが見えてきた。あと少しだ。

本栖と名付けられた信号を右に曲がり国道300号に入る。

真つ暗闇の並木道を走りトンネルを通り抜けると左側に湖が見えてきた。

「本栖湖だ……」

タールのように黒く暗い水面が、夜空に浮かぶ青白い月を蜃気楼のように映し出す。

この湖は富士山が綺麗に見えることで有名な美しいけど、視界の端にちらちらと映る富士山は雲をかぶっていて、いまひとつパツとしなかつた。まあ、そう都合よくはいかないか。

走りながらチラリと腕時計を見る。オートライト搭載のGショックはこんな状況で

もしつかりと傾きを検知しボクに正確な時間を教えてくれた。

5時47分、危なくないようにスピードを落として走っていたからか、思っていたよりも遅い到着になってしまった。

今から志摩さんのところに行っても迷惑なだけだろう。

そもそも会ったところでコミュニケーションのボクがいったい何を話すというのだろうか。

「道でそれっぽい人に会ったら会釈しておけばいいよね」

そうだ、それがいい、そうしよう。と、いつも通りのクソザコムーブをかますボク。しよせんボッチはこの程度の度胸しかないのだ。

それにしても……

「と、トイレに行きたい……」

生理的不快感から発生する身震い、バイクが左右に揺れる。寒空の下でのツーリングと山中湖で飲んだココア。けっこう前からボク我慢メーターは限界値に達していた。

「そういえばこの先のトンネル前の公園にトイレあったよね」

たしか前に行つたときは有料だった気がするけれど、今はそれどころじゃない。

人としての評価は地に落ちているボクだけど、女としての尊厳だけは捨てたくない。

ギアを一段下げる。急上昇する回転数。速度と回転数が頭打ちになったところでシフトアップ。さらに加速していく車体。

2ストロークエンジン特有の高回転での加速でトイレまで一直線に進む。

「いい、急げビーちゃん！」

「ま、間に合った……」

トイレの出口で手を拭きながら心の底から安堵のため息をつく。もちろん利用料の50円は募金箱の中に入れておいた。

あれから飛ばしに飛ばして展望公園のトイレまでたどり着いたボクは、トイレ横の駐車場にバイクを滑り込ませ大急ぎでトイレに駆け込み最悪の事態を回避することに成功した。

「か、間一髪だった……」

次からはもっと早めにトイレに行くようにしよう。さすがにこの歳でお漏らしは嫌すぎる。冬のバイクでココアは要注意。心に刻み込んでおこう。

「うわ、エンジンかけっぱじゃん」

とんでもない角度で止めてあるビーちゃんに呆れる。急いでたとはいえいくらなんでもこれはないでしょ。人が来なくてよかった。

「あれ？ 自転車止まってる」

今になって気がついたけど、トイレの前に自転車が止まっていた。赤いミニベロだ。

一瞬志摩さんの自転車かと思ったけど、こんなところに止める理由が思いつかないので、多分不法投棄か何かだろう。マナーの悪い人もいたもんだ。

まさかとは思うけど辺りを見渡す。いちおうこの向こうが斉藤さんが言つてたキャンプ場のはずだけど……

「ま、さすがにいないか」

当たり前だけど志摩さんらしき人影は見当たらなかつた。

そもそもキャンプ場は向こうにあるキャンプ場の管理事務所のさらに先にあるし、トイレに行くとしても普通はわざわざここまで歩いたりしない。

そのことに残念だなという気持ちと、鉢合わせにならなくて安心したという一見矛盾するけど、ボツチにとつてはごくごくよくある感情が湧き上がる。

「それにしても寒いなあー そろそろこの服じゃ厳しいか」

いちおうPコートの中にダウンベストを着込んでいるけど、ありあわせでしかないからやっぱり限界がある。

どこかで冬装備を調達しないと。そんなことを考えながらバイクを道路に出す。

シートに跨つてなんとはなしにメーターに目をやると、内蔵された豆電球に照らされたオドメーターがそろそろ1万6千キロに達しようとしていた。

ボクが乗り始めた時は1万キロちよつとだったから、もう6千キロも走ったことになるのか。

「そろそろオイル継ぎ足さないとなあ」

あれ意外と高いんだよあ。そんなことを考えながらクラッチを握り込んだ。その時だった。

「……声？」

誰もいないはずの本栖湖に声が聞こえた。ヘルメットとエンジンの音でわかりづらけれど、確かに声だ。それも女性、おまけに泣き声だ。

しかもかなり近い。

「え、嘘……」

心臓を握りつぶされたかのような緊張が全身をほとばしる。え、マジ？ や、やばい、早くここから離れないと。

そう思った矢先だった。ボクは気がついてしまった。声の主がどこにいるのかを。

泣き声はボクの右から聞こえていた。それも、ほとんど真横。あ、これ本当にやばいやつだ。

「えぐっ、ぐすっ」

泣き声が近づいてくる。

身体は緊張でガチガチに固まっているはずなのに、首だけが誰かに掴まれているかのよう
ように勝手に右に動き出す。

そしてボクはその姿を見た。

「ぐすんっ、えぐっ、ううっ」

手を伸ばせば届く距離。生前の恨みを吐き出すかのように、滂沱の涙を流す女の影が立っていた。

影と目が合う。

「ぎゃ……」

真っ白になる頭。膨大な感情が心の中を埋め尽くし、膨れ上がり……

「あ、あの——」

爆発した。

「ぎゃああああああああああ!!」

フルスロットルでアクセルを吹かす。

飛び散る白煙、唸るエンジン。けれど、いくらアクセルを捻ってもバイクはちつとも前に進まない。

「なんでなんでどうして!?!」

「あ! ま、まってよお——」

や、やばい、近づいてくる。は、早く進めよ!

あ、そうだニュートラルのままだった! 半狂乱になりながらシフトペダルを思い切り蹴り飛ばす。

1速、クラッチを勢いよく離す。そう、離してしまった。

問、1速フルスロットル状態で半クラッチもせず動力をチェーンに伝えるとどうなるでしょうか。

「え? う、うわあああああつ?!」

答、ウイリーします。

前輪がものすごい勢いで持ち上がり、そのまますごい勢いで進み出す。

「う、うわ!! やばいやばい!!」

「わ、わああ!」

「うるさいなあ、なんだよもう……って、うえええ!?」

なんか新しい人増えたけど、そんなことよりどうしよどうしよどうしよ!? そ、そうだ! アクセル戻さないと!

真っ白になる意識のなか、思い切り捻っていたスロットルを元に戻す。

ガツコンとフロントタイヤが地面に叩きつけられ、フォークオイルがその衝撃の大半を吸収する。

「ぐうえ」

同時にエンジンがガタンと音を立てて沈黙する。本栖湖に再びしじまが訪れる。

「た、助かった……」

目にかかっていたゴーグルをヘルメットに押し上げて呼吸を整える。今のは冗談抜きでやばかった。本当の意味で生命の危機を感じた。

「し、死ぬかと思った……」

「わわ、だ、だいじょうぶ!」

後ろからそんな声とともに誰かが駆け寄ってくる。息も絶え絶えに後ろを振り向けば見知らぬ女の子が血相を変えてボクに詰め寄ってきた。

「バイクがグオーンってすんごいことになってたけど怪我は?! どこも痛いところない?

きゅ、救急車呼ぶ? それとも警察!」

「あ、あの大丈夫なんで……」

「ス、マホスマホ! ってなんでトランプしかもってないのー?!」

目の前の人のおかげでだいぶ落ち着いていきた。

自分よりパニックになっている人がいると、冷静になれるって本当だったんだ。

「お、お姉ちゃんに電話しないと! ってスマホないんだっ! ど、どうしょー!」

「だ、大丈夫ですか! って、あれ?」

遅れて駆け寄ってきたもう一人の持っていたランタンで闇に包まれていたお三人の顔があらわになる。

うちの一人はボクもよく知っている人だった。それも昨日あつたばかりの人だった。

「こ、こんばんはー」

「……山中さん？　なんでこんなところにいるの？」

志摩さんのごくごく当たり前の疑問が本栖湖に虚しく吸い込まれていった。

「え、え？　どゆこと？」

ただ一人、状況を理解できない女の子が顔をキョロキョロと動かしていた。

2—2

「はい、これ」

パチパチと音をたてて燃え盛る焚き火を見てみると、コップがさし込まれた。

差出人は志摩さんだ。ここは本栖湖のキャンプ場、ボクたちは志摩さんのテントにお邪魔になっていた。

マグカップを受け取る。チョコレートの甘い香りが鼻をくすぐった。

「ココア、コップ一つしかなかったから二人で飲んで」

「あ、ありがとうございます」

「え、いいの！　ありがとうー！」

ずっとバイクに乗っていたから、これは素直にありがたい。

「じゃあ、いただき——」

湯気を立てるココアに口をつけようとして、すんでで止める。このココアが今一番必要なのはボクじゃあないだろ。

マグカップを隣で焚き火にあたっている桜色の髪をした女の子に渡す。

「うん？」

「か、身体冷えてると思うから、先に飲んだほうがいいと思います」

ボクは慣れているから平気だけど、この子はそうじゃないかもしれない。

焚き火で暖まっていますが、やっぱり中から暖めるのが一番効率がいい。

「ほんと！　ありがと！　いただきまーす」

女の子はマグカップを受け取ると勢いよくココアを飲み始めた。

なんか、すっごい美味しそうに飲みなあ。

「ぶはっく！　甘くておいしいーね！　はいどうぞー」

「あ、はい」

女の子からマグカップを受け取って、まだまだ熱々のココアを身体の中に流し込む。

「あ、あったかい……」

山中湖でも飲んだけど、やっぱり缶よりも粉で入れたココアのほうが断然美味しい。

気がついたらまだそれなりの量があったはずのココアはすっかり空になっていた。

そうやってほっと一息ついて、焚き火を眺めていると、未だに騒めいていた心が落ち

着きを取り戻していく。

「で、そっちが今日山梨に引っ越してきて、自転車で富士山見にいったけど、疲れて横になって気がついたら真っ暗だった、と」

「えへへ」

「えへへじゃないよ」

改めて志摩さんの説明を聞くとこの子すごいことしてるな。新天地初日で富士山までくるってとんでもない行動力だ。

「で、こつちが、泣きついてきたこの子にびっくりして思い切りウイリーした、と」

「はい、一言一句事実です……」

羞恥心のあまり顔を手で覆い隠す。

そう、あの幽霊の正体は隣で焚き火にあたっているこの子だったのだ。

あんな思いつきり叫んでウイリーして、しかも相手はただ迷子になって助けを求めてきただけの女の子って……

「死にたい……」

「し、死んじゃダメだよー！」

「大袈裟すぎだろ。それにしても、すごいウイリーだったね。怪我とかしてない？」

「うん、ボクもバイクもなんともなかったです」

衝撃はサスペンションが吸収してくれたし、変な話だけどすごい綺麗にウイリーしたおかげで怪我一つなかった。

バイクもフルスロットルでクラッチを繋げてしまったけど、駐輪するために一度エン

ジンをかけた時には問題なく動いた。

さすがはヤマハ、メイドインジャパン万歳。

「ボク？ そっか、ならよかった」

「さつきはほんとにごめんね？」

「いきなりパニックになったボクも悪かったんでいいです。それよりも、貴方のほうは大丈夫？」

そう、ボクは別に問題ない。バイクが壊れているわけでもないし、あとは家に帰るだけだ。

ここから家のある南部町までは国道を使えばだいたい40キロくらい。バイクなら特に問題になる距離じゃない。

だからボクなんかはどうだっていい。問題はこの子だろう。

「そ、そうだった！ ど、どうしよー！」

「来た道戻って帰ればいいんじゃない？ 下りだからすぐだと思おうよ」

「む、無理だよお！ 超怖いよお！」

さつきまで走ってきた道を思い返す。たしかにあの暗闇を自転車の貧弱なライトで進むのは下手なホラー映画よりもずっと怖いだろう。

「じゃあ、家に電話は？」

「スマホ忘れました！」

「マジか……じゃあわたしの貸してあげるから家に電話して迎えに来てもらいなよ」

「電話番号わかりません！」

「……自分の電話番号は？」

「同じく記憶にございませぬ！」

おい、どうすんだよこれ。やばい、志摩さんがすんごい面倒臭そうな顔してる。

あ、そうだ！

「あ、あの——」

ボクが言おうとした言葉は、突如辺りに鳴り響いた不気味な音でかき消された。

ま、またお化け!?

「えへへ、安心したらお腹すいちやって……って、なんで立ち上がってるの？」

違いました。は、恥ずかしい……今日は厄日だ。

「あ、そうだ」

志摩さんが手をポンと叩くと、キャンプの荷物からカップのようなものを取り出した。

焚き火にあてられカップの正体があらわになる。

「カレー麺でよかったらあるけど」

「えー！ くれるの!? あっ、でも……」

女の子の顔が一瞬嬉しそうに輝く。けど、すぐに曇ってしまった。そして、もうしわけなさそうにボクのことをみた。

「ラーメンって三人分ある?」

「ごめん、今日は二つしかもってきてない」

もうしわけなさそうに謝る志摩さん。謝るも何も志摩さんは何も悪くない。

いきなり押しかけたのに嫌がりもせず焚き火を貸してくれてココアをくれただけでも十分すぎるくらいだ。

「あの、ボクは山中湖で食べたんで大丈夫です」

嘘だ。本当は昼に軽食を取ってからまだココアしか飲んでいない。

でも、ボクなんかよりこの子のほうがよっぽど不安だろうし、ここはご飯でも食べて一息ついたほうがいいと思う。

「そっか、じゃあそれなら」

そう言ってコッヘルに水を張ってバーナーに火をつける志摩さん。

あれボクのほしかったSOTOのシングルバーナーじゃん。いいなあ……

「そういえば、さつきも不思議だったけど、あっちの焚き火で沸かさないんだね」

「焚き火だと温度低くて時間かかるし、煤で真っ黒になるから基本的に使わないかな」

「すごい！ なんだかプロみたいだね！」

たしかに、今までのやり取りを思い出すと、志摩さんはいかにも場慣れしているって感じだった。

昔からこうして一人でキャンプをしているのだろうか。なんかすごいなあ。

そうこうしていると、コツヘルの水がぶくぶくと沸騰しはじめ、志摩さんがカップ麺の蓋を開けて中にお湯を注いだ。

あとは3分待つだけだ。

「そういうえば、山中さんはなんで本栖湖に居たの？」

「えっと、ボクはツーリングです。それで、斉藤さんが志摩さんがここでキャンプしてらって教えてくれたんでちょっと寄ってみました」

ただし顔を見せるとは言っていない。文字通り寄るだけのつもりだった。

「あ、あいつ……」

うわあ、やっぱり言わないほうがよかったかな。ボクのせいで斉藤さんと志摩さんの仲が悪くなったらどうしよう。

まあ、その時はボクが土下座でもなんでもしてなんとかしよう。

「ライダーさんなんだー かつこいいいなあ」

原付乗りはライダーと言ってもいいのかな。でも、いちおうビジネスバイクだしライ

ダーでもいっか。

「まだ乗り始めて四ヶ月くらいしかたってないですよ」

「へえ、けっこう最近なんだね。それで山中湖まで行っただー それから本栖湖までって、めつちや遠くない？」

「そう？ たったの100キロですよ？」

「普通に遠いよー！」

横で聞いてた志摩さんの顔がちよつとひきつった。あれ、100キロって近所だよな？ 違ったっけ。

「あ、そういえばまだ二人の名前聞いてなかった！ わたし、各務原なでしこ、15歳、

高校一年生！」

「えっと、志摩リン」

「山中、双葉です……」

「リンちゃんに双葉ちゃん！ よろしくね！」

もうナチュラルに名前呼びだ。各務原さん、なんて恐ろしい子なんだ。斉藤さんとまた違う意味で凄まじいコミュニケーション力だ。

斉藤さんが老成されたコミュ力なら、この子はナチュラルボーンって感じ。

「そういえば、リンちゃんと双葉ちゃんって知り合いみたいだけど、同じ学校だったりす

るの?」

「そうだよ。クラスは違うけど」

「あれ? でもリンちゃんと同じ学年で双葉ちゃんがバイク乗ってるってことは、双葉ちゃんもしかして無免許運転?!」

「そこは普通高校生だろ」

焚き火を囲んで楽しくお喋り。誰かとキャンプなんてしたことないけど、こんな感じなのかもしれない。

マシユマロ焼いたりバーベキューしたり、絶対楽しいんだろうな……

焚き火の匂いに紛れてカレーのいい匂いが鼻をくすぐった。そろそろ3分たったか。

ほんとにお腹空いてきたなあ……

「志摩さん、ボクちよつと向こうに行つてきます」

「あ、うん」

焚き火から離れ一人湖岸に向かう。あの二人なら仲良くやれるだろう。ボクはお役ごめんだ。

美味しい美味しいという声をバツクに一人富士山を眺める。ボッチはこうして一人でいるほうが似合っている。

と、中二ムーブをかますボク。

「曇ってて、全然見えないや」

ちようど富士山を覆うように雲が被っていて肝心の富士山は下から半分しか見えな
い。

「今度5合目まで走ってみようかな」

「うーん、やっぱり曇ってて見えないね、富士山」

「うわっ!」

いつの間にか横にいた各務原さんに驚いて飛び退く。

「あれ、どうしたの双葉ちゃん」

「も、もう食べたんですか?」

「ううん、違うよ。はい!」

その声と一緒に差し出されたのはコッヘルに注がれたカップ麺だった。

「これって?」

「双葉ちゃん、さつきわたしのカレー麺見てたからもしかしてお腹空いてるのかなーっ
て思つて。あ、ちゃんとお箸つける前にわけたから大丈夫だよ」

だから一緒に食べよ? そう言つて、各務原さんがボクの手を引つ張つた。

ラーメンの注がれたコッヘルを溢さないようにしっかりと持ちながら、各務原さんの
背中を見る。

ボクより少し大きいだけなのに、その背中はずいぶん大きく見えた。

そのあと食べたカレー麺は、今まで食べたラーメンの中でも文句なしに一番美味しかった。

「それで、なでしこはどこからきたの？」

三人でカップ麺を平らげひと息つく。

日が沈み切った本栖湖はさらに寒さを増してきたが、志摩さんが気を利かして焚き火の勢いを強くしてくれたので、特に問題はなかった。

焚き火つてこんなに暖かいんだな。

「ここからずつと下の南部町つてところだよ」

南部町、奇しくもボクが住んでる家も南部町にある。

「あ、あの、ボクも南部町に住んでいます」

「そうなの！ やったー！ 一緒だね！」

これでいつでも遊びに行けるね！ とボクの手をとってまるで自分のことのように喜ぶ。え、もうそこまで考えてるの。

って違う。そうじゃない。ボクはさつき言おうとしたことをもう一度言う決心をし

た。

「そ、それで提案なんですけど」

自転車で帰れない最大の理由は何か。それは暗すぎることだ。

急なカーブに突然横切る動物。峠道は見通しのよさが安全に直結する。逆に言えば見通しさえよければ交通量の少ない峠はそこまで危なくないのだ。

「ボクが麓まで先導するから自転車で帰りませんか？」

だから、その問題さえ解決してしまえばあとは走るだけ。そしてその問題の解決手段は駐車場でボクを待っている。

「え、いいの？ あ、でも……」

各務原さんが後ろを振り返る。そこにあるのは一面の闇。まあ、人がいたとしても怖いものは怖いか。

「大丈夫、ボクがついてるから。ちゃんとゆつくり行くしバイクのヘッドライトなら全然暗くないから」

連絡手段がない以上、これ以上の最善策はない。いずれにしろいつかは帰らないといけないのだから、もうこうするしかない。

「わたしもそれがいいと思う。山中さん、お願いしてもらってもいいかな」

「うん、わかった」

「り、リンちゃんまで、そ、そうだよね、行くしかないよね。トホホ……」

ちよつとかわいそうだけど、こればかりは本当にしかたがない。各務原さんには悪いけど、今回だけは我慢してもらおうしかない。

「富士山曇つてて見えないし、寝過ごして真つ暗になつちやうし、災難だよお」

ふと、背中から優しい光が差した。木々や草花が銀色に輝きだす。

「……なでしこ、後ろ」

「もう、聞いてよ奥さんつて……うん？」

志摩さんがボクたちの後ろを指さす。振り返る。

「見えないつて、あれのこと？」

そこには、月に彩られ銀色に輝く富士山があった。

ラメを散りばめたかのような冬の星々。粉砂糖のような雪化粧。その横で輝く銀色の月。

全てが完璧で、全てが美しい。思わず息を呑む。

各務原さんが立ち上がった。

「あ、お姉ちゃんの電話番号覚えてた」

そして唐突にそう呟いたのであった。

「うちのバカ妹が本当にお世話になりました！」

そう言つて各務原さんのお姉さん、桜さんというらしい。が、深々とボクと志摩さんに頭を下げた。

「えへへ、ごめんねお姉ちゃん」

「えへへじゃないでしょが！ ほら！ あんたも頭下げろ！」

呑気に笑つていた各務原さんも、隣から伸びてきたお姉さんの手によつて強引に頭をさげさせられた。

あのあと電話番号を思い出したと言つた各務原さんは、志摩さんから電話を借りて無事に家族と連絡を取ることができた。

それから1時間もしないうちに水色の大きなSUV、名前は忘れちゃつたけどけっこうレアなやつがやってきて、中から血相を変えた各務原さんのお姉さんが現れた。

そこから先は見てのとおりだ。

何はともあれ無事に迎えがきて本当によかつた。

バイクの先導だつて絶対に安全というわけでもないしね。車で帰れるのなら車を使うにこしたことはない。

「あの、これお詫びです。二人でわけてください」

「あ、はい」

ボクと志摩さんにそれぞれビニール袋を手渡す。中を見るとキウイが山のように入っていた。

「あんた出かける前携帯忘れんなつてあれほど言ったでしょうが！ このすつとこどつこいが！ おら！ とつとと乗れこのブタ野郎！」

前から聞こえるアグレッシブな罵声をBGMにキウイを持ち帰る算段を立てる。

うん、これならギリサイドバッグに入りそうだ。

「それと双葉ちゃん、だったかしら」

そんなことを考えていと、各務原さんを車に積み終えた桜さんがボクに話しかけてきた。

改めて見るとすごい美人だ。すらつとした体型に長い黒髪。黒縁の眼鏡がよく似合っている。

同じ眼鏡なのにどうしてこうも違うのだろうか。やっぱり値段が違うのだろうか。

「は、はい、なんですか？」

「うちのバカ妹から聞いたんだけど、思い切りウィリーしちゃったって本当？」

ぐ、ここで黒歴史を掘り起こすのはやめてほしい。でも、相手は純粹に心配しているだけだろうし……

「う、はい……スロットル捻つても進まなくて、あれつと思つてギアいじつたらロー入りちやつて」

「ウイリーしたと」

あれ、なんか各務原さんのお姉さんの様子がおかしいぞ。俯いてるし、心なしか肩震えてない？ てか笑つてない？

「ふ、ふふ、ロー入つてウイリーしちやつたのね……」

「お、お姉さん？」

ほんと、いきなりどうしたんだろ。なんか心配になつてきたんだけど。

「はっ!? ご、ごめんなさい、なんでもないわ。それよりも怪我とかしてない？ もし何かあつたらすぐに連絡してちょうだい。うちの妹に世話させるから」

「あ、ありがとうございます。でも本当に大丈夫なんで」

世話つて何させるつもりなのだろうか……いや、まあいいや。

「そ、ならよかつた。それで、たしか貴方も南部町に住んでるのよね？ 今から帰るところ？」

「はい、あのバイクで帰ります」

ボクはそう言つてSUVの隣に停めているビーチちゃんを指さした。そんなボクの言葉に桜さんの表情が少しだけ曇る。

「あの道、街灯もほとんどなくて真つ暗だし、よかつたらわたしの車で先導するから一緒に帰らない？」

別に慣れているから大丈夫なだけだな、どうしよつか。

「わたしもそれがいいと思う。山中さん慣れてるみたいだけど、やっぱ危ないし」

「うんうん！ 一緒に帰ろー！」

志摩さんといつの間にかまた外に出てた各務原さんにまで一緒に帰ることを勧められてしまった。

先に行くまで待つ理由もないし、ここは素直に好意に与らせてもらおう。

「わかりました。すいませんお願いします」

「やったー！ じゃあ家まで一緒だね」

「あんたはなんで車から出てるのよ！ とつとつ乗りなさい！ いいかげん帰るわよ！」

「あ！ お姉ちゃんまって引つ張らないで！」

お姉さんの制止を振り切った各務原さんが何か紙切れのような物をバイクに乗ろうとしているボクと志摩さんに手渡した。

「はい、これわたしの番号！ さつき電話したときにお姉ちゃんに聞いたんだ！」

「あ、うん」

「リンちゃん！ カレー麺ありがと！ 双葉ちゃん送ってくれるって言ってありがと！
 今度はちゃんと三人でキャンプやろうね！」

またねー！ と、最初のころの泣きじやくっていた姿はどこへやら、すっかり元気を
 取り戻し手を振りながら車に戻っていく各務原さん。

なんか自然と三人でキャンプやる流れになってたけど、まあいいか、もう会うことも
 ないだろうし。

車のエンジンがブルンと音を立ててかかる。ボクも帰るか。ヘルメットを被って
 キックペダルを展開する。

「志摩さん、ぼ、わたしもこれで帰ります。さっきはありがとうございました」

「ううん、別にいいよ。こっちも一人だったらパニックになってたかもしれないし」
 冷静な志摩さんにかぎってそんなことは起こらないと思うんだけどなあ。

でも、一人であの泣きじやくる各務原さんに遭遇したら志摩さんでもやばかったか
 も。あれ、本当に怖かったし。

「じゃあ、行きます」

キックペダルを踏み込みエンジンをかける。

あれだけ無茶させたけど、そんなことじゃへこたれないと言わんばかりに一発でエン
 ジンがかかるビーちゃん。

「あ、それと！」

どうしたんだろう。ゴーグルをかけながら志摩さんに振り向く。

「気のせいだったらいいんだけど、無理してわたしつて言わなくていいと思う。そういうのつて人それぞれだし、あと敬語とか使わなくていいよ。同い年でしょ？」

あれ、なんで知ってるの？

つて、そういえばさつきからボクつて言つちやつてた気がする。ワイリーで気が抜けてたのかなあ。

「わかりま……うん、わかった」

「双葉ちゃん、もう出発しても大丈夫かしら？」

運転席の窓から顔を出した桜さんに手を振って答える。SUVのウィンカーが発進の合図を示し、車体が進み出す。

それに合わせてボクもスロットルを回す。今度はワイリーなんてしない。

リーンアウトで限界まで車体を倒し最小限の旋回半径でUターン、車を追いかけてスロットルを回す。

ミラーに映る手を振る志摩さんに向かってボクも左手で手を振る。

これで一件落着か。本当無駄に疲れた。

SUVに先導され約1時間。ついに南部町までたどり着いた。そろそろボクの家のある路地にたどり着く。

赤信号で止まったSUVに横付けすると、運転席の窓が開いて桜色と黒色の頭がこちらを向いた。

「あの！ ボク、こつち右折なんで！ ここまでありがとうございました！」

「じゃあここでお別れね。車に気をつけてね！」

「おやすみー！ また三人でキャンプしよーねー！」

手を振って答える。青になる信号。バイク特有のシグナルダッシュでSUVより先に前進する。

今日は本当にいろいろなことがあった。変わった女の子との出会いに、夜の富士山、そしてカレー麺。

ミラーをチラ見。死角に入った車はもう見えなくなっていたけれど、きつと各務原さんはこつちを見ているんだろうなと、根拠もなくそんな確信を抱いた。

ボクも早く家に帰ろう。お腹も空いたしね。カレー麺半分だけじゃやっぱり足りないよ。

3話 UCC マンデリン100% 200g 504
円(税込)

3—1

「きりーつ、れー、ちやくせーき」

やる気のない日直の、これまたやる気のないあいさつを右から左に聞き流し席につく。

ボクの席は窓際が一番後ろ。日本全国のボツチにとって垂涎のポジションだ。くじ引きで運よくこれを引いた時は思わずガツツポーズをしちゃったね。

でもたまにトイレとかから戻ってくると席に誰か座ってたりして困るのはなんとかしてほしい。

退けつて言えばいい？ ふつ、これだから素人は。

「えー、今日は突然ですが転校生を紹介しまーす。各務原さーん」

窓の外の寒空をぼんやりと眺め、この前の土曜日のお出来事について考えを馳せる。

富士山一周ツーリング、幽霊もどき、ソロキャン少女、カレー麺、そして本栖湖ウイリー事件……あれはもう思い出したくない。

「——ちゃん！」

それにしても、カレー麺美味しかったなあ。同年代の子と一緒にご飯を食べたのなんて、小学校の給食以来だろうか。

「——葉ちゃん！」

もう何年も一人で食べるのが当たり前になっていたけど、やっぱり誰かと食べるご飯は一味違った。

惜しむべきは、もう二度とあんな機会は訪れないだろうということだろうか。

けど、ボクはしよせんクソザコボッチ。せいぜい一人で冷めたご飯を食べるのが性にあっていくのさ（涙目）

「双葉ちゃん！」

「わわっ!?!」

突如、視界の目の前に桜色の何かが見れ飛び退く。変な風に飛びのいたせい眼鏡がずれて視界の全てがぼやけてしまう。

「あ！ やつと気づいてくれた！」

どこか聞き覚えのあるこの元氣という概念を擬人化したかのような声。そしてこれまたどこか見覚えのある桜色。もしかして……

「やった！ 同じ学校だったんだー！ もう、教えてくれればよかったのにー」

ずれた眼鏡をかけ直し、改めて桜色の何かを視界に捉える。それは人だった。それも、つい先日出会ったばかりのあの女の子だった。

「各務原、さん？」

「うん！ これからよろしくね！ 双葉ちゃん！」

そう言つて本栖湖で出会った女の子、各務原なでしこは満面の笑みをボクに向けたのであった。

「それでね聞いてよ双葉ちゃん！ お姉ちゃんがね——」

放課後、ボクはいつものように野クルのある部室棟に向かっていた。横に各務原さんを連れてだ。

あの衝撃の再会から現在にいたるまで、各務原さんはボクにずっとついて回ってきた。

「つぎスマホ忘れたら本栖湖十周って——」

文字通りずつとだった。授業の合間の休み時間、昼休憩、掃除の時間、トイレ、エトセトラエトセトラ。

「でね、お父さんもお母さんも——」

何かにつけて双葉ちゃん、双葉ちゃんと突撃してくる各務原さん。

当然担任にも知り合いということが知られてしまい、学校の案内を押し付け、もとい任されてしまった。

押し付けられたとはいえ、こんない子を邪険にするわけにもいかない。

こうしてボクのポツチ生活は唐突に終わりを告げることになったのであった。

「あつー！ そういえば双葉ちゃん！」

マシガンのごとくずつと話し続けていた各務原さんが突如鼻息を荒くしてボクに詰め寄ってきた。

朝から今までずつとこんな調子だ。よくガス欠にならないなあ。その元気をちよつとわけてほしい。

「野外活動サークルって、どこにあるか知ってる？」

今の各務原さんの目はそれはそれはキラッキラに輝いていた。アニメだったらきつと目が椎茸になっていることだろう。

「あれ、そもそも今ってどこに向かっているの？」

「知らないでついてきてたのか……」

「思わず辛辣なツツコミをしてしまうボク。これじゃまるで卵から孵ったばかりのひよこだ。」

「えへへ、面目ありません」

けれど、それが少しも嫌味に感じないのはもはや生まれ持った才能というしかない。たぶん、この子には悪意が一切ないのだ。

あるのはただただ純粋な好意と好奇心。だからこそ助けてあげたくなくなってしまおう。なんというか、本当に不思議な子だ。

「今向かっているのは、野クル……野外活動サークルだよ。これでも一応部員なんだ。だから案内するね、各務原さん」

本当に一応だけでも。ほんと、ボクなんかがあんなところにいるのだろうか。

「え、そうだったの！　じゃあ早くいこー！」

「え、ちよ、まつー！」

「しゅっぱつしんこー！」

走り出す各務原さんに手を引かれ、ボクも半ば強制的に走り出す。大垣さんも最初こんな感じでボクを引き摺り回してたっけ。

それにしても……

「えっほ、えっほ」

部室棟そっちじゃないから！

部室棟、野クルもとい野外活動サークル部室。遠くで野球部の掛け声が聞こえてくる。

「なるほど、本栖湖で行き倒れそうになったところをたまたま通りかかったロリ子と

と、大垣さん。

「リンちゃんっていうキャン普少女に助けられた、と」

と、犬山さん。

「うん！ 夜の富士山、すっごい綺麗だったんだよ！ ね、双葉ちゃん

身振り手振りであの時のことをダイナミックに説明する各務原さん。

「そ、そうだね、あれはすごかったね」

例の事件を思い出し目を泳がせるボク。幽霊、ウイリー、うつ頭が……

「ん？ なんかあったのか？」

「なに？ なんでもないよ！ やー、富士山綺麗だったなー」

「なんで棒読みなん」

冬の夜空の悠然とそびえ立つ富士山。そして稜線を淡く照らす銀色の月。あれはまさに絶景だった。

いやー、もう一回行きたいなー

幽霊？ ウイリー？ なんのことかわからないなあ。

「あー！ あとそれとね、双葉ちゃんがわたしのせいで——」

「わーわーわー！ それは話さなくていからー！」

各務原さんの前に強引に割り込み話をごまかす。

まずい、あれはもう誰にも知られたくない。墓場まで持っていくと決めたのだ。

「どうした急に」

「なんでもない！ なんでもないか痛っ!？」

思い切り手を振り回したせいで壁のガリガリにぶつけてしまった。

「い、痛い……」

「ふ、双葉ちゃん大丈夫?!」

うえ、じんじんする。なんでこここんな狭いんだよお。

どうしよ、涙出てきた。

「あーあー、狭いのには暴れるからそうなるんや。ほれ、手見してみ？ あっ、ちよつと血

出とるやないか！」

「うおい！ 大丈夫か！」

たしかに擦りむいて血が出てる。でもこれくらいの量なら吸っておけば平気でしょ。

「みんな気にしすぎだつてー こんなの——」

そう思つて口に近づけた手は、犬山さんの手によつてがっしりとホールドされた。

「自分、蚊とちやうで。あかんでもう！ 今消毒して絆創膏貼るからちよつとまつとつてな！」

犬山さんが、アウトドア本や買ったけどもつたいなくて使えない薪束がしまつてあるロツカーを漁り出す。

「うーん、救急箱どこやたつけ？」

現状名ばかりとはいえ、野クルはアウトドア系のサークル。

最低限の救急セットは用意してあるのだけど、わざわざこの程度で使わなくてもいいんじゃないだろうか。絆創膏だつてタダじゃないし。

うん、ここはなんとか大丈夫なことをアピールしよう。身体だけは無駄に丈夫だしね。

「い、犬山さん？ 別にこのくら——」

「ちよつと、まつとつてな？」

「はい……」

無理でした。怖い、犬山さん怖い。なんでボクの時だけこうなの？

「うちの部室、考えなしに動くとすぐああなるから気をつけてな」

「うん……」

こうして、各務原さんと野クルのファーストインプレッションはグダグダの末に始まったのであった。

いったいどこの誰の仕業なんだ!?

「うおっほん！ 気を取り直して自己紹介といこう！ あたしが大垣千明。で、こっちの関西弁が犬山あおいだ」

それからしばらく、具体的にはボクの手当が終わってから、グダグダになってしまった空気を一掃するべくお互いの紹介をすることになった。

「誰が関西弁やねん。よろしゅうなー」

「そんでもってそこで手押さえて涙目になってるちっこいのが」

「……山中双葉、です」

ちっこいいうな。いつか大きくなるもん。きつと、たぶん、メイビー

「まあ色々あったが……改めて、ようこそ野クルへ！ 我々は君のような逸材を心から待っていたのだー！」

なんか大垣さんのテンションがおかしいけど、とりあえず心機一転するために乗っておこう。

「わー、どんどんぱふぱふー」

「やめい！ 変な部活思われたらどないすんねん」

いや、もう手遅れだと思うよ犬山さん。どこかの誰かのせいでね。まったく、けしからん奴もいたものだ！

「アキちゃんにあおいちゃんに双葉ちゃん！ わたし、各務原なでしこです！ みんな、よろしくねー！」

だけど、こんな醜態を見せつけたあとでも、各務原さんはまったく動じることなく笑顔で返事をしてくれた。

各務原さん、なんていい子なんだ。ボクの中で各務原さんの株の爆上げが止まらない。

「にしてもアキ、えらい素直に歓迎するやん」

「……あ、新しい部員が増えることはいいいことだからな！」

「そうだよ。四人以上で部に昇格だもんね。大きな部室ももらえるもんね。」

「ふうーん、でもよかつたやん、これで四人そろつたんやから部に昇格やで」

「そうなんだよー！ ついに我が野外活動サークルも部に昇格できる日がやってきたのだー！」

「おおー、よくわかんないけどおめでどうー！」

これで部室でラジオ体操できる。と、一人で盛り上がる大垣さん。部室もらつて真つ先に思い浮かぶやりたいことがラジオ体操って……

「あれ、そうなるともうサークルじゃなくなるってこと？」

「せやなー、これからは野外活動サークルやのうて野外活動部やな」

「つまり、略してノブ？」

ボクの一言に皆が固まった。野外活動部、略してノブ。

ノブ、ノブかあ……

「なんか居酒屋さんみたいだね！」

……

……

……

「部の申請はもう少し先にしておくか」

「せやな」

せめてもう少しまともな名前を思いついてからにしよう。

「つーわけで！ 今日野クルメンバー四人目を祝して、盛大に焚き火をやるぞー！」

「わー！」

大垣さんと各務原さんの元気のいい声が校舎の中庭に響く。

あれからボクたちは外に移動していた。というか、あれ以上あの狭い空間にいたら本当に怪我しかねないので移るしかなかった。

「あれ、焚き火なら昨日しちゃったよね」

野クルでの焚き火と言えば、校庭の落ち葉や枝を必死に集めておこなうことをさす。

ぶっちゃけアウトドアというよりも中学生の火遊びなのではないけない。

けど、それは昨日やってしまった。またしばらく待たないと落ち葉は集まらないだろう。

「ま、まさかアキ、ついにあの薪使うんか！」

「ふっふっふ、そのまさかだぜ、イヌ子」

大垣さんの足元を見る。そこには、600円で買ってずっとロッカーで埃を被っていた薪束があった。

ついに、本来の役割を果たすときがきたということなのか。

「ぶっちゃけ、大事にとつておいても春になつて暖かくなつて雨でも降つたら結局カビるんだわ。で、最悪キノコ生える」

「げえ、想像したら鳥肌立つてきてもうたわ」

キノコの生えた薪なんて燃やしたらなんか吸い込みそうでいやだな。

「そういうことだから、歓迎とデモンストレーションも兼ねて、盛大に燃やしちまおうつてわけだ。」

で、ついでにこのネットで買った980円テントも貼つて、なでしこにキャンプの楽しさつてやつを骨の髄まで染み込ませてやろうつて寸法よ」

「ものは言いようやな」

歓迎会にはしてはгүйいふんと場当たりチックだけど、各務原さんは楽しそうだし、まあいいか。

それにしても焚き火か、じゃああれを持つてきたほうがいいかな。

「焚き火するなら、ボクあれもつてこようか?」

「ああ、たしかにええかもなー 焚き火はうちらで準備しとるから、お願いしてもらつて

もえええ?」

「あれ? あれってなにアキちゃん」

「そいつは、待つてからのお楽しみつてやつだ」

話は決まった。ボクは三人にいったん別れを告げて、部室に戻った。

部室の扉を開けて直射日光が当たらないようにロッカーの奥にしまつてあるダンボールを手取る。

「道具は全部揃つてるかな」

蓋を開け中身を確認。ケトル、サーバー、ドリツパー、ミル、フィルター、そしてコーヒー豆。

全てコーヒーを飲むために必要な道具だ。

「うん、問題なし、戻ろ」

基本的にクソザコのボクだけど、自慢できることがひとつだけある。それはコーヒーを淹れることだ。

ハマったのは中学一年生のころ。

例によつて中二病をわずらつていたボクは、かつこいいからというただそれだけの理

由でコーヒーの抽出器具を手に入れた。

そして三年、気がつけばボクも立派なコーヒー星人になっていた。

そういうことがあつて、たまにこうして野クルの二人にふるまっているのだ。

「あ、戻ってきた！ もう焚き火の準備終わつとるでー」

「ありがとー！」

中庭に戻ると、すでに薪がメラメラと燃えてその役目を全うしていた。さつそく、道具を焚き火の近くに置いてサーバーに水を汲みに校内の水飲み場に行く。

今日は四人いるし、おかわりも入れたら6杯くらい。120ccの6倍で720、蒸発する分と豆が吸う分を考慮して800つてところかな。

蛇口を捻り、水を勢いよく注ぐ。こうすることで水に空気が多く含まれて少しだけまろやかになるのだ。

まあ、実際は微々たる差だけだね。

「んじゃあ、ロリ子がコーヒーを淹れてくれているあいだに、あたしらはテントを立てるぞー！」

「おー！」

テントを前にわちやわちややり始めた三人を横目に、水をいれたヤカンを火にかける。

気を利かせて敷いてくれていたらしいシートに腰を下ろし、段ボール箱から道具を一式取り出す。

「アキちゃん、この釘みたいなのどうやって地面に刺すの？」

「ペグな、そいつは石を使っただな」

「おぉー」

ドリッパーにフィルターをセットする。ボクを使っているドリッパーはハリオの円錐型。

一般的な台形型ドリッパーよりもコツがいるけれど、そのぶん味はワンランク上だ。

円錐型にセットするフィルターは本来は専用のもを使うのだけど、高いし売ってないしであまり手に入らない。

だからボクはスーパーで売っているフィルターを円錐に折り曲げて使っている。

フィルターをドリッパーにセット。これで準備は一つ完了。いよいよ豆を挽きにかかると。

手持ち式のミルの取手と蓋を外し、密閉式の瓶に保存していたコーヒード豆をメジャーで測って入れていく。

今日は量が多いから二回に分けよう。蓋を閉めて取手をつけて右手で丁寧に回していく。

コーヒー豆がセラミックの刃でガリガリと粉砕され細かな豆になっていく。しばらくすればミルに山盛りのコーヒーの粉が出来上がっていた。

出来上がった粉をドリッパーに注ぎ、もう一度豆をセツトし粉にする。これで人数分の粉が用意できた。

ドリッパーを手に取り縁を手で叩き、粉を平にならしていく。こうしないとお湯を注いだときに粉に均一に行き渡らない。

「あおいちゃん、あれつてもしかしてコーヒー?」

「せやで、双葉ちゃんはな、コーヒー淹れるのがめつちや上手なんよ」

「へえ、かつこいいなあ」

そうこうしているとヤカンから蒸気が勢いよく漏れ出した。沸騰したようだ。

火傷しないようにヤカンを注意深くもち、サーバーにお湯を注ぐ。

しばらくして、サーバーが十分に温まったのでお湯をもう一度ヤカンに戻し火にくべる。

「あれ? 沸いたのにコーヒー淹れないの?」

「なんかよくわからんが、冷たいサーバーにコーヒーを淹れると味が落ちるらしい。だからああして一回サーバーを温めてるんだってさ」

「ほんま、いつ見てもプロのバリスタさんみたいやなあ。てか、こんなことしてないで早

うテント立てるで」

「あ、そうだった」

ヤカンから再度蒸気が漏れ出し、沸騰する。

ドリツパーをサーバーにセット。ついでにスマホのストップウォッチも準備しておく。

沸き立つヤカンの熱湯を専用の細口ケトルに注いでいく。

沸騰したてのお湯を冷たいケトルに注いだ時、それがこの豆を美味しく淹れられる温度だ。

湯温計で測るという手段もあるけれど、個人的にはこれが一番わかりやすい。

そうしてできたお湯をドリツパーの中央にそつと乗せるような感覚で少しだけ注ぐ。この瞬間が一番緊張する。

多すぎず、少なすぎず。絶妙なラインで注ぐのを止める。

注がれたお湯を粉が吸収し、表面が少しだけ膨らむ。染み込んだお湯がドリツパーを伝い、サーバーの底に一滴垂れた。

ここですかさずタイムスタート。きっかり20秒待つ。いわゆる蒸らしという工程だ。これをやらないと味が途端に雑になる。

14、15、16、事前にケトルを持っていき、20秒になった瞬間に再びお湯を注

ぐ。

抽出開始。ドリッパーの中央500円玉ほどの範囲に円を描くようにお湯を注いでいく。

注がれたお湯によって豆に含まれていた炭酸ガスが放出、粉の表面がチョコ饅頭のようにこもりと膨らむ。

ドリッパーから抽出されるコーヒーと、ケトルから注がれるお湯が同じ量になるように手の角度を微調整する。

辺りにマンデリンの芳ばしい香りが漂い始め、サーバーに琥珀色の液体が溜まっていく。

そして720cc、予定していた量の抽出を確認したのち、すぐさまドリッパーをサーバーから下ろした。

仕上げるにスプーンでサーバーのコーヒーを掻き回し、抽出の仕組み上、どうしても上澄みと底で濃度の違うコーヒーを均一混ぜて完成。

レギュラーコーヒーのできあがりだ。

紙コップにコーヒーを注ぎ、トレーに乗せてみんなのところに歩き出す。テントはもう終わったのかな。

「コーヒーできたよ。そっちは？」

「できませんでしたー!」

うん、気のせいかな。今、できませんでしたって、聞こえた気が。

「双葉ちゃん、これどないしょ」

犬山さんの目線の先にあるものを見て、ボクは思わずトレーを落としそうになった。

そこにはなんと、無惨にもポールが折れた980円のテントが虚しく風に揺れていた。

え、どうすんのこれ……

「はい、コーヒー」

「わあ、ありがとー!」

無事に設置できたテントをバックにコーヒーを手渡す。

受け取った各務原さんが笑い、コップの中身を見て一瞬だけ表情を曇らせた。

まあ、おおよそなんのことなのかは検討がつく。

ボクはダンボールの中からスティックシユガーとコーヒーフレッシュの袋を差し出した。

「あ！ 双葉ちゃんありがと！」

袋を見るや否や各務原さんの表情がぱあっと晴れ渡った。いつみても表情のよく変わる子だ。

「これをこうしてつと、いただきまーす！」

砂糖とミルクを入れ、茶色くなったコーヒートをすする各務原さん。そして、その様子を慎重な面持ちで見つめるボク。

気に入ってくれるだろうか。

「双葉ちゃん！」

「えっ、な、なに？」

もしかして、不味かったのかな。あれ、温度間違えたかな。

「これ、すっごい美味しいよ！」

「ど、どういたしまして……」

目をキラキラと輝かせしきりにボクを褒めちぎる各務原さん。よかった、気に入ってくれたみたいだ。

「だろー、ロリ子のコーヒーはマジで美味しいんだよ。あたしなんてもう外でコーヒー飲まなくなったもんな」

と、テントの中で足をだらんと広げてすっかりくつろぎモードになっている大垣さ

ん。

「流石に、そこまでのものじゃないきが……」

「たしかに、この味に慣れてまうとインスタントじゃ物足りんわなあ」

「い、犬山さんまで」

三人からの情け容赦のない絶賛の嵐に顔の温度が高くなつていく。たぶん、耳も真っ赤になつてゐることだろう。

「あ、山中さん照れてる」

齊藤さんまで、うう、恥ずかしいよお。つて、忘れてた。

「齊藤さんも、はい」

「え、いいのー？」

サーバーのコーヒーをコップに注ぎ齊藤さんに手渡す。

「テント直してくれたお礼だから」

「そっかー じゃあ遠慮なくいただきます」

齊藤さんが何故、ボクたち野クルと一緒にいるのか。

それは、折れてしまったテントのポールを齊藤さんが応急処置で直してくれたからに他ならない。

あの時は冗談抜きで齊藤さんが救世主に見えた。神様仏様齊藤様だ。

「うん、すごい美味しい。これ、双葉ちゃんが淹れたんだよね？　すごいね」

「い、いやそんな、ぼ、ボクなんてまだまだ素人だし……」

「そんなことないってー」

「や、だ、だから、う、うう……」

言われなれない言葉の洪水に、目があちこちに泳ぎ顔がさらに熱くなっていく。

「照れてるな」

「照れとるな」

「照れてるね」

三人とも追い討ちかけないでよ！　そんな微笑ましいものをみるような目で見ないでよー！

「そういえば双葉ちゃん、さっきテント直してくれたお礼って言うってたよね」

「うん、そうだけど」

あれ、そういえば斉藤さん、ボクのこと名前で呼んでない？

いやまあ、呼び方なんてなんでもいいんだけど、ちよつとむず痒い。

「だったらあとでリンにもコーヒー持っていつてもいいかな？　テント直すアイデア、

リンから聞いたやつだし」

「それは別にいいけど。あれ、リン……あつ!？」

志摩さんのことすっかり忘れてた。本栖湖のこと改めてお礼を言おうと思っていたのに。

「ああもうボクのカカ！」

「どうしたんだロリ子」

突然声を荒げたボクに、みんなが奇異の視線を向ける。けど、リンって名前に聞き覚えがあるのは、ボクだけじゃない。

「リン？ リンちゃん…… あっー!!」

「わっ!? なでしこちゃんまでどないしたん？」

そう、各務原さんもリンという名前には覚えがあるのだ。なんならボクよりもずっと。

「斉藤さん！ もしかして、そのリンちゃんって子、ちっこくていつも一人でキャンプやってたりしない？」

情報が大雑把すぎる。けど、この場においてはこれ以上ない具体的な情報だ。

「そうだよ。でも、どうしてリンがキャンプしてると知ってるの？」

「あのね！ わたしこの前の土曜日にリンちゃんに助けてもらったんだ！ 斉藤さん！

リンちゃんがどこにいるか知らない？」

「どこにいても何も」

斉藤さんが指をさす。ボクも釣られてその方向を見る。

「あそこにいるよ」

図書室と中庭を隔てる窓。その向こうで志摩さんが、しまったと言わんばかりにこちらを見ていた。

3—2

「志摩さん、これよかったです」

カウンターに座ってこちらを不思議そうな顔で見つめている志摩さんにコーヒーの入ったカップを差し出す。

窓の外はもうすっかり夕方になり、冬の寒い風が木々の枝を揺らしている。

「あ、ありがとう。これ、さっき外で淹れてたやつだよ」

「うん、本栖湖のお礼。ちよつと冷めちやつてたからレンジで温め直したけど、味は変わってないはずだよ」

カレー麺に比べたらコーヒー一杯の単価なんてたかが知れている。とうてい釣り合わないけど、何もしないよりはマシだ。

「別に気にしなくていいのに、大したことしてないし。でももらっておく」

「ありがとう。あ、ミルクと砂糖あるけどいる？」

「大丈夫、ブラックもそんな嫌いじゃないし」

さつきまで野クルのハイテンションに振り回されていたからか、志摩さんと話すのがずいぶんと気楽に感じる。

本当ならボクだつてこつち側の人間のはずなんだけどなあ。いや、そんなこと言つたら志摩さんに失礼か。

「あ、おいしい。さつきここから見てたけど、コーヒー淹れるの得意なの？」

「得意、かどうかはわからないけど、昔から好きなんだ」

「そうなんだ」

「うん」

か、会話が續かない！ やっぱ、各務原さんのようにはいかないか。

ていうか何がうん、だよ。ボクのバカ！ これだからボツチは役に立たないんだ。

「あのさ……さつきのこと、なでしこに悪かつたつて言つておいてくれないかな」

コーヒーを一口啜つてから、志摩さんはバツの悪そうな顔でそう言つた。

「さつきのつて……」

「あいつにキャン普誘われた時にすげえ嫌そうな顔しちゃつたこと」

志摩さんの言葉にボクはさきほどの出来事を思い返した。

志摩さんと偶然の再会を果たした各務原さん。例によつて、各務原さんが志摩さんに

突撃し、開口一番こういった。

いっしょに野外活動しよう、と。それに対する志摩さんの返答は言わなくてもわかるだろう。

「あ、もちろんわたしからも言うけど、もしシヨックとか受けてたら悪いし……」

「ああ、うん、それならたぶん大丈夫だと思う。あのあとテント撤収した時、そんなに気にしてる感じじゃなかったし」

ちよつとだけ元気がなくなっていたけれど、あの子はあのくらいでへこたれるような性格じゃないと思う。

短い付き合いだけど、それだけはなんとなく確信していた。

「そっか、ちよつと安心した。なんか、一人キャンプの時間が取られるんじゃないかって思ったら顔に出ちゃってさ」

「ボクもそれ、わかる気がする」

「山中さんも?」

あの時のことを思い返す。もしあの場で詰め寄られていたのがボクだったとしても、きつと同じような顔をしただろう。

「ボクもさ、見てのとおりにこんな感じだからみんなで仲良くって苦手なんだ。野クルの二人に会うまでは話せる相手すらいなかったし」

恥ずかしい話だけど、ボクはこの歳になってもまだまだともに友達を作ったことがない。

野クルの三人は友達と言えるのかもしれないけど、友達がいたことのないボクには今の関係をどう表現すればいいのかわからなかった。

「二人つていいよね。うまく言えないけど、こう、めんどくさいことも楽しいことも、全部独り占めできるっていうのかな。そういうのがある気がする」

そこには一切のしがらみや義務も存在しない。無駄に時間を使ってもいいし、自分なりに有意義な時間を過ごしてもいい。

誰かに強制されるわけでもなく、ただただ自分のためだけに自分の時間を使う。

みんなで仲良くつてことももちろん大切なことだと思う。でも、一人でとことんやることも、同じくらい大事なことだとボクは野宿を通して実感した。

まあボツチのボクが言えたことじゃないんだけどね。

「……なんか、それすごいわかる気がする」

志摩さんが心底同意するように頷いた。この人とは仲良くなれそうな気がする。なんとなくそう思った。

「わたしもキャンプしてる時、そんな感じかも」

「ボクもしよっちゅう一人で旅するから、ある意味似たものどうしかもね」

とはいえブランド装備一式でフル武装したエリートキャンパーの志摩さんと、クソザコ野宿野郎のボクとでは比べるのもおこがましいけど。

「旅？ あのバイクで？」

「うん、適当に荷物積んであっち行ったりこっち行ったり」

おかげでオドメーターの数字がどんどん増えていつている。あのペースじゃあ来年の4月くらいには1万キロ超えていそうだ。

「へえ、なんか、うちのおじいちゃんみたい」

「おじいちゃん？」

「うん、うちのおじいちゃんも旅行が趣味でさ、バイクに荷物積んでいつも日本中走り回ってるんだ」

なんともまああかつこいいおじいさんだ。志摩さんがキャンプ好きなのもその人の影響だろうか。

「うちのお父さんも昔バイク乗ってたみたいだけど、バイクってそんなに楽しいの？」

「うん、楽しい」

即答する。この世で最も楽しい娯楽は何かと聞かれたら、ボクは間違いなくバイクと答えるだろう。それくらいには入れ込んでいる。

基本的に毎日乗っているが一向に飽きる気配がない。たぶん死ぬまで飽きない。

「……あのさ、よかつたらもう少しバイクの話、聞かせてもらってもいいかな？」

ちよつと恥ずかしそうに、けど、その瞳には隠しきれない好奇心を輝かせ、志摩さんは聞いてきた。

放課後はまだ時間がある。少しくらい無駄話をして、きつとバチは当たらないだろう。

「じゃあボクの乗ってるバイクの話からするね——」

それからボクと志摩さんはバイクの話をした。

話が進むにつれ、志摩さんの口調はどんどんぶつきらぼうになり、終いにはボクのことを双葉と呼び捨てで呼ぶようになった。

志摩さんの心情になんの変化があつたのかはわからないけれど、志摩さんなりの親愛の証なのかもしれない。ボクはそう思うことにした。

久しぶりの趣味の話。楽しい時間はどんどん過ぎていく。

「志摩さん、またね」

「うん、じゃ」

すっかりオレンジ色に染まった空の下、小さくなつていく志摩さんの背中を見て、ボクは満足感と少しばかりの名残惜しさを感じた。

「なんか、ここ数日で知り合いが一気に増えたなあ」

狭かった世界が少しだけ広くなるのを感じる。それもこれも、全部あの子にあってからだ。

「今度遠くに行った時、なんかお土産買って行ってあげようかな」

そういうえば各務原さんって浜松から来たんだっけ。浜松ってたしか浜名湖があったよね。

「よし、決めた」

おもむろにスマホを取り出す。次の旅の目的地が決まった。

「へえ、ここが浜名湖か」

コンクリートの階段に腰掛け、ペットボトルのお茶とパンでひと息つく。

目の前には静岡県、浜松市の名所浜名湖が広がっていた。

国道301号、弁天島海水浴場。人気のない砂浜でちよつと、いやだいな遅めのランチをとっていた。

遅過ぎてはやディナーに片足を突っ込んでいる。

「もう4時か。もつと早く家出ればよかった」

海面にポツンと佇む鳥居、そしてその向こうには湾を跨ぐようにしてかかる国道一
号。

ここからじゃあ見えないけど、更にその先には太平洋が広がっている。

「橋の上走れば見れるんだけどなー」

あの橋の上は制限速度80キロの魔境。ピーちゃんのような貧弱ゼロハンバイクで突っ込んでいいような道じゃない。ていうか捕まる。

「いや、リアのスプロケットもつと小さくすればいけるかな？ それかボアアップ……
車体が大きいからいつそのことエンジン取っ替えして、うーん、そもそもそんなことす
るなら——」

ピコン！

「わっ!?!」

間拔けな妄想に夢中になっていたところに突然のラインの通知。ビクツとした拍子
に手に持っていた買ったばかりの熱々のお茶が顔にかかる。

「熱っ!?! なんだよもー!」

涙目になりながら頬をさすりスマホを取り出す。このアイコンは志摩さんか。

リン：ういーす

双葉：熱いです

リン：何があつたし。今日もどっか行つてんの？

あの図書室での一件以来、志摩さんはちよくちよくラインしてくるようになった。クールな雰囲気とは裏腹に意外とノリがよくて楽しい。

双葉：ここだよ

目の前の鳥居と国道1号を写真に撮つて送る。これでわかるかな。

リン：いやどこだよ

だめだった。撮り方雑だししかたないか。

双葉：静岡の浜名湖

リン：マジか

双葉：ちよつとうなぎパイ買いに

リン：コンビニ感覚で静岡まで行くなよ

そうなのかな、たったの150キロくらいしか離れてないと思うんだけど。

双葉：志摩さんは今日もキャンプ？

リン：うん、富士山のそばの麓キャンプ場つてところ

少して写真が何枚か送られてくる。開放感あふれる草原に雄大な富士山。

あとは虎なのかライオンなのかよくわかんないオブジェや柴犬の写真もあった。

写真でみただけでもわかるくらいいいところだった。こんなところで焚き火を前に

コーヒーでも飲んだらさぞかし美味しいだろう。

ちよつと行ってみよう。でも、お高いんだろうなあ。

双葉：柴犬かわいいね

リン：ふつ、あいつはなかなかいいもん持ってたぜ

双葉：？

リン：いや、こつちの話。双葉は今日どこに泊まるの？

そういえば今日どこで寝るか考えてなかったなあ。まあその辺でいいか。

双葉：その辺の公園

リン：……マジ？

双葉：マジ

リン：……まあ、その、うん、死ぬなよ

双葉：死なないよ！

リン：短い付き合いだったけど、お前のことは忘れないからな

双葉：だから死なないってー

ここでラインは途切れた。なんだこれ……まあいいか。

「バイク戻ろ」

階段から立ち上がりバイクを止めてある海水浴場のちようど真後ろのコンビニに戻

る。

「けっこう時間おいちゃったし、エンジンかかるかなー」

ビーちゃんは朝一発目のキックは絶好調だけど、その後のキックはすごい気分屋なのだ。特に寒い時はそれが顕著になる。

かかる時はすぐにかかるけど、かからない時は本当にかからない。あまりにもかからなくて泣きそうになりながら押しがけしてやっとかかったことも何回かある。

「いい子だからかかってねー」

チヨークを引いてペダルを蹴る。

手応えなし、ピストンが回る鈍い音しか聞こえない。

うん、知ってた。チヨークを戻ししばらくしてからもう一度。

空振り。エンジンは黙りこくったままだ。

「はあ……」

思わずため息がこぼれる。これ以上やるとプラグが被って沼にハマりそうだ。

うん、しかたない。

「……押すか」

バイクを301号と海水浴場につながる小道に持っていく。

道は緩やかな下りになっていて、押しがけにはもってこいの場所だ。

「もうビーちゃんも歳だからなー」

毎日乗り回してるけど、ビーちゃんは実はボクよりも歳上なのだ。

好き好んで乗っているのだからしかたないけれど、こういう時だけは素直に新車が羨ましくなる。

「ま、それも含めて好きなんだけどきー」

シートに跨らず、イグニッションをオン。クラッチを握ってギアを2速に変え呼吸を整える。

「いくか……おりやー」

そして、ハンドルを握って思い切り走る。

「お、重いー」

84キロしかないとはいえ、女子で、しかも141センチしかないボクの体格ではバイクを押して走るのとはんでもなく体力を使う。

でも他に選択肢がないので必死にビーちゃんを押して走る。

「ほんにやろー」

ある程度勢いがついたのを確認しクラッチを離す。タイヤの回転がエンジンに連動、ピストンを動かしガソリンが爆発。

微かな手応え。今だ！

「とりゃー!」

その隙を逃さずクラッチ操作。ジャンプしてシートに飛び乗りながらアクセルを思い切り吹かす。

単気筒のエンジンが震え、マフラーが白煙を吐き出す。よし、かかった!

「やったー!」

歓声をあげながらUターン。路肩にビーちゃんを停めて息を整える。

「あー疲れた」

もう何回もやっているけど、やっぱり疲れる。

うまい人だと歩きながらもかけられるらしいけど、ボクにはまだそこまでの経験はない。

「ふう……さて、寝るところ探そっかな」

ポケットにしまったスマホからくぐもった着信音。

珍しい、電話だ。今度は驚かずに冷静にスマホを取る。相手はなんと各務原さんだった。

真つ暗な木組の階段を、スマホのライトだけを頼りに登り終える。顔を上げる。眼下広がったのは、眩い光を放ち輝く浜松の町だった。

「わあ、綺麗……」

漆黒に染まる水面。その湖岸にそって敷き詰められた光の粒。

遠くの浜名大橋で、まるでミニチュアのような車が何台も行き交っている。

枯れ木のさざめき、微かに聞こえる車のエンジン音。乾いた風が耳を凍らせる。

誰一人いない木組の展望台。寒さや孤独感すらスパイスになって眼下の景色を彩っていく。

「各務原さんには感謝しないと」

弁天島で各務原さんと話したことを思い出す。ここを紹介してくれたのは、他ならぬあの子だった。

どういう流れか知らないけど、各務原さんは志摩さんのところにいるらしい。おおかた斉藤さんあたりから場所を聞いたのだろう。

そして志摩さんからボクの場所を聞いた各務原さんは、振り切れたテンションでボクに電話。

お土産を買って帰ると引き換えにいくつかのおすすめの場所を教えてくれた。ここもその一つだ。

この奥浜名の山の上にある展望台は各務原さんの思い出の場所らしい。

まだ時間もあつたしせつかくなので登ってみたが、正解だった。

「今頃各務原さんは志摩さんと仲良くお鍋してるのかなー」

たしか電話でそんなことを言っていた。開放感あふれる草原、身も凍りつく冬の寒空の下、熱い鍋に舌鼓を打つ。なんて贅沢な時間なのだろうか。

「ま、ボクは菓子パンだけどねー」

菓子パンをちぎって頬張りながら自嘲する。暴力的な甘みと身体に悪そうな脂が乾いた口の中に広がる。

「美味しくない……」

旅の時はいつもこれだ。はつきり言つてあまり美味しくない。というかメインで食べるものじゃない。

けど、旅の時の食事はただの栄養補給と割り切つているので不満はない。

ないつたらない。嘘じゃないよ、本当だよ。

夜風で冷え切つたパンをもう一口。小麦と砂糖と脂が口の中で混ざりあつてまるで粘土だ。

さらにもう一口。氷のように硬く冷たいそれを胃のなかに押し込む。

「この人間としてギリギリの感じ……たまらねさぶっ!？」

風が吹く。高台だからしかたないけど風が強い。思わず変な声を出してしまった。

「……下で食べよ」

はいはい無理無理、こんな寒いところで食事なんてできません。

なにが人としての限界だよ。馬鹿じゃないの？ 死ぬの？ 本栖湖で食べたカレー
麵が恋しいよ。

「カレー麵、あなたはなぜカレー麵なの？ それ、はー 美味しいからさー」

一人の時特有の謎テンションでビブラート効かせながらバイクに戻ろうと一歩踏み
出し――

目の前の光景にフリーズした。

女の子が一人、階段の終わりで立ち止まってボクを見ていた。

「……………ふっ」

ご丁寧な半笑いのオポジション付きで。

「あ、こんばんはー」

女の子が苦笑いでボクに挨拶する。

同じ年くらいだろうか、ボクよりも背は大きくて、茶髪をニット帽の下に押し込んで
いる。たぶん、地元の人だろう。

でも、そんなことはどうでもよかった。

「え、あ、はい」

きつと今のボクの顔は、人生の中で一二を争う真顔だっただろう。

「こ、こんばんは」

やばい、聞かれてた？ 聞かれてたよね？

絶対聞かれてたよね。こ、ここはさっさと退散しよう。

そつと歩き出す。明鏡止水、何事もなかったかのように振る舞うのだ。

こちらが何事もなかったように振る舞えば、同じ和を重んじる日本人どうし、きつとわかりあえる。

「きよ、今日は寒いですねー いやー帰ってお風呂入りたいなー」

家の風呂まで150キロあるけどね！

よし、あとちよつと。あと少しで階段だ。いける！ ボクならきつといける！

「カレー麺、好きなんだ」

あゝあゝあゝあゝあゝ!!

4話 キャプテンスタツグ キャンプマツト 2, 07

9円(税込)

4—1

「まー遠慮せずに食べなよ。わたしが奢るなんてめったにないんだからな」

「う、うん」

油ぎった天井。酒が入って活気づく大人たち。汗を流しながら中華鍋と戦う職人たち。

どこに目を置けばわからなくて、テーブルの上の大皿に視線を避難させる。

大皿の上には焼き立ての羽根付き餃子が向日葵のように盛り付けられ、熱々の油がパチパチと音を立てている。

「やっぱ浜松に来たからには、餃子か鰻食べないとね」

美味しそう。思わず唾を飲み込む。どうしてこんなことになったのか、話は少し前に

遡る。

「なんかごめんねー 盗み聞きするつもりはなかったんだけど、すごい熱唱してたから近づけなくてさ」

「うう、死にたい……恥ずかしすぎる」

奥浜名湖展望公園、人気がない駐車場。

頭を抱えてうずくまったボクの悲痛な叫び声が夜の山にこだます。

「おおげさだなー」

全ての元凶である女の子が気楽に言う。人の気持ちも知らないで。

「君カレー麺好きなんだね。美味しいよねあれ」

泣きつ面に蜂！ この子には慈悲つてものがないのか。

「ああ、ボクのバカ。なんであんなところで歌うんだよお」

膝をつき、冷たい地面をどすどすと殴る。うん、小石がめり込んで痛いからやめよう。

なんか最近黒歴史の量産ペース増えてない？ ボク悪いことした？

「そりやたしかに交差点のど真ん中でクラッチミスってエンストさせて渋滞作ったりしたことあるよ！」

片側一車線の上り坂で40キロのところ30キロしか出せなくて車の団子作ったりしたことあるけれど、あるけれど！　こんな目にあうほどじゃないでしょ！

「もうやだ死にたい、誰か殺して」

「あはは、ごめんごめん、ちよつとからかいすぎちゃったかな」

「いや、もう、なんか、大丈夫です」

一周回つてもはや何も感じなくなってきた。とりあえず正気に戻ったので立ち上がろうとすると、女の子が手を差し伸べてくれたので手を掴んで立ち上がった。

もしかしたら、意外といい人なのかもしれない。

いや、絆されるの早すぎでしょ。ネット小説のヒロインじゃないんだからさ。

「へえ、山梨から来たんだ。よくこんなところまできたね。遠かったでしょ」

いつの間にかバイクの周りをうろうろしていた女の子が、ナンバーを見て驚きの声をあげた。

たしかに山梨ナンバーなんてここじゃあまり見かけないだろう。

でも、そんなに驚くことかな。道行く車とかたまにとんでもないところから来てたりするし。一回だけ沖繩ナンバーを見た時は本当に驚いた。

「たかが150キロだし、たいした距離じゃないですよ」

「うん、150キロはどう考えても遠いよね」

何言ってるんだこいつみたいなお顔で見ないでほしい。ボク何もおかしなこと言ってるよね。

「そうなんですか？」

「そこは悩むところじゃないと思うなー」

バイク乗りにとつて、片道150キロなんてコンビニに行くレベルの距離じゃないの？

「みんな同じこというんだよなあ。やっぱりボクがおかしいのか？ いやでも……」

「ふふ、なでしこの言ってるとおりだ。君、面白い子だね」

「お、面白い？ しかも今なでしこって？ え、どういうこと？」

なでしこってもしかして各務原さんのこと？ しかも言ってるとおりって、まるでボクのこと知ってるみたいなおぶりだ。

「あ、ごめん言い忘れてた。わたし土岐綾乃、各務原なでしこの幼馴染やってます。なでしこ知ってるってことはやっぱり山中双葉ちゃんだよな？」

「そうですけど……各務原さんの幼馴染？ それって最近山梨に引っ越してきた？」

「うん」

「やたら美味しそうにご飯食べる女の子？」

「そーだよ」

だめだ。全然状況がわからない。でも、今のやり取りからして目の前にいる女の子は、本当に各務原さんの幼馴染らしい。

でも、なんでそんな人がボクの目の前にいるのだろうか。

「さつきさ、なでしこからライン来たんだ。今山梨の友達がそっち来てるからもしかしたら会えるかもーって。で、展望台のこと教えたって言ってたから、ダメ元で来てみたんだよね。ほら、これ双葉ちゃんでしょ？」

そう言つて女の子改め土岐さんはスマホに保存された一枚の写真を見せてくれた。

バイクに跨つたボクと各務原さんのツーショットだ。

たしか各務原さんに一度ねだられて撮つた記憶がある。なるほど、だからボクのこと知つてたんだ。

「まさか本当に会えるなんて思つてなかつたよ。偶然つてすごいね。なでしこは元気にしてるっ。」

「はい、なんていうかももう元気の塊みたいなかんじです。ボクなんか振り回されてばっかですよ」

「あはは、やつぱそうなんだ。あの子昔つからああなんだよね。けど、引つ越す直前は友

達できるかなーって心配してたんだよ」

各務原さんもそんな面があったのか。普段の様子からじゃあそんな雰囲気微塵も感じないのに。

「ま、その様子じゃあ元気でやってるみたいじゃん。なんかほつとしたよ」

口調こそ気怠げな感じだったけど、土岐さんが本気で各務原さんのことを心配しているのは、なんとなくわかった。

「それでそれで？ ほほーん、これが噂のビーちゃんか。へえ、写真で見るより大きいね」

各務原さんの話は終わったと言わんばかりにボクのバイクの周りをぐるぐると回る土岐さん。その目は明らかに興味津々といった感じだ。

各務原さん経由でボクのことはある程度伝わっているようだ。ボクの知らないところで、ボクを知っている人がいる。ちよつと気恥ずかしい。

「これけっこう古いでしょ。何年の？」

「たしか99年です」

「うわあ、わたしより年上じゃん。しかもこれ、2ストってやつでしょ？ 2ストなんて外走ってるおじさんの古いスクーターくらいしかみたことないや」

なんか、この人女子にしてはすごい詳しいな。でもそれもそうか、こんなバイク乗っ

てるくらいだし。

ボクは未だ興味の尽きないといった土岐さんから目を離し、ビーちゃんの横に停まっている青いタンクの小柄なバイクに目をやる。

「それ、ホンダのエイプですよね？」

ホンダ・エイプ。ホンダが昔生産していた4ストの原付バイクだ。ナンバーがピンクだから100ccモデルかな。

土岐さんはしきりにボクのバイクを褒めるけど、この人もなかなかすごいバイクに乗ってるなあ。

5速MTのキャブ車なんて女子高生が選択するチョイスじゃないでしょ。

「そーだよ、かっこいいでしょ。これは2008年式、こいつもけっこーレアなんだよ」なんて羨ましい。改めて土岐さんのエイプを観察する。

イエローのラインが入った若干緑がかった青のタンク。ゴールドのホイールやワイドなハンドルがオフロードっぽさを演出していて端的に言ってみちゃくちやかっこいい。

「気になるんだったらちよつと跨ってみる？ なんならエンジンかけてもいいよ」

「え、いいんですか？」

基本的にバイク乗りにとって、自分のバイクっていうのは命の次、下手したら命より

も大事な相棒だ。

そんなものに跨らせてくれて、しかもエンジンまでかけていいなんて。

「うん、かわりに双葉ちゃんのパイクにも乗らせてよ。ついでに敬語禁止。せつかく同じパイク乗りなんだからさ。もつとフレンドリーにしようよ」

「そうで……うん、そうだね」

断る理由もない。二つ返事でうなずいてお互いの鍵を交換する。ついでにヘルメットとグローブも身につけておく。

シートに跨り、ビーちゃんよりシンプルなメーター下のイグニッションスイッチにキーを差し込む。

「チヨークってどこにある？」

「エンジンの右のほうについてるよー」

「あ、これか。へえ、エンジンに直接レバーついてるんだ」

チヨークを引いて、2ストよりずっと重いキックペダルを蹴飛ばす。

ブルンとエンジンが唸り、4スト特有の少し重たい鼓動がボクの鼓膜を刺激する。いつもと全く違うエンジン音に少しテンションが上がる。

チヨークを戻してアクセルを軽く吹かすと、軽快なエキゾースト音が鳴り響いた。

これが噂のホンダサウンドか。うーん、やっぱりバイクのエンジン音はいつ聴いても

最高だ。

「土岐さん！ これいいね！」

「でしょー！ なんなら少しだけ走ってみたら？」

「いいの！ ありがとう！」

初対面の人に自分のバイクを運転させてくれるなんて、土岐さんはなんていい人なんだ。

そういうことならお言葉に甘えてちよつと走ってみよう。

クラッチを握ってシフトペダルを踏み込み1速に変更。ビーちゃんと違って普通のリターン式だから注意しないと。

「教習所で習った時みたいに……」

スロットルを回してクラッチをゆっくり離す。進み出す車体。

クラッチを握りシフトペダルに爪先を差し込む。

ペダルを二回持ち上げ2速にチェンジ。

加速して3速に上げちよつと進んでから減速とシフトダウン。Uターンして土岐さんのところに戻っていく。

ブレーキペダルを踏んで停車。ニュートラルに戻しエンジン停止。スタンドを出してバイクから降りる。

うん、いい体験だった。やっぱ新しいバイクはクセがなくて乗りやすい。

「じゃ、次わたしの番だ。こーいうの一回乗ってみたかったんだよねえ」

いつの間にかヘルメットを被っていた土岐さんが、ボクのバイクに跨る。

「あ、燃料計ついてる。いいなあ、エイプないんだよねえ。まずはキック出してつと……
チヨークつて使ったほうがいい？」

「うん、この子古いから始動性よくないんだよね。左のグリップの下についてるやつがチヨークだよ」

「これか、よし……」

チヨークを引いて土岐さんがキックペダルを蹴飛ばす。

けれど、エンジンは一瞬だけかかったものの、すぐに沈黙してしまった。

まあしかたない。ビーちゃんのエンジンが一発でかからないのなんて珍しくないし。

「うーん、やっぱ一発じゃ無理か」

「一回チヨークを戻して、少し待ってからもう一回やってみて。で、キックしてエンジンが唸ったらすぐに空吹かし。それでいけるはずだよ」

「なるほど、コツがいるわけつと……よし、もう一回」

もう一度ペダルを蹴り飛ばす。

ブルンと、一瞬だけエンジンが唸る。すかさず土岐さんがスロットルを回した。

エンジンが唸りマフラーが白煙を撒き散らす。うん、やっぱり聴き慣れた音が一番心地いい。

「あ、かかった！ うはー煙すごっ」

後ろを見た土岐さんが 2スト特有の現象に笑いながら驚く。

見慣れない人には故障しているようにしか見えないんだろうな。ボクもたまに不安になるし。

これでも煙が少ない純正オイルを使っているんだけどなあ。カストロールとか使ったら酷いことになりそうだ。

「あ、かかったらチョーク戻して！ プラグ被っちゃうから」

「わかった！ 双葉ちゃん！ 走らせてもいい？」

「いいよ！ でも、エイプと違ってロータリーギアだから気をつけてね！ カブみたいに踏むだけでいいよ」

「わかった！ じゃ行つてきまーす！」

そういつて、ややぎこちない動きで進み出す土岐さん。

ボクのバイクに違う人が乗っているのは何ていうか不思議な気分だ。でも悪い気はしない。

白煙を吐きながら走る土岐さんとピーちゃん。服の雰囲気とバイクがマッチしてい

て様になっていた。

ボクもあんなふうにかっこよく乗れているのかな。

そんなことを考えながらしばらく眺めていると、土岐さんが帰ってきた。ボクの前で停車しエンジン停止。

バイクを降りてボクを見る土岐さんの目は、満足気に輝いていた。

「これすごいパワーあるね。何ccc?」

「51cccだよ」

「え、ほんとに? 全然そんな感じに見えなかったよ」

土岐さんが驚くのも無理はない。昔の原付は本当にパワーがあるのだ。ビーちゃんなんて優しいほうで、無改造で100キロ近くでるモデルもあったらしい。

「はいこれ鍵。こんな昔のバイク乗るの初めてだったからちよつと緊張しちゃったよ」

「ボクのバイクなんてたいしたことないって。土岐さんのバイクだってすごいじゃん」

世の中には自分のお父さんよりも年上のバイクを乗り回す人たちがそこそこいる。

そういう人たちに比べれば、ボクのバイクなんてまだまだ新車も同然だ。

「いやいや、なかなかいい趣味してると思うよ。さつきはあんなだったのに」

唐突に黒歴史を掘り起こされて顔が熱くなる。人がせつなくなかったことにしようとしてたのに、なんて酷いことをするんだ!

「あんなんって、あれは土岐さんがからかうからだろー！」

「やーい、カレー麵大好き人間」

「な、なにをー！」

お互いに見つめ合う。先に口を開いたのは綾乃だった。正確には吹き出したというべきか。

「ぶ、あはは！ 双葉必死すぎ」

「もう！ 笑いすぎだよー！」

「だって、あそこであんな歌ってる人初めて見たんだもん！ しかもカレー麵って、どんだけ好きなのー！」

「だから、わ、笑いすぎだって。う、歌ってただけじゃん。ふ、ふふ」

「そ、れ、はー、美味しいからさー」

「真似しないでよもー！」

無駄に似てるのが腹立つ。

お腹を抱えて笑う綾乃。それに釣られたのか、ボクもだんだん面白くなってきた、気がつけば一緒に笑っていた。

思い返してみると、たしかにバカみたいな出来事だ。

「あははー！」

二人の笑いが夜の駐車場に響き渡る。

まだ知り合って少ししかたっていないけど、この人とは仲良くできそうな気がする。なんとなく、そんなことを思った。

「あーおもしろかったー そうだ、せつかくだから綾乃って呼んでよ。土岐さんってなんか拳法の達人みたいでやだし」

笑いが収まった土岐さんが、突然そんなことを言いだした。

「え？ いや、えつと、そのー」

突然の提案に、しどろもどろになるボク。

なぜなら人のことを下の名前で呼んだことなんて一度もないからだ。

「んー？ どうかした？」

でも、やだつて言っている人を苗字で呼び続けるのも失礼だし、なによりせつかく仲良くなれたんだからもつと仲良くしたい。

だからちよつと勇気を出そう。

まさかボクがこんなふうになるなんて、各務原さんの性格がうつつたのかな。

「え、えつと、じゃ、じゃあ綾乃、さん」

「惜しい、もーひと声」

「うぐつ……わ、わかった。あ、綾乃」

「うん、よろしくねー 双葉」

差し出された手を握り返す。手袋の感触が少しもどかしくて、だけど、すごく嬉しかった。

「そういうばさ、双葉つてもうご飯食べちゃった？」

「食べてないけど、もう買ってあるよ」

食べかけの菓子パンを思い出す。あれあんまり美味しくないんだよなあ。もうちよつと甘さが控えめだったらいけたんだけど。あと大きすぎる。

「もしかして、さつき展望台で食べてたパン？」

「そうだけど……どうしたのそんな顔して」

穏やかな笑みを崩さなかった綾乃が、一変して嘘だろって言いたげな顔でボクを見てきた。

「え、あれだけ？　なんか食べに行ったりしないの？」

「しないよ。ボク、旅での食事はカロリー補給の手段で割り切ってるから」

真冬の野宿においてカロリー不足は冗談抜きで死につながりかねない。

だからこそ、他の食事に比べグラムあたりのカロリーがぶつちぎりで多い菓子パンに白羽の矢が立ったのだ。

たんにケチとも言う。

「そ、そうなんだ。す、ストイックだね」

マジかよこいつみたいなお顔で見るのやめてほしい。ボクだっておかしいのくらいわかってるんだ。

「でも、食べてないならちようどいいや。双葉、これから時間ある？」

時計を見る。まだ寝るにはかなり時間がある。だから全然かまわないのだけど、何をするつもりなんだろうか。

「うん、平気だよ」

「よかった。ならちよつと行きたいところあるから着いてきてよ」

「べつにいいけど、どこに行くの？」

「ふっふっふ、それはついてからのお楽しみってやつですぜー」

綾乃はそう言ってニヤリと笑い、バイクに跨がりこうつけ加えた。

「双葉、脂っこいのって大丈夫？」

4—2

綾乃のエイプに連れられて、ボクは展望台から10キロほどのところにある店に案内された。

道路沿いの看板には、浜松餃子の四文字が電飾でケバケバしく輝いていた。これで何の店かわからない人間はたぶんいないだろう。

困惑するボクをよそに、綾乃は慣れた様子で注文を頼み、気がつけばこの有様だ。

目の前に並べられているのは、美味しそうに焼き上がった山盛りの餃子とご飯、そして漬物やスープ……

つまり一言で言い表すのなら餃子定食だ。

「あ、そうだ。せっかくだし写真とろーよ」

「え、あ、うん」

促されるがままに綾乃のかかげるスマホのカメラを見つめる。

「双葉、もうちょっと顔近づけてー そうそうそんな感じ」

こ、これは、リア充にのみ許された伝説の技。自撮りというやつなのか!?

「はいピース」

「ぴ、ピース」

パシャリ。シャッター音が鳴り写真が撮られたことを告げる。なんか話の展開が早すぎて全然ついていけないんだけど。

「あとで写真送るからライン教えてよ。あ、でもその前に食べよつか。冷めちゃうし」

「あ、うん」

流されるまま小皿を受け取りタレを注いでもらう。あ、自分で醤油とか酢で作らないんだ。もしかして、自家製のタレなのかな。

って、違う。そんなことは重要じゃない。

「あ、綾乃、聞き間違いやなかったらさつき奢りって言つてた気がするんだけど」

「そーだけど、どうしたの?」

綾乃はあっさりとして、それはもう当然のように肯定した。

「どうしたのって、え、わ、悪いよ!」

「あー、お金のことなら気にしなくていいよ。今月はバイト代全然使つてないし。ていうか早く食べようよ。ここの餃子はすごい美味しいんだよ」

喋り終えると綾乃はいただきまーすと言つて餃子をバリバリと食べ始めた。

もう話をするという空気ではない。

「久しぶりにきたけど、やっぱここの餃子が一番だなー」

なんかすごい美味しそう。

どうしよう。ええい、もうしようがない。問答はあとにして今は餃子を食べよう。実はなんだかんだいってボクもかなり空腹なのだ。

箸を手に取り、円盤状に焼き目がつながった餃子を掴みタレにつけてひと口。

「……うまつ」

「でしょー?」

ボクの知っている餃子とまるで違う。きつと餡の材料が違うんだ。この甘さと食感。たぶんキャベツと玉ねぎだ。

焼き目の絶妙な食感と、豚肉の脂、そして野菜。あっさりしていて、けれどそれでいてコクもある。

冬の風で冷え切った身体に染み渡る。なんて美味しいんだ。たまらずもう一つ食べる。

パリパリの焼き目ともちもちの皮、それらにつつまれた豚とキャベツと玉ねぎの旨味。タレの酸っぱささと塩気がさらに引き立たさせる。

「ん、んまあ……」

「おうおうたーんと食べよー そうだ、次は真ん中のモヤシと一緒に食べてみなよ」
 「モヤシ？ あ、これか」

言われたとおり、餃子の真ん中に盛られているモヤシも一緒に食べてみる。

「お、美味しい！ 綾乃、これ美味しいよ！」

「そうだろう？ 味わってたべろよー」

パリパリとした餃子にシャキシャキで瑞々しいモヤシの歯応え。脂っぽさとモヤシのさっぱり感が中和し単体で食べるのとはまるで違う味を生み出す。

「うん、うん！ うん」

さつきまで味けないパンを食べていたこともあつて、箸が進む進む。皿に所狭しと盛られていた餃子が一つ、また一つと胃に消えていく。

「なーんか、双葉見てるとなでしこ思い出すなー 食べるころなんかほんとそっくり」
 「各務原さん？」

「うん、なでちゃんもいっつもご飯美味しそうに食べるんだよねえ。で、あんまり美味しそうに食べるもんだから、気になって一口ちよーだいつて言ってもらって食べると、これがたいして美味しくなかつたりするんだ」

わかりすぎて困る。各務原さんは昔から何も変わってないようだ。

「知ってる？ なでしこってちよつと前まで大福みたいだったんだよ。ほら」

綾乃がスマホを見せる。そこにはどこか見覚えのある桜色の髪の毛のまんまるな女の子が映っていた。

「もしかして、これ各務原さん？ え、うそ?!」

よくみなければ同一人物なんて絶対にわからない。もはや別人だ。

「驚いたでしょ。中三までこんななんだったんだけど、流石にだらしなすぎたみたいで、なでしこのお姉ちゃん怒つちやつて猛ダイエツトさせたんだよね」

「だからあんなに体力あつたんだ……」

あの美人のお姉さんがそんなことをするなんて意外だ。と一瞬思つたけど、本栖湖でのやり取りを思い出すとあんがいしっくりきた。

「わたしは前のなでしこも好きだつたんだけどな」

餃子を食べながら、各務原さんのことを語る綾乃は、とても楽しそうで、けど、どこか寂しそつた。

「あの子、ちゃんと向こうでご飯食べられてるのかな」

それもそうか、引つ越してからまだ一週間しか経つてないんだもんね。

大事な大事な友達だったのだろう。そう思うと少しだけ綾乃が不憫に思えた。

「なでしこって、今キャンプにハマつてるんだつて？ さつきもラインでリンちゃんつて子と鍋食べてる写真送つてきたし」

こんな寒いのに、よくやるよね、と言う綾乃はやっぱり寂しそうだつた。

「なにが楽しいんだろうね。わたしにはよくわかんないや」

そう言うとはつきりと寂しそうな笑みを浮かべた。

だからだろうか。

「あ、あのー！」

気がつけばボクは立ち上がっていた。目をまんなると開いた綾乃がボクを見つめる。

「し、静岡なんて6時間も走ればすぐだから！ い、いつでも行けるし、も、もしよかつたら暇な時にツーリングとか、その、できるっていうか……」

話しているうちにどんどんわけがわからなくなり、尻すぼみになっていく。

「か、各務原さんの代わりににはなれないけど、い、いつでも遊びに行けるし。だ、だから、そ、そんな顔しないでっていうか……その、うん……なんていうか……」

蒸気が抜けたように座り込む。我に返り顔に熱が集まっていく。ああ、また黒歴史を一つ作ってしまった。

「どーしたの急に?」

「う、うう……」

馬鹿なの? 何いってんのボク! 会ったばかりの人にツーリングとか意味わかんないし。

「あはは、変な双葉」

「へ、変？」

わ、笑われた。恥ずかしい、死にたい。顔を手で覆って襲いかかる羞恥心から身を守る。

でも残念、恥ずかしさはガード不可なので、容赦なくダイレクトダメージを与えていく。

「双葉」

突然名前を呼ばれて顔を上げる。

「なんか、ありがとね」

「あ、う、うん」

優しい顔で微笑まれ、しどろもどろのまま返事をする。笑われるのもあれだけど、これはこれで気恥ずかしい。

「双葉つてさ、すごいやさしいんだね」

「え、そんな、やめてよ急に」

笑われたかと思ったら、今度はいきなり褒められて感情の切り替えが追いつかない。綾乃はいつたいていどうしてしまったんだろう。

「うん、やさしいやさしい。なんかなでしこが気に入るのもわかるなー」

「う、うん？」

「まあまあそう気にせず、ずっと話してばっかもあれだし残り食べちゃおっか」

「あ、そうだね」

そのとおりだ。冷めたらもつたない。まあ冷めても美味しいだろうけど、できるならあつたかいうちに食べたい。

ボクたちは残った餃子を食べ始めた。時折お互いのことを話しながら、時間はあつという間に過ぎていった。

「はいこれ」

夜空の中で、一際眩しい光を放つコンビニの前で、ボクは温かいお茶のボトルを綾乃に差し出した。

「え、いいの？」

「餃子奢ってくれた代わりってわけじゃないけど、色々話聞かせてくれたし」
「律儀だなー双葉は。ありがと、もうね」

綾乃がお茶を飲み始めたのを見計らってボクも自分のお茶に口をつける。熱々のほうじ茶が餃子の脂を洗い流し、さっぱりとさせてくれた。

「双葉はこれからどうすんの？ どっかホテルでも泊まるの？」

「ううん、その辺の公園で寝るつもり」

「え、マジ？」

綾乃のお茶を飲む動きが止まる。このリアクションは野クルで慣れた。

なぜかみんな同じ反応するんだよね。キャンプするのと大して変わらないと思うんだけどなあ。

「今日は綾乃に会った公園で寝ようかなって考えてる。人も少なそうだしね」

「て、テントは？」

「ないよ。邪魔だし」

「ええ……」

テントなし、マットと寝袋だけ。それがボクの野宿のスタイルだ。色々試してみたけれど、結局これが一番しっくりくる。

場所を取らず、撤去も一瞬で終わる。何があるかわからない野宿旅にテントは手間がかかりすぎるのだ。

ボクは旅人であってキャンパーじゃない。だからテントは必要ない。

なによりお金がかからない。これが一番重要。

必要なのは往復のガソリン代と食費だけ。ボクが毎週旅に出られるのはこの極端な

節約のおかげなのだ。

「え、ほんとにテントないの？ 言っとくけどここら辺夜めっちゃ寒いよ？」

「大丈夫大丈夫、毎週やってるから。それにもっと寒いところでも寝たことあるし」

最初は寒すぎて眠れないこともあったけど、おかげで冬の野宿のコツはマスターしたつもりだ。

こんな低地の野宿なんてどうってことない。最悪寝なきやいいだけだしね。

「ま、毎週って…… 双葉って、なに？ 修行でもしてるの？」

「してないよ！」

酷い言われようだ。野クルの二人にも散々おかしいと言われてきたけれど、修行僧扱いは初めてだ。

「だって、こんな寒いのに150キロも走ってくるし、菓子パンだけでご飯すませようとするし、あげく、その辺の公園で寝るとか言い出すし…… 双葉はなにを目指してるの？」

「なにも目指してないって、ただの趣味だよ！」

「趣味って言い方がよけーにね」

「だーかーらー！」

旅つていうのは、辛くて、苦しくて、いいことなんか一つもなくて、なんていうか苦行じやなきや面白くないんだよ。

なんか、こういう言い方すると本当に変態みたいだからやめておこう。

「あはは、ごめんじよーだん。でも、本当に気をつけてよ？ 何かあったらすぐ警察とかわたしに連絡してね。そつこーで駆けつけるからさ」

「うん、わかった」

さつきもらった連絡先を思い出す。また一つ電話帳に書き込みが増えた。それがちよつと嬉しい。

「じゃあわたしはもう行くけど、明日はどーすんの？」

「明日？ 明日はお土産買って昼までには出発かな」

片道6、7時間もかからない。多少ゆっくりしても全然問題ないだろう。

「そつか、じゃあどこに行くかとか決めたら教えてよ。いっしょについてくから」

「え、そこまでしてもらわなくてもいいよー」

「聞こえない聞こえない。じゃ、また明日なー」

ボクが何か言う前に綾乃がエイプのキックペダルを蹴飛ばす。テールランプがナンバーを怪しく照らす。

「風邪引くなよー」

唸る4ストエンジン。気がつけば、綾乃は道路の向こうに消えていった。

綾乃はボクを変なやつだといったけど、綾乃も十分変わってると思う。

「……ボクも寝るか」

ヘルメットを被りキックペダルを蹴飛ばす。

巻き上がる白煙。オイルの焦げた甘い香り。口の中にはまだ餃子の味が残っていた。

そうだ。あとで各務原さんに自慢しよう。きつとうらやましがらるだろうな。

4—3

奥浜名湖展望公園。バイクのヘッドライトで照らされた駐車場の東家をそつと覗く。

「人は……よし、いない」

こういうところはたまに先着人（主にホームレスの人。あと酔っ払い）が寝ていたりするから気をつけないといけないのだ。

ボクはあくまで他所者、キャンプ場と違ってお客様じゃない。

誰よりも下の立場にいることを忘れてはいけない。それを忘れて傲慢に振る舞えば、ツケは自分に返ってくる。もう職務質問はこりこりだよ。

けど、ここは大丈夫そうだ。今日の寝床はここに決定。そうと決まれば準備は早い。

エンジンを切ってバイクのシートにネットで縛り付けていたボストンバッグと寝袋とマットを下ろす。

光源を失った途端、ボクの視界は闇に包まれた。けど慣れているのでさして問題はな
い。

月明かりを頼りに手探りでバッグのファスナーを開き中から百均で買った電池式の吊り下げライトを取り出す。

くつついた紐を引っ張ると、オレンジのLEDがあたり一面を照らし出した。

光量も風情も十分にあつて、ボクはこれが気に入っている。電池の持ちがかなり悪いけど、旅で使う分には気になるレベルじゃない。

ライトの紐をハンドルに引っ掛け東家の真横まで押ししていく。野宿をするときはできるだけバイクと距離を詰めるのがおすすだ。

盗難やいたずら対策でもあるし、何より何かあつた時にすぐ逃げられる。キャンプ場みたいに管理なんてされてないので何があつたつて不思議ではないのだ。

バイクに引っ掛けたライトを頼りに荷物を東家のテーブルに置き、ネットで二千円で買った折り畳み式のウレタンのマットを引き伸ばす。

安くてコンパクトで気に入っているけど、使っているとどんどんウレタンが萎んでくるので、ある程度使ったら買い換えなさいといけない。

ちなみにこいつも三代目だ。いつかエアマット欲しいな。

マットを敷いたら袋に押し込まれていた寝袋を広げる。

コールマンの化繊シユラフ、ボクの持っている旅道具の中で唯一のブランド品で、中学の時になけなしの貯金を叩いて手に入れた。

ちゃんとしたメーカーの製品だけあって性能は折り紙付きで、マイナス10度までなら耐えられる保温性を持っている。こいつに何度助けられたことか。

性能は文句ないけれど、どう頑張ってもかさばるので、いつかはダウンのシユラフを手に入れたい。ま、だいぶ先の話になるだろうけどね。

これでもう準備は八割整った。ここまで5分もかかってない。

野宿の利点はなんととってもこの気軽さだ。場所を選ばない。その気になればどこでだって眠れる。

時計を見る。時間はもう8時を過ぎていた。

身体も疲れているし、今日は寝てしまおう。床に敷いたマットに座りバッグからハクキンカイロとベンジンを取り出す。

いつものように上蓋とプラチナの火口を外し、漏斗を使ってベンジンを注ぎ込む。

あたりに漂うベンジンのつんとした臭い。ボクはこの臭いが嫌いじゃない。

火口を取り付けライターで炙る。使い込んで黒ずんだプラチナの綿が暗闇の中でぼわつと光った。

化学反応が始まり温かくなってきたカイロに上蓋を取り付けて、小袋に放り込む。

しばらくすればほっかほかのカイロの出来上がりだ。

寝袋の中にカイロを放り込み、バッグから乾電池式の充電器を取り出しスマホを充電

する。

いつかバイクにUSBの電源を取り付けたいけれど、配線がめんどうだ。しばらくは乾電池で我慢しよう。

耳栓を耳に押し込む。周りから一切の音が消え、まるで水の中にも入っているような感覚がボクを包み込んだ。

歯磨きとトイレは麓のコンビニで済ませた。あとは眠るだけだ。

「はあ、疲れた」

合皮のゴワゴワしたポストンバッグを枕に横になれば、夜のしじまがボクを包み込んだ。

「おやすみ、ビーちゃん」

ライトを消す。静まり返る世界。暗闇にボクの意識だけが漂う。

ボクはこの瞬間がたまたまなく好きだ。

寂しさや寒さ。ちよつとの不安や胸の高鳴り。

月の意外な明るさ、顔に張り付く冷気、足元で感じるカイロの暖かさ。ここに來るまでの思い出。

その全てがボクだけのものになる。

どんなに、しんどくても、どんなに危なくても、ボクは旅をやめられない。

この圧倒的な自由を知ってしまえば、他のどんなことだって窮屈に感じてしまうから。

「今日も、いろんなことがあったなあ……」

海を眺めながら走った国道150号。展望台から眺めた浜松の夜景。綾乃と一緒に食べた餃子。

「餃子、美味かったなあ……」

疲れに身を任せ、瞼を閉じる。シユラフの暖かさに身を任せていると、だんだん意識が薄れていく。

「明日は……綾乃と会って……うなぎパイ買って……」

意識が闇に吸い込まれていく。眠い、ただ眠い。今日は疲れた。

朝、目を覚ましたボクは食べ残しの菓子パンを朝食代わりにし、マットを片付けるとすぐに公園を後にした。

山を降り、湖岸の高速道路沿いを走り一般道からでも入れるサービステリアに入る。残り半分を切っていた燃料を補充し、自販機で買った缶コーヒーを啜り、朝焼けの空をぼんやりと眺めながら暇な時間を過ごす。

朝日に染まる浜名湖が、まるでオレンジジュースのようで、少しだけおいしそうに見える。

時間はまだ7時前だ。することもなく、ただ時間だけが過ぎていく。ボクはこういう時間がなんとなく好きだった。

ポケットのスマホが震える。

ラインだ。スマホを見る。志摩さんからだ。そういえば各務原さんとキャンプ行つてたんだっけ。

リン：おーい、生きてるかー

双葉：ごめん、死んじゃった

リン：な、なんてことだ。遅かったのか……だからあれほど言ったのに、バカな奴め

双葉：嘘だよー生きてるよー

まだ7時にもなっていないのにこのノリのよさ。

図書室でいつも変な本読んでるみたいだけど、それが関係しているのだろうか。ボク

も今度借りてみようかな。

リン：あつそ、こっちは起きたらなでしこがテントに入り込んでた。眠いからまた寝る

双葉：おやすみー

リン：そんで、今日いつ帰ってくんの？

双葉：お土産買って少しゆつくりしてから出発だから、たぶん夜になるかな

リン：轆かれるなよー あとお土産ケチつたらなでしこに秒で食い尽くされるから気をつけろよ。あいつ、昨日一人で餃子鍋の餃子40個くらい食べたからな

40つて……ボクもめちやくちやお腹空いてて30個くらいが限界なのに。あんな細い体のどこに入るんだろう？

双葉：わかった。志摩さんもお土産楽しみにしててね

リン：りよー

やり取りを終えスマホをしまう。少し前まではこんなふうに誰かと自分のことを共有することなんてなかった。

まだまだ慣れないけれど、自分の楽しんでいることを誰かに話せるのは、なんていうか悪い気分じゃなかった。

それからまたしばらくぼーっとしていると、またラインの通知音があった。今度は綾

乃からだ。

綾乃：おーい、生きてるかー

双葉：綾乃もか

綾乃：どうしたの？ まあいいや。今どこー？

双葉：浜名湖のサービスエリア。高速下の小道まっすぐ行った先の駐輪スペース。

綾乃：りよーかい、今行くから待ってるよー

それから、1時間ほどサービスエリアの中をぶらぶらしていると、綾乃から連絡があつた。

駐輪場に戻ると、ビーちゃんの横に青いエイプが止まっていて、綾乃がキョロキョロと辺りを見回していた。

「綾乃ー」

手を振って居場所をアピールする。

「あ、いた。やつほー」

手を振る綾乃に近づくと、昨日と比べると、ちよつとだけ元気がない。なんていうか眠たそうだ。

どうしたんだろう。ちゃんと寝れなかったのかな。

「眠いの？」

「そつちが元気すぎるんだよー なんてバイクで散々走り回って野宿もしてるのにわたしより元気なのさ」

ジト目で訴える綾乃。こればかりは慣れているからとしか答えようがない。

「それで、双葉はこれからどーするの？ お土産買ったらもう帰っちゃおう？」

「うーん、お土産はここで買えるし、家も夜までに帰ればいいだけだから、もう少しぶらぶらしていこつかな」

とはいえ、ぶらぶらすると行っても行きたいところも思いつかない。下調べもしないでノリで出発した弊害ってやつだ。

「ふうーん……じゃあさ、温泉とか、行かない？」

「温泉？」

そういえば道を走ってる途中、やけに温泉の看板が目に入った。でも、温泉って妙に高かったりするんだよなあ。

「温泉かあー」

あんまりお金も使いたくないしなあ。綾乃にはもうしわけないけど、ここは心を鬼にしてビシツと断らないとダメだよな。

「と、とけるう……」

断れませんでした。

熱い温泉が全身を包み込む。昨日から走りっぱなしでバキバキになった身体が熱いお湯でときほぐされていく。

「い、いくらくだあ」

浜名湖のサーブिसエリアからさらに20キロほど先にある温泉施設で、ボクはお湯に溶けていた。

冷え切った身体にこれは反則だ。しかもこれで800円なんだから全然OKだよ。

紹介してくれた綾乃には感謝しかない。

「あれ〜？ さっきお金もつたいないから行かなーいとか言つてなかったっけ？」
「いつてたっけ〜 どうでもいいよ〜」

「だね〜」

二人してお湯に溶けていく。気持ち良すぎる。

営業してすぐだからか、人気もほとんどない貸切状態だし本当に天国にいるみたいない気持ちになっていく。

「にしても、こんな早くからバイク乗るのなんてわたし初めてだよ。双葉はいつもこんなことしてんの？」

「うん、いつもは5時とか遅くても6時くらいには出発してるかな」

キャンプ場と違って公園とかは朝になれば普通に地元の人とかが来てしまう。迷惑をかけないためにも、野宿は早寝早起き即時撤収が鉄則なのだ。

「ほんと元気だなあ双葉は。わたしは早起きするだけでもつらいよ」

「野宿は中学の時からずつとやってるからね。もう慣れちゃった」

たしか最初に外で寝たのは中二の夏だったはず。もうずいぶん昔のことのように感じる。あのころは大変だったなあ。

「ほんとよくできるよね。外で寝るのとか怖くないの？」

その目は理解できないという感情で溢れかえっていた。

こんなにも純粹に疑問をぶつけられたのは初めてかもしれない。

「うーん、最初は怖かったかな。やっぱいろいろ考えちゃうからね」

「それなのにやるんだ。なんか変なの」

まあ、本当にそのとおりだから何も言い返すことができない。

何時間、下手したら十時間以上もバイクに揺られ、夏は暑さと虫刺され、冬は寒さ、野宿は寝るためのハードルがかなり高い。

キャンプと違って安全も保証されないから気を張らなきゃいけないし、お金も切り詰めるからご飯もろくに食べられない。

はつきり言って、こんなことを好き好んでする人なんて相当な変人だろう。

「たしかに最初は怖かったよ。でもね、すごくワクワクするんだ」

そんなリスクを冒してまでボクが旅をするのはなぜか。それは、ワクワクするからだ。

どうしようもないくらいワクワクするからだ。

「ワクワク?」

「旅をしているとき、見える景色がどんどん変わってくるんだ」

脳裏に浮かぶのはこれまでの旅の数々。色褪せることのない鮮烈な思い出たち。

大事な大事なボクだけの宝物。

「スロットルを回すたびに、知らない景色が目飛び込んできて、ちゃんと見る前にまた新しい景色が飛び込んで、それが何回も何回も続くの」

街が畑になり、畑が森になって、そして海になる。

冷たい風は、暖かい陽射しに変わり、凍りつくような雨になって、淀んだ曇り空は澄み切った青空に変わり、降り注ぐ太陽は優しく照らす月になる。

「まわりを走ってる車のナンバーの地名がね、だんだん知らない地名になっていくんだ」

地名ひとつひとつに住んでいる人がいて、ボクの知らない景色を見て、ボクの知らない空気を吸っている。

「それを見るのが楽しくて楽しくてしかたがなくて、いつも胸がザワザワして叫びたくなる。ああ、ボクは遠くに来たんだって」

世の中にはこんな楽しいことが溢れているのに、家で縮こまっているなんて我慢できない。

「綾乃の言うとおりたしかに怖いよ。旅先で何かおきたらつて考えることもある。でもね」

「でもっ？」

息を吐いて肩まで湯に浸かる。これを言うのはちよつと恥ずかしいけれど、まあいいか。

「でも、一歩踏み出さなかったら、ボクはこうして綾乃と温泉に入ることはできなかったんだ」

新しい景色、新しい空気、新しい出会い。

旅に出なければ危ない目には合わないかもしれない。けど、旅に出なければそれを見ることはできない。

だからボクは何度だって旅に出る。ここじゃないどこかに行くために。

「双葉……」

湯気の向こうにある綾乃の目が揺れる。きつとのぼせているのだろう。熱いしねこ

こ。

「つて、なに言ってるか全然わからないよね」

肩をすくめて笑う。温泉に浸かったテンションで変なことを言ってしまった気がする。

「うん、全然わかんないや」

綾乃が笑ってそう言った。

「ひどっ」

わかっていたけど、一面と向かって言われるとちよつと辛い。

「けど、すごく楽しそうなのはよくわかった。なでしこもきつとおんなじ感じなんだろうーね」

「各務原さん？」

「最近ちよつと遠くに行っちゃったような気がしてたけど、双葉の話聞いてたらなんとなくわかった気がする」

親友のことを語る綾乃の目は、昨日とは違ってどこか清々しさのようなものを感じた。

「きつと、あの子も本気で楽しめることに出会えたんだろうね」

綾乃の心境にどんな変化があったのかはわからないけど、きつとそう悪いことではな

いはずだ。

「楽しいことがあるとき、人生つて一気に変わるんだ。各務原さんもきつとそうなんだよ」

ボクにとってのそれが旅だったように、各務原さんにとってはそれがキャンプだったのかもしれない。

「いいなあ、旅。わたしもしてみたくなっちゃったよ」

ただよう湯気のもやもやをぼんやりと眺め、綾乃はつぶやいた。

「バイクに荷物積んで、野宿は嫌だからホテルにでも泊まってさ」

さらつと野宿否定された。いやまあ、これが普通の反応なんだろうけど。

「のんびり国道走って、温泉入ったり、美味しいもの食べたり、それでいつか山梨に行つてなでしこに餌付けして双葉にご飯奢らせるんだ」

「そんなの、いくらでも奢ってあげるよ。もしこれたらただけどね」

「それ覚えとけよー 言つとくけど、わたしはグルメだからなー」

綾乃がのぼせ顔で笑う。

浜松から山梨までたったの150キロだ。意外と早くその時は来てしまうかもしれない。

「忘れない、忘れない」

だから、その時が来るまでにお金を貯めておこう。そしてうんと美味しいものをご馳走しよう。

「双葉、まだ時間ある?」

持ち込んでいた腕時計を見る。時間はまだまだ余裕がある。ボクは無言でうなずいた。

「なら、旅の話もつと聞かせてよ。どうせいっぱいあるんでしょ?」

「いいよ。何から話そうかなー そうだ、夏に琵琶湖まで行った時の話しよつかな」

「え? び、琵琶湖!」

いきなり滋賀県の湖の話が始まって困惑している綾乃をよそに話を続ける。

「あの時は大変だったなあ。日焼け止め忘れて腕真つ赤になったり土砂降りで着替え全滅したり——」

自分の好きなことを話せるのが、こんなにも楽しいなんて知らなかった。

それもこれも全部、本栖湖でボクがウィリーしなければなかったのだと考えると、少しはあの黒歴史も認めてあげてもいいのかなと思った。

と、一瞬だけ考えて、結局黒歴史は黒歴史でしかないと我に返った。

危ない、のぼせておかしなことを考えるところだった。

こうして、ボクの浜松での時間はどんどんと過ぎていった。

そして――

「じゃあ、ボクはそろそろいくね」

バイクに跨る。これからまた150キロだ。疲れは十分とれたから楽勝だろう。

温泉で温まった頭の上からヘルメットを被る。奥までしっかりと被り、顎紐をしめる。

「うん、なでしこ食べすぎんなよーって言っておいて」

「わかった。そっちも元気でね」

「また来る?」

綾乃が期待するようにボクを見た。少しは寂しいと思ってくれているのかな。だとしたら嬉しい。ちよつと恥ずかしけど。

「うん、来るよ。その時はちゃんとツーリングしようか」

しつかりと頷く。友達との約束は守らないといけないからね。

「わかった。約束だからね!」

頷いてゴーグルを被る。

お別れの時間だ。ちよつと寂しいけど、いつだって会いに行ける。

だってボクはバイク乗りだから。

キックペダルを蹴飛ばす。エンジンが震え、マフラーが白煙を吐き出す。

二、三回アクセルを吹かし冷えたエンジンを温める。

宙を舞うオートループの焦げた匂い。旅立ちの匂いだ。

クラッチを握りシフトペダルを踏み込む。アクセルを吹かす。エンジンが唸る。

ウインカーを出す。クラッチを離す。

進み出す車体、離れていく綾乃。ミラー越しに映る姿に手を振る。

「あんま来るの遅いとこっちから行っちゃうからなー！」

エンジン音に紛れて聞こえた言葉に向けて、もつと大きく手を振る。

道路を走る。さあ帰ろう。ボクの街へ。

「はい、これ浜松のお土産」

あの騒がしい旅が終わり、一夜明けた月曜日。ボクはさつそく浜松でのお土産を野クルのみんなにあげていた。

「わー！ うなぎパイ！ しかもナッツ入りのやつだ！」

「へえ、うなぎパイってそないな種類もあるんか」

「これすっごい美味しいんだよねー ありがと双葉ちゃん！」

「綾乃に各務原さんの好物だつて聞いて買ってきたんだ。喜んでくれたみたいだよ。よかったよ」

「ちゃんと各務原さん対策で24個入りのを買ってきた。これできつと大丈夫なはずだ。」

志摩さんと斉藤さん用のも買ったせいだけでけっこうな出費になってしまったけど、各務原さんのすごく嬉しそうな笑顔が見れたから別にいいか。

「綾乃つてロリ子が送ってきた写真に写ってた子だよな」

「うん！ 土岐綾乃ちゃんつていうんだ。わたしの幼馴染なの」

「すっごいいい子だったよ。一緒に餃子食べたり温泉入ったり、ほんと楽しかったな」

あの夜食べた餃子は本当に美味しかった。思い出したらまた食べたくなってきた。

「ええなー しっかり旅してて。うちらもそろそろ冬キャンせんとなあ」

「だよなー もう部員も四人になったんだし、キャンプしたいよな」

キャンプかあ。ボクはどうしようかな。貯金はあるけど無駄遣いできるほどあるわけじゃないし……

やっぱバイトしないとダメかなあ。しょうがない、探すか。

うう、働きたくないでござる。

「ボクはまた綾乃とツーリングにでも行きたいなあ。あの子のバイクすごいかったいい

んだよね」

「綾乃……綾乃……」

いつの間にかうなぎパイを食べていた各務原さんの食べる手が止まり、何か考え込むようにブツブツ呟きだした。

というかうなぎパイもう四個目か。早いな。

「双葉ちゃん！」

「な、なに？ 各務原さん」

うなぎパイを食べていた各務原さんが突然顔を覗き込んできて、ボクは驚いた。

「わたし、なでしこだよ！」

「うん、知ってるけど」

いきなりどうしたんだろう。各務原なでしこ、さすがに部員のフルネームくらいは覚えてる。

クラスメイトの名前？ なんのことかわからないなあ。

「だ、か、ら！ なでしこ、だよ！」

ムスツとした表情で繰り返す各務原さん。だから知ってるって。いったいどうしたんだろう。

疑問に思っていると、横から袖を引っ張られた。振り向くと、犬山さんがボクに向

かつて小さく手招きをしていた。
なんだろう。

「双葉ちゃん、たぶん名前前で呼んでほしいんやと思うで」

犬山さんの耳打ちにボクは全ての謎が解けた。

そういえばボクはずっと綾乃のことを呼び捨てにしていた。対する各務原さんはずっと苗字のままだ。

ボクにとっては当たり前のことだけど、考えてみればちよつとよそよそしいかもしれない。
ない。

どうしよう。名前でも呼んじやってもいいのかな？

「むー」

各務原さんは相変わらずうなぎパイを食べながら、表情だけムスツとさせてボクを見ている。

ええい！ もうどうにでもなれ！

「な、なでしー」

恥ずかしさを押し除け各務原さん改めなでしこの名を呼ぶ。なでしこの目が見開く。

「ふ、双葉ちゃん、わたしの名前！」

一瞬だけ驚いたように口を開き、少ししてまるで花が咲いたようになでしこの顔が笑

顔になった。

「つて、呼んでもいいかな？」

うう、自分から言うつてこんなに恥ずかしいのか。顔が熱いのは暖房のせいじゃないだろう。

「うん……うん！ いいに決まってるよ！ 双葉ちゃん！」

満面の笑みのなでしこが一気に距離を詰めてくる。ちよ、ち、近いつて！

「な、なに？ なでしこ！」

「これから、よろしくね！」

名前を呼ぶ。ただそれだけのことなのに、離れていた距離がぐつと近くなった気がした。

心がポカポカと暖かくなっていく。なんか、遠慮していたボクが馬鹿みたいだ。

そんな時だった。

「じいー」

ふと、横からそんな声が聞こえた。

振り向く。犬山さんと大垣さんが、なんか表現しづらい目でボクをじいっと見つめていた。

「ど、どうしたの？ 二人とも」

なんか怖いんだけど。え、ボク何かしちやった？

「別に、なんでもないで。お土産ありがとうなー」

じゃあなんでそんな冷凍イカみたいな目で見てくるんですか？

「ああ、別に気にすんな。うなぎパイ、もらつとくぞ」

いや、そんな筆舌につくしがたい表情でうなぎパイ食べながら言われても……

「犬山さん？ 大垣さん？」

二人とも無言で食べてないでなにか言つてよ！ サクサクサクサク怖いって！

そ、そうだ。なでしこ！ なでしこに助けを求めよう！

「な、なでし——」

「やっぱうなぎパイはナッツ入りだよね〜！」

ダメだ聞いちやいねえ。

もしかして、名前で呼べるなやつなの？

え、今になって？ って言ったら何されるかわからないからやめておこう。

ああもうしようがない！ 一人呼んだら二人も三人も変わらないよ！

「あ、あおい、ち、千明……」

二人の名を読んだ瞬間。張り詰めていた空気が霧散した。こ、怖かった。

「うむ、よろしい」

「名前で呼ぶだけなのに、えらい時間かかったなあ」

感慨深げにそういう二人。もしかして、ボクが名前で呼ぶのをずっと待っていていたのかもしれない。

ちよつと悪いことしちゃったかなあ。これから気をつけよう。

「とりあえず、うなぎパイでも食べよっかな」

気を取り直すために箱に手を伸ばす。どんな味がするんだろう。楽しみだな。

「あれ？」

けれど、ボクの指先は箱の底を虚しくつつくだけに終わった。

箱を見る。中はすでに空だった。おかしいな、さつき開けたばかりなんだけど……

「あっ」

もしかして……なでしこのほうを見る。そこには残酷な真実が待っていた。

「ん？ どうしたの双葉ちゃん」

きよとんとした顔でボクを見るなでしこ。足元には無数のうなぎパイの空袋！

導かれる結論はただ一つ。

「え、もう全部食べちゃったの？」

「えへへ、美味しくてつい」

あのボク食べてないんだけど。なでしこ恐るべし！

「おいしかったー！ 双葉ちゃん、ありがとう！」

……まあ、喜んでくれたならそれでいいか。

別に食べたかったかと思っただけ。思っただけでいい！

5話 ナビタイム ツーリングサポーター プレミアム
 コース 月額400円(税込)

5-1

赤石山脈と富士山に挟まれた国道52号線、富士川街道をビーチちゃんでもトコトコと走る。

枯葉色に染まる山脈。古ぼけた民家と田園。やけにスピードの遅い軽トラ。

こういう絵に描いたような田舎道は走っていて気持ちがいい。

神奈川や東京には何度か行ってみたことがあるけど、しよつちゅう渋滞するし路駐は多いし信号は多いしで、走っていて全然気分がよくなかった。

やっぱりバイクで走るならこういう田舎道にかぎる。

景色を眺めながらしばらく流し、やけに特徴的な形をしている上沢交差点を右折、国道300号線、本栖みちに入る。

300号をさらに進み、下部温泉駅をパス。常葉川を横断し枯れ木の山道を登つていくと、目的の一軒家が見えてきた。

ギアを下げ、ウインカーを出しながら一軒家に寄せる。

エンジンを止めてヘルメットを脱ぐ。

「よ、よし、い、行くぞ」

油の切れたチェーンのように、ぎこちない足取りで一軒家の玄関に向かう。

インターホンの表札に目が留まった。

「志摩……やっぱここなんだ」

表札に書かれた苗字に緊張が走る。そう、ここは志摩さんの家。

この玄関の先には志摩さんと志摩さんの家族がいるのだ。

「ど、どうしよう……」

インターホンの前でどうしていいかわからず立ち尽くす。はたから見たら完全に不審者だ。

うーん、この安定のクソザコムーブ。我ながら惚れ惚れしちゃうね。

そもそもどうしてこんなことになったのか、それは一通のラインから始まる。

リン：双葉、ちよつと頼みたいことがあるんだけど、今度の日曜って大丈夫？

双葉：うん、大丈夫だよ。どうしたの？

リン：前に言つてた原付なんだけどき、この前免許取つたんだよね。

リン：それで、双葉のことうちの親に話したら、慣れるまで一緒に走つてもらつたほうがいいんじゃないかってなつちやつて

リン：わたしは一人でも平氣つて言つたんだけど、お母さんがどうしてもつて聞かなくてさ。

双葉：それはたぶん志摩さんのお母さんが正しいと思うよ。わかつた。日曜日だね。

何時くらいがいい？

リン：1時くらいでいいかな？

双葉：わかつた。1時だね。

リン：ほんとごめん、ありがとう。

双葉：りよーかい！ ボクに、任しておいて！

とまあ、調子に乗つて引き受けた結果がこのザマである。

けれど、よくよく考えてみたら、つい最近まで友達ゼロ人できるかなを地で行つてい

たボクに、人の家にお邪魔する経験なんてあるわけがなかった。

レストランすらオープンな店がまえじやないと入れないのに、同級生の家なんて入れるわけがない。

だけど、引き受けたのに恥ずかしいから帰りますなんてもつとできるわけがない。

だから行くしかないんだけど、ないんだけど！

「どうしよ。ほんとにどうしよ……」

玄関の前で目をギョロギョロと動かしどうにかしようとして頑張るボク。

憎い！ 自分のクソザコっぷりが憎い！

「と、とりあえずベルを鳴らせ——」

意気込んだ瞬間、目の前のドアがガチャリと音を立てて開いた。

「ぴゃあ?！」

わけのわからないゆるキャラみたいな奇声をあげて飛び跳ねるボクを他所に、ドアの向こうから男の人が出てきた。

や、やばい！ 家族の人出てきちゃった！

「こんにちは、うちに何かようですか?」

「こ、こは冷静に、名前と目的を言わないと。」

「あ、あのあの、ぼ、わたし、あ、怪しいものじゃなくて、し、志摩リンさんにたのたの、

たのまれて」

どうみてもただの不審者です。本当にありがとうございます。

何がたのたの頼まれてだよ。ふざけてんの？

「ああ！ もしかして君がリンの言っていた双葉さんかい？」

でも、男の人はボクがなんのためにきたのかを理解してくれたようだった。

「あ、ひゃ、ひゃい！ そ、そうです！」

そのチャンスを逃さず首を猛烈な勢いで振る。よかった、通じてくれた。

「今日は日曜なのにわざわざきてくれてありがとう。今リンを呼んでくるよ。さ、上がって」

よかった、いい人そうだな。たぶん志摩さんのお父さんなんだろうけど、すごく若々しいな。

「あ、あの、ば、バイク路肩に置きっぱなしで、停めさせてもらってもいいですか？」

「ああ、それなら玄関の前に適当に停めといてくれてかまわないよ」

「わ、わかりました。ありがとうございます」

志摩さんのお父さん（仮）の言葉に従い路肩に停めていたピーちゃんを玄関の前に持っていく。

「リンからは聞いていたけど、すごいのに乗ってるんだね」

「わっ！」

突然かけられた声にびっくりとする。

振り返ると、もう家の中に戻っていると思っていた志摩さんパパがボクのビーちゃんを珍しそうに眺めていた。

「あ、驚かしてしまつてごめんね。黄色ナンバー、つてことは原付か。にしてはけっこう大きいんだなあ」

興味深そうにビーちゃんを眺める志摩さんパパ。その目は娘の志摩さんにそっくりだった。

この人が志摩さんのお父さんで間違い無いだろう。

「き、気になりますか？」

あまりにも興味津々といった感じだったので、勇気を出して話を振ってみる。

「うん、そうだね。これ、ヤマハの古いビジネスバイクだよ。こういうタイプのバイクを見るのはこれが初めてだよ。さつき家の中でエンジンの音が聞こえてきたんだけど、もしかして2サイクルかい？」

心なしか食いつきがいい気がする。

前に志摩さんのお父さんもバイクに乗っていたと言っていたし、もしかして好きなのかな。

「というか娘さん呼びにいかなくていいのかな。まいつか。

「はい、一応。珍しいですか?」

「僕がバイクに乗り始めたころには4サイクルが主流で、2サイクルは規制でほとんどなくなつてしまつたからね。やっぱりパワーはすごいのかい?」

「そういえばそうだった気がする。2ストなんて90年代には原付を除いてほとんど全滅状態だったらしい、乗つたことがなくても不思議じゃないのか。」

「はい、出だしは遅いですけど、6000回転あたりからの加速はすごいです。70は出せません。でも、これでもトルクが余つてる感じなんで、リアのスプロケット替えればもつと出せるかもしれません」

「けど、それをするとか坂道で死ぬからやろうとは思わない。」

「マフラーを抜けば良いものに変えてキャブレターをいじれば解決するかもしれないけど、そこまでするほど速度に飢えていない。」

「70! それでも余裕があるつてことは、やっぱり昔の原付はすごいんだね。これは何年のモデルなのかな?」

「99年です」

「ということとは、双葉さんやリンよりも歳上になるのか。乗るのは大変じゃないかい?」
「たしかに、気を抜くとすぐエンストするし、低速だとギアが抜けたりするんで面倒です

けど、一度走り出してしまえば素直な子ですよ」

人見知りのボクにしては珍しく饒舌だ。

これも全て、あいつ、バイクのことになると早口になるよな現象のおかげだ。なお、話題が尽きるとコミュ障に戻るもよう。

なんか、自分で言っていて悲しくなってきた。

「そうなんだ。やあ、古いバイクっていうのはなかなかいいものだね。みたところ細かいパーツ弄って——」

盛り上がるボクたち。けれど、それは長くは続かなかった。

「お父さん、何してんの?」

突如現れた第三者の声。ぎよつとして玄関の方向に顔を向ける。

なにしてんだと言いたげな志摩さんが、ボクたちをじとーつと睨んでいた。

「あ、志摩さん」

「ほんとに来てくれたんだ。ありがとう」

ごく短いやり取りを終え、志摩さんが志摩さんパパに顔を向ける。

「ああ、リン下りてきてたんだね」

「下でずつと話してたら普通に気づくよ。ていうか、娘差し置いて娘の友達とバイク談義で盛り上がるとか、ちょっとどうかと思うわ」

容赦のない一言。自分の娘にこれ言われたらかなりへこみそうだ。

「リン、これはだね——」

「もういいから双葉連れて家上がりなよ。外寒いでしょ」

クリティカルヒットして焦る志摩さん。パパの弁明をばつさり切り捨て、中に入るように指図する志摩さん。

従わない理由もないため、弱々しくうなづくボクたち。

「あ、あはは、なんかごめんね双葉さん」

「は、はい」

志摩さん。パパのしよんぼりとした背中についていく。

そういえば、さつき志摩さんボクのこと友達って、言っていたような……

こうして、ボクの初めての同級生の家への訪問が始まった。

「これが志摩さんの言ってた原付か」

志摩さんの家でお茶をもらったりしてゆっくりしたあと、ボクは志摩さんと一緒に一台の原付と対峙していた。

ヤマハ・ビーノ、街でよく見かける原付スクーターだ。パステルブルーの車体と大き

な丸目ライトがなんとも可愛らしい。

「去年お父さんが家で使うために買ったんだけど、全然乗らないからわたし専用になった」

いいなあ、ボクにも誰かピカピカの旧車プレゼントしてくれないかな。もちろん２ストで。

「乗ったことはあるの？」

「免許取ったあと家の前の道何往復かしたけど、それだけ。大通りとかはまだ走ったことない」

ということとはほとんど初見ということになるのか。なら付き添いがいないとちよつと危ないかもしれない。

ボクも初めて公道にでたとき交差点でエンストさせて死ぬかと思った。あの時誰かが一緒に走ってくれていたらどれだけ安心だったことか。

「じゃあ、練習も兼ねて甲府くらいまで行ってみる？ 道もほとんどまつすぐだしそんなに難しくはないと思う」

距離にしてください30キロくらい。初めてにしては少し遠い気もするけど、慣れるにはこれくらいがちょうどいい。

「双葉に任せる。わたしはついていけばいいんだよね？」

「うん、ゆつくり行くからそれについていくだけでいいよ。自転車で走ると全然違うから、初めは戸惑うとおもうけど、焦らず教わったとおりに運転すればだんだん慣れていくから」

バイクは理屈で運転する乗り物じゃない。身体で動かす乗り物だ。だから、少しでもうまくなりたかったらどんどん乗るしかないのだ。

「スクーターだからトラブルもあんまり起きないだろうけど、なにかあつたらウインカー出してすぐ路肩に寄せてね」

「わかった」

「じゃ、行こっか」

志摩さんがヘルメットを被り、ビーノに跨った。

右グリップについているセルスイッチを押すとセルモーターがピストンを回してエンジンに火が入る。

マフラーがとことと透明な煙を吐き出す。4ストの原付らしい大人しいエンジン音だ。

ボクも行こう。

ヘルメットとゴーグルを身につけてシートに跨る。チョークを引き、体重をかけてキックペダルを蹴り飛ばす。

アクセルを吹かす。エンジンが独特な金属音のような唸り声をあげ、オートループの白煙があたりに立ち込める。

「お父さん、行ってくる」

志摩さんが後ろでボクたちのことを静かに見守っていた志摩さんパパ改め涉さんに出発を告げる。

「うん、気をつけるんだよ。母さんも、もう少ししたら帰ってくるらしいから、あとで電話でもしてあげなさい。けっこう心配してるみたいだからね」

「わかった」

話し終えた涉さんがボクのほうにやってくる。

「すまないね、娘を頼むよ」

「はい！ 任せてください」

「うん、よろしくね」

会話を終え、志摩さんに手で合図を出す。

クラッチを握りギアを上げ、ウィンカーを出す。ミラーに映る志摩さんのビーノが、少し遅れて同じようにウィンカーを出した。

アクセルを吹かし半クラッチでゆっくりと前進。左右確認、車、自転車、歩行者なし。よし、行こう。

クラッチを離す。進み出す車体。今日は先導だからいつもよりもかなり遅くバイクを走らせる。

ミラーで志摩さんがちゃんとついてきていることを確認しギアを上げる。

志摩さんの初めてのツーリング。少しでも楽しんでもらえるように頑張ろう。

枯れ木の野山と古ぼけた民家がおりなす田舎道。

2ストロークと4ストロークのバイクがトコトコと音を立て走っていく。

3速で時速30キロ前後をキープするようにスロットルを調節する。

本当は4速でもう少しスピードを出したいところだけど、それはまずバイクという乗り物に慣れてからの話になるだろう。

前方に信号、黄色信号だ。ブレーキペダルを踏んで減速しつつギアを下げっていく。

2速、1速と落としていき停止線ギリギリでフロントブレーキをかけ停車。

アイドリングを安定させるために空吹かししてからニュートラル。後ろにいる志摩さんに顔を向ける。

「志摩さん！ 大丈夫？」

ヘルメットとエンジン音で音が聞き取りにくくなるので、なるべく大きな声で話しか

ける。

「うん、大丈夫」

「ごめん、なんて!?!」

うーん、やっぱり聞き取りづらい。インカムあれば解決するんだけど、そんなもの
ポッチが持つてるわけないしなあ。

「大丈夫!!」

よかった。大丈夫みたいだ。

走ってる時もミラーでちよくちよく見てたけど、走り出しでたまにフラつく以外とく
におかしなところはなかった。

道がまっすぐっていうのもあるだろうけど、志摩さんのセンスもいいのだろう。

視線を戻しメーターを見る。燃料計の針がもう底をつきかけていた。これはガソリ
ン入れなきやダメだな。

もう一度志摩さんに向き直る。

「ガソリンなくなりそうだから!! この先のスタンド寄るね!!」

「わかった!!」

はたからみたら怒鳴りあっているように聞こえるかもしれないけど、バイクに乗って
いる時は怒鳴るくらい大きな声じゃないと本当に通じない。

比較的エンジン音の大人しい原付でこれなんだから、大型バイクなんか生の声じやど
うやつても聞き取れないだろう。

そうこうしているうちに向かい側の信号が黄色に変わった。

志摩さんに手で発進の合図をしてクラッチを握りギアを上げる。

アクセルを吹かし発進の準備をする。エンジンが唸りマフラーが白煙を噴き出す。

あまり行儀がいい行為とは言えないけど、アイドリングから急発進すると回転数が足
りなくて最悪エンストしちゃうから仕方ない。

青信号、スロットルを回しながらクラッチを離す。ゆっくりと加速していく車体。

走りながらタンク下の燃料コックをリザーブ側に捻り、予備の燃料に切り替える。こ
れであと2リットル分は走れる。

さて、志摩さんの様子はどうかかと。

「あっー！」

ミラーには、トラックに滅茶苦茶煽られている志摩さんの姿が映っていた！

まずい、あれは日本国原産暴走トラックだ！

あいつらに制限速度の概念はない。40キロのところだつて70キロで走る。とく
に田舎道のトラックはやばい。殺意がみなぎっている。

減速しながらウインカーを出して路肩に寄せる。

ミラーに映る志摩さんも同じように寄せている。心なしか顔が慌てているように見える。

ボクたちが端に寄せた瞬間、トラックが反対車線にはみ出しながら猛スピードで抜いていった。

「ふう、よかつた……」

タイヤで飛び散った砂つぶがボクの頬に当たる。うえ、痛い。

向こうも仕事で急いでいるとはいえ、もう少し優しくしてほしい。まったく、日本人は急ぎすぎなんだよ。

志摩さんのことも気になるし、この先のスタンドで一旦休憩するか。

「レギュラーマンタンゲンキンデー」

数分してたどり着いたスタンドで、店員に向かってガソリンを入れるための呪文を唱えバイクを降りる。

志摩さんはガソリンを入れる必要がないのか目につく範囲にはいない。トイレにでも行っているのかな。

「653円でーす」

「あ、はい」

そうこうしているうちにガソリンを入れ終えた店員にお札を渡し釣り銭を受け取る。こういう時、小銭も渡せば釣り銭減るのに何故かいつも忘れちゃうんだよねえ。おかげで小銭ばっか増えていく。

エンジンをかけて、スタンドの出口付近に停めている志摩さんのビーノの隣に寄せる。

あ、オイルランプ点灯してるじゃん。補充しないと。

エンジンを切ってサイドバッグからエンジンオイルと使い捨てのノズル取り出す。

右側にあるYB—1のエンブレムが刻まれたオイルタンクのネジを外す。

ガコツとフレームにはめ込まれていた台形型のオイルタンクが外れ、キャップに覆われた給油口が顔を覗かせた。

キャップを外し、タンクの中に青緑のオイルを注いでいく。

「何してんの?」

いつの間にか戻ってきていたらしい志摩さんが後ろから質問してきた。たしかに4スト乗りには見慣れない光景だろう。

「オイルの補充だよ」

「交換とかじゃないんだ」

「うん、ボクのバイクは志摩さんのビーノと違って、2スト……ガソリンと一緒にエンジンオイルも燃やすから、定期的にオイル継ぎ足さないといけないんだよね」

「ああ、だから走ってる時マフラーからあんなに煙出てたんだ」

「そうなんだよね。だから後ろ走る時服にオイルつくかもしれないからちよつと気をつけてね。まあ今くらい離れてれば大丈夫だよ」

「りよーかい、あとこれ」

オイルの補充と後始末を終えて振り向くと、志摩さんが手に持っていた何かを差し出してきた。ココアだ。

「え、いいの?」

「一緒に走ってくれたし、お礼ってほどじゃないけど」

そういうことなら断る理由もない。ありがたく受け取るために手を伸ばす。

「ありが——」

「1300円」

手を引つ込める。まさかの十倍!?

「うそだよ」

ほっ、よかった。

真顔で言われると冗談に聞こえないからやめてほしい。礼を言って今度こそココア

を受け取る。

「それで、初めての運転はどうだった？」

ココアを飲みながらたずねる。志摩さんは楽しんでいるとも、緊張しているともとれる表情で口を開いた。

「うん、やっぱり自転車と全然違うね。スピードも姿勢も違うし、トラック煽ってきてめちゃ怖かったし。双葉いなかったらやばかったかも」

「やっぱりあれ怖いよね。夜とか走る時はもつと気をつけてね、あれよりやばいから」

ボクはトラックにいい思い出がない。思い出すのは夜中の峠道。

真つ暗でまったく見通しが効かないのに平気で煽ってきた時は死ぬかと思った。

「マジか、トラックおっかねえ」

「でも、楽しいでしょ？」

トラック怖いと話す志摩さんの口元は、口ぶりと反してわかりやすいくらいに緩んでいた。

「うん、なんかうまく説明できないんだけど、めっちゃ楽しかった」

ボクはその気持ちがよくわかった。

まだ車の免許を取れないボクたちにとって、バイクというのは生まれて初めて経験する自分の力以外で動く乗り物だ。

スロットルを回すだけで進んでいく景色。

自転車とは比較にもならない風圧とスピード。

歩きで何十分もかかる場所にたった数分で行ける感動。

唸るエンジン、煙を噴くマフラー、ハンドル越しに感じるピストンの鼓動。

空も土も太陽も、まるでパステルクレヨンで塗られたように色づいて、自分が何倍に

も何十倍にも大きくなったような全能感。

これを知ってしまえば、前の自分には戻れない。

「やばいでしょ?」

「うん、これやばい。ハマるかも」

あの志摩さんが珍しくニヤニヤしている。だけど当然だ。バイクは楽しいのだ。

「だよね、やばいよね。ボクも初めて乗った時テンション上がりすぎて新潟まで行っ

ちやったよ」

「いや、それはわからない」

あ、やっぱりそれはだめか。なんとなく素質ありそうな気がするんだけどなあ。

「でも、双葉がバイク好きな理由はわかった気がする」

そう言って志摩さんは微笑んだ。どうやら、バイクの楽しさは十分に伝わったみたい

だ。ならそれでいい。

「これからどうする?」

志摩さんの家からここまでだいたい10キロ。帰りも含めれば20キロは走ったことになる。

個人的には、もう少し交差点の経験を積んだほうがいいと思うけど、初めての運転としては十分な距離だろう。

「せっかくだしもうちよつと走りたいかな。まだカーブとか全然走ってないし」

「じゃあ予定通り甲府まで行っちゃおうか」

「そうだね」

ココアを飲み干しヘルメットを被る。志摩さんも同じようにヘルメットを被った。

「双葉、甲府着いたらカリブー寄っていい?」

「アウトドアのお店だっけ? わかった。ちよつと待ってて、ナビ出すから」

ポケットからスマホを取り出しバイク専用のナビアプリで甲府のカリブーに目的地を設定する。

スマホをポケットにしまい、ヘルメットの隙間から無線式のイヤホンを左耳にねじ込んで準備完了だ。

「なんでイヤホン? あ、そっか、音声案内か」

「こうすれば画面見なくても道わかるでしょ。充電も全然使わないしけっこうおすすめ

だよ」

「へえ、ナビはやっぱグーグル?」

「ううん、バイク専用のアプリ。お金かかるけど、グーグルみたいに変なルート案内しないし、原付で走れる道も案内してくれるからすごい使いやすいんだ」

初めのころグーグルの案内に従って走っていたら、まんまとバイパスに案内されて死にかけて。

突然原付侵入禁止の標識が現れて、あれ?と思つた瞬間には制限速度がいきなり80キロになった時の恐怖は今でも頭に焼き付いている。

もつと手前で出してくれないとわかんないって。

それ以来、ボクは多少お金がかかってもちゃんとしたナビを使うようにしている。でないといつか冗談抜きで死ぬ。

「いいなそれ、あとで詳しく教えてくれない?」

「いいよ。でも、今はとりあえず甲府行こつか」

お互いにバイクに跨りエンジンをかけ道路に繰り出す。

ミラーに映る志摩さんは、出発したばかりのころとは比べものにならないくらい運転がスムーズになっていた。

昼過ぎの国道52号。二台のヤマハが駆け抜けていく。

冷たい風が吹き荒ぶ。秋はますます寒さを増していた。

「へえ、ここがカリブーか。なんか雰囲気あるね」

走り続けること約20キロ。ボクたちはついに目的のお店にたどり着いた。

ヘルメットを脱いでお店を眺める。ログハウスのような店構えがいかにアウトドアって感じでいい。

「志摩さん、大丈夫？ 足とかついたりしてない？」

シートのメットインにヘルメットをしまっていた志摩さんに体調をうかがう。

志摩さんのお父さんから頼まれている以上、適当にやるわけにはいかないのだ。

「なんともないけど、なんで足？」

「バイクって、ようはずつと座りっぱなしでしょ？ だから疲れてたりすると、突然ついたりするんだよね」

ふとした拍子に激痛が走ってパニック、なんてのは長距離ツーリングでは珍しくない。慣れないうちはとくにだ。

「今はなんともないかな。にしても原付ってけっこう疲れるんだね。スクーターだからもっと楽かと思ってた」

「ずっと風が身体にあたってるから意外と体力使うんだよね。ハンドルにつけるスクリーンとかあれば、もっと楽になると思うよ」

ボクも一時期ヘッドライトにバイザーを付けようかと考えた時期があったけど、装着した写真をネットで見たら絶望的に似合わなかったので諦めた。

やつぱ見た目は大事だよ。見た目は。

「ま、とりあえず寒いしお店入ろうよ。ボクここ初めてだから案内してもらってもいい？」

「うん、って言ってもわたしもここは初めてだけどね。いつもは身延のほう行ってるし」
そんな他愛もない話をしながらボクたちは店の中に入る。

真つ先に視界に飛び込んだのは、見渡すかぎりのアウトドア用品と、一匹の大きな黒い犬だった。

スタツフの飼い犬かなんかだろうか、暖房が効いている店内でゴロンと横になっていて可愛い。

「お、わんこだ」

志摩さんが犬に近づくと、犬が起き上がって近づいていった。ずいぶんと人懐っこい

犬だ。

「ふっ、めんこいやつめ」

慣れた様子で犬を撫でている志摩さんの顔は犬に負けないくらい綻んでいた。

「犬、好きなの？」

「斉藤がちくわ……斉藤が飼ってるチワワの写真送りまくってきて、気づいたら好きになつてた」

へえ、あのチワワ、ちくわつていうんだ。かわいいなあ。一回会つてみたいなあ。

「あいつ、都合悪くなるとすぐちくわのふりするんだよなあ」

「なんか、志摩さんつて、斉藤さんとほんと仲良いね」

何度か二人のやりとりは見てきたけど、まったくつていうほど遠慮がなかった。

たぶん、お互いの性格とか、生き方とか、そういうものを知り尽くしているからなんだろう。

「別に、あいつはただの腐れ縁つていうか……まあ、いい奴ではあるけど」

口ではそう言っているけども、志摩さんにとつて斉藤さんが気の置けない存在なのは想像に難くない。

なんていうか、うらやましい。ボクにもこういう友達がいたらよかつたのになあ。

「ガス缶見てくるけど、双葉はどうする？」

「ボクはこういうところ初めてだし色々見てこようかな。終わったたら呼んでよ」
「わかった。じゃ、終わったたら呼ぶね。あばよ、わんこよ」

犬をひと撫でして、志摩さんは店の奥に消えていった。さて、ボクはどうしようかな。
まずは――

「な、撫でてもいいかな」

もふもふ成分を補充しようと、犬にそつと手を伸ばす。

「ちよつとだけ、ちよつとだけだからね。噛んだりしないでね」

がしかし、手が触れる寸前、犬がボクから一步距離をとった。

「あれ?」

志摩さんは簡単に撫でていたのにどうしてだろう。もう一度手を伸ばす。

願い虚しく中を掴む手。

「あつ」

思い出した。そういえば、さつきガソリンスタンドでココア飲んでたっけ。

犬にとつてチヨコレートは毒。つまり犬にとつてボクは毒物の塊でしかないというわけだ。

「がーん……」

膝をつき項垂れる。もういいや、店見て回ろう。

おぼつかない足どりで歩き出すボク。その姿を犬が興味なさそうに眺めていた。次会ったら思いきりわしやわしやしてやるからなー覚悟しとけよー

「モンベル、コールマン、スノーピーク……うわあ、ブランドばっかだ」

陳列されているテントを見て回る。当たり前だけど、商品はどれもブランド品ばかりだ。

「これが4万、こっちが……うわ、6万」

アウトドア用品が高いのは知っていたけど、こうして面と向かって値札を見ると、卒倒しそうな値段だ。

「あ、いた」

声がして振り向くと、レジ袋を携えた志摩さんがいた。用事はもう終わったらしい。

「終わったよ」

言葉のとおり、レジ袋にはガス缶が詰められていた。前に本栖湖で使っていたバーナーで使うんだろうか。

「テント見てたの？」

「うん、ちよっと気になってね。ボク使ったことないんだよね」

「使わないって、じゃあ旅先でどうやって寝てんの？」

野宿していることは知っているはずだけど、テントを使わないとは思っていなかったらしい。

「普通に寝袋とマットだけだけど」

そう言うのと、志摩さんの目が信じられないものをみるような目に変わった。うん、いつものリアクションだ。

「マジか……寒くないの？」

「風と保温だけしつかりしておけば、意外となんとかなるよ。あとは気合」

個人的にこれが一番大事だと思っている。中途半端に暖かい家に未練があるから気になって眠れなくなるのだ。

家が火事になって焼け出されたくらいの気概でいけば人間、どこでだって眠れる。

「最初は寒くて眠れないこともあったけど、今はとくにそういうものもないかな。たぶん慣れちゃったんだろうね」

「前から思ってたけど、なんていうかたくましいよね。双葉って」

突然の言葉にボクは目を丸くした。

野宿なんて言うなれば痩せ我慢だ。すごいことでもなんでもない。

ボクなんかよりも、一人でテントを立てて焚き火を起こす志摩さんのほうがよっぽど

すごいと思う。

「わたしだったら外で寝るとか絶対無理だな。怖いし」

街灯すらないキャンプ場のほうがよっぽど怖い気がするけど、きつとこれは考え方の違いなんだろう。

「ほんと、わたしよりもちっこいのに、よくやるよ」

「お、同じくらいだと思うけどなあ……」

密かに気にしていることを言われ動揺する。

頭のお団子でかさ増ししてるだけで、髪を下ろしている今ならボクのほうが大きいはず！

……きつと、たぶん、めいびー

「ふうん、じゃあ比べてみる？」

ちよつとだけむつとした顔の志摩さんが、ボクの目と鼻の先に立った。

そしてむつとした表情のまま手を自分の頭の上に乗せ、ゆつくりボクへとスライドさせていく。

伸ばした手が、ボクの髪をそつと撫でて、そのまま奥へと去っていった。

「なっ……」

「ふっ、勝ったな」

ニヤリと勝ち誇る志摩さん。むむ、ちよつとカチンときたぞ！

「もう一回！ もう一回勝負！ 今度はボクがやる！」

わずかな望みに賭けて、自分の頭に手を乗せ、志摩さんに向けてスライド。

「ぜえーったいボクのほうが大きいもんね！」

けど、現実にはボクに優しくなかった。

伸ばした手が、志摩さんのおでこの上のほうにぶつかって止まった。

止まってしまった。

「……ふっ」

暖房で暖められた額の温い感触が手に伝わる。志摩さんが悪い顔でニヤリと笑った。

「そ、そんなあ……」

力が抜けて、ヘナヘナと床に膝をつく。ずっとボクのほうが大きいと思ってたのに

……

学年最小じゃないことだけが、唯一の取り柄だったのに……

「ま、元氣だしなって。いつか伸びるから……たぶん」

たぶんはいらなかったなあ。あと勝ち誇ったみたいに頭ポンポンするのやめてくだ

さい。

「もう帰るっ？」

「……うん」

差し出された手を取ってお店を後にするボクたち。これじゃまるで姉と妹みたいじゃないか。

おかしいな、さつきまでいい感じに先輩風吹かせてたはずなんだけどなあ……

県道104号線、和田峠。きついヘアピンの連続をエンジンを唸らせながら登っている。ミラーをチラリと見ると、すごい量の白煙が、まるで飛行機雲のように尾を引いている。

2ストの宿命とはいえこの光景は心臓が悪い。

ミラーに写っている志摩さんも心なしか距離が離れている気がする。服にオイルついたらたまつたもんじやないしね。

大きな赤い減速帯のあるカーブの先に目的地が見えてきた。ウィンカーを出して対向車が来ないか確認しバイクを止める。

「ふう、やっとついた」

ゴーグルとヘルメットを脱ぎ、眼下に広がる街を眺める。

「……すげえ」

隣の志摩さんがボソリと呟いた。

和田峠、みはらし広場。ツーリングのしめにボクが選んだお気に入りの場所だ。

澄み渡ったオレンジに染まる甲府盆地。

南東の山脈の向こうには、雪を被ったが富士山がまるで砂糖化粧をほどこされたチョコレートケーキのように佇んでいた。

遠くの空で飛行機が尾を引いて飛んでいた。

「綺麗でしょ。ここお気に入りの場所なんだ」

「うん……あ、そうだ。一緒に写真取っていい？」

断る理由もないので、甲府盆地をバックにスマホをかかげる志摩さんに近寄る。

「双葉、もうちよつとこっち」

スマホの画面に納めようと無理しているせいで、顔がくつつきそうになる。

「ちよ、近くない？」

「だつてこうしないと入らないし」

「横にすればいいんじゃないの？」

「あ、そっか」

が、二人とも自撮りなんてろくにできなかったことがないので、案の定グダグダになった。

まあ、志摩さん自撮りとか絶対しなさそうだもんね。

「チーズ」

パシャリ。ようやく写真を一枚撮り、画面を二人で確認する。

「双葉、目閉じてるし」

スマホには、これいじょうないってくらいに盛大に目を瞑っているボクが写っていた。

無駄にいい笑顔なのが憎たらしい。

「もう一回撮る？」

「……だね」

このあと、顔が引き攣ってるだのピンボケしてるだの、四回ほど撮り直す羽目になったボクたちなのであった。

今度自撮りの練習しておこう。なでしこあたりにも頼めばいくらでも教えてくれるだろう。

「やっと撮れた。今送るね」

「うん、ありがと」

スマホを開き、送られてきた写真を確認する。そこには、甲府をバックに、笑顔のボクたちが写っていた。

なんだ、普通にいい写真じゃん。あとで印刷して部屋に飾ろうかな。

「双葉、今日はいろいろ連れてつてくれてありがとう。今度お礼するよ」

「お、お礼なんていいよそんなの。ボクがしたくてしただけだし」

今日ボクがしたことなんてバイクで一緒に走ったくらいだ。大したことは何もしていない。

「でも、双葉いなかったら道でパニックってたかもしれないし、ほんと助かった」

「ど、どういたしまして……」

混じり気のない純粹な感謝の気持ちを伝えられ、恥ずかしさと嬉さが込み上げてくる。

耐性がないから、こういう時どうすればいいのかわからないよ。

「綺麗だね」

「うん、綺麗だね」

黙って景色を眺める。こうして無言の時間を過ごすのは、なんとというか心地よかった。

野クルでわいわいやるのも楽しいけど、こうやって静かな時間を過ごすのもやっぱり楽しい。

「前から気になってたんだけどさ、双葉はなんで旅しようと思ったの？」

ふと、志摩さんがたずねてきた。

こういうことを聞かれたのは初めてだ。そういえばどうして旅しようと思ったんだっけ。

ああ、そうだ。思い出した。

「ボク昔、ある小説にハマってたんだよね」

人に話すのは恥ずかしいから誰にも言ったことがなかったのに、気がつけばボクは口を開いていた。

「喋るバイクと女の子が旅をする話なんだけどさ」

ちなみにその小説は今でも追いかけている。早く新刊でないかな。

「その子がいろんな国に行くんだ。それがすつごくワクワクして、ボクも同じような冒険がしてみたいなって思って、気がついたらこうなってた」

ちよつと前までは、あの主人公のように何もかも捨てて旅に出たいと思っていた。

けど今は違う。心配してくれる人がいる。一緒にいて楽しい人がいる。

何も持っていないと思ってたはずなのに、気がつけば捨てられないものがたくさん増えていた。

だからボクは帰ってくる。大切な人たちがいるあの街へ。

「あ、その本わたしも読んだことあるかも。あれでしょ？ 銃撃つたりするやつ」

「志摩さんも読んだことあるんだ！ あれすつごい面白いよね」

「わたしも中学の時ハマってたっけなあ。なんか無駄にグロかった気がする」
そう言つて、はつとしたようにボクの顔を見る志摩さん。

「あれ？ そういえばあの本の主人公、自分のこと僕つて言つてたような……」
もしかして、とでも言いたいのだろう。そこに気づいてしまったか……

「双葉、もしかして……」

じとーつとボクを見る志摩さん。思わず目を逸らす。

「……ノーコメントで」

この場においてそれは答えを言っているようなものでしかない。

微妙な空気がボクたちの間に流れる。

「……まあ、いいんじゃないの？ 人それぞれだし」

なら、その間はなに？ いやまあ言いたいことはボクもわかつてるけどさ。

恥ずかしい事実を暴かれ、顔に熱が集まっていく。

そう、ボクが自分のことをボクなんておかしな呼び方をしているのは、全てあの本のせいなのだ。

しょうがないじゃん、ハマったの小学生の時だったんだもん。

「志摩さん、みんなには秘密にしてね……ほんとお願いだから」

真つ赤になった顔を隠して必死に懇願するボク。我ながら本当に情けない。
「言わないって」

顔をパチパチと叩いて、恥ずかしさでどうにかかなりそうな気を引き締める。よし、ボク復活。

時計を見る。いい時間だ。今日は十分走った。もう帰ろう。

「じゃあ、志摩さんそろそろ——」

「リンでいいよ」

帰ろうと言いかけたところで、志摩さんに遮られた。

「え?」

思わず聞き返す。正直に言うとうまく聞き取れなかったからだ。

「だ、だからリンでいいって」

聞き返されたのが恥ずかしかったのか、志摩さんの顔がちよつとだけ赤くなった。

「いいの?」

思わず聞き返す。

短い付き合いだけど、志摩さんはボクと同じで自分からいくようなタイプじゃないのはよくわかつてる。

だから志摩さんが自分からこんなことを言うなんて、少し意外だった。

しかも大して交流のないボク相手にだ。

「なでしこのことも名前呼びなんでしょ？」

「うん、なでしこが呼んでほしいって言ってきたから」

ラインか本人経由で知ったのだろうか。まあなでしこなら志摩さんに自慢していても不思議じゃないか。

けど不思議だ。斉藤さんのことを苗字呼びにしていることも含め、志摩さんはそういうの気にする人じゃないと思ってたんだけどなあ。

「あいつはもう名前呼びなのに、わたしだけ志摩さんって、なんか仲間外れみたいでやだし……今日もいろいろしてくれたし……」

本栖湖で偶然出会い、なんやかんやあって付き合いが始まったボクたち。

なでしこはともかく、ボクはせいぜい知り合い止まりだと思っていたけど、それは間違っていたのかもしれない。

「だからさ、名前がいいよ。と、友達でしょ？」

「友、達……」

言われ慣れない単語に思わず立ち尽くす。

誰かから、面と向かって友達なんて言われたのは、生まれて初めだ。うん、そうだ、初めてだ。

なんだろう、すごく、すごく嬉しい。

「……うん！　よろしくね！　リン！」

笑顔で志摩さん……リンに手を差し出す。

視界がちよつとぼやけているのはきつと眼鏡がずれているせいだ。

「……よろしく、双葉」

手を握る。手袋越しの手は、風で冷えて冷たかったけど、すごく暖かかった。

「それで、気が向いたらでいいんだけどさ、いつかキャンプ行かない？」

ふと志摩さんがそう言った。キャンプ、そうキャンプだ。

「この前までしことキャンプした時、けっこう楽しかったんだ。でも思ったんだよね。

あの時双葉もいたらもつと楽しかったんじゃないかなって……」

驚いた。あれだけソロキャンが好きだと言っていた志摩さんがそんなことを言うな

んて。

「わたしとなでしこと双葉の三人でさ、一緒に焚き火囲ってご飯食べたリラジオ聞いてのんびりしたり……」

本栖湖での出来事を思い出す。

短い時間だったけど、なんていうかすごく満たされていた気がする。綾乃の時もそう

だ。すごく楽しかった。

「一人旅も悪くないけど、キャンプだつて同じくらい楽しいと思うよ。なでしこだつてきつと大喜びするだろうし」

ずつと一人で旅をしてきた。少しくらい誰かと一緒にいるのも悪くないかもしれない。

いや、強がらなくてもいいか。今はつきりわかった。

ボクはみんなとキャンプがしたいんだ。

「どう、かな？」

不安そうにボクを見るリン。あれだけ一人旅が好きと豪語していたから、断られると思っているのだろうか。

ボクみたいなクソザコが、こんな楽しそうな誘いを断れるわけがないのにね。

「うん、やろう。キャンプ、いつか絶対！」

ボクにできる精一杯の笑顔で約束する。笑い方ならなでしこでさんざん見てきた。

「……わかった。約束」

リンがにっこりと笑った。今日一番の笑顔だった。

「うん、約束」

夕日の空、忘れられない思い出がまた一つ増える。

「帰ろっか」

「そうだね」

今から帰るとなると、家につくころにはすっかり夜になっているだろう。帰りに夕飯の材料買って帰らないとな。

「あ、そうだ、お母さんに電話しないと」

ちよつと電話すると言ってリンがスマホを取り出した。

そういえば出かける時リンのお父さんがそんなことを言っていた気がする。

「もしもしお母さん? ……今甲府、和田峠のみはらし広場つてところ……え!? おじいちゃんか? ……うん……うん……わかった、じゃあね」

電話が終わったようだ。驚いていたみたいだけど、なにがあつたんだろうか。

「リン、どうかしたの?」

ボクがたずねると、リンは困っているとも照れているともとれる表情で口を開いた。

「なんか、おじいちゃんここに来るみたい」

おじいちゃん、リンが前に話していたバイクで日本中旅して回っているっていう人か。

ここに来るって、すごい急だな。でもバイクなら難しい話じゃないか。

「おじいちゃん今甲府にいるらしくてさ、お母さんがわたしたちのこと話したら様子見に行くって言い出したみたい。わたしは待つけど、双葉はどうする?」

たしかに、もうすぐ日が暮れる時刻になる。

リンのおじいさんがどれくらいで来るのかわからないけど、待つていたら帰るころには真つ暗になっていることだろう。

でも、帰つても誰もいないしなあ。一人でご飯を食べて、一人で寝るだけ。

いつものことだけどちよつと寂しい。そう思うようになったのは、きつとみんなのおかげなんだろうな。

「どうせ暇だからボクも待つよ」

「わかった。ただ待つてるのもあれだし、ココアでも飲む？」

リンがビーノのメットインからバーナーと二つのコップを取り出す。そんなもの持つてきてたのか。

いいなあボクもほしいなあ。買っちゃおうかな。

「ありがとう。ちよつと何か飲みたかったんだ」

「うん、ちよつと待つてて」

慣れた手つきでコッヘルをバーナーにかけるリン。あつという間にココアが出来上がった

夕暮れの空の下、ココアの甘い香りのする湯気が風に流されあたりに漂う。

「あいつ、たまにわたしの髪でいたずらするんだよね。この前なんて熊つくられたし、なんだよ熊って」

甲府盆地を眺めながら他愛もない話に花を咲かせる。

「く、熊ってすごいね。それだけ長かつたらできるとは思うけどさ」

「いい加減伸びてきたし、わたしも双葉みたいに肩くらいにしようかな。風呂入る時めんどいんだよね」

「寒いからやめたほうが——」

峠の向こうから力強いエンジン音が聞こえてボクは会話を中断した。もしかして

……

「あ、おじいちゃんバイクの音だ」

ついに来たようだ。ドキドキする気持ちを抑えながら道路のほうに足を運ぶ。

「あ、来た。おーい」

コーナーの向こうから現れたバイクに向かってリングが手を振る。あれがリンのおじいさんか。

バイクはみるみるうちに近づいてきて、やがてボクたちの前で止まった。

正面からじゃわからなかったが、トライアングルのネイキッドだ。

リアに荷物を満載している。旅をしているのは本当のようだ。かつこいいな。

バイクの持ち主がエンジンを切り、バイザー付きのジェットヘルメットを脱ぐ。

「久しぶりだなリン。元気にしてたかい？」

真っ白な髪に真っ白な髭。ピンと張った背筋に切長の目筋。

渋いおじさんという概念を擬人化させたかのような人が、微笑みながらそう言った。

「うん、ひさしぶり、こつち来てたんだ」

リンの声がちよつとだけうわずつている。それだけで二人の仲が良さがうかがえた。

「たまたま古い友人に用があつたもんでね。咲から聞いたよ。バイクに乗り始めたそうじゃないか」

うわ、声まで渋い。リンのお父さんもそうだったけど、美形の家系なんだろうか。たぶんお母さんも美人なんだろうな。

「うん、原付だけどね。双葉に先導してもらつたんだ。この子が双葉、わたしの友達」

「ひゃ、ひゃい、どうも！」

リン、紹介してくれたのは嬉しいけど、唐突にボクにバトンを渡すのはやめてほしかったな。

「なるほど、君が娘の言っていたリンのお友達か」

ああ、そんな渋い顔でこつち見ないで！

初対面、それもめちやくちや渋いおじさんを前にして、ボクのクソザコメンタルが早くもキャパオーバーを起こしかけていた。

「自己紹介が遅れてすまない。リンの祖父をやっている新城肇というもんだ。今日は孫が世話になった。礼を言うよ」

そう言つて礼儀正しくお辞儀する新城さん。

渋い顔と渋い声と渋い仕草のトリプルコンボによつて、ボクのクソザコゲージが振り切れた。

「あ、あのあのー！ ぼ、わた、ボク、や、山中双葉つて言います！ きよ、今日は、ま、まことにせ、僭越ながらお孫さんと一緒に走らせていただきました！」

「……テンパリすぎだろ」

ボソツて突つ込むのやめて！ わかつてるけど！ 一言一句そのとおりだけど！

うう、このコミュ障っぷりほんとなんとかならないのかな。

「はっはっは、なかなか面白い子じゃないか。なあに、そう緊張しなくてもとつて食いやしないさ。それでどうだったかい、リンの腕前は」

威圧感など微塵も感じさせない穏和な笑みの前に、ボクのクソザコメンタルが少しだけ落ち着きを取り戻していく。

「は、初めとは思えないくらいすごく上手でびつくりしました。あれなら遠出しても全

然大丈夫だと思えます」

お世辞でもなんでもない。本当にうまかったのだ。

たぶん自転車で公道を走ることに慣れていたっていうのが大きいんだと思う。

「だそうだとぞリン。よかったじゃないか」

「う、うん、そんなに褒められるとちよつと照れるな」

リンと新城さんが話している合間、ボクの視線は新城さんが乗ってきたバイクに釘付けになっていた。

トライアンフ・スラクストン 1200R

前に雑誌で見たことがある。こんな間近で見れるなんて思ってもいなかった。

シルバーのタンク、フレームにみっしりと詰まった巨大な二気筒エンジン、排気量は脅威の1200cc。

テクノロジーとビンテージの融合、イギリスの産んだ芸術品。

はつきり言つてカッコ良すぎる。

「そのバイクが気になるのかい?」

「うひゃあ!」

後ろから声をかけられ飛び跳ねる。心臓が悪いからやめてほしい。いや、ボクがたんにザコなだけか。

あとリンは横で笑うな。顔背けても口元でバレバレだから。

「ずいぶんと興味深そうに眺めてたが、バイクわかるのかい？」

「は、はい！ これトライアンプの新モデルですよ！ 雑誌で見ました！」

ボクの言葉に新城さんがにつこりと笑う。やっぱり優しい人だ。緊張していたボクが馬鹿みたいだ。

「ほお、よく知ってるじゃないか。こいつは最近手に入れたばかりだね。まだ慣らしの最中なんだ」

たしかによく見たらピツカピツカの新車ってかんじだ。古いのもかっこいいけど、こういうのもまた味があつていいなあ。

「そうなんですか。いいなあ、かっこいいなあ」

荷物を満載してるのもボク的にポイントが高い。荷物積んだバイクってなんでこんなにかっこいいんだろう。

「はっはっは、そう煽ってもなにもでやしないよ。けど、そういう君も、なかなかどうして、いい趣味してるじゃないか」

新城さんはそう言つてボクのビーちゃんに目を向けた。

「YBか、懐かしいな。若い頃に走つてるのを見かけたよ」

「え、双葉のバイクってそんなに古いの？」

リンが驚いた。たしかに、ボクも知った時はけっこう驚いた。

「うん、ビーちゃんの製造自体は99年だけど、基礎設計は40年以上前なんだ」

「古っ、双葉そんなの乗ってたのか」

同じビジネスバイクだったらカブのほうがもつと古いんだけど、見た目が見た目だから驚くのも無理ないか。

「リンには馴染みがないだろうが、昔はこういうバイクがそこら中で走ってたもんだ。酒屋のオヤジが配達に使ってたのを覚えているよ」

顎髭を撫でながら過去に想いを馳せるように微笑む新城さん。ほんと、何しても様になる人だな。

「見たところ保存状態もかなりいい。貴重なバイクだ。大事にしてあげなさい」
「はいー」

バイクもかっこよくて、本人もかっこいいとか反則でしょ。ボクもこんなふうにかっこいい歳の取りかたをしたいなあ。

「さて、久しぶりに会えたことだし、食事でもどうかと思ったんだが、娘に君たちを連れて帰るように頼まれていてな。リン、双葉さん、一緒に走るようになるが問題ないかい？」

突然の申し出に驚くボク。でも、当然と言えば当然か。

信用されていないわけじゃないだろうけど、大人がいたほうが安心できるのは事実だ。

ましてやこの人はリンのおじいちゃん、保護者としてこれ以上の確な人はいないだろう。

「わたしは全然。双葉は？　なんか用事ある？」

「ううん、ボクも大丈夫だよ」

三人で走れるならば是非とも走つてみたい。マスツーリングなんて初めてだ。楽しみなだ。

「なら決まりだな。私が先導するからリンは後ろを走りなさい。双葉さん、君はリンの後ろを頼めるかい？」

「はい、任せてください」

「こんな老人と走つてもつまらんだろうが、よろしく頼むよ。そうだ、ついだから娘の家で夕飯を食べていくといい」

「え、いやそんないきなり迷惑ですよ！」

首をぶんぶん振つて断ろうとしても、新城さんはニヤリと笑うだけで取り合つてくれない。

「なに、一人増えたところでどうということはないさ。睨に電話するから二人は出発の

準備をしててくれ」

それだけ言うともスマホを出して電話を始めてしまった。もう断る雰囲気じゃない。

「じゃ、いこっか双葉」

「り、リンはいいの？ 嫌じゃないの？」

バイクを道路向けて切り返しながらたずねる。

リンならたぶん嫌がるはずだ。その時は普通に帰ろう。

「べつになんとも思わないけど、どうしたの？」

あれ、おかしいな。

リンなら嫌がると思ったんだけど。予想外の反応に困惑するボク。

表情を見た感じ、おじいちゃんの手前言い出せないという感じでもなく、本当になんとも思っていないみたいだ。

「そ、そっか、ごめんなんでもない」

困るなあほんと。

なにが困るって、ちよつと嬉しいって思ってる自分にだよ。

思わず顔がニヤけそうになり必死に堪える。

なんでボクの周りってお人好しばかりなのかな。まあいいか。

「でもリン、言つとくけどボクめちやくちや挙動不審になるから覚悟しててね」

「自信満々に情けないこと言うなよ……わかった、そのときはフォローするから」
「あ、ありがとう！」

「双葉さん、娘はOKだそうだ。二人とも、準備はいいかい？」
すでにバイクに跨っている新城さんに手で応える。

峠道に三台のバイクのエンジン音が響き渡る。うん、間近で聞くと迫力が段違いだ。
「では行くか」

風を切って走り出すトライアンフ。初めにリンが続き、その後をボクがつける。
夕暮れの峠道。三台のバイクが細い影を作って走り出す。

ちなみに、このあとリンのお母さんに会って、予定通りクソザコムーブをかまし、リンと新城さんに笑われたことは言うまでもないだろう。

あんなに美人だなんて聞いてないよ！

6話 イワタニ ジュニアコンパクトバーナー 4, 6

28円 (税込)

6-1

高校へ続く一本坂、最近ハマってるアニメの主題歌を歌いながらバイクで走って行く。

ちらほらといる生徒たちを避けながら思い切り歌う。

どうせエンジンに紛れて聞こえないから大丈夫大丈夫。たまに見てくる人がいるけど、それはきつとビーちゃんが珍しいからだろう。

バイク乗っていると、なんでこう歌いたくなっちゃうんだろうね。ビーちゃんは移動式カラオケマシーンだった？

校門を通り抜け駐輪場へ向かう。なんだか最近学校に行くのが楽しくなってきた気がする。

いつもの場所にバイクを停めてエンジンオフ。
サイドバッグに入れていたチェーンを自転車置き場の屋根の柱とフロントフォークに巻きつける。

最近いたずらが怖くなって教室に持つて行くことにしたヘルメットを抱え昇降口に向かう。

「あ、双葉ちゃんだ」

ちょうど校舎に入ろうとしていた女の子と目があつた。斉藤さんだ。

「おはよー今日も寒いねー」

近づいてくる斉藤さんをよく見ると耳当てにもこもこマフラー、コートとフル武装だった。

ちよつと暑そうと思つたのは内緒にしておこう。

「うん、おはよー 早いね、いつもこんな時間に来てるの？」

始業ベルがなるまでまだまだ時間がある。かといつて朝練をするには遅い時間。

こんな時間に来るのは何かしら用事がある人か、人目を避けようとして浅ましい努力をするクソザコくらいしかない。

まあ、つまりボクのことである。

「ううん、なんかいつもより早起きしちやつたんだ。リンも今日からバイクで来るみた

いだし待ってもしょうがないしね」

へえ、リン今日からバイクで来るんだ。あんな便利な移動手段を手に入れたら使わな
いわけがないか。

「あ、そういえばリンから聞いたんだけど、日曜リンと一緒にバイクで走ってくれたん
だって？」

下駄箱でブーツを上履きに履き替えていると、斉藤さんがさも当然のようにこの前の
リンとのツーリングのことを持ち出してきた。

ボクも一応女子だけど、ほんとと女子の情報網っておつかないよね。なんでこんなに情
報が行き渡るのが早いんだろう。

「リンも喜んでたよ。ほんとありがと、双葉ちゃん」

「べつに、大したことしてないよ」

「またまた〜」

ボクの周りにはいる人たちは、なんていうかちよつとした親切を大げさにとらえる人が
多い気がする。

なでしこしかり、リンしかり、そして目の前の斉藤さんしかり。悪い気なんてするわ
けないけど、やっぱり恥ずかしい。

「リンってさ、見てのとおりあんまり人と話そうとしないんだよね。だから、最近リンが

なでしこちゃんや双葉ちゃんと仲良くしてるのが嬉しいんだ」

リンのことを話す齊藤さんの目はとても優しげだった。本当に良い友達どうしなんだな。

「双葉ちゃんがよかったらこれからも仲良くしてあげてね」

もちろんわたしとも仲良くしてね〜と齊藤さんがつこり笑う。

相変わらず齊藤さんのコミュ力は恐ろしい。こんなうなずくしかないじゃないか。

「うん、わかった!」

そんなやり取りをしつつ、階段を登り各々の教室に向かう。

「じゃ、齊藤さんまたね」

教室のドアの前で齊藤さんに別れを告げる。授業が始まるまで読みかけの本でも読んでおこう。

「うん、またねー あ、そうだ双葉ちゃん」

呼び止められ、齊藤さんに向き直る。どうしたんだろう。

「双葉ちゃん、歌上手だったよ。また聞かせてね〜」

「え、歌?」

なんのここと? 頭の中で疑問がぐるぐると回る。

「またね〜」

その疑問が解消される前に斉藤さんは行ってしまった。

歌……ボク斉藤さんに歌なんて聞かせたっけ？ クエスチョンマークが頭の中で増殖していく。

「歌……歌……あつ」

そして正解に辿り着いた。辿り着いてしまった。

全てを理解したと同時に、どんどん青くなっていくボクの顔。

たしかにボクは歌を歌っていた。バイクに乗りながら。それも全力で。

「あ、ああ、あ」

もしかしなくても、全部丸聞こえだった？ 斉藤さんの前で歌を披露したことなんて

一度もない。

つまり、それが答えだ。

抱えていたヘルメットが手からこぼれ落ちる。

ボクは今まで何回も歌っていた。もしかして、それも全部聞かれていたの？

やばい、これは……やばい……なんていうか、やばい。

「おはよー双葉ちゃん！ あれ？ 双葉ちゃん？ おーい」

なんか横でピンク色の何かが腕を掴んでくるけど、頭がフリーズして何も考えられなかった。

「双葉ちゃん？ 双葉ちゃん!? 双葉ちゃーん!?」

ボクの肩を揺さぶるピンク色の何か。それがなでしこだと気づくのに5分。

完全に立ち直るまでにおよそ30分の時間を要したのは、まったくもってどうでもいいことだ。

「お前ら、いい話と悪い話、どっちから聞きたい?」

「なんやアキ、どうしたん急に」

放課後、野クル部室。いつものように四人で部室にひしめき合っていると、千明が唐突に語りはじめた。

まあ千明に限ってはいつもどおりだからどうでもいいけど。

「部長! まずはいいいことからお願いします!」

元氣いっぱいなのでしこが話の続きをうながす。本格的に冬キャンの準備を始めてからずつとこのテンションだ。

「いいぞなでしこ隊員。ではまずいい話からだ!」

「(ざ)くり……」

な、なんだろう。

「ついに我が野外活動サークルが部に昇格したのだー！」

「ほんまかいなアキ！ やったやん！」

「やったねアキちゃん!!」

「わあ、やったねー」

千明の言葉にどつと盛り上がる二人。対してボクはテンションが低いままだった。

「テンション低いぞロリ子！ 部だぞ部！」

「うん、わーい」

ボクも本当なら喜んでいたよ。朝にあんなことがなかったらね！

全校生徒に生歌披露してたなんて黒歴史以外の何ものでもないよ！

思い出したらまた顔が熱くなってきた。

「長かった……ここまで、ほんつとーに長かった！」

膝をつき泣き崩れようとして、ロツカーにぶつかりそうになってやっぱり立ち上がる

千明。

「頑張ったね、アキちゃん」

そしてボクとあおいにぶつからないように必死に腕を伸ばして千明の肩を掴むまで
しり。

「うおおお！ なでしこー！」

「アキちゃあああん！」

お互いに腕の長さが足りなくて、ストレッチみたいなのポーズで腕を組んで泣きながら喜びを噛み締める二人。

「なんやこの茶番」

あおいのひと言が現状の全てを言い表していた。

いつも思うけどなでしこってノリいいよね。千明といい勝負だよ。

「で、悪いことってなに？」

気になっていたことをたずねる。なにか問題でもあったのだろうか。

「おーいおいおいお、あ、それな」

嘘泣きをあつさり切り切り上げてあつげらかんとした顔でボクたちを見る千明。

これはたしかにリンが苦手なのわかる気がする。

「えーまことに残念なことに、部室はもらえませんでしたー！」

千明の口から語られたのは、それはそれは残酷な真実だった。

部室がもらえないって嘘でしょ？

「えっ、なんでなん！ せつかく用具庫ともおさらばできるとおもったのに！ こんな狭い暮らしもういややあ！」

半年以上もこの狭い部室に苦しめられてきたあおいの叫びは、それはそれは悲痛なものだった。

「部室もらえないんですかって聞いたんだよ。そしたらな、大町先生が言うんだよ！まだ四人しかいないし活動場所外だからいらないでしょって！」

「いやまあ、そーやけど……」

言っていることはあながち間違っていない。

メインの活動場所が外で、部員も四人しかいない野クルの優先順位が下げられてしまふのはしかたのないことかもしれない。

「つーわけで、残念だがしばらくここで我慢してくれ」

「はあ、しゃーないなあ。でも、部費はちゃんと出るんやろ？」

「そりやもうばつちりと。まあ来月からだけだな。けど、これでもう薪代に悩まされずにすむぞー！」

「ならええわ」

切り替えはや！ さすが関西弁マスターだ。がめついといふかなんというか。

でもまあ、あおいの言うとおりにか。部室よりも部費のほうがよっぽど大事だ。なにせキャンプは金がかかる。

ちよつとでも節約できるのならそれにこしたことはない。

「なでしこ、ロリ子、不甲斐ないあたしを許してくれい！」
なんかまた始まった。

「アキちゃんはよく頑張ったよ！ もういいんだよ」

「なでしこおおお！」

「アキちゃあああん！」

またよくわからないストレッチみたいポーズで腕を組む二人。そのポーズは気に入ったのかな。

「ちなみに部の名前は野クルのままだ。ぶっちゃけ他にいいの思いつかんしな」

よかった。居酒屋みたいな名前になった。でも、部なのにサークルなのか……ま、いつか。

「あ、そういえばロリ子、冬キャン結局どうするんだ？ 先週聞いた時は保留って言うってたけど」

千明に言われて、冬キャンに参加するか保留にしていたことを思い出した。

スマホを出してスケジュールを確認する。そして、今週の土曜日のスケジュールを確認して顔をしかめた。

「みんな、ごめん！ 今回はパスで！」

両手を合わせてそう言うのと、案の定三人から残念そうな声があがった。

まあ、当然だよな。野クル初めてのキャンプなのに行けないなんて。

「えっ!? 双葉ちゃんこれないの? どうして!？」

なでしこの悲しそうな顔に罪悪感が刺激される。うう、ごめんね、なでしこ。

「土曜日バイトの面接があるんだよな。なんかこの日しか空いてないんだって。キャンプするからずらしてくれなんて言えないし。だから本当にごめんね!」

そう、その日はアルバイトの面接が入ってしまったているのだ。

今のところ貯金はあるとはいえ、ピーちゃんは金食い虫。ガソリン代だけでも週に二千円近くかかる。正直お金はいくらあっても足りないのだ。

だからまたバイトをすることにしたのだけど、案の定田舎だから求人が全然ない。

必死に探してやつとのこと面接までこぎつけたけど、キャンプの日と被ってしまうというアンラッキー

ほんと、つくづくついてない。

「ごめんねみんなあ」

誰かが悪いわけではないけれど、今回は間が悪すぎた。みんなの残念そうな顔が心に突き刺さる。

あ、どうしよ。涙出てきた。

「キャンプなんてこれからいくらでもできるんやから、そんなに気にせんでええって。

ああもう涙でとるやん、これで拭きい」

「うん、ありがと……」

差し出されたポケットティッシュを受け取り涙と鼻水をかむ。

「よしよし、双葉ちゃんが悪いわけやないんやから泣かんでもええんやでえ。またみんなでキャンプしような？」

頭をポンポンさせ慰められる。あおいの優しさが心に染みる。

一瞬、一応ボクのほうが一年近く年上のはずだけどなという思いがよぎったけど、それは心の奥底に封印しておくことにした。

「まあ、そういうこともあるって、だからそんなにくよくよすんな！　で、なんの面接受けるんだ？」

「えっと、近所のガソリンスタンドだよ」

面接先を明かした瞬間、さっきまでの暖かい空気が一変した。

千明とあおいの視線がボクに突き刺さる。

「……まあ、その、なんだ。頑張れよ」

「……やっぱり、無理にでもキャンプ連れてったほうがええんとちやうか？」
ひどつ！　ちよつとくらいは前向きに応援してれたっていいじゃないか！
ちっこいのがいけないのか！　くそう、低身長が憎い！　遺伝子が憎い！

「がんばれ双葉ちゃん！ ファイトだよ！」

ボクに優しいのはなでしこだけだよ……

とまあ、こうして野クル初キャンプを泣く泣く辞退することになったボクなのであつたが……

「ドタキャンつて……そりやないつて」

金曜日の放課後。ボクは図書室へつながる廊下をとぼとぼと歩いてた。

「なにが新しい子入っちゃったからごめん、だよ」

初キャンプを蹴つ飛ばしてまでこぎつけた面接。けれど、さつき突然電話がかかってきてなかったことにされた。

理由は今言葉にしたとおりだ。

「雇う気ないなら最初から面接の約束なんてすんなー！」

床に転がっていた綿埃を蹴り飛ばす。

野クルのみんなは明日のキャンプのためにもう帰ってしまった。

残ったボクは、借りた本を返すために図書室に向かっていたのだけど、途中で例の電話がかかってきて、今はこのざまだ。

最近いいこと続きだったから、余計にムカムカする。あのスタンド二度と使ってやるもんか。

「はあ、今さらキャンプ入れてくれなんて言えるわけないしなあ。それにテントもないし」

ぶつぶつとぼやきながら図書室に入る。夕日色に染まった図書室は、人っこ一人いなくて、なんだか少し寂しげだった。

「あれ、まだ帰ってなかったんだ」

貸し出しカウンターのほうから声が聞こえてきて振り向く。リンが不思議そうにボクを見ていた。

そっか、リン図書委員だからまだ帰ってないんだ。

「うん、返却日今日なの忘れててき……はいこれ」

「ういー」

本を渡し返却を終える。これで用事は終わり。あとは帰るだけだ。

空は晴れ渡っているのに、気分は曇り空だ。憂さ晴らしにビーちゃんどこか行こうかな。

「双葉、なんかあった？」

カウンターで返却の手続きをしているリンが心配したように聞いてきた。

「え、いやべつに……」

「いや、めっちゃ落ち込んでんじゃん。すごい顔してるよ」

ボクそんな顔してるのか。スマホを取り出し画面を鏡代わりに顔を映す。

たしかに、言うとおりの酷い顔だった。まるで峠道でガソリンが尽きたみたいな顔だ。

「はは、たしかにすごい顔だ。うん、ちよつとやなことあつてさ」

「やなこと？」

リンの気遣いに釣られたのか、ボクはポツリポツリとさつき起こった出来事を話しはじめた。

「……なんか、残念だったね」

全てを聞き終えたリンはひと言そう言ってくれた。リンのこのちよつとぶつきらばうな口ぶりが、今のボクには嬉しかった。

「でも、面接なくなったらんやらキャンプ行けるんじやない？」

「リンの言うとおりのんだけど、やっぱり言いづらいつていうか」

「あいつらつて別にそういうの気にしないだろ」

リンの言うとおりのみんなはきつと気にもしないだろう。喜んで受け入れてくれてそれで終わりだ。

けど、それはみんなの話であつて、ボクの話じゃないのだ。

「自慢じゃないけど、ボク野クルに入るまで友達なんていたことなかったんだ。言っとくけど、本当に一人もいなかったからね！」

本当に自慢でもなんでもない。

ふっ、いいのさ。人はしよせん一人で生まれて一人で死んでいくものなのだから（涙目）

「お、おう」

何言ってるんだこいつみたいなの顔で見ないでほしい。しかたないじゃん事実なんだし。

「だから、あとは言わなくてもわかるでしょ？」

「……まあ、うん、だいたいわかった」

ボクとリンの間に微妙な空気が流れる。

ようはクソザコということだ。このひと言で全て説明できる。

ボクがなでしこみたいなコミュ力お化けだったら、なんの躊躇もなくキャンプに参加するのだけど、あいにくボクはクソザコなのだ。

どうしようもないくらいクソザコなのだ。

ほんと、自分で言ってる悲しくなってくるなあ。

「もういいや、琵琶湖行ってこよ」

「えっ？ 今なんて言った？」

ボクがボソツと呟いた言葉になぜかリンが過剰に反応した。ボク変なこと言ったかな。

「どうせだから気晴らしに琵琶湖でも行つてこよかなつて」

「は？ え？ 琵琶湖？ 琵琶湖って、あの琵琶湖？」

「そうだけど」

ボクが繰り返し言うのと、リンの目が点になった。変なリン。まあいいや、そうと決まれば行程を考えよう。

「どうしよつかない 名古屋経由でだいたい15時間くらいでしょ？ だから、今日の7時くらいに出発して、明日の10時についてちよつと寝てから琵琶湖一周して日曜に岐阜——」

「まてまてまてまて、なんだそのハードすぎるスケジュール！」

椅子に座っていたリンが目を見開いて立ち上がる。さつきからリンの様子が変だ。

「どうしたのリン？ 大丈夫？」

「こつちのセリフだから！ 琵琶湖って、何考えてんだよ。あとその顔やめろ、腹たつひどいなあ、人が純粹に心配してあげてるのに。」

「琵琶湖だよ？ ちよつと遠く行くだけじゃん」

遠回りでも400キロちよつとだ。たったの15時間くらいだ。ぜんぜん大した距

離じゃない。

「琵琶湖はちよつとじゃないから！ ていうか7時に出発って、夜通し走る気？」

「うんそうだよ。大丈夫、ゲームで徹夜慣れてるから！」

眠くなってもモンエナでドーピングすれば何も問題ない。帰りに何本か買って帰ろうかな。

「そういう問題じゃねえ……その、家族とか心配しないの？」

リンってこんなに心配性だったんだ、ちよつと意外だな。もつと淡泊だと思ってた。

「ボク一人っ子だしお母さんも仕事で月一くらいでしか帰ってこないから、とくに心配はされてないかな」

「それ聞いたら余計に不安になってきた……あのさ、マジで行くの？」

「うん、最近近場ばかりだったしね」

伊豆に富士山、そして浜松。ものの見事に近所ばかりだ。ちよつとくらいは遠出したい。

そう言えば、綾乃どうしてるのかな。あとで連絡してみよう。

「近場って……なんか頭痛くなってきた」

リンが頭を抱えてカウンターに突っ伏した。琵琶湖行かって話してからずっとこんな調子だ。

そうやって、しばらく唸ったあと、リンが顔を上げた。

「あ、あのさ、双葉」

「えっと、なに？」

ボクに話しかけるリンの表情はなんていうか、すごく恥ずかしそうだった。

例えるのなら、言い慣れない言葉を無理して言おうとしている、そんな感じだ。

「土日暇ならさ、その……キャンプ、行かない？ わたしと」

「キャンプ？ リンと？」

聞き返すと、リンはちよつとだけ顔を赤くしてうなずいた。

前に一緒にキャンプしようとは誘われていたけれど、それはなでしこも含めてのことだと思ってたから意外だった。

「明日行くつもりサイトのサイトなんだけど、試験運営とかでしばらく無料らしいんだよね。知ってる？ 長野の高ボツチ高原って言うんだけど」

「ううん、聞いたことない。へえ、無料なんだ」

高原と言うからには山の上にあるのだろう。見晴らしがよさそうだ。しかも無料。悪くないかもしれない。

でも……

「ボク、テントなんて持ってないよ」

ボクの旅のスタイルとテントは相性が悪い。

キャンプをする気ならいつか手に入れなきゃいけないだろうけど、もつと先の話だと思ってた。

「わたしのテント入れればいいじゃん。狭くなるけど双葉なら平気でしょ。野宿しまくってるんだし」

たしかに、過酷な野宿に比べれば相方がいて雨風をしのげるテントがあるキャンプは天国もいいところだ。

「バイクで試したいこともあるし……どう、かな？」

じゃっかんの恥ずかしさと期待を秘めた眼差しがボクを射抜く。

いつもの一人旅も悪くないけど、誰かと一緒に旅するのも悪くない。

願ってもないチャンスだ。答えはもう決まった。

「わかった。一緒に行こう、長野」

「……じゃあ、よろしく」

ボクの言葉にリンが笑った。これから始まるだろう冒険に胸が高鳴る。

わずかな不安と大きな期待とともに、ボクの初めてのキャンプが幕を開けようとしていた。

「あ、野クルのみんなにどうやって言い訳しよ」

「それは知らん」

うう、最近リンの容赦なさすぎ……

薄暗い空。凍てつく夜で冷え切った冷たい風が、ボクの身体にぶつかり後ろに流れていく。

グリツプを握る手が暖を求めて悲鳴をあげる。

風こそ手袋で遮断されているが、その手袋が冷え切っているのであまり意味がない。人氣のない早朝の街。ボクのビーちゃんかトコトコと音を立て走っていく。

時折後ろに積んだ荷物に意識をやりながら橋を渡り山道に入る。

朝露に濡れた山道を登っていくと、道の先にぼつんと一軒家が見えた。

灯りはついていないけど軒先には誰の姿も見えない。まだ家の中にいるのかな。

ウインカーを出してバイクを家の前で停める。

エンジンを止めバイクを降りる。あたりが急に静まり返った。

「うう、さむさむ」

かじかんだ両手を開いたり閉じたりして神経をつなげていく。

ガチャリ。そんな音がして振り向く。玄関のドアが開き中から見覚えのある女の人が出てきた。

「外でバイクの音がしたからもしかしてと思ったけど、やっぱり双葉ちゃんだったのね」
おはよう、そう言つて女の人は微笑んだ。その顔はボクの友達にそっくりだった。

「あー、おはようございます。咲さん」

ヘルメットを脱いで挨拶。

志摩咲さん。リンのお母さんだ。前にリンの家にお邪魔したときに知り合つた。

会うのはこれで二回目になる。相変わらずすごい美人だ。たぶん、大学生くらいと言われても信じてしまふだろう。

「ずっと走つてきて寒かつたでしょ。冷えるといけないから入つて入つて」

「え、あ、ちょ」

背中に回り込まれて強引に家の中に押し込まれる。咲さんは会つた時からずっとこんなかんじだ。

初めはボクが小さいから子供扱いしてるのかと思つたけど、ボクのお母さんも似たような感じだから、母という人種はみんな似たようなものなのだろうと思うことにした。

今ごろお母さんどうしてるのかな。

「ごめんなさい、リンまだ起きたばっかりなのよ。悪いんだけどもう少し待っててもらってもいいかしら。リンー、双葉ちゃん来たわよー」

「へえ、もうひたのお？」

廊下の向こうの洗面所から眠そうな目のリンが頭だけ出してボクたちを見てきた。

「ふたば、おひゃよー」

歯磨きの最中なのだろうか、口がもぞもぞ動いている。

「こら、歯磨きしながら喋らないの！ ほらパパッと準備なさい」

「ふあーい」

ふにやつとしたこの感じ、志摩リンというよりも、しまりんのほうがしっくりくる。

ちよつと可愛い。本人に言ったら怒るだろうから内緒だけど。

「もう、ほんとにわかってんだか。ごめんなさいね双葉ちゃん、せつかく早起きして来て

もらったのに」

「あ、いえ、ボクも早く来すぎちゃったんでリンさんはなにも悪くないですよ」

元ボツチゆえの心配性がわざわいして、予定よりも30分も早く来てしまった。

遅れるのは論外だが早すぎるのもそれはそれで問題だ。次からはもう少し遅くでよう。

「ふふ、双葉ちゃんは本当にいい子ね、感心しちゃうわ。そうだ、ずっと立ったままもな

んだし、リビングでお茶でも飲みましょつか？」

「あ、いえ、そんな悪——」

「ささ、早く上がりましょ。ココアでいいわよね？」

背中を押され、リビングに連行されるボク。本当に優しくいい人だ。

こんな人だからこそ、リンもあんな優しい性格に育ったのだろう。

それがちよつとだけうらやましかつた。

「二人とも、忘れ物とかはない？」

荷物を積んだ二台のヤマハを眺めながら、咲さんが心配そうに言った。

外はまだ暗く、突き刺すような空気が肌をなぞる。夜が明けるにはもう少し時間がかかりそうだ。

「わたしは大丈夫。双葉は？」

ヘルメットとダウンジャケットとマフラーで完全武装したリン。準備は万端みたいだ。

「ボクも平気。一応ダブルチェックしておく？」

「なにそれ」

リンが知らなくても無理はない。まだ学生のボクたちには馴染みの薄い言葉だからだ。

「自分のバイクを点検してからバイクを交換してもう一回点検しよつてこと、とくにリンは初めてだし念には念をね」

ちなみにネットで聞きかじつた知識なのは内緒だ。

「どうしたの？ 急に早口になつたけど」

「なに？ なんのことかな？ わからないなあ」

べつに、一回友達とやつてみたかつたなんて、これっぽちも思つてなんかない。

「……やりたかつたんだな」

「はい……」

「ふふ」

ごめんなさい嘘です。めつちや憧れてました。

だから二人ともそんな微笑ましいものを見るように目で見ないでください。

「……わかつた。やろつか」

リンの返事にボクもうなずきビーチちゃんの点検を始める。

ブレーキ、クラッチレバーの緩み、ランプ類、タイヤ、荷物の結索。ざつと点検し異

常がないことを確認する。

「ヤマハの2スト……悪くないわね」

「咲さん、何か言いました？」

後ろで眺めていた咲さんが、何か言ったような気がするが、点検に夢中になっていたせいで聞き取れなかった。

「ひやつ!?! な、なにも言っていないわよ! き、気のせいじゃないかしら?」

どこか慌てたように取りつくろう咲さん。やっぱり変だ。眠いのかな? まあいいか。

「双葉、そっちは終わった?」

点検が終わったらしいリンがやってくる。

「うん、ボクも終わった。じゃそっちのビーノ見るね」

お互いの位置を交換し同じように点検する。

スクーターは乗ったことがないけど、見なきゃいけないところに違いはない。うん、とくに異常はないみたい。

それにしても、このちっこい初心者マークかわいいな。どこで買ったんだらう。

「こっちは大丈夫だったよ。リン、そっちはどう?」

「荷物まとめるネットがちよつと緩かったからきつくしといた。それ以外はとくになに

も」

「え、ほんと？　ありがとう」

ダブルチェックしておいて正解だった。ビーちゃんも荷物積みにくいからなあ。荷台をつければ解決するけど古すぎて売ってないっていうね。

「じゃ、行くっか」

「あ、ちよつと待って。はいこれ」

バイクに跨ろうとすると、リンがボクを呼び止め何かを差し出してきた。

「なにこれ、ヘッドセット？」

受け取ったものを眺める。片耳用の小型ヘッドセットだ。こんなもの渡してどうするつもりなんだろう。

「この前ツーリングしたとき声が全然聞こえなかったでしょ？　そのことお父さんに相談したらインカムを使えばいいんじゃないかって言われて、使ってないやつ借りてきた」

インカム、たしかヘルメットにつけて会話できるようにする機器だ。ポッチには無用の長物だったから全然知らなかった。

「ほら、それスマホに繋いでラインすれば同じことできんじゃないかなって」

リンの言葉に、脳裏に渦巻いていた疑問の線が繋がった。

「ああ、なるほど！ よく思いついたね」

たしかに、ラインなら通話料もかからないし通信距離も気にしなくていい。通信データを消費してしまうが動画を見るのに比べれば微々たるものだ。

悪くない。目から鱗だ。

「いや、ネットに書いてあったのパクってきただけ。それよりも早く試してみなよ」
暗くて気がつかなかったけど、よく見るとリンの口元にはマイクのようなものが伸びていた。もう装着済みというわけか。

よし、ボクもやってみよう。ヘッドセットを耳にはめ、その上からヘルメットを被る。ヘッドセットが薄いおかげで難なく被ることができた。

ケーブルをスマホにさす。すかさずラインでリンに電話する。

「お、きた。もしもし?」

ヘッドセットからリンの声が聞こえる。とりあえず成功のようだ。

「うん、聞こえる聞こえる」

今のところやり取りは問題ない。あとは走ってどう聞こえるのかな。まあそれは走り出さないとわからない。

さて、いい加減出発するとしますか。

ビーちゃんに跨る。ボクに続いてリンもビーノに跨った。

「じゃあお母さん、行ってくるね」

「二人とも車に気をつけるのよ。はしやいで変な道とか走っちゃだめだからね」
「わかつてるって。着いたら写真送るね」

「楽しみに待ってるわ。双葉ちゃん、リンのことおねがいね」

「はい、わかりました。じゃあ行ってきます」

キックペダルを蹴飛ばす。ブルンと古いヤマハが唸る。

セルスイッチを押す。キュルキュルと新しいヤマハが目覚めます。

立ち込める白煙。ゴーグルを目にかけネックウオーマーを鼻まで押し上げる。

「ついていくから前お願い」

リンに先導をお願いする。今日の主役はあくまでリン。ボクはついていくだけだ。もちろん何かあつたら手助けするけどね。

「うん、わかった。お母さん、行ってくる」

ワインカーがカチカチと点滅し、ビーノがゆっくりと進み出す。
左右確認、視界良好、進路良好、出発進行。

「気をつけるのよー」

走りだすビーノ、咲さんに会釈して赤く光るテールランプを追いかけてアクセルを吹かす。

薄闇のアスファルト。二つの赤い光が尾を引いて駆け抜けていく。空の端が赤く染まっている。日の出はすぐそこまで近づいていた。

「しまりんしまりんデイスイズ双葉、レディオチェックオーバー」

『なにそれ』

流れていく景色の中、耳にはめたヘッドセットからリンの声が聞こえてくる。

「マイクテストだよ。どう？ 聞こえる？」

『ちよつと風切り音入ってるけど普通に聞こえる』

「りよーかーい」

ヘルメットにシールドをつけているリンの声には風切り音は聞こえないけど、ゴーグルだけのボクの声には風切り音が混じってしまっているようだ。

でも、この分なら問題なさそうだ。走りながら喋れるのがこんなに便利だなんて思わなかった。

木々に囲まれた県道9号をゆっくりと流し、国道52号に向かう。

トラックが一台、ボクたちを追い抜いていった。

リンもこの一週間で慣らしたのだろう、スムーズに避けていた。

「道わかなくなったらボクに言っただけ。ナビ使うから」

『大丈夫、わたしも双葉と同じアプリ契約したから。これめっちゃ使いやすいね』

あ、契約したんだ。やっぱりあれ便利だよ。有料なだけあって作り込みが違う。

「これからどうする？　ちよくで高ボツチ行く？　それともどつか寄ってく？」

『甲府抜けて霧ヶ峰行こうって思ってる。山登るけどいいよね？』

「全然、むしろ大歓迎」

峠道はボクの大好き。ハヤピンにS字、どれもわくわくするものばかりだ。

『あんま無茶すんなよ』

「へいきへいきー　コーナーを二個も抜ければサイドミラーから消し去るから」

ちよつとだけネタを振ってみる。かなり有名だけどいけるかな？

『自信満々に抜かされた奴のセリフ言っても説得力ないからな』

あ、通じた。意外だ。アニメとかあまり見そうにないのに。

アニメ見放題のチャンネル契約してるしキャンプ場ついたら一緒に見よつか。

『そういえば双葉服変わった？　いつもと全然違うけど』

一瞬だけ視線を胴体を持っていく。新調したばかりのパステルブルーのジャケットが目に入る。

「うん、この前ワークマンで買ってきたんだ。これすごいよ。水も風も全く通さないしめちやくちやあつたかい」

今までPコートを着ていたのが馬鹿みたいに思えるほど暖かい。もっと早く買っておけばよかった。

『ワークマンって作業服の？ へえ、そんなの売ってるんだ。てつきりモンベルとかそっち系だと思ってた』

「店入るのすごく大変だったよ。おじさんしかいないし」
『だろうね』

それはどういう意味のだろうね、なんだろうか。聞いてみたい。いや、やっぱやめとこ怖いし。

そんなくだらないやりとりをしていると、大きな橋にさしかかった。

身延町と三郷町の間には流れる富士川を渡る大橋。峡南橋だ。

交差点を左折し、鉄骨のトラスによって補強された橋を渡る。

不意に朝日がさしこむ。その瞬間、視界に映る全てがオレンジ色に染め上げられた。

広大な富士川。家も山も川も、目に映る全てがオレンジに染まっていた。

何本もの鉄骨が何本もの影を作る。その中をボクたちが駆け抜けていく。

『めっちゃ綺麗……でもさみしい』

声が震えている。まだ朝だししょうがない。日が出てくれば少しは暖かくなるんだけどなあ。

「ダウンジャケットだけじゃちよつときついかもね。上からレインコートとか着れば少しは暖かくなると思うよ」

『マジか、天気予報晴れだったから持ってきてきてないわ』

ありがちなミスだ。ボクもそれでよくやらかした。いらなと思うって置いていったときにかぎって必要になる。

天気予報では晴れなのに、バケツひっくり返したみたいに雨降らせるのはなんの嫌がらせなんだろうか。ほんとやめてほしい。

「じゃあボクの貸すよ。橋渡ったら渡すね」

『ごめん、ありがと。マジで助かる』

橋を渡り対岸に到着。右折して国道52号に入る。

旅はまだまだ始まったばかりだ。

それからボクたちは、南アルプスを通過。葦沢、北杜を通り抜け、県道17号線をひたすら北上、長野に突入した。

気がつけば、かろうじて田舎街と言えた景色は見渡す限りの山と田園に変わり、刈り取られてすっかり茶色くなった稲が絨毯のように敷き詰められていた。

『マジで田んぼしかねえー』

「なんかご飯食べたくなってくるね」

そうだ、秘密兵器もあるしコンビニかスーパーで材料買ってカレーでも作ってみよう。楽しみが一つ増えた。

『今日は無理かな。パスタだし』

「パスタ？ あ、なんかきた」

視界の端に映るミラーに黒い影がチラついた。水色のSUVだ。けっこう早いな、70は出してる。

「後ろから車来てる」

『ういー』

速度はそのまま、ウインカーを焚いて車体を路肩に寄せる。

すかさずSUVがサンキューハザードを焚きながらボクたちの横を通り抜けていった。

あれ？ あの車どこかで見覚えが……

「リン、さっきの車もしかして」

『うん、たぶんなでしこのお姉さんだと思う』

やっぱりそうだ。あれは桜さんの車だ。ドライブかな、どこに行くんだろう。あとでなでしこに聞いてみるか。

「けっこう早いね」

『だね』

今通り抜けたばかりなのに、もう豆粒みたいになっている。まあ、こんな長い道だしスピード出したくなる気持ちもよくわかる。

たんにボクたちが遅いってだけかもしれないけど。

『あいつら今ごろ電車かな』

「12時くらいに集合って言ってたからまだ寝てるんじゃない？」

6時に出発してまだ2時間くらいしかたっていない。

目当てのキャンプ場は山梨市駅の最寄りにあるって言っていたから、野クルのメンツなら寝ていても不思議じゃない。

とくに大食いのピンクは要注意だ。

『なでしこのやつ興奮して寝不足だったりして』

「なんかありそう。遅刻とかしないといいけど」

そんな会話をしながらバイクを走らせ続ける。

日はすっかり上り、雲一つない空は青く澄み渡っていて、太陽で暖められた風が全身を包み込む。

寒さの中にあるわずかな温もり。

田舎の風、旅の風。

前を走るビーノの排気音。

なんかいいなあ、こういうの。

「リン、楽しいね」

気がつけばそんなことを口にしていた。

寒かったら寒いと言って、楽しかったら楽しかったと言える。

同じ景色を見て、同じ寒さを感じて、同じ空気を吸う。

ひとり旅も悪くないけど、こういうのも悪くない。

リンも楽しんでくれているのかな。

『……そうだね』

スピーカー越しのリンの声は相変わらずぶつきらぼうだったけど、少しだけうわずっていた。

それが答えだった。

『そういえば、あいつらに長野行くって言ったの?』

ぎくり。なぜこのタイミングでその話を持ち出してしまったのか。

どうしよう。そうだ、ここは三十六計逃げるにしかず!

「えっ、なんて!?! ごめん、電波悪く——」

『言っていないんだな』

「はい」

スピーカー越しに深いため息が聞こえた。

そう、ボクはこの後に及んでまだ三人に連絡をしていなかったのだ。

理由? そんなの簡単だ。

「リン、だつてボクだよ?」

『あ、うん、もういいわ』

ボクだよつてだけで説明になってしまう自分が悲しくて悲しくてしかたがない。

そしてそれで納得されてしまうことがもつと悲しい。

くそう、いつかカッコいい大人になってやるからな——!

『はあ……あとでちゃんと自分で言えよ』

「……うん、頑張ってみる」

ああ、どうやって言おう。気が重いなあ。あおい怖いだろうなあ。

『でないとわたしがばらす』

やめて！　お願いだからそれだけはやめて！

長野県、県道17号線、八ヶ岳エコーライン。寒空の下、一匹のクソザコの悲鳴が響き渡った。

レジ袋に詰まった食材を確認し、ほくそ笑む。

県道17号線と国道152号線を結ぶ丁字路のスーパーで、ボクたちは小休止を挟んでいた。

開店したばかりでまだあまり客のいない店内をあとにする。

思っていたよりも安く手に入れることができて助かった。

やっぱり食材はコンビニよりもスーパーで買ったほうがいいな。

二重式の自動ドアをくぐると、あずきと小麦の焼ける美味しそうな匂いがした。

匂いのするほうに顔を向ける。鯛焼き屋の店員さんが鯛焼きをたくさん焼いていた。

小麦の生地が型の中でじゅうじゅうと音を立て、そつと乗せられた餡子が上品な甘さをアピールする。

おいしそう。思わずつばを飲み込む。

「いけないいけない」

店に向けて一步踏み出そうとしたところで我に返る。

ここには買い物と休憩で寄っただけ、買い物食いをしにきたわけじゃない。

まだまだ先は長い。初っ端から誘惑に負けていたら日が暮れてしまう。

それにリンだつて待っているんだ。ボクだけ甘いものに釣られるわけにはいかない。

頬を叩く。覚悟は決まった。ボクは絶対に負けない。

ふ、残念だったな。貴様の誘惑はボクには――

「タイヤキヤキタテダヨー カツテッテー」

ま、まあ一個くらいならいいよね。

「んまー」

サクサクでふわふわの鯛焼きを頬張りながらバイクに向かう。

うーん、やっぱ焼き立ては格が違う。誘惑に負けてくれてありがとうボク。

視界の先に見慣れたちっこい後ろ姿が映る。

リンはもういるみたいだ。ビーノに腰掛け何かを口に運んでいる。

背を向けているからわからないけど飲み物か何かだろう。

「おまたせー」

リンが振り返る。同時に口に運んでいたものが露わになる。

それは、茶色だった。

それは、鯛の形をしていた。

それは、鯛焼きだった。

……

……

……

お前もか。

無言で見つめ合う。言葉を発さなくてもボクにはわかる。リンがどれほどの死闘を繰り広げてきたのかを。

「鯛焼き、美味しいね」

「……うん」

二人で黙々と鯛焼きを食べる。それだけで十分だった。

ボクたちは何も悪くない。全て鯛焼きが美味しすぎるのがいけないんだ。

ピコン！

聞き覚えのある着信音に思わずドキリとする。きつと野クルの誰かだ。

恐る恐るスマホを手取る。相手は綾乃だった。
なんだ綾乃か。身体力が抜ける。

綾乃：やつほー

双葉：やつほー

綾乃：今日もどっか行ってるの？

双葉：諏訪湖の側の高ボツチ高原に向かっているとこ。

綾乃：ひえーまた遠く行ってんなー

双葉：今日は友達と一緒に

綾乃：もしかして前に写真で送ってきたリンちゃんって子？

双葉：うん、そーだよ

綾乃：わたしもどっかの誰かさんの真似してバイクでお出かけだよー

双葉：いいじゃん。どこに行くの？

綾乃：愛知の伊良湖岬に行こうかなって思ってる

双葉：ってどこだっけ

綾乃：カンガルーのつま先

双葉：あ、だいたいわかった。気をつけてねー

綾乃：そっちも事故るなよー

楽しいやり取りに自然と顔がニヤつく。

スマホをしまう。ボクが友達とこうしてラインのやり取りをするようになるなんて思っても見なかった。

ほんと、人生って何が起こるかわからないよね。

「なんか楽しそうだけど、誰とラインしてたの？」

鯛焼きを食べ終えて心なしか満足気なリンがこつちを見てくる。

なんか最近この子の考えていることが読めるようになってきた気がする。

「ほら、前に行った浜名湖で知り合った友達」

「なでしこの幼馴染だっけ？」

「そうそう、綾乃って子。あれからちよくちよくやり取りしてるんだよね」

なんだかんだ言って綾乃と一番連絡を取り合っている気がする。

大半がくだらないやり取りだけど、そのくだらなさがすごく楽しい。

「綾乃もツーリングだっけさ」

「ふうーん」

一欠片になった鯛焼きを頬張る。おいしかった。帰りにまた寄ろうかな。

よし、休憩終わり。

「ん？」

リンがこちらを向く。

「ん」

そして無言でヘルメットを被る。

同じソロ志向どうし、こういうところはすごく気が合う。

ん、だけで通じるのってなんかいいね。

ビーちゃんに跨りエンジンをかける。隣でビーノのセルモーターが回る。唸る二台のバイク。

出発の時間だ。

「何キロ？」

ボクの言葉にリンがスマホを確認する。

「70」

ってことはあと2時間ちよつとか。

今10時前だから昼ごはんも入れて1時か2時くらいにはつけるかな。

「じゃ、すぐそこだしパパツといっちゃおうか」

「70はすぐそこじゃねえよ……」

うーんまだだめか。

リンの感性はまだまだ一般人よりみたいだ。

頭バイク乗りになるには経験値が足りないらしい。

でもボクは知っている。

ここまで70キロ以上走っているのにもかかわらず、リンが全然疲れているようにも飽きているようにも見えないことを。

なんならもつと走りたそうにソワソワしていることを。

「ふっふっふ」

きつと、遅かれ早かれボクと同じ人種になるだろう。

まってるよ、いつか絶対引きずりこんでやるからな

「なにニヤけてんの？ 行くよ」

「ういー」

走り出すビーノについていく。

晴わたる空。どこまでも続く長い道が、ボクたちを抗いようのない旅の快樂へと誘惑していく。

左のヘヤピン。スロットルを緩めながら身体を傾ける。

『うおっ、またカーブ！ どんだけカーブあんだよ』

ヘッドセット越しに聞こえるリンの悲鳴をBGMに、ハヤピンを抜けていく。

国道152号線、ビーナスライン。蓼科、霧ヶ峰、美ヶ原を結ぶ全長70キロ以上にも及ぶ長大な観光道路。

そんな美しい峠道をボクたちはひた走っていた。

街の面影はすっかり遠のき、右を見ても左を見ても視界に映るのはアスファルトと木々だけ。

エンジン音と風切り音だけがひたすらヘルメットの中で反響する。

左のハヤピン。ブレーキングし身体を左側に乗り出す。

傾く世界、近づくアスファルト、全身を揺さぶる遠心力。その全てがボクを魅了してやまない。

やっぱり峠は最高だ。

「遅いよーリンー！」

リンの斜め後ろにつけ、リーンインしながらハヤピンを切り抜ける。

バイクの醍醐味といったらやはりなんと行ってもワインディングだ。このスリルとスピード感がたまらない。

もつとスピードを出したいところだけど、今日は相方がいるから我慢我慢。

「おらおらー」

真後ろで軽く蛇行運転。ちよつとしたおふぎけ。

『煽り運転すんなし。なんでそんな余裕そうなんだよ』

前を走るビーノから文句がこぼれる。

ワインディングなど想定されていないスクーターで、このつづら折りを走るのは難しいものがあるのだろう。

「ボクが週に何キロ走ってると思ってるのさー」

二学期に入ってからしばらくは週千キロ以上がデフォだった。

11月に入ってからには大人しくなっているけど、それでも週に500キロ単位で走っている。

自分でいうのもあれだけど、走行時間はかなりのものになるだろう。

『いやそんなの知らんしつてうわまたカーブ！ やべえ、峠まじやべえ』

きついきつい言うわりには、ノリノリで重心移動しているように見えるのは気のせいだろうか。

心なしか声もうわずつている。もしかしなくても楽しんでるよね。

「頂上までレースする？」

『捕まるわ。わたし白ナンバーなの忘れんなよ』

そうだった。一応30キロまでしかだしちゃいけないんだった。

2ストならともかく、4ストならそれくらいでもちようどいいのかもしれない。

「じよーだんじよーだん」

軽口を叩きながらまたヘヤピンを抜ける。

霧ヶ峰は初めてきたけれど、こんななにい道だなんて知らなかった。今度一人で行ってみようかな。

『あ、この先の白樺湖で左折だって』

そこから先は本格的に山登りつてわけか。キャブのビーちゃんじゃきついだろうなあ。

「はーい」

『じゃ、先行つてるわ』

急加速していくビーノ。やっぱりノリノリじゃないか。

ギアを下げ加速する。

オートループの白煙が風に流され散っていく。

透き通る青空の下、枯れ茶けた草原の丘にたたずむパーキングエリアにビーちゃんを停め、ひと息つく。

霧ヶ峰、車山肩駐車場。ボクたちは、目的地の一つにたどり着いた。

ここでしばらくエンジンを使ませよう。

「おつかれ、ビーちゃん」

タンクをポンポンと叩く。

ツカレタ！

聞こえるはずのない声が聞こえた気がした。

「くそさみい」

隣でリンが寒そうに身震いする。たしかこの標高は1800メートルくらいだったはず。

空気の薄さとかは感じないけど、寒さは確実に増している。

つまり、ただでさえ寒いのもっと寒くなるというわけだ。

「コーヒーでも淹れる？ 持ってきたよ」

「んー？ バーナー出すのめんどいしいいや」

「ふっふっふ、それについては——」

ピコーン！

言いかけたところで着信がなる。リンとボクがほぼ同時にスマホを取り出す。相手はあおいだ。

あおい：笛吹ついたらでー

ほどなくして写真が送られてくる。今笛吹公園にいるんだ。

ソフトクリームに集合写真。どれもおいしそうで楽しそうだ。いいなあ、リア充してるなあ。

あおい：お土産買って帰るから楽しみにしててな！

「うぐっ……」

「もう堪忍して連絡しなよ」

ボクの表情で察したららしいリンが呆れたようにそういう。一言一句その通りだから何も言えない。

じとーっとした目がボクを見つめる。なにか、なにか言わないと。

「……む、向こうのほう道続いているけどなにかあるのかな！」

「クソザコかよ」

正論やめてください。死んでしまいます。

「……たしかに、地図だと駐車場の先にカフェあるみたい。時間もちよいといし寄ってくっ。」

しようがないなあと言いたげに肩をすくめるリン。

やっぱり優しいなあリンは。この子のこういうところが大好きだ。

「う、うん、行こっか」

「食い終わったらあいつらに連絡しろよ」

「……はい」

背を向けて歩き出したリンにとぼとぼとついていく。

なんか、尻に敷かれているように見えるのは気のせいだろうか。

「あつたか！」

趣のあるログハウスの中に入ったボクたちを出迎えたのは、猛烈な暖気だった。

店の奥でパチパチという薪の燃える音がする。薪ストーブでも置いているんだろう。すごくあつたかい。

「いらつしやいませー お好きな席へどうぞー」

店員さんの優しい言葉にうながされ、二人で店の奥へと足を伸ばす。

年季の入ったフローリングが歩くたびにコツコツと音を鳴らす。

ストーブの上におかれたヤカンからは、ヒューヒューと湯気が吹き出していて、乾い

た空気を柔らかくしている。

丸太の柱にぶら下げられたランプ。淡い光がカウンターに並べられたサイフォンを照らしていた。

「なんかいいなあ、こういうの」

誰に言うわけでもなくつぶやく。

山の上にひっそりとたたずむカフェ。その情緒あふれるノスタルジーに浸りながらテーブルにつき、立てかけてあったメニューに手を伸ばす。

「双葉、メニュー見せて」

横に座っていたリンが身体を寄せてくる。肩と肩が触れ合う。

「うぐっ」

ボクとリンが同時に唸る。簡単に言ってしまうえば高かったのだ。

500円600円は当たり前。ちゃんと食べようとすればもつと必要になるだろう。少なくともボクたちのような学生にはおいそれと出せる額ではない。

標高も高くて運搬費がかかるからしかたないのだけど、やっぱり高いものは高い。

「……どうするっ」

恐る恐るたずねる。まさかここで帰るなんて言わないよね。

いや、そんなどつかのクソザコみたいなことリンがするわけないでしょ。

「ぼ、ボルシチセット……」

目線をメニューに持っていく。

ボルシチセット1300円（税込）

ブックオフで巻数の少ない漫画なら全巻揃えられる値段にリンの目が泳ぐ。

「ぐ、ぐぬぬ……」

そして、しばらく無言の葛藤をつづけたあと不意にリンが立ち上がった。

「リン、いくんだね……」

「か、金はあるんや……」

不退転の覚悟を胸に秘め、リンが歩き出す。

目指すは注文カウンター、手に入れるはボルシチセット1300円（税込）

「いい加減ボクも決めよう」

茶番を切り上げメニューを見てため息をつく。ほんとどうしよう。

綾乃と餃子食べてから食事に対するハードルが上がっちゃったんだよなあ。

誰かと一緒に食べるご飯のおいしさを知ってしまった。もう菓子パンだけで満足し

ていたボクには戻れない。

だからこそあんなものを買ってしまったわけなんだけど……

「……サンドイッチセットか」

メニューの写真に目が止まる。

サンドイツチセット1200円（税込）

ドリンクが500円でサンドイツチが700円って考えたらわりと普通か。

チーズにレタスに玉ねぎ。具は日替わりなんだ。なんかおいしそう。

よし、決めた。立ち上がり注文カウンターへと足を運ぶ。

「すいません、サンドイツチセットひとつ。ドリンクはブレンドで」

注文を終えテーブルに戻る。席にはすでにリンが座っていた。

歩いたせいで身体が熱い。上着を脱いでしまおう。

チャックを開きパステルブルーのジャケットを脱ぐ。押し込んでいたユニクロの青

いダウンジャケットの襟を元に戻す。

「そんな厚着してたのかよ。どうりで平気そうにしてるなって思ったよ」

「ちなみにズボンの下はジャージだよ」

秘技！ズボン二枚重ね！

動きやすさとプライドを犠牲に究極の暖かさを得る禁断の邪法！

エリートキャンパーのリンにこれは真似できまい！

ふはは、まいったかー！

つて、ボクはいつたい誰に言っているだろうか。

「着すぎだろ」

「えへへ」

さらにその下にタイトを履いてるって言ったらどんな顔するのかな。

そんなくだらないことを考えていると、店員さんが注文したものを運んできてくれた。

熱々のボルシチに具沢山のサンドイッチ。とてもおいしそうだ。

「サンドイッチうまそう。あとで一口ちょうだい」

「いいよ」

そっちのボルシチももらっていい？　なんて野暮なことは聞かない。答えなんてわかりきっているから。

「いただきます」

両手を合わせて同時に食べる。

本栖湖で食べたカレー麺も、浜松で食べた餃子もおいしかった。だから、このサンドイッチもきつとすごくおいしいに違いない。

「はあ……」

ビーちゃんに腰掛け息をはく。開いた口の中に霧ヶ峰の冷たい風が入り込む。楽しい食事はあつという間に終わり、現実に向き合う時がやってきた。握ったスマホがやけに重く感じる。

ラインのあおいのアイコンをタッチ。音声通話ボタンのまわりを指でなぞる。

「いい加減、電話しないとだめだよなあ……」

休憩は十分にとった。あとは野クルのみんなに連絡を入れるだけ。

リンはトイレに行っている。今ここにいるのはボクだけだ。

ボタンのまわりをなぞる。かれこれ十分くらいこんな調子だ。

「あつ」

間違えて通話ボタンをタッチしてしまった。

「ま、まだ心の準備できてないのに！」

発信音。数コールもしないうちに電話がつながる。慌ててスマホを耳に当てる。

『もしもし、双葉ちゃん？ どないしたん？』

いつもと変わらない関西弁。いつもと変わらない優しい声。

「え、えつとね、あ、あおい、い、今、ね、ほ、ボク……」

まるで初対面の人と電話する時のように何度もつつかえてしまう。これじゃダメだ。

「えつとね、えつと……えつと、えつと」

ダメだ。よくわからないけどとにかくダメだ。早く言わないと、早く謝らないと。

せつかく仲良くなれたのに、せつかく名前で呼べるようになったのに、嫌われたくない、また一人になりたくない。

「えつと……う、うう」

ダメだ。やっぱり言い出せない。

嫌われるのが怖い。怒られるのが怖い。ありもしない未来が頭の中で溢れていく。

『大丈夫やで双葉ちゃん、大丈夫やから、そんなに怖がらんといて。知つとるよ、今志摩さんと霧ヶ峰におるんやろ?』

「え、な、なんでそれ知ってるの?」

あおいの予想外の言葉に頭を殴られたかのようなショックを受ける。

『さつき志摩さんから聞いたんよ。面接ドタキャンされてしもうたんやつて? ほんま

残念やつたなあ』

バイトの面接をドタキャンされたことも知っているみたいだ。

もう全部バレているって考えたほうがいいみたい。

ばらすって本当だったんだ。

いや、きつと言いだせないボクの代わりに伝えてくれたんだ。

「ご、ごめんね。キャンプ行けなくて」

あおいの優しい声と、リンのお節介に絆されて、ずつと言えなかったことを言う。

『なんで双葉ちゃんが謝るん？ 双葉ちゃんなんも悪いことしとらんやろ』

まるで姉が妹に言い聞かせるように優しく言葉を紡ぐあおい。

『そら一緒にキャンプ行けんかったのはちよつと残念やで。なんで言ってくれんかったんやつて思つとる』

昨日ボクがドタキャンされたといえればそれですんだ話だったのだ。

どうせ冬のキャンプ場なんてガラガラだ。一人増えたところで何も問題なんてない。

結局のところ、ボクが勝手に怖がっていただけなんだ。

『でもな、それだけや。この前も言ったやろ？ キャンプなんていつでもいけるって』

そういえばそうだ。たしかにそんなことを言っていた。どうして忘れてしまっていたのだろうか。

『双葉ちゃんはな、ちよつと気負いすぎなんよ。キャンプなんてゆうたつてただのお遊びやで？ ドタキャンしようがいきなり割り込もうがかまへんのよ』

「うん、そうだね。たしかに遊びだよね」

そうだ。遊びだ。キャンプも旅も、ツーリングも、ただの遊びだ。

やらなかったからって、何かを失ったりなんてしない。

みんなで集まって、みんなで楽しんで、それで終わりだ。
得るものはあるかもしれないけど、失うものなんて何も無い。

『もしかしたら双葉ちゃんは、うちに嫌われるなんて思っつたのかもしれないけど、断言するで、そないなこと絶対におきんからな』

隙あらばホラ吹きやおふざけばかりするあおいからは、想像もつかないくらい真剣な声だった。

『そないつまらんことで嫌いになる友達なんて、双葉ちゃんの周りには一人もおらん。もし、嫌うなんてゆうやつがおったら、そんなときはうちがぶつとぼしたる』

悪いことをすれば怒られる。心配をかければ叱られる。

でも、遊びに行けなくなつたくらいで嫌いになる友達なんていない。ちよつと残念がつて、また遊ぼうつてなるだけだ。

『だからもう怖がらんといてえな、双葉ちゃん』

つまりは、そういうことだ。

「……ごめんねあおい、変なこと言っちゃって」

そうだ、ボクはもうボツチなんかじゃないんだ。

あおいも、千明も、なでしこも、リンも、斉藤さんも、綾乃も、みんな友達だ。

ボクの大好きな友達なんだ。

『その様子やと、もう大丈夫そうやな。なら湿っぽい話はこれでしまいや。せつかく長野おるんやから楽しんでかな損やで!』

「……うん! わかった!」

嘘偽りのないあおいの言葉に心の底から活力が湧いてくる。

今のボクならきつと日本一周だってできる。

『長野のお土産、期待しとるよ。わたし生チョコ饅頭つちゆうやつが食べたいわあ。うちらもお土産こうてくるから、月曜部屋で食べ合いつこしよう?』

「そんなの、いくらでも買ってくるよ」

たくさん、たくさん買ってこよう。きつとすぐおいしいに違いない。

『ふふ、なら楽しみにしとるで。ほなまたな。車、気いつけるんやで。あと志摩さんによろしゅうな!』

「うん、またね!」

電話を切る。さつきまでの鬱屈した気持ちに嘘のように晴れ渡っていた。

なんで、ボクの周りの人たちは、こんなに優しい人たちであふれているんだろう。

おかげで一人ぼっちを気取ることもできなくなってしまった。

「電話終わった?」

いつの間にか戻ってきていたリンが優しげな笑みを浮かべながらボクを見ていた。

「うん、終わった。リン」

お節介な友人に向き直る。トイレに行くって言ってたくせに、手が全く濡れてない。

「なに？」

「ありがとね」

いろんな思いを込めてお礼を言う。

リンにとってはちよつとしたお節介だったのかもしれないけど、ボクはそれに助けられた。

本当に感謝してもしきれない。リンの友達になれて、本当によかった。

「……なんのこと？」

すつとぼけたように目を背ける。でも、ちよつと赤くなった頬がすべてを物語っていた。

リンもなんだかんだ言つて素直じゃないんだよなあ。そこがいいところでもあるんだけどさ。

「ううん、なんでもない。そろそろ行こっか」

「……だね」

ヘルメットを被り、バイクに跨る。

チヨークを引いてペダルを蹴飛ばす。

スロットルを回す。エンジンが唸る。ボクの心が躍りだす。

高原を二台のヤマハが走り出す。

空は相変わらず晴れ渡っていた。

風が吹き草を揺らし、物静かな音を奏でる。

耳が痛くなるほどの静寂の中で、風の音だけがひっそりと、だがたしかに存在を主張する。

標高1665メートルの頂に、チエアーの軋む音とコーヒー豆を挽く音だけが耳を騒がせる。

しじまに身を任せていると、ボクたちが普段どれほどの音に囲まれて生きていたかを実感する。

風の吹く音、草の揺れる音、豆を挽く音。この三つだけで世界が形作られる。

挽き終わった粉をドリッパーに注ぐ。ふちを指で叩き平に慣らし、コツヘルの上に乗せる。

ぶくぶくと音がする。視線を上げればイワタニのバーナーにかけていたケトルの水が沸騰していた。

火を止めてケトルを取る。火傷しないようにハンカチを使うのも忘れない。

湯気に手をかざす。たぶん95度くらいだ。やっぱり山の上だから沸騰しても温度が低い。

つまりコーヒーを淹れるには最適な温度というわけだ。このまま抽出しよう。

何十回、何百回と使ううちにもはや自分の手と化したケトルでお湯を注いでいく。

見慣れない景色、嗅ぎ慣れない空気。だけど、この瞬間だけはいつもの光景だ。

プラスチックのドリッパの向こう側に琥珀色の液体が溜まっていく。

風に乗ってマンデリンの芳醇な香りがあたりに漂う。

ケトルのお湯が空になり、コツヘルがコーヒーでいっぱいになる。

コーヒーを二つのマグカップに注ぎ、後ろを振り向く。

「リンー、コーヒー入ったよー」

「うーいー」

さつき見た時は何もなかった空間に、今では立派なテントが張られていた。

すごい、コーヒー淹れはじめて5分くらいしか経ってないのに、もうできてる。

「はいどうぞぞ」

「ん、ありがと」

リンにマグカップを渡し、買ったばかりの椅子に腰掛ける。安っぽいアルミのフレ―

ムが軋んで音をたてた。

「……うん、おいしい」

「どういたしまして」

二人でコーヒーを啜る。寒空の下、時間がゆっくりと流れていく。

「それにしても、双葉ってバーナー持ってたんだ」

リンの視線がボクの足元に置いてある小ぶりなバーナーに向けられる。もちろんリンの持ち物じゃない。

「リンのバーナー見てたらボクも欲しくなっちゃって、通販で安かったから買っちゃった。普通のガス缶だから沸かすの苦労したけど」

「……標高高いからね」

家庭用のCB缶は局所用のOD缶に比べて出力が弱い。

次こういうところに来る時は風除けとかも持ってきたほうがいいかもしれない。

「でも、いつでも淹れたてのコーヒーが飲めるのがこんなに嬉しいことなんて知らなかったよ」

「なんか、キャンプで飲む飲み物って妙に美味しいよね」

「わかる」

二人で椅子に腰掛けコーヒーをすする。しじまの中でコーヒーの香りだけが心を躍

らせる。

「これで、温泉入れてたら最高だったんだけどなあ」

「だよねえ……」

「はあ」

二人でため息をはく。そう、本当なら高ボツチ高原のそばにある温泉に入る予定だったのだ。

「潰れてるとかないわー」

けど、行こうとしていた温泉はけっこう前に閉鎖していた。もつと先に行けばあるらしいけど、そこまで行く気力もない。

「下調べしておいてよかったね」

ボクが霧ヶ峰でうだうだやっている間にリンが調べてくれていたのだ。もし調べいかなかったらと思うとぞつとする。

「景色いいって聞いたのに、ここからだと言つててなんも見えないし、温泉は潰れてるし、ほんとふんどりけつたり」

「ボクはそこそこ走れたから満足」

「あれでそこそこかよ……双葉はいいよなあ、バイクに乗つてれば幸せなんだから」

「うん、ボクバイク乗るのが好き」

リンはボクのことをよくわかっているみたいだ。

ぶっちゃけボクはバイクに乗れていればそれで満足できる。我ながらひどく単純な脳みそだ。でもバイク乗りなんて基本そんなものだ。

「ふっ、今の言い方なんかすげえバカっぽい」

「ふーん、リンだって楽しんでたくせに」

「いやまあ、そうだけどき……」

ここから少し先の頂上の晴れている場所で、二人でノリノリでポーズとって写真撮ったのをボクは忘れていないからね。

「リンってさ、クールそうに見えるけど、実はかなりテンション高いよね。千明といい勝負じゃない？」

たぶん口にしてないだけで心の中は相当に騒がしいはず。短いつきあいだけどだんだんわかってきた。

「うげ、あいつと一緒にすんなよ」

やっぱりまだ苦手みたいだ。野クル、待望の5人目、とはいかないらしい。

「そんなに嫌ってあげないでね。普段はあんなんだけど、本当はすごく面倒見が良くっていい人だから」

千明が千明だったからこそ、ボクは今こうして友達とキャンプをすることができてい

る。

もし千明がいなかったら、ボクはきつと今でも一人のままだっただろう。

「べつに、嫌いじゃないよ。ただ苦手ってだけで」

「よくわかるなあそれ。嫌いじゃないけど苦手なものっていっぱいあるよね」

初対面の人とか初対面の人とか初対面の人とか。

「でもまあ、嫌いじゃないならそれでいいや」

ボクにはボクの好きなものがあつて、リンにはリンの苦手なものがある。

人は自分以外の誰かになることはできない。

無理して好きになるくらいなら、苦手なままにしておくほうがよっぽどいい。

いつか好きになれたら、その時は素直に自分の気持ちに従えばいい。

ただそれだけの話だ。

コーヒーススをすすする。風が草木を優しく揺らす。

曇り空の隙間から、一筋の太陽が差し込む。

風で雲が流れていく。

「暇だ」

椅子に座つてただぼんやりと時間が過ぎていくのを眺める。

でもボクはこの時間が嫌いじゃない。リンもきつと同じ気持ちなんだろう。

「双葉はいつもどうやって時間潰してるの？ わたしは本とか読んでるけど」

「ボク？ ボクは潰すほど時間が余ったことないからよくわかんないや」

思い返してみても、旅先で暇で苦しんだような記憶がない。

「多い時でだいたい20時間くらいは乗りっぱなしだから、ついた時はもう寝るだけなんだよ」

前に大阪に行った時は、朝の5時に出発してついたのが夜の11時だった。こんなじゃ暇を潰すもなにもありやしない。

「桁おかしいだろ。というか20時間つてなんだよ。ほぼ一日じゃん」

「こいつやっぱ頭おかしいんじゃないの？ といいたげなリンの顔。

うーん、これはまだまだ教育が足りないみたいだ。

「リン、バイクに乗るのは楽しいでしょ？」

「うん」

「楽しい時間はたくさんあったほうがもっと楽しいでしょ？」

「う、うん」

「だったらいっぱい乗るしかないじゃない」

具体的には十時間以上。

「……ちよつと何言ってるかわからん」

なに、これでもダメだというのか！ くそう、なら教育するまでだあ！

「長く走る時はね、自分を人間とか生き物なんて高尚な存在じゃなくて、ハンドルを握るための機械だつて思いこむことが大事だよ」

「いや聞いてねえし」

「だからリンも一緒に日本一周しよう？」

もちろん下道オンリーでね。地獄の渋滞、突然の大雨、迷子、ガス欠、マシントラブル……考えただけでもゾクゾクしてくる。

「やめろお！ わたしをそっちの道に引きずり込むなあ！」

「大丈夫、本州ならたつたの3500キロだから」

「どこも大丈夫じゃねえ！」

友達同士のくだらないじゃれあい。

出会ってまだひと月しかたっていないのに、ボクは驚くほどリンに心をゆるしていた。たぶんリンも同じように思ってくれているのだろう。

それはきつとあの長い道を一緒に走ったからだ。

タイヤを通じ、エンジンを通じ、心を通わせる。

余計な言葉なんて必要ない。バイクに乗って一緒に走ればそれだけで十分なのだ。

「……そろそろ「ご飯食べる？」

馬鹿騒ぎもひと段落つき、リンにうながされて時計を見る。

午後4時。いつの間にかいい時間になっていた。

「だね。ご飯にしよっか」

そばに置いていたポストンバッグを開きスーパーで買ってきた食材を広げる。

「角煮、カレー粉、ほうれん草、ご飯……うん、全部ある」

「なに作るの？ まあたいだい想像つくけどさ」

言うまでもなくカレーである。やっぱり最初に作るのはカレーだよ。

「たぶんリンの考えてるとおりだよ。初めてだし、まずは簡単なものからじゃないとね」

「ふうーん、できたら味見させてよ」

「せっかくだし、できたらお互いに半分こする？」

「さんせー」

バーナーの音、茹でる音、煮る音、料理の音。

静かな高原に楽しげな音が響き渡る。

楽しい時間が過ぎていく。

「リン、起きてる?」

暗闇に包まれたテント。隣で寝袋にこもっているリンに話しかける。

「寝てる」

「起きてんじやん」

目と鼻の先。手を伸ばせばすぐにでも触れられる距離に人が寝ているのはなんとうか不思議だった。

こんな経験は初めてだ。でも嫌じやない。

「今日はありがとね。すごく楽しかった」

共に走った17号、やばいやばいと言いあったビーナスライン。

高ボツチの頂点で見た諏訪湖の美しい景色。慣れない道具で作った料理のおいしさ。

本当に、楽しかった。リンの言ったとおり一人旅と同じくらい楽しかった。

新しい景色を見て、新しいものを食べて、新しいことを知った。

誰かと分かち合うことの楽しさを知った。

「……そっか」

暗闇の向こうで、満足そうな呟きが聞こえた。

「リンは楽しかった?」

「……まあ、悪くなかった」

相変わらず素直じゃない。リンだってけっこうはしやいでたくせに。

でも、それでいつか。どうせ言わなくてもわかるしね。

「またやろうね。キャンプ」

今度はボクから誘いたいけど、それはもう少しキャンプというものを知ってからでもいいだろう。

「……考えておく」

「今度こそ三人でさ……そしたらきつと、もつと楽しいよ……」

暖かい寝袋に包まれていると、意識がどんどんと薄れていく。

「……そうだね」

あの騒がしくて元気いっぱいの子が来れば、きつともつと楽しくなる。もつとキャンプを好きになれる。

「べつに、わたしは二人でもいいけどな……」

どんどん意識が薄れていく。リンがなにを言っているのか聞き取れない。

心地よさに身を任せる。今日はいろんなことがあった。どれも楽しいことばかりだった。

「おやすみ、リン」

「おやすみ、双葉」

今夜はいい夢が見れそうだ。

「むー」

そんな楽しい楽しいキャンプも終わり月曜日。

ボクは風船と化した桜髪の友達と対峙していた。

「ご、ごめんね？ なでしこ」

「むー」

朝からずっとこんな調子だ。

お昼もいつもどおり一緒に食べてくれたし、本気で怒ってるわけじゃないみたいだけど、ふくれつつらを納めてくれないのだ。

「怒りん坊なでしこやな」

「自分で蒔いた種だ。自分でなんとかするのが筋つてもんだぜ。ロリ子」
「そ、そんなあ」

あおいも千明もさつきからこんな感じで手を貸してくれない。

鬼！ 関西弁！ おでこ！

ポッチ街道まっしぐらだったボクに、友達のご機嫌伺いのやりかたなんてわかるわけ

ないでしょ！

「な、なでしこ……」

「むー」

ダメださつきからむーしか言わない。

なにか、なにかないか……そうだ。あれがあつた。

リュックから対なでしこ最終兵器を取り出す。

「な、生チョコ饅頭だよー おいしいよー」

買ってきたお土産を見せびらかす。

なでしこの視線が饅頭の箱に釘付けになる。しめた。

箱を右に動かすと、なでしこの目も右に動く。左に動かすと左に動く。

「すぐくおいしいよー コーヒーと一緒に食べたらずごくおいしいよー」

「ぐぐり……」

あともう少し。どうでもいいけど、ボクはいつまでこの間抜けな話し方を続けられたいのだろうか。

「リンも同じの買ってきてるよー」

なでしこの肩がびくりと震える。

やっぱりなでしこにはリンをぶつけるのが一番みたいだ。

「たぶん図書室でどうやってなでしこに渡そうか悩んでるんだろうな〜」

「ごめんよリン、ボクのために犠牲になっておくれ。あとでジュース奢るから。三人で食べたらきつとす〜くおいし〜」

「そこまで言いかけて、なでしこがボクの手を掴んでいきなり立ち上がった。

「ちよつとリンちゃんのところ行つてくる！ 双葉ちゃん！ いこ〜」

「え、ちよ、まつ!？」

「部室の扉を開け放ち走り出すなでしこ。当然ボクも巻き添えである。

「おーいつてら〜」

「うちの分も残しといて〜な〜」

「流れていく景色、遠ざかっていく部室。桜色の髪を追って必死に走る。

「なでしこ、今度は三人でキャンプ行こうね」

「言いたかったことを、言いたくなかったことを言う。

「……うん！ 約束だよ！」

「とりあえず、仲直りは成功したようだ。成功したのはいいんだけど……」

「リンちゃん、今行くよ〜！」

「饅頭部室に置きっぱだから！」

7 話 笑, s コンパクト焚き火グリル B-6 君 5,

640 円 (税込)

7-1

ボクの住んでいる家となでしこの住んでいる家は、そんなに離れていない。

谷間の中に作られた町だから、住宅用のスペースはおのずと限られてくるのだ。

たしか自転車で15分かかるかかからないかくらいの距離だ。意外と近所なのだ。

つまりなにか言いたいのかというところ。

「遊びにきたよー。双葉ちゃんー！」

こういうことが起きる。

「まさか本当に来るなんて思わなかったよ」

「ん〜!」

「つて、聞いてないか」

リビングのテーブルでお好み焼きを食べるなでしこは、ボクの呟きなど耳にも入っていないようだ。

「ふわっふわ〜 うん、うん!」

なんでこんなことになったのか、ボクにもよくわかってない。気づいたら流れてそうになっていた。

「おいしかったー! ぐちそうさま! 双葉ちゃん」

相変わらずの早食いでお好み焼き一皿を平らげたなでしこ。

すごい勢いで食べたから口の端にソースがついてしまっている。

「お粗末さま。ソースついてるよ」

ティッシュを取って口元を拭いてあげる。なんだか餌付けしている気分だ。

「えへへ、ありがと。双葉ちゃんつて料理得意だったんだね」

「お好み焼きなんて小麦粉水に溶かしてキャベツ突っ込んで豚肉と一緒に焼けば誰だつてできるよ」

冷蔵庫のありあわせで作った軽食。こんなものは料理のうちにも入らない。

「そうかなあ？ わたしが作った時はもつとべちやべちやだったし、形もこんなに綺麗じゃなかったよ？」

「たぶん水入れすぎか、キャベツが大きすぎたんだろうね。小麦と水は一对一、キャベツはスライサーで小さめの千切りにするとふわふわになるよ」

「へえ、そうなんだ。プロですなあ」

お腹が空いてるみたいだったから、おやつ代わりに適当に作ってあげただけなのに、こどもも全力で褒められるとなんだか変な気分になってくる。

お世辞で言ってるわけじゃないぶんよけいに気恥ずかしい。

でも、こんななおいしそうに食べてくれるなら作ったかいがあるというものだ。

「それでどうしたの？ いきなり来たからびっくりしたよ」

通販でも届いたのかと思ってドアを開けたらなでしこがいて本当にびっくりした。

最初に会った時、これでいつでも遊びに行けるねと言っていたのを思い出す。まさか本当に家に突撃してくると思わなかったけど。

もうすぐ試験だつていうのに大丈夫なのか。

「あつ！ そうだった！ 双葉ちゃん！」

テーブルに手をつけてものすごい勢いで顔を近づけてくるなでしこ。その目はそれほどキラッキラに輝いていた。

「今度の土日、空いてる？」

「空いてるけど、どうしたの？」

バイト探しは継続しているけど、今のところいい感じのものが見つかっていない。

旅の予定も決めてないから土日は本当になにもなかった。

「リンちゃんがね！ ミニ賽銭箱買ってきてね！ 三人で焼肉しようってなってね！」

湧き上がるテンションに身を任せているせいか、何を言っているのかまったくわからない。

「ストップストップ、ちょっと落ち着こ？」

「えっと、つまりね！ 双葉ちゃん、三人でキャンプしよ！」

ああ、そういうことか。ようやくわかった。リンとなでしことボクの三人でキャンプしよう。

そう言っているのだ、この子は。

「ミニ賽銭箱ってあれだよ。リンが通販で買ったコンパクトグリルのことでしょ？」

昨日リンがラインで自慢してきたのを覚えている。

本サイズに畳めてグリルにも焚き火台にもなる優れものらしい。見た目は賽銭箱のおもちゃにしか見えなかったのにすごいやつだ。

「そうだよ！ それでね、今日リンちゃんと話して一緒にキャンプしよってなったんだ

！ だからやろうよ！ キャンプ！」

キャンプ、願ってもない話だ。

やっと三人でキャンプする機会がやってきた。断る理由なんてない。

またあの楽しいキャンプができる。そう思うと顔が自然と綻んでくる。

「うん、やつちやおうか、キャンプ」

「やったあ！ 双葉ちゃんとリンちゃんとキャンプだあ！」

満面の花を咲かせ、なでしこは笑う。その様子があまりにも嬉しそうで、ボクも気がつけば笑っていた。

あ、そうだ。あれを忘れていた。危ない危ない。

「でもなでしこ、土曜日は夕方くらいに行くことになつちやうけどそれでもいい？」

「全然いいけど、なにか用事？」

「うん、土曜日千明と次のキャンプ場の下見に行く約束したんだよね」

場所はまだ決めてないけど、甲府市周辺にすると言っていた。

昼すぎまで下見するとなれば、なでしこたちと合流するのは夕方くらいになるだろう。

「なにそれー！ わたしも行きたい！」

「いや、キャンプ行くんでしょ」

「あ、そうだった。わかった。リンちゃんに伝えとくね」

「うん、よろしく」

「えへへ、三人でまつたり焼肉お鍋キャンプ、楽しみだな」

あんまりにも楽しそうにいうものだから、ボクも楽しみになってきた。

それにしても、この前キャンプに行つたばかりなのに、もう行こうとしている。本当にキャンプにハマつたんだな。

「でね、双葉ちゃん。まだ夜ご飯食べてないよね？」

「うん、これからだけど」

なでしこが持ってきたリュックからカセットコンロと食材らしきものを取り出す。

そんなもの持ってきてたのか、どうりでリュックパンパンだなんて思ったよ。

「キャンプに向けてのお鍋研究会、やろ！」

満面の笑みでそう言った。

相変わらずこの子は人をその気にさせるのがうまい。

「けっして、けっして、開けてはいけませんよ」

ガスの火に、土鍋がコトコトくべられる。蓋の隙間から、怪しげな湯気が立ち上る。

「ご、ごくり……あ、開けたらなにが起こるといふのだ！」

「まあ、ただの鱈鍋だけだね」

知ってる。ていうかさつきさんぜん食材の下処理したし。

ボクはなでしこの主導の下、お鍋研究と称して鍋パに勤しんでいた。

土鍋の蓋の隙間から、魚の風味豊かな香りが部屋中に広がる。匂いだけでもおいしそうだ。

「それにしても、双葉ちゃんってやつぱりお料理得意だね。わたしあんな上手に包丁使えないよ」

「何年も一人でご飯作ってるからね。ちよつとくらいは上手になるよ」

「え……それって」

なでしこの顔が一瞬曇る。そっか、なでしこボクの家のこと知らないんだっけ。

今さら隠すものでもないし、話してもいいかもしれない。

「ボクの家ね、お父さんがいないんだ。それで、お母さんも仕事でぜんぜん帰ってこないから、家事は基本的に全部自分でやってるんだ」

たしか小学校の5年生くらいから料理は自分で作るようにしていた。もうかれこれ5年になるのか……

レトルトしか作れなかったころにくらべれば、ずいぶんと上達したものだ。

「おかげで、料理の腕ばっかり上手くなっちゃったよ」

煮物、揚げ物、炒め物、減多に作らないけどお菓子だって作れる。まあ誰にも食べさせたことないけどね。

そうになると、さつきなでしこに食べさせたのが初めてになるのか……

「そう、なんだ……じゃあ、いつも一人でご飯食べてるの？」

「うん、そうだよ。って、なんでそんな悲しそうな顔してるの？」

ボクの家のことを聞いたなでしこは、いつもの太陽のような笑みを一変させた。

「だってそんなの……双葉ちゃんは、寂しくないの？」

なでしこの瞳が揺れる。大したことなんて話してないのに、今にも泣きそうだ。

なでしこにはちよつと刺激がきつかったのかな。

「うーん、ボクもいまいちよくわかってないんだよね」

あまりにも長く続きすぎたせいで、ボクにとってはそれが当たり前のことになってしまった。

「ちよつと前までなら、寂しくないって答えてたと思う。でも、最近になってまた寂しいなって思うようになってきたんだよね」

長い間自分の感情に蓋をしてきた。

月日が経つにつれて、蓋は重くなっていき、いつしか自分では開けられなくなってい

た。

でも、その蓋は最近になって突然消えてしまった。理由はもちろんこの子たちと出会ったからだ。

「けど、それって悪いことじゃないと思うんだ」

身体の傷と同じで、心の傷も放置すれば膿んで腐っていく。問題はそれになかなか気づけないことだ。

少し前のボクがまさにそれだった。

楽しかったら楽しいと言って、悲しかったら悲しいと言える。それが人間の本来あるべき姿だ。

「ボクがこう思えるようになったのは、なでしこのおかげなんだよ？」
「わたしの？」

首を傾げるなでしこ。やっぱりわかっていなかったか。

この子は知らないんだろうな。ボクがなでしこに、みんなにどれだけ救われたかを。「ボクさ、ずっと人と話すのが怖かったんだ」

家に一人きりになったあの日から、ボクは人とうまく話せなくなってしまう。嫌われるのが怖い。拒絶されるのが怖い。そう思って心に蓋をした。

小学校、中学校、高校。ずっと一人で生きてきた。友達なんて一人もいなかった。

努力はした。けど、いくら頑張っても闇の中をもがくだけで、そのうち疲れて諦めてしまった。

きつと手を差し伸ばしてくれた人もいたんだろう。でも、ボクはその手を取ることとはできなかった。

「ずっと、ずっと一人ぼっちでさ。いつの間にかそれが当たり前になっちゃって、もうそれでいいやって思うようになって……」

全てを諦めて、ただ過ぎ去っていく日常を眺めるだけの毎日。灰色の世界。

「心の扉がね、どんどん重くなっていくんだ」

人とは話さない。どうせ仲良くなつてなれないから。クラスメイトの名前なんて覚えられない。どうせ友達になつてなれないから。

「寂しいって思ってるくせに、一人のほうが気楽だなんて言い張って、強がつて……」
「どん意固地になつてさ」

「そうやって強がつているうちに、いつの間にか本当に一人つきりになつてしまった。」
「双葉ちゃん……」

「千明とあおいに会つて、ちよつとはマシになつただけ、それでもやっぱりボクはボクのままでき。だから、本栖湖でなでしこがカレー麵をくれた時、本当に嬉しかったんだ」

一人ぼつちで強がっていたボクの心を解きほぐしてくれた。

誰かと暖かいご飯を食べることの喜びを再び思い出させてくれた。

ずっと一人で生きていくと決めていたのに、一人二人と友達が増えていき、気がつけばボツチだなんて口が裂けても言えないようになっていた。

凍りついていたボクの心は、あつという間に溶けてしまった。

「最近、学校がすごく楽しいんだ。それつてたぶん、なでしこたちがいるからなんだよね」

この子はいつもボクを引きずり回す。

朝も昼も夕方も、こつちの事情なんてお構いなし。おかげでクラスの人とも少しずつ話せるようになってきた。

退屈でしかたなかった学校が、灰色の日常が色を取り戻した。

それもこれも全てこの子のおかげなのだ。

「だからね、なでしこ。ありがとう——」

「ふたは、ちや、やん！」

万巻の思いを込めて言おうとした言葉は、なでしこの万力のような腕によって遮られた。

え、なにこれ。

「ちよ、むぐ、はな」

とんでもない力で頭を抱きしめられているせいで、話すことができない。心臓と胸の暖かさがボクの頭を包み込む。

「ぎづいであげられなくてごめんねえ！ もうぜっだひひとりになんがしないよお！」

本栖湖の時以上にわんわんと泣きながらボクを抱きしめ続けるなでしこ。

ボクの話ちゃんと聞いてたのかな？ いや、そういうことじゃないんだろうな。

ボクが寂しそうだったから、この子が泣く理由はそれだけできつと十分なんだ。

「もういいやなんでがなじいごといいっちゃだめだよお！」

泣きすぎて、なにを言ってるのか全然わからない。

すぐくうれしいけど、泣きたくなるくらい嬉しいけど、いいかげん息ができなくなってきた。

「ちよ、なでしこ、ぎづ、ぎづ」

なでしこの背中をタップする。これなんてプロレス？

「ふたはちやん！」

強かった力がさらに強まる。ダメだ聞いてない。

もう平気って言おうとしたのに、全然聞いてくれる雰囲気じゃない。

「泣きすぎだつて……ほんと、少しは話、聞いてつてば……」

ふいに目元が濡れた。きつと湿気のせいだ。

「だ、だから……もう、平気つて……言つてるじゃん……」

鼻がつんとする。きつと思ひ切り抱きしめられているからだ。

「大丈夫だから、だい、じよう、う、うう、うぐ……」

声漏れる。きつとお腹が空いてるからだ。

きつと、きつとそうに違いない。

だから、もう少しこのままでいよう。この暖かさに浸つていよう。

「ぷはあく おいしかった〜」

お茶を啜り、なでしこが満足気に笑う。なでしこの言うとおり鍋は物凄くおいしかった。

しめの雑炊も平らげて、今日はもうお腹いっぱいだ。

「おいしかったね！ 双葉ちゃん」

「うん、これならきつとリンも大喜びだよ」

あんなことがあったなでしこであったが、鍋が吹きこぼれたことで我に返ってくれた。

「もう大丈夫？ なでしこ」

おいしかったと笑うなでしこだけど、その目は泣き腫らしたせいで真っ赤になっていた。

おかげでティッシュが一箱空になった。

ちなみにボクの目も真っ赤になっているだろうけど、それはきつと七味が目に入ったせいだ。

「えへへ、きつきはごめんね」

「謝らないで。むしろありがとう」

ボクのためにあそこまで泣いてくれる人なんて、ボクは今まで出会ったことがなかった。

それがどれほどの衝撃だったかは、言わなくてもわかるだろう。

きつきのことを思い出すと、また目頭が熱くなっていく。

なでしこがあんなに取り乱してなかったら、きつとボクは声をあげて泣いてしまっていただろう。

「双葉ちゃん、寂しくなったらいつでもわたしん家、遊びに来ていいからね！ お姉ちゃんもお母さんもきつと喜ぶよ！」

是非とも行きたい。なでしこのお姉さんにももう一度会いたいしね。楽しみがまた増えた。

「うん、今度遊びにいくよ。お菓子をいっぱい持ってね」

「えへへ、いつでも待ってるね！」

久しぶりにクツキーでも作ってみようかな。きつとこの子なら大喜びで食べてくれるだろう。

「あ、そうだ！ 今日双葉ちゃん家泊まっていい？」

「うん、寝袋取り出しながら言うセリフじゃないね」

「えへへ、こっちでお泊まり会とかやったことなくてつい。お母さんにはもう言うてるよー！」

最初から泊まる気満々じゃないか。いやまあいいけど。

この様子だと制服だのなんだの全部持ってきてきつとそうだ。

きつと明日は一緒に登校することになるだろう。久しぶりに電車で登校しようかな。

そうだ、なでしこが遅刻しないようにちゃんと起こしてあげないと。

「片付けしたら一緒にゲームでもやる？ マリカーあるよ」

「マリカー!? やるやる!」

気の置けない友達と些細なことで盛り上がる。そんな普通の日常。キャンプも楽しいけど、こういう時間もすごく楽しい。

「げえむ、げえむ」

ボクは今間違いない世界で一番幸せだった。

甲府盆地の外れ、笛吹市。ゴルフ場の茶けた芝生を右手に眺め、ゆるい坂道をビーチやんで駆け抜けていく。

少し進むと山の入り口が見えてきた。

その入り口と道路の境目。黒坂オートキャンプ場と書かれた看板のそば。

見慣れた黒縁眼鏡をかけた女の子が手を振っていた。

「おーい、ここだ」

手を振りかえし千明に近づく。ギアを落とし、ビーチやんを止める。

「おまたせー」

今日は土曜日。千明と約束したキャンプ場にボクは来ていた。

「いやあ、悪いなあ来てもらって」

リュックを背負った千明がもうしわけなさそうに頭をかく。

「いいよいいよ、ボクも気になってたし」

「ならいいんだけどよ。このあと四尾連湖行くんだろ？ 時間大丈夫なのか？」

「うん、ここから30キロくらいしか離れてないし、到着も夕方くらいって言うてるから大丈夫」

二人は昼過ぎに到着すると言っていた。まだ11時、ようやく出発したところだろうか。

「30キロがくらいかあ。かあー！ いいなーあたしもバイクほしいぜえ」

「原付簡単なんだから取っちゃえばいいじゃん」

「そうしたいのは山々なんだがなあ……金がねえぞら」

バイク本体、試験料、保険料、その他もろもろ合わせてどんなに安くしても10万近くになるだろう。

最近バイトを始めたらしいけど、学生が気軽にさせる金額じゃない。

「そっか、頑張ってるね」

「くそう！ 他人事みたいな顔しやがってえ！」

実際他人事だからね。

ボクだって稼いでピーちゃんを手に入れたんだから、千明だって頑張れば買えるに決

まっている。

「ま、金のことは後で考えるところとして、とりあえずキャンプ場の中入っちゃまおうぜ」

「うん、そうだね」

ビーちゃんを押して二人でキャンプ場に足を踏み入れる。

「はいチーズ」

パシャリ。麓に広がる甲府市と青空をバックに二人で写真を撮る。

自撮りのコツはなでしこにさんざん教わった。おかげでずいぶんと上手くなった気がする。

「なんつうか雰囲気あっていいじゃねえか」

木々の狭間に見える甲府市を眺め、千明が感慨深げに呟く。

「場所もそんなに離れてないし、次はここでキャンプしてもいいかもね」

「まあ、もう少し下見してからだな。決めるのは」

オートキャンプ場だけあって、周りを見ればちらほらと客がいる。そのほとんどが車だ。

「オートキャンプか。ああいうのもありだよなあ。テント張らんでいいし、暖房使いた

い放題だし、最高じゃねえか」

「どっちかって言うのと最後のほうが本音でしょ」

「へへ、ばれちったか。この前イーストウツド行つた時めちや寒くてき。冬の厳しさつてやつを存分に思い知つたぜ」

「そこは気合と根性と厚着だよ。ちなみにボクは今上に6枚着てる」

Tシャツ、長T、シャツ、セーター、ダウンジャケット、防寒ジャケット。これだけ着ていれば大抵の寒さは感じなくなる。

「……すげえなお前。なんつうか尊敬するわ」

「ふははー もつと褒めたまえー」

枯葉と枯れ木の野道を二人で歩く。何気にこうして千明と二人きりで出歩くのは初めてかもしれない。

「問題は次のキャンプをいつやるかだよなー 期末テストもあるし、バイト始めちまつたからぼんぼん予定入れらんねえもんなあ」

そうだった、もうすぐ期末テストだ。まあ別に心配するほどのことでもないか。

「テスト明けか、いつそのこと冬休みまで待つてみんなでパーつてするのもありじゃない?」

「冬休み、つてことはクリスマスか……クリキャン、ありだな」

きつと、千明の頭は今猛烈な勢いで回転しているのだろう。

なでしこに負けず劣らず、千明も今までなんでキャンプしてなかったのか不思議なくらい、キャンプ大好きだよね。

やっぱりお金の問題なんだろうか。キャンプ道具高いもんね。

「ていうか、ロリ子は期末平気なのか？」

「ふっふっふ、千明くん。ボクはこう見えても、学年順位で一桁以下になったことがないのだよ」

普段はあれなボクだけど、テストの点数は自慢できるくらいにはいい。

「なん、だと……」

暇で暇でしかたなかったから勉強ばっかしてただけだけどね！

ボツチつてこういうシチュエーションだと本当に無敵だよね。

「くっ、同じ眼鏡属性なのに、この違いはなんなんだ！」

「いや、眼鏡関係ないから」

いつも尻に火がつくまでやらないとか言ってるから点数よくなるだけだと思うんだけど。

「でも、マジでそんなに点数いいなら今度教えて——」

教えてくれと言いかけていた千明が何かに気づいたように足を止める。

「どうしたの千明」

何かと思ひ千明の視線の先を追いかける。そこには、一人のキャンプ客がいた。

使い込まれたワンポールテント、焚き火台にくべられた薪が静かに燃え、ローチェアに腰掛けた男の人がスキレットで肉を焼いている。

「かつけえ……」

まるで絵に描いたようなキャンプ。

男の人の被った中折れ帽も合わさってお洒落というよりも渋い男のキャンプって感じだ。

何よりも目を見張るのは、テントの横に止められたバイクだ。

トライアンフ・スラクストン1200R、ボクはこのバイクに乗っている人を最近見たことがある。

「む、なんだい？」

この聞き覚えのある渋い声はまさか……

男の人が顔を上げる。帽子のつばで隠れていた顔があらわになる。

「君はたしか……」

渋い顔に渋い声、そして渋い仕草、こんな渋さの擬人化みたいな人をボクは一人しか知らない。

「なんだ、双葉さんじゃないか」

そう言つて、リンのおじいさん、新城肇さんが笑つた。相変わらず渋かつた。

「ほお、キャンプの下見か」

「はい、まだ時期は決まつてないんですけど、テスト終わりくらいにみんなでキャンプしようつてなりました」

「そうか、てつきり私はここでキャンプしにきたんだと思つてたんだがね」

新城さんの目線がビーちゃんに移る。シートにはバッグとマットレスがネットで縛り付けてある。

この人がキャンプに来たと思つてもとくにおかしくはなかった。

「下見が終わつたらリンさんと友達の三人で四尾連湖に行くんです。荷物はそのためのものでして」

「なるほど、四尾連湖か。前にいったが悪くない場所だった。楽しんできなさい」

「はい！ じゃあボクたちはこれで。いこつか千明」

「う、うす」

ボクの横で縮こまっていた千明に話しかける。

まあ、友達が見たこともない妙に渋いおじさんと仲良さそうに話始めたらそうなるか。

「ああ、そうだ。お二人さん」

声をかけられ立ち止まる。振り返る。新城さんの手には竹串に刺さった二切れの肉。さつき焼いていた肉だ。

「肉、食うかい？」

新城さんがニヤリと笑い、ボクと千明がごくりと唾を飲み込む。それが答えだった。

「とりあえずここで一休みしようぜ」

「じゃあマットレス出すね」

「お、サンキューな」

見晴らしのいい空き地にマットレスを広げ二人で腰掛ける。

積もった落ち葉とマットレスがふかふかしていて案外心地がいい。

「コーヒー淹れる？」

「マジか！ そういえばバーナー買ったって言ってたもんな。じゃあもらうわ」

「わかった。ちよつと待っててね。あ、コップ一個しかないけどいいかな？」

「あ、それならあたし水筒持ってきたからそれに注いでくれよ」
「りよーかい」

荷物を下ろし、手早くコーヒーの準備を始める。

バーナーが水を温め、豆を挽くガリガリという音がキャンプ場にこだます。

「にしても、まさか双葉にあんな渋いおっさんの知り合いがいたなんてびつくりしたぜ」
肉うまかったなーとつぶやく千明。たしかに、あの後食べた肉はめちやくちやおいしかった。

スキレットで焼くとあんなに美味しくなるのか。ちよつと欲しくなってきたな。

「新城さんって言うんだ。あの人リンのおじいさんだよ」

「マジかよ！ あのおっさんしまりんのおじいちゃんなのか。うわ、みえねー」

それは背丈的な意味だろうか。それともあの渋さだろうか。たぶんどつちもだろうな。

「この前リンと原付の練習行った時に知り合ったんだ。ほんとかつこいい人だよ。ボクも歳取るならああいう歳の取り方したいよ」

「双葉どつちかつていうと、かわいい系のおばあちゃんだろ」

ちつこいつてことか！ ちつこいつて意味なのか！ くそう、千明だつて大して身長高くないくせにー！

「そういう千明はあれだね。世間話だけで3時間くらい話す近所のおばあちゃんだね」
「やめろよ、そういう具体的な話するの。想像しちまっただろうが」

80になってもクソザコのボク、延々と同じ話を続ける千明……

なんだろう。遠い先のことなのに、すごく惨めな気持ちになってくる。

「やめよつか、この話」

「だな」

花の高校生でする話じゃない。

将来のこととか老後のこととか、そういう生々しい話はもう少し歳を取ってからにしよう。

そうこうしているうちにコツヘルの水が沸いた。

いつもどおりサーバー代わりのコツヘルとケトルを温め、セットしたドリツパーにお湯を注ぎきっかり20秒待ってから抽出を始める。

コーヒーの香りが風に運ばれ乗っっていく。

「今日は悪かったな。つき合わせちまって」

きっかり300cc抽出し、マグカップと水筒の蓋に注ぐ。あつという間に暖かいコーヒーができた。

「ううん、千明と一緒にキャンプ場行けてすごく楽しかったよ。はいどうぞ」

「お、サンキュー」

二人で街を眺めコーヒーをすすする。ゆったりとした時間。束の間の休息。この時間は何物にも代え難い。

「テスト終わったら冬休み。やっと好きだけキャンプできるぜ」

「なんかすごいワクワクするね。どこ行こっか」

コーヒーをすすって次のキャンプに思いを馳せる。

きつとどれも楽しい思い出になるに違いない。

もちろん旅も忘れちゃいない。最近では近場しか行けてなかったから、今度こそ遠出したい。

寒いし南のほう、九州なんて悪くないだろう。ちよつと遠いけど三日も走れば辿り着ける。

綾乃がいいなら一緒に琵琶湖なんてのも悪くない。夢がどんどん広がっていく。

「……なんつーかよ。双葉、最近変わったよな」

さつきまでのほほんとしていた千明が打って変わって、何やら神秘的な雰囲気ですう言う。

ふざけているわけじゃないだろう。その証拠に、ボクのことをあだ名で呼んでいない。

「いきなりどうしたの?」

「いや、なんとなく思ってたな。もちろん悪い意味じゃねえぜ。どう言えればいいんだろうな。明るくなったっていうか、影がなくなったっていうか……」

べつにたいそうなものを背負って生きていたつもりなんてないんだけどなあ。中二病じゃあるまいし。

「なんかいいことでも、あったのか?」

でも、千明が言うくらいなんだから、自覚はないけど相当変わったのだろう。

「いいことかあ」

いいこと……思い当たる節が多すぎて、どれがきつかけなのかわからない。

いや、一つはつきりしてるじゃないか。

「みんなに会えたこと、かな」

小声で呟く。いいことがあったとしたら、きつとこの出会いこそがボクにとってのいいことだ。

「ん? なんかつたか?」

「ううん、なんでもない。ちよつと寝るね。2、30分したらおこしてー」

「あ、おい」

コーヒーを飲み干し枯葉の上に横になる。実は夜中までゲームやってたから眠くて

しかたないのだ。

厚着のおかげでちょうどいい具合にひんやりしている。これならよく眠れそうだ。「つてもう寝てるし……つたく、しょうがねえなあ」

木々のざわめきと千明の優しげな声を聞いているとだんだん眠たくなってきた。もう寝てしまおう。

灰色の空。

灰色の廊下。

灰色の教室。

灰色の校舎。

灰色の世界で灰色の日常を過ごす。

誰も僕を見ない。誰も僕を必要としない。

けど、それでいい。どうせ僕は一生このままなのだ。

期待するから裏切られる。希望を持つから絶望にうちしがれる。

だったら最初から期待なんてしなればいい。希望なんて持たなければいい。

だから、これでいいんだ。

灰色のベンチに腰掛け、灰色の空を見上げる。

向こうで生徒の楽しそうな声が聞こえてきた。

とても楽しそうな声だった。

最後に誰かと笑ったのは、いつだっただろうか。

もう、思い出すことすらできやしない。僕は一人だ。

視界がぼやける。

「あれ……おかしい……なあ……天気予報、晴れ、だったのに、なあ……」

心の中の何か大事なものに罅が入った気がした。

きつとこのままいけば取り返しをつかないことになるだろう。

けど、もうどうでもいいや。

このまま壊れるのを眺めていよう。

きつと、そのほうが楽になれる。

もう二度と寂しいなん——

「なあ、ここら辺ででっかい釘みたいなの落ちてるの見てないか？」

「うひゃあ!？」

突然何かが視界に飛び込んで飛び跳ねる。眼鏡がずれる。ぼやけた視界に黒い影が

映る。

「うおっ、大丈夫か!？」

女の子の声が僕を心配するようにそう言った。眼鏡をかけ直す。

「つて、どうしたんだよ!　めっちゃ泣いてんじやねえか!!　いじめられたのか!!　怪我か!?!　どっか痛いのか!?!」

眼鏡をかけた女の子が慌てふためいた。長いツインテールがブンブン揺れる。

なんでこの人は僕よりも取り乱しているんだろうか。おかげで何かいろいろ引っ込んだ気がする。

とりあえず、目の前でパニックになつてるこの人を落ち着かせよう。

「あ、あの、ぼ、ボクは別に——」

空はいつの間にか晴れていた。

それはそれは青い空だった。

「おーい!　起きろー風邪引くぞー」

「う、うん?」

何かに身体を左右に揺すられ意識が浮上していく。

目を開ける。千明が呆れた顔でボクを覗き込んでいた。起き上がる。

「ボク、どれくらい寝てた？」

「30分くらいだな。ほんと外なのによくそんな気持ち良さそうに寝れるよな」

「年季が違うの、年季が」

「そこまでいくと才能だよなほんと。つうかそろそろ四尾連湖行つたほうがいいんじゃないかねえの？」

時計を見る。たしかに今から出発すればちょうどいい時間に着くだろう。

荷物をまとめてビーちゃんに跨る。ヘルメットを被る。

「じゃあボク行くよ」

「おう、気をつけろよ」

うなずいてキックペダルを蹴り飛ばす。エンジンが唸る。白煙が噴き出す。

そういえば、さつき夢を見ていた気がする。昔の夢だ。ひどく懐かしい夢だった。

そういえばあんな時もあったな。今思えば馬鹿みたいな話だ。

誰にも必要とされていないなんて、あるわけがないのにな。

「千明」

「ん、なんだ？」

「ありがとうね」

あの時言えなかった言葉を伝える。

ボクが今こうしてボクでいられるのは、千明のおかげなのだ。

ずっと同じ場所で足踏みしていたボクを引っ張ってくれたのはなでしこだ。

けど、一人ぼっちでうずくまっていたボクを見つけてくれたのは、他ならない千明なんだ。

口うるさくてお調子者、だけどすごく優しい人。

ボクの大事な友達、ボクの大好きな友達。

「え、は？ なんの話だ？」

「なんでもなーい、じゃーねー」

首を傾げる千明を他所にスロットルを回す。タイヤが落ち葉を撒き散らす。

目指すは四尾連湖、友達がボクを待っている。

7—2

「四尾連湖、10.3キロ、か」

青い標識が視界の端へと流れていく。

県道409号線。四尾連湖へ続く山道をビーちゃんひた走る。

左右を覆う鬱蒼とした木々が、赤やオレンジに染め上がり、冬に向かう野山に彩りを与えていた。

枯葉色の落ち葉がタイヤに飛ばされ宙を舞う。

「意外と早くつきそうだな」

時間はまだ2時前だ。

余裕を持つて夕方くらいにつくと連絡してたけど、この分なら多少のんびり走ってもバチは当たらないだろう。

スロットルを少しだけ緩める。エンジンが目に見えておとなしくなりメーターの針が小刻みに下がっていく。

突き刺すような風が少しだけマシになる。

「来週どこいこーかな」

ここ最近キャンプ続きだった。初心に帰るのも悪くない。

一人旅と同じくらいキャンプも楽しい。リンの言うとおりで。

でも、一人旅もキャンプと同じくらい楽しいのだ。

視界を流れていく暖色の木々を眺めていると、そのことを改めて実感する。

移り変わる景色、ハンドル越しに伝わるエンジンの鼓動、突き刺すような山の風。

どれも劣っていて、どれも優っているという話じゃない。あれも楽しいし、これも楽しい。それだけなのだ。

ボクの広がった世界。いろいろ新しいものは増えたけど、旅は相変わらず一段と光り輝いている。だってそれがボクの原点だからだ。

一人旅、思い返せば半分家出のようなものだったんだと思う。

誰もいない家、一人ぼっちの生活。孤独感に耐えきれず本の主人公のように家を飛び出した。

でも、逃避でしかなかったそれは、ボクに活力を与えてくれた。

目まぐるしく移り変わる景色、知らない土地、知らない空気、知らない人たち。

目に映る全てが輝いて見えて、とても尊いもののように感じた。

世界は美しくなんか無い。だから美しい。そんな言葉をあの本で読んだ記憶がある。そのとおりだ。現実とはアニメのように美しくなんてない。でも、だからこそ、ふとした時に見えるなにかが、なによりも輝いて見える。

「お母さん、今ごろ何してんのかな」

ワインディングを切り抜けトンネルに入りながら、家にはいないお母さんのことを考える。

仕事づくめで単身赴任。たしか社長らしいけど何してるのかさっぱり見当もつかない。

「今度電話でもしよっかな」

そんなことを考えていると、トンネルを抜けた。たしかこの先のいろは坂を登れば四尾連湖だ。

よし、早く行って二人を驚かせよう。

ギアを下げる。唸るエンジン、飛び散る白煙。

景色の移り変わりが段違いに早くなり、世界の全てが加速する。

今日は11月の末。年明けまで残りひと月を切ろうとしていた。

「へえ、ここが四尾連湖かあ」

一面に広がる黄色の絨毯と湖のパノラマを眺める。

紅葉シーズンは少しすぎているが、それでもこの湖の美しさは微塵も失われてはいなかった。

「あれ、あの車たしか……」

水色のSUV、ボクはこの車に見覚えがあった。これが停まっているってことは……
「もしかして、各務原さんのお連れの方ですか？」

声がして振り向く。

キャップを被った男の人がボクにゆっくりと近づいてきた。たぶん、管理人の人だろう。

「はい、予約していた山中です」

最近一気に友達が増えたせいかな、このくらいならクソザコムーブを発動しなくてもむよようになつてきた。

ボクだつてちよつとは成長するのだ。いつまでたつてもクソザコではいられない。

「ああ、やつぱり。バイクで来ると言ってたんですぐにピンとききましたよ」

ある程度話は通してくれているらしい。こういう気遣いが心に染みる。

「利用料はお連れさんにいただいているので大丈夫です。バイクは駐車場に止めておいてくださいね。駐車料金は1泊2日で400円。事務所で精算するのでこちらへどうぞ」

「はい」

管理人さんに連れられて事務所の中に入り、飾られていた蜂の巣に驚きながら料金を支払う。

「そうだ、あとで二人に立って替えてもらった分返さないと。」

「サイトは向こう岸にあつて、バイクの乗り入れはできないので、湖沿いを歩いていってください。見えますかね、あの白いテントがあるとこころらへんです」

ボクたち以外にも客がいるらしい。管理人さんの指差すほうを見るとたしかに白いテントが三角の顔を覗かせていた。

「あ、それと外に置いてある荷車は自由に使ってください。それではいいキャンプを」

「じゃあボクはこれで。ありがとうございました」

ボクという一人称にキョトンとする管理人さんを横目に事務所を後にする。

いちいちわたしなんて慣れない一人称に言い換えるのも面倒になってきた。

無理してわたしなんて言う必要もない、そういうのは人それぞれ。リンもそう言つて

たしね。

そうだ、せっかくだし写真でも撮っていこう。事務所に隣接するデツキに出る。木組のデツキの向こうに一面の湖が広がっていた。なんて綺麗な場所なんだろう。こんなところでキャンプするなんてさぞ楽しいに違いない。

「さーて、どこで撮ろうか——」

「あれ、双葉ちゃん？」

「びゃああ!？」

ボクしかいらないと思っていた空間で、突然ボクの名を呼ぶ声がしてみつともない奇声をあげる。

物理的に30センチくらい飛び跳ねながら、声のした方向に身体を回転させる。

「さ、桜さん?」

目を見張るような眼鏡をかけた長髪の美人。なでしこのお姉さん、桜さんがテーブルのベンチに座ってボクを見ていた。

「ご、ごめんなさい! 驚かせるつもりはなかったんだけど」

あーあ、ボクがあんなわけのわかんない奇声あげるから桜さんあわあわしちやつてるじゃないか。

屋台っぽいところで店番してたらしい人も何事かと思つてボクのほう見てるし。

「すみません、変な声出しちゃって」

よりにもよってこんな情けない姿を桜さんに見られるなんて。

顔が熱い。うう、恥ずかしいよお。

「いいのよ、たしかに驚いたけど、いきなり声をかけた私も悪いんだし。それにしても随分早ききたのね。なでしこから夕方くらいに来るって聞いてたんだけど」

「はい、余裕持って夕方って言ってたんですけど、ちよつと余裕持たせすぎたみたいで夕方を4時としても、まだ2時すぎだ。二人はボクが到着してるなんて夢にも思っていないだろう。」

「そうなのね。なでしこことリンちゃんなら30分くらい前に出発したわ。たぶん今ごろテントでも張ってるんじゃないかしら」

まだついたばかりなのか。こんなんだったら途中で合流して一緒に行けばよかった。

「教えてくれてありがとうございます。桜さんはあれですか？ 二人を送る帰りですか？」

「まあそんなところ。せつかく綺麗な紅葉だから少しゆっくりしていこうと思つて」

ほんと面倒見のいい人だよなあ。たぶん大学生くらいなんだらうけど、優しくて美人で面倒見もいいのか、完璧じゃないか。

やっぱり眼鏡の値段が違うのかな。今度それとなく聞いてみよう。

「そうだ、どうせだから少しお茶でもどう？　ここのチャイけっこういけるわよ。買ってくるからそこで待っててちょうだい」

返事も聞かずに屋台に向かう桜さん。こういう強引さはなでしこそっくりだなあ。

でもいいか。まだ時間にはかなり余裕がある。せつかくだからお言葉に甘えておう。

テーブルのベンチに腰掛けて、しばらくすると桜さんが湯気の立つコップを二つ手に戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

コップを受け取り、甘い香りのするチャイをゆつくりする。スパイスと紅茶とミルクの優しい暖かさが口の中いっぱい広がる。

「おいしい……」

「双葉ちゃんもそう思うわよね……」

そう言うわりに、桜さんの表情は妙に険しかったけど、あれが桜さんなりのおいしさの表現なのかもしれない。

なでしこは正反対なのに、なぜだかどうして、それがすごく姉妹っぽく感じた。それはきつと、根本的なものが同じだからなんだろう。

「そういえば双葉ちゃん、覚えてないかしら？ 私、先週長野の17号で貴方のこと車で追い越したのよ」

桜さんの言葉に脳裏に先週の出来事が蘇る。

田舎道にしては珍しく、ワインカーを出してすごく丁寧に抜かしてくれたのを覚えている。

「あ、やっぱり、あのSUV桜さんの車だったんですね」

「まさかあんなところで見かけるなんて思ってたなくて驚いたわ。前を走ってたスクーターはたぶんリンちゃんよね？」

「はい、あの時は二人で諏訪湖のそばにある高ボツチ高原つてところにいく途中でした」
あの時は本当に楽しかった。できればもう一回行きたいな。綾乃も誘ったらもっと楽しくなりそうだ。

三人でマスツーリング、やりたいことがまた一つ増えた。

「諏訪湖つてなかなか遠いわね。南部町からだとだいたい100キロくらいかしら。原付だと大変だったでしょ？」

「いえいえ、あんなの遠出にも入りませんよ」

一日で行って帰れる距離なんて遠出にも入らない。ちよつとしたお出かけだ。

「……双葉ちゃん、もしかしてけっこう旅するほう？」

「そうですね、行ったことないのは九州と北海道くらいですかね」

「あの原付で？」

「はい」

行き当たりばったりで行ってたからあんまり覚えてないけど、だいたいそのくらいな気がする。

いつか北海道一周してみたいなあ。いや、沖縄も捨てがたい。

「も、もしかして、旅番組見て憧れてとかそんなところ？」

「そういうのじゃないですけど、どうしたんですか？」

「い、いえ、ちよつと似たようなものを見たことがあったから」

「えっ！ もしかしてボク以外にも原付で旅してる人がいるんですか！」

「まあ、そうね……いるわね。たしかカブだったわ」

なんだろう、すごく話を聞いてみたい。きつと話が合うだろうなあ。

「カブかあゝ いいなあカブ、きつと楽しいんだろなあ」

自動遠心式クラッチ、3速ロータリーミッション、ビジネスバイクの王者。

ヤマハ一筋のボクでも、カブだけは特別だ。あんなかつこよくて実用的なバイクはこの世にカブだけだろう。

「……双葉ちゃん、よかつたら今度うちに来ない？ いい旅番組があるのよ。きつと貴

方なら気に入るわ」

桜さんの眼鏡が日光を反射しキラリと光る。なんだか怪しい雰囲気だ。

「そんなに面白いんですか？」

「ええ、とつても、気に入るはずよ」

心なしか桜さんの圧が強い気がする。気のせいかな、オーラ立ち込めてない？

どうしちやつたんだろう。いや、まあいつか、前もこんな感じだったし。

「わかりました。今度お邪魔させていただきますね」

「ふふ、楽しみにしているわ。そうだ、せっかくだし連絡先交換しましょっか」

「はい！ 是非」

スマホを取り出し連絡先を交換する。なでしこのお姉さんだけあってすごい優しい。

ボクも大人になったら、この人くらい優しく綺麗なお姉さんになれたらいいなあ。

「じゃあ私はそろそろいくわ。双葉ちゃん、二人によろしくね」

チャイを飲み干した桜さんが立ち上がる。

ボクもそろそろ二人のところ行こう。半分ほど残ったそれを一気に飲み干す。

「今夜も冷えるわ。ここは暗いし、いろいろ気をつけてね」

「はい」

カツカツと歩いていく桜さんに向かって手を振る。ほんと絵に描いたような美人っ

て桜さんみたいなのことを言うんだらうなあ。

「さて、ボクもいくとしますか」

湖岸、黄色に染まる細道をブーツでとことこ歩いていく。

「あ、いた」

湖岸を歩くことしばらく。視界の先に見覚えのあるテントと、見覚えのある横顔が、見覚えのない何かをいじっていた。

「リーン、おまたせー」

「あ、来た。けっこう早かったね」

ニット帽にポンチョにマフラーを装備したフルアーマーもこもこしまりんの前に立つ。

「思ったより下見が早くすんでき。あれ、なでしこは？」

いつもならテントの周りをはしやぎまわっているはずだけど、今はその姿はどこにも見えない。

「なでしこは写真撮りに向こう行ったっぽい。しばらくしたら帰ってくるんじゃない？」

「そっか、ところでリンは何してるの？」

「わたしは炭に火つけようとしてるところ……なんだけど」

リンの視線の先にはこの前ラインで見たコンパクトグリルがあった。間近で見るとますます賽銭箱だ。

「なんかうまくいかないんだよなあ」

グリルの中にはまだ火のついていない炭の塊がゴロゴロ転がっていた。

ところどころ焦げてはいるものの、火がついている様子はまったくくない。どうやらうまくいってないらしい。

「着火剤とかは……まあ使ってるに決まってるか。なんでだろうね」

あいにくボクの専門は野宿旅だ。キャンプのことにかんしては正直言つて専門外。リンには悪いけど力になれそうもない。

「うーん、動画だと簡単に火つけてたのになあ……」

「ボク薪買ってきたし最悪それでやる？」

サイズのちよつと厳しいだろうけど、割って使えば問題ないはず。リンならその手の道具も持っていることだろう。

「薪買ってきてくれたんだ、ありがと。まあどうしようもなかったらそれでやるかあ。ほんと、なんでつかないんだろ……」

「あつー！ 双葉ちゃんだあ!!」

この元気は声はもしかしなくても……声の方向に顔を向ける。

両手をいっぱい広げたなでしこが、いつものように満面の笑みでこちらに突撃してきた。

「双葉ちゃんー！」

両手を振り回してこちらに一直線に走ってくる姿にボクは不覚にも犬を連想してしまった。

「なでしこー！」

なのでボクもその元気に負けないように手を振ってなでしこに向かってダッシュ。

ぶつかる前にお互い急停止。土埃が宙を舞う。

「いえーい！」

そして両手を合わせてハイタッチ。

ボクもだんだんなでしこのテンションに染まっているような気がするのは気のせいだろうか。

まあいいか、楽しいし。

「これで三人そろったね！ じゃあ気を取り直して、まったり焼肉キャンプスタート！
おー！」

「おー！」

「お、おー」

まずは火を熾すところからだな。ほんと、どうしよ。

「赤くなつた成型炭を崩して、その上にちくわ炭を乗せる」

女の人が慣れた手捌きで真つ赤に燃える炭を崩し、炭の塊を乗せていく。

しばらくすると、リンがあれほど苦労した炭にいとも簡単に火がついた。

「焚き火と同じで燃えやすいものから燃えにくいものへ。だけど薪よりも火のつきが悪
いから、より長く燃えて火力もある成型炭を使う。コツとしてはこんなところかな」

「すごい！ もう燃えてる！」

なでしこの驚嘆の声にボクとリンがうなづく。

このベテランの風格を漂わせる女の人は、なでしこが向こうのテントから助っ人で呼
んできてくれた人だ。

「ありがとうございました。ご迷惑かけてすみません」

「ボクからも、ありがとうございました」

「わたしも、ありがとうございました」

三人で女の頭に頭を下げる。世の中は助け合い、助けてもらったら感謝する。キャンプならなおさらだ。

「いいよいいよ、わたしも最初はよく失敗したし。三人は中学生？　こんな季節にキャンプなんて珍しいね」

中学生……いやまあそう思うのもしかたないか。ここにいる三人とも身長140センチ代だし。

「いえ、高校生です。最近キャンプにハマってて」

「そうなんだ。あ、火が大きくなってきた。これくらい火がつけば十分だよ。じゃ、これで、キャンプ楽しんでねー」

炭に火がちやんとついたので見届けると、女の人は去っていった。何から何までお世話になりっぱなしだった。

この人がいなかったらボクたちは焚き火で焼肉をするはめになっていただろう。

本当に感謝してもしきれない。あとで何かお礼しないと。

「できる男だ」

「できる女の人って感じだね」

……

……

.....

「え？」

ボクとリンが目を見合わせる。あれ、今なんか変なこと言ってなかった？

「双葉ちゃん、あの人男の人じゃないの？」

「たしかに髪短かったけど、声とか明らかに女の人だったでしょ。肩も狭いし喉仏とかも出てなかったし」

「マジか、全然気がつかなかった」

「へえ、よく見てるんだね」

「ふっふっふ、元ポツチの観察眼、甘く見ちゃあ、いけないよ」

「お、おう」

またなんか始まったよみたいな目で見ないでほしい。しょうがないじゃないかポツチだったんだもん。

情報収集手段がかぎられるから超絶地獄耳になるし、人に聞けないから瞬間記憶力ないと詰む。

あの時は大変だったなあ。昼寝、無人の教室、遅刻、うつ、頭が……

「おーい、戻ってこーい」

「……はっ!? あやうく地雷を踏み抜くところだった。冬キャン、恐るべし……」

「勝手に自爆したただけだろ」

ですよねー

まあいいや。茶番はこれくらいにしてそろそろご飯にするか。

「じゃあ、気を取り直して、焼肉キャンプ始めるぞー!」

「「おー!」」

日も傾き始めた四尾連湖に三人の元気な掛け声が響き渡る。

「そういえば、双葉ちゃんっていつから旅してるの?」

真っ赤に染まる四尾連湖。ランプの灯に照らされたなでしこが、ボクにそんなことを聞いてきた。

炭火で炙られた豚串と、カセットコンロにかけられた鍋から溢れ出た香りがボクの食欲を刺激する。

「えっと、たしか中二の夏だったかなあ」

そんな香りに視線を目移りさせながらも、目の前のタスクに集中する。

バーナーに乗せられた金網、その上で踊るエビとイカの切り身を箸でひっくり返す。

「じゃあリンちゃんほとんど同じなんだね」

「最初のころは旅なんて言えるほど立派なものじゃなかったよ。リュックにパンと水詰めてひたすら国道歩いてさ、丸一日かけて50キロくらい歩いてそこら辺の公園で野宿したっけな」

ひっくり返したエビとイカに塩を振る。炙られた魚介類の香ばしい匂いがボクの胃をくすぐる。

「よく通報されなかったな」

「ほんとだよ。今でも不思議だよ」

あの時はまだ身長が140センチにもなつてなかった。きつと側からみたら小学生が家出しているようにしか見えなかっただろう。

「あのころは大変だったなあ。夏だから寝袋いらないだろうって思って、マットだけで寝たら寒すぎてマットを上にかけて寝たり」

あの夜のベンチの硬さは、今でも強烈に記憶に残っている。

当時のボクは山の中が寒いという当たり前のことすら知らなかった。まあ今はそんなことないけどね。

「足に虫除け塗り忘れて起きたら、足だけで30箇所くらい蚊に刺されたり……」

しばらく靴下履くのすら苦労したっけ。懐かしいなあ、もう一回やってみたくないなあ。

自転車片道150キロ、食事は食パンと水だけ。二日目で頭がおかしくなりそうに

なって、慌ててコンビニでカップ麺食べたこともあったよね。

まさかカップ麺で涙を流す日がくるなんて思わなかったよ。

「一番やばかったのは顔がなんかムズムズするなあつて思つて触つてみたらムカデが――」

「ストップストップ双葉ちゃん!!」

急に騒ぎ出したなでしこを見ると、すごい青い顔をしていた。隣のリンも同じくらいひきつっていた。

「ふ、双葉……な、なんつー恐ろしい話すんだよ」

「む、ムカデ、30箇所……」

ガクガクブルブル。まさにそんな言葉がぴったりなリンとなでしこ。

どうやら、二人にはちよつと刺激が強すぎたらしい。

変な空気が三人の間に流れる。どうすればいいんだろう、これ。

「あつ！ 豚串とお鍋そろそろいいんじゃない？」

「ごまかすの下手かよ」

うるさいよリン、ボクだってそんなのわかつてるよ。でもしかたないじゃないか。

「わつー、ほんとだ！ 二人とも、早くたべよー！」

が、そんな子供騙しでもなでしこには通用したらしく、鍋の蓋を開けて目をキラキラ

と輝かせていた。

うん、やっぱりなでしこにはご飯をぶつけるのが一番だ。

「お前はそれでいいのか……」

ボクの話で怖気付いてたリンも、なでしこの変わりように毒気を抜かれたらしい。

「まあいいや、そろそろ食べよっか……あ、まってその前に——」

食べ始めようとしたボクとなでしこを制止するリン。

「あの人にこれ持って行ってあげない？」

リンの言葉に、ボクとなでしこが大きくうなずいた。

「うん、うん！ ん〜！」

「これも、うん！ うん、おいし〜！」

炭を熾してくれたキャンパーさん（連れの人もいたのでその人にも）にお礼のお裾分けをしたあと、ボクたちもついに念願の食事にありついた。

豚串をリンが炊いてくれた麦飯と一緒にかきこむ。

炭火で炙られ少しだけ焦げた豚肉の脂と麦飯が口の中で混ぜり合い、暴力的なおいしさとなってボクに襲いかかる。

隣ではなでしこがボクの焼いたイカをすごい勢いでパクついている。

「おいひい〜」

「なでしこが二人いる……」

リンが何か言っているが、耳に入っていない。麦飯を食べ終えすかさず真つ赤に焼けたエビに手を伸ばす。

殻を剥いて紅白の剥き身を頬張る。ほどよい塩味の身が、口の中でぷりぷりと弾ける。

はつきり言っておいしすぎる。まさにおいしさの暴力だ。

こんなの知っちゃったら旅先で菓子パンなんてもう二度と食べられないよ。

「ほんと、二人ともうまそうに食べるよなあ」

鰯鍋をすすりながらリンが呆れたような、微笑ましいような顔でそう言う。

そうだ、鰯鍋もあるんだ。ぜったい美味しいんだろうなあ。

「だっておいしいんだもん！　ね、双葉ちゃん！」

「ねー！」

誰かと一緒に食べるご飯。三人でやる初めてのキャンプ。

きつと今食べている料理も一人で食べたところまでおいしいとは思わないだろう。

ボクは今までいったいどれほど人生を損していたんだろうか……

いや、そんなことより鱈鍋だー！

「うん！ やっぱおいしい〜」

ぷりぷりの鱈に染み渡る昆布つゆ。七味がピリリと刺激を与える。

これぞまさに外ご飯効果！ 人類の生み出した叡智の結晶だ。

「双葉、エビってまだある？」

「大丈夫だよ。まだまだあるから！」

イカもエビも二パック買ってきた。まだ焼いてない魚もある。焼肉キャンプはまだまだこれからだ。

「あつ！ わたしも食べたい食べたい！」

「じゃんじゃん焼くからじゃんじゃん食べなよー」

鍋がコトコト、肉がジュージュー、エビがコロコロ、わいわいがやがや、あれとって、これとって。

三人よればなんとやらと、気心の知れた友達どうしならなおさらだ。

「楽しいなあ……」

ひとりぼっちの人生。ひとりぼっちの世界。

つい最近まで当たり前だったそれが、遙か昔のできごとのように感じる。

「なんか言った？ 双葉」

「ううん、なんでもない」

本当になんでもない。

なぜならわざわざ口にしなくても、そんなことわかりきっているからだ。

「カルビ焼いて〜 ハンバーグも〜」

「食いすぎだろ……」

虫も静まり返った四尾連湖。ボクたちの喧騒はまだまだ収まることを知らなかった。

ご飯も食べ終え、すっかり真っ暗になった四尾連湖。

なでしこが持ってきてくれたブランケットにくるまり、メラメラと燃える焚き火をぼんやりと眺める。

お腹に感じる満足感と夜の静けさ、そして焚き火の暖かさが合わさって、不思議な高揚感が全身を包み込む。

「あれえ〜 双葉ちゃんまだ起きてたんだ〜」

テントのジツパーを下ろす音が聞こえて振り返る。なでしこが眠そうな目を擦りながらボクを見ていた。

「うん、薪中途半端に余っちゃったから、この際全部燃やしちやおうと思って」

「そっか〜」

なでしこがのそのそと近づいてきてボクの横に座った。

漆黒の闇に染まった世界、焚き火の明かりがテントに二つの影を作る。

「うう、さむさむ、双葉さんや、中に入れておくれ」

「おばあちゃん、自分の毛布あるでしょ？ まあいいけど」

毛布を広げる。なでしこがするするとボクの懐に入り込んできた。

「やっぱりワンコだよなあ……」

「はあ〜 あったまりますなあ〜」

「だね〜」

二人で焚き火で暖まる。

燃え盛る焚き火は、あたりの暗さも相まって、まるでどこか別の世界にいるような、そんな非現実感を抱かせた。

「おいしかったね、今日のご飯」

「ただ、今真横で感じているなでしこの暖かさが、これは現実だということをボクにはつきりと教えてくれた。」

「今度はどこへ行こうかな？ 川とかもいいよね〜」

今まさにキャンプの真つ最中だというのに、この子はもう次のキャンプのことを考え

ている。

これはもう完全にドハマリしたな。そのうち一人でもキャンプやりそうだ。

「二人とも、まだ寝てなかったんだ」

またジツパーを下ろす音が聞こえて振り返る。リンがちよつと呆れたような顔でボクたちを見ていた。

「あ、ごめんリンちゃん。起こしちやつた？」

「べつに、スマホいじってた。焚き火してんの？」

「薪余っちゃってさ」

「……ふうん」

ボクたちを一瞥したリンは、自分のテントの中に戻っていった。

そして、ほどなくして戻ってきた。その手には毛布とバーナーを持っていた。どうやら居座るつもりらしい。

「焚き火だけじゃ寒いでしょ。ココアでも飲む？」

「ココア！ 飲む飲む！」

「ボクも貰ってもいいかな」

「ういー」

リンがボクたちの横に座り、手慣れた様子でココアの準備をする。

あつという間にお湯が沸き、ココアの甘い香りがボクたちを包み込んだ。

「焚き火を囲んでまったりココア。たまりませんなあ〜」

三人でココアをすすり、まったりと和む。

「たしかに、雰囲気はいいかもね。ていうか今気づいたけど、お前ら同じ毛布に入ってるのかよ」

焚き火で照らされたリンの目は呆れ返っていた。

「ふふふ、リンちゃんも入る？」

「やだ」

なでしこの誘いをばつさりと断るリン。リンってこういう時本当に容赦ないよね。

「そうだ！ せっかくだからマシユマロ食べない？ 持ってきたんだ〜」

どこからともなく取り出したマシユマロの小袋と竹串を両手に鼻息を荒くするなでしこ。

あれだけ食べてまだ食べる気らしい。

「まだ食うのかよ……わたしパス」

「あ、ボクはもらうね」

が、ボクもなでしこほどじゃないけどそれなりに食べるほうなのだ。ここは遠慮なくいただくことにする。

「なでしこはともかく、双葉もかよ……」

引き気味のリンの声をバツクに二人でマシユマロを竹串に突き刺す。

串の端を持って焚き火にかざす。しばらくするとマシユマロが焦げて甘い香りが鼻をくすぐった。

熱々のそれを息で冷ましながら頬張る。

焦げたマシユマロのサクサクとした食感、熱で溶けた食感、そして暴力的な甘さが口の中いっぱい広がる。

「ん〜！」

ボクとなでしこの黄色い悲鳴が湖にこだまする。さつきまで塩っぱいものばかり食べてたから、この甘さが身体に染み渡る。

「リン！ これすっごい美味しいよ！ リンも食べてみなよ！」

竹串にマシユマロを刺して炙り、リンに差し出す。

「いやいらないつて」

「一個だけ！ほんとにおいしいから！」

おいしそうな甘い匂いを放つマシユマロに、リンの目が泳ぐ。

「……一個だけだからな」

ボクの勢いに根負けしたリンが、ちよつと恥ずかしそうに首を伸ばし、ボクのマシユ

マロにパクリとかぶりついた。

「……………」

目を見開くリン。ふっふっふ、リンも女の子、甘いものには勝てないようだ。

「……………んまあ〜」

よく見ると口元がだらしなく緩んでいる。

どうやらお気に召したらしい。だっておいしいもんね。

「ふっふっふ、リンさんや、おいしかろ〜」

「おいしいのお〜 なでしこ婆さんや」

「ね〜」

「ぐぬぬ……………やっぱりわたしも食べる〜！」

完全敗北したリンとボクとなでしこの三人で焼きマシユマロを食べる。

「「おいしい〜」」

小袋に満々に詰まっていたマシユマロはあっという間にボクたちの胃のなかに収まった。

マシユマロの余韻に浸りながらココアをすすする。

マシユマロとココアという冒流的な組み合わせ。今ならアメリカ人の気持ちかわかる気がする。

「今日はほんと楽しかったね〜」

なでしこがそれはそれは嬉しそうに笑う。

この子はずっと三人でキャンプしたいと言っていた。それが叶ったのだ。その喜びはボクたちには想像もできないだろう。

「……うん、楽しかった」

満足そうに笑うリン。あれだけソロキャンが好きだと言っていたのに、ずいぶんと変わったものだ。

「また三人でさ、キャンプ行こうよ。今度はべつの場所で、もつと凝った料理作ってさ」
「……うん！ またやろう、キャンプ！ いつ行こつかな！ 来週？ それとも来月？」
目を輝かせたなでしこがまくしたてる。

「気が早えよ……まあでも、考えとく」

きつとボクを誘ってくれたときみたいに、今度はリンから誘うんだろうな。

「双葉は……来る？」

リンが上目遣いでボクに問いかける。きつと眠いのだろう。心なしか身体が揺れている気がする。

「……うん、行くよ。ぜったい」

その言葉にリン、そしてなでしこが笑顔になった。

善意と好意に満ち溢れた、嘘偽りのない心からの笑顔。

ボクがキャンプに来てくれる。それだけのことで、ここまで喜んでくれる。笑ってくれる。

「ぜったい、ぜったい行く！」

滲んだ涙を見せないように、大きな声で約束する。

もうボクはポツチなんかじゃない。

ことあるごとにつまらない自虐をするクソザコポツチは今この瞬間をもっていないなくなった。

今ここにいるのは、旅とキャンプが好きで山中双葉というただの女子高生だ。

「そうだ！ せっかくだから今夜はみんなと一緒にテントに——」

「やだ」

「あう！」

なでしこがとんちんかんなことを言おうとしてリンに一刀両断される。

それが微笑ましくてボクはちよつと笑ってしまった。

「双葉ちゃん！ リンちゃんが意地悪するよお」

「勝手に言ってる。ちよつとトイレ行ってくる」

「はーい」

ランプを持って立ち去るリンを見送る。ボクもあとで歯磨きしにここ。静かになった焚き火の前で、ボクとなでしこが取り残される。

「なでしこ」

「なに？ 双葉ちゃん」

真横にいるなでしこが、微笑みながら首を傾げる。

「今日はありがとうね。本当に楽しかったよ」

他にうまい言葉が思いつかないくらい、ただただ楽しかった。

一緒に騒いで、一緒に食べて、一緒に笑う。

一人では絶対に味わえない喜びをなでしこはボクに与えてくれた。

「今日だけじゃない、なでしこにはいつも感謝してるんだ」

本栖湖でカレー麺をわけてもらった日から、ボクはこの子に助けられっぱなしだ。

「改めて言うね。なでしこ、ボクと友達になってくれて本当にありがとう。大好きだよ」

この子はボクに一步踏み出す勇気を与えてくれた。こんなにも暖かい世界が広がっていることを教えてくれた。

この借りはいつか絶対返す。具体的にはご飯で。

幸い料理は得意だ。これからもこの子が喜ぶごはんをたくさん作ってあげよう。

「双葉ちゃん……」

「うん、どうした——」

なでしこが急に抱きついてきて、ボクは言葉を言い切ることができなかった。

もしかして、また泣き出しちゃったのかなあ。

「双葉ちゃん！ わたしも双葉ちゃんのこと大好きだよ！」

違った。なぜなら抱きつく寸前に見たなでしこの顔はこれ以上ないってくらいに笑顔だったからだ。

「わたしと友達になってくれてありがとう！」

なでしこの心からの言葉に、ボクはまた泣きそうになって、上を向いてそれを我慢した。

真つ黒だと思っていた空はよくみたらたくさん星が煌めいていて、まるでボクのことを祝福してくれているかのようだった。

「あ、リンちゃんだ。あれ？ リンちゃん？」

抱きついていたなでしこが首をかしげながらボクから離れる。どうしたんだろうか、振り返って後ろを見る。

「な、なでしこ！ ふ、双葉！」

トイレに行ったはずのリンが血相を変えて戻ってきた。汗だくでひどく怯えている。

「ん？ どうしたのリンちゃん」

「で、でた！ でたんだよ！」

「でた……でたの!？」

「二人とも何のこと？」

リンの言葉になでしこも怯えだした。いったいなんのことだろうか。でたって。

あれ、でた？

でたって、でたってことだよね。

「り、りりりん、おち、おちおち」

「ど、どどど、どうしよう」

「あ、あわ、あわわ」

いつのまにかリンもボクの毛布に潜り込んできて、三人で肩を寄せ合いガクガクと震える。

や、やばい、どうしよう。まじで、でちゃったの？ 幽霊でちゃったの？ ここつて

でるの!？」

「ふ、双葉、な、なでしこ、さ、三人でねよう」

「そ、そそうだねリンちゃん」

「う、うんうんうん！ それがいい！ それがいいよ！」

テントが狭い？ 知ったことか！ ぎゅうぎゅう詰めに入ればきつと入れるでしょ。

『さげもつでござーい!!』

「「ひやあああ!?!」」

向こうから恐ろしい唸り声が聞こえて三人でテントに飛び込む。やばいやばいやばいきちやつた!

しかも叫んでるし、酒もつてこいって、なんて恐ろしいんだ。

……あれ、酒もつてこい?

「ちよつと、見てくるね」

急に我に返り、立ち上がってテントから身体を出す。

「双葉ちゃん行っちゃだめだよ!」

「大丈夫、ちよつと見てくるだけだから」

制止するまでしこに手を振って声のするほうに歩く。ボクの予想が正しかったら

……

「いた」

視界の先に人間サイズの影が見えた。もぞもぞと蠢いていてなんていうか非常に不気味だ。

ふいに月明かりがボクと影に降り注いだ。そして、影に覆われていた正体があらわになる。

「さげじゃんじゃんもってごーい!!」

それは人だった。ボクはこの人に見覚えがある。たしか火熾ししてくれたお姉さんの連れの人だ。

「ほんやはのみあはすそお〜」

酔っ払いすぎて何言ってるのか全然わからん。

「ああもうお姉ちゃん徘徊すんのやめてっていったでしよ!」

火熾しお姉さんが呆れたように酔っ払いの人を引っ張っていく。ていうかお姉さんだったんだ。

「あ、うん、そっか」

心底くだらない事実にも何もかもがバカバカしくなるボク。そのまま声もかけずにテントに戻る。

「あつ、戻ってきた」

「ど、どうだった?」

「べつに、なにもなかったよ。うん、本当になにも。もう寝よつか」

なんかももう本当にくだらなさすぎてどうでもよくなってきた。

持ってきた寝袋を用意する。ちよつと狭いけど今日はこのまま三人で寝てしまおう。

「あ、歯磨きしてなかった」

水場向こうじゃん。めんどくさ……

またトボトボと歩き出すボク。そんなボクを月が冷たく見下ろしていた。

「さけもつてこーい！」
もういいよ。

8話 モンベル ステラリτζジテント2型 32, 12

0円(税込)

8—1

「ここはこのxを代入して……」

寒さもますます増してきた12月。人気もすっかりなくなつた図書室で、ボクは一人テスト勉強をしていた。

「この公式が……」

今日はリンはいない。さつき校舎の窓からビーノが走っていくのが見えた。たぶんテスト勉強でもするんだろう。

「あれがこうだから、えーと……」

一人きりでいると独り言が多くなる。ボツチにとって、会話相手なんて基本的に自分

くらいしかないからだ。

もちろん今は違うけど、身体に染み付いた癖はそう簡単に抜けるものじゃない。

思い返してみれば、最近はいつも誰かと一緒にいたから、こうして一人で勉強するのはすごく久しぶりに感じる。

ちよつと寂しいと思つてしまうのは、贅沢なんだろうか。

そう思うと、なんとなく恥ずかしくなつて思わず髪をかく。色の薄い黒髪が、指に絡まる。

「双葉ちゃんの髪ボサボサだね。だめだよーちゃんと手入れしなきゃ」

「びゃああ!？」

突然真後ろから聞き覚えのある声に話しかけられて、身体がびくりと跳ねる。

「え、だ、誰え?」

慌てて振り返る。

「あはは、双葉ちゃん驚きすぎだつて〜」

ケラケラと笑う斉藤さんがボクを見ていた。なんだ、斉藤さんか。驚いた。

「がおくたべちやうぞ〜! ふふつ、なんてね〜」

爪を突き立てるジェスチャー、猛獣の真似のつもりなんだろうか。斉藤さんも美人だから妙に様になる。

「勉強？ えらいね」

「明後日テストだもん。ここなら人も少ないしき。斉藤さんは？」

「わたしもちよつと勉強しようかなーって思つて。それにしても双葉ちゃん、髪すつこいばさばさになつてるよ」

斉藤さんに指摘され自分の髪を撫でる。あちこち飛び跳ねた枝毛。指に絡まる髪。うん、いつもどおりだ。

「せつかくだし梳かしてあげる。わたしけっこう得意なんだよ」

「え、悪いよそんなの」

「いいからいいから」

ポケットから櫛を取り出した斉藤さんがボクの制止も聞かずに背後に立ち髪を梳かしはじめる。

「前から双葉ちゃんの髪どうにかしてあげたいなあつて思つてたんだよね」

櫛と斉藤さんの指がボクの髪を撫でていく。慣れない感覚に思わず身震いする。

「うん、やつぱり思つたとおりごわごわだ。双葉ちゃん、いつも何で髪洗つてるの？」

「えつと、石鹸だよ」

固形石鹸で頭を洗つて泡で身体を洗う。これぞジャスティス。リンスだのシャンブーだの、硬派なボクには必要な――

「だ、ダメだよ双葉ちゃんそんなことしたら!」

「ひゃ!?!」

温厚を絵に描いたような性格の斉藤さんからは想像もできないくらい声を荒げて注意され、思わず身体がびくりとする。

「そ、そんなにダメ?」

「ぜったいダメ。もう、せつかくかわいいんだからちゃんと手入れしないともつたいないよ」

「か、かわつ?」

聞いたこともないような言葉を言われ身体が硬直する。そしてだんだん恥ずかしくなってきた顔に熱が集まっていく。

「ぼ、ボクべつにかわいくなんて……斉藤さんのほうがよっぽど……」

「そう? わたしは初めて話した時からお人形さんみたいでかわいいなうって思ってたよ」

「う、う、うう……」

冗談で言っているのか本気で言っているのかわからないけど、誉め殺しという未知の攻撃によつて、ボクのクソザコメンタルは早くもキャパオーバーをおこした。

「あはは、ごめんね〜 恥ずかしがらせちゃったかな? お詫びに〜」

斉藤さんがボクの髪に手を伸ばし何やら始めた。いつもリンの髪にいたずらしているおかげなのだろうか、妙に動きが手慣れている。

「はいできた〜」

手鏡を顔の前に差し出される。

「うわあ……」

思わず感嘆の声をあげる。

ボサボサだった髪は丹念に梳かされ光を放ち、耳を覆っていた野暮ったい横髪は耳を大きく出しながらサイドで三つ編みに編み込まれ、今までの野暮ったさが嘘のようにスツキリとしている。

「か、かわいい……」

髪型一つでここまで変わるなんて思ってもなかった。まるで自分が自分じゃないみたいだ。

「でしよ〜？ ちゃんと手入れすればもっとかわいくできるんだよ？」

「そ、そうなの？」

「そうだよ。だから双葉ちゃんもちゃんとお手入れしようね？ わたしが教えるからさ」

表情はいつもどおりニコニコしているのに、なぜだか妙に圧を感じる。

「ね？」

「……はい」

その庄に耐えきれず折れると、斉藤さんはあつという間に元に戻った。

「ふふ、せっかくだし一緒に勉強しようか」

「うん、そうだね」

冬の学校。人気のない図書室で、紙と鉛筆の音がこだます。

「そういえば、さつき2階の理科室に大垣さんと犬山さんいたよ」

そんなこんなでしばらく勉強していると、参考書とノートを見ていた斉藤さんがそんなことを言ってきた。

あの二人まだ学校いるんだ。テスト大丈夫なのかな。とくに千明。

「なんかコンロ使ってるいろいろやってるみたい」

「コンロ？ 新しいキャンプ料理でも研究してるのかな」

なんにせよ今やるべきことじゃない。ちよつと気になつてきたなあ。まだいるかな。いるだろうなきつと。

「気になるっ？」

「うん、ちよつと見に行つてこようと思う」

「じゃあ一緒に行くようよ。わたしも気になるし」

「だね、いこつか」

勉強道具を片付け席を後にする。

ぶつちやけ勉強自体は余裕もいところなので、そこまで必死にやらなくてもいいのだ。
だ。

二人で図書室を後にする。さて、千明とあおいはなにをしてるのかな。

「いた」

理科室の扉の窓をそつと覗き込む。奥の実験台で二人がなにやら怪しい動きをしている。
いる。

『なあ、これめっちゃ熱くなってるけど、本当に大丈夫なのか？』

『一応ネットにはそう書いとるで。てかやるって言い出したのアキやろ』

ここからだど二人が背になってよく見えないが、音的に何かを炒めているらしい。
テスト勉強もしないでなにしているんだらう。

「なんか、そうしてると探偵さんみたいだね。あんばんと牛乳買ってこよつか」

「ちよつと食べたい……けど、それはあとにしよつか」

これからどうしよう。まあいいか、べつに隠れる理由もないし普通に入ってしまおう。

ドアをノック、中に入る。

「ダメだぞー テスト勉強しなきゃ」

「お、ロリ子じゃねえか。まだ——」

振り返る千明。その瞬間、ジユツという何かが焼けるような音がした。

「あつっ!？」

「だ、大丈夫!？」

突然悲鳴をあげて飛び跳ねた千明に慌てて駆け寄る。実験台の上を見ると、フライパンがコンロにかけられていた。

「ああもう、余所見するからや！ 水出したから早う冷やしい」

「い、イヌ子だつてさつきやらかしたじゃねえか……」

「んく？ なんのことかさつぱりわからんなあ」

「こ、こいつ、どさくさに紛れてなかったことにしようとしてやる」

よく見たらあおいの指に包帯が巻かれている。うん、あおいも火傷したんだな。

「なんのことやろなー 変なアキやなー」

「ふふ、なんか面白いね」

熱い熱いとわめく千明、ホラ吹き顔で必死になかったことにしようとするあおい。そして呆れるボク。

場所は変わっても、野クルは相変わらず騒がしい。

「へえ、スキレット買ったんだ」

「ああ、この前しまりんのじいさんのスキレット見てから妙に欲しくなってるな。甲府で買ってきた」

シーズニングが終わったスキレットをやりきった顔で見る千明。台の上には木製のお椀もある。これも買ってきたんだろう。

よく見ると周りにやすりとか木くずが散らばっているし、いろいろやってみたいだ。

「でな、聞いてくれよ！ せつかくいい感じの木皿だと思ったのに、注意書き読んだら水もスープもNGなんだとよ」

たぶんホームセンターとかで売ってる安い木皿なんだろう。なんとなくスープとかダメそうって思ってたけど、やっぱりダメなんだ。

「なるほど、だからヤスリがけして表面のコーティング剥がせばワンチャンいけるんじゃないかって？」

「おう、そういうこつた」

きつとラツカーかなにかを剥がして油でも塗るっていう魂胆なんだろう。

まあ悪い考えじゃないと思うけど……

「でも、そんなことしてて大丈夫なの？ 明後日だよテスト」

「うぐつ……」

ボクの言葉にバツの悪そうに目を背ける千明。やっぱり勉強してなかったか。

「あ、明日から本気出す」

「いや、それ絶対やらん奴のセリフやないか」

あおいの視線の温度が絶対零度にまで下がる。この様子だと、あおいも千明に巻き込まれたんだろうなあ。

「い、いいんだよー！ あたしは尻に火がつかんと動けん女なんだよー！」

「言つとることがダメ人間のそれやな」

「い、言つたなー！ 吠え面かくなよー！ あたしだってな、あたしだってなあー！」

「ふふふ、ほんと面白いねこの子たち」

「いっつもこんな感じだよ二人は」

まるでコントみたいな言い合いを始める二人を見て、ボクと斉藤さんが笑う。

ピコン！ そんなやり取りを眺めているとスマホの着信音が三つ重なって鳴った。

野クルのグループラインになでしこからメッセージが入っていた。

「クリスマスキャンプやりませんか？ だつて」

クリスマスキャンプ、たしかに悪くない。

ちようど冬休みと被ってるし、野クル二回目のキャンプにはふさわしいんじゃないだろうか

「ほお、ええやん。あ、でもうち無理やわ。クリスマス彼氏と過ごすし」

なん……だと……？

あおいの衝撃発言にボクと千明の顔が凍りつく。

え、うそ？ あおい彼氏いるの？ いや、たしかにあおいめちやくちやかわいいしいてもおかしくないけど……

いつできた？ 相手は誰？ あたまの中で疑問がぐるぐる回り出す。

「うそやでー」

……なんだ、うそか。

あんまりにもあつさり告げられたから本気にしてしまった。

「にしても彼氏かー いいなあ彼氏、いくらでもタダ飯食えんじゃん」

「なにその典型的な悪女」

もはや人扱いすらしてない。千明は人間をATMとしか思っていないのか。

彼氏、彼氏かあ……

「ボクは彼氏はいらなかなあ。だって」

青いタンクにシルバーメッキのフエンダー。エンジンは2ストロークの単気筒。

この世で最もかっこいいものを知っているボクに、彼氏なんて俗な存在は必要ないのだ！

「だって？」

「バイクが彼氏だもんね！」

親指を自分の顔に突き立て渾身のキメ顔で言い放つ。

そしてコンマ数秒で後悔した。

……

……

……

「ロリ子、なんかめっちゃプルプルしてるけど大丈夫か？」

純粹に心配する千明。

「顔真っ赤やし涙目やん。きっと、言ったあとで恥ずかしくなってしまうたんやろな」

淡々と追い討ちをかけるあおい。

「わたしは嫌いじゃないな、そういうの」

そして止めのクリティカルヒット。

放課後の理科室。人気も少なくなつた校舎にクソザコの悲鳴が響き渡つた。

「死にたい……やだもう……」

理科室の実験台に顔を突っ伏して羞恥心に悶える。

「ま、まあ、元氣だせつて。誰にでも黒歴史の一つや二つあるから」

千明がボクの頭をポンポンする。嬉しいけどごめん、なんの慰めにもなつてない。

もうこれで何回目だよ！ 何回自爆すれば気がすむんだよお！

「ごめんな双葉ちゃん、からかいすぎてもうたわ。飴ちゃんあげるからそう落ち込まん
といつて？」

顔をあげてあおいから差し出された飴を口の中でモゴモゴさせる。みかん味だ。

「ありがと……おいしい……」

ちよつと元氣が出てきた。顔をあげて頬を叩く。

よし、山中双葉復活。

「そういえばさつきから気になってたんやけど、双葉ちゃん髪型変えたん？ めっちゃ似合っとるやん」

「ああ、言われてみればボサボサじゃなくなってるな。そっちのほうが全然いいじゃねえか」

急に褒められてさつきまでとはべつの意味で恥ずかしくなって後ろ髪を指でくるくるいじる。

「う、うん、斉藤さんにやってもらったんだ」

「へえ、あの双葉ちゃんのボサボサ髪をなんとかしてまうなんて、斉藤さんすごいやん。そういうの得意なん？」

「うん、よくペットのトリミングしてるんだ。うちのワンコもほっとくとすぐボサボサになるんだよね」

「そうやったんか、うちもずーっと気になってたんよ。ほんまありがとうな斉藤さん」
「いえいえ、慣れてますから」

なんか言外にワンコと同じ扱いだと言われているような気がしてならないが、きつと気のせいだと思いたい。

「もう石鹸なんかで洗っちゃダメだからね双葉ちゃん！」

「石鹸って……どうりでボツサボサだと思ったわ」

「双葉ちゃん……それはさすがに引くで」

「……はい、もうしません」

三人から総スカンをくらいあえなく首を縦に振る。どうしよ、家にあるシャンプー使ってみようかな。

「ふふふ、そうだ！ さつき言ってたクリスマスキャンプ、わたしも参加させてもらってもいいかな？」

斉藤さんからの突然の申し出にボクたちは目を丸くした。

言っっては悪いけど、あまりこういうことに興味がなさそうだと思っていたから意外だ。

「最近みんなキャンプハマっててどんなのかなあつてずっと気になってたんだよねえ。大丈夫かな？」

「もちろんええに決まつとるで！ ちょうど誘おうと思つとつたところなんよ。ええよなアキ、双葉ちゃん！」

「千明」

「ロリ子」

一瞬千明と目を見合わせる。考えていることは同じようだ。斉藤さんに向き直り笑

顔で頷く。

「ありがと〜 じゃあよろしくね!」

これで五人になった。リンはどうするんだろう。できれば来てほしいけど、ちよつと難しいかな。

「それでキャンプのことなんやけど、一応うちら泊まりになると思うんよね。どないする?」

ああ、そういえばそうだった。斉藤さんはたぶん何も持っていないだろうしテントに泊まりこみっていうのは難しいか。

「デイキャンプつちゆうのもあるから寝袋なくても全然大丈夫やで」

「あ、それなら大丈夫。お父さんにキャンプ興味あるって話したら、お金出してくれるらしくて。今度道具買うんだ」

な、なんて太っ腹なお父さんなんだ。ボクのお母さんはクリスマスプレゼントくらいしか送ってくれないのに。

「何から買ったほうがいいかな? やっぱリテント?」

「いや、まずは寝袋だな。テントはうちのらに入れば……」

何かに気がついたように言いよどむ千明。少ししてからボクも気づいてしまった。

「あ、待てよ。無理じゃね? 今五人だから……」

「ちよつと、厳しいね」

テントは一応二つあるけど、三人で入るのはちよつと無理がある。

よし、ここはボクがクソザコ野宿野郎としての本領を發揮する時がきたということだな！

「なら、ここはボクが野——」

「ダメに決まつとるやろ」

あおいがボクの頭にチョップする。

「いたつ、な、なにすんだよー！　まだなにも言つてないじゃないかー！」

「どうせ野宿する言うんやろ？　ドヤ顔でなにアホなこと言つとんねん。んなもん却下や」

「だな」

「あ、あはは」

しかめつ面に苦笑い。うーん、我ながらグッドアイデアだと思つただけだなあ。

「ダメ？」

「ダメ」

そつかあ……野宿ダメなんだあ。楽しいのになあ……

あの人間としての底辺に行く妙な解放感がたまらないのに。

まあ、ダメならダメでべつの方法に変えるだけだ。

「わかった。しかたないからボクもテント買うよ。どうせそろそろ買おうと思ってたしね」

「え、お金大丈夫なのか？ この前バイト探してただろ」

千明が心配してくる。そっか、たしかにバイト探してるってなんて聞いたら普通はお金ないと思うよね。

「ふっふっふ、こう見えてもボク実はけっこうお金持ちなんだよ」

「そうなん？」

「うん、1学期に週7くらいでバイト入れてたらめちやくちや貯まってた」

具体的には原付の新車を一台買えるくらいには貯まっている。

バイク買ったたり免許取ったりしたうえでそれだから、本当ならもつと貯まっていたのだろう。

「週7って、休みねえじゃねえか」

「わあ、大変だったね」

「さすがに一つのバイトじゃダメだから掛け持ちしてね」

あの時は大変だったなあ。コンビニやってスーパーやって……思い返してみればよく務まったと思う。

あの時は夢に向かつて一直線だったから、とくに考えてなかったんだろうなあ。「だからお金のことなら気にしないでいいよ」

もちろんこの調子でポンポン使えばあつという間に底をつくのはわかっている。いかげんバイト先見つけないとなあ。なんかいいのないかな。

「野クルで一番いいテント買ったちゃうもんねー ふはは、うらやましかろー」

「くそう、ブルジョワめえー」

「みつともない嫉妬やめいや。そんならテスト明け、みんなでカリブーなんてどうや？ 斉藤さんもどう？」

「カリブーってアウトドアシヨップだよね？ いいなあ、わたしも行きたい」

満場一致。なでしこだけいないけど、きつと聞くまでもないだろう。

「よし！ じゃあテスト明け、みんなでカリブー行くぞー！」

「「「おー！」」」

人気の消えた放課後の校舎、四人の掛け声が吸い込まれていく。なんだか楽しくなってきたぞ。

12月。今年も残すところひと月を切っていた。

月日が進むのは早いもので、ついこないだまで11月だったのに、気がつけば12月も初旬を過ぎようとしていた。

学校を出て、身延線の線路に沿うようにビーチヤンを走らせる。

周囲の山々は葉をすっかり落とし本格的に冬支度をすませようとしていた。

「テスト終わったあ〜！」

バイクを走らせながら、解放感に打ち震える。

これで二学期の面倒なイベントはひと通り終わった。あとは休みまでのわずかな期間をカウントダウンしていくだけだ。

「試験休みどころか行こー」

土日も含めれば4連休とそこそこ長い休みが待っている。

いつもの旅のようにカツカツのスケジュールにしなくても、それなりに余裕を持って

行動できるわけだ。

「今度こそ琵琶湖行きたいなー」

前に行った時は琵琶湖にたどり着いて次の日に帰ってしまった。今回は時間もあるしきちんと一周したい。

「よし次の目的地けつてー」

そんなことを考えながらバイクを走らせる。

学校帰りだからしかたないけど制服でバイクに乗るのはやはり寒い。

上半身はワークマンジャケットのおかげで何ともないけど、下半身はどうしようもない。

ファッション性をかなぐり捨てた防寒タイツ、厚手靴下にブーツとできる範囲で装備は整えていても、元がスカートだからどうしたって無理がでる。

スカートの下にジャージでも履けば解決するのだろうけど、それをやってしまうと女子としての何かが終わってしまう気がして踏み切れないでいる。

「いつそのことキュロットにでもすれば……いや意味ないか」

バカなことを考えながら富士川に沿って走っていくとちよつとした町が見えてきた。身延町だ。

町に入り、駅の手前にある商店街の駐車スペースにビーチちゃんを停める。

スロットルをぶん回し、プラグに被っているガソリンを吹き飛ばす。

最近覚えたテクニックだ。こうすることでエンジンか気持ちかかりやすくなるらしい。唸るエンジンを横目にキーを抜く。

エンジンの放つパチパチという音を聞きながらシートから降りる。

「四人はまだだろうなあ」

単体なら電車のほうが早いけど、駅までの移動時間や待ち時間を含めるとどうしてもバイクのほうが早くつく。

スマホを取り出しラインを起動する。

双葉：カリブーついたよー

あおい：はやっ！ うちらちようど電車発進したところや。あと2、30分ですくと
思うから、もうすこし待ってな

双葉：はい、じゃあお饅頭でも食べて待つてるね

なでしこ：お饅頭!? 身延ってお饅頭売ってるの!?

双葉：そうだよここのお饅頭はすごくおいしいんだよ

なでしこ：ご、ごくり……

双葉：あんまり来るの遅いとお店のお饅頭全部たべちゃうからね

なでしこ：え、まっつてよ！

スマホをしまう。ボクも冗談を言うのが少しは上手くなってきた気がする。

「お饅頭かってこよー」

ビーちゃんをあとにして歩き出す。この時間帯は焼きたてに出会える確率が高い。

「おつまんじゅう、おつまんじゅう」

歌とスキップ。静かな冬の身延町に楽しげなボクの声がこだます。

「へえ、ヒーターアタッチメントか」

身延駅。改札前のベンチに腰掛けスマホでキャンプ道具を紹介している動画を見る。

バーナーにセットしてちよつとしたストーブ代わりになる便利アイテムらしい。

ガスバーナーで使うのはあまり推奨されていないみたいだけど、工夫すれば使えない

こともないらしい。

「ヒーターの上でお湯も沸かせるんだ。いいな〜」

ちよつと気になる。なによりキャンプでストーブが使えるのがすごく魅力的だ。

「カリブーで探してみようかな」

「あ、双葉ちゃんだ。おーい」

声がして顔を上げる。斉藤さんと野クルの三人がボクに手を振っていた。

「おまたせ、双葉ちゃん」

「待たせてわりいな、寒かっただろ」

「ほんとだよー 寒くて死んじゃうかと思った」

いつももつときつい環境でバイクに乗っているから平気だけど、実際吹きさらしの構内で30分近く待つのはなかなかきつかった。

「もしかしてずっとここに座ってたん？ お店の中でまつとつたらよかったのに」

あおいのもつともな意見。だけどあおいは勘違いをしている。それは一般論だ。

「あおい、店員さんの目をかいくぐって30分もお店に居座る度胸がボクにあると思う？」

「……あー」

遠い目をするあおい。うん、物分かりがよくてよろしい。

あ、そうだ。ポケットから身延饅頭を出す。

「双葉ちゃんそれもしかして！」

「そう、これが身延饅頭。はい、あーん」

包みから出した饅頭をなでしこに差し出す。

「くれるの！ ありがとー！」

飛びつくように饅頭にかぶりつくなでしこ。

「ん〜 おいひい〜」

おいしいおいしい言いながら口をモゴモゴさせている。きつと尻尾が生えていたらぶんぶん揺れているだろう。

「ワンコだな」

「ワンコやな」

「ワンコだね〜」

「へえ？ そうだ！ みんな早くカリブー行こ！」

しゅっぱーつと掛け声をあげて町に飛び出すなでしこ。外は寒さを増す一方だというのに、なでしこは相変わらず元気いっばいだ。

「テスト終わったばっかだつてのに、ほんと元気だよなあいつ」

「風の子なでしこ元気の子、やな」

「アキちゃん！ カリブーつてどっちー？」

「左だー！ はしゃいで転ぶなよー」

「わー！ ワンコだあー！」

「つて聞いてねえし」

「あははは」

初めて訪れる町に大はしゃぎのなでしこ。

そんななでしこのぶんぶん揺れる尻尾を幻視しながら身延の町を歩き出す。目指すはカリブー、新しいテントがボクを待っている。

カリブーのドアを開けた瞬間、ボクたちの目に飛び込んできたのは視界を覆いつくすほどの大量のアウトドアグッズだった。

「ふおおお！ すつごーい！」

「やっぱここはいつ来ても心奪われてまうなあ」

甲府のカリブーにはリンと来たことがあるけど、この光景は何回見ても圧倒される。

「わたし、こういうところ初めて来たんだけどすごいね。これ全部アウトドア用品なんでしょ？」

「そうやでく薪にウエアにテントに寝袋。ここで手に入らんキャンプグッズはたぶん経験くらいやろうな」

「だが気をつけろよ斉藤。ここに飾られている商品はどれも超高額商品だ！ ちよつとでも隙を見せてみる！ 骨の髄まで搾り取られて——」

「店員さんすいませーん、ちよつと寝袋探してるんですけど」

突然わけのわからない電波を受信しはじめた千明をスルーして斉藤さんは早くも店

員さんのところに行つてしまった。

「あ、あたしの忠告を無視するとは、どうなつても知ら——」

「もうみんな行つちやつたよ」

あおいも今さつきなでしこについていつて店の奥に姿を消した。ここにいるのはボクと千明だけだ。

「え、マジ？ くつ、バカな奴らめ。自分から命を投げ捨てるよ——」

「はいはい、ボクたちも早く行くよ」

悪ノリを続ける千明をばつさり切り捨て店の奥に踏み込む。今日は前と違って明確に目的がある。

「千明、テントつておすすめある？」

「やつぱマジで買うんだな。おすすめかあ、あたしも安物しか使つたことねえしなあ。まあモンベルとかコールマンあたり買つとけば問題ないだろ」

モンベル。リンが使っているのテントもモンベルだったつけ。あれ快適だったなあ。「バイクに積むつてなると登山用とかいいんじやねえの？ あれなら軽いし畳むとめっちゃ小さくなるぜ」

「ふむふむ、登山用か……」

「へへへ、旦那様。ちなみにご予算はいかほどでございましょうか」

揉み手で眼鏡をギラギラ光らせる千明。悪徳商人かな？

「まあ高くても5万くらいかなあ。それ以上はちよつとね」

「ぶ、5万だと……」

悪徳商人みたいな話し方も忘れてフリーズする千明。よく見たら鼻血出てるし。

「鼻血出てるよ。はいティツシュ」

「あ、すまん。あまりの値段に脳が拒絶反応おこしたみたいだ」

どんな体質？ 千明の謎体質に首を傾げながらテントのコーナーで足を止める。

収納袋にコンパクトに袋詰めされたテントの数々を眺める。

「いろいろあるね。どれにしようか迷っちゃうよ。あ、これ意外と安い」

目につくものを適当に物色していく。キャンプに関しては素人もいいところだけ、とりあえず値段と大きさで選んでいこう。

「にしても意外だなあ。あれだけ野宿野宿言ってたロリ子がテント欲しがるなんてよ」

ボクがテントを吟味していると、千明が感慨深そうにつぶやいた。千明の言うとおりだ。

かさばる、高い、手間がかかる。それっぽい理屈で理論武装してはなから拒絶していた。

「食わず嫌いってことに気づいただけだよ」

でもそれは間違いだった。旅には旅の良さがあつて、キャンプにはキャンプの良さがある。

それを気づかせてくれたのは、ここにいるみんなだ。

「へへ、ロリ子もやつとキャンプの楽しさに気づいたつてわけか。楽しいだろー？ キャンプ」

「うん、すつごい楽しい」

ボクがそう言うのと千明はにっこりと笑つた。

「なら、自分のテント買ったらもつと楽しくなるぜ！」

「だね。それで、結局どうしようかなあ」

目についたテントを手取る。

モンベルのステラリッジ2型、か。びっくりするくらい軽い。たぶん2キロもない。

「お、それ登山用のやつだろ。そいつはフライシートとセットで使うもんだぜ。あつた、これだ」

もう一つの袋に収まつたシートを受け取る。これもすごく軽い。まるで羽みたいだ。

「フライシートつてなに？」

「簡単に言つちまえばテントカバーだ。この手のもんは本体が軽い分薄いから、これで埃とか雨風から布地を守るんだ」

「そっか、カバーが破けても修理したり交換すればいいだけだもんね」

「あとフライシートがあると前室って言ってちよつとした空きスペースが作れる。そこに荷物置いたりバーナー使ったりするんだ」

「へえ、いろいろ考えられてるんだね。じゃあこれは必要だ。値段は……二つ合わせて4万5千か」

ギリギリ予算の範囲に収まっているし、何より軽いのが気に入った。色は……青があるな、青は大好きだ。

決めた、これにしよう。

「ちよつと買ってくるね」

「へい、まいどありー」

「千明はお客さんでしようが」

相変わらずふざけてる千明に呆れながらレジに向かう。

これからこのテントがボクのものになるのかと思うと、テンションが上がる。

「ふへ、ふへへ」

この変なニヤけかた、バイク屋でピーちゃんで購入手続きをしていた時を思い出す。

あ、そうだ。ついでだし動画で見たあれも買っていこう。スキップしながらバーナーのコーナーに向かう。

「あつた」

コールマンのヒーターアタッチメント、値段も安い。この子も買っていこう。足が軽い。ワクワクとドキドキが止まらない。

「すいませんお会計おねがいしまーす！」

店員さんにテントとアタッチメントを渡し会計をすませる。

テントとフライシート、そしてヒーターアタッチメント。合計49,960円

かなりの出費だけど、下手に安いものを買うくらいなら最初からちゃんとしたものを買うべきだ。

それにどうせいつか買うなら今買おうが後で買おうが同じだ。

「おーいロリ子〜 こっちこっちー」

会計をすませ品物を受け取ると千明の呼ぶ声があった。声のする方に向かう。

展示品のコーナーのキャンプチェアーにみんなが身体を埋めていた。すごいくつろぎっぷりだ。

「テント買ってきたよ〜」

「え、なにに？ なに買ったの？」

なでしこが目をキラキラと輝かせボクを見る。

「これ、モンベルの登山用テント。すっごく軽いんだよ」

展示品のキャンピングテーブルの上にテントを置く。新しいテントに四人が興味深そうに身を乗り出した。

「うわ、ほんまや！ これめっちゃ軽いやんけ」

「ふへへ、でしよ〜」

「おいおい、すつげえだらしない顔になってんぞ。まあ気持ちはわかるけどよ」

ボクそんな変な顔してるのかな。両手を頬にあてたしかめる。うわ、ほんとだ。めっちゃ緩んでる。

「そういえば斉藤さんも寝袋買ったの？」

「うん、わたしこういうのよくわかんないから、とりあえず店員さんのおすすめにしてみただ〜」

そう言つてテーブルの上に寝袋を置く。なんかやけにコンパクトだ。ボクの使つてゐる寝袋の半分くらいの大きさしかない。

これはまさか、噂に聞くダウンシユラフというやつじゃないか。

「へえ、こんなちつこくなるんだ。あ、値札ついてる……よ、4万4千円!」

値札を見たまでしこが悲鳴をあげる。知識では知つてたけどやっぱり高いなあ。

斉藤さんはこんなものをお父さんに出してもらつたのか……

「さ、斉藤……お前、実はいいところのお嬢様だったりしないか？」

「え、普通の家だよ」

「くつ、これが格差社会つてやつなのかあー!」

「アキ、鼻血でとるで」

「おわっ!?!」

千明がまたわけのわからない謎體質を発動させている様を横目に、ボクも余っていたキャンプチェアに腰をうずめる。

「ふう〜」

まさに天にも昇る心地。ちゃんとした椅子だけあって、ボクの買った安物のアルミチェアとは大違いだ。

ほしいけど、原付のビーちゃんに積むのは厳しいだろうなあ。荷台でもつけようかなあ。

まあ、売ってればの話だけど。きつと売ってないだろうなあ。

「なでしこ、なんかほしいのあった?」

「うん、いいのはあったんだけどね、まだ手が出せないや」

「高いもんねえ」

いろいろ見てきてわかったが、キャンプというのとはともかくにもお金がかかる。外でバシバシ使うものだから、どうしても高くなってしまうのだろう。

その分長く使えるのだから悪いことじゃないんだけど、やっぱり高いものは高い。

「けど、こうして憧れている時間が一番楽しいのじゃよ。ほっほっほ」

「そうじゃの〜」

「おーい、その老人どもー ボケるのはあと70年くらい先だぞー」

「はーい」

なんかこういうの楽しいなあ。

そうだ。席を離れみんなの前に立つ。スマホを取り出しカメラを起動。

「みんなーこっちみてー」

なにか言うまでもなく意図を理解したみんなが、ボクのスマホの画面に入り込むように身を寄せ合う。

ちよつと前までなら自分から写真を撮ろうなんて口が裂けても言えなかったけど、今はもう違う。

「はい、ぴーす」

パシヤリ。思い出がまた一枚増えた。

撮った写真を確認。あ、ボク鼻から上しか映ってないじゃん。まあいいか。

「よし、そろそろ帰るか」

「せやな、目当てのもんもこうたしな」

よく見たら鞆の横に丸まった銀マットが置いてあるのが見えた。寝袋の下に敷くのだろう。

ていうか今までマットなしで寝てたのか。ボクだったら絶対無理だ。

「あ、わたし身延饅頭食べていきたいなあ」

「わたしもわたしもー！」

「お、いいじゃねえか。よーしお前ら！ あたしについてきやがれ！」

「おー！」

「もう、お店で走ったらあかんで」

「ふふふ、二人とも元氣いっばいだ」

走り出した千明となでしこを追いかけて、三人でカリブーを後にする。

冷え込む夕方。だけど、ボクの心はとっても暖かかった。

『へえ、あいつも寝袋買ったんだ』

「うん、ダウンのすごい高いやつだった。お父さんがお金だしてくれたみたいだけど、す

ごい太っ腹だよね」

『あいつの家いろいろ謎だからなあ』

そんな楽しい出来事があった日の夜。ボクはリンと電話をしていた。リンとこうすることもずいぶん増えてきた。ボクからかけることもあるし、向こうからかけてくることもある。

たいていはキャンプやバイクの話ばかり。なにかの役に立つというわけではないけど、楽しい時間だ。

『双葉もテント買ったんでしょ？ なでしこがラインで言ってたよ』

「あ、知ってた？ ボクもついに買ったんだ！ モンベルのステラリッジってやつ」

『え、それかなりガチなやつじゃん』

「ふへへ、そーなんだー」

『双葉、めっちゃ声ニヤけてるし。いいな、今度キャンプするとき見せてよ』

「うん！ あ、それでね。ちよつとリンに聞きたいことがあってさ……」

『なに？』

「今度ね、野クルと斉藤さんでクリスマスにキャンプすることにしたんだけどさ……」

そこまで言つて言いよどむ。これから言うことはボクのこれまでの人生では必要のない言葉だったからだ。

『双葉？』

けど、今さら遠慮する必要もないか。大事なのは一步踏み出す勇氣だ。大きく息を吸ってぎわつく心を落ち着かせる。

よし、もういける。今のボクなら大丈夫だ。

「えつとね、その……リンがよかつたらさ、一緒にクリスマスキャンプ、しない？」
言えた！

ちよつと一瞬つつかえそうになつたけど、普通に言えた！

心臓がバクバクして顔が、心が熱くなる。

今までずっと受け身だった。

でも今日は違う！ 初めてだ！ 初めて友達を誘うことができた！

誰かに頼まれたわけでもない。ボクの意味で、友達をキャンプに誘うことができたんだ！

「リンが一人でキャンプするのが好きなのは知ってるよ。ボクもずっと一人でいろんなことしてきたしさ」

旅だの料理だのコーヒーだの。なんだかんだいってそれなりに楽しんでた。

「リンのおかげで誰かとなにかをすることの楽しさに気づけたんだ。だから、リンにも知ってほしいっていうか……なんていうか、その、うん」

上手い話かと思いつかず言葉が途切れてしまう。

「えっと……えっと、えっと」

ええい！ もうやけだ！

「ぼ、ボクはリンとみんなでキャンプしたいんだ！」

理屈をこねても結局ボクの言いたいことはそれにつきる。

「その……どうかな？」

『ごめん、それ斉藤にも誘われたんだけど断った』

「え、あ、うん。そっか」

『でも、考えておく』

リンはひと言そう言った。

考えておく。やだでも、行かないでもなく、考えておく。リンはそう言ったのだ。

「……うん！ わかった！」

けど、それで十分だ。

リンの性格はよくわかってる。一回断った。でも考えておく。つまりは、そういうことだ。

電話を持つ手が震える。けどさつきまでとは震える理由が違う。

理由は言うまでもないだろう。

『双葉、めっちゃ嬉しそう。まだ行くって言ってないってわかってる？』

「うん！ 知ってるよ！ 楽しみにしてるね！」

『……ふふっ、もうそれでいいよ。ていうか、わたしだってなんでもかんでも一人でやりたいって思ってるわけじゃないからね』

「あ、ごめん」

たしかにさっきの言葉は決めつけがすぎた。

よく考えなくても今までさんざんキャンブに誘われてるのに、今さら一人が好きなのに誘ってごめんねってのもおかしな話だ。

『一人はたしかに好きだけど、もうそれだけじゃないっていうか……そ、その、言わなくてもわかるでしょ？』

「うん、よくわかる」

一人が好き、なんじゃない。一人も好き、なんだ。つまり、ボクと同じだ。

『あと、もうわたしとかなでしこがいるんだからさ……ずっと一人とか、そんな寂しいこと言うなよ』

少し照れたような、けど暖かい言葉。

ちよつとした言葉のあやなのはリンだつてわかっているはずなのに、この子は本当に優しい子だ。

でも、そんなさり気ない気遣いがすごく嬉しい。

「えへへ、ごめんね」

『ふふつ、なに笑ってるの？ まあいいや。それで話は変わるんだけどさ、今度の11、12日、なでしこと三人でキャンプ行かない？』

テスト休みの4連休。キャンプをするにはうってつけの日だ。

願ってもない話だ。けど……

「ごめんねリン、その日は行きたいところがあるんだ」

断りの言葉を発すると、ちよつとだけ心が傷んだ。

『あつ……そう、なんだ。わかった。ならしょうがないか』

「ほんとごめんね」

『べつに謝らなくていいって……そりゃあ、ちよつと残念だけどさ。ならまた近いうちにバイクでキャンプ行こうよ。今度は双葉についてくからさ』

「うん、絶対行く！」

『じゃ、約束』

「約束」

電話越しに指を切る。

近いうち、きつと本当にすぐ先のことになるだろう。楽しみだなあ。どこいこうかな。

『言つとくけど、片道200キロ以内にしろよな』

「えー」

『えーじゃないよ』

200キロなんてちよつとしたお出かけじゃないか。せつかく遠出するんだから往復1000キロとかにしようよ。

「どうせなら大阪いこうよ。今ならたつたの400キロだよ。15、6時間走るだけであつという間につけるよ。楽しいよ。」

大都市だからきつと死ぬほどつらい地獄の渋滞が待つてるけどね！

すり抜けで何キロも走ったりするんだろうなあ。

『キャンプだつってんだろ。せめて中部地方にしてくれ……ちなみに、11日どこ行くの？』

「琵琶湖、前に行ったときはすぐ帰っちゃってさ。今度はちゃんと一周するんだ！」

なんせ時間はたつぷりある。この日を逃す理由はない。

「せいぜい800キロちよつとだし、すぐ行つてすぐ帰つてくるよ。写真送るから楽しみにしててね！」

『あ、うん……もうなんも言わんわ』

「どうしたの、リン？」

スピーカー越しに深い、それは深いため息が聞こえた。

『なんでもない。とりあえず、本当に気をつけてね。あんな無茶すんなよ』

「うん！　ありがと。じゃあこれで。また明日」

『うん、またね』

電話を切る。さーて、そうと決まれば今のうちに琵琶湖へのルートでも決めておくか。

そう思った矢先だった。

「あ、メッセージ入ってる」

電話中で気づかなかったけど、メッセージが入っていた。綾乃からだ。

双葉：ごめん、電話してた

綾乃：いいいいいよー

双葉：それでどうしたの？

綾乃：なでしこから聞いたんだけどさー11日から休みなんだってね。またどっか行くの？

双葉：うん、琵琶湖行こうって思ってる

綾乃：ほ、ほんとに行くんだ

双葉：時間もいっぱいあるしね

綾乃……………

双葉：綾乃？

綾乃：実はわたしもその日休みなんだけどさー

双葉：うん

綾乃：ついてついていい？ 琵琶湖

双葉：え？

え？

9話 琵琶湖大橋有料道路 原付通行料 10円

9—1

早朝の4時。ボクはいつものように目を覚めました。

「ふわあ〜」

カーテンの隙間から見える真つ暗な空に目をやりながら起き上がり軽く身体を伸ばす。

トイレと洗面を済ませて軽めの朝ごはんを食べる。メニューはいつもどおり卵かけご飯と味噌汁。

「あ、お母さんからライン来てる」

手元に置いていたスマホを手に取りメッセージを見る。内容はまあいつもどおりだ。元気が、ご飯は食べているか、怪我はしてないか、というありきたりな内容。

「元気だよー」

と、いつもどおり適当に返す。一応一枚だけバイクの写真でも送っておくか。「そういえば、もうすぐクリスマスかあ」

あと2週間もない。お母さんは今年はどんなプレゼントを送ってくるつもりなのだろうか。

「まあいいか」

手早くご飯を食べ終え終食器を片付ける。部屋に戻り寝巻きを着替え旅支度を整える。

「まさか、綾乃本当について来る気なのかな」

着替えながらこの前のラインでのやりとりを思い返す。

双葉：え？ ついて来るって本気？

綾乃：そうだよー もしかして一人で行きたかった？ だったらごめん

双葉：や！ 全然そんなことないけど、いきなりどうしたの？

綾乃：あれからわたしもいろいろ行ってみて少しは慣れたし、思い切つて遠出してみようと思つて

綾乃：でも、さすがに一人だと不安だから双葉と一緒になら安心かなーつて

双葉：安心って……琵琶湖だよ？

綾乃：浜松からなら200キロだし、エイプならへっちゃらへっちゃら

双葉：うーん……

綾乃：……やっぱダメかな？

双葉：むむむ、わかった！ 一緒に行こう。けど、装備とか大丈夫？ たぶん1日目は野宿することになると思うよ。

綾乃：それなら心配しなくていいよー こっちもいろいろ集めたしね

双葉：りよーかい！ ならボクに任せて！

綾乃：じゃ、よろしく！ ……あれ、1日目？

「とは言ったものの……ちよつと心配になってきたな」

浜松から琵琶湖はだいたい200キロ。

たいした距離じゃないけど、それはボクにとつての話で、綾乃にとつてはかなりの長距離だろう。

「まあ、ちよつとでもやばそうだったら引き返せばいいよね」

久しぶりの一人旅、かと思ったら思わぬ同行人ができて驚いているけど、なにより

せつかくの綾乃とのツーリングだ。心配をするよりもまず楽しまないと。

「なでしことリンは川辺でキャンプ、かあ」

あつちもあつちで楽しそうだ。なでしこ、興奮して風邪でもひいてなきやいいけど。

「さて、そろそろ行きますか」

家でやることは全てすませた。もうここにいる意味もない。部屋を出て玄関に向かう。

「じゃ、行って来ます」

誰にいうわけでもなくつぶやく。玄関のドアを開けると、冬の冷気がボクを殴りつけた。

「さーむーいー」

日が出てないからしかたないけど、やっぱりめちやくちや寒い。これから15時間近くバイクに乗りっぱと考えるとさすがに気が滅入ってくる。

玄関を後に隣接するカーポートに向かう。

ビーちゃんにかけた真つ黒いカバーをとっぱらい、柱に括り付けていたチェーンを外す。

「寒かったでしょ、ビーちゃん」

サムイヨー！

そんな声が聞こえた気がしてちよつと笑う。中に入れるわけにもいかないし、こればかりはしかたない。

キーを差し込んでハンドルロック解除。燃料コックを捻りガソリンを常時供給に切り替える。

昨日のうちに縛りつけていた荷物を軽く点検する。前と違ってテントが増えたので念入りに確認する。

ナビを起動してあらかじめ設定していたルートをセット。

リンからもらったヘッドセットを耳にはめ込みヘルメットを被る。そろそろガソリンも十分にエンジンに行き渡ったころだろう。

ハンドルを握ってビーちゃんを道路に持っていく。

イグニッションスイッチをオン。戻すのを忘れていたウインカーが、カチカチと点滅したので元に戻す。

チヨークを引く。キックペダルを出す。二、三回踏み一番重くなつたところでいったん足を離す。

そして、思い切り蹴り飛ばす。スロットルを回す。マフラーが白煙を撒き散らし2ストロークのエンジンが唸る。

カタカタとアイドリングを始めたビーちゃんに跨りチヨークを戻す。サイドミラー

の位置を調整しゴーグルをかける。

ウインカー、クラッチ、スロットル。後ろを確認しクラッチを離す。

回り出すタイヤ。景色がゆつくりと流れていく。ヘッドライトの黄色い灯りが住宅街を照らす。

冬の身延、ボクとビーちゃんが駆け抜けていく。

「んまー」

静岡県、浜松市。国道409号線、弁天島海水浴場。

コンビニの駐車場から見覚えのある海岸を眺めながら肉まんを食べる。コンビニはいつでも暖かいものが食べられるからいいよね。

着信音、ラインだ。リンからみたいだ。

リン：いま、電話大丈夫？

双葉：大丈夫だよー

そう返信すると、数秒もたたないうちに電話が入った。ヘッドセットをつけたままだったので、そのまま電話に出る。

「ボクだ」

『いや誰だよ。まあ知ってるけど』

今電話するって言ったばかりだもんね。

「どうしたの?」

『双葉どうしてるのかなって思つて。そういや知ってる? なでしこの奴風邪引いたんだって』

「え、ほんとに? あのなでしこが?」

驚いた。あの元気の塊みたいな子が風邪を引くなんて。そういうこともあるのか。

『わたしもすげー意外だった。もう熱下がってるみたいだから大丈夫だろうけど、さすがにキャンプは無理だから今日はソロキャン』

「そっか、残念だったね。でも元気そうならよかつたよ。今どこいるの?」

『長野の南のほう、上伊那つてところに行つてる。アルプス越えようとしたら道通行止めでびっくりした。今来た道戻つてるところ』

また長野か。高ボツチ綺麗だったもんね。リンがはまるのも無理ないか。でも通行止めつて、穏やかじゃないなあ。

「ありや、そこらへんよく規制されてるもんね」

『せっかくナビあるんだからちゃんと使えばよかつたわ。そっちは?』

「ボクは今浜名湖だよ」

『……もうそんなところにいるのかよ。双葉は琵琶湖行くだっけ?』

「うん、今日は綾乃も一緒」

『え、マジで?』

リンから驚きの声があがる。たしかにボクも未だに半信半疑だ。昨日の夜も連絡を取り合っていたし、来るんだろうけど。まさか綾乃がって感じた。

「なんか琵琶湖行くなって話したら一緒に行くって言ってきた」

『……双葉、その子になに吹き込んだの?』

「ひどっ!」

あんまりな言い草。吹き込んだって言い方には語弊がある。ボクはただ旅の素晴らしさを語っただけなのに。

『冗談、でもほんとに気をつけてね。わたしも行きで暴走族の集會に巻き込まれたし』

「ああ、ボクも湘南あたりで巻き込まれたことあるよ。そっちも気をつけてね」

『ういー ついたら写真でも送ってよ。こっちも送るからさ』

「うん、じゃーねー」

『またね』

電話を切る。現在9時40分。綾乃はいつ来るのかな?

「動くな」

ゴリつと背中に硬いものが押しつけられる。たぶん形的にスマホだな。

「今、双葉の背中に爆弾を仕掛けた。命がおしかつたら3秒以内に浜松餃子を百個用意するのだ！」

「はいよ」

つつこみきれなくなつて振り向く。見覚えのある顔がボクを見ていた。

「はいどかーん。残念、双葉の冒険はここで終わつてしまった！」

「いや、この距離だと綾乃も死んでない？」

「だいたい3秒で餃子百個は無理がある。というかまだ店やってないし。」

「だよね」

綾乃が笑う。ひと月ぶりの再会にもかかわらず、ふぎけきっている綾乃に思わず笑つてしまう。

「久しぶり、双葉」

「久しぶり、綾乃」

おもむろに拳を突き出す綾乃。一瞬とまどつたけど、すぐに意図を理解して、同じように拳を突き出す。

コツン、拳と拳をぶつける。同じバイク乗り、大袈裟なりアクションなんて必要ない。

「こういうの一回してみたかったんだ」

「映画の見過ぎじゃない？」

「いいじゃんいいじゃんかつこいいし」

「たしかに」

実際ボクも一瞬ときめいた。

でも、こういうのってだいたいラストの別れのシーンとかでやるものじゃない？ ま

だ再会したばかりだよ？

まあいいか、それよりもだ。綾乃のエイプに視線を移す。

以前と何も変わってない。相変わらずかつこいい。けど前と明確に違うのは荷物が積まれていることだ。

形からして寝袋にマット、あとたぶんテントもある。けっこう重装備だ。

「これ気になる？」 なでしことか双葉の話聞いてたら気になつてさ。あれからいろいろ集めたんだよね。ほとんど中古だけど」

「すごいじゃん。へえ、綾乃もキャンプ始めたんだ」

「あはは、実を言うとまだしたことないんだ。だって寒いじゃん。あ、テントなら浜名湖で何回か張ったよ」

「まあ、それが普通か」

ボクの周りがちよつと変わってるだけで、世間一般の認識なんてこんなものだろう。

ソロキャンも冬キャンも普通はやらないらしい。なら一人旅してる女子高生なんてもしかしたらボクだけかもしれない。

「それで、これからどうするんだっけ？」

「二応、1号走って名古屋経由して夜の7時くらいに琵琶湖到着の予定。それから湖畔の公園で野宿して明日琵琶湖一周。明後日帰宅って感じかな」

ボクにしてはずいぶんと緩いスケジュールだ。いつもなら4日も休みがあるなら九州くらい行くだろう。

「あー、うん。わかってたけどすっごいハードスケジュール」

総走行距離880キロ。浜松からの綾乃はだいたい550キロ。まあちよつとした遠出つてところだ。

「ちなみに帰りは大回りして岐阜経由か来た道戻って愛知経由か選べ——」

「ぜったい愛知！」

「えー」

帰りに長野よって高ボツチ見てから帰ろうと思ったのに。まあしようがないか。素直来た道Uターンしよう。

「……双葉って、戦国時代に生まれてたら我に七難八苦を与えたまえうって言う系の女子だよな」

それなんて山中幸盛？ しかも同じ苗字だし。もしかしてご先祖様だったりして。
「まあいいや、そろそろ行こうよ」

時間は有限だ。このままいつまでも話していたい気もするけど、それは走りながらでもできる。

「だね、行きますか」

うなずいてお互いのバイクに跨る。ヘルメットを被る。ゴーグルをかける。
ネックウオーマーを鼻元まで押し上げる。

「でた昔の特撮に出てくる雑魚戦闘員」

と、ヘルメットゴーグルネックウオーマーの不審者が言う。

「人のこと言えないでしょが」

ミラーに映った自分の姿を見る。マット仕上げの真っ黒なヘルメットに真っ黒な
ゴーグル。鼻まで覆った白いネックウオーマー。

うん、ボクも大概だな。

「いつそのこと二人で原付戦隊ヘルメッターでもやる？」

「二人しかいないのに戦隊なのか……もういいから行くよ」

「は〜い」

キックペダルを蹴り飛ばす。ホンダとヤマハのエンジンが息を吹き返す。

朝の浜名湖。太陽を背に二台のバイクが走り出す。

『めーでーめーでー！ こちらエイプ、めちやめちや寒いです！ おーばー！』

愛知県国道1号。関東と関西を一本で繋ぐ幹線道路をトロトロと走っていく。

田んぼと民家。そしてその合間にあるファミレス街という典型的な地方都市の郊外といった光景が、ボクの視界に飛び込んで過ぎ去っていく。

「綾乃、さつきからずっとそんなちようしだけど、どうしたの？」

『だって、走りながら話せるのってなんかテンションあがんない？』

ボクの予備のヘッドセット（綾乃にあげるつもりでこっそり買っていた）を装着してから、綾乃はずっとこんなちようしだ。

「わかる。なんかちよつと不思議だよね」

『それな〜』

バイクに乗っているときは基本的に風切り音とエンジン音しか聞こえないから、人の声が聞こえてくるとちよつと変な気持ちになる。

『ていうか寒いよ〜！』

「綾乃、心をおちつかせて自分をバイクの一部だと思えばいいのです……」

『むくり〜』

だよね〜

綾乃の服装はボア付きのコートと暖かそうではあるが、ツーリングにはいささか力不足なのだろう。

『双葉はなんてそんなにピンピンしてんのさ〜』

「だってボク上に6枚着てるもん」

『うわせこ〜！』

さらにお腹にカイロも巻いてるのは秘密だ。ああ、ハクキンカイロあったかいなあ〜
「せこいだろ〜」

『せこいよ、せこせこせこいやだよ』

「ふっ、なにそれ」

『んー、わかんないや』

雑談に花を咲かせながらひたすら1号を走らせる。時速50キロで走るボクたちを周りの車が猛スピードで抜いていく。

『みんな早いな〜』

「ここの60だしね。ボクたちももう少し出す?」

一応どっちも原付二種だから法律上はなにも問題ない。

『やめとくー怖いし』

エイプ小さいもんなあ。あの車体で60、70出すのはちよつと勇気がいりそうだ。

「ボクも無理、エンジン燃える」

『なにそれこわ』

2スト単気筒の宿命だ。よく回るおかげで加速はいいけど、回転数が高すぎてずっと回すと壊れてしまう。

その気になれば60、70は出せるけど、それは車線変更するときや合流するときくらいだけだ。

「しよせん50ccだからね。それにボクのバイク壊れたらパーツないから直すのめっちゃめんどくさいんだよね」

『そんなレアなの?』

「山梨に一台しか売ってなかった」

『うへ〜めっちゃレアじゃん』

元からマイナーなうえにもう十何年も前に絶版になったバイクだ。パーツは基本的に全部中古品しかない。

今はまだ大丈夫だけど、いつかどこか壊れて泣きを見るんだろうなあ。

「そーいやエイプってどれくらい出るの？」

『90はでるみたい』

「さすが100cc。綾乃は出したことある？」

『あるわけないじゃん！ 死んじやうよー』

まあそりやそうか。

綾乃はボクみたいに頭にオートループ詰まってるわけじゃないもんね。ちゃんと脳みそ入ってるもんね。

『そーいや双葉のバイクってけっこういいじってるよね？ 自分でやったの？』

「うん。けど、いじるって言ってもパーツちよつと変えただけだよ」

『え、ちよつとつてレベルじゃなくない？ 双葉のバイクネットで調べたけど全然見た目違ったよ？』

たしかに純正のYB-1に比べればだいぶ変わってるか。

「いろいろやったからね。ハンドルもウインカーも変えたし、ヘッドライトにもバイザー付けてフェンダーにもプレートつけたから、ぱつと見かなり違うかも」

元のデザインがいいから、ちよつといじるだけで一気にレトロっぽさが増した。

あの時は大変だったなあ。ウインカーの結線間違えてつかなくなったりネジがどっかいっっちゃったり。今となってはいい思い出だ。

「最初はミラーもバーエンドのやつ使ってたんだけどね。振動で全然見えなくなっちゃって結局元に戻しちやった」

『え、それ純正なの？　なんか形違くない？』

「押し曲げて無理やり角度変えた」

『ええ……』

だつてそのままだと肩邪魔で全然後ろ見えなかつたんだもん。

これもこれですぐ錆びるししよつちゆう角度変わるで微妙に使いにくいんだよね。

ヤマハつてなんで右のミラーだけ逆ネジなんだろう。気軽に交換できないからやめてほしい。

「原付なんてみんな単純だからね。ドライバーとレンチさえあればだいたいなんとかなるよ」

基本的にネイキッドなんてエンジンにタイヤつただけみたいなものだから、ノリと勢いでなんとかなつてしまう。

『そうなんだ。わたしもハンドル変えてみようかな。これちよつと幅広いんだよね』

「今度教えよつか？」

『おねがいー』

「りよー」

流れていく景色、すぎていく街、冬の空、ホンダとヤマハが走っていく。旅はまだ始まったばかりだ。

「いえーい」

パシヤリ。苔に覆われた巨大な御神木をバックに、蟹みたいに両手でピースする綾乃を写真におさめる。

「はい撮ったよ。あとで送るね」

「ありがと、せっかくだしお参りしてこーよ」

「さんせー」

スマホをしまつて二人で拝殿に向かって歩き出す。平日の昼だけあって、人はあまりいない。

弁天島から走ること86キロ。ボクたちは名古屋の熱田神宮に来ていた。

太陽はちょうど空の真上にさしかかり、突き刺すような寒さを少しだけまるやかにしてくれている。

「うわさには聞いてたけどさー 名古屋ってやっぱり運転すごいね」

綾乃の言葉にここに来るまでのことを思い出す。

ウインカーは出さないし急な割り込みは当たり前、赤信号なのに構わず発進するのを見た時は本当にびつくりした。

「帰るまでに命があるかわからないらしいからね、名古屋にいたら」

ここで生き延びるにはきつと修羅にならないといけないんだろう。

うえ、くわばらわくわばら。

「ひえーおつかな。交通安全のお守りでも買つてかえろーかな」

「その前にお参りだね」

なんとか五体満足で名古屋を出れるように神様にお祈りしなきゃ。並木道を歩きながらそんなことを考える。

しばらく歩くと拝殿が見えてきた。境内の地図だとこの奥に本宮があるらしい。

ちらほらとお参りしている人がある。ボクたちも早いところお参りしていこう。

賽銭箱の前に立ち、五円玉を投げ入れて二拍二礼。

ボクも綾乃も無事に旅を終えることができそうですよ。

ここになんの神様が祀られてるかは知らないけど、とりあえずそう祈っておく。

「双葉は何お願いしたの?」

「旅の安全。そつちは?」

「双葉が浜松で特上鰻重を奢ってくれますように」

綾乃の目が怪しくギラリと光る。

「うわあ……」

即物的すぎる。もう少しこう、風情とか、そういうのはないのだろうか。

というかそうだった。次会ったら奢る約束してたっけ。

特上鰻重、いっただいにくらするんだ。最低でも3千円はするよね。

「ろ、ローンってありですか？」

「なんだよケチだなー」

「そ、そこをなんとか」

「あはは、うそうそ。そんなの奢らせるわけないじゃん」

「ほっ」

よかった。冗談だった。冗談のわりには目がすごいギラギラしていた気がするけど、

きつと気のせいだろう。

「なんか鰻の話してたらお腹空いてきたね。せつかく名古屋来たんだしどっか食べて

ハニーよ」

「それならボク鉄板焼きナポリタン食べたいなあ。あれ気になってたんだよね」

「あ、それいいじゃん！」

「じゃあ、行こっか」

「おー！」

足並みを揃えて拝殿を後にする。冬の名古屋、琵琶湖まで残り120キロ。

「いえーい」

パシヤリ。ベンチにスマホを立てかけ、名古屋城をバックに例の蟹みたいなポーズでツーショットを撮る。

名古屋グルメを堪能したあと、ボクは綾乃の願いもあつて名古屋城に足を運んでい

た。

「一回名古屋城行つてみたかったんだよねー なでしこにもおーくろー」

綾乃がベンチに置いたスマホを回収してポチポチといじり出す。

「あ、そういえばなでしこ今日風邪ひいたんだってさ。おかげでキャンプ行けなくなっちゃつたみたい」

「え、なでしこが？ ほんとに？」

半信半疑の綾乃。ボクなんかよりもずっと間近でなでしこを見てきたんだから、そう思うのも無理はない。

「やっぱそう思うよね。まあそっこーで熱下がったみたいだけど」

「あはは、だと思った。たぶん、昨日の夜ベランダで電話でもしてたんじゃない？ 前もそれで風邪引いて遊びの予定パーになったことあってさ。寒いからやめろて言っても全然聞かないの」

「ふふ、ほんと変わんないなあ」

今ごろどうしてるんだろうか。きつと熱下がったからキャンプ行くって言い張って桜さんにとめられてるんだろうなあ。

「そうだ。せっかくだし電話してやろー」

プルルルル。スピーカーで発信音が鳴りほどなくして電話がつながる。

『あ、アヤちゃん久しぶり〜！ どうしたの？』

スマホから聞こえる声は相変わらず元気いっぱい、ちよつとだけ安心する。

「うん、久しぶりなでしこ。双葉から聞いたぞー風邪引いたんだって？ どうせ昨日の夜ベランダで電話でもしてたでしょ？」

『えっ！ なんて知ってるの！ あ、アヤちゃんもしかして超能力に——』

本当にベランダで電話してたのか。夜だからたぶん寝巻きだろう。そりゃ風邪も引くよ。

「目覚めてないから。ほら、前も同じことあったでしょ？ 中三の秋の時、紅葉見に行こーって約束したのになでしこ風邪引いたよね。その時もベランダで電話してたじゃ

ん」

『ええ？ そうだったっけー？』

「ほんと、寒いんだから気をつけるよな」

『えへへ、心配かけてごめんね〜 そう言えば今外にいるの？ なんか音にぎやかだけど』

「ふっふっふ、どこにいると思う？」

綾乃がスマホをいじる。画面になでしこが映るのがちらりと見える。ビデオ通話にしたみたいだ。

「双葉、こっちこっち」

そう言うと、綾乃が突然ボクの腕に自分の腕を絡ましてくる。

自分たちと名古屋城が映るようにスマホを調整する綾乃。

カメラに目を向けるとスマホに映ったなでしこが目を見開いて驚いた。

「はっはっはあ！ 双葉は預かったー！ 返して欲しければ1秒以内に浜松餃子千個持って名古屋城にくるのどー！」

そのセリフ気に入ったのかな。しかもボクに言った時よりも難易度が天文学的に上昇してるし。

『えええっ!? アヤちゃん今名古屋にいるの！ しかも双葉ちゃんまで！』

電波の影響でちよつとだけラグいなでしこ、略してラグしこが目をしきりにパチクリさせる。

「やつほーなでしこ、風邪大丈夫?」

『だ、大丈夫だけど……え、ど、どゆこと? なんで双葉ちゃんが名古屋いるの?』

「今日はわたしと双葉で琵琶湖までツーリング。で、双葉からなでしこが風邪引いてるって聞いたからお見舞いに電話してみたんだ。ま、元氣そうで安心したよー」

『へえ、そうだったんだ。ありがと』

『なあ、なでしこ。今ロリ子の声聞こえなかったか?』

スピーカーから聞き覚えのある声が聞こえる。この声は千明だ。お見舞いにでも来てるのかな。

少ししてスマホの画面が激しく動き、千明の顔が映し出される。

「やつほー千明、名古屋城なうだよー」

『うおつ、ほんとに名古屋城映ってやがるし。マジかよすげえな。山梨からどんだけ離れてると思ってるんだよ』

「うーん、250キロくらい? たいした距離じゃないよ」

せいぜい9時間くらい走るだけ、日帰りで行ける距離だ。

『あー……うん……なんだ。つつこむところ多すぎてもはやつつこむ気にならんわ』

「ぶつ、あつははは、やっぱ普通そう思うよね〜」

千明の話の何かがツボに入ったらしく、綾乃がお腹を抱えて笑い出す。

『えっと、そっちの人はなでしこの幼馴染の——』

「うん、土岐綾乃。その風邪つびきの幼馴染で双葉の友達。なでしこから聞いてるよ、千明ちゃんって言うんだよね？」

友達……わかりきっていることだけど、面と向かって言われるとちよつと嬉しい。

『お、おう！　なんか初対面の人に名前呼ばれると恥ずかしいな。そっちはどうだ？』

横にいるちんまいのに無茶振りさせられてたりしないか？』

無茶振りって……せいぜい琵琶湖で野宿しようとしてるだけじゃないか。

しかも今回はテント付き、こんなイージーモードそうそうないんだぞー！

「あはは、まだ着いていけるから大丈夫だよー　ちよつとなでしこに代ってもらってもいいっ？」

『おう、ちよつと待つてろ……これなら二人とも映るだろ』

画面の下に机が映る。勉強机の上にも立てかけたのだろう。おかげでなでしこも千明の両方が見えるようになった。

「なでしこ、久しぶり。顔を見るのは二ヶ月ぶりくらいかな？」

懐かしそうな、嬉しそうな、それでいて寂しそうな、そんな複雑な表情の綾乃。

『そっか、もうそんなにたったんだく あっという間だったよ』
「どう、そっちは楽しい?」

『うん! 友達もいっぱいできたんだよ!』

「そっか……よかったじゃん。なんか、安心したよ」

心のそこから安心したような、よかった、だった。

どれだけ距離が離れても、どれだけ月日がたつても、綾乃にとってなでしこは、大事な大事な友達なのだろう。

「キャン普楽しい?」

『うん! すっごい楽しいよ! いつかアヤちゃんも一緒にやろー!』

笑顔のなでしこ。この笑顔に、ボクもリンもすっかり絆されてしまった。本当に不思議な子だ。改めてそう思う。

「うん、わかった。わたしもなでしこの真似して道具揃えたんだ。だから冬休みか春休みにでもキャン普しようよ。リンちゃんって子も誘って、四人でね」

『……うん、うん! ぜったい、ぜったいだからね!』

「ふふ、ぜったい行くから、覚悟してまってるよー」

山梨と愛知。距離にして約250キロ。声も手も届かない遥か彼方。けど、今この瞬間だけは、ボクたちの心はたしかにつながっていた。

「じゃ、わたしたちそろそろ行くよ。ここ駐車料金高いんだよねー」

そういうえげそうだった。駐車代原付30分百円。今ならまだワンコインですませられる。

『そっか、これから琵琶湖いくんだっけ。二人とも気をつけてね!』

『気をつけろよー! とくにロリ子、あんま相方に無茶させんなよー!』

「させないって!」

「あはは、じゃーねー」

画面の向こうで手を振る二人に振りかえして綾乃が電話を切る。暗転する画面、周囲の喧騒がボクたちを現実に引き戻す。

「なでしこ、めっちゃ元氣そうだったね。風邪引いてるのに」

「ね、ほんとに風邪だったの? って感じ」

「千明って子もいい子そうだったし、安心したよ」

「すっごいいい子だよ。普段はあれだけど」

なでしここと二人きりだとブレーキ役がいらないからちよつと心配だけど、まあ大丈夫だろう。

「そろそろ行くっか。あと5分で30分すぎちゃうし」

「え、ほんと? やばくない?」

「やばい。だから走ろう」

顔を見合わせうなずき、脇目もふらずに走り出す。ここから駐車場までけっこうある。間に合うかな？

12月の名古屋。冬の空、冬の風、冬の旅。

琵琶湖まで残り120キロ。旅はまだまだ終わらない。

レジ袋を片手にコンビニを後にする。自動ドアを出ると、肌にとわりつくような寒さが全身を包んだ。

「さむ〜」

「さむさむ」

綾乃と二人で身震いする。

空はオレンジジャムの上にコーヒージェリーを乗せたような色になっていて、空の向こうで飛行機が赤と緑のランプをチカチカと点滅させながら飛んでいた。

あの飛行機に乗っている人たちも家に帰るのだろうか。ふとそんなことを考えた。

「あち、あちち」

ビーちゃんのにシートに腰掛けて熱々のお茶をすすする。冷え切った喉を熱いお茶が通っていくのがよくわかる。

「ふへえ、あつたまりますな〜」

「だよ〜」

とろけた顔でお茶をすする綾乃に心の底から同意する。

けど、よく考えてみたら、わざわざ自分から寒い思いをして温かい飲み物をありがたがつてるわけで、そう思うと人間とはなんて罪深い生き物なのだろうと思った。

「そうだ、冷めないうちに食べないと」

レジ袋からあんまんを出す。紙袋に包まれたあんまんはまだまだ熱々だった。

「あ、ずるー!」

「ふふふ、うらやましかろー はい」

あんまんを半分千切って綾乃に手渡す。熱々の黒い餡子が外の空気に当てられて真つ白な湯気を立てた。

「え、くれるの?」

「自分だけおいしいもの食べて友達がお茶だけって、普通にやじゃない?」

なんといかもうまく説明できないけど、もやもやするのだ。

ずっと一人が当たり前だったから、こういうのに憧れているっていうものあるんだろう。

「……そっか、ありがとう」

二人であんまんにかじりつく。

外の寒さでいい感じの温かさになった甘ったるい餡子をほんのり甘いふわふわの皮が引きたてる。

「おいひい〜」

ありふれたコンビニの、ありふれたあんまん。だけど、今のボクたちにとっては何よりものごちそうに見えた。

あんまんをかじりながらスマホを見る。メッセージが何件か入っている。リンとなでしこからだ。

なでしこは千明にほうとうを作ってもらったらしい。写真に映ってるほうとうはすごくおいしそうだった。

リンはあれからいろいろ巡ってるみたいだ。神社や犬のおみくじ、峠から見下ろした街。お昼ご飯。

どれも楽しそうだ。

「なに見てんのー」

「リンが送ってきた写真。今長野の南のほう行ってるんだって」

「へえ、また長野行ってるんだ。やるじゃん」

「ハマったんじゃない？ 高ボッチ行く時に峠走った時もけっこうノリノリで走ってた

し」

「なにそれみたい」

あの時は途中からリーニンとかリーニアウトも使い始めて、キャンプしに行くのか峠を攻めに来たのかわからない感じだった。

そのうちハングオンとか使いだしてもボクは驚かない。

「ボクたちと違ってスクーターなのにすごいよね」

「なんか、ちよつと会ってみたくなつたなあ」

「冬休みになつたら連れてこようか？ リンもツーリング嫌いじゃないみたいだし、きつと来てくれると思うよ」

静岡にもいいキャンプ場はたくさんある。海で釣れば意外とすんなり来てくれそう
だ。

「その時は紹介よろしく」

「自己紹介くらい自分でやりなさい。このめんどくさがり魔神め」

「は〜い」

欠片だけになつてすっかり冷え切つたあんまんを口の中に放り込みお茶で流し込む。

「あと何キロだつて？ もうけつこう走つたよね？」

「ちよつとまつてねー」

ナビを開いて残りの距離を確認する。琵琶湖まで約50キロ。あと2時間弱といったところかな。

「このまま進めば50キロで琵琶湖だって」

「やったー！ あとちよつとじゃん！」

「そーそーだからパッパッで行っちゃお」

「だね、行こ行こー」

空のボトルと包み紙を片付けてバイクのエンジンに火を入れる。

すっかり暗くなった空の下、コンビニの灯がバイクを怪しく照らす。

「じゃ、行くよー」

「はいよー」

走り出す。テールランプが赤い尾となって夜に溶けていく。

琵琶湖は目と鼻の先だ。

「あれ……50キロがちよつと？」

ふふふ……

漆黒の暗闇の中をヘッドライトの光だけを頼りに進んでいく。

耳をすませば風の音に紛れて微かに波の音がするのがわかった。

この付近には川も海もない。あるのは湖だけ、とてつもなく大きな湖しかない。

滋賀県、琵琶湖。日本最大の淡水湖の一端にボクたちはついにとどり着いた。

『ふたばく まだく?』

後ろでエイプに乗る綾乃が疲れた声でたずねてくる。

100キロ200キロは楽勝なのに、最後の10キロがやけに遠く感じる。バイク乗りあるあるだ。

名古屋から5時間、浜松と合わせて計9時間シートに跨っている。ボクはともかく綾乃は限界に近いのだろう。

ちなみにボクは15時間になる。

「そろそろだよー あれだ」

左手のほうにライトに反射するPの看板が見えた。

琵琶湖、湖岸緑地。今日の宿だ。

対向車と後続車を確認してウインカーを出し駐車場に乗り入れる。

ヘッドライトのハイビームで照らされた駐車場はもぬけのからで、車の一台も停まっていなかった。

夏に来た時は何台か停まっていたんだけど、今日は違うらしい。平日だからかな？
入り口の端の白線にビーちゃんを止め、少し遅れて綾乃がその横に付ける。

エンジンを切る。途端に辺りが暗闇に包まれ、痛いほどの静けさの中に岸に水が打ちつけられるチャプチャプという音だけ鼓膜で反響する。

「とーちゃーく、お疲れ綾乃」

ヘルメットを脱ぐ。夜の寒さが顔を包み込む。

「や、やっとなついたあ〜」

少しだけ効くようになってきた夜目がハナハナと膝からくずれる綾乃をとらえた。

「大丈夫？」

「う、うん、へいきへいき〜」

ボクが差し出した手を掴んで立ち上がり、ヘルメットを脱いで車止めに座り直す。だ
いぶお疲れのようだ。

「暗くて全然見えないけど、ここってもう琵琶湖なんだよね？」

「そうだよ。ほら」

スマホのナビを広域モードに切り替えて綾乃に差し出す。

「あ、ほんとだ。わたしたちほんとに琵琶湖いるんだ……」

疲れ切った綾乃の顔がだんだんと明るくなっていく。

「うはー浜松めっちゃ遠いじゃん。こんな遠くまで来ちゃったんだ……」

緩んでいく口元、弛んでいく眉毛。細まっていく目。

「ふ、ふふ、あは、あはは！　ねえ、すつごくくない？　わたしたちこんな遠くまで来ちゃったんだね！」

目をパチクリとさせてナビの地図をいじくりまわす綾乃。指を動かすたびに綾乃の口から笑いがこぼれる。

「あはは、浜松遠っ！」

自分がこんな遠くまで来たことが信じられないのだろう。ボクも初めはそうだった。

自分のやったことが信じられない。だけど、れっきとして自分はそのにいる。

ナビを開いてズームアウトしても目に映る地形は見知らぬものばかり。

そしてしばらく地図をいじくって、ようやく現実を受け入れる。

自分は遠くに来たのだと。来てしまったのだと。来れてしまったのだと。

「はは……ほんとに来ちゃったんだなあ……」

スマホの画面に照らされた綾乃はそれはそれは満ち足りた笑みを浮かべていた。

「スマホありがと。ちょっと湖みてくる」

ボクにスマホを返すと、立ち上がり湖岸に向かって歩き出す。

駐車場を出ると、広い芝生が広がっていて、湖の水面が光を反射して時折きらりと輝いた。

「暗くてなんもみえねー!」

暗闇に覆われた琵琶湖を眺め、笑いながら芝生に大の字に寝転がる。

「はあー 疲れた。てか寒っ」

「そろそろテント出す?」

寝転がった綾乃に手を差し出す。ずっとこのままってわけにはいかない。

この緑地はテントOKだ。せっかく持ってきたんだから使わない手はない。

「だね、どっちだす?」

ボクはテントを持ってきている。そして綾乃もテントを持ってきている。

「どっちが、いい?」

わざわざ二つも張る必要はない。ゆえに戦いは必然だった。

差し出した手を掴んで立ち上がり、目を細める綾乃。

「むむむ」

人気のない冬の琵琶湖、張り詰めた空気がボクたちを包み込む。

おたがい無言でうなずき、足を開き拳を構える。

どっちが勝つても恨みっこなし。命をかけた真剣勝負！

「じゃんけんポイ！」

ボクが差し出すは全てを吹き飛ばすパー。

対して綾乃が出すのは森羅万象を切り裂くチョキ。

「なっ——！」

「いえ——い」

勝負、綾乃の勝ち。

膝をつきうなだれるボク。そしてそんなボクを見下ろすようにダブルピースで勝ち誇る綾乃。

「しょうがないなーテント出すよ」

「あ、なにか手伝うことある？」

結局手伝うのかーい。

まあいいや。駐車場に戻りビーチちゃんに積んでいた荷物を下ろす。

ポストンバッグから吊り下げ式のライトを取り出して紐を引っ張る。月明かりしかなかった周囲がオレンジの光に包まれる。

「これ持って照らしててくんない？」

「りよーかーい、でもそんなんでいいの?」

「ボクもテント使うの初めてでさ、せっかくだし一人でやってみたいんだよね」

「あ、ちよつとわかるかも」

だよね、テント買ったら一人で設営したくなるよね。

荷物を抱えて芝生に戻る。とりあえずバイクに近いところでいいだろう。

荷物を置いて、ネットで買った格安のグラウンドシートを広げる。

インナーテントを広げて、ポールを伸ばし十字に固定。四隅の穴に差し込んでアーチ状になったポールにテントのフックをかけていく。

どうせ寝るだけだし、風もないからペグはいいかな。

そんなこんなで10分もしないうちにインナーテントを張り終える。

「おぉー もうテントになった」

ケチらないでちゃんとしたやつを買って正解だった。設営がものすごい楽だ。

張り終わった白いインナーテントの上からフライシートをかぶせてポールに固定。夜露で張り付くと意味ないし、これだけペグを打っておこう。

紐をシートに結びペグを芝生に打ちつけ……

「あ、ハンマー忘れた」

しまった。ハンマーのことすっかり忘れてた。まあいいや、芝生だし足でいいで

しよ。

「えい、えい」

フライシートがピンとなるように、靴底でペグを芝生に打ち込んでいく。

よし、テント設営完了！

「できたー！」

「おおー」

綾乃にランプを返してもらってテントジッパーを開き中に入り、天井にランプを引っ掛ける。

「おじゃましまーす。ほおほお、こんななってるのかー なかなか快適ですな〜」

「少し狭いけど我慢してね」

二人用とは謳ってはいるけど、コンパクトなだけあってけっこう狭い。こういう時ばかりは小さな身体に感謝だ。

「うう、寒かった〜」

手をこすったり腕をさすったりして身体を暖める。

「風がないと全然あつたかいねー」

風がないだけでも長時間のツーリングで冷え切った身体にはありがたい。体感温度がまるで違う。

「ふふふ、ちよつとまつててねー」

鞆から百均で売つてたミニテーブルを前室に置き、同じく百均で買ったシリコン鍋敷をセツト。

「あ、そのテーブルかわいい」

「でしょ、百均で買ったんだー」

その上にイワタニのバーナーを置いて五徳の下にネットで買った遮熱版をセツト。

「そして、こいつを取り付けるつと」

コールマンのヒーターアタッチメントの切り込みを五徳に差し込む。

よし、完成。

あとは火をつけるだけ……おつと、その前にベンチレーションを展開しておかないと。

「綾乃、天井にあるベンチレーション出しといてくれない?」

「ベンチ? レーション?」

「えつと、空気穴のこと。上の方にある蛇腹みたいなやつだよ。下手したら一酸化炭素中毒になつちやうかもしれないからね。気をつけないと」

「こわ、りよーかい。あ、これか」

視界の端で綾乃がベンチレーションをいじる。外気が入り込んできてテントの中が

少しだけ寒くなるのがわかった。

これで本当に準備完了。コックを捻ってガスを放出。すかさず点火スイッチを押す。カチツという音がして、次の瞬間ガスがボウつという音とともに青白く燃え出す。

「おーついたついた。その上の丸いやつなに？」

「これはコンロにつけるヒーター……ようはストーブ。そしてこの上に……」

コツヘルを出して水を注ぎヒーターの上に乗せる。これで暖房と湯沸かしが同時にできる。

「あつ、これあれだ、ストーブとヤカンじゃん」

「そうそう。たぶんすぐにあったかくなると思うよ。そ、し、てー！」

さつきコンビニで買ってきたカレー麺をどんと置く。

「こちらが今夜のメインディッシュになります」

「おーカレー麺！ しかもビッグ！」

「さらにさらにー！」

レジ袋を逆さにする。中からどきどきとおにぎりが降ってくる。

「好きな選んでいいよー！ って言っても白むすびとツナしかないけどね」

あとは全部売り切れてしまっていた。郊外のコンビニだからしかたないね。

炭水化物に炭水化物を合わせるといふ暴挙。旅だからこそできる不健康な組み合わせ

せ。

うーん、さいこー！ 野宿と言ったらやっぱりこの雑極まりない食事だよね！

「ありがと、後でお金渡すね」

「うん。あ、お湯沸いたみたい」

コッヘルに張った水がぶくぶくと沸騰している。カップの蓋を開けてお湯を注ぐ。カレーのおいしそうな匂いがテントの中に充満する。

「うわ、カレーの匂いすつご」

「服についちやうし、外で食べる？」

「やだーさむいー」

「わかる。ていうかあつたか！」

ベンチレーションのおかげで風通しがいいのだろうか。

いつのまにかすごい暖かくなってきた。さすがにちよつと暑くなってきたので上着を脱ぐ。

「わたしも脱ご。双葉、この丸っこいのすつごいね」

「うん、ボクもこんなに暖かくなるなんて思ってたからびつくりだよ」

バーナーの火にかけられたヒーターは、よく見ると金属の外装が赤く光っていて、見るからに熱そうだな。これは火事とか火傷に要注意だな。

今度天ぷらガードでも買ったほうがいいかな。テント燃えたら洒落にならないし。「ちつこいのにすごいやつだなーお前」

「うんうん、えらいえらい」

二人で炎に揺られるヒーターを眺める。

冷え切つて縮こまっていた筋肉が解されていく。これやばいな。快適すぎる。

「そろそろ三分たつたんじゃない?」

時計を見る。たしかにちようどいい時間だ。カップの蓋を開ける。スパイスの香りと湯気もわつと広がる。

「あはは、双葉眼鏡真つ白じゃん」

真つ白になる視界。眼鏡をかけて温かいものを食べようとするといつもこれだ。

「ま、前が見えない」

「ちよつとこつち見てー」

「へえ?」

言われたとおりに綾乃を見るとパシヤリと音がした。

こいつ写真とつたな。あとで寝顔撮つてやるから覚えてろよー

「ふふ、なでしこにおーくろ」

「はいはい、もうラーメンできたんだから伸びる前に食べちゃおー」

「はーい」

「いたただきまーす」

狭いテントでボクたちの楽しげな声がこだます。きっとこのカレー麺もすごくおいしいに違いない。

「ちよつと外見てくるね」

「ふああい、あんま遠くいくなよー怖いから」

あ、そつちなんだ。

食事を終えひと息ついたので、あくびをする綾乃を背にしてテントからでる。

「さむっ」

テントから這い出た瞬間、猛烈な冷気がラーメンとヒーターで火照った身体を包み込んだ。

息を吸うと冷たい空気が肺に入り込み身体に流れていく。息をはくと白いもやになつて宙に吸い込まれていった。

「静かだな」

誰もいない琵琶湖。真つ暗闇の湖岸に波が打ちつける音がこだます。

遠くのほうで、車のライトが流れて消えいった。

「そういえば、リンもう着いたのかな」

ちよつと電話してみようかな。そう思った矢先だった。

「電話？」

スマホを出す。噂をすればなんとやら、リンからだ。

「もしもし？」

『あ、繋がった。どう？ そっちは』

「琵琶湖着いて、テント張ってご飯食べたところ」

『よかった、無事についたんだ。こっちもやつとひと息つけた。温泉で寝過ごしちゃつてさ、マジで焦ったわ』

リンが寝過ごすなんて、よっぽど温泉が快適だったのだろうか。ボクがいたら起こしてあげられたのかな。

いや、ダブル寝落ちする未来しか見えないな。温泉気持ちいいもんね。

「そんなことあったんだ。大丈夫だった？」

『めっちゃ遅刻しそうになって最悪双葉みたいにその辺にテントでも張ろうかと思っただけど、なでしこのお見舞いに行つてた大垣のおかげでなんとかなった。あいつつてけっこういい奴だね。ちよつと誤解してた』

詳しいことはよくわからないけど、なんとなく良かったらしい。まあ無事でいてくれれば
 なにも言うことはない。

クリスマスのキャンペーン。リンが千明のことを苦手なのがちよつと気になってたけど、
 この分なら大丈夫かな？

「そっか、ほんとよかつたね。それで今上伊那だっけ。どんなところなの？」

『めつちや夜景綺麗。あとで写真送るよ』

「いいな、こつちは暗すぎて何も見えないよ」

なにせスマホ以外の人工的な光源が一切ない。こういうところにいると、自分たちが
 普段いかに明るい場所で暮らしているかを実感する。

『まあ湖だもんね。空は？』

「空？」

リンの言葉にはっとして上を見上げる。

「うわあ……」

そこには空を覆い尽くすほどの星の海が広がっていた。

赤い星、白い星、青い星、数えるのも馬鹿らしくなるような色とりどりの星々。

「すごい……」

『どうしたの？』

「星がさ、すごい綺麗なんだ……」

息をするのも忘れて空を眺める。この光景を見ただけで、今までの全てが報われた気がした。

『そんなに綺麗？』

「……すごいよ。リンにも見せてあげたい」

『へえ、ちよつとうらやましいな。こつちは街の灯が眩しくてよく見えないんだよね』

「あとで写真送るよ。そつちの夜景と交換」

『うん、そういえば綾乃って子はどう？』

テントに首を向ける。ランプに照らされた影が時折動く。耳を澄ませると笑い声も聞こえてきた。誰かと電話でもしてるのかな。

「だいぶ疲れてるみたいでテントで休んでる。なんだかんだいって10時間くらい乗ってたからね」

『浜松からそこまで200キロくらいだっけ？ まさか、野宿じゃないだろうな』

「ボク一人ならともかく、友達に野宿なんてさせないって。ちゃんとキャンプOKの公園でテント泊だよ。しかもヒーターアタッチメント付き」

さすがにお風呂とかには入れないけど、キャンプとしてはかなり快適な環境を作れたと思う。

「おかげでぬくぬくだよ」

『うわずる。こっちは寒い思いしてるってのに』

「リンが琵琶湖に来たら入れてあげる」

『何キロ離れてると思ってるんだよ。死ぬわ。また今度入れてよ』

長野から原付で琵琶湖行ったら何キロくらいになるんだろう。最悪24時間走つてもつかなさそうだ。

『それで、明日はどうするの?』

「琵琶湖一周して向こう岸のゲストハウスに泊まる予定。バイクで行くと2000円なんだって。すごいよね」

『やつす。そんなんで大丈夫なの?』

「ネットの評判もかなりよかったし、男女で部屋分かれてるから大丈夫。写真で見たけどお風呂がすごい大きくて気持ちよさそうだった」

『なんだよ、めっちゃ満喫してんじゃん。双葉のことだからてつきり全部野宿かと思ってたのに』

「一人だったらそのつもり……いや、やつぱ一人でもたぶん適当に宿で泊まつてたと思うよ」

旅一つとっても野宿、ホテル、キャンプ、いろんな手段がある。せっかく選び放題な

のに野宿にばかりこだわるのもつまらない。

そう言えば綾乃に明日宿泊まるって言ってなかったな。あとで言つとかないと。

「もうちよつと自分に優しくしてもいいかなって思つてさ。それに、みんなにも心配かけちゃうしね」

近場ならともかく助けも呼べないような遠くで野宿したなんて言つたら、またあおいと千明に心配をかけてしまう。

何も告げずに伊豆に行った時の二人の顔はもう見たくない。

『そっか、それ聞いてちよつと安心したかも』

「あはは、なんか心配させちやつてごめんね」

『ほんとだよ。もうちよつと自重……してそれなんだつたな。そういえば』

「えへへ」

『えへへじゃねえよ』

「ごめんねリン。ボクにとっては琵琶湖もお出かけの範疇なんだ。こればかりは性分だからしょうがない。」

『まあいいや。寒いしそろそろ切るね。そっちも外でしょ？ あんまり身体冷やすな』

『よ』

「うん！ じゃーねー！」

『ういー』

電話を切る。途端にあたりが静かになった。音のない世界にボクの息を吐く音がこ
だます。

空を見上げる。惚れ惚れするような星の海に息をのむ。そうだ、写真撮らないと。
パシヤリ。最新のスマホはこんな真つ暗な湖でもちやんと夜空を撮影してくれた。

「……戻るか」

このままずっと見ていたいけど、いいかげん寒くなってきた。なでしこみたいに風邪
でも引いたらめんどうなことになる。

「戻った……よ」

テントに入る。元気な相方の姿はなく、代わりに寝袋にくるまった芋虫が床に転がっ
ていた。

「すう……すう……」

寝息を立てて眠りこける綾乃。時間はまだ9時前だというのに完全に眠っている。
「今日はいっぱい走ったもんね」

眠った綾乃を起こさないようにバーナーの火を消し、テントのジツパーとベンチレー
ションをしめる。これで眠るまでの時間くらいは暖かくすごせるだろう。

一応持ってきた薄手のトラベル用の毛布もかけておくか。

「今日は楽しかったよ、綾乃」

眠りこける綾乃に毛布を被せてつぶやく。

「ふああ、ねむ」

寝る準備はすんでいる。ボクももう寝よう。すでに広げていたマットの上に寝袋を敷き、音を立てないように中に入る。

ハクキンカイロに火を入れて寝袋の中に放り込み、吊り下げたランプを引っ張る。視界が闇に包まれた。

今日はいろいろなことがあった。まさか綾乃がついてくるなんて思ってたけど、おかげで楽しい時間をすごせた。

明日はいよいよ琵琶湖一周だ。今日と違って150キロしかない。せいぜいのんびり走るとしよう。

「たのし、かった……なあ」

ぬくぬくした暖かさに包まれて意識が朦朧としていく。

「あ、りに、らいん……しない……と……」

意識が闇に沈んでいく。

今夜はぐっすり眠れそうだ。

溶けた霜が太陽に当てられてキラキラと輝く。肌を刺す冷たい空気の中で息が白く濁って宙に舞っていく。

降り注ぐ朝日が琵琶湖の水面をサファイアのように美しく輝かせていく。

風の音と鳥の声、岸边に打ちつける波の音。そして安いアルミの椅子の軋む音。

「平和だなあ」

ゆっくりと過ぎていく時間にうつとりとする。外は相変わらず寒いけど、その寒さすらスパイスになっているような気がした。

ぶくぶく。ミニテーブルの上のバーナーにかけていたコッヘルの水がいつの間にかお湯になっていた。

火を止めてティーバッグを放り込んでいたマグカップに注ぐ。

カップのふちから垂れるティーバッグの紐を挿んで上下すると、お湯の中で紅茶の色

素が滲み出し、いかにも紅茶ですと言いたげな香りがボクの鼻をくすぐった。

本当なら二、三分蒸らすところだけど、寒いからもう飲んでしまおう。用意していたガムシロップを二個注いでスプーンでかき混ぜる。

「あちち」

息で冷まししながら熱々の紅茶をすすする。冷えた身体に甘ったるい紅茶が染み渡る。

「コーヒーもいいけど、紅茶も好きだな〜」

コーヒーは男の子の味、紅茶は女の子の味って感じがする。

どっちも好きだけど、朝のまつたりした時間に合うのはやっぱり紅茶だと思う。

「ずずず、ぷはあ〜」

紅茶を飲んで息を吐くと、口からもわもわと白い湯気が立ち込めた。

ブロロロ、駐車場のあるほうから聞き慣れた4ストエンジンの音が聞こえてきた。帰ってきたみたいだ。

コツヘルに残ったお湯を確認。よし、まだある。バーナーにもう一度火をつけてお湯を温める。

その間に綾乃のマグカップを拝借して紅茶を用意する。すでに暖められていたお湯はあつという間にぶくぶくと沸騰した。

マグカップにお湯を注ぎ紅茶を作る。走ってきて疲れているだろうしミルクティー

にしよう。出来上がった紅茶にガムシロとコーヒーミルクを投入。

ミルクと紅茶の甘い香りがあたりに立ち込めた。

「おまたせー 朝ごはん買ってきたよー」

「ありがとう、はいこれ」

レジ袋を受け取ってマグカップを差し出す。

「サンキュー あ、ミルクティーじゃん」

「ガムシロとコーヒーミルクの代用品だけどね」

「おいしければそれでいいよー いただきまーす……あつま」

綾乃の頬に色が差す。どうやら気に入ってくれたみたいだ。

「それで、何買ってきてくれたの？」

「あんパンとあんドーナツとあずきデニツシュとー」

「全部あんこだし。まあ甘いのが買ってきて言ったのボクだけどさ。まあいいや、寒いしテントの中で食べようよ」

「さんせー あ、よかつたらストーブ焚いてもらってもいい？ 走った時すつごく寒く

てさ」

「もつちろん」

マグカップをこぼさないように持ちながら二人でテントにもぞもぞと入り込んでい

く。

「なんかわたしたち虫みたいだね」

「たしかに……」

ダンゴムシかな？ そんなバカなことを考えながら、琵琶湖での朝はすぎていった。

「もう大丈夫？」

ビーちゃんに跨って後ろにいるヘルメット怪人に話しかける。

「うん、へいきへいき」

ネックウオーマーに覆われた口がモゴモゴと動く。ゴーグルも遮光レンズだから本当に表情がわからない。

「昨日寝れた？」

「人間って意外とどこでも寝れるんだね。めっちゃぐっすりだった」

「疲れてるとそんなもんだよ」

20時間くらい走ったあとに横になると30秒くらいで眠れる。たんに気絶してるだけともいう。

「それに双葉があつたためてくれたしね」

「誤解を生む言い方やめて！」

「ふひひ」

まるでなんかボクがいかかわしいことしたみたいじゃないか。ただヒーターでテント暖めただけだつてのに。

「で、これからどうするんだっけ？」

「昨日行つたとおり湖沿いを半時計回りに北上して半周。向う岸のほうにある近江舞子つてところにあるゲストハウスに泊まるよ。なんとベッドとおつきなお風呂つき」

「やったーお風呂だー！」

「しかもバイクで行くと一泊2000円！」

「やすー！」

「まあ150キロ先だけどね」

観光とか休憩もいれてほしい8、9時間くらいかな。まあのおんびりいこう。

「そんなのすぐじゃん！ はやく出発しよー！ やった！ やつとお風呂に入れる！」

「はーい、じゃあ行こっか」

キックペダルを蹴飛ばしてエンジンをかける。オイル混じりの真っ白な煙がモクモクと宙を舞う。

「いくよー」

「しゅっばーっ」

ギアを変え、アクセルを吹かしクラッチを離す。転がり出すタイヤ。光り輝く湖岸に別れを告げ、琵琶湖を一周に繰り出す。

近江舞子まであと約150キロ。ボクたちの新たな旅が始まろうとしていた。

「……あれ、150キロってめっちゃ遠くない？」

ふふふ……

湖岸に沿う県道559号線、さざなみ街道を走ること約8キロ。

スロットルを緩め、栈橋に係留されたプレジャーボートを眺めカーブを曲がっていると、視界の向こうに大きな橋をとらえた。

『橋でつか！』

国道477号線、琵琶湖大橋有料道路。守山市と大津市を結ぶ巨大な橋だ。

「1400メートルあるんだって、すごいよね」

遙か彼方の対岸まで一直線にかかる橋は遠目から見ても壮大だ。

遠目からチラチラとその姿は確認していたけど、こうはつきり見ると迫力だ段違いだ。

『あそこつて原付渡つても大丈夫なのかな』

「大丈夫みたいだよ。たしか100円だったはず」

『やつす、うまい棒買えるじゃん』

ボクも調べたとき驚いた。100円とかならわからなくもないけど、駄菓子と同じ料金で渡れるのは破格と言つてもいい。

『料金所でうまい棒渡したら通してくれるかな』

「ダメに決まつてるでしょ」

『だよーねー』

でも料金所の人にうまい棒わたした時の反応はちよつと気になる。たぶん怒られて終わりだろうけど。

「写真撮つてく？」

『うーん、明日でいいやー』

「わかった。明日は向う岸から橋渡つて帰るからその時撮ろつか」

『りよーかーい』

カーブが終わる。スロットルを回し加速していく。心地よい寒さとともに景色が流れていく。

『うまい棒の話してたらお腹空いてきちゃった』

「コンビニでうまい棒でも食べる？」

このあとめちやくちやうまい棒食べた。

あれってたまに食べるとおいしいよね。

琵琶湖大橋から約15キロ。畑と湖に挟まれた湖岸の道路をひたすら走り続ける。

50キロで走っていくボクたちを高そうなベンツが猛スピードで追い抜いていった。

『はやー』

「もうあんなに遠く行っちゃってるよ」

『ごらーごらー50キロだぞー』

たぶん70キロ、もしかしたらそれ以上だしてそうだ。怖くないのかな？

『次の信号までレースでもする？』

「絶対勝てないからやめとく」

いくら2ストとはいえエンジンの排気量が倍も違うバイクに勝てる道理なんてない。

ていうか息を吐くようにさつき言ったことと矛盾すること言うのやめてよ。

『じゃ、おっさきー』

「あつ、ちよ」

ミラーに映った綾乃が右のほうに消えていく。

次の瞬間、横からエンジン音が鳴り響いてあつという間に綾乃がボクの前に踊りてた。

『ずっと双葉に先行ってもらうのもあれだし、しばらく先走るよ。どうせ湖に沿って走るだけでしょ？』

昨日から今にいたるまでずっとボクが先導だった。ずっと先導するのも疲れてきたし、ここは前を走ってもらおう。

「わかった。しばらくよろしくねー」

『おうおう、綾乃さんにまかしとけー』

湖に沿って走るだけだから大丈夫だろう。もし何かあったらボクが代わればいいだけだ。

先導を綾乃に交代し、また何も無い道走り続ける。

『ほんとなんもないね。こんなに信号のない道走ったの初めてかも。なんか楽しいね』

「わかるわかる。なんかテンションあがるよね」

こういう道は、まるで自分が映画の主人公にでもなったかのような、そんなワクワクを与えてくれるから大好きだ。

『でーでー、でっでっでっでー』

「ぷっ、なにそれ」

いきなり変な歌歌いだしたもんだから思わず吹き出してしまう。

『えーと、おじさん二人がハーレーで旅する映画の曲』

「イージーライダー？」

『そうそう』

「あれ最後二人とも死ぬらしいよ」

『えっ、ほんとに？ 死んじゃうのあの二人』

「ほんとほんととユーチューブのネタバレ動画で見たもん」

『それ最近捕まったやつじゃん』

しよーもない話をしながらもバイクはどんどん進んでいく。

人っ子ひとりいない湖岸の道路。晴れ渡った空の下をエンジンを唸らせ駆け抜けていく。

エイプとYB。

リーフブルーとダークブルーのタンク。シルバーのメッキフェンダー、ゴールドのホ

イール。

ヘッドライトのメツキに雲が映り、すぐに消えていく。

あの映画のような派手さはないけど、この瞬間はボクたちも立派な主人公だ。

『でつかー!』

アクセルを吹かし緩やかな坂を抜けていく。右を見ると視界一面にどこまでも続く琵琶湖が広がっていた。

県道513号線、葛籠尾崎大浦線。

琵琶湖の最北端、奥琵琶湖パークウェイへと続く細い峠道をひた走る。

出発から約4時間。目的地まではすでに50キロを切っていた。

『すぐくれない! 向う岸全くみえないんだけど!』

「うん……水平線見えるってすごい」

『ひつろ! でかすぎでしょ!』

山中湖もかなり大きいけど、ここはそんなレベルじゃない。

湖岸を走っている時はあんまり実感がなかったけど、こうして縦から見下ろすと、その広大きさにびびくりさせられる。

『でけー!』

そのあんまりの大きさに二人でバカみたいに盛り上がる。それくらいすごいのだ。

そんなボクたちをバイクが一台抜き去っていく。メーターを見てみたらいつの間にかスピードがけっこう落ちていた。危ない危ない。

「綾乃、ちよつと遅いからスピード上げていこう」

『あ、ほんとだ。ごめん。見惚れてた』

スピードを上げるエイプ。置いていかれないようにボクもスロットルをさらに回す。

湖畔を横目に眺めなだらかな一本道を駆け抜けていく。

『横に生えてる木って桜だよね』

ちらりと左右の並木を見ると、うん、葉はすっかり落ち切っているけど、たしかに桜の木だ。

「こんだけいっぱい植えられてると、春になったらすごい綺麗だろうね」

美しい湖を眺めつつ桜並木のトンネルをバイクで駆け抜けていく。想像するだけでもワクワクしてくる光景だ。とはいえ花見シーズンは当分先のことだろうけど。

「春になったらもう一度来てみる?」

『あ、それいいかも。今度は双葉の友達も一緒でさ』

「リン来るかな？」

リンの行動範囲の三倍くらい離れてるからたぶん厳しいだろう。それにスクーターでこの距離はさすがのボクでも億劫になる。

『その子と仲良いいんでしょ？ 双葉が誘えば来てくれるんじゃない？』

「まあ、その時になったら話振ってみるよ。もしかしたら慣れてきていいって言ってくれるかもしれないし」

『お、言ったな。ちゃんと覚えとけよー』

「あいあいさー」

適当に返事しつつビーちゃんを走らせていく。反対車線からバイクの集団がやってきた。近づくると先頭のライダーが手を振ってくれた。

『やっほー』

「やっほー」

笑顔で手を振りかえす。バイクはこの瞬間が楽しい。なんていうか繋がっている気がする。

『さつきからバイク多くない？』

「峠道とかみんなこんな感じだよ。車よりバイクのほうが多いくらい」

『いいなーおつきなバイク乗れて。わたしももっと大きいの乗りたいよ』
「憧れるよねーリッターバイクって……まあ、ボクは乗れないけど」

主に身長とか身長とか身長とかのせいで。あと身長のせいで。

『え、なんで……あつ』

なにかを察したように綾乃がだまりこくる。変な空気がボクたちの間に流れる。

『いい、いい加減双葉も先走りたいでしょ？ 交代するよ』

「下手くそなフォロアーありがとー！」

スピードを落とした綾乃を避けてスロットルをぶん回す。エンジンが猛烈な勢いで唸り世界が急加速していく。

『な、なでしこだつて痩せられたんだから、双葉だつて大丈夫大丈夫！ ……きつと』

きつとはいらなかつたなー！

ちくしよー！ なんでもつとおつきく産んでくれなかつたんだよー！ お母さんの

バカー！

見えてきた左カーブを半ばやけくそになりながら膝がするかすらないかの猛烈なハングオンで切り抜けていく。

ちっこいからつてなめるなよー！

『はやっ！ てかなにそれー！』

「綾乃のバカーー！」

2 ストの排気音にクソザコの悲鳴がかき消されていった。

「はいちーず」

パシヤリ。

「むー」

奥琵琶湖パークウエイ。何台ものバイクや車が止まるパークの展望エリアで、眼下に広がる広大な琵琶湖をバックに二人で写真を撮る。

「につこり顔としかめつつらのツーショットができあがった。」

「もーいい加減機嫌なおしなつてー」

「むー」

綾乃はボクの怒髪天をついてしまったのだ。

今のボクは言うなれば激おこステイックファイナリアリテイぷんぷんどリーム状態。ちよつとやさつとじゃボクの機嫌はなおらないぞー！

「あ、向こうの売店でうどん売ってるみたいだよー」

「ほんとう！」

バイクに乗ってる時は気がつかなかったけど、もうお腹がペコペコだった。ここに来るまでの峠でだいぶ攻めてたからかな。

「ねえねえ、どこどこー?」

「ん? あつちだよー」

綾乃が指差すほうにスキップで歩いていく。寒さで疲れ切った身体に染み渡るあつたかいお汗。関西圏だから白だしなのかな?

「おっうどん、おっうどーん」

「……ちよつろ」

後ろでボソリとつぶやいた綾乃の言葉は必死に聞こえないふりをすることにする。

そんなことよりおっうどんだー!

「はーおいしかったー」

自販機で買った缶コーヒーをすすりながら展望スペースの古ぼけたベンチに腰掛け琵琶湖を眺める。

綾乃は向こう見てくると言って一人で行ってしまった。

「あと行きたいところは白髭神社くらいかなー そんで宿に着いてお風呂入ってー」

ピコン！ 誰だろ。

斉藤：おはよー

双葉：え、もう昼だよ？

斉藤：寒くてベッドから起ききれなくて二度寝しちゃったー

斉藤：リンから聞いたんだけど、今琵琶湖にいるんだって？

双葉：うん、写真送るね

綾乃と撮った（ちゃんと笑顔で撮り直した）パークウェイから見た琵琶湖の写真を送る。

斉藤：へえ、琵琶湖ってこんなにおつきいんだ。となりにいるのがなでしこちゃんの幼馴染の土岐さんだよな？

双葉：そうだよ。浜松から一緒に走ってきたんだ

斉藤：二人でツーリングかー すっごい楽しそー このあとはどんな予定なのかな？

双葉：琵琶湖半周したから、このまま一周してゲストハウスに泊まって明日には帰ってくる予定だよ

斉藤：そうなんだく気をつけてね。あと、リンもめっちゃ心配してるみたいだから早めに帰ってあげると安心すると思う

双葉：リンが？

斉藤：うん、昨日電話で話した時けっこう心配してるみたいだった。宿にいったら連絡してあげたら喜ぶと思うよ

斉藤：もちろんわたしもね。帰って来なかつたらやだよ？

双葉：わかった。ありがと。ついたらリンに連絡するよ

斉藤：ついでお土産買ってきてくれるとうれしいな

双葉：もつちろん！ 楽しみにしててね。じゃあね

斉藤：またね

やり取りを終える。リンが心配してくれているのは驚いた。

いや、それでもないか。そう言えば前に琵琶湖行かつて話した時もすごい必死に止められたっけ。

今度からもう少し連絡する回数増やしたほうがいいかな。

そうだ、どうせなら野クルのみんなにも連絡しておくか。

双葉：琵琶湖なう

写真と添付して送信。ほどなくして既読がついた。

あおい：うそやろ、ほんまに琵琶湖おるやん……

双葉：すごいよーでっかいよー！

千明：つ、ついにたどり着いたんだな……がくつ

双葉：どうしたの？

千明：なでしこの風邪うつったなう。

双葉：ありやりや

なでしこ：アキちゃんごめんね〜！ お見舞いいくから元気だしてー！

あおい：無限ループやめーや

双葉：お土産買ってくるから元気だしなよ

千明：ありがてえ、ありがてえ！

双葉：だから休んでしつかりなおしてね！

千明：へーい、じゃあもう寝るわー

なでしこ：おやすみー

双葉：おやすみー

あおい：双葉ちゃん明日帰ってくるんよね？

双葉：うん、7時くらいに出発する予定。だから帰ってくるの9時か10時くらいか

な

あおい：やつぱそんなくらいになつてまうか。ほんまに、ほんまに気いつけてな。なにかあつたらうちらでも誰でもええからすぐに電話するんやで？

双葉：わかった。心配してくれてありがと。そうだ、お土産なにかリクエストある？

なでしこ：おいしかったらなんでもオツケーです！

あおい：ならわたし琵琶ゼリーほしいわ。あれめっちゃ気になってたんよ

双葉：びわゼリー？ わかった。探してみる

千明：その関西弁、ホラを吹くのはやめなさい

双葉：そうなの？

あおい：せやでーびわは千葉の特産品や。ちなみになんでピワって言うか知つとる？

千明：そこー嘘に嘘を重ねるなー 故郷のお袋さんが泣いてるぞー

双葉：知つてた。まあ適当にみんなで食べられるもの買つてくるよ

あおい：はーい、楽しみにしとるでー

なでしこ：気をつけてね！ あとアヤちゃんのことよろしくね！

スマホをしまう。みんなすぐく心配してるみたいだ。これは本当に無事故で帰らな

いと何されるかわからないな。

「そういえば綾乃どこ行つたんだろ」

「双葉ー」

噂をすればなんとやら、後ろから綾乃の声が聞こえてきた。振り返るとエイプの横でボクに向かつて綾乃が手を振っていた。

コーヒーを飲み干してベンチから立ち上がり綾乃の元に向かう。

ボクの後ろをハーレーが一台通り過ぎる。綾乃が女の人らしきライダーに手を振った。

「知り合い？」

「ううん、双葉のこと待ってたら話しかけられた。静岡と山梨から来たって言ったらめっちゃ驚いてた」

「そんなに珍しいかな？」

バイク乗りなんて、ゴキブリと同じでどこにでも湧くもんだと思うんだけど。

「バイクならともかく、原付で来る人はなかなかいないでしょ」

「大して遠くないんだけどなあ」

「聞いたよー 双葉みたいなの距離ガバって言うんだってね」

「は、え？」

初めて聞く言葉だ。キヨリガバ？ ああ、距離ガバか。

酷い言い草だけの確すぎてなにも言い返せない。

「山梨から琵琶湖が350キロで、今日100キロくらい走ったから450キロでしょ？」

意外と走ったな。そろそろオイル新しいの買つとかなないと。帰りにホームセンターでも寄ろうかな。

「冷静に考えるとき……ていうか冷静に考えなくても普通にヘンタイだよ。新幹線レールだよこの距離」

「へ、ヘンタイって……綾乃も着いてきてるんだから人のこと言えないでしょ」

「だよー 双葉のせいでわたしヘンタイになっちゃったよー」

「もういいよそれで」

楽しそうにケラケラ笑う綾乃に呆れる。どうやら綾乃の中でボクはヘンタイにカテゴライズされてしまったようだ。

ボクなんてまだまだなのね。世の中には往復1000キロを日帰りでこなす汎用人型バイク操縦ロボットもいるというのに。

「そろそろ行く?」

時計を見ると時刻は1時に差し掛かろうとしていた。そろそろ出発したほうがよさそう。

ビーちゃんに跨って出発の準備を整える。

「3時にチエックインの予約入れてるからちようどいいと思う」

「あと50キロくらいだっけ? けっこうあつという間だったね」

「でしょー! 100キロ200キロなんてあつという間なんだよー! 綾乃もやつとわかってくれたんだね!」

「……わかりたくないけど、なんとなくわかつちやうのが困る」

なんとも言えない表情でエンジンをかける綾乃。

ふふふ、順調にこっちの世界に染まってきていますなー

「じゃ、行こっか」

「へーい」

キックペダルを蹴り飛ばしエンジンをかける。周りを確認してゆつくりと走り出す。冬の琵琶湖。旅も残すところ半分を折り返していた。

「ふい〜」

誰もいない広々とした湯船にボクたちのだらけ切った声がこだます。

「ぐくらくじや〜」

「と、とける〜」

近江舞子、ゲストハウス。

奥琵琶湖パークウェイから50キロをばぱと走り抜き、ボクたちはついに宿にたどり着いた。

「一泊2000円って聞いてちょっと心配してたけど、なんかすっごくいい感じじゃん」

「人もいないし布団もふかふかだし、オフシーズンさいこー」
「わかる〜」

やっぱり旅をするのは冬が一番だ。虫もいないし人もいないし、なにより空が綺麗だ。

夏の青空と入道雲も好きだけど、冬のどこまでも澄み渡る青空がボクは無性に気に入っている。

「浜松からここまで350キロ……あはは、改めて考えるととんでもないや」

「楽しかった？」

「うん！ でもめっちゃ疲れた〜！ たぶん今日もぐつつすりだろーな」

「明日はまた200キロだから今日はゆっくり休まないとね」

「うげ〜 また200キロか〜 でも双葉はもつと走るのか」

「だいたい350キロかな。大した距離じゃないからパッと帰るよ」

時間にして約15時間くらい。本当だったらもう一度琵琶湖半周して岐阜と長野を経由して帰る予定だったから、これでも短いほうなのだ。

「地元の友達に話したらびつくりするだろーな〜 バイク乗ってるだけでも驚かれるのに、琵琶湖行つたなんて言ったら腰抜かすんじゃない？」

「そう言えばさ、気になってたんだけどなんで琵琶湖まで着いてきてくれたの？」

前から疑問に疑問に思っていたことをぶつける。

ツーリングに行くこうとは言っていたけど、まさかこんなところにまで着いてくるとは思ってもなかった。

350キロ。とてもじゃないがなにかあつたら引き返すなんて甘えは許されない距離だ。

ボクはそういうリスクを承知で走っているけど、綾乃……いや、普通の女の子なら忌諱感を持つたつて不思議じゃない。

すごく嬉しかったし、楽しかったけど、やっぱり不思議だ。

「双葉とき、おんなじものを見てみたくなつたんだ」

綾乃の目はどこか手に入らないものに憧れるような、そんな目をしていた。

「浜松で温泉入った時の双葉の目が忘れられなくて、なんでこの人こんなに楽しそうなんだろうなーって、ずっと思ってたさ」

何かを掴むように、中に向かって手を伸ばす綾乃。

「でも、昨日と今日一緒に走ってみて、なんとなくわかったよ。たしかに、こんなの知つたら病みつきになつちやうよね」

病みつき。ボクたちバイク乗りは、多かれ少なかれなにかに病みつきになる。スピード、改造、レース、エトセトラ。

ボクにとってはそれは旅だった。そして、綾乃もそうだったんだろう。

「知らない道を走って、知らない景色見て、知らないご飯食べて……わたし知らなかったよ。世界がこんなに広いなんて」

湯気の向こうに見える綾乃の目がキラキラと輝く。なにかを本気で楽しんでいる人の目だ。

ボクはその目に見覚えがあった。なぜならボク自身がこういう目をしているからだ。

「双葉、わたしを連れてってくれてありがとう。すつごく楽しかった。またいこーね」

湯気の向こうの綾乃がへらと笑い拳を突き出す。

「うん！　またいこー！」

ボクも笑って拳を突き出す。

コツン、拳にお湯でふやけた指の感触が伝わる。

「春になったら九州でもいく？」

「さすがにそこまで行くと親の説得が難しいかなー　でも考えとくね」

「ほんとにー？　めっちゃ遠いよー」

「あ、双葉が初めて遠いって言った！」

お風呂場を舞う湯気のように、ボクたちの会話も弾んでいく。

楽しい時間はあつという間に過ぎていく。けど、この思い出はきつと一生忘れないだ

ろう。

旅ももうじき終わりを迎えようとしていた。

そして次の日……

「綾乃、準備いい？」

「おっけーだよー！」

宿の前でビーちゃんに跨り振り返る。荷物は積んだ。忘れ物もない。お土産も買った。

エンジンをかける。白煙が宙を舞う。

「帰るとしますか」

「しゅっぱーつ！」

さあ、帰ろう。ボクたちの家に。

「また200キロかあ……でもまあ、そのくらいなら……」

ふふふ……

「やったー！ 浜名湖だー！」

見覚えのある木組の展望台の上で、沈み始めた太陽に照らされた浜名湖を眺める。

出発から8時間。ボクたちは浜名湖へとたどり着いた。

「うわ、二日しか離れてないのに、なんかすっごい懐かしい」

「それなんかわかる」

二人でオレンジ色に染まっていく空を眺める。初めて綾乃と出会った時は、まさかこんなことになるなんて思ってもみなかった。

本当に、世の中なにか起きるかわからないなあ。

「もうすぐ夕方だね。双葉はこれから150キロだっけ？」

「うん。たぶん6時間くらいかな」

「そっか……じゃあもう行かないとまずいよね」

ただわかれるのも寂しいという綾乃の誘いで、この木組の展望台に足を伸ばしたけど、お別れの時間が迫ってきた。

「……双葉、今日うちに泊まっていかない？ 明日も休みでしょ？」

ボクを見る綾乃の瞳は気のせいかな少し揺れている気がした。

「そうだけど……どうして?」

「だって、これから夜になっちゃうし、150キロって絶対危ないよ。べつに気とか全然使わなくていいからね。わたし一人っ子だし」

たぶん、これは建前だ。純粹に心配しているだけなら、こんな寂しそうな顔なんてしない。

「綾乃……」

ボクも名残惜しいとは思っている。一緒にいたのはたったの三日だけど、なによりも濃い三日間だった。

ボクは綾乃のことがもつと好きになつたし、綾乃もきつとボクのことをもつと好きになつてくれたと思っっている。

これから一人で帰るのかと思うと、なんだか胸にぽっかり穴が空いたようなそんな気持ちになる。

「だけど……」

「ありがとう……でも、そろそろ帰るよ」

「どうして?」

「ボクを待つてる人たちがいるからさ」

脳裏にみんなの顔が浮かび上がる。リン、なでしこ、千明、あおい、斉藤さん……みんなボクの身を案じてくれた。本気でボクの無事を願ってくれた。旅は楽しい。けど、旅は行って終わりじゃない。

行って帰って、そしてたいてい言って、初めて旅は終わるのだ。

「みんな心配してるから、早く帰って安心させてあげたいんだ」

昔みたいに一人きりだったら、一人ぼっちだったら、なにもなかったら、きつと、二つ返事で綾乃の提案に飛びついただろう。

だけど、もう昔とは違うのだ。ボクには帰るところがある。帰りたい場所がある。

「……そっか、じゃあしよがないかー あーあ、双葉にふられちゃった」

ちよつと寂しそうに笑う綾乃。そろそろ本当にお別れの時間だ。

「またいつでも会えるって。だからそんな顔しないで」

「……絶対？」

「絶対」

お互いにしばらく無言で見つめ合う。別れなきやいけないのはわかってる。けど、少しでも長く一緒にいたい。

お互いに気持ちは同じみたいだ。だけど、それももう終わり。

「……じゃ、ボクはもう行くね」

「うん、下まで送ってくよ」

二人で展望台を降りてバイクに跨る。

空はすっかりオレンジ色に染まり切って、美しいグラデーションを作っていた。

着く頃には真つ暗だろうなあ。まあ、頑張つて走るとしますか。

「双葉、今度いつ会える?」

「いつでも! 呼べばどこにだつて行くよ!」

だつてボクにはバイクがあるから。

エンジンをかける。ビーちゃんが待つてましたと言わんばかりに白煙を吐き出す。

「またね!」

人差し指と中指をこめかみに当てて、シュツと振り払う。ちよつとかつこつげがすぎるかな。

でも、死ぬまで見栄を張るのがバイク乗りという生き物だ。

クラッチ、1速、スロットル。

唸るエンジン、飛び散る白煙。流れ出す景色

「双葉! やっぱ次わたしから会いにくよ!!」

ミラー越しに映る綾乃に手を振る。今の綾乃なら本当に山梨まで来そうな気がする。というか絶対来るだろうな。なんとなくそんな確信がある。

だつてたかが150キロしか離れてないんだもん。

「バイト、いい加減決めないとなー」

お金を稼いで、浜松餃子に負けなくらい、おいしいものをご馳走してあげないと。スロットルを回す。エンジンが唸って車体が加速していく。

さあ、帰ろう。みんながボクを待っている。

そして、帰ったらみんなにこう言うんだ。

ただいまってね。

10話 レギュラーガソリン 1リットル 152円

(税込)

10—1

12月も残すところ二週間を切った。

わずかに残っていた秋の名残はもはや完全に消え去り、身の毛もよだつような木枯らしと、蒼々しい空が長い冬の到来を予感させる。

「えー、この時代の特徴として——」

黒板の板書をノートに書き写しながら、新しく赴任してきたばかりの先生を見る。

鳥羽先生。産休でこれなくなってしまった歴史の先生の代わりにやってきた若い先生だ。

「やっぱり、あの人だよなあ……」

今回が初めての学校らしく、面識など当然あるわけないんだけど、どうしてか、ボクはこの人にもすごい見覚えがあった。

「脳裏に浮かぶのは四尾連湖での出来事。泥酔したお姉さんを引つ張る火熾しお姉さん。」

酒を持つてこいというしよもない叫び声は今でも記憶に残っている。

正直、あの泥酔お姉さんが鳥羽先生だなんて信じられないけど、観察眼には自信がある。十中八九同一人物だろう。

「なでしことリンには秘密にしておくか」

けど、ああいう姿は普通は見られたくないものだ。ボクが同じ立場だったらまず間違はなく恥ずかしくて死ぬ。

言いふらすのもあれだし、これはボクだけの秘密にしておこう。

でも、ありえないだろうけど、もし鳥羽先生が野クルの顧問にでもなつて一緒にキャンプすることになったら、面白いものが見られるかもしれない。

ま、そんなことは起きないだろうけどね。そもそも一応顧問いるし。顧問らしいことしてるの一回も見えてないけど。

さて、この授業が終わったら野クルでクリキャンの作戦会議だ。クリスマスも迫ってきた。いい加減具体的な計画を考えておかないと。

「当時の考え方として——」

「やっぱ、ギャップ激しすぎるよなあ……」

いったいなにをどうすれば、この凛々しい美人の先生があのだらしない酔っ払いお姉さんになるんだろうか。

教師って大変って聞くし、ストレス溜まつてるのかな？ 手伝えることがあつたらなるべく手伝うようにしておこう。

そんなことを考えるボクなのであつた。

「諸君、これより第一回野クル緊急会議を始める」

放課後、いつもの部室、いつものメンツ。いつもの集まり。

うなぎの寝床みたいな部室で、どっかの特務機関の司令官みたいに両手を顔の前で組んで眼鏡を光らせる千明。

またなんかハマったのかな。

「すでにわかっていると思うが、事態は急を要する。諸君らの優秀な頭脳を貸してほしい」

かっこいいポーズを決めてかっこいいセリフを言ってるけど、下半身があぐらだからなに

もかっこよくない。

「アキ、昨日アニメでも見たん？」

「……なんのことだ？」

「目泳いどるやんけ。まあええわ。あと下着見えとるで」

「なっ!？」

顔を赤くして慌てて膝を閉じる千明。そんなのやる前からわかるでしょうに。

「と、思ったけど勘違いやったわー」

「イヌ子、おまえなー!」

「け、喧嘩はだめだよー!」

なでしこ、これは喧嘩じゃなくてただのいちやつきつていうんだよ。

いつも思うけど、この二人ってほんと仲良いよなあ。

「うおっほん、気を取り直して会議を——」

「あ、そういうやうちお肉当たってもうたわ」

「なにぃー!？」

ガタガタガタツ。そんな感じの擬音がつきそうな勢いでボクとなでしこ千明の三人に動揺が走る。

「これやでー」

「国産A5ランク黒毛和牛肩ロース、

2キログラム……」

あおいの差し出したチラシを読む。年末によくやっつてる懸賞か。こういうのって、基本当たらないものだと思うんだけど、当たる時は当たるんだな。

「お、おい！ イヌ子マジか！ マジなのか！ またいつものホラじゃないだらな!?!」
 「ここで嘘つく意味ないやろ。ほんまやでー 試しに応募してみたら当たってもうたわ。」

「ふおおお！ 黒毛！ しかも和牛！」

「クリスマスまでには届くみたいやし、これ使ってキャンプご飯つくろーや」

「「やったー」」

太っ腹なあおいにみんなで歓声をあげる。

ちゃんとした牛肉食べるのなんていつぶりだろうなあ。いつもは安い細切れ肉しか食べないから楽しみだ。

「ちなみに一人4千円な」

……

……

……

財布をちらり。

5千円札が一枚コンニチハ。

「……千円札ってありますか？」

「うそやでー」

ほつ、びっくりしたあ。もう冗談きついつてあおい。二人とも固まっちゃってるじゃん。

「アーナンカカタコツテモータワー」

と、調子に乗ったらしいあおいがニヤリとわらってそんなことを言い出した。なんて酷い棒読みだ。

「あおいちゃん肩もんであげるね！」

「い、イヌ子なんか飲み物欲しくないか？　ロリ子コーヒー頼めるか!？」

「露骨に媚び売るのはやめようよ」

みつともないからやめなさい。なんていうか、この三人ってほつとくとすぐこれだよ。楽しいけどさ。

「こんちはー 遊びにきたよー」

そんな楽しい空間にまた一人友達がやってくる。

なんてことない日常、なんてことない時間、なんてことない幸せ。

この時間がいつまでも続けばいいのに。ボクはそんなことを思うのであった。

パチパチ、メラメラ。落ち葉と枯れ枝燃やして熾した焚き火を野クルと途中でやってきた斉藤さんで囲む。

「千明、こんなの買ってたんだけ」

もはや恒例行事と化しつつある校庭での焚き火。

けど、いつもと違って薪は直火じゃなくて焚き火台の上で燃えている。

金網とポールを組み合わせたシンブルな焚き火台。

構造自体はたいしたことないけど、これがあるだけでキャンプ感が一気に増している。

「めっちゃええやんこれ」

「うんうん、いかにもキャンプって感じ」

「だろー？」

この焚き火台は千明が新しく買ってきたとのこと。たしかに自慢するだけあつてすごい使い勝手が良さそうだ。

「いいなーボクも買っちゃおうかな」

バイクと焚き火ってあんまり相性がよくないから避けてたけど、こうも目の前で見せつけられると欲しくなってくるのが人間だ。

「おう、買え買えー」

そんなに焚き火するわけじゃないし、安めの、なんなら何かで代用できるならいいんだけど。

あとでちよつと調べてみるか。

「んで、話は変わるが、いい加減クリキャンの具体的なプランを練つといたほうがいいと思うんだわ」

「たしかに、そろそろ決めないとあとちよつとで冬休み入っちゃうもんね」

「ゆうて、決めなあかんのキャンプ場くらいやろ。荷物はいつもと同じやし」

「ダメだよあおいちゃん！ クリキャンは特別なキャンプ！ 特別なキャンプには特別なご飯が必要なんだよ！」

「まあ、たしかにどうせならカレーとかありきたりなものじゃなくてそれっぽいもの作りたいよな」

「わたしはおいしかったらなんでもいいよ」

「わちゃわちゃ会議しているみんなを横目に今度のキャンプご飯について考えを巡らす。」

あおいにだけ任せるのもあれだし、ボクもなにか作りたいなあ。なにがいいかな。焚き火、キャンプっぽい、おいしい、牛肉……肉……鶏肉……

うん、あれなんかいいんじゃないか？ そうだ、そうしよう。

「ふふふ……」

我ながらいいアイデアを思いついて思わずニヤついてしまう。

「どないしたん双葉ちゃん、なんやえらいニヤついとるけど」

「ふつふつふ、ひみつだよー」

パーティーにはサプライズが必要不可欠だ。せいぜいびつくりさせてあげよう。

「双葉ちゃんもしかして、なにかおいしいキャンプご飯思いついたの!？」

「チ、チガウヨー」

なでしこ、君はエスパーかなにかなの？ どうしてそこまでピンポイントで当てられるの？

「目、めつちや泳いどるやん」

「まあ、その、なんだ、楽しみにしておいてやろうぜ」

フオローありがとう千明！ でも、できればスルーしてほしかったな！

「あ、双葉ちゃんのサプライズで思い出したんだけど、プレゼント交換ってしないの？」
齊藤さんの言葉にみんなが納得したようにうなづく。あれ、なんでみんな「あー」つ

て感じでうなずいてるの？

「ねえ斉藤さん、プレゼントって誰かと交換しあうものなの？」

「え、双葉ちゃん友達とプレゼント交換したこと——」

「おーつと斉藤！ 飲み物ほしくないか！ お湯だけだな！」

「斉藤さん、たしかペット飼つとるんやっただけ？ よかったら写真みしてもらっても

ええ？」

「え？ あ、うんいいけど」

「斉藤さん斉藤さん、双葉ちゃん今まで友達いなかったんだって。たぶんプレゼント交換とかしたことないんだと思う」

「あー、なるほどー」

千明、あおい、なでしこ、わかりやすいフオローありがと！ あとなでしこ、耳打ちしてるつもりなんだろうけど全部聞こえてるよ！

でも、みんなのそういうところほんと大好き！

「ま、まあ、あんまプレゼントだのかたっ苦しいこと抜きにして、ここはお互いのおもてなしの気持ちでプレゼントにつちゆうことでええんとちやう？」

「あおいちゃんナイスアイデア！」

「たしかに、それでよさそうだな。どう思うよ双葉、斉藤」

「うん、いいんじゃないかな？　すごくいいと思う」

「わたしもさんせ〜」

わいわいがやがや。冬の木枯らしにも負けず、ボクたちは来るべきクリキャンに向かつて邁進していく。

よく、世間では準備している時が一番楽しいって言われるけど、たしかにそのとおりかもしれない。

だって、こんなにワクワクするんだもん。

「ちよつとあなたたち！」

でも、そんな楽しい時間は長くは続かなかった。

突然の第三者の声。ボクたちが一斉に振り向く。

「こんなところでなにやってるの!？」

歴史の鳥羽先生が、血相を変えて僕たちの前に立っていた。

もしかして、なにかまずいことしちやったのかな？

「これ、どうぞ」

マンデリンの香りが漂うマグカップを困り顔でベンチに座る鳥羽先生に差し出す。

「あ、ありがとうございます……いただきます」

先生がコーヒーをひと口。

「あ、おいしい……」

険しかった顔が少しだけ和らぐ。よかった。気に入ってくれたみたいだ。

「たしか1年の山中さん、でしたよね？ コーヒー入れるの上手なのね」

「べ、べつにボクなんてそんなたいそうなものじゃないですよ。えへへ」

「ううん、お世辞とかじゃなくて、本当においしいわ……ウイスキーに合いそう」

「え、先生何か言いました？」

気のせいかな、今ウイスキーって聞こえたような。

「い、いえいえ、なにも言ってますんよ！」

「あ、はあ」

まあいいや。それにしても、この人も災難だよなあ。

まさか、あんなことが起こるなんて。正直今思いたしてもひどい話だ。

「それで、一応あなたたち野外活動サークル？ の顧問になったわけなんですけど、具体的になにをするのかしら？」

校庭で焚き火をしていたボクたちを注意してきた鳥羽先生。

ボクたちは許可はとっているのだけど、納得できない（当たり前と言えば当たり前だ）

先生が一応顧問をしている大町先生に確認。

その後、なんやかんやあつて鳥羽先生は大町先生に野クルの顧問を押し付けられてしまった。というのがことの顛末だ。

まさに藪を突いて蛇を出す。という言葉がふさわしい。先生には同情しかない。

「一言で言うともんなでキャンプしようっていう部活っす」

「ぞつくりしすぎやアキ。間違つとらんけど」

「今度の冬休みもみんなでキャンプ行きます！」

「まあ、なんていうか、こんな感じのゆるい部です。なんで、あんまり忙しくはないと思います」

「そう、なのね……」

あからさまにほつとする鳥羽先生。そりやそうだよね。

新任なのに説明もなしにいきなりわけのわからない部活の顧問押し付けられて、ボクだったら不安でどうにかなくなってしまいそうだ。

ちよつとさすがに不憫だなあ。そうだ。気休めになるかはわからないけど、ちよつと付け足しておこう。

「先生」

「はい？」

顧問がついて盛り上がるみんなを横目に先生に耳打ちする。

「あの、ボクとかなでしこ……各務原さん、料理けっこう得意なんで、先生にも色々作りますよ。例えば……お酒に合うおつまみとか」

「お酒……」

あ、反応した。わかりやすい。

正直、こんなんで釣り合いが取れるとは思わないけど、少しくらい旨みがないといくらなんでも先生がかわいそうだ。

「焚き火でじっくり焼いたパリッパリのチキンとか、出汁の効いたお鍋とか……」

「ぐくり……」

こしよこしよと耳元で囁く。そういえばボクなんでもこんなことしてるんだろ。普通に話せばいいじゃん。

まあいいや。

「他にも言ってくればなんでも、作りますよー」

「な、なんでも……」

「はい。鳥羽先生、なんていうか、押し付けるみたいな形になってすいません」

「いい、いえ、そんな」

「これくらいしかお返しはできませんけど、よかったらボクたちの面倒をみてもらって

もいいますか?」

先生の横に座って頭を下げる。自分でいうのもなんだけど、ほんと成長したよねボク。

昔だったらこんなこと絶対にできなかつただろうに。

「……はい、こちらこそ! よろしくお願いしますね」

そう言つて、鳥羽先生は微笑んだ。それだけで、十分だった。

「よし! 顧問もついたことだし、新生野クル気合い入れてくぞー!」

「「「「おー!」」」」

ボクとみんなの元気な掛け声が、冬の校庭にこだまする。

「うーん、やっぱり鳥羽先生ってどこかで見ただことあるんだよねー」

あ、やばい。なでしこが勘づいた。

「先生、ちよつと手をこうしてもらつても——」

「わーわーわー!」

「どうした急に」

「双葉ちゃん、またなんかごまかそうとしとらん?」

「な、なんのことかなー　ボクわかんないやー　あーいいてんきだなー」

「あはは、やつぱこの子たちおもしろいなー」

「うふふ、皆さんほんとに仲がいいんですね。これならなんとかやっていけそう」

わいわい、わちやわちや。今日も野クルは平和そのものだった。

ちなみに、ボクの健闘虚しく、鳥羽先生の正体は、ほどなくしてなでしこにばれたのであった。

とほほ、ボクが頑張った意味って……

10—2

「ふう……」

スーパールの自動ドアをくぐって外に出る。外の寒さに反比例して、心は達成感で打ち震えていた。

「あ、面接終わったん？」

外で待つてくれているらしいあおいがスタスタと近づいてきた。わざわざ待つてくれたみたいだ。

「うん、終わった」

「それで、どうやったん？」

神妙な顔でたずねるあおい。たしかに、あおいにとっては気になることだろう。

「えっとね、なんとなんとー！」

「なんとー？」

「採用けつてーしましたー！」

ボクのひとつ言にあおいがばあつと笑顔になる。

その笑顔を見ると、ボクの心にも嬉しさが込み上がってきた。

「やったやーん！ おめでとーな！」

「やったよあおいー！」

湧き上がるテンションに任せあおいとハイタッチをかます。パチーンといい音がなった。

「それで、いつから働くん？」

「来週からだつて！ あおい、バイト紹介してくれてありがとー！」

そう、今日ボクは、あおいのバイト先のスーパーでバイトの面接を受けていたのだ。

面接は1学期のころに何度か受けていたのと、ボク自身が人と話すのに慣れたのもあつて、想像してたよりもスムーズに終わった。

結果は見てのとおりで。紹介してくれたあおいには感謝しかない。

「そないおおげさにお礼言わんでも、ええつて！ 最近バイトさんが一人辞めてしもうて、ちょうど代わりの人探しとつただけみたいやし」

「でも、あおいがボクのこと紹介してくれたおかげですんなり採用されたから、ちゃんとお礼言わないと気がすまないよ。ほんとにありがと」

「おおきにやでー にしても、まさか双葉ちゃんが前にここで働いとったなんて知らなかったわ。店長さん驚いとったで」

ボクもつい最近知ったことだけど、実はあおいが働いているスーパート、ボクが以前働いていたスーパートは同じ店だったのだ。

「うん、店長にも無理して働くなよって釘刺されちゃった」

「あ、あはは」

もうパートの人に「君、いつもいるね」なんて言わせないからなー!

「ま、なんにせよこれから部活仲間でバイト仲間や! よろしゅうな双葉ちゃん!」

「うん、よろしくね! あおい」

よーし、これで資金問題解決! これからは赤字にならない程度に使っていけば、またお金も貯まるだろう。

そしてゆくゆくは新しいバイクを……ぐふふ。

「せや! せっかくやし向こうのラーメン屋さんでラーメンでも食べてかへん? 給料も入ったばかりやし、うちが奢ったるで!」

「え、悪いよそんなの!」

「ええからええから、ほないこー!」

「あ、ちよ」

手を引っ張られて強引に連れていかれる。ボクの友達はなんでこうみんな押しが強い人たちばっかりなんだろう。

まあそこが好きなんだけどね。

「ラーメン食べるのなんて何ヶ月ぶりやろなあ。久しぶりにごつつ食べるでー」
身の毛もよだつ、冬の身延。だけどボクの心は、それ以上にポカポカとしていた。

バイクを押しながら、二人で冬の街道を歩く。口の中にはまだラーメンの味が残っていた。

「あそこ行っただん初めてやったけど、けっこうおいしかったなあ」

「うん！ おいしかった。ありがとあおい」

二人とも、ここでの用事は済ませたのであとは帰るだけだ。

けど、なんとなくこのまま帰るのはもったいない気がして、今こうして二人で冬の街をぶらついていた。

歩道の上をタイヤをころころと転がしながら歩き続ける。

「もうあとちよつとで冬休みなんよね。今年はほんまあつちゆうまやったわ」

「あとはクリキャンやって、みんなでお正月迎えるだけだね」

「そやった。まだ場所決めとらんかったわ。双葉ちゃん、なんかいいところ知らへん？」
「ごめんね。ボクも探してるんだけど、キャンプ始めたばかりだから、どれがいいとかあんまわかんなくてさ」

ツーリングスポットだったらいくらでも挙げられるけど、キャンプに関してはまだまだ素人の粋をでない。

こう言う時はプロに聞くのが一番だろうな。

ボクは今ごろ本屋で店番をしているであろう友達のことを思い浮かべた。

「リンが探してくれるみたいだから大丈夫だろうけど、ちよつと頼りすぎな気もするんだよね」

みんなでキャンプがしたいから集まるっただけで、誰が主催とかそういうのはないんだけど、やっぱり気になる。

「双葉ちゃんは真面目やなあ」

「二応誘ったのボクだしさ、ほんとだったらこれはボクがやらなきゃいけないことなんだよね」

ボクは友達とはなるべく対等な関係でいたいと思っている。

つい最近まで友達という存在とは縁がなかったから、余計にそう思うのかもしれない。

「そない大ごとに考えんでもええんとちやう？　志摩さんだつていちいち難しいこと考えとらんやろ」

「うーん、あおいの言うとおりなんだけど、こればかりは癖つていうかなんていうか……」

家にも学校にも、頼れる人なんて誰もいなかったボクにとって、誰かに頼るっていう行為はまったく未知の領域なのだ。

もちろんそれがよくないのはわかっている。でも、染み付いた生き方はそう簡単には変えられない。

「そっか……ならしゃーないけど、もうちょつと気楽に頼つてもええと思うで。友達つてそういうもんやろ」

「だよねー」

ボクも本当はわかっている。友達付き合いに貸しも借りもないことくらい。

友達だから助けるし、友達だから助けてくれる。

そこに貸しとか借りとか、そういうギブ&テイクは存在しない。そういうのを考えはじめてしまったら、それはもう友達と言えなくなってしまう。

だけど、そうやって気楽に考えられるほど、ボクのみんなに対する感情は軽くない。

「難しいよね。生きるのって」

「……せやなー」

あおいは、きつとボクが納得しきってないことをわかっているんだろ。わかかって、あえて適当に相槌を打ってくれている。そういう気遣いがほんとに嬉しい。

なでしこみたいな、問答無用で明るいとこに引つ張り出すような優しさじゃない。いうなれば、月明かりのような優しさだ。

本当にいい友達を持ったなって、しみじみ思う。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

ビーちゃんを車道に移動させヘルメットを被ってシートに跨る。

「帰り道、気をつけてーな」

「ありがと。バイトよろしくね」

イグニッションスイッチをオン。オイルランプとニュートラルランプが点灯する。

あ、燃料ほとんどなくなってるじゃん。リザーブに変えておこ。

コックを捻ってリザーブに切り替えて、チョークを引きキックペダルを蹴る。

エンジンが唸って、白煙が舞う。

「またね」

軽く手を振ってビーちゃんを発進させる。

「双葉ちゃん、また明日なー！」

夕陽に沈む身延を、エンジンの音を響かせ駆け抜けていく。

「難しく考えすぎ……か」

あおいに言われた言葉がリフレインする。

肩の力を抜くって言っても、どうすればいいんだろうね。

「ダメだ。考えてもわからない」

こう言う時は走って気を紛らわすのが一番だ。

そうだ。どうせだからキャンプ場の下見にでも行つてこよう。

「へえ、ここか……」

すつかり日も沈んだ空。星々が瞬き始める夜のはじまり。

静岡県、国道139号線。富士宮道路。富士山YMCAGローバルエコビレッジ。

「ここからじゃ全然見えないか」

ちよつと前、リンがクリキャンの候補地として教えてくれたキャンプ場の前で、ボク

は一人孤独にふけていた。

真つ暗な世界の中で、エンジンのアイドリング音がトコトコと響き渡り、ウインカーのオレンジの光がカチカチと点いては消えてを繰り返す。

「まあリンが紹介してくれたところなんだし、いいところに決まってるか」

どうせ暗くてなにも見えない。そろそろ出発しよう。

そうだな、このまま帰るのもアレだし、北上して本栖湖見てから帰るとするか。

ピコン！ とポケットのスマホが鳴る。

「誰だろ」

綾乃：綾乃さんだよー

双葉：双葉さんだよー

綾乃：なでしこから聞いたぞー クリスマス、キャンプするんだってね

双葉：うん！ 今ちようど下見してるところ。静岡の富士山YMC Aってところだよ
カメラを起動してキャンプ場の入り口を撮って送信する。

双葉：ここだよ

綾乃：暗くてなんもみえないし

双葉：だってもう夜だし。でも、すごいとこみたいだよ。富士山とかすっごい綺麗に見えるみたい

綾乃：いいなー双葉となでしこだけみんなワイワイキャンプして。わたしは家族と

寂しくクリスマスだつて言うのにさー

双葉：家族いるじゃん

綾乃：それはそれ、これはこれ。つてやつ

綾乃：ていうかもうすぐ8時だけど、そんな遠くまで行つて平気なの？

双葉：家から30キロくらいしか離れてないし、ここら辺はしよつちゆう走るから大

丈夫だよ

綾乃：なんだ、近所じゃん。でも、慣れたところが一番危ないつて言うし、気をつけなよー

双葉：はーい、じゃーね

綾乃：あ、そうだ。双葉

双葉：うん？ どうしたの？

綾乃：……やっぱおしえなーい

双葉：ええ……

綾乃：ほんじゃ、これで。クリスマス、楽しんでねー

双葉：はーい

スマホをしまう。

「慣れたところが、一番危ないか」

たしかにそのとおりだ。

夜の峠はもう何回も走ってるしどうってことないけど、気をつけるにこしたことはないか。

「じゃ、もうちよつと走ろつか、ビーちゃん」

タンクをポンポンと叩きハンドルを握る。ウインカーを切り替えて、漆黒の峠を駆け抜けていく。

たくさんの友達。楽しいキャンプ。そして旅。

全てが順調すぎるくらいに進んでいく。

きつと、こうしてなにもない平和な時間が過ぎていくんだろな。

ボクは走りながらそんなことを思うのであった。

「本栖湖とーちやーく」

人気のない湖、まばらに置かれた街頭の不健康な光の下で、ビーちゃんを止める。

夜の本栖湖は不気味なくらい人がいなくて、怖いくらいに静かだった。

風の音も、虫の声もない。耳が痛くなるほどの静寂。

まるで、この地に生きている存在はボクだけなんじゃないかって思ってしまうくらい
の圧倒的な静かさ。

「ここで二人に会ったんだよな……」

正確にはリンとはもうちょっと前に知り合ってたけど、まともに会話したのはここが
初めてだ。

「あの時本栖湖行こうとしなかったら、どうなってたのかな」

闇の向こうに広がる本栖湖を眺めながら、もしもの世界を考える。

もしボクがあの時本栖湖に行こうとしなかったら、トイレに行こうとしなかったら、
きつと二人には合わなかったんだろう。

なでしことは結局同じクラスで会ってたんだろうけど、今みたいに仲良しにはなれな
かったに違いない。

綾乃と友達になることもなかったはずだ。もちろん琵琶湖に一緒に行くこともな
かっただろう。

千明とあおいとも距離を置いたまま、二人がどれだけボクを大事に思ってくれていた
のかも気づかないまま、一人で旅を続けていたんだろうな。

キャンプだって、それっぽい理由をつけて断つてたと思う。野クルからも距離を取つてたかも。

一人で旅をして、誰もいない家に帰ってくる。一人で冷たいパンをかじって、一人で冷たいベンチで眠る。

お金は今より貯まってるだろうし、なんなら新しいバイクだって買ってたかもしれない。

それはそれでできつと楽しいだろうけど、今みたいな心がポカポカする暖かさは決して手に入らない。

冷たい一人の世界。灰色の日常。

「ほんと、カレー麺には感謝しないと……」

半分に分けられたカレー麺から始まった新しい世界。

一人で完結していた世界は何十倍にも、何千倍にも、何万倍にも広がった。

みんなが背中を押してくれたおかげで、ボクは前よりも笑うことができるようになった。

もし、本栖湖に行かなかつたら、全部なかつたのだろう。

「もう帰ろ」

そんなことを考えると、急にここにいるのが怖くなってきた。

一人ぼつちは当たり前だったのに、いつのまにかずいぶん臆病になった気がする。でも、それでいいんだろうな。

「帰ろっか、ビーちゃん」

帰って暖かいご飯を食べて、リンと電話でもしよう。なんの役にも立たない、楽しい会話をしよう。

イグニッションスイッチをオンにする。チョークを引いて、キックペダルを蹴り飛ばす。

けど――

「……あれ?」

いつもなら感じるはずの手応えがまるでない。

おかしいな、エンジン止めたばかりだからまだ熱いはずなんだけど……
もう一度蹴る。

同じく反応なし。あれ、本当にどうしたんだろう。故障?

「あ、ガソリンか」

そういえばガソリン切れかけてたな。たぶんメインが空になってしまったんだろう。

「リザーブに切り替えて……」

燃料コックに手を伸ばす。全身の血の気が引いた。

コックはすでにリザーブに変えられていた。

「…………え、うそ」

つまり、もう燃料はない。ガソリン欠乏。略してガス欠。

「ええ…………」

夜の本栖湖に、ボクの声にならない声が吸い込まれていった。

「はあ…………」

昔なでしこと会ったトイレのベンチでココアをすする。甘いココアが冷え切った身体を少しだけ暖かくしてくれた。

「バーナー持ってきて正解だったな…………」

リンの真似して外でココアでも飲もうと持ってきたけど、まさかこんな形で使うはめになるなんて。

でも助かった。温かい飲み物を飲むだけでもだいぶ落ち着いた。なにもなかったらそれこそパニックになってたかもしれない。

「ほんと、どうしよ」

下のほうのキャンプ事務所に行ってみたけど、人はいなかった。キャンプ場も同じく

人の気配はない。

当たり前だ。今日はオフシーズン、冬にキャンプする物好きなんてそんなにいるわけじゃない。

もとから期待なんてしてなかったけど、誰もいないってわかるとやっぱり怖くなってくる。

「下まで歩いて帰る……無理か。エンジンかからないのにどうやって家まで行くんだよ」

ここから家まで50キロ以上ある。氷点下を割るような真冬の山梨をろくな装備もなしに歩くなんて自殺行為にもほどがある。

「ロードサービス……呼ぶか？ でもお金かかるよなあ……」

こんな山奥、来るまでどれだけかかるかわからない。それにお金だってかかる。

「前ガス欠した時はすぐ近くにスタンドあったしなあ……」

こんな夜の無人地帯でガス欠になった経験なんてあるわけがない。

「うわあ、まさかこの期におよんでガス欠やらかすなんてな」

ほんと、リザーブ入れっぱで忘れるなんてなにやってんだよボク。ちよつと気、抜けすぎじゃない？

「なんとか夜やりすごして、明日ガソリンスタンドまで行くか？」

幸い目の前はトイレ。あんまり褒められた行為じゃないけど、優先トイレにこもって朝まですごせば凍死はしないだろう。

前にもこういったことはあった。

持ってきた装備が不十分でしかたなくトイレで一夜過ごした。

優先トイレと田舎のバス停は、野宿界限では帝国ホテルと呼ばれ、それはそれがありがたい存在として崇められている。

人としての尊厳は地に落ちるけど、そんなもの気にしてたらそもそも野宿なんてやらない。

むしろそれが楽しい。ワクワクする。

「ひさしぶりに野宿するかー！」

防寒対策はそれなりにしっかりしている。寝ないでトイレにでもこもればなんとかなるだろう。

明日の学校はしようがないから休むとして、なんとか朝まで乗り切ればボクの勝ちだ。

「この人としてのぎりぎりの緊張感……なつかしいぜ」

こんな目にあっているのにも関わらず、ちよつとテンションが上がっているボクはきつと早死にするだろう。

うんうん、これこれ。こういうのだよ。ボクの本来やりたかったことは、
こういうトラブルこそ、ボクが旅に求めているものなのだ。

低予算、行き当たりばったり、楽観、妥協につぐ妥協。地に落ちた尊厳。

きつちり計画を練ったキャンプもいいけど、やっぱりボクにとつての旅はこういうものなのだ。

「ふっふっふ、本栖湖め、かかってきやがれー」

……

……

……

「いや、無理か……」

見栄を張ったところで、押し寄せる寒さはボクの体力を容赦なく奪っていく。

自分の力じゃもうどうしようもないのは、わかっている。

怖いよ。誰か助けてよお……

「もつと気楽に頼っていい、か」

あおいの言葉を思い出す。不意にリンの顔が思い浮かんだ。

なんとなく、あの子なら来てくれそうだなと思った。

根拠なんてないけど、なんとなくそう思った。

「もう、一人じゃないもんな……」

スマホを取る。ラインを起動して、リンのアイコンをタッチする。ほどなくして電話がつながる。

『……どうしたの双葉？』

聴き慣れた優しい声に、涙が出そうになるほどほつとする。

「あのねリン、ちよつと……困ったことがあつてさ——」

こうして、ボクは生まれて初めて、自分の意思で誰かに助けを求めた。

「で、わたしに助けを求めたと」

「……はい」

お風呂に浸かりながら湯気の向こうで絶対零度の視線を向けるリンに事の顛末を話す。

「ほんと、びっくりしたわ。いきなり電話で本栖湖でガス欠したから助けてくれて」

野宿すると意気込んだボクだったけど、しばらくして正気に戻ってリンに助けを求め

た。

いや、常識的に考えて真冬の本栖湖でテントも寝袋もなしに野宿できるわけないじゃん。バカなの？ 死ぬの？

そんなこんなでリンに助けを求め、しばらくすると携行缶を積んだスクーターに乗ったリンが、額に青筋を浮かべながらやってきて、ボクはなんとか救助された。

そして、お礼を言って帰ろうとしたボクを鬼の形相のリンが連行して、志摩家のお風呂に放り込まれて今に至るわけである。

柑橘系の入浴剤が、冷え切った身体を温めてくれる。九死に一生つてこんな状況を言うんだらうなあ。

「しかも理由が夜中にツーリングしてたらガソリン入れ忘れたからって……バカだろお前」

「……返す言葉もありません」

一緒にお風呂に入りながら説教を受けると言うよくわからないシチュエーション。

側から見るとシユールなんだろうけど、リンがマジギレしているせいでそれどころじゃない。

「もしわたしが電話出なかったらどうするつもりだったの？」

「えっと、トイレで朝まで耐久——」

「あ、？」

「ごめんなさい、もうしません」

うう、怒ったリン怖いよお。なんでそんな声低いんだよお。

ボクを迎えにきてくれてから、リンずっとご機嫌斜めだ。まあ、理由はわかるけどさあ。

そりや、怒るに決まってるよなあ。逆の立場だったらボクだって怒るもん。

「ほんと、ちっこいんだから無理すんなよ……」

「……心配かけてごめんなさい。あと、助けてくれてありがとう」

お湯に浸かったまま頭を下げる。

あおいに気楽に頼っていいって言われてたけど、まさかこんな早く助けを求めることになるなんて思ってもなかった。

でも、本当に助けてくれたんだよ……怒られているはずなのに、すごく嬉しいと思ってしまう自分がある。

「……もういいから顔あげなつて」

言われたとおり、リンの顔を恐る恐る見る。さっきまでの怒った顔とは違って、どこか安心したような顔だった。

「身体大丈夫？ どこか変なところない？」

「うん、いつもどおりだよ」

ボクがそう言うのと、リンは心底ほつとしたように湯船に沈んだ。

「……心配かけてごめんね」

「もういいって。でも、なんかあつたらすぐ言つてね。あと、今日遅いから泊まっていきなよ」

「え、悪、なんでもありません。お世話になります」

リンの目が一瞬ギラついて慌てて訂正する。うえ、リンやっぱ機嫌なおつてないじゃん。

「はあ………つたく、まあでも、ただのガス欠でよかったね」

「うん、ボクもほんとにそう思う」

もしこれが事故で電話もできないような状況に陥っていたら、それこそまずいことになつていた。

ある意味いい経験になつたかもしれない。

慣れたところが一番危ない。

綾乃の言つてたとおりだ。今度からもつと気をつけないと。

「せつかくなでしこたちとクリキャンするつて決まつたのに、何かあつたらどうすんだよ………」

返す言葉がない。

ただでさえあつち行ったりこつち行ったりで心配かけてしまつてるのに、これ以上心配かけてどうするんだ。

「双葉だけいなくなつたら、意味ないだらろ……」

不安げなリン。ずいぶん心配させちやつたみたいだな。本当に悪いことしちやつたな。

「ごめんね、リン」

「双葉、さつきからそればつか。もういいって、今度から気をつけてくれればそれでいいよ」

「うん、気をつける」

ボクがそう言うと、リンの顔から険しさが抜けて、いつものリンに戻つた。

「それで、キャンプ場下見したんでしょ？ おじいちゃんに聞いただけで、わたしも行つたことないんだけど、どんな感じだった？」

「暗くてよく見えなかつたけど、すごい広そうだった。たぶん夜は星がすごい綺麗なんじゃないかな」

あのあたり一帯にはほとんど建物がなかつた。

方角的に日が出れば富士山もものすごい綺麗に見えるに違いない。

「そっか、楽しみだな」

「だね」

クリキャンまで残り少し、きつとすごい楽しい時間になるに違いない。

「ボク、そろそろ上がるよ」

リンに叱られていたせいでいい加減のぼせそうなのだ。

そうだ、リンのお母さんとお父さんにも事情説明しないと。

いきなり押しかけてきつと驚いてるだろうな。

「リン、何度も言うけど、助けてくれてありがとう」

風呂場を出て、タオルを巻いて半透明の扉を背に座り込む。

ボクの人生の中で、誰かに助けられた経験はほとんどない。いや、皆無と言ってもいい。

い。

一人で生きてきた、なんて自惚れるつもりはないけど、思い返しても誰かに助けられ

た記憶はほとんどない。

「リンがスクーターで迎えに来てくれた時、すつごくほつとしたんだ……ほんとに助け

に来てくれたんだなって」

『……そんなの、当たり前でしょ』

ドア越しに聞こえるリンのちよつと恥ずかしそうな声に思わず笑ってしまう。

それを当たり前と言えるのは、リンが優しいからなんだよ？

「少なくとも、ボクにとつては当たり前じゃなかったよ。だから、今すっごい嬉しいんだ。変だよ、怖い目にあつたばかりだつていうのにさ」

あの時の寒さは今思い出しても身震いするほどだけど、それを塗り替えすほどに嬉しさのほうに勝っている。

『んだよそれ。変なやつ』

「えへへ、ボクもそう思う」

今までは、自分で自分を助けるしかなかった。

けど、もう違う。困つたら頼つてもいいんだつて、やっと心の底から気づけた。

『ていうか、さつきからお礼ばつか言つてるけどさ。わたしだつていろいろ助けてもらつてるし、ありがとつて、思つてるんだからな』

扉に隔てられているせいで顔は見えないけど、なんとなくどんな表情を浮かべているのか想像がついた。

情けは人のためならず。誰かに親切にすれば、いつか自分に返ってくる。

今回のことは、きつとそれだけのことなんだろうな。

「そっか……そうだよ」

本当に、ボクはなんていい友達を持つたんだろうか。

たかが偶然。されど偶然。人生っていうのは、本当になにが起こるのかわからない。
「リン、もう一回言うね。助けてくれて、ありがとう。大好きだよ」

『……お、おう』

もう、無茶なことをするのはやめにしよう。

旅を辞めるつもりはない。野宿だってやめるつもりはない。

これからも遠くに行くし、バイクにだって乗り続ける。

だけど、友達の顔を曇らせるようなことはもうやめよう。

だってもう、ボクは一人じゃないんだから。

「じゃあ、先上がるね」

さて、とっとと着替えて咲さんたちにお礼を言わないと。

それだけじゃない。急に押しかけたんだ。日を改めてちゃんとお礼しないとダメだろう。

久しぶりにクツキーでも焼くか。

『あ、そうだ双葉』

『どうしたの?』

『言い忘れてたけど、風呂から上がったらお説教だつてさ』

「……へ?」

説教？ リンだけじゃないの？ え、誰？

もしかして、咲さん？ え、嘘だよね？

『それだけ。わたしもうちよつとお風呂浸かつてるから先上がつて。あ、ちなみにお母さん怒るとめつちや怖いからな』

あの、リン。恐怖を煽るようなこと言わないでほしいなあ……

「ゆ、湯冷めしちやつたらあれだし、やっぱボクももうちよつと入ろつかない！」
『狭いからやだ』

「なんでだよー！ さつきまで一緒に入ってたじゃん！」

立ち上がって強行突破しようとしてドアノブをガチャガチャする。

が、開かない。嘘でしょ？ まさか、鍵かけたの？

「あ、あのリン？ 鍵、開けてくれるとすつごくすつごく嬉しいなー」
『やだ』

「ちくしよー！ リンの薄情者ー！ 鬼、お団子、低身長！」

さつきまでの感動を返してよー！

やっぱ返さなくていいや。ボクの心に大事にしまっておこう。

違う。そうじゃない！

『いや、双葉のほうがちつこいだろ』

うん、そうだね。ってちがーう！

やばい、脱衣所のドアの向こうから足音聞こえてきた。

『双葉ちゃん、話し声聞こえてきたけど、お風呂終わったのかしら？』

「ひっ」

優しくて美人の咲さんとは思えない、恐ろしく低い声が扉の向こうから聞こえてくる。

『ちよーつとおばさんと、お話ししましょ？』

あ、これやばいやつだ。

咲さんとはちよつとしか話したことないけど、ボクにはわかる。

これやばい。とにかくやばい。まじやばい。

「あ、あわ、あわわ」

『自業自得だ。ばかっ』

このあとめちやくちや叱られた。

もう夜のツーリングなんてこりこりだあ！

11話 ドンキホーテ サンタスーツ 1,980円(税

込)

11-1

12月24日、世間一般ではいわゆるクリスマススイブと呼ばれる特別な一日。

もつとも、ボクにとつてはカラフルなイルミネーションやカップルがキャツキャウフ(死語)するさまを唾を吐き捨てながらながめるだけの退屈な日である。

と、昨日までのボクなら言つてただろう。

「でも今日はちがーうー!」

玄関の前でビーちゃんに跨りながら太陽万歳のポーズをかます。

死にゲーつていいよね。ハマりすぎて危うく夜更かししそうになつたけど。

「ついにボクの時代が来たのだー! ふふ、ふふふふ、ふーはゲホツブツフオツ!」

うえ、睡が変なところに入った。やっぱなれない高笑いなんてするもんじゃないね。ていうかもう行かないと。リンと待ち合わせしてるし。

高ぶるテンションに任せてキックペダルを蹴り飛ばす。スロットルを思い切り捻ると51ccのF5Bエンジンが環境に悪そうな唸り声をあげる。

「しゅっぱーっ！」

クラッチ、1速、ウインカー、アクセル。

全ての動作をほぼ無意識に行いビーちゃんを発進させる。冬の南部町に、2ストロークのエンジン音がこだます。

「ちよつと早く着きすぎたかな？」

家からちよつと離れたところにある道の駅でリンが到着するのを待つ。

長い休みに突入した時特有の謎テンションと、持ち前の心配性が合わさって、予定よりも1時間も早くついてしまった。

「いつ見てもこのたけのこだけ世界観おかしいよなあ」

駅の端にある謎のたけのこタワーを眺めつぶやく。

ボクが子供のころからあるけど、このどうしようもないシニールさがザ・田舎って感

じで嫌いじゃない。

「たけのこよ、お前はなぜたけのこなのだ……」

ピコン!

スマホだ。リンかな?

リン：今ここ

そんなメツセージとともに一枚の写真が送られてくる。

「あれ、これボクじゃん」

写真にはたけのこタワーを眺めるボクの背中が映っていた。ということは……

「きさま！ みているなー!」

どっかの酒を飲まずにいられない吸血鬼みたいに振り返る。もちろんポーズも忘れずに。

しーん……

「つて、誰もいないし」

「なにしてんの?」

「ぴゃあああ!?!」

視界の横から黒い影がにゅると出現して思わず尻餅をつく。

うえ、眼鏡ずれた。

「つて、リンか。おどかすなよー!」

眼鏡をかけ直すと、黒い影の正体があらわになった。言うまでもなくリンだった。

「ふ、ふふ、ごめん」

笑いながら謝られてもちつとも嬉しくないよ。差し出された手を掴んで立ち上がる。もう、ズボンに砂ついちゃったじゃないか。

「ぴゃあつて、ぴゃあつて……」

お腹を抱えて痙攣するリン。笑いすぎでしょ。クールなキャラはどこに行ったの？

「あとで覚えとけよーリン!」

ヒーターでテントぬくぬくにしてもリンだけ入れてあげないもんね!

寒そうにしてる横であつたかいコーヒー飲んじやうもんね!

「ごめんつて。あ、そうだ」

リンは、いつものようににっこりと笑った。

「おはよう、双葉」

「おはよう、リン」

そしてボクたちはいつものように挨拶をした。

……まあ、テントくらいなら入れてあげるか。コーヒーも一杯だけだと淹れづらいし

二人分淹れておこう。

「というか早くない？ まだ1時間あるよ」

さつきから気になってたことをたずねる。

もしかしてリンもテンション上がって早く来ちゃったのかな？

「ど、どれくらいでつくかわかんないし、早めに行ったほうがいいかなって」

顔をちよつと赤くして恥ずかしそうにリンが言う。うん、なんてわかりやすいんだ。

「ていうか！ 双葉だつて1時間も早く来てんじゃん！ どんだけ楽しみだつたんだよ」

「リン、言いたいことはわかるけど、全部ブーメランになつてるからね」

「なっ……」

ぷしゅーという効果音でもつきそうな感じで硬直するリン。なんか今のリンは志摩リンじゃなくてしまりんって感じだな。

「たいぶ早いけど出発する？ それともちよつと休んでく？ まあ、たけのこタワーしかないけどさ」

「たけのこ？ ああ、そういうことか」

ボクの後ろで天高くそびえ立つたけのこタワーを見て、リンがなんとも言えない声です。

まあ、そういうリアクションするよね、普通は。

「……なんでたけのこ？」

「さあ、名産品なんじゃない？」

たけのこ食べたくなってきたな。今の時期じゃ輸入品しか手に入らないだろうけど。

「なんでタワー？」

「……さあ」

たけのこよ、お前はなぜたけのこなのだ。

「とりあえず、一枚撮っておく？」

「……うん」

たけのこタワーをバックにスマホをパシャリ。

撮った写真を確認。ものすごい無表情のボクとリン。

うーん、やっぱシニールだなあ……

こうして、また一枚変な思い出が増えたのであった。

「そろそろ行く？」

「だね、行こっか」

各々のバイクに戻る。って、ビーノ、ビーちゃんの隣じゃん。エンジン音で気づけよボク。

ヘルメットを被ってエンジンをかける。リンをちらりとみると、当たり前のように口

元にマイクが伸びていた。

まあ、ボクもなんだけどね。ほどなくして、ラインで電話がかかってくる。

「いつでも行けるよー」

『こつちもオツケー』

右足をつきながらその場でUターン。駐車場の出口に向かってビーちゃんを走らせる。

その後ろをリンのビーノがついてくる。

「あ、キャンプ場なら一回行つたし、ボクが先走るよ」

『りよーかい。あ、ガソリンちゃんと入れたんだろーな』

ぎくり。

恐る恐るメーターを見る。よかった、なくなつてはない。うん、なくなつては、いな。いな。

「……………イ、イレタヨー」

『棒読みやめろ』

言えない。もう半分切つてるなんて。

しょうがないじゃんキャブ車は飛ばすとすぐガソリンが減るんだよー

『はあ……………絶対途中でスタンド寄れよ』

「はい」

言われなくてもわかってる。もう、あんな黒歴史は繰り返さない。ノーモアガス欠。般若、咲さん……うっ、頭が。

は、早く、ガソリンスタンドに行こう。

「レギュラーマンタンゲンキンデー」

ガソリンスタンドで店員に復活の呪文を唱える。

給油キャップを取ったタンクにノズルが突っ込まれ、刺激臭のする液体がゴボゴボと注がれていく。

ビーちゃんよ、人の金で飲むガソリンはおいしいかい？

ウメー！

まあ、君たちはそうだろうね。

後ろを見るとリンのビーノもビーちゃんと同じようにガソリンを入れてもらった。

「304円でーす」

「あ、はい」

いつものように千円札を渡そうとしてすんでストップ。小銭入れからお金を出して渡す。

ちよつとはボクも成長したのかな？

「ありやつしたー」

支払いを終えてビーちゃんのエンジンをかける。

コツは最後まで蹴りぬくこと。中途半端に力を抜くと回転が足りなくてエンジンがかからない。最悪プラグが被って沼にはまる。

二回ほどペダルを蹴ると、ブルンと手応えがして、すかさずアクセルを煽る。

金属の板をものすごい勢いで振動させたような独特の低い音が鳴り響き、白煙と焦げた匂いが立ち込める。

空吹かし。足元でエンジンのピストンが高速で回転する。

まるで生き物が呼吸しているようなちよつと不安定なアイドリング、やつぱ古いバイクはこうでなくちゃ。

キュルル。後ろのビーノのセルが回る音がする。規則正しいエンジン音が鳴り響く。

「むー」

振り向いてビーノを睨みつける。

「どうしたの？」

「なんでもー」

なんていい始動性だろうなんて、これっぽちも思っていない。

キャブレター車こそ至高と思っているボクだけど、電子制御の安定性のよさだけは認めざるをえない。

まあぶつちやけ実用性で考えれば完全に上位互換だしね。

「じゃ、出すね」

「うん」

ギアを1速に変えてクラッチをじんわりと離してアイドリングだけで発進させる。

ウインカーを出して出口の手前で止まり、車をやり過ごす。

よし、行った。右手で発進の合図をして道路に繰り出す。

12月。身の毛もよだつ、冬の山梨。年明けは目と鼻の先まで迫っていた。

「あ、見えた」

国道139号線を上ること数十キロ。

クリキャンのキャンプ場である富士山YMCAグローバルエコビレッジにボクたち

はたどり着いた。

この前来た時と違って空はどこまでも青く晴れていて、小さな綿菓子みたいな真っ白い雲がその青さを引き立てていた。

キャンプ事務所に続くアスファルトは、いつの間にか剥き出しの土に変わり、タイヤを転がすたびにゴトゴトとシートを揺らした。

「とーちやーく」

ブレーキペダルを踏んで後輪をスライドさせながら停車。砂埃が宙を舞う。

「テンション上がりすぎでしょ」

「だって、ほんとに楽しみだったんだもん」

「ふふ、まあわかるけどさ」

そんなやり取りをしながらビーちゃんとビーノを駐車スペースに停めてヘルメットを脱ぐ。

冬の澄んだ空気が身体を包み込んだ。時計を見る。まだ12時になったばかりだ。

「今何時？」

リンが肩を寄せて時計を覗き込んできたので、見やすいように腕を差し出す。

「12時25分……ってことはもうチエックインできるね」

「ちよつと早いけどそうだね。どうせなでしことかもすぐ来るでしょ」

リンちゃんとか、双葉ちゃんとか言いながら突撃してくるさまがありありと目に浮かぶ。

「あ、それわたしも思った」

というか千明もおおいももう来てそうだ。まだ決まったわけじゃないけど。

そんなことを考えながら二人で受付へと歩き出す。

ボクたちのクリキャンが、今その幕を開けようとしていた。

「やっぱもう来てたね」

受付をすませ、気が遠くなるほど広い草原の中、ビーちゃんをゆっくりと走らせる。

前にはリンのビーノが同じく4ストのエンジンをトコトコ鳴らしてゆっくりと走っていた。

『二人来たって言ってたけど、大垣と犬山さんかな?』

ちよつと早かったかなと思いつつも足を運んだ受付。ボクたちの予想通りすでにチエツクインはすんでいた。

「だと思つうよ。二人とも鳥羽先生の車で来るって言ってたし」

『車か……めっちゃ快適なんだろうな』

あつたかい暖房。しかも運転手（先生）つき。

お菓子を食べてジュースを飲みながら眺める雄大な富士山……

「リン、この話題はやめよう。惨めになるだけだよ」

『……だな。ていうか、二人ともどこにいるんだろ。さつきから全然見当たらんし』

「もうこつちでテント張る場所決めていいんじゃないかな」

『そうするかー あ、あの丘の上とかいいんじゃない？』

リンのビーノについていく。少し走るといい感じの丘の上にたどり着いた。

エンジンを含めて、ヘルメットを脱ぐ。富士山からやってきた冷たいそよ風が、全身を包み髪をゆらす。

静かな世界にボクとリンの息遣いがこたえます。

「す……」

そして、目の前の景色に目を奪われた。

見渡すかぎりの枯れ草の草原、その茶色のシートの向こう。

ひたすらに青い空を突き抜けるように敢然とたたずむ富士の山。

黒い岩肌にかかる粉砂糖のような雪。まるでチョコレートケーキのようだなと思っ

た。

「写真でも撮る？」

リンが気を利かせてたずねてくる。

「ううん、写真は後にするよ」

首を振って断る。

こんなにも美しい光景を、無粋なシャッター音で台無しにしたくない。

息を吸うのも忘れ、ただ目の前の景色に見惚れる。

「そっか、じゃあわたし先にテント張ってるね」

「あ、そうだった。ここバイク停めちゃだめなんだった」

受付の人いわく荷物の出し入れの時は乗り入れOKとのことだけど、あんまり長い時間停めっぱなしはよくないだろう。

すでに荷物を下ろしてテントを張り始めたリンを見習ってボクも自分のテントの準備をする。

ボストンバッグをおろし、中にしまったテント一式を取り出す。このテントは本当にコンパクトで使いやすい。

「へえ、それが双葉が言ってたやつか」

「うん、すごい使いやすい。ちよつと狭いけどね」

インナーテント、ポール、ペグ、フライシートの順でテントを設営していく。家で何度か練習したかきもあって、琵琶湖で使った時よりも格段に動きがよくなった気がする。

「えい、えい」

仕上げのフライシートのペグをビーちゃんに積んでいるレンチで打っていく。

どうせ百均のレンチだし、雑に使ったところでどうということはない。

「れ、レンチ？ レンチだよなあれ」

テントを張り終えたリンが変なものを見るような目で見てくるけど、それは気にしないことにする。

いいじゃないかー！ ペグハンマー高いんだよー！

「えい、えいっと……できたー！」

「おぉー」

張り終わったテントの前で万歳のポーズ。そうだ。写真とらないと。

スマホを出して、適当にパシャパシャ。あとでお母さんにも送つとくか。

「リンも一緒に写真とろー！」

「ちよつ、おい」

椅子を出して座ろうとしていたリンの腕にボクの腕を絡ましてスマホをかける。

「いち足すいちは一！」

「……ふつ、はいはい二でしょ」

パシヤリ。

満面の笑みのボクと、驚きつつもなんかかんだいって笑顔のリンのツーショットが出来上がる。

うん、いい写真。家帰ったら印刷しよ。

「今送るね。あ、みんなにもおーくろ」

『——ちゃん！——ちゃん！』

スマホをいじっていると、遠くのほうで、ものすごく聞き覚えのある声があった。

この声はもしかして、いやもしかしなくても……

「リンちゃん！ 双葉ちゃん！」

今度ははつきりと声が聞こえる。リンとボクが振り向く。

丘の麓からなでしこがダツシユでこっちに向かっていた。

「お、来やがったな元気っ子め」

「尻尾……尻尾が見える」

よく見るとさらにその奥のほうから水色のSUVもゆつくりと走ってきていた。

桜さんだ。いつも送り迎えしててほんとすごいなあ。

「リンちゃん！ 双葉ちゃん！」

ボクらの前で急停止したなでしこが両手を差し出す。なにをしてほしいかはだいたいわかる。

リンを見る。こつちもまんざらでもなさそうに微笑んでいた。

「「いえーい」」

パチン。三人の手を叩く音が草原に吸い込まれていった。

「けっこう来るの早かったね」

「えへへ、待ちきれなくて早く来ちゃった」

「わかるー ボクたちも待ちきれなくてさ。リンなんて待ち合わせの1時間前に来てたくらいだし」

「ちよ!? 双葉」

道の駅でボクを驚かした仕返しだー！ せいぜい照れるがいいー！ ふーははー！

「え、そうなのリンちゃん!?」

目をキラキラと輝かせたなでしこがリンに詰め寄ると、リンは頬を赤く染めて恥ずかしそうに目を逸らした。

「……ま、まあ、わたしもけっこう楽しみにしてたし」

観念したのか、本音を白状するリン。

そんなリンを見て、なでしこの顔がものすごい笑顔になっていく。

「そつかりんちゃんも楽しみにしてくれてたんだ〜」

「ほらなでしこ、荷物とつとと下ろしなさい」

いつの間にかテントの前まで来ていたSUVから桜さんが降りてきてなでしこにそう言った。

「そうだった。ごめんお姉ちゃん」

「あ、ボクも荷物運ぶの手伝うよ」

「双葉ちゃんは何もしなくていいわよ。全部こいつにやらせるから」

「お姉ちゃん、ひどいよ〜」

「ふふっ」

ボクとリン、そしてなでしこと桜さん。人が増えるたびに増えていく笑顔。そして楽しげ。

寒い寒い冬。けど、そんな冬に負けなくらい、この場所はあつたかかった。

「よし、できた」

コッヘルの中に溜まった琥珀色の液体を眺めて満足気にうなずく。風に乗ってマン

デリンの香りが鼻をくすぐる。

「あ、焼けた焼けたー！」

ボクの横でなでしことリンがバーナーでマシユマロを焼いてなにか作っている。よく見たらビスケットもある。

まあなにを作るのかはわからないけど、どうせおいしいに決まっている。

それよりもボクはコーヒーを用意しよう。

できたコーヒーをそれぞれのマグカップに注ぐ。

「二人ともコーヒーできたよー」

「あ、ありがとー！」

「ごめん、わざわざ淹れてもらって」

「いいよいいよ。二人は先飲んで」

コーヒーに手をつけた二人を横目に持ってきた紙コップにコーヒーを注ぐ。砂糖とミルクはマシマシで。

そうやってできたカフェオレと自分のマグカップを持ってSUVに向かう。

車に近づくと、サイドミラーに桜さんの横顔が映った。

本当なら帰ってもおかしくないんだけど、ボクが桜さんに待ってもらっていたのだ。

「どうしたの？ 双葉ちゃん」

「桜さん、よかつたらこれどうぞ」

運転席に座っている桜さんにコーヒーを差し出す。桜さんの目が少し驚いたように見開いた。

「これ、もしかしてわざわざ淹れてくれたの？」

「四尾連湖の時のお返しってわけじゃないですけど、運転でお疲れだと思っんで」

ボクがそう言う。桜さんがにつこりと微笑んでコーヒーを受け取った。

ほんと、びつくりするくらい美人だなあ。こんな笑顔向けられたら男も女もイチコロでしょ。

「ふふ、ありがとう。いただくわ」

「はい、じゃあボクはこれで」

受け取ったのを確認し、テントに戻る。

「あ、ちよつと待って」

なんだろう。立ち止まって振り返る。すごく優しそうな表情で桜さんがボクのことを見ていた。

「いきなりこんなことを言うのもあれだけど、もし困ったことがあったり、悩み事があれば、遠慮なんてしないでいつでも頼ってちょうだい。例えば……そうね、ガス欠とか」

「え？　が、ガス欠？」

なんで、桜さんがガス欠のこと知ってるの？　ボク誰にもあのこと話してないんだけど。

リン、もしかして……

ボクはテントの側でなでしこと仲良くしている親友のことを思い浮かべた。

まあ桜さんともけっこう仲がいいみたいだし、話していても不思議じゃないか。

基本的に家に誰もいないこととか全部知られてるし、心配するのも当然だよ……

「うちの妹もさんざん双葉ちゃんに世話になってるし、なにかあつたら力になるわ。だから……あんまり一人で抱え込んじゃダメよ。もうあなたは一人じゃないんだから」

そう言つて、桜さんはどこまでも優しく微笑んだ。

たぶんだけど、ボクの昔のこととか、家の事情とか、あらかたなでしこから聞いてるんだらうな。

それにたいして、勝手に言いふらされたなんて思うわけもなく、ただただ暖かい気持ちに心が広がっていく。

だって、それは間違いなく混じり気のない善意でやったことだつてわかっているから。

やっぱり、ボクの周りの人たちはお人好しばかりだ。

「……はいー」

だったら、ボクはそれに対して負けなくらいの笑顔で応えるだけだ。
「じゃあ、ボクはこれで」

お辞儀して今度こそテントに戻る。

「あ、おいしい……」

後ろのほうでそんな声が聞こえた。よし、静かにガッツポーズ。

「戻ったよー」

「双葉ちゃん双葉ちゃん！ これ食べてみてー！」

「え、なにっもがっ!?!」

突撃してきたなでしこに口の中になにかを突っ込まれる。

もぐもぐと咀嚼、飲み込む。

そして――

「なにこれおいしいー!!」

自分でもわかるくらい顔がにやける。人ってあんまりにもおいしいもの食べるとにやけちゃうよね。

焼いたマシユマロとビスケットが、口の中でサクサクトロトロのハーモニーとなってそれはもう絶品だ。

やばい、これおいしすぎる。

「でしょでしょ！ リンちゃんが作ってくれたんだ〜！ スモアって言うんだって！
いっぱいあるから三人でたべよー！」

「うん！」

「お前から夜ご飯食べなくなっても知らないからなー」

「おいひい〜」

「聞いてねえし」

パシヤリ。未知の味に興奮するボクたちをリンが笑いながら撮る。

そんな冬の昼の出来事。

11—2

「いやあく悪いなあ二人とも。わざわざバイク出してもらって」

と、千明が言う。

「ほんまに助かるわあ。鳥羽先生、目離れた隙にもう飲み始めてしもうてなあ」

と、あおいが言った。風に乗ってすえた匂いがした。牧場の匂いだ。

「まあ、ぐび姉だからなあ」

ぐび姉？ ああ、ぐびぐび飲むからぐび姉か。まあ、たしかに言い得て妙かもしれない。

「べつに、気にしなくていいよ。どうせ必要なものだし」

「そーそー みんなで使うものだからね」

キャンプ場からさほど離れていない牧場。買ったばかりの薪をシートに乗せる。

さつき、千明とあおいから近くの牧場で薪が安く売っているとの連絡を受けここまでバイクを飛ばしてきたのだ。

「やっぱ薪重いなー」

一束7キロ近くある薪を二つも原付に乗せるにはいささか厳しいものがある。

「リン、大丈夫？」

「めっちゃ重いけど、いけると思う」

そうは言うけど、荷台に二束。合わせて14キロ以上の重さだ。もちろんゆっくり行くけど、大丈夫かな？

「ま、どうしてもヤバそうだったら道端に置いて千明に回収してもらおう」

あれ、リン今千明のこと名前で……

「おう、任しとけ！ ……え、あたし？」

「あ、そうだ。お金わたしが払うよ。夕飯ご馳走になるし」

「……へっへっへ、そいつあ心配御無用だぜしまりん」

千明が眼鏡をぎらつかせる。そっか、もうお金のことはそこまで心配しなくていいもんね。

「なんとなんとお！ 薪は全部部費で出るのだあ！」

「おお、まじか」

「まあ、ゆうて薪代くらいしか賄えんけどな」

「いや、十分すぎるよ。薪って燃やすわりにけっこうするしさ」

この牧場は一束300円だけど、普通なら5、600円はする。

ガソリン1リットルでピーちゃん40キロ走れると考えると、いささか割高だ。ま、しょうがないんだけどね。

「しまりんしまりん、今野クルに入れば薪使いたい放題でつせえ！」

「それは遠慮しとく」

一刀両断。間髪いれずの即答で、千明ががっくりと項垂れる。そりやそうでしょう。

「……けど、そういうことなら、今度から薪代のほうはよろしく」

リンの言葉に、千明とあおいがばあつと笑顔になった。

今度からよろしく。

わざわざ言うまでもない。つまりそういうことだ。

「ふひひ」

嬉しくて、口から変な笑いが溢れる。リンも野クルに入ってくればいいのに。

と、一瞬思っただけど、やっぱり今のままでいいやと思ひ直す。

同じところにいることだけが、仲間の証じゃない。

遠く離れていたって、違うところを見ていたって、心は空で繋がっている。

ボクは琵琶湖でそれを知ったばかりじゃないか。

だよ、綾乃。

「じゃ、そろそろ行くようよ」

「だね、二人とも先行ってるね」

リンがビーノに跨る。ボクがビーちゃんに跨る。

「気いつけてなー」

「事故んなよー」

「はーい」

積んだ薪を崩さないように慎重にエンジンをかける。

まだまだあつたかいエンジンは、キックペダルをちよつと押すだけで、簡単にかかった。

鼓膜を叩きつける、2サイクルの喧しいエンジン音。

耳を撫でる、4サイクルの優しいエンジン音。

ボクたちの頼もしい相棒たち。ビーちゃん、ちよつと重いけどよろしくね。

マカセトケ！

「リン、ゆつくり行くからついてきて」

「りよー」

軽くアクセルを吹かし、牧場を背に走り出す。

ミラーにリンのビーノと手を振る千明とあおいが映った。

昼下がりの国道。車の一台もない一本道をのんびり走る。裸の枯れ木が視界に入っては流れていく。

『またさ、全員でキャンプするってなったら誘ってよ』

ヘッドセットから、リンのちよつと恥ずかしそうな声が聞こえた。

リンの心にどんな変化があつたのかは、ボクにはわからない。

でも、なんでそう思ったのかはボクにはよくわかった。

そんな難しい話じゃない。たんに、みんなで一緒にやるのも好きになった。

それだけの話なんだろう。

「もっちろんだよー!!」

『声でけーよ』

ヘッドセットがなくても、リンがどこにいたって聞こえるくらい、大きな声で叫ぶ。

キャンプはまだまだ始まったばかりだ。

「へえ、これがリンのキャンプ道具なんだ」

斉藤さんが興味深そうにリンのテントを眺めた。モンベルのムーンライト、いいよね。

あれから、なでしこのもとに戻つて薪を運ぶのを手伝つてもらつたり、酔いつぶれて寝た（早いよ）鳥羽先生が風邪を引かないように毛布でぐるぐる巻きにして遊んだりしたボクたち。

2時くらいになると、予定通り斉藤さんとペットのちくわもやつて来て、こうしてメンバー全員が無事に到着した。

楽しい楽しいクリスマスキャンプの始まりだ。

「これが双葉ちゃんのテントかあ。あないちっちゃいもんがよう大きくなるなあ」

「夜になったらストーブ焚いてぬつくぬくにするんだよー」

「うわ、ずるいぞお前！ あたしも入れろー」

「あ、わたしも入れてほしいわあ」

「わたしもわたしも！」

「そんなに入らないから。順番ね」

ただでさえ狭いんだから、4人も5人も入ったらパンクしちゃうよ。

「おーし！ お前らじゃんけんするぞー！」

わちやわちやし始めた野クルの三人を横目に斉藤さんに近づく。頭に浮かぶのは一匹の可愛いチワワだった。

「ん？ どうしたの双葉ちゃん」

「ちくわちゃんのこことなだけどき、ボクのテントならストーブ焚けるし、よかつたら夜三人で寝ない？ 小さいし、たぶん寒いのが苦手だよね」

ボクは、なでしこと元気に遊んでいるちくわを眺めてそう言った。

ここは富士山の麓。平地とはいえ夜になれば気温が0度を下回ることも珍しくない。今は日が出て暖かいけど、正直かなり心配だった。

もし斉藤さんの大事な家族になにかあつたら、せつかくの楽しい時間が水の泡になつてしまう。

けど、そんなボクの心配とは裏腹に斉藤さんの笑顔が崩れることはなかった。

「ありがと双葉ちゃん！ でも、大丈夫だよ。夜になつたらちゃんとうちに帰すから」

「そっか、よかつた」

ま、当然か。

斉藤さんがそんな簡単なことに気づかないわけがない。いらぬ心配だった。

「ごめんね、余計なこと聞いちゃって」

「ううん！ そんなことないよ！ ちくわのここと心配してくれたんだよね？ ありがと

！ 双葉ちゃん」

斉藤さんがボクの手を握つてにつこりと笑いそう言った。

100パーセント混じり気のない感謝の気持ち。

「……うんー！」

ちよつと恥ずかしくなつたけど、目は背けないでボクは笑つてうなずいた。

『まつてよ、ちくわー！』

遠くのほうで声がする。

振り向くと、ベソをかいたなでしこが未だに走り回っているちくわを追いかけた。

まだ捕まえてなかつたんだ。ていうかなでしこすごいな。さつきからずつと走つてるよ。

『あはは、まてー』

そして、そのなでしこを4人の子供が追いかけていた。なんか増えてるし。

でも、楽しそうだな。

「よーし！ せっかくだし、あたしらも遊ぶかー！」

どこに隠しもつていたのか、千明がfrisbeeを手にそう言った。千明つて、こういうところは本当に気が利くよね。

「いくぞお前らー！ 子供たちに野クルの恐ろしさを味あわせてやれー！」

「味あわせてどないすんねん。まあ、でも楽しそうやし、うちらも混ぜるでー」

走り出す千明とあおい。

「おい、勝手に行くなよ……つたく」

しょうがないなといった感じで笑いながら走り出すリン。

「双葉ちゃん、わたしたちも行こー！」

「だね」

斉藤さんとボクも走り出す。

そんな冬的一幕。

「あー疲れた」

オレンジに染まり始めた草原を、ボクたち6人が歩いていく。

子供たちとその家族の人たちは草原の向こうに姿を消した。今ごろみんなでキャン
プご飯食べてるのかな。

「双葉ちゃん、子供らにめっちゃ追いかけ回されてたもんなあ」

「そうだよー なんてあんなに追いかけてくるんだよー」

おかげで全身くたくただ。子供ってなんであんな体力有り余ってるんだろ。

同じちっこいのはこの差はなんだろうね。やっぱ若さが違うのかな。

「まあ口り子って、そういうオーラでてるもんな」

「わかる」

千明とリンにはいったいなに見えてるの？ それ、ボクがクソザコって言いたいもの？

まあ、たしかにそうだけどさ。認めたくないけど。

くそう、いつか新城さんみたいになかったこい大人になってやるんだからなー！

「さーて、せっかくクツキーもらったんだし、これでお茶にでもしよーぜ」

「それもええけど、寒うなってきたし、そろそろ焚き火用意せんとなあ。それからみんなであつたかい飲み物でも飲もうや」

「なら、わたしココア持ってきたよ」

「それならボクはコーヒー淹れようかな。誰か飲みたい人いる？」

「あ、わたし飲みたい」

「お、あたしも」

「わたしはココアがいいなー」

「わたしもわたしもー」

6人でわちやわちや、なんてことない話に花を咲かせる。

オレンジの西日。赤く染まる草原と富士山。

もうすぐ日が暮れる。お腹の虫も泣き出した。

ボクたちもご飯にしよう。

「じー」

真つ赤に燃える炭火の上で、アルミホイルを被せたそれをじーつと眺める。

「ふおおお！ あおいちゃんすつごいいいい匂いだよー！」

「わかる！ あたしにはわかるぞー！ こいつは絶対うまいやつだ！」

後ろのほうで聞こえる楽しいげな声と牛肉の煮える美味しそうな香りに耐えながら、ひたすら自分の焚き火とにらめっこする。

「わはあ！ こつちもいい匂い〜」

そんな声とともにボクの右肩がいきなり重くなる。視界の端に桜色の髪がちらつく。

「ふむふむ、この匂いは鶏肉じやの〜」

「おばあちゃん、もうちよつとの辛抱じやよ」

ほっほっほ、近頃の年寄りには辛抱が足りないのお〜

「双葉、さつきから端のほうでなにしてるの？」

そんななでしこでボクを挟むようにして、真横からリングが覗きこんでくる。桜と黒の髪が視界の両端でちらつく。

「へえ、双葉も焚き火台買ったんだ」

リンの視線は焚き火、正確には焚き火台のほうに注がれていた。

芝生が焦げないようにカーボンフェルトの上に置かれた無数の穴が開いた皿型の焚き火台。

ヒンジで折り畳めるようになっていて、角度を調整すれば今やつてるみたいに網だつて載せられる大変便利なコンパクト焚き火台……

に見えるけど、実はこれは焚き火台じゃないのだ。

「これ、本当は百均で売ってた蒸し器なんだ」

正確には250円（税込）最近増えてきたちよつとお高めの百均アイテム。

「えっ？ 双葉ちゃんこれ蒸し器なの？」

「マジか、どっからどうみても焚き火台にしか見えないんだけど」

「だよねー 焚き火台ってかさばるし、なんか代用できるものないかなーってネット探してたらけつこう使ってる人いっぱいいるみたいでさ。試しに買ってみたんだよね」

本物の焚き火台を買うまでのつなぎのつもりだったけど、これほど使いやすイとは思ってなかった。

これならメインで使っても全然問題ない。うーん、百均バンザイ！

「へえ、さつきからめっちゃいいやつ使ってるじゃんって思ってたけど、蒸し器なのか。」

焼き火シートも百均？」

「ううん、さすがにこれはちゃんとしたやつだよ。芝生焦がしちやまずいしね」

「あ、よく見たらこれうちにあるやつと同じだ。すごいね、蒸し器ってこんな使い道あるんだ、ふむふむ」

なでしこの目が怪しく光る。まさか、なでしこ……

「なでしこ、お前自分の家の蒸し器勝手に持ち出したりすんなよ」

同じことを考えていたらしいリンが釘を刺す。なでしこの肩がびくりと震えた。やっぱりか。

「シ、シナイヨー シナイヨー」

「棒読みやめろ。煤まみれになるだろが。百均なんだから今度買えばいいじゃん」

「えへへ、そうだね、そうするよ」

「三人とも、すき焼きできたで」

ザ・オカンって感じのあおいの声がボクたちを呼ぶ。

スマホのタイマーを見る。うん、焼き上がりまでまだ15分くらいあるな。

どうせだし、すき焼き食べて待つとするか。

「わーい！ すき焼きだあ〜！」

「双子かよ」

ボクも思った。

でもそんなことよりすき焼き！ すき焼き〜！

「むむむ……」

えのき、ネギ、焼き豆腐、春菊、そして牛肉。

鍋の中で極上の香りを放つそれらを睨みつける。

「……いただきます」

一目見て上質とわかる牛肉を箸で掴み取る。

すごい……ボクが家で作った細切れ肉のなんちゃってすき焼きじゃなくて、ちゃんと
ロース肉だ。

つゆと出汁を吸ってつやつや光る肉を、黄金の溶き卵の中にひたす。

肉に絡みついた卵が光輝いて、卵と肉の美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。

やばい、もう我慢できない。

「あむ……っ!!」

おいしい。

頭に浮かんだのはその一言だった。

あまりにもおいしすぎて、脳みそにインプットされた語彙がすべて消し飛ぶ。
「ん、んまあ〜」

やばすぎる〜 こんなの反則だよ
次！ もつと食べたい！

春菊とえのきを取って卵にひたしパクリ。

「ん〜」

口の中に春菊の苦味と肉とつゆの旨みをたつぷり吸ったえのきのエキスが爆発する。
噛むたびに、頭の中が幸せでいっぱいになる。

「肉、超うめえー！」

「おいひい！ おいひいよお〜！」

千明となでしこのオーバーすぎるリアクションも、このおいしさの前では納得するしかない。

「ずぎやぎにあう日本酒わずれじゃつだあ！」

美人の新人女教諭から、ただの酔っ払いにジョブチェンジした鳥羽先生が、意味不明なことを口走って泣きじゃくる。

なんだろこの人、生徒の前で取り繕うとか、そういう考えは一切ないんだろな。

でも、変に気をつかわれるくらいなら、これくらいはつちやけてくれたほうがこつち

も嬉しい。

そうだ、そろそろあれも焼けたかな。

「先生、ビールに合う料理なら、もうできますよ」

「ひぐつ、ぼんどこにい？」

失礼だけど、ちよつとかわいと思つてしまった。妹の火熾しお姉さんが一緒にキヤンプする理由がなんとなくわかる。

「はい、だからそんな泣いちゃだめですよ！」

泣きじゃくる鳥羽先生をなだめて例の焚き火に向かう。

「おつ！ ついにロリ子がここそそやってたやつのお披露目かー！」

「さつきからめつちやいい匂いしとるもんなあ。楽しみやなあー」

「はやくみたいな〜」

「はいはい、今持つてくるね」

トングを使って焚き火からアルミホイルの塊をミニテーブルの上に置いたまな板の上を下ろす。

「あつ、あつ」

熱々のアルミホイルを剥がすと、猛烈においしそうな香りとともに巨大な肉の塊が現れた。

リアルに言うとう首無しチキン。かわいく言うとう鶏の丸焼き。

「みんな、できたよー」

テーブルごと肉を持っていく。

すき焼きの隣にテーブルを置くと、みんなの視線が肉に釘付けになった。

「な、なんじゃこりやー!」

「うわすごいね、鶏の丸焼き?」

「ふおほほほ〜! おいしそ〜!」

「はえ〜 双葉ちゃん、こないなの作っとったんか」

足の付け根にコーラの缶が突き刺さり、表面に満遍なくスパイスが塗り込められパリパリに焼き上がった丸々一羽分の鶏肉。

「これ知ってる、ビア缶チキンってやつでしょ?」

「そうだよリン! クリスマスっぽいでしょ!」

「たしかに、これ見るとクリスマスキター! って感じるな!」

「でしょでしょ! 前からずっと作って見たかったんだ! まあビールは買えないからコーラだけだね! 今切り分けるから、みんなはすき焼き食べて!」

みんなにそう言っつて、さっそくトングと包丁で鶏肉を切り分けて……

『じー』

切り分けて……

『じー』

切り分けて……

『じー』

「もう！　なんでみんなボクのことみるんだよー！」

ボクを見つめる六対の目。

食べてるのなのでしこだけじゃん。

そんなんだとまたいつもみたいに気がついたら鍋空になっちゃうよー

「や、だつてなー」

「そないなとんでもないもん見せられて、気にせず食事しろ言われてもなー」

「ビア缶、チキン……ビール……はっ!?」

鳥羽先生の焦点の定まっていな目がかつと開いてがさごそと自分の荷物を漁り出す。

「あ、あつたあ！　ビール、ビールウ！」

よっぽど嬉しかったのか、両手にビールを持って気分はるんるといった感じだ。

「なんや……もうあれやな、尊厳つちゆう尊厳をかなぐり捨てとる感じやな」

「まあ、本人が楽しそうだからいいんじゃないか？　知らんけど」

知らんのかい。

まあいいや。トングでコーラの缶を抜き取ってから肉を切り分けていく。

鶏肉は、パリパリに焼けた見た目に反して、びつくりするくらい柔らかくて、切った断面から美味しそうな肉汁と香ばしい匂いが溢れ出す。

「やべえ、めっちゃうまそう……」

千明の言うとおり、ボクもさつきから口の中で涎が止まらない。

そういうばまだすき焼きもあるけど、食べ切れるかな。

まあ、ボクとなでしこがいれば大丈夫か。実は今日のために昼抜きで来たのだ！

「あおい、紙皿ってまだある？」

「あるでー あ、わたしも手伝うわ」

あおいと協力して、切り分けた肉をみんなに配っていく。

「じゃあ、食べよっか」

いただきます。と、みんなで言うってから肉をかじる。

「……うま」

衝撃的すぎて、すき焼きとはまた違った意味で語彙力が消し飛ぶ。

な、なんて柔らかいんだ……

焚き火で1時間かけてじっくり焼いた肉は、信じられないほど柔らかく、塗り込めた

オールスパイスの複雑な香りと塩気が肉の旨みを何倍にも何十倍にも高めていく。

こ、これは冗談抜きで今まで食べた鶏肉のなかで一番おいしい！

「おいしい！ おいひいよお！ ふたばちゃん！」

「これ、うますぎやろ。こんな反則やわあ」

みんなもだいたい同じリアクションみたいだ。

千明なんて、もう話すのすら忘れてひたすら鶏肉とすき焼きを交互に食べている。

「……う、うまあ」

「ん、おいしい」

リンと斉藤さんも目を見開いておいしそうに食べてくれている。

さて、鳥羽先生は……

「なんでこんなにおいしいのよお、おいじすぎるのお」

あ、はい、喜んでくれてなによりです。

この人、なに食べさせても泣きじやくるんじやないかな。

でもまあ、これだけ喜んでくれれば作ったかいがある。

そっか、みんなおいしいって、思ってくれてるんだ……

「ふひ、ふへへ……」

やばい、嬉しすぎる。顔がにやけるのが抑えられない。ちゃんと家で練習してよかつ

た。

自分のために磨いてきた料理の腕。ずっと一人で食べると思っていたそれを、みんなのために披露する。

ボク知らなかったよ。誰かにおいしいって言ってもらえることが、こんなに嬉しいなんて。

嬉しいな……本当に、うれしいな……

「双葉ちゃん、どないしたん？ なんやえらいにやついとるで」

「うん！ ボクね！ 今すっごいすっごい、嬉しいんだ！」

ボクが笑顔でそういうと、あおいは優しげににっこりと笑った。

「……ほんまに、ほんまによかったな、双葉ちゃん」

「……うん！」

これ、夢じゃないんだよね。

こんな楽しいことが、この世にあっていいのかな？

目に映る人全員が友達で、ボクはみんなのことが大好きで、みんなもボクのことを好きでいてくれて……

こんなに、こんなに幸せなことがあっていいんだろうか。

……

.....

.....

いいに決まってるよね！ だってクリスマスだもん！

「あ、そういえば私クリスマスっぽいもの持ってきたんだ〜」

どこから調達したのか、斉藤さんがサンタクロースのコスチュームを取り出す。

爆誕！ 年末戦隊サンタクレンジャー（税込1,980円）！

チキンにすぎ焼きにサンタさん。

どんどん高まっていくクリスマスムード。楽しくて、楽しくて、しかたがない。

「ここに綾乃がいたらな……」

ふとそんなことを考えた。

その時だった。

「おーおー 盛り上がってるじゃん」

聴き慣れた、だけど聞こえるはずのない声。

突然声をかけられて、思わずみんなで振り返る。

そして、絶句する。

「やっほー 来ちゃった」

綾乃が手を振って、ボクたちに笑いかけていた。

あ、綾乃!! え、えええええ!!

12話 旅の思い出 0円（非課税）

12—1

「やつほー 来ちゃった」

冬の静岡。視界を遮るものがなに一つないだだっ広い夜の草原で、綾乃はにへらと笑った。

「あ、アヤちゃん!？」

唾然とするボクたちの中で、真っ先に反応したのはなでしこだった。

がばりと立ち上がったかと思うと、小走りで綾乃のもとに駆け寄っていく。

「お、なでしこサンタだ」

「え、あ、アヤちゃん？ 本当にアヤちゃんなの!？」

「そうだよー 久しぶりー」

なでしこに笑いかける綾乃は、前に浜名湖で別れた時からなにも変わってなかった。

「元氣そうでなによりだ。って、そんなことはどうでもいいよ！」

「あ、綾乃！」

「あ、双葉もサンタじゃん」

「ど、どうしてこんなところにいるの！」

「そ、そうだよアヤちゃん！」

一瞬、自分のいるキャンプ場をこんなところ呼ばわりはどうかと思ったけど、それよりも頭の中にある疑問を解決するほうが先だ。

「どうしてって、そんなの双葉たちに会いに行こうって思ったからに決まってるじゃん」

「こ、ここから浜松までめっちゃ遠いよ！」

「そう？ たったの170キロだよ」

「なんだ、そんなくらいか」

「納得すんなよ……」

リンがボソリと呟く。だって本当にすぐそこじゃん。びっくりして損したよ。

「……気のせいかな？　なんか、すっげえ聞き覚えのあるセリフが聞こえた気がするんだが……」

「アキ、残念やけど気のせいやないで」

「わあ、まるで双葉ちゃんみたいだね」

「……くっ、遅かったか」

「その四人、聞こえてるからね」

とくにリン。遅かったかつて、人を病原菌みたいに言わないでよ。ひどいなー

リンだって人のことそこまで言えないくせに。峠でノリノリでリーンアウトしてたのバラしちゃうぞー!

「もしかして、アヤちゃんバイクで来たの?」

「そうだよー 海沿いの150号ずっと走ってきた。風強いしトラックにめっちゃ煽られるしで大変だったよ」

「大変って、そんなあつさり……」

まあたしかに大変だとは思うけど、琵琶湖ツーリングで鍛えられた綾乃にとってはもう大した距離じゃないんだろう。

「浜松からここまでめっちゃ離れてるだろ……」

ふふふ、いつかリンもボクたちの仲間にしてあげる。

「あ、生リンちゃんだ。なでしこと双葉が送ってくる写真でよく見てるよ」

「あ、う、うん。よろしく」

「で、千明に犬山さんと斉藤さんだよな? あれ、その眼鏡かけてるその……できあがつてる人は?」

あ、鳥羽先生に気づいちゃった。ぐでんぐでんになった先生がふらふらと立ち上がる。

「わらひはこもんのとばみなみでええすう！ えんろはるばるごごろう！」
と、酔っ払いがそう言った。ほんと、この人……まあいいけどさあ。

「あ、はい」

ああもう綾乃困っちゃってるじゃん。

本栖高校が変なところって思われたらどうしよう。

「あはは、ごめんなー、この人酔っ払うところなつてまうんよ」

「普段はめっちゃ美人でいい先生なんだがなあ」

「まあ？ 楽しそうでいいんじゃない？ あ、中入っていい？」

「もちろんいいぞ！ あ、椅子ないな。どうしょ」

「あ、わたし持ってきてるから平気だよ」

持ってきたらしい荷物の中からアルミのスツールを取り出してボクの椅子の横に置いた。

なんでボクの横？ 普通なでしこの横に置くもんじゃないの？ まいいか。

「ふいー 疲れたー あ、お土産買ってきたよー」

荷物から見覚えのある紙箱を取り出す綾乃。あれは、もしかして……

「わあ！ うなぎパイだあ！」

なでしこが好物に目を輝かせる。さつきまでさんざんすき焼きと鶏肉を食べてこのリアクションである。

この子の胃袋の限界つてどこまであるんだろう。大食い大会とか出たら優勝しそうだ。

「おつかれ、大変だったでしょ」

「休みだからけっこう混んででき。おかげで予定よりめっちゃ遅れちゃったよ。てかみんなサンタなんだね」

それじゃわたしも。と綾乃がニット帽を取って代わりにサンタ帽を出して被った。

爆誕！ 綾乃サンタ！ でも、八人もサンタがいると、なんだかありがたみが薄れるなあ。

「遠くからめっちゃいい匂いしてたけど、なに食べてたの？」

「すき焼きとビア缶チキン？ ってやつだよ！ すっごいおいしいんだー！ よかったらアヤちゃんも……あつ」

鍋の中を覗き込んだなでしこの顔が曇る。あれだけたくさんあったすき焼きは、いつのまにか空になっていた。

「あはは、いいよいいよ。いきなり来たこつちが悪いんだし」

「ご、ごめんねアヤちゃん！」

「ふっふっふ、なでしこちゃん、心配なら無用やでえ！」

あおいが鮮やかな手捌きで鍋の中に新しい具材を投入していく。

玉ねぎにバジル。そしてトマト……トマト？

「名付けて！ トマトすき焼きのできあがりやー！」

赤と茶色と緑色。

さつきまでザ・和風だった鍋が瞬く間に地中海の香りが漂う洋風すき焼きに大変身を遂げていた。

鼻をくすぐる濃厚なトマトと牛肉とバジルの香り。

食べなくてもわかる。これは絶対においしい！

「おー！」

「すごいよあおいちゃん!!」

「しめのパスタもあるし、せっかく遠くから来てくれたんや、土岐さんもじゃんじゃん食べてええからなー」

「ほんとに？ ありがとー！ 実はカレー麺しか持ってきてなかったんだよねー」

でたな、みんな大好きカレー麺。まあ実際、カレー麺が一番お腹に溜まるしね。

「じゃ、気いとりなおしてー」

なでしこ、リン。

千明、あおい。

斉藤さん、綾乃。

そしてボクと先生。

これで、全員が揃った。

まさか、こんな光景を見れるなんて、夢にも思つてなかつた。

人生なにが起こるかわからないけどさ、これは流石に予想外だよ。

でも、こんなに楽しい予想外なら、ボクは全然大歓迎だ。

『いただきまーす！』

さて、ボクも食べますか。

『くそさみいー！』

前を走るビーノからそんな声が聞こえる。

『同じ静岡なのに寒いよー！』

後ろを走るエイプからそんな声が聞こえる。

「二人とも……自分をバイクの一部と思うのです。そうすれば寒さも感じなくなるので

す……たぶん」

そして真ん中を走るボクがそう言う。

たぶん、きつと、めいびー

『たぶんかよ』

『しんとーめつきやく、しんとーめつきやく……やっぱむりー!』

「ボクも無理」

思い込んだだけで寒さがなくなるわけないじゃん。なに言ってるの？ 頭バイク乗りなの？

まあ言ったのボクだけどさ。

『ていうか、アヤちゃんも双葉も別についてこなくてよかったのに』

いつの間にか綾乃と仲良くなっていたリンがそう言う。

ボクたちは今、キャンプ場から10分くらいのところにあるコンビニに物資調達に向かっていた。

理由は、買い置きのがスがなくなったから。おかげでしめのパスタはお預けだ。

一応イワタニのバーナーを持ってきているボクや、いつのまにかボクと同じバーナーを買っていた綾乃もガス缶を持ってきていた。

だけどバイク乗りの宿命である最適化の名の下、お互い一本ずつしか持ってきていな

かった。

飯炊きやヒーターで使うので半端に使うわけにもいかず、こうして調達に行っているのだ。

『だって、せつかくリンちゃんに会えたんだから一緒にツーリングしたかったんだもん。それにお菓子も買ったかったし』

『そっちが本音か』

「あんまんつていいよね」

『せめて建前言えよ』

『あはは』

真つ暗な一本道を三本のライトが明るく照らす。

一人で走ったら心細い道も、3台もいればやかましくなる。

『アヤちゃんはテントどこに張ってるの？ あとで遊びに行くよ』

『わたし？ 二人のテントから10メートルくらい離れたところだよ』

「めっちゃ近所じゃん」

『ほんとは隣に張りたかったんだけど、さすがに違う人だったら気まずいしき。誰だお

まえはー！ つてなったらやじゃん』

『たしかに』

エンジン音と風切り音。月明かりと冬の風。

国道139号線。富士宮道路。

身も心も凍る冬の道をボクたちはひた走っていく。

「寒いね……」

帰ってきたら、キャンプ場のお風呂に入ろう。

きつと、すごく沁みるはずだ。

そうに違いない。

ボクはそう思った。

「綺麗だなあ……」

ボクをつぶやきが、寒い空気の中に白い息となって消えていった。

静かな草原。あなたにそびえる富士山の黒いシルエット。

空を覆う漆黒のベールに手を伸ばす。

「すごいな……」

手を伸ばせば吸い込まれてしまいそうな闇の中。数えるのも馬鹿らしくなるほどの

星々が煌めいていた。

「あの赤いのがベテルギウスでプロキオン、シリウス……」

まるで空間が裂けて、命の輝きが溢れ出したような天の川の中。冬の大三角形を見つける。

ベテルギウスを除いて、あと四つ結ぶと大六角形になるらしいけど、ぼくにはそこまでの知識はなかった。

「今度双眼鏡でも買つてこようかな」

今までずっと道路ばかり見てきたから、星がこんなに綺麗だなんて知らなかった。知識はない、どの星がどんな名前前でどんな星座なのかもなにもわからない。

でも……

「綺麗だなあ〜」

この空が綺麗なのは、よくわかる。

「富士山から見たら、きつとすごく綺麗なんだろうな」

いつか登つてみたいな。

「わあはあ！ すっごい綺麗！」

一人物思いにふけていたボクは、友達のそんな声で我にかえった。

「きらきらだあ〜！」

なでしこの瞳が、無数の星々でキラキラと輝く。この子はどんなことも本当に楽しそうにする。

「ほんと、綺麗だよね」

「うん！ お姉ちゃんにも見せてあげたかったなあ〜」

おかげで、見ているこっちもどんどん楽しくなっていく。

だから、ボクはこの子のことが大好きなんだ。

「二人はどうしてる？」

「リンちゃんとアヤちゃんなら、二人で話してるよ。わたしはよくわかんないけど、バイクの話だと思う」

「そっか、ボクもあとで混ざろう」

でも、その前にお風呂だな。寒いし、先に行った三人が戻ってきたらとつと入ろう。

「双葉ちゃん、今日は楽しかったね〜」

「……うん、すつごい楽しかった」

「あ、そうだ！ お風呂入ったら、みんなで焚き火しよ！ マシユマロも持ってきたんだ」

あれだけ食べて、まだ食べる気なのか。まあボクも食べる気満々だけどね。

「食べすぎるとまた太っちゃうよ」

「双葉ちゃん！ 甘いものは別腹なんだよ！」

「ふふ、だね」

二人でにつこりと笑い合って、星を見上げる。

琵琶湖で見た星よりもずっと強く輝いている。きつと、空が近いのだろう。

クリスマス。特別な一日の名に相応しく、今日はなにもかもが楽しかった。

こんなに楽しいクリスマスを過ごしたのは、たぶん生まれて初めてだと思う。

「ボクさ、ずっとサンタさんのこと信じてなかったんだ」

だからだろうか、気がついたらそんなことを言っていた。

「……そうなの？」

上を見ているから、なでしこがどんな顔をしているのかはわからないけど、声色でなんとなく想像がついた。

やっぱりこの子は本当に優しいな。

「うん……だつてさ、この世界のどこにクリスマスプレゼントを郵便で送ってくるサンタさんがいると思う？」

小学生の時からずっと、ボクのサンタさんは配達のおじさんだった。

「学校でさ、みんながサンタさんサンタさんって、はしゃぐんだよね。なんか、ボクだけ仲間外れでそれがすごく嫌だった。今は違うんだけどね」

歳を取るにつれて、周りのことが見えるようになってきて、考えは変わった。嫌だったクリスマスも、お母さんのおかげでちよつとは好きになれた。

でも、毎年かかさずプレゼントをくれるのはすごく嬉しいけど、せめて名義くらいはなんとかしてよねお母さん。

明日は25日。今年はなにを送ってくるんだろうか。楽しみだな。

「そっか……」

「けどさ、なでしこ」

上を見ていた顔をなでしこに向ける。きつと、ボクの顔はものすごい笑顔になっている。さうな。

だつて……

「サンタさん、いたね！ それも七人も！」

なでしこ、リン、あおい、千明、斉藤さん、綾乃、鳥羽先生。

酔つ払つてたり、関西弁だったり、大食いだったり、お団子だったり、とにかく個性の強いサンタさんたちだったけど、ボクはそれで十分だった。

「双葉ちゃん！」

さつきから黙つてボクの話の話を聞いていたなでしこが、突然ボクの手を握つてきた。

冬の風で冷やされた手は驚くほどひんやりしていたけど、なぜだかちつとも冷たく感

じなかった。

「双葉ちゃんも、わたしのサンタさんだよ！」

「え？ ぼ、ボク？」

ボク、なでしこになにかプレゼントあげたっけ？

チキンはプレゼントと言えなくもないけど……

ダメだ、思いつかない。

「だって、アヤちゃんと会わせてくれたもん！」

「綾乃？ ボク、なにもしてたくない？」

言い方は悪いけど、綾乃が勝手に来ただけだ。ボクは本当になにもしていない。

けど、そんなボクの言葉を否定するようになでしこは強く首を振った。

「アヤちゃんが言ってたんだ！ わたしがここにいるのは双葉ちゃんのおかげだって」

まあ、さんざんいろんなところに連れ回して耐性つけさせちゃったもんね。

たかが170キロって言葉をボク以外の口から聞くことになるとは思わなかった。

さすがにあれは予想外だった。

でも、すごく嬉しいサプライズだった。

「だからね！ 双葉ちゃんは、わたしのサンタさんなんだよ！」

クリスマスプレゼント、ありがとう。なでしこは、そう言うてにつこりと笑った。

そっか……ボクも、誰かのサンタさんになることが、できたんだ。

びつくりだよ。まさか信じてなかった存在に、ボク自身がなるなんてさ。

ねえ、昔のボク、やつぱりサンタさんはいたよ。

それも、八人もね。

「メリークリスマス！　なでしこ」

「メリークリスマス！　双葉ちゃん!!」

お互いに笑い合う。

「なでしこー、双葉ー　こっちでうなパイ食べよー？」

遠くで綾乃が呼んでいる。リンも遠くからボクたちのことをチラチラ見ている。

「はーいー！」

なでしこが駆け出す。

ボクも後を追おうとして一歩踏み出し、立ち止まった。

そうだ。たまには電話のひとつでも入れてあげないとね。

スマホを出す。お母さんのアイコンをタッチ。

繋がらない心配なんてしない。この日のこの時間だけは絶対に繋がるからだ。

電話が繋がる。スピーカーから声がする。この世にあるどんな声よりも聴き慣れた

声。

ボクが一番大切な人の声。大好きなお母さんの声。

「お母さんボクね、今友達とクリスマスキャンピングしてるんだ——」

お母さん、きつと驚くだろうな。

ボクは夜空を見上げながらそんなことを考えた。

流れ星がひと筋、流れて消えていった。

そんな聖なる夜だった。

「ただいま」

荷物を抱えて玄関に入る。

25日、クリスマス。楽しい時間はあつという間に終わり、ボクたちはそれぞれの家に帰った。

綾乃はまた170キロ走るのがとうんざりしていた。ふふふ、まだまだ修行が足りないな。

「正月はバイトも休みだし、またどっかに行こうかな」

寒くなつて来たから南のほうかな。原点に帰って行き当たりばつたりの旅をするのも悪くない。

「で、今年は何にをプレゼントしてくれたのかな。お母さんは」

玄関先の配達ボックスにつつこんであったかなり大きなダンボールを見てつぶやく。送り主はいつもどおりお母さん。中を開けると頭の大ききくらの箱がでてきた。さらにその箱を開ける。

目を見開く。

「……ヘルメットだ」

まるで、象牙みたいにつやつやと光るアイスブルーのジェットヘルメット。

額に輝くのはアライのエンブレム。よく見るとベンチレーションがついている。

これ知ってる。アライの最新モデルだ。

「嘘でしょ、これ4万もするやつじゃん……」

震える手でヘルメットを被る。

今までの安物のヘルメットとは比べ物にならないほどのフィット感。サイズもぴつたり。

「あ、メモ入ってる」

段ボールの底に落ちていたメモを拾い上げる。

どうか気をつけて。

無愛想な文。口下手なお母さんらしい。ボクもクソザコだけどき、お母さんも大概だ

よね。

「ふひ、ふひひ……」

ヘルメットを脱いで抱きしめる。にやつくのが抑えられない。

やばい、超うれしい……

うん、こうしちゃいられない！

「よし！ バイク乗ろう！」

荷物を放り出し玄関を飛び出す。

駐車場でカバーを被っていたビーちゃんを引っ張り出してシートに跨る。

「いくよ！ ビーちゃん！」

マカセトケ！

そんな声が聞こえる。

イグニッションスイッチをオンにする。

オイルランプとニュートラルランプが点灯する。

チヨークを引く。

キックペダルを出す。

二、三回踏んで、重くなったところで止める。

蹴り飛ばす。

わずかな手応え、すかさずアクセルを吹かす。
唸るエンジン、飛び散る白煙。

焦げた匂いがボクの鼻をくすぐる。

ワインカー、クラッチ、1速、アクセル。

クラッチを離す。

進み出す車体。流れていく景色。

2速、3速……そして4速。

回り出すタイヤ、加速していく世界。

「しゅっばーっ!!」

さて、今日はどこに行こうかな。

13話 軽自動車税 第二種原動機付自転車（50cc

超90cc以下） 2,000円

13—1

「バイクバイク……」

店内に所狭しと並べられたバイクたちの中を、「僕」は歩いていく。

スポーツバイク、ネイキッドバイク、スクーター、アメリカン……

古いのもあれば新しいのものもあるし、ボロいのもあればピカピカのものもある。

「どれにしようかな……」

できればカッコいいのがほしいけど、古かったり、大きいのはなにかと維持が面倒だと聞く。

ここは、無難にカブあたりでも……

「……………ん？」

一台の青いバイクの前で足を止める。

なぜ足を止めたのかはわからない。けど、なにかが僕を惹きつけてやまなかった。

「ヤマハYB—1、か……」

まるで映画に出てくるような古いバイクをちよつと小さくしたようなフォルム。

ぬめりのある青いタンクにメッキのフェンダー、座り心地の良さそうなグレーとブラックのツートンカラーのシート。

見たことないバイクだ。

「1999年、ボクよりずっと年上だ……」

古いはずなのに、微塵も古さを感じさせない。バイクにはそこまで詳しくないけど、この子の保存状態がかなりいいことはよくわかった。

「走行距離はたったの1万ちよつと……」

20年近く経ってそれだけしか走ってない。普通に使っていれば1万キロなんて1年あれば走ってしまうはずだ。

それにこの綺麗すぎる車体、つまり……

「君も、一人ぼっちなんだね……」

埃の積もったヘッドライトを撫でる。

この子は僕と同じだ。誰にも認識されず、必要とされず、ただ朽ちていく。ほんとはもつと走れるはずだ。もつといるんなどころにいけるはずだ。

でも、この子はここで見向きもされず、シートに埃を積もらせている。

バイクはただの鉄の塊、感情なんてあるわけがない。

けれども、僕にはこのバイクがどこか悲しそうに見えた。

「君だって、本当はもつと走りたいよね」

決めた。

「じゃ、行こうか」

店の人から受け取った鍵を、メーターの下にある鍵穴に差し込む。

右に捻る。緑と赤のランプが点灯した。

「えつと、チヨーク引いて、キックだして……」

店の人に教えてもらった手順をなぞっていく。教習所ではセルしか使ったことないからなんか新鮮だ。

足元のペダルを4回ほど踏んで、一番重いところで止める。これでピストンが一番上

まできたはずだ。

「よいつしよー！」

そして蹴り飛ばす。

「……わっ！」

その瞬間、世界が一気に色づいた。

足元で、ぶるぶる震えるエンジン。すごい、本当に中でガソリンが燃えてるんだ……
チヨークを戻してスロットルを回す。エンジンが唸り白い煙が宙を舞う。

教習所で乗ったバイクとはまた違う、原始的で力強いエンジン音。

僕にはわかる。この子は生きてるんだ。

「ふ、ふふ……あはは！　すごいすごい！」

この子と一緒にならどこにでも行ける！　どこにだって行ける！

早く、早く走りたい！

でも、その前に……

「名前、つけてあげないとね」

これからこの子といろんな冒険をするんだ。YB—1なんて、味気ない名前じゃかわいそうだ。

なにがいいかな……そうだ。

「ビーちゃん、今日は君はビーちゃんだ！」

YBだからビーちゃん。意味のない安直な名前。でもそれでいい。意味なんて、これから見出していけばいい。

「もう一人じゃないよ！ ビーちゃん！」

これからは、僕が君に乗ってあげる。いろんなどころに連れて行ってあげる。

君と一緒になら、きつと僕はどこにだって行ける。なんだってできる。

「よろしくね、ビーちゃん」

ヨロシク！

風に乗って、そんな声が聞こえたような気がした。

「しゅっぱーっ！」

これからどこに行こうかな。

「……毛布、かけといてやるか」

真つ暗な世界。聴き慣れた声とともに身体に暖かいなにかがかけられた。

これは、きつと毛布だ。

「焚き火、もうちよつと強くしとこ。風邪引かれたらやだし」

パチパチと、なにかが燃える音と一緒に煙の匂いが鼻をくすぐる。

「ボク」はこの匂いを知っている。これは、焚き火の匂いだ。

あれ、なんで焚き火の匂いがあるんだろう。

そうだ。ボク、デイキャンプしてたんだ。えっと、誰とだったっけ？

……ああ、思い出した。

「まったく、気持ちよさそーに寝てやがるぜ。起きろーほっぺつつくぞー」

「くすぐりたいからやめてほしいなーなんて」

「うわっ!？」

目を開けて横を見ると、リンが驚いてのけぞっていた。

「び、びっくりした。お、起きてたのかよ」

「ううん、今起きたばっか。あ、毛布ありがと」

「う、うん」

椅子に腰掛けていた身体を伸ばす。縮こまっていた身体が気持ちよく伸ばされていく。

あたりを見回してみると、太陽が西に傾きはじめていた。そろそろ日が暮れる頃合いだ。

「うーん、よく寝た」

「夢でも見てたの？　なんか、さつきから寝言すごかったよ」

「夢？」

そういえば、なにか夢を見ていた気がする。

思い出した。ビーちゃんと初めて会った時の夢だ。

懐かしいな。乗り始めてからもう半年になるのか。

「初めてバイク買った時の夢見てた」

「ビーちゃん、だっけ？」

最初は自分のバイクに名前をつけているのを不思議そうにしていたリンだけど、今じゃすっかり慣れたみたいでごく当たり前のようにビーちゃんと呼んでくれる。

「そ、あの子もさ、ボクと同じだったんだ」

「……そっか」

リンは、そのひとりでボクがなにを言いたいか察してくれたようだ。

バイク屋で埃を被っていたビーちゃん。一人ぼっちだったボク。

似たもの同士。だからあんなに気が合うのかな？

「そっか……なら、あのバイクも、もう一人ぼっちじゃないね」

「どういう……あ、そっか」

キャンプ事務所の駐車場で仲良く並んでいるビーノとビーちゃんを思い浮かべる。

同じ原付だし、ビーノはある意味ビーちゃん弟みたいな存在なのかな。パワーは全然違うけどね。

「……そうだね」

それだけ言って、目の前の湖を眺める。

冬の本栖湖は、耳が痛くなるほど静かで、オレンジに染まり始めた空はどこまでも澄んでいた。

「やっぱ、ここが一番好きだな」

つぶやきが風に乗って湖の向こうに消えていった。

「……わかる」

焚き火と湖を静かに眺める。火も弱くなってきた。そろそろ薪も燃え尽きるだろう。

「なでしこは今頃郵便局でバイトか。あいつ、大丈夫かな」

「たしか配達の方だったっけ。体力お化けだし平気でしょ」

なんせ南部町から本栖湖までの40キロ（峠あり）を平気で自転車で踏破するようなフィジカルの持ち主だ。

野クルで腕相撲大会したらたぶんぶつちぎりで優勝すると思う。

「いや、道とか迷わないかなって」

「リンは心配性だなあ」

口ではそう言ったものの、ボクもちよつと心配だつたりする。

ベそかいてどうしよおつて言ってる姿がありありと想像できてしまう。

「大丈夫だよリン。なでしこ、ああ見えて意外と周り見てるし」

けど、ボクたちが想像するようなことはきつと起こらないだろう。

「ふふ、だろうな」

あの子は、ボクなんかよりもずっと賢い子だ。きつと今頃楽しそうに手紙を配っていることだろう。

「わたしは31日から4日まで休みだけど、双葉はバイトいつまで休みなの?」

さしずめ今日は定休日ってところかな。

休みの日に湖畔でコーヒーをすすりながらゆったり焚き火を眺める。

なんて贅沢な時間の使い方だろうか。

「ボクは29、30だけ働いて、あとは全部休み。休みっていうより休まされたって感じ。店の人にお前働きすぎだから休めって言われちゃった」

もうそんなことするつもりはないんだけど、一度失った信用はなかなか取り戻せないものなのだ。

「たしか前も同じところで働いてたんだっけ？ そんなに働いてたの？」

「最大週6で入れてた」

「多すぎだろ」

「えへへ、お金欲しくて」

本当はスーパープラスコンビニの脅威の週七連勤だったけど、それは秘密にしておく。

「金の亡者め」

だってパーツ高いんだもん！

「でもそんな休みあるってことは、またどっか行くの？」

「うん。寒いし適当に南のほうでも行こうかって。リンは？」

「わたし？ わたしは伊豆行こうって考えてる。まだちゃんと決めてないけどね」

「伊豆か、いいよね〜」

「そう言えば双葉伊豆行ったことあるんだっけ？」

「あるよー」

「どんな感じだった？」

「ザ・海って感じ」

「そりゃそうだろ……」

吹き抜ける風。見渡すかぎりの水平線。青い空、白い雲。映画に出てくるような崖っぷちの道路。長いストレートにワインディング……

楽しかったな、また行きたいなあ。

「真面目な話、すごいいい道だよ。けど、スクーターで走るなら気をつけたほうがいいかも」

「気をつける？」

リンの言葉にうなずいて肯定する。

「半島の外周は長い一本道で、信号もほとんどないからみんなすごい飛ばすんだよ。だいたい60、70は出してたかな」

「そんな早いのか。ちょっと怖いな」

法定速度で走ってるのに煽ってくるのは本当にやめてほしい。日本人は急ぎすぎなんだよー

「でも、道はけっこう広いし自転車で走ってる人もいるくらいだから、リンの腕なら全然問題なしだよ」

「まあ、それならいいんだけどさ。あ、観光でおすすめの場所とかある？」

「ごめんわからない。だってなにも見てないし」

即答。たしか見に行ったのって石廊崎くらいだ。どうせなら細野高原とか見にいけ

ばよかったなあ。

今度また行こうかな。

「え、じゃあなにしに行つたの?」

「そこに伊豆があつたから」

登山家かな? どうでもいいけど、この言葉つて本当に言つたかわかつてないらしいね。

「ええ……」

リンは勘違いしている。走ることが目的であつて、観光はそのための手段にすぎない。

一日に一度は2ストの排ガスを吸わないと禁断症状が起きるボクみたいなエリートバイカーにとつて、走ることで最高の娯楽であり、ご褒美なのだ!

ふっふっふ、リンもまだまだ修行が足りないなあ。

「その変な笑いやめろ。わたしはアヤちゃんみたいにかかないからな」
「ぐっふっふ」

でもねリン、伊豆にスクーターで行くことになんの疑問も思わない時点で、もう手遅れなのだよ。

いつかリンと綾乃と四国巡りでもしたいな。

「あとちよつとでも渋滞するとすつごいことになるから、それだけは覚悟したほうがいいと思う。とくに熱海の近くはね」

「ありがと……あ、あのさ、双葉」

リンが下を向きながらボクの名前をよんだ。影になっているせいで、表情はよくわからなかった。

「ん？」

「……やっぱなんでもない」

変なリン、まあいつか。

パキリ。かろうじて形を保っていた薪が炭となつて崩れる。

「もうすぐ消えるね」

「消えたら帰ろっか」

「さんせー あ、出かける時お母さんがどうせなら双葉連れてきてって言ってたけど、どうする？」

断る理由もないし、久しぶりにリンの家にも遊びに行きたいしここはお邪魔させてもらおう。

「わかった。お邪魔するね」

「なら、晩御飯用意しといてって言つとくよ」

「うん、お願い」

久しぶりに咲さんのご飯が食べられる。悔しいけど、ボクなんかよりもずっと上手だからなああの人。

リンの家行ったら教えてもらおうかな。

「もうウイリーすんなよ」

「しないよ！」

やめて、黒歴史を掘り起こさないで！

リンだったら、クリキヤンで原付の旅見てからずっとこうなんだよな。

たしかにあれは面白かったけどさ。でも、こうなんか、すごく心が痛くなる。

ギア弄ったらロー入っちゃって……この先はもうやめよう。そりや桜さんが笑うわけだよ。

「なまら怖かったんだよな」

だからやめて！

「あ、火、消えた」

そろそろ帰ろう。

家、バーナーの上のお湯が湧くのをソファアに座りながらスマホをいじる。

窓から見える景色はすっかり真つ暗になっていた。今年はよく冷え込む。雪とか降らないといいんだけど。

ピコン！ ラインだ。

千明：【悲報】休みがない件について

双葉：酒屋さん、そんなに忙しいんだ

あおい：年末やしなあ

千明：ちくせう！ お前からあたしの分まで遊べよー！

なでしこ：あゝぎぢゃん！！

千明：なゝてゝしゝこゝおゝおゝ！！

双葉：なにこれ……

リン：前も言ったけど、お土産買ってくるから元氣だしなって

千明：ありがてえ！ 家宝にしやす！

リン：食えよ

斉藤：そういえば、双葉ちゃん年末どこ行くの？

双葉：南

沸いたお湯をティーバッグを放り込んだマグカップに注ぐ。バーナーを家で使うつ

て、最初はどうかと思っただけ、すごくいいなこれ。

あおい：それ場所やない、方角や

斉藤：ワイルドだねえ

あおい：双葉ちゃん、予定決まってへんのやつたら、アキと妹と一緒に初詣行かへん？
鳥羽先生が送ってくれるらしいで

千明：ほんと、ありがたい話だよなあ

なでしこ：いいなあ、みんなで初詣。わたしは配達だよ

斉藤：なでしこちゃん！ みんなの年賀状は君に任せた！

なでしこ：うん！

双葉：千明、あおい、誘ってくれてありがと。でもやつぱり旅に行くよ

あおい：しゃあないなあ。気いつけるんやでえ

双葉：うん！ 太平洋の初日の出を眺めながらツーリング……いいよね

千明：それが目的か

双葉：ふひひ、ばれたか

リン：ちゃんと前見て運転しろよー

双葉：はい

あおい：リンちゃんも双葉ちゃんも、年末は車ぎよーさん増えるし、気いつけてえな

斉藤：リン、双葉、無事に帰ってくるのヨ。ヨヨヨ

リン：お母さんごっこやめろ

なでしこ：帰ってくるのじゃぞ、若人たちよ

双葉：婆さんや、南つてどっちじゃったかのう

リン：ボケてんじゃねえか

「えへへ」

ニヤニヤしながらスマホをしまう。リンも斉藤さんも、あれからすっかり野クルと仲良しになったよなあ。

「ふひ、ふひひひ」

なんだかそれが嬉しくて、ソファのクッションを抱きしめる。

あ、そうだ紅茶飲まないと。

「……にがっ」

うえ、浸けすぎた。

「行つてきます」

12月31日。一年を締め括る最後の一日。ボクはいつものように家を出た。

「寒いので、南のほう行ってきます。っと」

スマホでメッセージを送る。

変わったのは、お母さんに連絡するようになったことだろう。

かなりアバウトな内容だけど、ボクのお母さんもろくに居場所を教えないからお互い様だ。

沖縄いるって連絡入ったと思ったら、次の日にはフィンランドいるとかわけのわかんないこと言ってくるし。

嘘ついてるのかと思ったけどちゃんと国際便でお土産くるしほんとわけわかんない。

ボクの放浪癖って遺伝だったりして。

「今日も走るよ。ビーチちゃん」

すでに玄関の前で停めていたビーチちゃんのタンクをポンポンと叩いて跨る。

「さて、どこ行こうかな」

無茶にならない範囲で400キロくらい走るか。となると、大阪京都あたりかな。

大阪で乱痴気騒ぎを眺めるか、京都で初詣して、甘酒でも飲むのもいいかもしれない。

うーん、できれば静かなところに行きたいな。

「そうだ、京都に行こう」

結局西じゃんと思ったけど、まあそれもいい。旅は行き当たりばったりが一番楽し

い。

「よろしくね、ビーちゃん」

ヨロシク！

風に乗って、そんな声が聞こえたような気がした。

「しゅっぱーっ！」

今日はどの道で行こうかな。

国道52号線、静岡、山梨、新潟を結ぶ長大な幹線道路。

谷間に住むボクたち山梨県民は、どこに行くにしても大抵はこの52号を走ることになる。

ボクはこの道が好きだ。曲がりくねった峠道も好きだけど、こういう延々と続く一本道もいかにも旅って感じで大好きだ。

そんな一本道を通り抜け、150号に入る。明るい日差しの下、風に乗って漂う潮の香りを吸い込みながらビーちゃんを走らせる。

「リンは伊豆、なでしこと斉藤さんは郵便局。千明とあおいはバイトか」

年末は稼ぎ時だから基本的にどこも忙しい。とくに千明は酒屋だから大変だろうな。

「遊んでるのボクとリンだけじゃん」

みんなが働いているのを横目にバイクでぶらり旅。なんだかいけないことをしているみたいでドキドキする。

「歌でも歌っちゃおうかな〜」

走りながら三ヶ月ごとに代わる好きなアニメのオープニングを歌う。

寒い風を切り裂いて、ビーちゃんを走らせる。

バイクに乗りながら歌う歌って、どうしてこんなに気持ちがいいんだろうね。

まだ昼前で、人気も少ないし、ここなら誰にも聞かれずに歌えるぞー！

歌っている途中、前の交差点の信号が赤になり、ブレーキをかける。

「左曲がれば御前崎か……」

たしか灯台とかあるんだよね。どうせだし、ちよつと寄ってこうかな。

グリップのレバーを左に倒しウィンカーを出す。ヘッドライト下のリレーがカチカチと規則正しく音を出す。

いつかここらへんの電装も新しくしたいな。もうだいたいぶボロいんだよね。

でもまあそんなことよりもだ！

「よーし、もつと歌っちゃおうぞー！」

今日は車上カラオケパーティーだ。喉が枯れるまで歌ってやるぞ！ 海沿いに来て

やることって言ったらやっぱり歌だよね！

そう思ったその時だった。

「すいーつと、一台の原付が横付けした。

どこにでもあるパステルブルーのビーノ。

……

……

……

え、ビーノ？

恐る恐る、横を見る。

「じー」

リンが、ボクを見ていた。

虚無という言葉を体現するかのような、ものすつごい無表情のリンが、ボクを見ていた。

あれ、今横につけたってことは、さっきの歌、もしかして全部聞こえてた？

え、うそ……また、なの？

「き、聞いてた？」

わずかな希望に賭けリンにたずねる。

きっとエンジンの音で聞こえなかったはず。そうに違いない。うんそうだ！　そうに決まってるよね！

あーよかったよかった。聞かれたかと思ったよ。

「きよ、きよはいいいてんきだねー」

仮に聞かれていたとしても、心優しいソロキャンガールのリンならきつとわかってくれるはず！

そうに違いない。

そうであつてくれると、いいなあ……

「……………ふっ」

あゝあゝあゝあゝ（二回目）！！

14話 春華堂 うなぎパイ 徳用袋 230グラム

864円（税込）

14—1

顔を上げる。視界を埋め尽くす青、青、青。

「ふおおお!! 海だあ!!」

見渡すかぎりの大海原。

そして、インクをそのまま空に塗りたくったかのような青い空。

静岡県、御前崎市。

空を切り裂くようにそびえる白い灯台の下、一人のソロキャンガールの魂の叫びが太平洋に吸い込まれ……

……

……

……

そして、爆発した。わずか数秒の出来事だった。

「あ、う……」

風に乗って聞こえる恥ずかしさに悶えるようなうめき声。

うん、ボクもリンの気持ちがよくわかるよ。黒歴史作るのって、辛いよね。

「海、綺麗だね」

「う、うん……」

あまり触れないようにそっと話しかける。

俯いていて顔は見えないけど、真つ赤な耳たぶでだいたいどんな顔をしてるのか想像がついた。

「や、やっちゃまった……」

なんか最近リンがどんどん感情豊かになってる気がする。豊かになったっていうか、表に出すようになったって言えばいいのかな。

「な、なにニコニコしてんの……」

なんにしても、すごくいいことだ。

「ふふふ、なんでも」

リンは優しくてすごくいい子なんだから、もつと笑えばいいのに。

なでしこみたいにニッコニコのリン……ありだな。めっちゃ見てみたい。

「まあいいや」

それだけ言つてリンは海を眺めた。開かれた瞳が海と太陽を映し光り輝く。

「海、綺麗だね」

リンが呟く。

「うん、すごい綺麗」

二人で海を眺める。冷たい潮風がふきすさび、ボクとリンの髪を揺らす。

「双葉が歌いたくなる気持ちもわかるな」

「そ、その話やめてよー！」

せつかく人がなかったことにしようとしたのにー！ 仕返しか、仕返しなのか！

ここは静岡県の御前崎灯台。

偶然会つたリンとボクは、リンの提案で二人で御前崎灯台に向かうことにした。

と、いうよりも交差点で左折したリンを追いかけているうちに気がついたらここにいた、というほうが正しい。

だつて、あんなの思いつきり見られてそのままスルーとかできるわけないよ！

「り、リンって伊豆に行くんじゃないの？」

リンの言葉できつきの黒歴史がフラッシュバックしそうになったので、ものすごい強引に話題を変える。

「あれ、言ってなかったっけ」

「ううん、聞いてない」

「なんか正月だからめっちゃ混んでるみたいで、同じ海見に行くなら御前崎もいいんじゃないかって言われて来てみた」

「ああ、たしかに」

沼津、御殿場、箱根、熱海。伊豆半島とその周辺はとにかく観光地が詰まっている。

ただでさえ普段から交通量の多い地域。年末ともなればそれはすごいことになるだろう。

「でも正解だったかも。ナビで渋滞情報見たら、伊豆の道路ほとんど真っ赤になってた」「あーたしかに、この時期は渋滞すごいかも。巻き込まれなくてよかったね」

前に行った時も緊急工事とかで酷い渋滞に巻き込まれた。

ガソリンは減るし、ガチャガチャギア操作忙しいし、クラッチ握るの疲れるし、いいことなんて一つもない。

空いてる時は本当に最高なんだけどなあ。あれだけは思い出すだけでも減入ってくる。

「リンはこれからどこ行くの?」

「わたしはこの先のたかくらつてお茶屋でお母さんに頼まれたお土産買って、天竜川の近くにある海辺のキャンプ場で年越し」

海辺つてことは初日の出は太平洋から見ることになるんだ。

きつとすごい幻想的なんだろうな。ちよつとوراやましい。ボクはバイクで走りながら眺める予定だしね。

「双葉は?」

「えつと、とりあえず浜松のほうまで行つてそのまま名古屋行つて京都行こうかなつて」
「西じゃん」

リンがつつこむ。ラインで南つて思いつきり言つたもんね。

「えへへ、旅つてのは行き当たりばつたりが楽しいんだよ」

「双葉らしいつちやらしいけど……かなつてことはまだ決めてないの?」

「決めてないつていうより、決めてないつていうほうがあつてるかな」

ボクの言葉にリンがきよとんとした顔をする。こればかりはリンにわかつてもらうのは難しいだろうな。

「決めない?」

「なんて言えばいいのかな。ボクは観光じゃなくて旅がしたいんだ」

「……どっちも同じじゃない？」

「うーん、こればかりは説明が難しいなあ」

明確なゴールがあつて、そこに行つたらあとは帰る。それがリンにとつての旅なんだ
と思う。

「キャンプで例えるなら、テントも焚き火もご飯も全部用意されて、リンは食べて寝る
だけ。それって楽しい？　って話かな」

「それは……ちよつとやだな。あ、そういうことか」

「リンもわかるでしょ？」

リンが同意するようにならず。

なんでも予定どおりにいくのならそれにこしたことはないのかもしれない。

でも、それじゃあちつとも楽しくない。

急に雨が降ってきて全身ずぶ濡れになったり、疲れすぎてそのへんの道路で昼寝した
り……そういうのも含めて全部楽しみたい。

「旅は自由で気ままなものだし、そうあるべきってボクは思つてる」

大雑把な目的地は決めても、そこから先どうするかは気分しだい。

気になるならもつと遠くに行くし、気分が乗らなかつたらそのまま帰る。

行き当たりばったり、無計画。ちよつと前はそれに加えて無謀と無茶も入ってたけ

ど、それはもう封印。

「なんていうか、決められたとおりってのが性に合わないんだよね」

あっちへふらふら、こっちへふらふら。風の向くまま気の向くまま。

好きなように走って、好き勝手楽しんで、好きな時に帰ってくる。

「たぶん、そういう風に生まれてきちゃったんだよ」

「ふふ、それ絶対将来苦労するだろ」

「えへへ、知ってる」

「……知ってるのか」

二人で黙って海を眺める。肩と肩が触れ合うほどの距離にいるリンの顔は、なんとも言えない複雑な表情を浮かべていた。

時計を見る。そろそろ出発したほうがよさそうだ。

「じゃあ、ボクもう行くよ」

「あつ、うん……気をつけてね」

「はーい！ じゃ、行ってきまーす！」

海を眺めるリンに、人差し指と中指をこめかみに当てシュツと振り払い、背を向けて歩き出——

ことはなかった。

「ん？」

腕をなにかに引かれた。立ち止まる。

後ろを向く。

リンがボクのジャケットの袖をその細い指で掴んでいた。

「あつ、えつと……」

たぶん反射的にしてしまったことなんだろう。リン自身も驚いたように目を見開いていた。

なにか言い忘れたことでもあるのかな。

「リン、どうしたの？」

わけを聞くと、リンはなにも言わず恥ずかしそうに頬を染め、それでいて少し寂しそうに目を伏せた。

「リン？」

「あ、あのさ……」

袖を掴んでいた手は、いつのまにかボクの手を握っていた。

リンの指はずっとポケットに突っ込んでいたせいか、ぬくぬくと温かく柔らかかった

た。

「きよ、今日だけでいいからさ……その、一緒にきや、キャンプしない?」

「キャンプ?」

「……う、うん」

聞き返すと、恥ずかしそうに小さくうなずいた。

「長野行つてから一回も二人でキャンプできてないし……」

キャンプ、そう言えば高ボッチに行つてから一度もリンと二人でキャンプに行つてないな。

あれからだいたい一ヶ月半。まだそれだけしか経つてないのに、ずいぶんと昔のことのように感じる。

たぶん、リンも同じような気持ちなんだろうな。

「で、でもせっかくのソロキャンなのに、ボクなんかいたら邪魔じゃない?」

「……む」

ボクがそう言うと、リンはちよつとむつとしたりするように眉をひそめた。

あれ、ちよつとまづいこと言つちやつたか——

「いたたたたつ!! 頬引つ張らないで!」

リンの細い指がボクの頬にめり込んでいく。千切れる! 千切れちゃうよー!

「やわらかか……じゃない。邪魔でもないし、なんかでもないから」
「ごめん！ もう言わないから離して〜！」

指撃から解放され頬をさする。じんじんするよお。うえ、涙出てきた。

涙で滲んだ視界に、リンのむっとした顔が映り込む。うん、この顔怒ってるなあ。

「ほんと、双葉って自己評価低いっていうかなんていうか……」

「いや、だって……」

「だってじゃない。あのさ、そりやたしかに一人のキャンプも好きだけど、せつかくこんなところで会えたんだし……えっと、その……」

言葉に詰まったのか、リンが頭を抱えて唸りだす。

「ああもう！ 友達とキャンプしたいのが、双葉だけだって思うなよー！」

赤くなった顔をボクに向け、大きな声でバタバタ手を振り乱しながらリンが言った。

あ、そっか。ボクはようやく合点がいった。

リンもボクとおんなじだったんだ。クリキャンに誘った時のことを思い出す。

あの時ボクは、リンとキャンプがしたいと言った。

リンもボクとキャンプしたいと、思ってくれていたんだ。

なんか、うれしいな……

「なっ、ニヤニヤすんなー！」

「ふひひ、ごめんムリ」

ボクの言葉にリンの顔がまるで爆発したみたいに真っ赤になった。

ちよつと、からかいすぎたかな。これ以上はパンチとかくらいそうだからやめておこう。

「でも、キャンプか……どうしようかなあ」

ここら辺でキャンプするとなると、今日は100キロちよつとしか移動できないことになる。

目標は400キロ。まだ4分の1しか走ってない。

でもリンともキャンプしたいし、うーん、ぐぬぬ……

「たかくらつてお茶屋さん、2階がカフェになってて、スイーツとかもけっこうおいしいんだってさ。お母さんが言ってた」

「す、スイーツ……」

そういうえば、最近全然甘いもの食べてない気がする。

「熱々のお茶と抹茶ティラミス。うまいんだらうな……」

まるで、ブラックホールのようなリンの光のない瞳がボクを誘惑する。

お茶屋さんの抹茶ケーキなんて、それ絶対おいしいやつじゃん。

ど、どうしよ……ま、まて、ボクにはやらなきやいけないことがあるんだ！

「それに、ここって豚足カレーが有名なんだってね。何時間も煮込んでトロトロになったカレー……絶対うまいよね」

「か、カレー……」

家じゃ絶対に作れない、トロトロの豚足カレー……お、おいしそう。

や、やばい。このままだとやられる！ 際限のない食欲という名の底なし沼に！

「……だめ？」

後ろに手をやって上目遣いで覗き込んでくる。ちよつと垂れ気味の綺麗な目が期待に輝く。

「……無理言ってるのわかってるし、ダメならダメでいいからね」

いや、寂しそうな顔でそんなこと言われても……ぐぬぬ、どうしよう。

「……双葉？」

まあ、いつか。

「わかったー！ こーさん！ やろーキャンプ！」

両手をあげて降参のポーズ。

「……え、いいの？」

きよとんとするリン。

「なんでリンが驚いてるの」

「いやだつて京都行くつて言つてたし……」

リンはちよつと勘違いしてるな。たしかにボクにとって旅はとても大事なことだけど、もうそれだけじゃないんだ。

「旅はいつでもできるでしょ？　けど、リンとここでするキャンプは今この瞬間しかできないし、そつちのほうはずつとずつと大事だよ」

あとでもできることと、今しかできないこと、どつちのほうが大事かなんて言うまでもない。

あおいもそう言つてたしね。

「そ、そつか……」

ちよつと恥ずかしそうに、でもそれでいて嬉しそうに口元を緩めるリン。

うん、やっぱり断らなくてよかった。

「か、勘違いしないでよ！　あ、あくまでリンについて行つたほうがおいしいもの食べられそうつてただけだもんね！」

自分で言つててガバガバすぎる言い訳に呆れる。

というかそもそも言い訳にすらなつてない気がするのはいのせいだと思いたい。

「も、もう行くよー！」

「はいはい……ふつ、ちよろい奴だぜ」

「聞こえてるからー！ あ、そうだ」

あれって持ってきてきたのかな。ポケットをがさごそしてヘッドセットを出す。いつもの癖で持ってきてしまったのだ。

「あ」

リンとボクが同時に声を出す。

ボクの手にあるものと、リンの手にあるものは全く同じだった。

なんだ、考えてることは一緒か。

「リンも持ってきてたんだ」

「なんか、いつものノリでポケットに突っ込んだ」

「あ、それボクも」

……

……

……

「「ふふふ」」

なんだかおもしろくて、二人で同時に笑う。やっぱりいいなあ、こういうの。

「じゃ、リン前お願いねー」

「んー」

二人一緒に歩き出す。カモメが一羽、空をゆったり飛んでいた。

「ちなみにキャンプ場っていくら？」

「3540円」

oh……

シュツシュツシュと、リンがナイフで細い薪を器用に削っていく。

木目に沿ってナイフを入れられた薪が、まるで羽毛のようにくるりと丸まって薪の先端に集まっていく。

「へえ、器用だね」

「フェザースティックって言うんだって。薄いからめっちゃ火点くらしい。これであいつはリストラだな」

あいつ……松ぼっくりのことかな。たしかに、こんなものがあれば必要ないかもしれない。

「よし……完成」

そんなこんなで見ていると、あつという間に三本のフェザースティックができあがった。

「なんか、羽毛っていうか花みたいだね」

「たしかに、ちよつと彼岸花っぽいかも」

出来上がったスティックをバーナーの火で着火させる。あつという間に花のような部分が小さくない火に包まれる。

「わ！ すごく燃えた」

「これを薪につつこんで……」

リンが火のついたスティックを蒸し器に乗せた薪の中に突っ込んでいく。

すると、みるみるうちに火が大きくなって、あつという間に暖かい焚き火になった。

風に炎がユラユラと揺らぎ、つんとした煙が鼻をくすぐる。キャンプの匂いだ。

「こんなにすぐ点くなら、たしかに松ぼっくり君いらねいね」

いいなこれ。ボクもナイフ買って真似してみようかな。

さらば松ぼっくり！ 君のことは忘れないからな！

「にしても、やつぱは双葉の焚き火台いいな。風通しいいから空気送らなくていいし、幅広
いから薪あんまり割らなくていいし」

リンが薪を燃やしている焚き火台……のように見える蒸し器（250円）を感心した
ように観察する。

「そうだよ、うちの蒸し器君はすごいんだよ」

「でも蒸し器なのか……」

でも蒸し器なんだよ。

最近の百均ほんとすごいな。ボクみたいなクソザコキャンパーの救世主だよ。

めらめら燃える炎に手を当てて暖を取る。

「やつぱ焚き火って言ったらこれだよね」

「うん」

二人で椅子に座って焚き火にあたる。

ここは御前崎から40キロほど走ったところにあるオートキャンプ場。すぐそこが海だからか、風に乗って潮の香りが漂ってくる。

「あつちのほう人すごいね」

海辺のほうに目を向ける。色とりどりのテントや車が所狭しと並んでいた。

「みんな初日の出見にきたんでしょ」

「あ、そっか。リン、だからここにしたらんだ」

「うん、でもちよつと高いよね」

「……たしかに」

年末はお母さんの仕送りもお年玉仕様になるからお金はいっぱいあるんだけど、やっぱり気になる。

「早太郎、残念だったね」

「……うん」

ボクはここに来る前に寄った神社に祀られていた一匹の犬のことを思い出していた。霊犬早太郎。

ボクはよく知らないけど、リンいわく、なんでも昔悪い妖怪かなにかを退治したありがたいワンコらしい。

ボクとリンが寄った神社では、実際にその早太郎の三代目が飼われていたらしいんだ

けど、とても残念なことに数年前に亡くなってしまっていた。

生き物なんだから、当たり前のことなんだけど、ちよつと悲しくなってくる。

「斉藤ともラインで話したけどさ、どれだけ仲良くしても、いつかはお別れしなきゃいけないんだよね」

「まあ、生き物だからね……」

リンはたぶんちくわのことを言っているんだろう。ちくわはチワワ。犬の中でもとくに小さい品種だ。

犬はぬいぐるみとは違う。

小さいってことは、当然寿命も短いわけで、いつか絶対お別れする日がやってくる。

「双葉はさ、そういうことどう考えてる？」

リンの瞳が焼き火の炎でゆらゆらと揺れる。

どう考えているか、か。難しいな、こういうことはあまり考えたことがない。

「こういうことは、なでしこくらいにしか言ったことないけど、リンならいいか……リンってボクの家のことってあんまり知らないよね」

「……まあ、そんなには。その話がどうしたの？」

「まあ聞いてよ。ボクの家さ、ボクが小さいころお父さんが出て行っちゃったんだ」

理由はよく覚えてない。喧嘩をしてたわけでも仲が悪かったわけでもなかったと思う。

わかつていることは、お互いの生き方が致命的に違ってしまった。ただそれだけ。「そう、なんだ……」

焚き火で赤く照らされたリンの顔が曇る。こういうことを話すのはリンが二人目か……

普段は言えないようなことも、火の前にすればすんなりと言える。焚き火にはそんな不思議な力がある。

「それで、もう今じゃどこにいるかもわからなくてさ。ある意味ボクたちの中では死んじゃったのと同じなんだよね」

例え生きていたとしても、もう二度と会えないのなら、それは死んでいるのと同じようなものだ。

ボクは誰かと死に別れたことはないけど、別れがどういうものかは、なんとなくわかるつもりでいる。

「辛くて悲しくて、頭の中がなんでもって言葉でいっぱいになって、それがいつまでも離れなくて、息を吸うのも嫌になるくらいショックで、なにもかもが怖くなって……」

小さなボクにはあまりにも大きすぎて、受け止めることができなかつた。

「でも、それでもお腹は空くんだよ。食べたくないって思ってるのにお腹がぐーぐー鳴ってるさいつたらありやしない。で、そういう時にかぎってご飯がすっごくおいし

いんだ」

何日もご飯が喉を通らなくて、やっとの思いで食べた炊き立ての白いご飯。

熱くて口の中を何度も火傷したけど、今まで食べたご飯の中で一番おいしかった。

「たぶんさ、生きるってそういうことなんだよ」

どんなに悲しいことや辛いことがあっても、お腹は空くし、眠くなる。

それはきつと身体が心に生きろって、言ってくれているんだとボクは思っている。

つまりはそういうことだ。

「つて、話ずれちゃったね」

けつきよくボクはなにが言いたかったんだらうか。

別れてもめげるなって言いたかったんだらうか。それともそういうものだと思え入れろって言いたかったんだらうか。

考えてもわからない。言葉って、難しいな。たぶん、一生わかることはないんだらうな。

「……ううん、そんなことないよ」

リンが優しくに微笑んで、ゆっくりとボクの頭に手を伸ばした。

ぼふんとリンの手がボクの頭に乗せられて、サワサワと髪を撫でまわす。

「リン?」

ボクが名前を呼ぶと、リンが優しげに目を細めた。

「なんとなく、こうしたくなつたからじゃダメ？」

まるで子供あやすように、リンが優しくボクの頭を撫でていく。すりすりと撫でられるたびにじんわりと心があつたくなつていく。

こういうふうに使われたのは、すごく久しぶりな気がする。

「……ううん、ダメじゃない」

なんだかすぐポカポカして気持ちよくて、思わず目を細める。

さっき言ったことは、もうとつくの昔にただの思い出になっている。あの時はたしかに辛かつたけど、今はそうじゃない。

けど、リンの優しさがボクはすごく嬉しかった。

「……リン、大好きだよ」

「はいはい、わたしも好きだよ」

焚き火と風の音に紛れてリンの声はよく聞こえなかつたけど、リンがなんて言っているのかはだいたい予想がついた。

ぐうぐうと突然変な音がなつた。それも二重に。まあ、だいたいなにかは想像がつく。

「お腹すいたね」

「そろそろご飯にする?」

「えへへ、だね」

お互いに顔を見合わせる。そして、にっこりと笑う。夕陽が沈む。今年もあと少しで終わろうとしていた。

14—2

まず初めに感じたのは、冷たさだった。

まるで、シャーベット状の氷水が顔に張り付いたような、そんな冷たさだ。

ボクはこの冷たさをよく知っている。

「……朝？」

ぼんやりとした意識が冷たい空気で覚醒していく。寝袋のジッパーを下ろしてのそのそと起き上がった。

「ふあゝ よく寝た」

テントの布の向こう側はまだ真つ暗だった。でも、どこか新鮮な匂いのする空気が朝だとボクに教えてくれた。

「5時半か」

腕時計のバックライトを起動して時間を確認。うん、いつもどおり時間ぴったり。

「やむ」

テントの冷気にあてられ思わず身震い。まあこれでも野宿に比べればなんてことないんだけどね。

「ヒーターつけよ」

ライトを引つ張つて灯りを点けて、インナーテントの入り口とベンチレーションを開きバーナーとヒーターを準備する。

コックを開くとシューつとガスが放出されて、点火スイッチを押すとボウツと青白い炎が立ち上った。

コツヘルに水を汲んでヒーターの上にかける。

「あつたかあ〜」

真つ赤に光るヒーターに手を近づけると、焚き火とは違うじんわりとした暖かさが手と身体をあつためてくれた。

波の音と風の音しか聞こえないテントに、バーナーの音がこだます。

どうせだしコーヒーでも入れるか。荷物から道具を一式取り出して豆を挽く。

ガリガリガリガリ、ハンドルを回すたびに黒っぽい粉が容器の中にたまっていく。

静かな時間。一人だけの至福の時。

よく、コーヒーは豆を挽くのが面倒だという人がいるけど、ボクはこの時間が好きだ。たぶん、求めているものが違うのだろう。

早すぎず遅すぎず、一定の速度でハンドルを回す。しばらく回していると、唐突にハンドルから手応えが消えた。

ミルのネジを回して容器に溜まった粉をドリッパーに注ぐ。縁を指で叩いて粉をならす。

ぶくぶく音がする。沸いたみたいだ。火を止めてマグカップに熱湯を注ぎ、そのお湯をさらにケトルに注ぐ。

これで湯ざましは十分。マグカップにドリッパーをセットして粉にお湯を乗せるようにそつと注ぐ。

きっかり20秒待つて抽出を始める。

抽出されたコーヒート、注ぐお湯が同じ割合になるように、注ぐ早さを調整。

もくもくとした白い湯気に乗って。焙煎された豆のフルーティーな香りがテントの中に立ち込める。

コーヒートというのは本当に奥が深い。

湯温、抽出速度、粉の荒さ、使う道具。

人それぞれにこだわりがあつて、同じ豆を使って同じ道具を使つたとしても、同じ味には決してならない。

ある意味じゃ、キャンプと似たようなものかもしれない。

外でテントを張つてご飯を食べて寝る。

字にすればたったこれだけのことなのに、そこに至るまでの過程が本当に千差万別だ。

とにかく安くすませる人、ありとあらゆる道具を持ち込んで家にいるよりも贅沢に寛ぐ人、料理に情熱をかける人、そもそもテントすら使わない奴。

あ、それはボクか。

まあとにかく色々な考え方ややり方があつて、どれが正しいとか間違つてるとかじゃなくて、それこそ人それぞれ。

そんなふうには自由だからこそ、ボクはキャンプを好きになつたのかもしれない。

そんなことを考えながら、できあがつたコーヒーをすすする。すつきりとした苦味。そしてその奥にある微かな甘み。

うん、今日もおいしいコーヒーを淹れられた。

「ずず……うま」

キャンプ場で飲むコーヒーってなんでこんなにおいしいんだろう。家となにも変わらないはずなのにね。

「リン、そろそろ起きたかな」

フライシートを開いて外に出る。太平洋で冷やされた冷たい風が身体を包み込む。

「さむ……」

わざわざこんなところまで来て寒い思いをして、あつたかいコーヒーをすすする。

言うなればセルフマツチポンプ。

けど、そんな非合理の塊が楽しくてしかたがない。

不安や寂しき、身の毛もよだつような冷たい空気。

そんなネガティブすらスパイスになってポジティブに変わっていく。

旅は大好きだけど、キャンプも同じくらい大好きだ。リンや千明たちがあそこまで入
れ込む理由もよくわかる。

「あとちよつとで初日の出か……あ、リン起こさない」と

たしか6時までにはキャンプ場から少し離れたところにある海岸で日の出を見るつ
て昨日言っていたのを覚えている。

今はもう5時40分。リンのテントからはなんの物音もしない。これたぶん寝てる
な。

疲れてるだろうし、寝かせてあげたい気持ちもあるけど、寝てたら起こしてくれつて
リンに頼まれてるし、起こすとしますか。

「リンー、朝だよー」

テントのジッパをそつと下げてテントの中に顔をつっこむ。

「……すう……すう」

寝袋に包まって芋虫みたいになったリンが小さな寝息を立てて転がっていた。

「リン、もうすぐ日の出だよー」

しーん……

反応なし。高ボツチ行つた時のも思つたけど、リンつてもしかして朝弱いのかな。

いや、慣れない海沿い走つてつかれてるだけか。

「リン、リン」

テントの中に入って寝袋の上からリンの肩をそつと揺らす。

スタイルがいいからあんまり小さく見えないけど、こうして触つてみるとやっぱりちつ

こいよなあ。

と、そのちつこい子よりもさらにちつこいボクが思うのだった。

「よる、ごはん……くえなくなつても……しらないからなあ」

寝言だ。あれかな、クリキヤンの時の夢でも見てるのかな。楽しかったもんね。

「ふひひ」

スマホをパシャリ。寝顔をこつそり撮影。

もうちよつと見ていたい気もするけど、いい加減起きてもらおう。

「リン、リン、もうすぐ日の出だよ」

リンの肩がピクリと動き、目をしょぼしょぼさせてボクを見てくる。やっと起き——
「ん〜 あと5分……」

なかった。なんてベタな……じゃなくて。本当に起きてくれないと困る。

「……しようがないな」

スマホでユーチューブを開いてお気に入りの動画から一つの動画を再生。音量はもちろんマックスで。

ブウォンブウォンという、金属を叩いたような独特の爆音。

ヤマハ・RZ250のエキゾーストサウンドがムーンライトテントの中で大反響する。

「うおっ!?! な、なんの音!?!」

「あ、起きた。おはよー」

「え、なんて!?!」

ブウォンブウォン鳴ってるせいでお互いの声が全然聞こえない。再生を止める。辺りがしんと静まり返った。

「おはよリン、あけましておめでと。リンが起きないから、もう初日の出終わっちゃったよ」

「あ、うんおはよ……うえ!? ほんと!?!」

半目だったリンの目がくわつと開いて寝袋から飛び起きる。

そして、テントの入り口の隙間から見える空を見てボクにジトーっとした目を向ける。

「……って、外真つ暗じゃん」

「うそだよー」

ぽかっ。そんな音がしそうな感じでリンがボクの頭を叩いた。ちなみにまったく痛くなかった。

「犬山さんの真似すんな」

「ふひひ、びっくりした？」

「したわ。めっちゃしたわ。本当は何時なの？」

「5時45分。初日の出は7時だから今から準備すれば大丈夫だよ」

「あ、もうそんな時間なんだ。ごめん起こしてもらって。着替えるから待ってもらって……」

「うん。あ、コーヒー淹れるねー」

「おねがい」

「はい」

敬礼の真似をしてテントから出る。東の空が少しだけ明るくなっている。

もうすぐ日が昇る。新しい一年が始まる。

「さっきの爆音なに？」

「ユーチューブのお気に入り動画」

「……大丈夫？」

なにが!?

ビーノのテールランプが、赤い尾を引いて暗がりの道路を駆けていく。

東の果ての空はほんの少しだけ明るくなっていて、これから始まる新しい年の幕開け

を告げていた。

『なんか、むこうより全然あつたかいよな』

「山梨寒いもんねー」

千明たちは今ごろ初詣かな。甘酒おいしいだろうなあ。あとで買つとこ。

『海沿いとか風すごかつたけど、双葉は平気だった？』

「ボクのバイクはタンクにしがみつけるから、そこまでじゃなかったかな」

下半身全体でしがみつけるバイクと座るだけのスクーターじゃどうやっても安定性に差が出るんだろう。

作られた目的が違うからどっちがいいってわけでもないけど、走ることをメインで考えるならやっぱりバイク一択だ。

『そうなんだ。わたしスクーターだから最初振り落されるかと思ったな』

「いきなり突風が吹いて、気づいたらセンターラインギリギリだったってこともあるから、気をつけてね」

カーブでバンクしてる時に突風が吹いて、強制的に垂直に戻させるのやめてほしい。ほんとに怖いから。

『こわつ。わたしも免許取ったら双葉とかアヤちゃんみたいな原付バイク買おうかな』

「楽しいよー原付バイク。ギア操作めっちゃ忙しいよー」

ちよつと遅くなつたら3にして、すぐに4に戻して、坂になつたら2にして、ビーチやんに乗っていると、左足が本当に忙しい。

パワーバンドが狭いから、状況に応じて適切にギアを入れないとすぐに流れに置いていかれる。

けど、それが乗りこなしている感じがして楽しい。

『マニユアルか……なんかめんどいな』

「じゃあカブとかいいんじゃない？ あれなら自転車みたいな感じでギア変えられるよ。オートマの免許で乗れるしね」

『え、そうなの？』

「うん、だってあれ手動のクラッチないもん。今ならクロスカブとかハンターカブとか新車で手に入るし、けっこういいんじゃない？ 荷物もいっぱい積めるし、悪くないと思うよ」

『カブか……ちよつと考えてみよつかな』

リンはなんとなく将来SRとか乗りそうな気がするけど、カブに乗ってるリンも見てもみたい気がする。

『ま、高校出るまではこいつでいいや』

風切り音の向こうでリンがそう言った。

ちよつと優しげな声色。リンもきつと、ビーノのことを大事に思っているんだろうな。

「やっぱり、自分の乗ってるバイクが世界で一番のバイクだよね」

『……ちよつとわかるかも』

「だよね」

ギアが入りづらくても、エンジンがかげづらくても、坂道でパワーがなかったとしても、ボクにとって世界で一番のバイクは、このビーちゃんなのだ。

たぶん、どのバイク乗りもそう答えるだろう。

非合理で見栄っ張りで走ることしか頭にない。

バイク乗りは、けつきよくそういうどうしようもないバカしかいないのだ。

『あ、見えてきた』

ウインカーを出したビーノが小道の中に入っていく。この先が福田海岸。リンが選んだ初日の出スポットらしい。

どんな日の出が見られるのかな。楽しみだな。

「よし、到着つと」

すでに何台もの車が停まっている砂利の駐車場の隅にお互いのバイクを停めてエンジンを切る。

熱々のエンジンが出すパチパチという音を聞きながらヘルメットを脱ぐ。

「さむっ」

しんと静まり返った世界。防風のために植えられた松の木が、潮風でカサカサと揺れる。

「この先？」

「うん」

リンの後ろについて暗がりの砂利道を歩く。

暗くてわかりづらいけど、よく見たら松ぼっくりけっこう落ちていた。風で飛ばされたのかな。

「リン知ってる？ 松ぼっくりって食べられるんだって」

「そうなの？」

「うん、ジャムにするんだってさ」

「それ、うまいの？」

「けっこうおいしいらしいよ。見た目もラズベリージャムみたいに真っ赤だったし」

「へえ、どんな味なんだろ」

「なんか作った人の感想だと、新築のログハウスの味だったさ」

「なにそれ」

「ボクもわかんない。今度作ってみようかな。できたら毒見お願い」
「ぜったいやだ」

話しながら歩くと、開けた砂浜に出た。海岸だ。

一面に広がる灰色の砂浜。

太平洋のはるか彼方から押し寄せる波が灰色の砂とぶつかって泡立ち、また海に帰っていく。

「そういえば、向こうもう雪降ってるんだってね」

ボクは昨日ラインでみんなとしたやり取りを思い出してリンに言った。

「なでしこのやつ、めっちゃテンション上がったな」

「浜松じゃ雪降らないだろうしね」

今ごろ雪だるまでも作ってるのかな。いや、今は配達の間か。

そうして踏みごたえのない砂を歩いていると、砂浜の向こうに小さな鳥居が見えてきた。

よく見ると、周りにはけっこういう数の人たちが浜の向こうの太平洋を眺めていた。

「リン、すごいところ見つけたじゃん」

法事にはお寺にお墓参りに行って、新年には神社にお参り。クリスマスにはみんなパーティーをするくらい信仰心しかないけど、この光景はなにか感じるものがあった。

た。

が、しかし――

「ジー」

チャリティー賽銭箱……

鳥居の下に置かれた賽銭箱にデカデカと貼り付けられたプリント。

なんか……なんだろう。もつとこう、風情とかそういうの、考えないんだろうか。

「まあ、日本っぽくていいんじゃない？」

「そういう問題なのか？」

「わかんない」

でも、こういう適当な感じって嫌いじゃない。変に荘嚴な雰囲気になれるより、これくらい俗っぽいほうが親しみやすい。

「邪魔になるし、離れよっか」

「だな」

鳥居から少し離れたところで日の出を待つ。もうあと10分もしないうちに日が昇るだろう。

もうすぐ、新しい年が始まる。

「ほんと、今年……もう去年か。いろんなことあったなあ」

リンがしみじみと呟いた。

リン、なでしこ、綾乃、斉藤さん、鳥羽先生、リンのお母さんとお父さん、新城さん

……

たった二ヶ月でこれでもかかってくらいのお会いがあった。

本当に実りのある一年だった。

「不思議だよ。リンとなでしここと出会ってから、まだ二ヶ月しか経ってないって」

「そっか、まだ二ヶ月なのか」

たった61日。日数にすればそれだけ。けど、たったそれだけの時間でいろんなことが変わった。

友達ができた。好きなものが増えた。

つまらないと思っていた日常が、少しだけ楽しくなった。

これから先どんなことが起きるかはわからないけど、この思い出は一生、ボクの心に残るだろう。

それはそれは、色鮮やかな思い出になるに違いない。

水平線の向こうが燃えるように光っている。

あと少し、ほんの少しで日が昇る。

まだ。

まだ。

まだ。

「……あ」

誰かが呟いた。その時だった。

目の前が眩い光で覆われる。

赤、オレンジ、白。地球のいろんなものをごちや混ぜにして、一つのガラス玉に閉じ込めたような、そんな綺麗な輝きが世界を明るく照らしていく。

日が昇る。新しい年が始まった。

「あけおめ、リン」

「あけおめ、双葉」

にっこり笑って互いの拳をぶつける。

ほすん、綿の入ったリンの手袋が、そんな音を立てた。

ピコン！ スマホが鳴る。そうだ、みんなにも言わないとね。

双葉：あけおめー！

今年はどうな一年になるのかな？

「じゃ、帰るか」

その言葉に無言でうなずいてバイクに戻るために歩き出す。帰ったらすぐに荷物を片付けて出発しないと。

「……あ」

リンがつぶやいて立ち止まる。視線の先に目を向けるとなにやら人だかりができていた。

よく見ると、櫓のような建物から人がなにか投げていて、それを集まった人が必死にキャッチしようとしている。

「餅投げじゃん」

「あ、そういうことか」

……

……

……

無言で顔を見合わせる。

「勝負だー！」

同時に駆け出す。ちなみに負けた。

「よしつと。これで準備かんりよー」

買い替えたばかりのネットで荷物をきつく縛っていく。

「もう行っちゃうの?」

リンがちよつと名残惜しそうにボクを見る。

日も昇ったばかりの朝のキャンプ場で、ボクは出発の準備をしていた。

心地よい太陽の光がボクの身体を包み込む。今日はきつと気持ちよく走れるに違いない。

「もつとゆつくりしてけばいいのに……」

「ごめんね。こればかりは性分だからさ」

リンがキャンプをせざるをえないように、ボクも旅をせざるをえない。

そういうふうになまれてきてしまったのだ。

「ごー」

「そ、そんな目で見ないでよー!」

ちよつと心が揺れてきちやつたじゃないかー! どうしよ、やつぱ残ってリンと一緒に

に帰ろっかな。

って違う。ボクは旅をしにきたんだ。

「いくからね！　ほんとにいくからね！」

ボクの頑なな態度にリンも観念したのか、肩をすくめて微笑む。

「……わかった。道、気をつけなよ」

「はい」

「ついたらちゃんと連絡しろよ」

「わかった！」

「ガソリン足りなさそうって——」

「もう、わかったってば——」

リンのジトーっとしたプレッシャーに負けないように、ビーちゃんのキックペダルを蹴り飛ばす。

ブルルンと音がしてすかさずアクセルを煽る。

やかましい金属音が鳴り響いてマフラーが煙をペペペと吐き出す。

忘れ物なしと、チェックアウトもすませたつと。よし、出発だ。

「じゃ、またねー」

「あっ……」

名残惜しそうな顔をするリンを一瞥してビーちゃんを発進させる。

目指すは京都。清水の舞台がボクを待っている！

「いくよー！ ビーちゃん！」

2ストロークの元気なエンジン音が新年の道路にこだます。

しばらく走っているとポケットのスマホが震えた。メール？

ウィンカーを出してビーちゃんを路肩に停める。

綾乃：あけおめー！

双葉：あけおめー!!

綾乃：リンちゃんから聞いたよー 今浜松の近くいるんだってね

綾乃：迎えにいくから弁天島のコンビニ集合なー

え、あの……旅……

15話 タカラトミー 人生ゲーム 4, 378円(税

込)

15—1

湖沿いの国道301号線を時速50キロで流していく。

湖とは言っても、浜名湖は海と繋がっている汽水湖。風に乗って漂ってくる匂いは、若干の潮の香りが混じっている。

バイクで走っていて一番楽しいのは峠だけど、一番気分がいいのは海だとボクは思う。

青だったり黒だったり、時には緑だったり、荒れ狂っていたり穏やかだったり、海は行くたびに違う顔を見せてくれる。

雨と錯覚するような波飛沫。吹き飛ばされるんじゃないかってくらいの強い風。容

赦なく照りつける日差し。

大自然の強烈な息吹。バイクは自然とともにあってこそだ。

「ほんと浜松に縁あるよなあ、ボクって」

ここに立ち寄るのはこれで3回目になるのかな。しかも前に来てからまだ一ヶ月も経ってない。

「早く綾乃に会いに行こ」

たしかなでしこも2日に浜松にくるらしいけど、ボクは今日中には出発する予定だし会うのはちょっと難しいかな。

リンもそろそろ帰ってるころだろうし、旅をしているのはいよいよボクだけか。

スロットルを捻る。エンジンが力強く唸り世界がさらに加速していく。

「でもちよつと回転数上がりすぎだよなあ」

元氣よく回ってくれるのはいいんだけど、速度に対していささか回転数が多すぎる気がするがしてならない。

これでもフロントスプロケットを交換して大分マシになったけど、やっぱり余り気味だ。

この状態だとリッター30キロしか走れないし、そろそろリアのスプロケットを交換してもいいかもしれない。

そうだ。どうせならチェーンも交換しよう。タイヤ交換はしたことあるしたぶん大丈夫だ。

「あ、見えた」

弁天大橋を渡りながらビーちゃんの新たな改造計画を考えていると、いつものコンビニと浜名大橋が見えてきた。

「もういるし」

歩道で綾乃がキョロキョロとあたりを見回している。手を振ってアピール。

「おーいー」

あ、気づいた。こっちに手振ってる。浜松は山梨ほど寒くないのか、パーカーにショートパンツとずいぶんと薄着だ。

リンもそうだけど、ボクの周りの人ってなんであんなにお洒落なんだろ。ボクなんてズボン二枚重ねなのに。

自身のクソザコファッションを嘆きながらコンビニの駐車場に入り、綾乃のエイプの横にビーちゃんを停める。

「わっ!?!」

エンジンを止めて降りた途端に左腕が重くなる。
なにかと思つて見てみたら綾乃が肩に手を乗せていた。

「久しぶりー双葉」

につこりと綾乃が笑う。その笑顔を見ると、ボクも自然が心が暖かい気持ちになつていく。

「ひさしぶりー つてまだ一週間しか経つてないじゃん」

「え、そうだっけ？ まーいいじゃん。あ、そうだ」

ボクの腕から手を離して姿勢を正す綾乃。だいたいなにをしたいのか、想像がついた。

ボクもヘルメットを脱いで姿勢を正す。

「あけましておめでとーございます」

ペコリとお辞儀。そして、顔をあげて二人でふひひと笑いあう。

やっぱりこういうのいいな。なんか、新しい年が始まったって感じがする。

「双葉、これからどーすんの？」

「えつと、ちよつとゆつくりしたら出発しよーかなつて」

「えーせつかく遊びに来たんだし、一緒にキャンプしよーよー」

このパターンに見覚えがあるぞ。リンには負けてしまったけど、今回は屈さないぞー

!

ボクはノーと言える人間なのだ!

「こつからすぐの島にいいキャンプ場あるんだ。フリーサイトで一泊420円」

「やすー!」

え、420円って。嘘でしょ、いくらなんでも安すぎない? しかも島つてことは口

ケーションは最高クラス。

やばい、めっちゃ気になる。

「双葉焚き火台持つてる?」

「うん」

蒸し器君は煤まみれでボクの鞆の中にビニールぐるぐる巻きになっている。洗い場あつたら軽く洗ってあげないと。

「よかった。ならお肉買って二人でバーベキューでもしよーよ」

「うん! いいよ!」

わーい! 正月バーベキューだー!

……

……

……

あれ？

「ふうふう」

ま、いつか！

なんだか流されている気がしてならないけど、どうせ休みもまだあるから平気平気。

そうやって、自分に必死に言い聞かせていると、ブーブーとスマホがポケットで震える。

リンだ。なんだろう。

「ちよつと電話でるね」

「はいよー じゃあコンビニで飲み物買ってきますか」

コンビニの自動ドアに吸い込まれていった綾乃を見送りながら電話に出る。

「もしもし？」

『あ、やつと繋がった。今どこいる？』

スピーカーから聞こえるリンの声はどこか焦っているようにも聞こえた。なにかあったのかな？

「ごめん。ずつと走ってたから気づかなかった。えつと、今浜名湖の弁天島ってところ。

綾乃も一緒だよ」

『アヤちゃんも？ ああ、浜松だもんね。そっか、まだ遠く行ってなくてよかった』

電話越しのリンの声がほっとしたように息をはいた。

『それで聞いてほしいんだけどさ、お母さんからさつき電話あつて今雪で身延とかそこから辺の道ほとんど凍っちゃってるんだって』

「え!?! うそ、ほんとに?」

路面凍結つて、雨の日のマンホールとならぶバイク死亡フラグの一つじゃないか。

「もしかして、南部町のほうもやばい感じ?」

『うん。お母さんがなでしこの家に確認してくれたみたいんだけど、そっちもやばいみたい』

「ええ……」

雪が積もったならともかく、凍結となるとホームセンターでタイヤチェーンでも買ってとはいかないか……

どうしよ。帰れないじゃん。冬休み終わるギリギリまで粘れば溶けてるかな?

『それでさ、わたしの家三日におじいちゃんが遊びにくるんだけど、お母さんがそのこと話したら行きがけにわたしたちバイクごと拾ってくれるってなつたみたい』

「え、新城さんが?」

バイクごと拾うって、どうするんだらう。軽トラでも使うのかな。三人も乗れるのか

な？

『うん。で、わたし三日まで浜名湖のめっちゃ安いキャンプ場ですごすことにしたんだけど、双葉も一緒にどうかなって』

あれ、それってもしかして今から綾乃と行くところじゃない？

「そっか。そういうことなら合流したほうがよさそうだね。先に行ってるからキャンプ場の住所送ってよ」

『わかった。じゃあわたしも出発するから切るね。アヤちゃんにも伝えといて。あと、お母さんが双葉のことめっちゃ心配してたから、時間があつたら電話してあげて。詳しい話もお母さんなら知ってるだろうし。電話番号知ってたよね』

「うん、大丈夫だよ」

実は志摩家の連絡先は全て持っているのだ。まあ、持っているっていうか、持たされたって言うべきか。

しょうがない、前科一犯（ガス欠立ち往生遭難未遂）だもんね。

正直他の家だったらしばらく外出禁止になるレベルのやらかしだ。ボクの家が超放任主義で助かった。

『よかった。ならわたしもう行くね。ついたらまた電話するよ。じゃ』

「またね」

「ブツリと電話が切れる。まさか道路が凍るなんてなあ。これじゃあ帰ってもしばらくバイク乗れないなあ。」

でも、本当に助かった。ボク一人だったら冗談抜きで詰んでた。帰ったらちゃんとお礼しないと。」

「戻ったよー」

「あ、綾乃」

「へいパス」

両手に缶のお汁粉を持って片方をボクに投げってくる。片手でキャッチ。手袋越しでも熱々の缶を頬に当てて暖をとる。

「ありがとう」

「プルタブを開けて甘ったるいお汁粉を飲みながらお礼を言う。」

「そういうえば、誰と電話してたの？」

「リンとね。なんか向こう雪で道路凍っちゃったみたいで、バイクで帰れないんだって」

「え、やばいじゃん」

「のほほんとしてた綾乃の表情が一変して心配そうにボクを見てくる。」

「あ、大丈夫だよ。なんか、リンのおじいちゃんかリンの家に来るついでにバイクごと拾ってくれることになったみたい」

「そっか、よかった。ってことはリンちゃんと一緒に帰るってこと？」

「うん。おじいちゃんが来るのが3日みたいで、それまで浜松でキャンプするんだって」

「おおうー じゃあ三人でキャンプだ」

「さつきキャンプ場の住所送ってくるって言ってたから……あ、来た」

話しているとスマホが鳴ってリンが行こうとしているキャンプ場の場所が送られてくる。

「やっぱりそうだ。ボクたちが行こうとしてるキャンプ場だよ」

「やった。リンちゃんとキャンプだ」

「綾乃も一緒にキャンプするって送っとくね」

メッセージを送信するけど、既読は一向につかない。たぶんもう走りだしちゃったんだろうな。

御前崎からここまでだいたい60キロだから、リンのビーノならだいたい昼頃には到着する予定か。

「じゃあ、ボクたちもそろそろ行こうよ」

缶を傾けて最後の一滴を飲み干す。

「あ、ちよつと待って。3日まで浜松いるんでしょ？ なら明日はうちに泊まるーよ」

「え、わ、わる——」

「聞こえなーい聞こえなーい。あ、もしもしお母さん？　今双葉と弁天島いるんだけどさ——」

ボクが話す前に綾乃がスマホを取り出して家族の人と話始めてしまった。

「うん、そゆこと。じゃーねー 双葉、家おつけーだつてさ」

あつという間に明日の宿が決まってしまった。なんとという決断力と行動力。さすが琵琶湖までついてくるだけのことはある。

「あ、ありがと。でも、本当にいいの？」

「気にしすぎだなーもう。なでしことかよくうちに泊まりに来てたし、一人や二人なんてことないよ」

ボクはこういう経験がほとんどないからよくわからないけど、よくあることなんだろうか。

「そっか。ありがと、じゃあ短い間だけとお世話になります」

ペコリとお辞儀。

「そんなかしこまらなくていいって。双葉にはいろいろしてもらったしき、これくらいなんてことないよ」

「え？　ボクなにかしたっけ？」

せいぜい琵琶湖に連れていったりしたくらいだ。たいそうなことなんてなにもして

ない。

「あ、うん。やっぱ無自覚か。ま、そういうところが好きなんだけどねー」

「え？　え？」

「こつちの話。時間もあれだし、ちやつちやと出発しよーよ」

「あ、うん。だね」

今ひとつ釈然としないままビーちゃんに跨る。ここから一キロっていうくらいだから、本当にすぐそこだろう。

どんなとこなのかな。ちよつと楽しみだ。

綾乃がヘルメットを被ってエイプに跨る。同じようにボクもヘルメットを被ってビーちゃんに跨る。

「じゃ、行きますかー」

綾乃の言葉を合図に、蹴り飛ばされるキックペダル。

4ストと2スト。ホンダとヤマハのエンジンが冬の弁天島に鳴り響く。

「ほんとに420円だった……」

「言ったでしょ。安いって」

コンビニから十分もしない距離にある渚園キャンプ場でチェックインをすませる。

綾乃が言ったとおりに信じられないくらい安かった。昨日リンと泊まったキャンプ場が高かったからありがたい。

「じゃ、わたし家にキャンプ道具取りに行ってくるねー」

「なにも持っていないのにキャンプするって言ってたんだ」

「どっかの誰かが言ってたんだ。旅は行き当たりばったりが一番だって」

「……それボクじゃん」

「ふひひ、しーらない。じゃ、1、2時間で戻るからその間ゆっくりしてなよー」

じゃーねーと言って、綾乃のエイプが煙を吐きながら去っていく。

潮の匂いのする静かなキャンプ場にボク一人がポツンと取り残される。

「行っちゃった」

なんか、新年に入ってから次から次へといろんなことが起きるな。去年まではそんなことなかったから、ちよつと楽しい。

「よーし、テント張るかー」

あ、その前に咲さんに電話しないと。

スマホを出して咲さんのアドレスをタッチ。

ちよつと前のボクなら信じられないことだけど、もう昔のボクじゃないのだー！

耳元でプルルと発信音が鳴る。そういえば、友達の家族に電話するのって、これが初めてな気が……

『もしもし？ 双葉ちゃん？』

あ、やばい繋がっちゃった。

「あ、あのあの、ふた、双葉、でです!!」

いつもどおりの噛みまくりのセリフ。

知ってた。だってボクだもんね。この清々しいまでのクソザコムープ。懐かしいなあ。

って、なに懐かしさに浸ってんのさ！ 早く要件言わないと！

「え、えっと、リンさんから道路が凍っちゃってるって聞いたんですけど、そんなにまずいですか？」

『やばいわね。わたしでもこれはちよっと……』

「わたしでも？」

『なっ、なんでもないわ！ そ、そうね、かなり深く凍ってるし、バイクで走るの難しいわね』

「そうなんですか……南部町もひどいですか？」

幹線道路なら凍結防止剤とかも撒かれているだろうし、そこまで深刻なことにはなっ

てないと思うんだけど……

『各務原さんに聞いてみたんだけど、大通りとか日当たりのいいところは大丈夫みたいよ。でも白鳥神社あたりがけっこう凍ってて、車でもちよつと危ないレベルみたい。これからどんどん冷えてくし、完全に溶けるまでしばらくかかりそうね』

山梨寒いからなあ。咲さんの話からすると冬休み終わるまではバイクで走るの無理だろうな。

『それでね、もうリンから聞いてると思うんだけどうちのお父さんが3日にこつちに来るんだけど、そのこと話したら車で二人のバイク拾っていつてくれることになったのよ』

「それはとてもありがたいんですけど、車で2台も大丈夫なんですか？」

新城さんを信じていないわけじゃないけど、原付2台を載せられる車はけっこう限られる。

『あ、それなら大丈夫。詳しくは聞いてないんだけど、なんでも知り合いのツテで大きな車借りれるみたいよ』

大きな車。普通自動車で乗れるトラックかな。

トラック借りれるツテってなんだろうって思うけど、あの人ならどんな人脈を持つてたとしてもボクは驚かない自信がある。

「あ、そうなんです。すいません。お世話になります」

『そんなに畏まらなくてもいいわよ。わたしたちは二人が無事に帰ってくればそれで十分なんだから』

「咲さん……」

やっぱりこの人はすごく優しいな。志摩家の人たちはみんな優しくて大好きだ。

『それに、こうでも言わないと双葉ちゃん道路が溶けるまでその辺ぶらぶらするって言い出しかねないし』

「咲さん……」

信用ないなあボク。まあ、まったくもってそのとおりなんだけどね！

いや、これはある意味信用されているのかな？ なんかいやな信用のされかただな。

『わかっているとは思うけど、バイクって本当に危ないのよ』

咲さんの声は本当に心配している様子だ。ちよつと大袈裟かなって思わなくもないけど、親つていうのはそういう生き物なのだろう。

『乗つてる時はなんでもできる気になつてついつい無茶しちゃうけど、それが命取りなの。双葉ちゃんも調子に乗つて雪道とか走ったりしちゃダメよ！ 楽しいのは最初だけ。どうせすぐ転んで終わりだから』

「は、はこ」

なんだろう。話に妙に実感がこもっている気が……

もしかして咲さんって……いや、この先はやめておこう。本人は秘密にしたがついてい
るみたいだし。

『とくに双葉ちゃんのバイクは古いしブレーキも両輪ドラムだからあんまり効かないで
しょ？ たしか旦那の話だとけっこう年代ものって聞いたんだけど、ブレーキシューは
大丈夫？ 中古だと交換なんてしてないだろうし、かなりすり減ってるんじゃないかし
ら？ もしちよつとでも効きが悪いと感じたなら早めに交換したほうがいいわよ。交
換したらハブのオーバーホールとシャフトのグリスアップは絶対に忘れちゃダメ。と
くにシャフトは念入りにね。汚れたまま組んだら絶対固まるからとくに注意してちよ
うだい』

なにを言っているかはわかるけど、怒涛の早口に額に冷や汗が流れる。

咲さん、隠したがってるんじゃないかな……

いや、たぶん素で言ってるんだらうなあ。

『とにかく、古いバイクはちゃんと面倒見てあげないとすぐに機嫌悪くなるから、双葉
ちゃんも気をつけてね』

「は、はい……」

『あと、リンと合流したら電話するように伝えてくれないかしら？ あの子ほつとくと

すぐ連絡サボるのよね』

なんか、すごいわかる気がする。

リンってああ見えて意外と適当っていうか、その場のノリで行動するところあるからなあ。

まあボクも人のこと言えないんだけどね。

『とにかく、なにかあったらすぐ電話するのよ。それじゃあリンのことよろしくね』

「はい、いろいろありがとうございます。ではこれで」

『はい。あ、あと双葉ちゃん』

「はい?」

『……さっきのこと、む、娘には内緒にしておいてくれないかしら?』

恥ずかしそうなか細い声。なんとなく咲さんがどんな顔をしてるのか想像がついた。

「あ、やっぱり乗ってたんですね」

正直志摩一家を見ていると意外でもなんでもない。一族レベルでバイク乗っててもボクはなにも驚かない

『ほんとに! ほんとに言わないでね!』

「べつにそんなに恥ずかしがらなくても……ちなみになに乗ってたんですか! やっぱリヤマハのSR? それともカワサキのWとか——」

『お、大人をからかわないの！ もう切るわね！ 風邪ひかないようにね！』

「あつ、ちよ……切れちやつた。ふふ」

志摩家の意外な一面を知って思わず笑う。咲さんもけつこう恥ずかしがり屋なんだな。やっぱリンにそっくりだ。いやこの場合はリンがそっくりなのかな。

「リンももうじきくるだろうし、テント張りどつとと終わらせるぞー」

行き当たりばったりなニューイヤートラベル。ボクの心のアルバムにまた一つ思い出が刻まれようとしていた。

15—2

「さて、と」

テントを張り終え手についた汚れを払いひと息つく。

「焚き火でも熾そっかな」

焚き火を眺めながらコーヒーでも飲めば、きつと最高の時間を過ごすことができるだろう。

「なんて、薪ないんだけどねー」

そもそもここでキャンプする予定なんてなかったから、薪なんて買ってない。

たしかキャンプ場の受付で売っているのを見た気がするけど、またあそこまで戻るのもちよつとめんどくさい。

「ま、いっか」

焚き火を早々に諦めブックオフで買ったメーカーもわからないアルミのチェアを出

して腰掛ける。

これ背もたれが低くて微妙に使い勝手が悪いんだよなあ。バイト代入ったらリンの使ってるみたいなのゆったり腰掛けられるやつ買おかな。

今度、千明かあおいにおすすりでも聞こう。

「うん。そうしよう……そう、だな……それが……いいよね……」

日差しを遮るものがないにもないせいか、妙に暖かくて頭がだんだんぼうつとしてくる。

今度はリンも一緒にカリブー行って……それから……ダメだ。頭が回らない。

クリキヤンが終わってから、バイト以外ほとんど出かけていたからオーバーワークになっちゃってるのかな。

遊んでいのにワークってのも変な話だけどね。

「リン……いつ、くるのかな……」

頭が重い。思考にもやががかかったみたいになろうつとする。

「さんになできやんぷして……あしたになつたらなでしこと……」

ぐらぐら、ぐらぐら。世界が揺れる。あ、これ本当にやばいやつだ。

「はやく……みんなに、あいたい、な……」

沈んでいく。

.....

.....

.....

『へえ、御前崎かー わたしも行ったことあるよ。すっごい綺麗だよねあそこ』

『アヤちゃんは正月どっか行くの?』

向こうのほうで話し声が聞こえて、唐突に目が覚めた。

目を開ける。視界に飛び込んできたのはテントの天井だった。この形、ボクのテントだ。

『わたしはほとんどバイト。正月だからってコンビニは休んでくれないしね。それにえーちゃんのガソリン代も稼がないとだし』

『えーちゃん? あのバイクのこと?』

『そ、かわいいでしょ』

綾乃とリンが話している。あれ? ボクたしか外のチェアで座っていたような……

身体を動かすと自分の身体に毛布が被せられていることに気がついた。二人がテントに運んでくれたんだろうか。

『なんか双葉みたいだね』

『うん。ぶっちゃけ真似してるだけだし』

『そういえば双葉ってまだ寝てるのかな』

『ちよつと覗いてみる?』

芝生を踏む音が近づいてくる。ボクは半ば反射的に毛布を頭に被って寝たふりを決め込んだ。

ジッパ―をゆっくり降り降ろす音が聞こえる。

「……まだ寝てるな」

「今朝会った時も疲れてるみたいだったし、寝かしといてあげよーよ」

「だね」

ジッパ―がまた閉められる。どうしよ。つい反射的に寝たふりしちやっただけど、かえって起きづらくなっちゃったな。

『わたしたちがテントに運んでも全然起きなかったし、よつぼど疲れてたんじゃない』

『あいつ、そんななのに京都まで行こうとしたのか……起きたらちよつと説教だな』

『リンちゃん心配性だなー』

『べつに心配っていうか……あいつって、なんかいつもフラフラしてて目離すといなくなっちゃいそうっていうか』

リン、ボクのことそんなふうに思ってたんだ。フラフラしてるか……たしかにそのとおりだな。

『あ、それなんかわかるなー 双葉ってちよつと……いやだいが変わってるよね』
なんか散々な言われようだ。ボクってそんなに変わってるのかな？

山梨から琵琶湖まで原付で行ったり、宿代ケチってその辺で野宿するようなそんなどこにでもいる女子高生なのに。

うん。十分変人だな。

『ボツチだったとか言ってるくせに平気で大好き大好き言ってくるし……なでしことかもそうだけど、ああいうタイプの人って周りにいなかったから、ちよつととまどってる』
あれ、そんなに大好き大好きって言ってたっけ。あれくらい普通な気がするんだけどな。

『でも、やじやないんでしょ？』

『……うん。わたし、昔から人と話すのあんまり得意じゃなくて、一人にいるほうが多くて、それ自体はべつに嫌じゃなかったんだ』

『……うんうん』

『でもたまに学校とかで仲良さそうにしてる人たち見ると、なんでああいうふうにできないんだらうなって思うときもあってさ……』

ボクたちみたいな人種にとつて、一人でいることは決して寂しくはない。

けど、周りを見ているとどうしても思ってしまうのだ。なんでボクはあの人たちみた

いにできないんだらうって。

そっか、リンもボクと同じこと考えてたんだ。どうりで最初から気が合うわけだ。

『なんていうか、なでしこと双葉に会ってからどんどん世界が広がって、苦手だったグルキャンとかも好きになれたし、アヤちゃんともこうして友達になれたし……感謝してるっていうか……』

『ようは好きってこと?』

『……ま、まあ、そういうこと。もう！ 恥ずかしいからこの話やめようよ!』

や、やばい……今まで黙って聞いてたけど、これ面と向かって言われるよりずっと恥ずかしい。

これ以上ボクの話されたら恥ずかしくて爆発しそうだ。

そうだ。もう起きよう。それっぽい感じでごまかせばきつと大丈夫だよね!

身体を起こしテントから出る。ジッパーを降ろすと椅子に腰掛けていたリンの背中がびくりと跳ねた。

「ふあーよくねたー」

「お、起きてたんだ」

心なしか顔が赤いリン。ここで聞いてたなんて言っちゃったらさすがに悪いな。

「あ、リンきてたんだー」

「おそいぞ、ねぼすけー」

「えへへ、気持ちよくてつい。そういえばテントに移してくれてありがとうね」

「けっこー重かったんだぞー　こりや報酬に期待するしかないね」

　　そういえばまだ綾乃に浜松餃子のお返ししてなかったな。

　　……そうだな、あれにしよ。ふっふっふ、きつと驚くだろうな。

「リンもありがと」

「う、うん。身体とか冷えてない？」

「大丈夫大丈夫。こう見えて丈夫だから」

「……のわりにはぐーぐー寝てたけどな」

「そ、それはー」

　　じとーつとリンがボクを見つめる。言い訳はしないほうがよさそうだ。またリンが

激おこ状態になったらたまったもんじやない。

「すっごい気持ちよさそーに寝てたよ。写真見る？」

「……いや、いや」

「あ、わたし見る」

「いいよー　ラインで送るね」

「しよーぞーけーん！」

いやまあべつにいいんだけどさ。減るもんじやないし。

「そうだ。そろそろお昼にしようよ。お肉家から持ってきたよー」

綾乃がガサゴソと荷物から肉を取り出す。肉っていうか、焼き鳥だ。しかもけっこう量がある。

「ありがとアヤちゃん。あ、わたし餅持つてるからそれも焼こうよ」

初日の出の餅投げでゲットした餅かな。

ボクは人混みに弾かれてぼつかりで全然取れなかったのに、リンつてば知らない間に両手に抱えるくらい集めてて本当にびっくりした。

孤高のソロキヤンガールの名は伊達じやないってことか。

「いいじゃん。ちよつと遅めのおせちだ」

「焼き鳥っておせちなのか……」

「おせちっておいしいでしょ。焼き鳥もおいしいでしょ。なら焼き鳥はおせちって言っても過言じやないんだよ」

「それただ食べたいだけだろ」

綾乃の暴論にリンが笑う。ボクの知らない間にずいぶんと仲良くなったみたいだ。

「じゃ、双葉も起きたことだし、正月バーベキュー、やりますかー！」

「おー！」

年明けの弁天島にボクたちの楽しげな掛け声がこだまする。

「「とける〜」」

大浴場にボクと綾乃とリンの声が湯気に溶けていく。

「やっぱ冬っていつたらこれだよなあ」

「わかるー」

「ざくらく〜」

三人で肩を並べて湯船に浸かる。

正月バーベキューを堪能したボクたちは、弁天島のコンビニのそばにあるホテルの温泉にお邪魔していた。

例によってケチンボのボクだけ渋ったけど、リンの昨日風呂入ってないだろの一言であえなく撃沈した。

女の子にそのひと言は効くよ……

まあその気になれば一週間くらい風呂入らなくても平気なだけだよ。

こんなんだから女子力低いんだよボク。少しはリンとかあおいを見習ったほうがいいな。

「あ、双葉。言い忘れてたけどなでしこからライン来て明日なでしこのおばあちゃん家に泊まらないかだつてさ」

「え、ほんど？」

「そういえば明日からなでしこもこっち来るんだっけ。すっかり忘れてた。」

「うん。ずっとキャンプ場にいるのもお金かかるし——」

「ごめんねーリンちゃん。双葉はわたしが先に予約してるんだー」

綾乃がリンの言葉に被せるようにそう言った。

「だよねー双葉」

ボクの右となりの綾乃が肩にもたれかかってくる。濡れた髪のひんやりとした感触が肩に伝わる。

「……そうなの？ 双葉」

「あ、うん。そうだよ」

「気のせいかな？ リンがちよつとムツとしているような気が……」

「へえ……そうなんだ」

「あの、なんでそんな声低いの？」

「そ、だから双葉はわたしがもらつてくねー」

「も、もらうつて……あ、またリンの顔が険しくなった。ど、どういふことなの？」

「ていうか、アヤちゃん明日バイトじゃないの？」

「うん、夕方から」

え、ボクの間どうするの？ まさか、綾乃の家に置いてけぼり？ 嘘でしょ？

「その間、双葉どうするの？ 言っとくけど、双葉のことだしどうせ絶対やばいことになるよ」

リン、言ってくれてありがとう。でも、どうせはいらなかつたなーなんて。

まあその通りなんだけどさ。

「だよね。双葉」

「え、あ、うん」

いきなり話を振られて曖昧な返事をしてしまう。

「ふーん……」

綾乃が目を細める。

なんかさつきから二人とも怖いんだけど、どうしちゃったんだろ。

「じゃあさ、こうしよーよ。バイト終わるまではなでしこのおばあちゃん家。終わったら迎えに来るってことで」

「……まあ、それなら」

「双葉もそれでいいよね？」

「へ？ あ、うん、いいよ」

ボクを挟んで勝手に話が進んでいく。

勘違いだとは思うんだけど、心なしかボクを二人が取り合っているような……

いや、そんなわけないよね。取り合う意味がわからないし。あはは。

「ずるいなーリンちゃん」

「え、それってどういう……」

「秘密だよー」

今ひとつ釈然としないまま話が途切れる。ほんと、二人ともどうしたんだろう。キャン
 プで疲れたのかな？

「冷たっ!？」

うえ、水滴顔に垂れた。

「うーん、眠れない」

真つ暗なテントの天井をじーっと見つめつぶやく。

つけたままの腕時計を見ると、もうすぐ11時になろうとしていた。いつものキャン
 プだったらとつくのとうに寝ている時間だ。

「昼寝しすぎた……」

二人がテントに運んでくれたおかげでぐっすり寝てしまったみたいだ。

おかげさまで頭はぼつちり冴えてて、眠気のねの字すら頭に浮かんでこない。

「いいや、起きよ」

これ以上寝袋にくるまって唸つても埒があかないので起きちやおう。

どうせ明日はなでしこが来るまですることないし、ちよつとくらい夜更かししたって大丈夫だ。

寝袋から身体を出してランプを灯すと、オレンジの光がテントの中に大きな影を作った。

「……さむ」

横になる直前までヒーターで暖めていたテントはとつくの昔に冷え切っていた。ま
とわりつくような寒さが全身を包む。

ケチつてもしかたないし、ヒーターつけよ。いつものように準備をすませバーナーに
火を点ける。勢いよく炎が噴出され熱気がテントに充満した。

「なにか飲み物……たかくらで買ったお茶でも淹れよつかな」

店員さん（リンの知り合いらしい）のおすすめで買った煎茶とケトルを準備する。

あ、急須ないじゃん……そうだ。あれ試してみよう。

荷物からいつも使っているドリッパーとフィルターを用意して、粉の代わりに茶葉を入れる。

あとはお湯が沸くまで待つ。たしか85度くらいだったはず。てことはぶくぶく沸騰する手前で淹れないとダメってことか。

「これ、本当においしいのかな」

ネットで聞き齧った知識だからあんまり信憑性がない。

「ま、たまにはこういうのも——」

「夜更かししてたら大きくなれないぞー」

「ぴゃあああ!?」

なんか出たー！

いつのまにかテントの入り口が空いていて、漆黒の闇の中からぬるりと綾乃の顔が

……

「つてなんだ、綾乃か」

驚いて損した。

「なんだつてなんだよー 人が暇潰しで来てあげたつてのに」

「暇潰しなんだ……」

そういうしている間に綾乃がお邪魔しまゝすと云つて中に入つてきて、ボクの真横に座った。

「やっぱ双葉のテントあつたかいなー」

「もしかして、それが目的？」

「あ、バレちゃつた？ 実は寒くて起きちゃつてさ。星でも見よーかなつて外出たら双葉のテントが明るくなつてたから、もしかしてつて思つて」

たしか今の浜松の気温は2度くらい。風を遮るような木々や建物がないこのキャンプ場はなかなか冷え込む。

琵琶湖の時は疲れ切つていたから寝れたんだろうけど、今日はとくに疲れるようなこともしてないだろうし綾乃が起きちゃうのも無理はない。

「それで、なにしてんのー？」

「御前崎で買ったお茶飲もうつて思つて。綾乃も飲む？」

「うん。ありがと」

「わかつた。あ、そろそろかな」

ケトルに張つたお湯の気泡が大きくなって湯気がモクモクと立ち込める。

沸騰にはもう少し時間がかかるだろうけど、お茶を入れる分にはちよいどいい温度だ

ろう。

火傷しないようにハンカチでケトルを掴み、コツヘルにセットしたドリツパーにお湯をそつと乗せる。

「へえ、なんかコーヒーみたいだね」

「ネットに載つてて、ちよつと真似してみようかなつて。ボクも初めてだけどね。コーヒー道具でお茶淹れるのなんて」

「普通は急須かティーバッグだもんね」

茶葉がお湯を吸つて膨らみ、煎茶の瑞々しい香りがテントに充満する。すごいいい匂いだ。

「なんか、森の中にいるみたい……」

「これで1分待つてと……」

ジャスト1分きつかり待つてお湯を注ぐ。コポコポと煎茶がコツヘルの中に溜まつていく。

そして、最後の一滴をコツヘルに落ちるのを見届けてドリツパーを下ろす。

「よし、完成……あ、コップある？」

「テントにある。けど、回し飲みでいいよ。取りに行くのめんどいし」

「うん。そうだね」

マグカップにお茶を注いで綾乃に差し出すと綾乃がちよつと驚いたように目を開く。

「え、双葉が先飲みなよ」

「だって、寒くて起きちゃったんでしょ？ だったら先に飲んだほうがいいよ」

「ふふ、ほんと双葉らしいな」

「え、なんの話？」

「なんでもー ありがと。じゃいいただきま〜す」

「ずずずとお茶をすすする綾乃。味はどうなんだろうか。ドリツパーで淹れた煎茶とか想像ができないんだけど。」

「ど、どう？..」

「.....うん。すつこいおいしい」

「本当においしいのか、綾乃の口元がわずかに緩む。よかった。大丈夫みたいだ。」

「はい、ありがと」

「マグカップを受け取ってボクもお茶をすすする。うん、家にあるお茶なんかより全然おいしい。」

「買って正解だった。たかくらの店員さんに感謝しないとな。」

「こーうしてストーブ焚いてお茶すすすつてるとき、こーこがテントの中だつて忘れそうにならない？」

「わかる。ちよつと快適すぎるよね」

肩をくつつけあつて交互にお茶を回し飲みしながら、他愛もない話に花を咲かせる。

キャンプのこういう何気ないひと時がボクは本当に好きだ。

「もつとおつきなテントだったらくつろげるんだけどなー」

物によつては中で薪ストーブ焚いたりできるらしい。まあそこまでいくと車じやないが無理だろうけど。

「そう？ わたしはこれくらい狭いほうが落ち着くけどなー」

「そうは言つても肩とかぶつかつちやうしき」

お互い隅つこに陣取ればスペースは確保できるけど、ちよつとでも動こうとすると肩だの足だのがバシバシ当たつてしまう。

琵琶湖に行った時もそれでちよつと苦労した。

「わたしはべつに嫌いじゃないよ。なんかこういうのつてワクワクするじゃん」

「あ、それボクもわかる気がする」

身の毛もよだつ寒さ。一寸先すら見えない暗闇。家とは違う圧倒的に不便な環境。

そんな一歩間違えば不快になるような要素も、キャンプというエッセンスを加えるだけで途端に非日常というエンターテイメントに変わる。

わずらわしさすら楽しい。本当キャンプつていうのは旅と同じくらい奥が深い。

「でしょー?」

「不思議だよ。家族でもないのに隣で寝たり一緒に風呂に入ったり」

友達だけど、それ以上の関係でもあるって言うべきか。ボクにはうまい言葉が思いつかないけど、なんだかとっても心地よい。

「あーあ、わたしも山梨に住んでればよかったのになー そしたら双葉たちといつでも遊べるのに」

「そんなの、呼べばいつでも来るって」

「ほんとにー? あ、やっぱいいや。よく考えたら大して遠くないし」

「あ、たしかに」

「たかが150キロだし、ちよつとツーリングすればあつという間に走ってしまう距離だ。」

「三学期始まつたらまた遊びに行くよ。今度はなでしこも誘ってさ」

綾乃がにつこりと笑う。

「うん!」

だからボクもにつこりと笑う。

話が途切れて、しばらく無言でお茶を飲みあう。そんな時間すら心地がいい。

「双葉……ずっと言えなかつたけど、ありがとね」

「えっと、なにが？」

いきなり身に覚えのないお礼を言われてとまどう。

記憶を掘り返してみてもボクが綾乃になにかしたような記憶はない。

「わたしさ、なでしこが引越してからずっと遠くに行っちゃったなって思ってた、けっこー寂しかったんだよね」

「そっか……そりやそうだよね」

ボツチだったボクには想像できないけど、綾乃の顔を見ればどれだけ寂しかったのかは想像に難くない。

「小さいころからずっと一緒にでき、一緒に遊んだりいたずらしたり、たまには喧嘩したりしてさ……このまま大きくなるまでずっと一緒になんだろうなって、思ってたんだ……」

「……うん」

ランプに照らされた綾乃の目はどこか昔を懐かしむかのように遠く見ていた。

「けど、いきなり離れ離れになっちゃってさ……しかも山梨なんてめっちゃ遠くにだよ」綾乃、きつとすごい寂しかったんだろうな。

「ほんと、引越しちゃったばかりのころは最悪だったよ。ぽっかり穴が空いたみたい
な気分」

「辛かったね……」

「えへへ、ありがと。それで、バイクがあればなでしこにも会いに行けるのかなって思つて、免許取つたりしたんだけど、けつきよく怖くて会いに行けなくてさ……」

やっぱり、初めて会つた時寂しそうだなと思つたのは気のせいじゃなかったんだ。

「そんな時になでしこから山梨の友達がバイクで来るって聞いたからびっくりしたよ。なにかの冗談かなって思った。で、ダメもとで探してみたら本当にいたからもつとびっくりした」

あの時はみつともなく驚いてたけど、それはボクだけじゃなかったってことか。

「それで、いろいろ双葉の話聞いてるうちにわたしも双葉みたいに怖がらずにどこにも行けるようになりたいなって思つて、無理言つて琵琶湖に連れてつてもらつて、その時思つたんだよね。なんだ、山梨めっちゃ近所じゃんって。なんであんなに寂しがってたんだろーって」

綾乃はそう言つてそれはそれは嬉しそうに笑つた。今日一番の笑顔だった。見惚れてしまうようなそんな笑顔だった。

「だからありがとーって話」

につこり笑いながら、ボクの肩に頭をこてんと乗せてくる。ボクと同じシャンプーの匂いのあるサラサラの髪が首に当たるせいで少しくすぐったい。

「えっと、どういたしまして？」

言いたいことはなんとなくわかったけど、大したことをした自覚がないので曖昧な返事しかできない。

「あ、その顔全然わかってないな—」

「あ、バレた?」

「だってめっちゃきよとんつてしてるんだもん。絶対分かってない人の顔じゃん。ま—いいけどね。双葉がそういう子だつてわかつてるしさ—」

そういう子つてどういう子なんだろうか。ちよつと気になるけど、わざわざ聞くのは野暮つてものだ。

綾乃がボクを優しいと思つてくれているのなら、ボクはそんな綾乃が信じたボクを裏切らないために、精一杯生きるだけだ。

「ほんと、ずるいな—リンちゃん—」

綾乃がボソツと呟いた言葉はバーナーの轟音でかき消されて聞こえなかった。

「なんか言つた? 綾乃—」

「ううん、なんでも。あ、そうだ。双葉つて高校卒業したらどうするとかつて決めてる?」

「いきなりどうしたの? えつと、普通に進学するつもりだよ。さすがにどこにするとかは考えてないけど—」

本栖高校は別に進学校でもなんでもない普通の高校だから、そういうことはあまり考えたことがなかった。

そういうば他のみんなはどうするつもりなんだろうか。やつぱりみんなも進学かな。

「そつか。じゃあ決まったら教えてよ。わたしもそこ目指すからさ」

「え!? そういのはちゃんとちゃんと決めなきやダメだよ!」

さらつととんでもないことを言われて慌てて言い返す。高校ならともかく、大学をそういう理由で選ぶのはよくないと思つたからだ。

「言つとくけど、こー見えても真面目に考えてるからなー それでさ、もし一人暮らしするならルームシェアとかしよーよ」

「まあ、それくらいならべつに」

仮に東京の大学に進学するつてなつたら一人だとなにかと不便だろうし、気心の知れた友達と一緒にのほうが助け合えるしそこまで悪い考えじゃないかもしれない。

とはいえまだ先の話だ。さつきから話が飛躍しすぎている気がするけど、どうしたんだらう。

「お、言つたなー! 忘れるなよー!」

「うん。ぜつたい忘れない」

誰もが寝静まつたキャンプ場で、二人だけの約束をする。

約束の時になったら、ボクたちはどうなっているんだろうか。まあ、きつと大して変わってないんだろうな。

話が終わり、ボクたちの間に決してどこか心地よい沈黙が訪れる。

綾乃のこともっと知れて、すごく嬉しかった。だってそれだけボクに心を許してくれたってことだから。

「なんか、お茶飲んだら眠気飛んじやったね」

「こりや夜更かしだなくと綾乃が笑いながら言う。

「まあ、カフェイン入ってるし」

ほうじ茶にしておけばよかったかな。いや、おいしいからいいか。

「アニメでも見る?」

「お、見る見る」

「どうせだし、リンも起こす?」

「もう熟睡してるだろうし、寝かしといてあげようよ」

ボクもリンと同じ立場だったら寝かせてほしいと思うだろう。

「だね」

見つめ合ってにひひと笑う。なんだか悪いことをしてる気分だ。ちよつとワクワクする。

「なに観よつかなく　なんか見たいのある？」

「なんでもいいよー　双葉が好きなので」

ボクが好きなの……あれにしよ。女子高生が南極行くやつ。

「わたしだけ喋りっぱなしなのもあれだし、双葉の話も聞かせてよ。見ながらでいいからさ。正直めっちゃ気になる」

「いいけど、大して面白い話できないからね」

「いや、たぶんそう思ってるの双葉だけだと思っようよ」

こうして、時間はどんどん過ぎていく。明日はなでしこもやってくる。きつとにぎやかになることだろう。

そうだ。なにかお土産でも買っていかないと。

ボクは、アニメを選びながらそんなことを思うのであった。

15—3

「うなぎ、うなぎ、うなぎ……」

リンが歩きながらぼそりとつぶやく

右を見る。うなぎ屋さん。左を見る。うなぎ屋さん。

ここは静岡県浜松市館山寺。気持ちのいい風の吹くのどかな町をボクたちは三人でゆつくりと散策していた。

「すごい、うなぎ屋さんばかりだ」

「浜松ってうなぎけっこー有名なんだよ。食べてく？」

「いや、無理」

綾乃の言葉にリンが即答する。まあ、普通に考えてそんなもの食べたらお財布が即死しちゃうもんね。

三人でキャンプをしてから一夜明け、なでしこ合流するために佐久米駅に向かって

いたボクたち。

その道中、リンがなでしこのおばあちゃん家に持つていくお土産を買いたいと言つたので、綾乃の勧めもあつて館山寺に向かうことにしたのだ。

「11時くらいだつて。なでちゃん来るの」

「うん。昨日ラインで言つてた。双葉、今何時？」

腕を出して時計を見ると、二人がボクを挟むように時計を覗き込んでくる。

「まだ9時半か。駅まで30分くらいだし、まだ時間あるね」

「せっかくだし、いろいろぶらぶらしてこーよ。案内するよー」

ここのう時、地元の人がいると本当に心強い。

「おねがいます」

「はいよー」

にへらと笑う綾乃についていく。コツコツと三人の足音が浜松の町に響き渡る。

「つて言つてもわたしもここあんまし来たことないけどね」

「みんなそんなもんじゃない？」

生まれた時から住んでる町でも、意外と知らない場所があつたりする。今度一人で南部町でも散歩しようかな。

そんなことを考えながら町を散策する。

「なんか、いい雰囲気だね」

「わたしも嫌いじゃないな、こういうの」

ボクの言葉にリンがうなずいた。

道幅の狭い道路。蜘蛛の巣みたいに張り巡らされた電柱。ポツンポツンと点在する飲食店や電気屋。

そしてその隙間から覗くスカイブルー

ごちゃごちゃしているのどこかさっぱりした雰囲気が、浜名湖の気風にマッチしている気がする。

当たり前だけど山梨とはまるで違うな。

見たこともない大自然をバイクとともに駆け抜けるのもいいけど、こういう知らない町を散策するのも旅の醍醐味のひとつだと思う。

「そういうえば、昨日の夜二人でなにしてたの？」

「あれ、リン起きてたの？」

ずっと二人で話してたりアニメ見てたりしてたからまったく気がつかない。なんだ、起きてたなら誘えばよかった。

「トイレ行こうと思って外出たら、テントが明るくなって、二人の影が見えたから。まあ、寒いから寝ただけ」

「あはは、リンちゃんらしいや」

なでしこ、千明あたりだったら目を輝かせながらずかずか入り込んできそうなものだけど、そこはリンだ。やっぱりブレない。

「なんでもないよー お茶飲んだら眠れなくなっちゃって二人でアニメ見てただけ」
綾乃がなんてことないように言った途端、リンの雰囲気少し変わった。

「……ふうーん」

じとつとしたどこか湿り気のある目でボクたちを睨むリン。

「り、リン？」

「へえー 二人でこっそりアニメ楽しんでたんだ。へえー」

リンが光のない目でムスツとする。あ、これ怒ってるやつだ。

「あ、あはは、ごめん」

「こ、今度キャン普する時はリンも呼ぶね」

「……絶対だからな」

しようがないなといった感じでリンが肩をすくめる。ちよつと悪いことしちやつたな。今度はリンも絶対誘おう。

「アニメか……そんなことしてたなら行けばよかったな」

ちよつとだけ拗ねたようにプイツと顔を背けるリン。

悪いことをしちやっただとは思っているんだけど、なんだか今のリンはいつもよりずっと幼く見えて、ちよつとかわいいと思つてしまった。

「ごめんごめん。でも、意外だなー リンちゃんつて、初めて会つた時はもつとクールな子かと思つてたのに」

ボクも綾乃の言葉にうなづく。初めて会つた時は、いい意味でも悪い意味でももつとドライな感じだった。

「今のリンちゃんつて、志摩リンつていうかしまりんつて感じだよー」

「いや、同じだよ」

違うんだなーリン。志摩リンとしまりんは似ているようで全然違うんだよ。

「あ、それボクもわかる」

思わぬところで同志が現れた。たぶんこの場になでしこがいたら同じように思つてくれることだろう。

「双葉もか。もう勝手にしろよ」

口調こそぶつきらばうだけど、口元が緩んでいてどう思っているのかすぐわかる。ボクが変わつたみたいなのに、リンもちよつとずつ変わつてきているのかな。

昔のリンもかっこよくて好きだったけど、今のリンはもつと好きだ。

もつともつと柔らかくなつて、ふにやふにやしまりんになつちやえばいいのに。

「で、リンちゃんなに買いたいんだっけ」

「えっと、しず香ってとこのいちご大福」

「あれかー あれおいしいんだよねー」

「いちご大福……」

　　そういえば最近食べてないなあ。苺大福。ボクも買っちゃお。

「リン、ボク半分出すから一緒に買おうよ」

「え、いいの？」

「だってボクもお世話になるしね。あと食べたい」

「……そっちが本音か」

「ふっふっふ、そこに気がつくか」

　　そうだ、ついでにうなぎパイも買っていこう。なでしこ、きつとよろこぶだろうな。

「ふっ……食ベすぎてお昼食べられなくなってもしらないからな」

　　ボクの言葉にリンがニヤリと笑う。

「わたしも買っちゃおうと」

　　あ、そうだ。なでしこのおばあちゃんに買っていくなら綾乃の家にも買っていけないとダメだね。

「綾乃のお母さんとお父さんって今日いる？」

「正月だしいるけどどうしたの？」

「お世話になるし、一応お土産買っておこうって思ってたさ」

「あ、そんな気使わなくってもいいよ！」

「ありがと。でもそういうのはちゃんとしなさいけないしさ」

「律儀だなー双葉は」

べつに当たり前のことだと思っただけだなあ。

かしまりすぎる必要もないだろうけど、それ相応の礼儀は必要だ。

「双葉って、そういうところけっこう真面目だね。家でお母さんとかお父さんと話す時もわたしのこと必ずリンさんって呼ぶし」

リンが言う。意識してなかったけど、思い返してみるとたしかにいつもリンさんって言うてるな。

「呼び捨てていいと思うけどな。二人ともそんなのいちいち気にしてないだろうし」

「さすがに、家族の前で呼び捨てにするのはちよつと」

咲さんの前でリンのことを呼び捨てにする勇氣はボクにはない。

ボクとリンが幼馴染とかつていうならわからなくもないけど、ボクたちはまだ知り合って二ヶ月ちよつとしか経ってないのだ。

「わたしはべつに気にしないけどな」

なでしこあたりならリンちゃんって呼ぶんだらうけど、ちゃん付けてなんか慣れないしリンには悪いけど当分はさん付けでいいや。

「なんかリンさんって言い方あれみたいだね。お義父さん、リンさんをボクにください！ 的な」

「ブフォツ!?!」

綾乃がいきなりわけのわからないことを言ったせいで、気管に唾が入ってしまう。

うえ、めっちゃ咳でる。

「おいやめろ」

「い、いきなりなに言うんだよー」

たしかに言われてみればそういうふうに見えなくも……いや、ないな。

「ふひひ」

いたずら成功とでも言いたげに口元を押さえて笑う綾乃。

「二人はさーそういうの興味ある?」

ボクたちの視線など意に介さず綾乃が当たり前のようにボクたちじゃ絶対にしないような話題をぶっこんでくる。

さすがなでしこの幼馴染。この程度の視線じやまったく動じないみたいだ。

野クルでもそういう話題になったことがあったけど、全然考えたことなかったなあ。

まあドヤ顔でバイクが彼氏とか言っちゃやうような奴に春が訪れるとは思えないけど。やめよ、自分で考えてて悲しくなってきた。

「ほらほら、言っちゃいなよー」

「べつに、興味ないな」

当然のごとくリンは即答。まあリンはキャンプ一筋だもんね。

「ボクは——」

「双葉はバイクが彼氏だろ」

「な、なんでそれ知ってるんだよー!」

なんの脈絡もなく横合いからぶん殴られて顔が一気に熱くなる。

あの黒歴史は三人しか知らないはずなのに!

「斉藤から聞いた」

「斉藤さーん!」

なんてことをしてくれただよー!

ああ、ボクの知らないところでボクの黒歴史が拡散していく……

「わたしもいいかなー今はやりたいことあるし。ていうか双葉顔真っ赤じゃん」

綾乃のケラケラとした笑い声を聞くと余計に顔が熱くなってくる。

「う、うう……」

たぶん茹でたこみたいになってるだろう顔を見られないように手で覆う。やばい、思っ出したら猛烈に恥ずかしくなってきた。

なんであんなこと言っちゃったんだろボク……

「双葉って、本当にビーちゃんのこと大好きだよなー」

綾乃の言葉に小さく顔を覆いながらうなずく。綾乃の言うとおり、ボクはビーちゃんが大好きだ。

錆びついて古ぼけた鉄の塊でしかなかったとしても、あの子はボクにいろんなものをくれた。

ある意味ボクの初めての友達と言ってもいいかもしれない。

でもそれだけが理由じゃない。

「だって、あの子に乗ったからボクは綾乃とリンと友達になれたんだもん」

もしあの子がいなかったらボクは綾乃に会うことはなかった。リンと二人でキャンプに行くこともなかった。

なんなら千明とあおいとも知り合うことはなかったかもしれない。

違うバイクに乗っても同じだったかもしれないけど、ボクの相棒は他ならぬあの子だ。

だから、あの子はボクにとっての大切な一台なのだ。

「……じゃあわたしも感謝しないとね」

そう考えると、あの子はボクの恩人と言ってもいいのかもしれない。家帰ったら洗濯してあげよ。

「そうか、双葉がバイクに乗らなかつたら、アヤちゃんとも友達にならなかつたかもしれないのか……そう考えると不思議だよな、わたしたちつて。浜松と山梨、めつちや離れてるのに普通の友達みたいに会つてさ」

「めつちや離れてる？」

「その顔やめろ。こつちがおかしいみたいだろ。この距離ガバどもめ」

「ふひひ」

リン、呆れてるところ悪いけど、ボクたちにとつては褒め言葉みたいなものなんだよ。「リンちゃんも一緒に大阪行く？」 浜松からならたつたの200キロだよ。この前も日帰りで行つてきたけどすぐだったよ」

「西のほうばかりもあれだし、東のほう行こうよ。千葉とか神奈川とか」

「それわたしだけちよつと遠いやつじゃん。ま、いいや。今度行く時誘つてよ」

綾乃はなんか誘わなくても勝手についてきそうだなと思つたのは内緒にしておこう。

「うん！ とりあえず近場で400キロくらいでいいよね」

綾乃は決定。あとは……

「じー」

「い、行かないぞ！」

「え、リンちゃんも行くよ。絶対楽しいって、ね、双葉」

「ねー」

リンに見せつけるように笑いあう。

「む、むむむ……」

リンのことを横目でちらりと見ると、目を泳がせて口をぎゅつと閉じてプルプルしていた。

我慢してる。めっちゃ我慢してる。これ、もしかしていけるんじゃない？

「わ、わたしはアヤちゃんみたいにかかないからなー！」

「じー」

……

……

……

「……………ば、場所による」

ボクたちの勢いに根負けしたのか、リンがボソリとつぶやく。そしてその呟きを聞き逃すボクたちではない。

「やったー！」

綾乃と二人でハイタッチ。三人でツーリングかけてー！

「……はあ、一日で行ける範囲にしろよ」

呆れたように肩をすくめているリンだけど、その口元はたしかに緩んでいた。よかつた。リンもまんざらでもないみたいだ。

「うーん、1日で行ける範囲だとだいたい半径500キロ圏内……仙台くらいかな」
南だつたらどこくらいだろう。やっぱり関西圏かな？

「やめろ。まじやめろ」

「あはは、冗談だよ」

「双葉が言うのと冗談に聞こえないんだよ……」

まあちよつと前なら普通に1日で行つてた距離だしね。

旅先でもう次の旅の話をする。やっぱりボクはつくづく旅が好きらしい。

話をしてたらまたビーチちゃんに乗りたくなってきた。早く目当ての物買ってなでしこと合流しよう。

ボクはさっぱりした空気が流れる街並みを眺めながらそんなことを考えた。

「到着つと」

綾乃のあとに続いて、浜名湖佐久米と名付けられた小さな駅の前にビーチちゃんを停める。

リーフブルー、ダークブルー、パステルブルー、三色の青が太陽に当てられキラキラと輝く。

エイプとビーノとビーチちゃんのエンジンがほぼ同時に切られ、辺りが途端に静まりかえった。

「なでちゃんもう来てるかなー」

「もうー時だし、来てるでしょ」

ヘルメットを脱ぎながら答える。きつと来たらすぐにわかるんだらうな。だって――

「あつ！ アヤちゃん！」

閑静な駅前、聞き覚えのある元気な声が響き渡る。見なくてもわかる。なでしこだ。

「リンちゃんと双葉ちゃんも！ おーい！」

手をブンブン振り回しながらボクたちに走ってくるなでしこ。

この子は本当にどこに行っても元気いっぱいだ。おかげで見ているこっちも元気が

湧いてくる。

「なでしこひさしぶりー 元気にしてた？」

「えへへ、各務原なでしこ！ 今日も元気いっぱいであります！」

嬉しそうに手と手を合わせる綾乃となでしこ。朝早かったはずなのに、なでしこは相変わらず元気いっぱいだ。

「いや、二人ともちよつと前に会ったばかりだろ」

「あはは」

「このやりとり昨日もボクともやったっけ。」

「えへへ」

なでしこがあんまりにも嬉しそうだから、眺めているボクとリンも思わず笑顔になつてしまう。

「あ、そうだ！」

思い出したように大きな声を出すなでしこ。うん、そうだね。あれやらないとダメだよな。

姿勢を正し四人で円を作る。

「「「あけましておめでとーございます！」「」」

みんなで同時にペコリ。こういうの、一回やってみたかったんだよなー

ボクにとつての正月って一人でテレビ見るだけの日だったしなんか新鮮。「アヤちゃん！ リンちゃん！ 双葉ちゃん！ 今年もよろしくね！」

なでしこがにつこりと笑う。

「こつちもよろしくー」

綾乃がにつこりと笑う。

「ボクもよろしく」

ボクもにつこりと笑う。

「わたしもよろしく」

リンがにつこ……ちよつとだけ口元を緩ませる。

「「じー」」

「な、なんだよ」

いや、だつてねー

「んー？ につこり顔のリンちゃん見てみたいなーって」

綾乃がボクの心情を代弁するかのようにそう言った。

「い、いいから早く行こうよ」

けど、そこは孤高のソロキャンガール。簡単には懐を開かない。

「むむむ……」

けど、こっちには対しまりん最終兵器なでしこがいるのだ。

「な、なんだよなでし——」

「えい」

「ひゃっ！」

なでしこがリンのほっぺに手を当てると、聞いたことのないような声がリンの口から漏れた。

「な、なななにすんだ！」

「だって、こうしたらリンちゃん笑ってくれるかなーって」

「だ、だからっていきなり冷えた手当ててくる奴——」

「えい」

「あ、ちよ、やめ！ あはは！」

追い討ちをかけるかのようになでしこがくすぐり攻撃を繰り返すと、リンが大きな声で笑い出した。

すごい。こんな爆笑してるリン初めて見た……

「あはは！ ちよ、や、やめ！ くすぐつ、あははは！ こ、この——」

さすがに我慢の限界が来たのか、反撃するリン。

「あ、リンちゃんくすぐつたいって〜」

「仲いいなー二人とも」

「だよー」

綾乃と一緒に二人がじゃれあっているさまを眺める。うん。仲がいいのはいいこと

「えい」

「ひゃっー!」

突然頬に冷たいなにかが突きつけられて変が声がでてしまう。

な、なに今の!?

周りをキョロキョロ見回すと、綾乃がニヤニヤしながらバイクで冷え切っているだろう人差し指をボクに突きつけていた。

「あ、綾乃ー!」

「やーいひっかかったー」

やったなこいつー! 仕返しに同じくらい冷え切っているだろう指を綾乃のうなじに押し付ける。

「うひゃ!」

「ふはは、冷たかろー!」

「やったなこんにやろー」

すかさずやり返される。あ、やめて！ 脇腹やめて！

新年の挨拶が一転して凄惨なくすぐり合いと化す。

駅の向こうで、白いゆりかもめの群れがバサバサと飛び立っていた。

「双葉ちゃんもー！ えい」

あ、うなじはやめてー！

「それでなでしこ、ここからおばあちゃん家つてどれくらいあるの？」

しばらく四人でじゃれあつたあと、ボクたちはなでしこのおばあちゃん家に向けて歩きはじめた。

「歩いて20分くらいだよ」

「あ、けっこう近いんだ」

「あと一年すればわたしか双葉が後ろに乗せていけたんだけどな」

たしかにそれだったらわざわざ歩かなくてもものの数分で辿り着ける。

けど、免許取つてまだ一年も経つてないから無理だ。捕まっちゃうしそもそも危ない。

「来年までの辛抱だね」

もつとも、ビーちゃんのシートの形じゃ二人乗りは厳しいだろうな。ステップもつけないといけない。

まあその前にパワーが足りなくて坂道すら登れないと思うけど。

「大丈夫！ 自転車についてくから！」

「あはは、それ無理だつて」

「そう？ わたしよく自転車で原付に追いつくよ」

「……マジか」

なでしこが何気なく言ったひと言にボクたちがフリーズする。

原付に追いつく。つまり少なくとも30キロ以上は出していることになるんだけど

……

なでしこの体力ってほんとどうなってるんだろ。自転車部とか入ったら優勝しそうだな。

「へ？ どうしたのみんな」

「い、いやべつに……」

「あ、あはは」

「なでしこはすごいなーって……あ、あはは」

なでしこ……恐ろしい子！

「ん？ あ、そうだ！ 三人ともお昼まだだよね！」

「うん、そうだよ」

「そういえば、朝コンビニにおにぎり食べてから何も食べてないな」

「時間もちようどいいしき、なでしこのおばあちゃん家寄る前にどつかでお昼にしようよ」

四人でそんなことを話していると思いき出したみたいにお腹が空いてきた。

バイク乗つてるとお腹空いているのとか喉乾いているのとか忘れちゃうんだよね。

「じゃあ決まりだね！ そうだ！ すぐそこにおいしいうなぎ屋さんあるから、そこにしよう！」

……

……

……

「「う、うなぎ……」」

うなぎ……それは日本を代表する高級食材の一つ。

古くから日本人に親しまれてきているけど、高すぎて滅多に食べることができないこととで有名な、あのうなぎ……

「な、なでしこ……うなぎ屋あそこのことだよ。あ、あそこ一番安くて二千円くらいし

た気が……」

いつも飄々としてゐる綾乃が珍しく口をパクパクしてあわあわしている。

「な、なななでしこ……わ、わたし今千円ちよつとしか持つてなくて」

リンも言わずもがな。ていうかなんでそれだけしか持つてないの？ さてはどつかで無駄遣いしたな。

つて、そんなことはどうでもいいんだよ。

「三人とも早く行こー！ うつなぎ、うつなぎ」

肝心の言い出した張本人はとつくの昔に頭の中がうなぎ一色になっているらしく。それはそれは楽しそうにスキップしている。

「ふ、双葉、なでしこの奴止めたほうが……」

「そ、そうだよ双葉。な、なでしこのことだからきつと平気で特上とか頼むよ」

ぶるぶる震えながら二人がボクの背中中にひつつく。こ、この二人、どさくさに紛れてボクに全部任せる気だ。

「……ちなみにいくら？」

「前行った時は4000円だった」

oh……

こつそり財布をちらり……残金32, 856円。い、今のボクなら、お母さんのお年

玉ブーストがかかっているボクなら！

「ふっ、綾乃……浜松餃子の借りを返す時が来たみたいだね」

べつにずり落ちてでもない眼鏡を指で押し上げる。

押し上げすぎて鼻に食い込んだ。痛い。

「ま、まさか双葉本当に……」

「ふ、双葉……」

ごくり。綾乃とリンがつばを飲み込む。そう、そのまさかだ。

「特上鰻重4000円かける4……合計16000円！ ボクのお年玉3万円！」

ええい！ どうせあぶく銭だー！ パアーつと使ってやるー（涙目）

「リン……綾乃……だからそんな顔——」

「あ、お金なら出かける前にお父さんが四人分くれたから心配しなくていいよー 三人

に存分にうなぎを食らわせてやれー！ だつて」

……

……

……

「あ、うん、そつか……ありがとね」

なんて気前の良いお父さんなんだ。帰りにお土産買ってかえらないと。

「まあ、その……双葉、気持ちだけ受け取っておくよ」

「ありがとねー双葉」

綾乃とリンにぽんぽんと頭を撫でられる。うう、二人の優しさが心に染みるよ……

「うっなぎ〜 うっなぎ〜」

「なでしこー！ お店早くいこー！」

でもそんなことよりうな重だあ！

「うっなぎ〜 うっなぎ〜」

「単純かよ」

うるさいリン。まあいいや。久しぶりにうなぎがたべられるぞー！

冬の館山寺に、ボクとなでしこの歌がこだまする。

ちなみにうなぎは超おいしかった。

15—4

「ここがおばあちゃん家だよ」

特上うな重を堪能したボクたちは、湖岸に建てられた一軒家の前で足を止めた。

「バイクどこに停めとけばいいかな？」

「うん？ 玄関の前に適当に停めといて平気だよ。おばあちゃん！ 来たよー」

ボクたちがそれぞれのバイクを停めている横で、なでしこが玄関の戸をガラガラと引いて中に入っていく。

少しすると、家の中からおばあさんがなでしこと一緒に出てきた。

「いらつしやい、リンちゃんに双葉ちゃん。遠いところからよく来たわねえ」

顔つきは全然違うけど、どこか見覚えのある優しげな雰囲気ですぐわかる。

間違いない。この人がなでしこのおばあさんだ。

「お、お世話になります」

「よ、よろしくおねがいます！」

こういうことに慣れてないボクと、同じくこういうことになれてないだろうリンがちよつときこちなくお辞儀する。

「あらあら、ッ(丁寧にどうも)」

さすがなでしこのおばあちゃん。ボクたちコミュ症組など相手にもならないみたいだ。

「おばあちゃん、お邪魔するねー」

「あらアヤちゃんも！ 三人ともあけましておめでどう。外寒かったでしょ？ ささ、早く中入んなさい」

おばあさんに引つ張られるようにして家の中にお邪魔する。

どこからともなく漂ってくる線香の匂い。いいな。おばあちゃん家の匂いって感じがする。

ボクのおじいちゃんとおばあちゃんは海外に住んでるから会ったことがないけど、二人の家もこんな匂いなのかな。

「うう、さむさむ」

「ほんと、さむさむだよね〜」

一切の迷いもなくこたつに潜り込む綾乃となでしこ。そりや二人にとってはこっち

が地元だもんね。

「双葉ちゃんもリンちゃんも、早くおこた入りなさいな。待つててね、すぐお茶出すから」

おばあさんにうながされてボクとリンもこたつに潜り込む。そういえば、ボクこたつ入るの地味に初めてかも。

どんな感じなんだろう。畳に座つてこたつの毛布に足を突っ込む。

「あ、あつたかあ〜」

なにこれやばい。めつちやあつたかい。温泉とはまた違った意味で身体が溶けていく。

か、快適すぎるう……

「あはは、二人ともめつちや溶けてる」

ボクたちの反応がよほど面白かったのか、綾乃が笑っている。

「はいちーず」

あ、写真撮られた。まあいいや。

「き、気持ち良すぎるう……」

横を見るとリンがボクと同じように溶けていた。ボクたちほとんど外で過ごしてたもんね。そりゃこうなるか。

「わかるよ〜こたつ気持ちいいよね〜」

「これやばい……ずっと外だったから快適すぎる」

四人で焼いて中身がはみ出たお餅みたいにくたつに溶けていく。いいなこれ、ボクの家にもほしい。今度お母さんに頼んでみよ。

「双葉ちゃん、アヤちゃんから聞いたわよ。この前奥浜名の展望台で野宿したって」

おばあさんが淹れてきたお茶を配りながらボクにそう言う。ちらりと綾乃を見る。ぶいつと逸らされた。

「ふ、双葉ちゃんあんな真つ暗なところで寝たの!? あ、危ないよー!」

と、なでしこがまったく予想通りのリアクションをする。まあ、これが普通の反応だよね。

「もう、言ってくればいくらでも泊めてあげたのに。ダメよ、女の子がそんな危ないことしちや」

「ほんとだよ。双葉はもうちよつと危機感持ったほうがいいって。なにかあつてからじゃ遅いんだからな」

「は、は、は……」

おばあちゃんとなでしことリンの一切の反論の余地もない正論になに一つ言い返すことができず小さくうなづく。

思い返してみると、我ながらとんでもないことしてるなあ。

まあかといつてやめるつもりはないんだけどね。さすがにテントなしで野宿とかはもうしないだろうけど。

「ま、双葉のお説教は後にして買ってきたいちご大福食べちゃおうよ」

「いちご大福！」

いちごというわかりやすい単語になでしこが目を椎茸みたいに輝かせる。ほんと、この子はわかりやすいなあ。

「えっと、おばあさんの分も買ってきたんで、5人で食べましょう」

「あらまあ、わざわざありがとうございます」

みんなでこたつに入りいちご大福にかぶりつく。

「……「いただきます」」

ひと口頬張ると、口の中いっぱいに餡子の甘さといちごの甘酸っぱさが広がり、さつと溶けていく。

「おいしー！」

「……うま」

「あむ……やつはここのいひごだいふくがいちはんだな」

「ほんと美味しいわよねえ。ここのいちご大福」

「ん〜 おいひい〜」

みんなが思い思いにおいしさを表現する中で、ひときわおいしそうに食べる一人の女の子がいた。

まあ、なでしこなんだけどね。

「うまそうに食いやがるぜ」

「それな〜」

こうして見ると、ほんの一年前まで大福みたいにまんまるだったのが信じられないな。

ほわほわしているなでしこを眺めほっこりしつつ二個目の大福をパクリ。お茶をすすする。

「はあく おいしすぎる〜」

「お、こっちもうまそうに食べてる。ほんと、双葉となでしこっておいしそうに食べるよね〜」

「めっちゃわかる」

「しかももう二個目だし。さつきうな重食べたばつかなんだから、あんまし食べすぎると昔のなでしこみたいにまん丸になっちゃうぞ〜」

「昔のなでしこ?」

綾乃の言葉にリンが首をかしげる。そういえばリンは知らなかったっけ。

「あ、リンちゃんには言つてなかったよね。なでしこつて中3の時までこんななんだったんだよ。ほら」

と言つて綾乃がリンにスマホを見せる。きつとボクが前に見たのと同じものを見せているんだろう。

「……え、誰？」

スマホを見てきよとんとするリン。そりやそうだ。ボクだつて初めて見た時は信じられなかった。

「誰つて、なでしこだけど」

「え!? う、うそでしょ! ほんとなのなでしこ!」

リンが珍しく目を見開いて声を荒げる。

「えへへ、お父さんとかみんなが食べさせてくれるからつい」

その言葉になでしこを除いた全員でうなづく。

正直わかりすぎてこまる。そりやこんなおいしそうに食べてくれたらつい餌付けしなくなつちやうよね。

「中3までつてことは、一年でここまで痩せたのか……」

「うん。夏休みにずっと家でゴロゴロしてたらお姉ちゃんがついに怒つちやつて」

「それから毎日桜さんに原付で追いかけて浜名湖ぐるぐるさせられたんだよねー」
「え、浜名湖ってたしか一周70キロくらいあったような……それを毎日ぐるぐるって……」

リンの言葉に思わず絶句する。70キロってそれ控えめに言っただけなのでは？

そりゃ一年で激痩せするよ。というか本当にすごいな。やり遂げるなでしこもなでしこだけど、ついていく桜さんも桜さんだよ。

いつも思うけど、ほんと面倒見いいって言うか。なでしこのことが大好きで大好きでしかたないんだろな。

「聞いてよ二人とも、ちょっとでもペース落ちると豚野郎って言いながら原付で追いかけてくるんだよー！」

「おっかねえ……」

「お陰で体力ついたんだし、ちょうどいい機会だったんじゃない？ ま、痩せてもほつぺの柔らかさはかわらないけどねー」

綾乃がそう言いながらなでしこのほつぺを摘んで引つ張る。

「あ、あやひゃん〜」

むにいつという音がしそうな感じでほつぺが信じられないくらい伸びる。すごい、お餅みたいだ。

「わ、わたしも……」

リンが反対のほっぺを引っ張るせいで、なでしこの顔がすごいことになってる。

「……めっちゃやわい」

「や、やへてよお〜」

口ではそういうものの、なでしこの顔がニッコニコだった。

「うん。仲が良いのはいいことおおお!?!」

突然横から指が近づいてきて、ボクのほっぺが引っ張られる。え、ちよ、なに!?!

「うーん、双葉のほっぺもなかなか」

横をちらりと見ると綾乃がニヤニヤしながらボクのほっぺを引っ張っていた。

「なでしこがお餅なら、こっちはさしずめマシユマロかなーリンちゃんも引っ張って
みなよ」

「……わかった」

期待に輝いた目でリンがボクのほうにも手を伸ばしてくる。

「り、りいんも!?!」

両サイドからほっぺを引っ張られ身動きが取れなくなる。

「や、やへろお〜」

「えへへ、やへてえ〜」

ボクたちがいつたいたいなにをしたんだ！ あ、くすぐりたいからやめて！
「ふふふ、あらあら」

なでしこのおぼあちゃんも微笑ましそうに笑ってないで助けてよおく
昼下がり。お茶の香りに乗って楽しげな笑い声がこだます。

「じゃ、またな」

玄関の前で、綾乃がエイプに乗りながらそう言う。

太陽はいつの間にか西の彼方に姿を隠し、月と星が夜空を彩っていた。

あれからボクたちはたくさん遊んでたくさん笑って思いのままに正月を楽しんだ。

文句なしに今までで一番楽しい正月だった。けど、人生ゲームでぶつちぎりでビリ
だったのだけは納得がいかない。

「えー もう行つちやうの？ もっと遊びたかったのに」

「そんな顔しないの。バイト終わったらすぐ戻るって。どうせ双葉のこと回収しなきゃ
いけないしねー」

「あ、そっか」

そういえば今日は綾乃の家に泊まることになってたっけ。すっかり忘れてた。どん

な感じだろう。ちょっと楽しみだな。

「えー二人ともおぼあちゃん家泊まろうよー」

「いやいや、流石に四人も押しかけちゃ迷惑だつて」

なでしこには悪いけど、綾乃の言うとおりでと思う。

「双葉、バイト終わったら迎えにいくからちちゃんと準備しとけよー」

「はーい」

じゃ、またねーと言つて、綾乃がエイプのキックペダルを蹴り飛ばす。

ブルンと音が鳴つてスロットルを回すと、4ストエンジンの少し重たい音が夜の浜名湖に響き渡り、マフラーから漏れる煙が白く濁つていく。

「じゃーねー」

「あ、待つてアヤちゃんー！」

ゴーグルをかけて今まきに出発しようとする綾乃をなでしこが呼び止める。

「んー？ どしたの」

「せっかく一回戻つてくるんだし、バイト終わったら四人で展望台行かない？」

展望台……ああ、あそこか。ボクは綾乃と出会ったあの展望台を思い浮かべた。

たしかにこの時間帯ならすごく綺麗な景色が見れるに違いない。

「展望台……うんいいね。行こうよ」

「……展望台？」

唯一事情を知らないリンだけがキョトンとしていた。

「すつこくいいところなんだ！ リンちゃんも絶対気に入るよー」

なでしこの言うとおり、リンもきつと気に入るに違いない。

「そっか……じゃあ楽しみにしてるね」

「じゃ、決まりだね。さーて、ちよつくら稼いできますかー」

クラッチを握ってギアペダルを踏み込む。ガコンとギアが1速に入る音がする。

「暗いから気をつけてねー」

「はいよー そっちもはしやぎすぎておばあちゃんに迷惑かけんなよー」

綾乃が手を振ってスロットルを回す。クラッチを離すとエイプの金色のホイールが

ゴロゴロと転がりだす。

テールランプが赤い尾を引いて、綾乃の背中がどんどん小さくなっていく。

ボクたちは、その背中が見えなくなるまでずっと手を振り続けた。

エンジン音が聞こえなくなり、あたりがしんと静まりかえる。

時折、月の光に反射して湖がキラリと輝く。

「寒いし、戻ろっか」

なでしこが話すと、口から白い息がモワモワと立ち込めた。

「だね、早く戻ってこたつ入ろっか」

「そうだな」

三人で寒い寒いと言いながら家の中に戻る。

湖で魚が一匹ぼちちゃんと跳ねた。

「えっほ、えっほ」

なでしこが操る自転車の赤い反射板を追いかけながらビーちゃんをゆつくりと走らせる。

ドコドコとエンジンの規則正しい音を立て、マフラーが白い煙がモクモクと吐き出し空を濁していく。

「ほんと、隣で見ると煙すごいな」

隣で同じようにビーノを転がすリンが言う。

ビーノのマフラーから吐き出される煙はこんな寒い夜だというのに、ほとんど無色だった。

「なんか、双葉ちゃんのバイクってSLみたいでちよつとかわいいよね」

「か、かわいいのかな？」

なでしこの独特の表現に首を傾げつつ真つ暗な山道を走っていく。この道は前にも走ったけど、やっぱりすごく暗い。

けど、そんな真つ暗な道をなでしこはなんてことないように自転車で走っていく。きつとこちら辺は庭みたいなものなんだろう。

「なでしこ、あとどれくらい？」

「もうちよつとだよ。すつごく綺麗なんだよ。わたしのお気に入りの場所なんだー」

「たしかにあそこは綺麗だったなあ」

「そっか、双葉も行ったことあるんだっけ」

「行ったどころか一回野宿したよ」

「おいおい」

「もうダメだよー危ないことしちや」

「今度するときはちゃんとテント張るから大丈夫だつて」

「いや、テントの問題じゃないだろ」

ボクから言わせればキャンプもそこまで変わらない気がするんだけどな。

「あれでけつこう楽しいんだけどなあ。二人とも一回野宿すればきつとボクの気持ちかわかるよ」

外で寝る時のあの謎のワクワク感はやったことのある人にしかわからないだろうな。ダイレクトに顔にぶち当たる風。ふと見える星空。思い出したらまたやりたくなってきた。

「お金かからないし片付け楽だし自販機すぐだしおすすめだよー」

その代わりちよつと惨めな気持ちになつて人として大事なものを失うような気がするけど。

「あ、あはは……」

「ま、さすがにそこら辺の公園で寝るのはやだけど、もつとあつたかくなつたらタープだけでキャンプしてもいいかもね」

タープ泊。そういうのもあるのか。あつたかい季節ならきつと気持ちいだろうな。

「あ、やりたいやりたい!」

「タープってコットン製とかなら中で焚き火とかできるんでしょ? いいなー絶対楽しいじゃん」

「二人とも、言つとくけどまだだいたいぶ先の話だからな」

今日は1月、冬真っ盛りだ。春はまだまだ遠い。4月くらいまで待たないとあつたかくはならないだろう。

「あ、ついたよー」

三人で春のキャンプに思いをはせていると、見覚えのある砂利の駐車場にでた。それにエイプも見える。綾乃はもう来ているみたいだ。

「あ、やっと来た。おーい」

東屋のベンチに腰掛けながら、綾乃がこつちに手を振ってくる。もう片方の手には湯気の立つマグカップが握られていた。

「ごめんまったー?」

「まったまった。あんまり待つから一人でお茶しちゃったよ」

ベンチにはボクと同じイワタニのバーナーとコツヘルが置かれていた。

「あ、それ双葉ちゃんと同じやつだ」

「いいでしょ。これすつごい使いやすいんだー ね、双葉」

「うん」

コンパクトで使い方も簡単。単純な構造だからすこぶる丈夫。ガスもコンビニとかスーパーで買えるから燃料の確保に困らない。

「いいな、わたしも買っちゃおうかなー」

「いや、なでしこ買いたいものあるんだろ?」

「あ、そうだった」

リンの言葉になでしこがハツとする。そういえば、ガスランプがほしいって言ってた

気がする。

「煩惱退散煩惱退散！ よし、もう大丈夫！」

ボクにはなでしこの気持ちがよくわかる。一回ハマるとあれも欲しいこれも欲しいってなつちやうんだよね。

ボクもバイクにいったい幾らつき込んだことやら……なんであんな運転しづらいバーハンドル買つちやつたんだろ。

「じゃ、集まったことだし上いこーよ。さつき見てきたけど、晴れてるからすつごい遠くまで見えたよ」

「ほんと？ 二人とも早く行こー！」

肌を突き刺すような寒さもなんのその。展望台に続く小道を元気いっばいに駆け出していくなでしこ。

「暗いんだから転ぶなよー」

駆け出したなでしこを綾乃が笑いながら追いかけていく。

きつとなでしこが浜松にいた時もおんなじように追いかけてたんだらうな。

「なでしこの奴、ほんとどこ行つても元気いっばいだな」

そんななでしこを、リンがなんとも微笑ましそうに眺めていた。

「なんか、見ているこつちも元気になつてくるよね」

なにをするのも楽しそうで、嬉しそうで、常に全力疾走。そんななでしこがボクとリンは大好きだ。

「ほんとな」

二人でどンドン進んでいくなでしこを見守る。元気なのはいいけど、転ばないかちよつと心配だ。

「リンちゃんも双葉も、来ないと置いててくぞー」

小道の向こうで綾乃がボクたちに声をかける。そろそろ行くか。

「今行くから待ってー リン、ボクたちも行くぞー」

そんな綾乃たちに置いて行かれないよう、ボクもリンの手を取って走り出す。

「リンの手、冷たいね」

まるで氷みたいに冷え切った手。大好きな友達の手。

「ふっ……そつちもな」

そう言つて、リンが小さく笑った。

「あそこが三人で温泉入った弁天島で、あの車がちよくちよく走ってるのは浜名湖のサーブスエリアかなー」

「温泉いいな　わたしも入りたかったよー」

「今度四人で集まった時にでも入ろーよ」

木組みの展望台で四人で肩を寄せ合い、まるで宝石箱みたいにキラキラと輝く浜名湖を眺める。

遠くで流れていく豆粒のような自動車のランプ。湖をなぞるように淡く光る民家の光。レールの上を走る電車の青白い電灯。

目を凝らすと微かに見える星々と、月に照らされて浮かび上がる雲の影。

ここに来るのは三回目だけど、何回見ても綺麗だなここは。

「なでしこはよくここにきてたの？」

リンが聞く。

「うん。ここから見る夜の浜名湖が大好きで、アヤちゃんと自転車によく来てたんだ」

リンの質問になでしこが昔を懐かしむかのように目を細めた。たしかに、こんなに綺麗なら毎日でも来たくなるだろうな。

「それで、二人とも今日は楽しかった？」

白い息をはきだしながら、綾乃がボクたちにそんなことを聞いてきた。

「うん。まあいろいろあつたけどなんだかんだ言つて楽しめた」

「たしかに、ほんとにいろんなことあつたよね」

御前崎でリンにばったり出会い、綾乃に半ば強引に浜松に連れてかれ、三人でキャンプして温泉に入ったりみんなでうな重を食べたり……

本当に充実した3日間だった。

「ボク本当は一人で京都行くつもりだったんだけど、こつちに来て正解だったよ」

一人は楽しいけど、一人じゃ味わえないものもある。今回の旅でそれを改めて実感した。

「わたしも、こんな遠くまで来るなんて思ってたけど楽しかったな」

思い通りにいかないのが旅の醍醐味。

世界はいつも驚きに満ちていて、それを楽しめれば、それはきつとすごく素敵なのに違いない。

「なでしことか双葉とかアヤちゃんに会って、キャンプしたりツーリングしたりご飯食べたりして……大好きなものがどんどん増えて……なんだろうな、うまく言えないけど世界がぐつと広くなったなって、そんな気がする」

浜名湖を眺めながら語るリンは、それはそれは嬉しそうな目をしていた。

「二人でやるキャンプとか、みんなで作るキャンプとか……そういうの関係なしにさ、わたしはキャンプが好きなんだなって、改めて思ったよ」

ボクにはリンの気持ちがよく理解できた。

人と触れ合うたびに、新しいものに出会うたびに、好きなものが増えていく。

今まで好きだったものが、新しいものに出会うことでますます輝きを増していく。

リンの話聞いてたら、また旅に出たくなかった。学校始まったらどこに行こつかな。

「……そっか〜」

そんなリンの話聞いて、なでしこが嬉しそうに笑った。

「リンちゃん!」

「ん?」

「わたしもリンちゃんのこと大好きだからね!」

「お、おう……」

あ、赤くなった。

リンは相変わらず照れ屋さんだ。まあボクもリンのそういうところ大好きだけどね。

「あ、リンちゃん照れてる」

「リン、ボクも大好きだからね」

「それは知ってる」

ありや、反応薄いな。

まあ、あれだけ大好き大好き言いまくつたらそうなるか。

べつに反応が見たくて言ってるわけじゃないけどなかつたらなかつたで気になる。

「じー」

「な、なんだよ……」

と思ったけど、よくよく見たら耳たぶが赤くなっていた。寒いだけじゃこうはならないよね。

うん、やっぱりリンは照れ屋さんだな。

「えへへ、なんでもないよ」

「変な奴」

「リンちゃんだけずるいぞー わたしにも大好きって言えー」

「はいはい大好きだよ」

「うーん、惜しい！ 75点」

「あ、点数制なんだ」

どうやったたら100点取れるんだろ。ちよつと抱きついてみよつか。まあ恥ずかしいからしないけど。

「あはは」

寒さも暗さもなんのその。浜名湖の輝きを眺めながら四人で一緒に笑いあう。そんな正月の夜だった。

「またねアヤちゃん」

展望台での楽しいひと時も終わり、お別れの時がやってきた。

「うん、じゃね」

「アヤちゃん、気をつけてね」

「二人ともありがと。また3学期始まったら休みの日にでも遊びに行くよ」

「うん、待ってるね!」

「いや何キ口離れてると……もういいや」

「あはは……じゃ、そういうことで」

ガシ。そんな音がして右腕が重くなった。

「え?」

振り向く。綾乃がボクの腕をがっしりホールドしていた。

「リンちゃん、約束どおり双葉もらってくね」

綾乃が、それはそれはいい笑顔でリンにそう言った。

あ、そうだった。ボク綾乃の家に泊まるんだった。ていうかもらうって……
ていうか地味にすごい力だな。肘から先が全然動かないんだけど。

「えー! 双葉ちゃんも行っちゃうのー!」

「そゆこと。じゃ行こっか双葉」

「え、あ、うん」

なでしこの制止もなんのその。ずるずると引きずられるような感じでバイクに歩き出すボク。

「お母さんとお父さんにも双葉のこと紹介したいし、早く帰ろっか」

「そ、そうだね」

うながされるままヘルメットを被ってピーちゃんに乗ってエンジンをかける。

2ストのエンジンが唸り、続くように4ストのエンジンがトコトコと鳴り響く。

「準備オツケー？」

「うん、いつでもいけるよ」

「じゃ、行きますかー」

エンジンが唸りゆっくりと進み出すエイプに続く。

流れていく景色。冷たい夜風がボクの顔を冷やしていく。

「二人ともーまた明日ー！」

「道気をつけろよー」

大声で見送るなでしことリンに二人で手を振る。

ギアを上げる。世界が加速していく。ミラーに映る二人の姿が小さくなっていく。

「双葉ー！ 楽しかったー!!」

少し前を走る綾乃が大声で叫ぶ。

「うん！ めっちゃ楽しかったー!!」

ボクもエンジン音と風切り音に負けないように大きな声で叫ぶ。

これから綾乃の家に行くわけだけど、綾乃の家族ってどんな人なのかな？

「……あ、自己紹介どうしよ」

やばい、なにも考えてない。これこのまま行ったらぜったい挙動不審になるやつだ。

「い、一回止まってくれない？」

「え？ なんてー!!」

あ、だめだ。

し、しかたない。走りながら考えよう。今のボクならいけるはず！

「よ、よし！ やってやるぞー!!」

ビーちゃんのスロットルを回し、意気込むボク。

楽しい時間はすぎていく。昇った太陽はいつかは沈み月に変わる。今回の旅ももうすぐ終わる。

そして――

「……すい」

ドコドコ唸るV型8気筒のエンジン音に惚れ惚れしながら車内を見回す。

座席の後ろを見ると、ビーノとビーちゃんを載せてもまだ余裕のある広々とした車内が見えた。

日本の車とは比べ物にならない大ききさだ。その気になればここに住めそうだ。

「お、おじいちゃん、こんな車よく借りれたね」

今日は1月3日。約束では新城さんが車でボクたちのことを迎えに来てくれることになっていて、実際本来に来てくれたのだが、乗ってきた車がすごかった。

「ほんと、すごいですね……アメ車って……」

ボクとリンはきつとトラックかハイエースかなにかで来るものと思っていた。

けど、実際に乗ってきたのはサイズ設定ミスってるんじゃないかっていうくらい大きなアメ車のバンだった。

詳しくはわからないけど、フォードの古いフルサイズバンだ。

リンの言うとおりのこんなものどうやって借りたんだろうか。謎だ。

「ああ、いい車だろう？ 知り合いにこの手のものに目がない奴がいてな。しばらく乗ってないようだったから借りてきた」

「そ、そっか……」

リンがなんとも言えない表情で押し黙る。

新城さんはなんてことないように言うけど、こんな車を持つている知り合いって……ボクもさつきから驚きっぱなしだけど、正直この人ならって思ってしまう自分がいる。

「それで、二人とも今回は楽しめたかい？」

「うん！」

微笑むわけでも、口元を緩めるわけでもなく、はつきりとした笑顔でリンが答えた。

「リン……」

驚いた。リンがここまでのはつきり言うなんて。バックミラーに映る新城さんの顔も心なしか驚いているように見えた。

「双葉も楽しかった？　って聞くまでもないか」

顔、笑ってるもんな。リンがそう言いながら自分の口元に左右の指を当てる。

車の窓に映った自分顔を見てみると、リンの言うとおりすごい笑顔だった。

「えへへ、うん！」

横に座るリンを見ながらにつこりと笑うと、リンも同じようににつこりと笑った。

「……そうか、それはよかった」

ミラーに映る新城さんの顔が嬉しそうに微笑む。

「もうすぐ3学期だね」

「うん。また、どっか行くの?」

「もちろん! リンも一緒に行く?」

「ま、考えとく」

リンが考えとくって言った時は、つまりOKってことだ。まあそんなもの今のリンの笑顔を見れば考えるまでもないけどね。

「さーて、どこに行こっかなー リン、どこか行きたいところ——」

「すう……すう……」

寝息が聞こえる。

横を見ると、いつのまにかリンが窓に頭をあずけてすやすやと眠っていた。

「はしゃいで疲れたんだらう。寝かしといてあげなさい」

「ふふ、そうですね」

よく見たら顔がちよつとにやけてる。よかった。リンも楽しいと思ってくれたんだな。

あ、そうだ。スマホを取り出してあどけない寝顔をパシヤリ。

「ふひひ」

あとで斉藤さんに送ろつと。

こうして、ボクの正月は終わりを迎えるのであつた。

「……双葉さん」

「は、はい！」

「今君が撮つた写真なんだが……後で焼き増ししてわたしにもくれないか？」

「は、はい……全然いいですけど」

「すまん。その、なんだ。リンにはくれぐれも内密で頼む」

「あ、はい」

「……恩に着る」

もしかして、ちょっと照れてる？

「あの……リンの写つてる写真他にもたくさんあるんで、それもいりま——」

「頼む」

即答だつた。

この人ほんとリンのこと好きだな。新城さんの意外な一面を知つたボクなのであつた。

ちなみにこの数時間後、こんな馬鹿でかい車どこ停めるんだと咲さんに愚痴られて、ちよつと照れたように頭をかく新城さんがいたのは、ここだけの話。

16話 コールマン ルミエールランタン 5, 980

円(税込)

16—1

「そーいやお前ら、バイト代出たら何買うか決まったか?」

放課後の校庭。千明が買ってきたタープと青空の境目をぼんやりと眺めていると、千明がそんなことを言い出した。

そーいえばもうそろそろそんな時期か。

あの楽しい正月が終わわり数日が過ぎ、また学校に行く日々が始まった。

今日もボクたちは、いつものように野クルに集まり、いつものように他愛もない話をしていた。

「わたし、ついにアレ買います!」

「おお！ あのランタンか！」

「ええなあ、今度キャンプする時見してえや」

「うん！」

ランタン……前カリブーに行った時ほいって言ってたコールマンのガスランタンか。夜の湖畔とかで使ったらさぞ風情があるに違いない。

ボクもいいかげん百均の豆ランタンから卒業したいな。けど、あれはあれで地味に使いやすいんだよなあ。

まあしばらく保留でいいか。

「あおいちゃんは？」

「わたしは椅子や！ リンちゃんみたいなローチェア買うで！」

「あたしはハンモック。それとできれば暖房器具も欲しいよなー クリキャンでロリ子のストーブ見てからめっちゃ気になってよ」

「あれほんまあったかかったわあ。たしかにテントあつても中寒いし、ええかもなー」

三人が思い思いに自分の買いたいものをあげていく。ボクはなに買おうかな。

「双葉ちゃんはやつぱりビーちゃんやる？」

「え、なんでわかつたの！ ボクまだなにも言っていないのに！」

「いや、部室に来るなり早々バイク雑誌広げて唸ってたら誰だつてわかるだろ」

「あ、そういえばそうだった」

「なになに！ なに買うの！」

「駆動系とかだいぶボロいし、そろそろ全部交換しよつかなって」

リアスプロケットはもちろん、チェーンにブレーキシユ全部総取っ替えだ。

難易度は高くないとはいえ命に関わる部分だから、しっかり調べて準備しないとな。

「工具も足りないからそれも買つて……」

「双葉ちゃん、もしかして全部自分でやるの？」

「そうだよ。お店に頼んだらめちやくちや取られちゃうしね」

せつかく久しぶりに給料がもらえるのに、お店に頼んだら赤字になってしまう。

「へえ、なんかすごいね」

「そんな難しい場所じゃないし、工具さえあれば誰でもできるよ」

実際難易度的には自転車に毛が生えたレベルだ。

ビーちゃんのタイヤ周りの構造はカブにそっくりだから資料にも事欠かない。ちや

んと事前準備さえしておけばなんともなるだろう。

「みんな自転車のパンク修理自分でやるでしょ？ そのレベルだよ」

「いや、やらんけど」

と、千明。え、やらないんだ。

「わたしもやったことないなあ」

「あおいも……なでしこは？」

「わたしはお父さんにやってもらってるよ」

三人ともやったことないのか……

まあ、興味ない人にとってはそんなもんか。自分でやったほうが安いんだけどなあ。ちなみにボクは、そもそも自転車屋に持っていくことすらできなくて泣く泣く自分で整備していたらいつの間にかできるようになっていただけである。

だって自転車屋のおじさん怖いんだもん……

「ロリ子の意外な……いやべつに意外でもなんでもないな。特技は置いとくとして、リンと恵那はなに買うんだ？」

千明がずつと端でコーヒーをすすってたリンと斉藤さんに話かける。

そう、今日は珍しくリンたちも野クルに遊びにきているのだ。

「わたしは……とくに欲しいものないし、次のキャンプ資金かな」

「わたしはもう注文しちゃった。テントなんだけどね。ほら、こういうやつ」

斉藤さんがスマホをボクたちに見せる。

スマホの写っているテントはつくりもしっかりしていてすごく使いやすそうだった。いいなこれなんて名前なんだろ。

「え、ドギーテント?」

「ドギー? わんこ?」

ということとは、人間用じゃなくて犬用ってこと?

「人入れるサイズやないし、どう見てもわんこ専用やな」

「吊り下げ式ドームテント……入り口は付属のポールでタープにも……これ、下手なテントよりよっぽど凝ってるぞ」

リンがスマホを覗きながら息を呑む。たしかに、野クルの980円テントなんか足元にも及ばない豪華さだ。

「値段は……1万円!」

なでしこが読み上げた値段にボクたちは揃って目を見開いた。

「恵那、お前なんかすごいな」

なんだか斉藤さんのちくわにかける情熱を垣間見た気がする。

「ふっふっふ、褒めるでない褒めるでない」

「ふっ、この犬バカめ」

「そんなこと言っちゃってーリンも見たくないの? このテントでくつろぐちくわ」

ちっこいテントで毛布や寝袋に包まれてくつろぐちっこいちくわ……

「なにそれすごい見たい!!」

まるで魂の叫びとも言うべき大きな声が夕方の校庭に吸い込まれていく。

……

……

……

ちなみに声の主はボクじゃない。なでしこでもない。

千明でもあおいでもましてや斉藤さんでもない。

「な、なな……」

まあわざわざ言うまでもなくリンなんだけどね。

たぶん心の声が溢れちゃったんだろう。恥ずかしいのか顔を真っ赤にしてプルプル震えている。

「あははは！ リン溢れちゃってる！ 溢れちゃってるよー！」

そんなリンを見てお腹を抱えてゲラゲラ笑う斉藤さん。鬼だ……鬼がいる。

「前から思ってたけどよ。恵那ってけっこう鬼畜だよな」

「せやな……」

「あ、あはは」

「……………殺せー！」

冬の寒空にソロキャンガールの魂の叫びが吸い込まれて………いつたりはとくにしな

かった。

「あー面白かった。リンもだいぶ丸くなったよねー お母さんは嬉しいわ」

「斉藤、後で覚えとけよ」

「……あれ、リンちゃん図書委員は行かなくていいの!？」

なでしこが思い出したかのように急に大声をあげる。言われてみればたしかにそうかもしれない。

「あ、言つてなかったっけ？ 司書の人に頼んでちよつと減らしてもらったんだ」

なんで減らしたのかは、あえてここで聞く必要もないだろう。今ここでボクたちといることが答えだ。

「えへへ、そっか」

そして、その意図を理解できない人はここにはいない。ボクたちの間にどこかにこやかな空気が流れる。

「おうおう、このまま野クル入っちゃえー」

その空気を逃さず千明が勧誘。これあれだ。その場のノリで押し切ろうとしてるな。

「めんどいからパス」

が、そこはリン。一切の躊躇なく千明の勧誘はばつさり断る。

「ちえ、頑固なソロキャンガールだぜ」

「ボクはこのままでもいいと思うけどなー」

一緒にいなかったら仲間じゃないってわけじゃない。どこにいたって心が繋がって
いればそれで十分だ。

「だってよー 人増えたらもしかしたら部室もらえるかもしれないんだもーん！」

「くねくねすんのやめいや」

「でもアキちゃんの言うとおりの部室はほしいよね」

あれはあれで秘密基地感があつて嫌いじゃないけど、ここの人が増えてくるとさすが
に厳しい。

「せやなあ、どう考えてもあのスペースに6人入るのは無理やろなあ」

「縦に6人で並べばいいんじゃない？」

斉藤さんがまた適当なことを言う。でもそれなら入れないこともないか。だいぶ無
理あるだろうけど。

「それどうやって話すんだよ」

リンが聞く。

「うーん、伝言ゲーム？」

「えらいシユールな光景だなおい」

「ていうか、特定の誰かのところで話が致命的に捻じ曲がる未来しか思い浮かばないん

「だけど……」

「ああいとかああいとかああいとか。」

「『『『『』』』』』」

「みんなしてわたしのこと見るのやめいや」

無駄話、馬鹿話。楽しい時間はあつという間にすぎていく。

ふと空を見上げる。西の空に浮かぶ太陽はどんどん赤みを増してきていた。

時計を見る。そろそろバイトの時間だ。いけないと。立ち上がってお尻の汚れをはたき落とす。

「じゃ、ボクバイトあるから先に帰るね」

「もうそでないな時間か。じゃあ気をつけてな」

「ああいとみんなに手を振り走り出す。赤く染まり始めた校庭に、ボクの影が細長く伸びていた。」

「あ、そうだ。立ち止まって振り返る。」

「タープの下でくつろいでいるみんなの姿はもうすっかり小さくなっていった。」

「でも、このくらいの距離なら平気だろう。大きく息を吸う。」

「また明日ねー!!」

手を振り回し叫ぶ。いつもどおりの挨拶。いつもどおりの日常。

だからみんなもいつものように手を振ってこう言ってくれる。

「「「またねー!」」」

ってね。

「なあ双葉ちゃんって、旅の時の寒さ対策どないしてたん？」

またべつの日。

いつものように野クルに集まっていると、あおいが雑誌を読みながらそんなことを聞いてきた。

正月も終わり、冬もピークに達しようとしている時期。あおいの言うとおり寒さ対策は冬キャンをする上で一番大事なことだ。

「寒さ対策かあ。とくに大したことはしてなかったかな」

「これからますます寒くなるやろ？　うちら本格的な冬キャンするの初めてやし、参考にしたいんよ」

「たしかに、どうやってるのかは気になるな。あんだだけバイク乗って寒い思いしてるのにロリ子いっつもびんびんしてるし」

あおいの言葉に千明がうなずく。自分で言うのもなんだけど、この中で一番旅慣れし

てるのは事実だ。

なにせ中2の夏からほぼ毎週どこかに行っていた。大抵のトラブルは経験済みだ。

「ほんとに大したことはしてないよ。身動きができるギリギリまで着込んでるだけ」

「野宿してたんだよね？ 夜とかどうしてたの？」

なでしこが聞いてくる。

「こればかりは慣れとしか……強いて言うなら風の吹くところで寝ないとか、標高が高いところはなるべく避けるとかかな。まあそれはテントがあるから大丈夫か」

他にもトイレで寝るだとかその辺で段ボール拾ってきて囲いを作るだとか、いろいろあるけどそこまでいくとただの痩せ我慢大会になるので言わないでおこう。

「あとは……」

「あとは？」

「寝ない、かな？」

夜走れば渋滞もないし寒さもやり過ぎせるし一石二鳥！

……

……

……

「まあ、そりゃそうだろうけどよ……」

「うちらにはちいと難易度高いなあ」

「あ、あはは……」

「だよねー」

やっぱりボクのやり方はストロングスタイルすぎて参考にならなかったみたいだ。

リンと綾乃にも散々おかしいつて言われたしなあ。

便利なんだけどな。昼夜逆転走法。

「まあわかつてるだろうけど、本当に気をつけてね。ボク一回低体温症になりかけたことあるからわかるけど、ほんとにやばいから」

しかもそういう時にかぎって判断力が鈍るから危ないのだ。

あの時はゲラゲラ笑いながらやばいやばいって言ってたけど、思い返してみると本当にやばかった。

あの時のボクって頭のネジダース単位で飛んでたんじゃないってくらいぶっ飛んでたよなあ。

「だ、大丈夫だったの双葉ちゃん！」

「うん。大丈夫じゃなかったから公園の多目的トイレにこもってやりすごした」

「「ああ……」」

3人の視線の温度が下がる。知ってた。だから言いたくなかったんだよー！

「そ、それでどうしたの?」

「寝ると死ぬから朝までずっとトイレで歌ってた」

おかげで歌がちよつとうまくなったのは秘密。

「あ、寝ないってそういうことやったんか」

「なんか、想像するとめっちゃシユールだな」

「た、大変だったね……」

三者三様のリアクシヨン。共通してるのはみんな顔が引き攣っていること。

ゆるゆるキャンプを楽しんでいる3人にはちよつと刺激が強かったか。

「ま、まあボクの昔話は置いといて、あとはこういうの使うとかかな」

制服の裾に手をつ突っ込んでハクキンカイ口を巻いているベルトを外す。

「……小銭入れ?」

「カイ口だよ。ほら触ってみなよ」

なでしこのとんちんかんな回答をスルーしつつカイ口を差し出す。

「わあ、めっちゃあつたかいね〜」

「それちようど今ビバークに載つとつたわ。ハンディウオーマーつちゆうやつやろ?」

うちのおばあちゃんも使うてるで」

「なでしこ、まだ全然あつたかいでしょ? これ学校行く前に燃料入れたつきりなんだ

よね」

「マジか。すげえ燃費いいんだな」

「満タンまで入れれば丸一日くらいは持つよ」

「燃費って、双葉ちゃんこれガソリン入ってるの？」

燃料と聞いてなでしこが少し険しい表情を浮かべる。たしかに、ボクも使う前は危ないんじゃないかって思っていた。

「ううん。入れているのはベンジン。それに燃やしてるわけじゃなくてただの化学反応だから全然危なくないよ」

「へえ、そうなんだー」

「めっちゃ暖かいからオススメだよー」

「ふうーん……」

ボクのお腹をじっと見つめるなでしこ。どうしたんだろう。あとそろそろカイロ返してほしい——

「ひゃっ!?!」

突然なでしこがボクの制服に手を突っ込んでお腹に手を当ててくる。

「ほんとだ。ぬくぬくだ」

感心したようにボクのお腹をさするなでしこ。さわさわと摩られるせいで妙にくす

ぐつたい。

「な、なでしこくすぐつたいって」

助けを求めてあおいのほうをチラ見する。

「……あ、ほんまや。なんかこたつに手突つ込んでみたいやな」

なにを血迷つたのか、あおいまでボクのお腹に手を入れてきた。やばい、ほんとにくすぐつたい。

「へえ、こんなにあつたかくなるんだ……」

「あはは！ や、やめてーち、千明助け——」

「ほほう。こりやあ極楽だな」

千明の奴。どさくさに紛れてボクのカイロ自分のお腹に巻いてやがる！

けつきよく、このあとボクは3人が満足するまでお腹を触られたのであった。

「綺麗だね」

「えへへ、でしよー」

ゆらゆらと揺れるガスランタンの炎の向こうで、なでしこが笑顔でそう言った。

「家でゴロゴロしてたら急にライン来てなにかと思つたけど、こーういふことだったんだ」

今日はバイトもなく、やらなきやいけない宿題とかもなかったので、のんびりゲームでもしようかと思つた矢先のことだつた。

まあ、なでしこの家で遊んだりするのは大して珍しいことでもないので驚くことでもなんでもない。

「急に呼び出してごめんね。せつかく買ったんだし双葉ちゃんにも見てもらいたくて」
なでしこが自慢したくなる気持ちもよくわかる。これはたしかにいいものだ。

なんていうか上手く言えないけど、焚き火を眺めている時と同じような安心感がある。

こういうのを見るとボクもほしくなってきたきちやうなあ。

「これで次のキャンプがますます楽しみですになったね」

「うん！」

にっこりと笑うなでしこにつられてボクも笑い返す。

二人で黙つて揺れる炎を眺める。心地の良い沈黙。ボクはこういう時間が大好きだ。
「それでね、双葉ちゃんに聞きたいことがあるんだ」

そんな沈黙を破つて、テーブルの向こう側に座つたなでしこがなにやら物思いふけるような表情でそんなことを言った。

「うん？ どうしたの？」

「ソロキャンって楽しい?」

「ソロキャン?」

テーブルの真ん中に置かれたガスランタンのゆらゆら揺れる炎がなでしこの瞳に反射する。

「うん。最近気になってるんだ。まだやるって決めたわけじゃないんだけどね」

「へえ、いいじゃん。でもどうして急に?」

ボクの知るかぎり、なでしこはどちらかというときみんなで仲良くするのが好きな子だ。

だから、そんななでしこがソロキャンというボツチ趣味の極みみたいなのをやりたいと言いつ出すのは少し意外だった。

「浜名湖で双葉ちゃんとアヤちゃんが行ったあと、リンちゃんにいろんなキャンプの話聞かせてもらったんだ」

「そしたら気になったと」

「うん。それで双葉ちゃんもよく一人でキャンプしてるって言ってたからちよつとお話聞いてみようかなって」

「まあボクの場合はキャンプっていうか旅だけだね」

ソロキャンは実のところしたことがなかったりする。なんだかんだ言っけていつも誰

かしらいた。

そう考えると、最近全然一人旅してないなあ。またどっか行きたいなあ

「というか、キャンプならリンに聞いたほうが早いんじゃない？ ボクよりもずっと詳しいでしょ」

「あとでリンちゃんにも聞くつもりだよ」

あ、元から総当たりのつもりだったんだ。それなら納得。

たしかに一人の意見よりもいろんな人の意見を聞いたほうがいいのは言うまでもないか。

それにしてもソロキャンの魅力か……正直考えたことなかったな。

「なにが楽しいか、か。うーん……」

改めて考えてみると難しい質問だ。楽しいことは間違いないんだけど、ゲームとかご飯みたいにも明確にこれって言えるものがないから、なんとも表現しづらい。

「……なんて言えばいいんだろ。一人旅とかソロキャンもそうなんだろうけど、すごく自由なんだよ」

クソザコ脳みそをフル回転させて浮かび上がったのはこの2文字だった。

なにが一番楽しいかとなると、やっぱり自由なのが一番楽しいだろう。

「もちろんいいことばかりじゃないけど。辛いこともいっぱいあるし、なにかあつて

も簡単に助けとか呼べないし」

「だよー」

お互いに本栖湖で立ち往生しかけた経験があるから、一人の怖さは身に染みてわかる。

誰もいない山奥のど真ん中でトラブルに見舞われる恐ろしさはそこのホラー映画とは比べ物にならない。

でも怖いからっていつてやらないのはあまりにももったいない。

「でもね、楽しいこととか嬉しいこととか、寂しいこととか辛いこととか、一人ってそういうの全部ひつくるめて独り占めできるんだ」

「独り占め……」

「綺麗な景色も、おいしい食べ物も、楽しかった思い出も、ワクワクするような冒険が全部自分のものにできるんだよ」

みんなと分かち合うことも大切なことだとは思うけど、人間はそんなに真面目な生き物じゃない。

「それって、なんかすごくワクワクしない？」

言ってしまうえば宝物は独り占めしたくなるってことだ。

「ワクワク……」

「なでしこも経験あるんじゃない？ 引つ越した時一人で本栖湖見にいったでしょ？ その時どう思った？」

「……すつごいワクワクした」

「ソロキャンとか一人旅って、そういうのがずっと続くんだよ」

友達も家族も、周りにいる人たちが誰も見たことないような景色をたつた一人で堪能する贅沢。

知らない景色、知らない風、知らない匂い。誰のものでもない自分だけの宝物。

一人っていうのはなにも悪いことばかりじゃない。

一人じゃ見えないものがあるように、一人じゃないと見えないものもあるのだ。

「それに、寂しいって意外と楽しいよ」

もつとも、これに気がついたのはなでしこたちと出会ってからだけだね。

「リンちゃんもおんなじようなこと言ってた……ソロキャンは寂しさも楽しむものだって」

「まあ、けつきよくやってみるのが一番だよ」

百聞は一見にしかず。百見は一考にしかず。百考は一行にしかず。

ネットで調べたって、動画を見たって、得られるものはほんの少しだ。

なにごととも実際にやってみなくちゃ、行ってみなくちゃわからない。

考えてみて、調べてみて、準備して、試してみて。

うまくいけば嬉しいし、失敗すればどうすればいいか頭を捻る。

そういうことを何度も何度も繰り返して、自分だけの冒険を作り上げていく。

それが楽しくて楽しくてしかたがない。

指先一つで誰とでも繋がれて、未知なんてものはなくなってしまう世界だけど、ちゃんと目を向ければ冒険はいろんな場所に転がっている。

あとはそれに気がついて、飛び出すか飛び出さないかだけだ。

「せっかくバイトも決まったんでしょ？ できることだつてずっと増えたんだから、楽しまなきゃ損だよ」

成長して背が伸びれば高いところに手が届くように、大きくなるにつれてできることは増えていく。

子供の時は憧れるだけだったことが、叶えられるようになっていく。

夢は夢じゃなくなる。

そうやって叶えた夢を糧にして、また次の夢を見る。

「まあ、そんな感じ。どうかな？ ちよつとは参考になつたらいいんだけど」

「うん！ ありがと双葉ちゃん！ わたしやってみるよ！」

なでしこが瞳をキラキラと輝せて大きくうなづく。どうやら決意はかたまつたみた

いだ。

ちよつとだけ心配だけど、まあなでしこならきつと平気だろう。

「あ、そうだ。この前なでしこが見たいって言つてた旅先で撮つた写真、持つてきたよ」
椅子の下に置いていたリュックから分厚いアルバムを出すとなでしこが目を椎茸みたいに輝かせ身を乗り出した。

「あ、見たい見たい！」

「わたしも見たいわ〜」

突然間延びした声がして振り向く。廊下が続くドアが開いていて、桜さんにそっくりな女の人がボクたちを見ていた。

「あ、お母さんおかえりー」

「静花さん、お邪魔してます」

ボクはそう言つてなでしこのお母さん各務原静花さんにお辞儀した。そうだ。あれも忘れてた。

鞆から大きめの袋を取り出してテーブルに広げる。

「あ、これもしかして」

「はい。またクツキー焼いてきました」

「やったー！ 双葉ちゃんのクツキーだ！」

なでしこが今日一番の笑顔で喜ぶ。この笑顔を見ただけで作ってきたかいたがあるものだ。

「いつもありがとうね。そうだ。お茶用意するわね」

「おいひい〜」

「ってもう食べてるし。まあいつものことだけどさ。」

「おいしいわよね〜」

そしていつの間にかなでしこの横に座った静花さんが、同じようにもしやもしくッキーを食べている。

うん。親子だなー

ていうか足りるかな。前に持ってきた時の三倍多めに持ってきたから大丈夫だろうけど……

「いくらでも食べられちゃうよ〜」

「そうよね〜」

なんか……この前よりペース早くない？ これ桜さんとなでしこのお父さんの分残るかな。

「ただいま」

またドアがガチャリと開いて、桜さんがやってきた。

「お姉ちゃんおかえりー」

「暗……あんたまたランタン付けてるの？ 目悪くなるからほどほどにしときなさい」
パチンとスイッチが入れられてリビングが一気に明るくなる。うえ、眩しい。

「あら、双葉ちゃん来てたのね。いらっしやい」

「はい、お邪魔してます」

「双葉ちゃんがクッキー焼いてきてくれたのよ」

「そう」

静花さんの言葉に桜さんが短く返事して、自分の部屋に戻る……

……とはなくそのままボクの隣に座った。あ、桜さんも食べるんだ。

「いただきかね」

桜さんのメガネが怪しく光る。

「は、はい、どうぞ」

ボクが返事すると、無言でうなずいてクッキーを食べ始めた。

「……やっぱりおいしいわね」

桜さんの食べるペースが上がった。顔がすごい険しいからたぶんうまく焼けたんだと思う。

「「……………」」

そしてもしやもしやクツキーを食べ続ける各務原家。飲み物とかいらなのかな。まあいいや。ボクも食べよ。クツキーの入った袋の中に手を伸ばす。

「……あれ？」

が、あるはずのクツキーはどこにもなく、ボクの指は宙を掴むだけだった。嘘でしょ……まさかあれだけあったクツキーをもう食べたつていうの？ まだ5分も経ってないんだけど。

「おいしかったわあ。ごちそうさま双葉ちゃん」

「はあ、おいしかった。ありがと双葉ちゃん」

「ど、どういたしまして……」

みんなすごくおいしそうに食べてくれて嬉しいんだけど、ボクも食べたかったな……。なんて。

まいつか。元からなでしこたちにあげるつもりで焼いたやつだし。

だから気にしてないつたら気にしてない。

「ちよつと」

ちよんちよんと横から袖を引っ張られる。振り向くと桜さんがボクのことをじいーつと見ていた。

「ど、どうしたんですか？」

ボクが聞くと、桜さんがボクの前に甘い香りのするなにかを差し出してきた。

「どうせ二人が食べ尽くすだろうと思って、双葉ちゃんの分取っておいたわ」

桜さんの言うとおり、ボクの手元にはそこそこの数のクッキーがティッシュの上にもめられていた。

「……ありがとうございます」

万感の思いを胸に桜さんにお礼を言つて、クッキーをパクリ。うん。おいしい。

「じー」

そんなボクを見つめる二対の視線。

わざわざ言うまでもなく、なでしこと静花さんだ。気のせいかな、なんか圧がすごいんだけど。

「……簡単なやつでよかつたら、作りましょうか？」

コクコクと無言でうなづく二人。しかたない。ちやちやつと作るとしますか。

冬真つ盛りの1月。弱まるるところを知らない寒さの中、またボクたちの新しい冒険が始まろうとしていた。

17話 モンベル ケーブルニットワークキャップ

2,970円(税込)

17-1

すすきの生い茂るなだらかな峠をビーちゃんでのんびり駆け抜けていく。

左に意識を向ければいつ見ても壮大な富士山が山中湖の黒い湖面を見下ろしていた。澄み切った青い空に白い雲。うん。今日もいい天気だ。

前輪と繋がったフロントフォークが路面の凹凸に合わせて上下に小刻みに動き、アクスルを開くと2ストロークのエンジンがトトトと鳴って、シートを通してリアタイヤがアスファルトを蹴り飛ばす感触が伝わってくる。

緩やかになびくすすきの道。県道730号、三国峠。

見頃のシーズンは外してしまっただけ、それでも美しさは健在だ。ちよつと遠回りし

てきたかいがあつた。

左のコーナー、クラッチを握つてギアダウン。

アクセルを吹かしてクラッチをつなげ、最近効きが悪いと思うようになってきたリアブレーキをかけつつコーナーを曲がっていく。

「そろそろ交換しないとなあ」

チエーンもスプロケットもまだ注文していない。これから雪解けも進んで遠くに行く機会も増えていく。

だから作業は早めに終わらせたほうがいいんだけど、いかんせん寒い。

「もうちよつとあつたかくなつてからにしよつと」

2月くらいかな。そんなことを考えていると、コーナーを抜けた向こうに見晴らしのいい駐車場が見えてきた。

ちようどいい。ここで一枚撮つておこう。

ビーチちゃんを駐車場に停めてエンジンを切る。

ガソリンの燃焼によつて膨張していたマフラーが、冬の風で冷やされてパチパチと音を立てながら縮んでいく。

ヘルメットを脱いで鼻まで押し上げていたネックウオーマーを下ろすと、突き刺すような冷気が身体の中を駆け抜けていった。

「うう、前来た時よりもずっと寒いや」

吹き付ける風のあまりの冷たさに思わず身震い。

あたりを見回せば、ところどころ昨日降った雪の名残が溶けずに残っていた。

「えい」

近づいてブーツで踏んでみると、雪はもう固まってカチコチになっていた。

泥と埃が混じった見た目は、まるで土の上に落としてしまったアイスクリームのようだ。

あんまりおいしそうな表現じゃないな。

「なんかアイス食べたくなってきたな」

そんなことを考えていると食べたくなってくるのが人の性。

買ってもらったばかりのこたつに入ってアイスでも食べればそれはそれはおいしいに違いない。

たしか冷蔵庫に夏の時に食べきれなかったアイスが残っていたはず。帰ったら確認してみよう。

「まあ、今はそんなことよりも……」

スマホを取り出し眼下に広がる山中湖をパシヤリ。

海とか湖とか川とか、ツーリング先で水を見かけるととりあえず写真に撮ってしまうのはいったいなんでなんだろうか。

乗り始めて半年が経ったけど未だに答えは見つからない。

まあともかく――

「よし、これで残り4つと」

1月、山中湖。まだまだ雪の残る富士の麓で、ボクはいつものようにバイクに乗っていた。

富士五湖。

名前のとおり山梨県側の富士山麓に位置する五つの湖のこと。

富士山を取り囲むように右から山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖と並んでいて、その素晴らしいロケーションからキャンプスポットしても有名だ。

湖と富士山、緩やかに流れる風。瑞々しい木々。たしかにキャンプをするのにこれほど適した場所ないだろう。

今日はいろいろ巡る予定だし、いい感じのキャンプ場があったらみんなにも教えてお

こう。

「そういえば千明たちも山中湖でキャンプするんだっけ」

なでしことリンはバイトで不参加。ボクは明日バイトだからパス。

そういうこともあって、今日は千明とあおいと斉藤さんというちよつと珍しい組み合わせなのだ。

「斉藤さんもすっかりキャンプハマったよなあ」

綾乃もソロキャンしてるって言うし、ボクの周りでどんどんキャンプ好きが増えている。

「ここは対抗してツーリング好きを増やすべきか……」

次ツーリング行く時はリンも誘おうかな。

そんなことを考えつつビーちゃんを走らせる。右手には山中湖がその黒々とした湖面を時折太陽に反射させていた。

「……さむ」

木々の影に入るたびに、まとわりつくような冷気が全身を包み込む。

例えるなら冷凍庫に顔をつ込んだ時のようなそんな冷たさだ。

それもそのはず。山中湖の標高は980メートル。約1000メートルと、ちよつとした山くらの高さがある。

当然標高が高ければ気温も下がるわけで、服で覆いきれない手足が寒さで悲鳴をあげる。

慣れていても辛いものは辛い。ハンドルカバーを付ける人の気持ちもよくわかる。

「もうちよつと足エンジンにくつつけてみようかな……」

ためしにステップに置いた足をクランクケースにべつたりとつけてみる。

「あ、あつたかい……」

素手でさわれば火傷するほどの熱さをブーツがほどよく和らげて、くるぶしを中心にじんわりと暖かさが伝わってくる。

それにバイクに密着したおかげか、さつきよりも安定性が良くなっているみたいだ。

「これいいなー」

首をまげるだけで勝手にその方向に曲がっていく。なんだか自分とバイクが一つになつたみたいだ。

これでカーブを曲がったらきつと楽しいだろうな。

ちよつと飛ばして――

「つと、自重自重」

危ない方向にそれそうになつた考えを正す。

大通りは日差しのおかげで大丈夫だけど、昨日雪が降つたばかりなのだ。

無茶な運転をしてすつ転んだ日には大怪我じゃすまないだろう。
安全運転安全運転つと。

スロツトルをちよつと緩めて速度を落とす。これで少しは寒さもマシになった。
まあ猛烈に寒いからものすごく寒いに変わったただけだけど。

「さーて、次は河口湖だ」

目の前に見えたY字の交差点を左折する。この道をまっすぐ行けば河口湖だ。

スロツトルを回す。エンジンが唸る。

空は晴れていて、日差しも心地よい。今日は絶好のツーリング日和に違いない。
ボクはそう思った。

すつかり葉を落とし、枝だけになった木々が延々と続く森の中をのんびりと駆け抜けていく。

時折見える屋根付きのバス停には雪が積もっていて、溶けた雪が水滴となつて地面に滴り落ちていた。

「この先の道の駅で休憩してくかな」

「ここら辺をツーリングする時にいつも寄っている道の駅を思い浮かべる。」

たしかあそこつて大きなカリブーがあつたはず。まだ行ったことないし、せつかくだから入つてみるか。

「よし、行くう」

なんかいい物が見つかるといいな。

そんな期待に胸を膨らませながらアクセルを煽つていく。

枯れ木と空、そして雪。茶色と白と青で彩られた世界をボクは一人走つていった。

「ふう、ついたつと」

道の駅の駐輪場にビーちゃんを停めてエンジンを切る。

道の駅富士吉田。

富士山の麓だけあつて、他の道の駅に比べても一段と大きく、観光客や地元の食材を買いにきた人たちがいつでも賑わっている。

途絶えることなくやって来ては去つていく車を眺めながらヘルメットを脱ぐ。頭を左右に振つて押し込められていた髪を解いていく。

ヘルメットを脱いで身軽になると、冬の風がダイレクトに頭にぶち当たつて思わず身震い。

「やっぱここら辺寒いなー」

自分の身体を抱きながら息をはくと白い湯気になってモワモワと宙に漂った。

「さむさむ、早く中入ろつと」

腕を組みながら小走りでカリブーに向かっていく。

「みんなみたいに帽子でも買おうっかな」

なんかかわいいのがあるといいな。そんなボクの後ろで一台のバスが通りすぎていった。

「……あつたか」

カリブーのドアを潜った瞬間、猛烈な暖かさが全身を包み込んだ。

一瞬で真っ白になるメガネ。冬はこれだからいやなんだよなあ。けど、外すと何も見えななし。

「ま、前が見えない……」

温度差が大きいせいなのか、ボクが冷えているせいなのか、いつもよりもひどい曇りかたをしているせいで本当になにも見えない。

「ど、ど、ど、前、前……」

両手を伸ばしてゾンビのようにふらふらと歩く。

モフ。ふと、両手にそんな感触を感じた。やばい、人にぶつかっちゃった。

「えと、その！ ぐ、ぐめんなさい！」

慌てて頭を下げて謝ると、今度は頭にモフつとした感触が伝わる。

「ひっ」

一瞬全身の血の気が引いた。お、終わった。

……

……

……

と思っただけ、なんだか様子がおかしい。

頭を押し付けているのに一切反応がない。恐る恐る手を伸ばして触ってみる。あ、こ

れ人じゃないな。

「はあ、びつくりした〜」

人に頭突きしちやったのかと思った。

安心すると、なんだかモフモフの正体が気になってきた。

「調査、これは調査なんだ……」

モフモフが気持ちよかったとか、顔を埋めてみたいな、などといった邪な気持ちでは

断じてないのだ。

頭をそつとモフモフに押し付けてみる。モフつとした感触と暖かさが顔じゆうに広がる。

やばい。これいいかも。

両手でモフモフを抱きしめながらすりすり顔と顔を押し付ける。

「えへへ、モフモフだあ〜」

「モフモフだねえ〜」

え？

気のせいかな？ 今すつごい聞き覚えのある声がきこえたような、ないような……

「双葉ちゃんこつち見て〜」

「あ、はい」

声のしたほうに顔を向ける。パシャリとカメラのシャッター音がした。

え、シャッター音？

「はあ、ロリ子もお子様だな〜」

すつごい聞き覚えのある声その2。

「わあ、ほんまにモフモフやあ〜」

すつごい聞き覚えのある関西弁その3。

なんだか嫌な予感がする。うん……まあ、もうわかってるけどさ。メガネを外してレンズの曇りを拭いてかけ直す。

「よっ」

千明がニヤニヤしながらボクを見ていた。

後ろを向く。モフモフしたカリブーのマスコットキャラ、カリブーくんが、その円な瞳でボクを優しく見守っていた。

「はあ、これあかんわあ〜」

そんなカリブーくんを顔を埋めて顔をだらしなくにやけさせているあおい。

「おはよ〜 双葉ちゃん」

と、いつものようににこやかに挨拶する斉藤さん。

「あ、うん……おはよ」

そして、茫然と立ちつくす一人のクソザコ……もといボク。

「なんだ、こつち来てるなら連絡してくればよかったのに……って、おーい」
なにも聞こえない。世界が灰色に包まれる。

そんな灰色の世界でただ一人、カリブーくんだけがボクを優しく見つめていた。

コツチニオイデ……

都合のいい幻聴に身を任せ、カリブー君を抱きしめる。フカフカとした暖かい感触。

ああ、モフモフだ……

「えらいニヤけとるな……」

「かわいいもんね、カリブーくん」

「えへへ」

このあとめちやくちや悶絶した。

「へえ、富士五湖巡りかー」

斉藤さんが感心したように言った。

「またなんかおもしろそうなことやってんのな」

たくさんのアウトドアグッズで溢れるカリブーの中を4人で探検していく。

この辺で一番大きい直営店だけあって品揃えもすごい豊富。身延や甲府のカリブーでは見たことないような商品がいっぱいある。

あとで服のコーナーも見ていこ。

「この後はどうするんだ？」

「さつき山中湖行ってきたから、次は河口湖から順番に見ていくつもり」

「なかなかハードスケジュールやな。事故らんように気をつけてな」

距離的には200キロちよつとだから大したことないんだけど、雪も降ったばかりだから気をつけるに越したことはない。

あおいの言うとおりのんびり走っていこう。

「ありがと。ついたら順に写真送るね」

「楽しみにしとるでー」

「ついでにいいキャンプ場あったら教えてくれよな」

「うん！ 任せて！」

そんな話をしながらアウトドアグッズの森の中を探検していくボクたち。

「やっぱ、ネットで見るより迫力が全然違うよな」

「せやなあ、こんなぎよーさんあると目移りしてまうわ」

「ま、あたしら金ないし。アマゾンでひたすら欲しいキャンプグッズカートに突っ込ん

で悦に浸るくらいしかできないけどな」

「あ、わかる！ よくやるよねエアショッピング」

そして我に返ってひどい虚無感に襲われるまでがセット。でもやめられない。帰っ

たらまたやろ。

「聞いてて悲しくなるからやめいや」

「やっぱいろいろ欲しくなっちゃうよねー キャンプグッズ」

斉藤さんの言うとおりで。バイトを始めてお金に余裕ができた分、余計にそう思うんだらうな。

「それで、3人はなに買いにきたの？」

「ああ、前まえからほしかったハンモックをだな——」

わいわいがやがや。三人寄ればなんとやら。四人寄ればやかましい。

あれがほしいこれがほしい。みんなでああでもないこうでもないとしげに悩み合う。

ボクの朝はそんな楽しいな会話とともに過ぎていくのであった。

「いやー 買った買った」

「早うキャンプ場行って組み立てたいわあ」

息が白くなるような寒さもなんのその。ほくほく顔の千明とあおい。二人の手には、買ったばかりのキャンプグッズが詰まったカリブーの買い物袋が握られている。

「斉藤さん、帽子一緒に選んでくれてありがとう」

斉藤さんにお礼を言ってお礼を言ってお礼を言ってカリブーの窓ガラスに映った帽子を被った自分の姿をちらりと見る。

落ち着いたネイビーのニットのワークキャップ。キャップなのにニットだからモコモコしててかわいい。

しかもアウトドア用だけあってすごいあったかい。これはいい買い物をした。

「似合ってるよ、双葉ちゃん」

「えへへ、ありがと」

斉藤さんに褒められて思わず顔がニヤけてしまう。

いい物が買えたってこともあるけど、友達に選んでもらったのも大きいんだろうな。

そういえば、友達にこういうもの選んでもらったの初めてだな。うん、大事に使おう。

そういえば、友達か……

「ん？ どうしたの双葉ちゃん」

斉藤さんがボクを見てくる。

ボクは斉藤さんのことを友達だと思っている。そして、斉藤さんもボクのことを友達だと思ってくれていると思う。

千明たちはいつの間にか斉藤さんのことを名前で呼ぶようになっていた。

リンはまあ置いておくとして、今のところ名前で呼んでないのはボクだけだ。

やっぱり、名前で呼んだほうがいいのか。でもなあ、自分からそんなこと言ったこ

とないもしも嫌がられたら……

「……違う」

口の中でそう呟いて小さく首を振る。

もう、そういうのはやめにしよう。

勝手に相手の気持ちを決めつけて、勝手に納得する。たしかにそうすれば楽だけど、きつとそれは逃がっているだけだ。

聞かなきやわからない。言わなきや伝わらない。

ちよつと怖いけど、今のボクなら大丈夫。

「あ、あの斉藤さん……」

「なーに？」

微笑みながらボクを見る斉藤さん。息を吸って呼吸を整える。

「え、えつと……その……」

緊張でうまく言葉が出てこない。けど、それでも必死に言葉を紡いでいく。

「あ、あの……え、恵那って呼んでも……いい、かな？」

い、言えた。つかえちやつたけど、それでもはつきり言えた。

緊張と恥ずかしさで顔が熱くてしかたない。でもそれ以上に嬉しくて仕方がなかった。

ちよつとはボクも成長できたって思っているのかな？

「双葉ちゃん……」

ボクの話の聞いて、斉藤さんは目を一瞬だけ大きく見開き、それからすぐにつこりと笑った。

「……もつちろんだよ！ よろしくね、双葉ちゃん！」

斉藤さん改め恵那が笑いながらボクの名前を呼んだ。

「……うん！」

「双葉ちゃんすつごいニッコニコ」

「え、そ、そうかな？ えへへ」

照れ臭さと嬉しさがごっちゃになって自分でも感情の整理が追いつかない。

「ええなあゝ 初々しくてゝ」

「そうだなゝ」

横でニコニコしている二人のことは必死に見ないふりをする。いや、もう手遅れだけどや。

「さーて、買うもんも買ったしちつと早いけど温泉行くかー！」

千明が目を輝かせながら拳を突き上げる。

「へえ、3人ともこれから温泉行くんだ」

こんな寒いところで温泉なんて浸かったらさぞ極楽なんだろうな！

「あ、双葉ちゃん。よかつたら一緒に温泉行かへん？」

「いいね。せっかく会えたんだし、双葉ちゃんも一緒に行こうよ」

こうなると、当然の流れとして3人がボクのことを温泉へ誘う。

正直すごい悩むけど、今日はまだまだ行かなきゃいけない場所がある。なにせこれからあと4か所回らなきゃいけない。

こんなところで道草を食っている場合じゃないのだ！

「ごめん、誘ってもらったのにあれだけど、もう出発するよ」

お昼も食べなきゃいけないし、できれば日が落ちる前には家に帰りたい。

「「「」」」

「い、行かないからねー」

3人の温泉行こーよビームを避けながらピーちゃんに向かって走っていく。

これ以上食らったら本当に温泉に浸かる未来がやって来てしまう。

まあ、べつにそれはそれでいいんだけど、今日はそういうことをしにきたんじゃないのだ。

「道気をつけろよー」

「写真楽しみにしてるねー」

「ちゃんといいたら連絡するんやでー」

思いたい言葉をかけてくる3人に手を振る。

「そつちも寒いから気をつけてねー!」

「「はーい」」

夜の山中湖かなり寒いけど、大丈夫なのかな。まあ、そのくらい知ってるに決まってるか。

「さてと……おまたせビーちゃん」

タンクをポンポンと叩いて出発の準備をする。

カリブーに長居したせいでエンジンも冷え切ってしまったている。これはかけるのに苦勞するだろうな。

ヘルメットを被ってシートに跨りキーを差し込み右に捻る。

「いい子だからかかってよー」

チョークを引いてキックペダルを蹴り飛ばす。

ブルンとエンジンが唸り、カタカタと音を立てながらゆっくり回っていく。

すかさずチョークを戻しスロットルを捻ってガソリンを送り込む。

やかましい音を立ててマフラーからモクモクと噴き出す大量の白煙。よし、一発でかかった。

しばらくアイドリングのまま待って、シリンダーがほんのり暖かくなってきた頃合いを見計らって出発。

カラカラとした金属音とともに白煙が噴き出して、冷たい風とともに世界が加速していく。

バス停で待つ千明たちに手をひと振り。別れを告げてさらにギアを上げていく。目指すは河口湖。ボクの旅はまだまだ始まったばかりだ。

17—2

千明たちとわかれ138号を進んでいき、富士吉田市に入る。

使い込んでところどころ傷の入ったゴーグルの向こう側に映る景色は、いつのまにか民家や商店、そしてたくさん車の車が行き交う町に変わっていた。

赤や青の瓦屋根。延々と続く電柱。張り巡らされた電線。狭い道路。

ビルが一軒も建っていないからだろうか、ごちやごちやしているわりには微塵も圧迫感を感じない。

そんな町並みを眺めながら緩やかな坂が続く139号に入る。車が易々と通れる大きな鳥居を潜り左折し137号に進入。北西へとビーちゃんを進めていく。

スロットルを回してビーちゃんを走らせていくと、青い空にポツンと浮かんだ太陽の日差しが背中にあたり、身体をじんわりと暖めてくれた。

寒さの中にあるちよつとの暖かさ。ボクは冬のこういう瞬間が好きだ。

フェンスのむこうに見える富士Qハイランドのジェットコースターや観覧車を横目に一人バイクを走らせる。

視界の端に見えるジェットコースターのレールの頂点からコースターが急降下していくのが見えた。

遠目から見ても怖そうだ。よくあんなの乗れるよね。ボクだったら絶対乗らない。

そんなこんなでしばらく曲がりくねった細い道を進み続けると、唐突に視界が晴れた。

視界いっぱい広がる広々とした湖。青いキャンパスのような空をくぎる茶色い稜線。

河口湖だ。

「ビーチちゃんこっち見てー」

と、機械相手に無茶振りを言いながらスマホをパシャリ。

湖とガードレール。青い空と茶色い山々。そして太陽に当てられてキラキラ反射す

るメツキ。

うん。いい写真が撮れた。

ボクは今河口湖の湖畔で一人写真を撮っていた。

対岸に見える小さな建物や、湖を走るボート。羽根子山の低い稜線とその向こうにそびえる富士山の対比がなんとも言えない景色を作り出していた。

いいところだな、ここ。そうだ。

「みんなにも送ろつと」

と言つてもみんなバイトだの温泉だの見てないだろうけど。

双葉：河口湖なう

リン：綺麗だね

そんなつもりで送った写真は思つてたよりもだいぶ早く返信がついた。

しかもリンだ。バイト中にいいのかな。まあ、けつこう暇だつて言つてたしちよつとくらいならいいのか。

リン：斉藤たちから聞いたよ。富士五湖巡りしてるんだつてね。バイトなかったらわたしも着いてつたんだけどな

双葉：今度また一緒に行こうよ

リン：わかった。楽しみにしてる。帰ったら話聞かせてよ。じゃバイト中だから切る

わ

双葉：じゃねー

リン：うい

リンとのやり取りを終えてスマホをしまう。なでしこは今ごろ蕎麦屋さんでバイト中か。今度こっそり行ってみようかな。

「ま、今はそれよりも」

停めていたビーちゃんに近づきシートに跨る。

キーを捻ってキックペダルを蹴り飛ばすと軽快なエキゾースト音が湖岸に鳴り響いた。

「じゃ、行きますかー」

ギアを上げて走り出す。これで2つめ。

お次は西湖だ。

県道21号を走り、クジラの口の中のような大きなトンネルの入り口に突っ込む。

大して長くないトンネルを抜ければそこはもう西湖だ。

富士五湖の中で二番目に小さい湖。西湖。カタカナにするとサイコ。

なんていうかヤバそうな響きだけど、なんてことないただの湖だ。べつに湖からやばい物質が検出されるわけじゃない。

でもなんてサイコなんだろう。にしこでいいじゃん。

そんな西湖と河口湖の距離は2キロも離れていない。あんまりにも近いので標識を見るまで西湖に来たことに気が付かなかった。

山奥に近い西湖は山中湖や河口湖と違って民家の類がほとんどない。そんな茶色い世界に引かれた曲がりくねった道路をゆったり流す。

「すごい、キャンプ場ばっかだ」

右を見ても左を見ても目に入るのはキャンプ場の看板ばかり。

ここに来るのは初めてだけど、こんなにキャンプ場が多いなんて知らなかった。

国道から離れているせいか、さつきから車の姿が全然見えない。ここでキャンプすれば静かな時間をすごせそうだ。

ただ、一つ言いたいことがある。

「湖が見えない……」

キャンプ場の生垣のせいで肝心の湖が全く見えない。

時折木々の隙間からチラリと湖が顔を覗かせるけど、見えるのは生垣とキャンプ場の看板ばかり。

べつに誰が悪いってわけじゃないけど、なんていうか期待していたのと違うっていうか……

「これ、写真撮れるのかな」

西湖はそこまで大きな湖じゃない。このまま走っていけばそのうち通り過ぎてしまおうだろう。

「せ、せめて一枚だけ」

一抹の望みを託し、細い道を走っていく。

ちなみに、このあとなんとか公園にたどり着いて写真を撮ることができたけど、端っこだったせいであんまりいい写真が撮れなかった。

もし次キャンペーンに行くことがあったら絶対綺麗な写真撮ってやるからなー！

「到着つと」

精進湖を通過した後、ボクはついに最後の目的地にたどり着いた。

少し傾き始めた太陽の下、眼下に広がる本栖湖を眺めながらボクはビーちゃんのエンジンを取った。

ゴーグルを取ってヘルメットを脱ぐと、セピア色の光が視界いっぱい飛び込んでき

た。

歩道の淵に腰を下ろし静けさに耳を澄ます。

冷たい風が吹けば、すっかり葉の落ちた木々がカサカサと揺れ、火が消えて冷却が始まったエンジンがまるで寒さに震えるようにパチパチと音を鳴らした。

普段なら雑踏にかき消されて聞き取れないような小さな音も、この静かな世界の中でははつきりと聞き取ることができる。

「静かだな……」

誰もいないボクだけの世界。

そんな静けさに浸っていると、急にお腹が空いてきた。そういえば朝食食べてからなにも食べてないな。

ちよつと遅いけどご飯にするか。

「か、れ、え、めんゝ か、れ、え、めんゝ」

サイドバッグを開いて中に押し込んだバーナー一式とカレー麺を出す。

バーナーを手早く組み立て水筒からコツヘルに水を注ぎ点火。ごうごうとガスの青白い炎が噴射されて水を温めていく。

「あなたはなぜカレー麺なのゝ」

あ、そうだ。あれ忘れてた。バッグから買ったばかりの風避けを出してバーナーを囲

う。

一つなぎになった8枚のアルミの板でバーナーの周りを覆うと風で揺らいでいた炎が目に見えて安定しはじめた。

「うん、いい感じ」

百均で550円で買ったやつだったからあんまり期待してなかったけど、なんかすごくいい調子だ。

そうやってしばらく待っていると、風避けがうまく機能したのかあつという間にお湯が沸騰した。

カレー麺の蓋を開けてぶくぶくと沸き立つお湯を注ぐと、ものすごい量の湯気が出て、嗅ぎ慣れたカレーの匂いがボクの鼻をくすぐった。

うん、いい匂い。外で食べるカップ麺はカレー麺にかぎる。

たまには醤油とかシーフードとかにしようかなって思っても、けつきよく買うのはいつもカレー麺だ。

たぶんこれがボクにとっての思い出の味ってやつなんだろうな。

キャンプでいろんなご飯を作ってきたけれど、なにが一番おいしかったかって聞かれたらボクはカレー麺と答えるだろう。

「そろそろ3分たったかな」

時計を見るとだいたい2分半だった。まあいいやどうせ大して変わらないし。

蓋を開ける。押し込められていた湯気がモクモクと立ち昇ってボクのメガネを真っ白に曇らす。

「いたたぎまーす」

本栖湖で一人寂しく食べるカレー麺は、相変わらずすごくおいしかった。

本栖みちのえげつない峠を下り、家に向かってひたすらビーちゃんを走らせる。

「今日は楽しかったなー」

ボクのつぶやきが本栖の空に溶けていく。

一人で走るのはずいぶん久しぶりな気がするけど、やっぱり楽しかった。

友達ができて、ちよつと前までは当たり前だった一人の時間ってやつはめつきり減った。

けど、だからといって一人が嫌いになったかというとなんなことはない。

流れる風、美しい自然。メッキに映る空と雲。ハンドルとステップから伝わるエンジンの鼓動。静まり返った世界で黙々と食べるご飯のおいしさ。

みんなと一緒にいるのは大好きだけど、ボクはやっぱ一人も好きだ。

「今ごろ千明たちは山中湖でキャンプかあ」

あそこ灯りもほとんどないし、夜になったら星が綺麗なんだろうな。まあめっちゃ寒いだろうけど。

「なでしことリンはバイト。ボクは一人でツーリング……」

ちよつと前まではみんな好きなように集まれたけど、もうそうも言ってもらえないのか。

今はバイトだけだけど、2年、3年となれば受験も入ってくる。みんなと一緒に集まれる時間はもつと減っていくんだろうな。

みんなそれぞれ目指す場所がある。ずっと一緒にいるわけにはいかない。

「なんだかなあ……」

しかたないんだけど、ちよつと寂しい。

そんななんとも言えない複雑な感情を抱え本栖みちを一人走っていく。

「このまま進めばリンの家か……」

そんなことを考えていると、なんだかリンに会いたくなってきた。あのぶつきらばうな話を聞きたくなってきた。

「あ、見えた」

視界の向こうに見慣れた一軒家とパステルブルーのスクーターが見えた。

そしてそのスクーターの側にはこれまた見覚えのあるお団子頭。間違いない、リンだ。

遠目でよくわからないけど、バケツみたいなのが見える。洗車でもしてるのかな。

エンジン音に気がついたのか、こつちに顔を向けてきた。おもむろに立ち上がってボクに手を振ってくる。

「おーい」

手を振りかえしてスロットルを回す。そうすればあつという間に距離が縮まった。ウインカーを出してギアを下げながら減速。リンの真横でピタリと停車する。

「やつほーリン。バイト終わったんだ。お疲れ」

「双葉もお疲れ。富士五湖どうだった？」

「楽しかった。写真見る？」

「うん。けど、先にこいつを洗ってからだな」

リンはそう言ってビーノを見た。

たしかに、リンの言うとおりビーノの外装にはところどころ埃や乾いた泥がこびりついていて、けつこう……いや、だいぶ汚いな。

「リン、もしかして乗ってから一回も洗ってない？」

ボクのひと言にリンがプイツと目を逸らした。どうやら凶星だったみたいだ。

「……だ、だつて寒いし」

絞り出すようにリンが言う。

まあ、ボクもその気持ちはすごいわかる。整備は基本的に素手でやることのほうが多いから、冬はとにかく辛いのだ。

「寒いのはわかるけどちゃんと整備してあげないとダメだよ」

でないと乗るたびに罪悪感が湧いてきて、そのうち悪夢に襲われやがて死ぬ。

嘘だけだ。

「う、わかった。整備か……そういえばやったことないな。なにすればいいとかつてある？」

リンの質問に頭を捻る。自分で言つといてなんだけど原付の整備つてなにすればいいんだろうか。

「うーん、毎日乗ってればそれ自体がメンテナンスになるし、正直そんなにすることはなかなか。オイル交換とかクリーナーの交換とかはまだまだ先のことだろうし」

スポンジで擦るたびに綺麗になっていくビーノをしげしげと眺めながら話を進める。

スクーターはバイクと違って見なきゃいけない部分が比較的少ない。しかもリンのビーノはインジェクション式のわりと新しいモデル。

整備はやったほうがいいにこしたことはないけど、ぶっちゃけメンテフリーでもとくに問題はないだろう。

「あ、でもブレーキワイヤーの調整と注油はしておいたほうがいいかも。長く使ってると伸びたり錆びたりするし」

「そういやブレーキとか全然気にしてなかったな。ほかになんかある？」

「あとはタイヤの空気圧とか？ とくにお金とかもいらぬし、今度ガソリンスタンド行く時にでも見てきなよ」

「わかった。今度やってみる」

そうこうしているうちに、ビーノの汚れは粗方落ちたみたいだ。丸みを帯びたボディが太陽を反射してつるんと輝く。

バイクと違ってスクーターは凹凸が少ないから洗うのが簡単そうでいいなあ。

「ま、こんなもんかな」

冷えて真つ赤になった手を揉みながらリンが満足そうにうなづく。心なしかビーノも気持ちよさそうに見えた。

「おつかれ」

「外で話すのもなんだし、中入ろうよ」

「うん、そうだね。けど、その前にと」

ビーちゃんのサイドバッグからバーナーと風よけをセットして五徳にヒーターを乗つける。

火を点けて強火にすればあつという間に熱気が漂ってきた。

手炙りように持つてきて、けつきよく使わなかつたけどまさかこんなところで役に立つとは思わなかつた。

「指冷えてるだろうし、ちよつとだけ暖めてからいかない？」

「ありがと。助かる」

リンがバーナーのそばにしゃがんで手をかぎす。

アルミの風よけがいい感じに熱を反射するおかげで外でも十分に熱気がやってくる。

「あ、あつたけえ……」

「だよねー」

隣にしゃがみ込んで同じように手をかぎす。焚き火のほうが全然あつたかいけど、こういうのも悪くない。

「ていうか風よけ買ったんだ」

アルミの風よけをリンが興味深そうに眺める。

「百均だけどねー」

「でたな100円ショップ」

「550円だったけど」

「たけえ」

「キャンプグッズに比べればなんてことないのに、百均で100円じゃないとなんかすごく高く感じるのってなんでなんだろうね」

「めっちゃわかる」

二人でどうでもいい話をしながらヒーターであつたまる。

とはいえ小さいヒーターじゃ限界があるみたいで、あつたかいのは手元と足だけ。身体は全然暖かくなならない。

ガスもつたないし、もう少し手足を暖めたら家にお邪魔させてもらおう。

「そーいや齊藤たちと山中湖で会ったんだよね」

「うん、富士吉田のカリブーで恵那に帽子選んでもらったんだー」

そう言つてポケットから帽子を取り出して頭にかぶる。

「へえ、似合つてるじゃん。ていうか、双葉も齊藤のこと名前で呼ぶようになったんだな」

「友達なのにずっとさん付けもどうかなくて思つてさ」

もちろん恵那はそんなこと気にしてないだろう。言うなればボクの個人的なけじめみたいなものだ。

「……わたしも名前で呼んだほうがいいのかな」

リンが空を眺めながらつぶやいた。

言われてみればたしかに、リンは恵那と一番長い付き合いにもかかわらず恵那のことを斉藤と呼び捨てにしている。

あれはあれで遠慮してない感じがしてボクはいいと思うんだけど、リンはちよつと思ふところがあるらしい。

「べつにいいんじゃないかな。恵那だつて気にしてないよ。というかリンもそういうの気にするんだね」

「もは余計だもは。まあ、双葉の言うとおりなんだけどさ。あいつのこと名前で呼んでないのもうわたしだけなんだよなつて思つて」

「あーたしかに」

ボクもリンと同じ状況だつたらちよつと気まずいかもしれない。

「でも今さら名前で呼ぶのも変だしなあ……てか恥ずい」

後半のほうは追求しないようにしておこう。またリンが恥ずかしがる。

「そういえば、リンと恵那つていつごろ知り合つたの？」

ふと気になつてたずねてみる。

「えつと中学の時。五十音順でたまたま席一緒になつて、それからなんとなく」

同じさ行だからってことだろうか。あるあるだ。ボクにとつてはないんだけど。

ボクも同じパターンで同級生に話しかけられた記憶はあるけど「あ」とか「う」とかしか言えなかった覚えがある。

懐かしいなあ。うん、懐かしいなあ……

「どうしたの？ 双葉」

「な、なんでもないよー！」

「あつそ」

リンがまたかと言いたげにボクを見る。

いけないいけない。またボツチの暗黒面に飲み込まれるところだった。

これだから黒歴史はいやなんだ。いつまでたつてもフラッシュバックしてくる。

じゃない。今は恵那のことを話しているんだ。

「まあ、大したことは言えないけど、リンが本当に名前前で呼びたくなつたらでいいんじゃないかな」

「……そう？」

「そうだよ。みんなが名前前で呼んでるから呼ぶつてのはちよつと違うと思うな」

だって、それは自分の意思じゃないから。

ボクが恵那のことを名前前で呼ぼうと思つたのは、ボクはあの子のことを友達だと思つ

たからだ。友達だと思えたからだ。

決してみんなが呼んでるからなんとなくじゃない。

「呼び方なんて適当でいいんだよ。意味なんてあとから勝手についてくるんだからさ」
ビーちゃんに名前をつけた時のことを思い出す。ぶっちゃけ呼び方に大して意味はないと思う。

そんなものはあとから自分で見出していけばいいだけの話だ。

「リンはリンなんだから、リンの好きなようにすればいいんだよ」

「適当だなあ。でも、ちよつと参考になつたわ」

「けど、名前で呼んであげたらきつと恵那も喜ぶと思うけどね」

名前を呼ばれて嬉しくない人ってあんまりいないと思う。

ボクだって千明たちに会うまで山中さんとしか呼ばれなかったから、名前で呼ばれた時すごくうれしかった。

たぶん、恵那だって同じだ。長い付き合いならなおさらだろう。

「けつきよくどつちなんだよ」

「ふっふっふ、悩むがよいぞ。若人よ」

「お前も若人だろ」

「4月生まれだからボクのほうが年上だもーん」

そう。ボクは鳥羽先生を除いたら誰よりも年上なのだ！ だからもっと敬うべきなのだ！

「はいはい、年上年上」

が、そんな世迷言はリンにぼつさり切りられた。知ってた。だって同じ学年だもんね。

「……まあ、でもありがと」

横でヒーターに暖まるリンの横顔がふつと微笑んだ。

二人で黙って空を見上げる。まだ3時だっていうのに、空はもうオレンジに染まっていた。

冬は日が暮れるのが早い。ここももうじき暗くなるだろう。不意に風が吹く。

「さむっ」

あまりの寒さに二人で身震い。さすがにヒーターだけじゃ厳しいや。

「寒いね」

そろそろ中に入ろう。

バーナーの火を止めて風よけを片付ける。バーナーとヒーターは熱いから冷めてからにしよう。

「そっぴゃあいつら大丈夫かな」

ふとリンが思い出したかのようにそうつぶやいた。

「千明たちのこと?」

ボクが聞くとリンが心配そうにうなずいた。なにかまずいことでもあるんだろうか。「あいつら山中湖でキャンプしてるって言ってたけど、この時期の山中湖って夜になるとマイナス15度とかいったりするんだよね」

「えっ!? それ本当?」

マイナス15度って……そんなに寒くなるのか。全然知らなかった。それ、本当にやばい気がするんだけど。

大丈夫かな、千明たち。

「うん。街灯もないからあつという間に真っ暗になるし、そうなたらもつと寒くなるし、心配なんだよね」

リンの言うとおりで。

3人とも慣れてるから平気だろうって考えてたけど、よく考えたら真冬の山ほど寒い場所はない。

そう考えるとますます心配になってきた。

「ちよつと電話してみる」

スマホを出して千明に電話する。コール音が鳴って電話が繋がる。よかった。繋が

『おかけになった電話は——』

と思つたけどぬか喜びだった。千明はダメつと。同じようにあおいと恵那にも電話をかけるが一向につながらない。

あおいだけはコール音はするんだけど、肝心の本人が電話にでない。荷物にでもまぎれてるのかな。

「誰も繋がらない……」

「え、マジ？」

ボクの答えにリンの表情がますます険しくなる。

普通に考えればバッテリーが切れてるか機内モードにでもしてるだけなんだろうけど、場所が場所だけに不安が募っていく。

「……とりあえず鳥羽先生に連絡して、なんでヘルメット被ってるの？」

ヘルメットを被ったボクにリンが目を見開く。そうだ。リンにあれあるか聞こう。

「リン、CB缶つて家にある？」

「一応鍋とかで使うからあるけど……」

「そっか、あと薪とかつてある？」

「買い置きがひと束……」

手持ちのガス缶とリンの家のガス缶、あと薪がひと束。これくらいあれば一晩はなんとかなるか……

「リン、悪いんだけど貰っていい？ もちろんお金は払うからさ」

「いきなりなんの……まさか双葉」

リンが信じられないと言いたげにボクをみる。

そう、そのまさかだ。

「うん！ 心配だしちよつと見てくるよ」

力強くうなづく。

なにもないかもしれないけど、さすがに連絡が途絶した状況でほうっておくことはできない。

なにもなければそれでいい。でももしなにかあったら後悔してもしきれない。

「コンビニに行くんじゃないんだぞ！ 何キロ離れてると思ってるんだよ」

珍しく声を荒げるリン。心配してくれるのは嬉しい。けど、今一番フットワークが軽いのはボクなのだ。

たしか、ここから山中湖まで50キロくらいだったっけ。

なんだ。たったそれだけか。

「なに言ってるのリン。たったの50キロ、だよ」

だいたい1時間半もあればつくだろう。なんてこともない、リンの言うとおりコンビ二に行くのと大差ない。

「大丈夫だよ。ちよつと様子見にいくだけだからね。なにもなかったらすぐ帰ってくるよ。もし本当にやばそうだったらさすがに連絡する」

自分だけでどうにかしようなんてはなから考えてない。そういう独りよがりな考えはもうやめにしたのだ。

「だからおねがい」

改めてリンに懇願する。長い沈黙のあと、リンが口を開いた。

「……はあ、今薪とガス持つてくる」

ここでなにを言ってもボクの考えが変わることはないと思つたのか、リンは諦めたようにため息をついてからそう言ってくれた。

「リン、ありがとう！」

「言つとくけど無茶すんなよ。双葉になにかあつたら意味ないんだからな」

「わかつてる。ちゃんと安全第一で、でしょ？」

大して遠くもないし、急がなくてもすぐにつく。ガソリンも本栖湖の近くのスタンドで入れてきたばかり、往復分の分は十分にある。

「ちよつと待つてて、今持つてくる」

リンが足早に家の中に入っていく。

よし、今のうちにエンジンを温めておこう。冷めたバーナーをバッグに押し込んでエンジンをかける。

チョークを引いてキックペダルを蹴り飛ばし、アクセルを吹かせば待つてましたと言わんばかりにエンジンが元気よく唸る。

「また走ることになるけど、よろしくねビーちゃん」

マカセトケ!

風に乗って、どこかからそんな声が聞こえた。

17—3

月明かりとヘッドライトの灯りを頼りに山中湖のほとりを駆け抜ける。

空はさつきまでの明るさが嘘のように真つ暗で、ミラーにはどこまでも続く漆黒の闇が映っていた。

「知ってたけど寒い！」

気温2度の海岸を時速50キロで走ってもほとんど寒さを感じないボクの装備ですら思わず身震いしてしまうほどの寒さ。リンの言つてたとおりだ。

「あと少しで例のキャンプ場か……」

途中で何回か電話したけど繋がらなかった。そしてこの寒さ。これは本当にまずいことになってるかもしれない。

千明たち無事だといんだけど……

「あれかな」

真つ暗な世界の中で、ヘッドライトの光がキャンプ場の看板を照らした。

大間々岬キャンプ場。間違いない、ここだ。ウインカーを出して敷地の中に入つていく。

「くらっ」

案の定キャンプ場の中は真つ暗で灯の一つも見当たらない。

地図で見たかぎりそこまで広いキャンプ場じゃないみたいだけど、この暗さだと探すのに苦労しそうだ。

少し走ると管理棟らしき建物が見えたのでその前で停車。エンジンを切ると身も心も凍りつくような寒さと静けさがボクを包みこんだ。

「さ、さむっ……」

ただでさえ寒いのに、ヘルメットを脱ぐともつと寒い。買ったばかりのニットキャップを被ると少しだけ寒さがやわらいだ。

買っててよかった。恵那に感謝しないと。

「よし、探そう」

リンから借りた懐中電灯のスイッチを入れて一步踏み出す。

その時だった。

「よ、よかった！ ひ、人がいた」

がさりと足音が聞こえて後ろから声をかけられた。一瞬どきりとしつつも振り向き懐中電灯を向ける。

「つて、千明？」

「……あれ双葉？」

光の向こうには、今まさに探そうとしていた友だちが息を荒げてほけつとボクを見ていた。

「なんか、ほんとすまん」

二人で持つてきたガスや薪を運びながら真っ暗なキャンプ場を歩いていくと、千明が申し訳なさそうに謝った。

「誰とも電話繋がらなくて本当に心配したんだからね」

ボクがそう言うと、千明が不思議そうにスマホを取り出した。

「いや、そんなはずは……」

電源がオンになって青白い光が千明の顔を照らし少しして顔が青くなった。

「あ、やべ。機内モード入れっぱだったわ」

「やっぱり。そんなことだと思ったよ」

どうりで繋がらないわけだ。

学校サボって伊豆に行った時、二人があれだけ心配した理由が今ならよくわかる。連絡が取れないってこんなに恐いことだったんだな。

「ボクも人のこと言えないけどさ、ちゃんと繋がるようにしないとダメだよ」

「うう、面目ねえ」

そう言つてがつくりとうなだれる。

「すぎちやつたことはしようがないよ。それで、今どんな状況なの？」

「気がついたらマイナス2度だよ。さすがにやべえと思つて二手に分かれることにしたんだ。で、あたしはコンビニにカイロ買いにいっく係で、イヌ子たちには焚き火と鍋の準備。けど、焚き火の匂いもしてこねえしこの様子だと薪買えたか怪しいなあ……」

千明が顔を後ろに向けてあるもぬけの殻となつた管理棟を見た。

遊んでるうちに気がついたら日が暮れていて、キャンプ場の管理人も帰つてしまつたつてところだろうか。

「まさかこんな寒いなんて知らなくてよ。ちよつと舐めてたわ、冬のキャンプ」
げつそりする千明。

ボクもリンに言われるまで知らなかつたし、しかたないといえればしかたない気がする。

ただちよつと今回は油断しすぎだと言わざるをえないけど。

でも、千明も十分反省してるみたいだし、ボクがこれ以上なにか言う必要はないだろう。

「ほんと、ありがとな。わざわざ助けてにきてくれて」

「お礼ならリンに言つてよ。ボクもリンに言われるまで気が付かなかつたしさ」

「そっか……あとでリンにもちゃんとお礼言つとかないとな」

「ま、とにかく今は早く二人と合流しようか。きつと寒い思ひしてるだろうし」

「だな。お、見えてきた」

暗がりの中を歩いていると見覚えのあるテントとタープが見えてきた。間違いない野クルのテントだ。

「あれ？ 灯りついてないね」

けれど、こんな真つ暗にもかかわらずテントは真つ暗。中を覗いてみても誰もいない。どこ行つたんだろう。

「ほんとだ。あいつらどこ行つたんだ。おーい！ イヌ子ー！ 恵那ー！」

「あ、アキちゃんこつちこつちー！」

聴き覚えのある声がして千明と一緒に声のしたほうに振り向く。

「おーい！」

暗くて気がつかなかったけど、大して離れてない距離に煙突の伸びた白い大きなテナトが張られていて、その中から恵那がボクたちに手招きしていた。

よかった。こつちも無事だった。

「つて、双葉ちゃん!？」

そして、恵那がボクを見て目を丸くした。まあ普通はいるなんて思わないだろうしね。

「恵那ちゃんアキ帰ってきたん？ つてなんで双葉ちゃんおるん!？」

あ、あおいも出てきた。

そろつて口をあんぐりと開けて驚く恵那とあおい。そんな二人が面白くて、思わず笑ってしまう。

まあ、なにはともあれ元気そうで何よりだ。

「やつほー 来ちゃった」

そう言つて、ボクは二人に手を振った。

「あつたかあ〜」

パチパチとストーブの中で燃え盛る薪に手をかざす。バイクで冷え切った身体が血

の気を取り戻していくのがよくわかった。

ワン！ そんな声……っていうか鳴き声がしてボクの横に茶色いモフモフが擦り寄ってきた。

茶色いもふもふ、もといワンコがボクのしやがんでいたボクの顔をぺろぺろと舐めてくる。

「あはは、くすぐったいってー」

仕返しに首回りを撫で回してあげると、気持ちよさそうに尻尾をぶんぶん振ってくれた。

やばい、めっちゃんこかわいい……

「はっは、チョコもお嬢ちゃんのことが入ったみたいだな」

そんなボクたちを見て、白髪頭の初老のおじさんが豪快にわらった。

「こらチョコ！ お客さんに意地悪しちゃダメよ」

おじさんの隣に座ったお姉さんがそう言うと、ワンコはお姉さんのもとに戻っていった。

「双葉ちゃん、わざわざ来てくれてほんまにありがどうなあ」

椅子に座ったあおいが嬉しそうにそうに笑った。

ボクは今、たまたまここで親子でキャンプをしていたこの人たちのテントにお邪魔し

ていた。

というのも、恵那たちいわく管理人が帰ってしまった途方にくれていたところをこの二人が助けてくれたらしい。

おかげで3人とも寒い思いをせずにこうして無事にすごせている。本当にこの二人には感謝してもしきれない。

「たまたまりんの家へ寄っててそれで気づいたってだけだし、お礼ならリンに言つてよ」「そっか、リンが……あれ、リンの家つてここから50キロくらい離れてるよね?」「50キロ……そんな遠くからわざわざ」

恵那と、恵那たちを助けてくれたキャンパーのお姉さんが驚いたように目を見開いた。

「ほんと、悪いことしちゃったなあ」

「ごめんね……双葉ちゃん」

「ごめんなあ、双葉ちゃん」

3人が心底申し訳なさそうに謝ってくる。ここまでかしまられるとなんだか調子が狂う。

「誰も悪いわけじゃないんだからさ。3人が無事ならそれで十分だよ。だからもうそんな顔しないで」

今言った言葉は紛れもないボクの本心だった。

もし3人になにかあったら悔やんでも悔やみ切れない。笑い事ですんで本当によかった。

「それにたかが50キロでしょ？ 2時間くらいしか走ってないしコンビニに行くようなもんだよ。ほんと大した距離じゃないから全然気にしなくていいよ」

久しぶりに真つ暗な峠道を走ったけど、楽しかったなー 今からまた走りに行こつかな。

あ、ダメだ。明日バイトだ。がつくし。

「いや、2時間はどう考えても………もうそれでいいわ」

千明がなにか言おうとして、やがて諦めたのか、額に手を当てて大きなため息をついた。

「なっはっは！ おもしろい嬢ちゃんだにー」

「あの道けつこう暗いと思うんですけど……あ、あはは」

おじさんは笑っているけど、お姉さんのほうが心なしか顔が引きつっているような

……

まあいいや。いつものことだし。時計を見る。もう遅いし帰るとするか。

「あれ？ 嬢ちゃんもう帰るんけ？」

立ち上がってテントの出口に身体向けたボクをおじさんが呼び止める。

「はい、もう暗くなってきたんで」

3人が無事なことも確認した。

ここに長居する必要もない。この様子なら薪もガスも必要ないだろうしリンに返しに行かないと。

というか、そろそろ帰らないと目の前でおいしそうに煮えているお鍋の誘惑に耐え切れなくなる。

ほんのりごま油の香りのするきりたんぽに……なんだろうこの牛肉っぽい匂い。思いついたモツだ。いいな、もつ鍋。

おいしそうだなあ……いけないいけない。危うく誘惑に負けるところだった。

「あの、せっかく来たんだしよかったらお鍋食べていきませんか？」

お姉さんの一言に思わずぎくり。もしかしてお鍋見てるのバレた？

「い、いや、あのべ、べつにボクはお腹空いてない——」

ぐうう。ふとそんな音がした。

ちなみになんの音なのかは言わなくてもいいだろう。そして誰が音を出したのかも言わなくていいだろう。

はい、ボクです。

「ふふふ、今お腕用意しますね」

「……………ご馳走になります」

絞り出すように言った言葉に、みんなが笑った。うう、恥ずかしい。

「ささ、お姉さんももう一杯！」

「でへへへ、ありがとうございますう〜」

「相変わらずすごい変わり身ようだ……」

ボクは気がついたらこうなっていた元美人教師を眺めてつぶやいた。

あれから少しして、リンから連絡を受けた鳥羽先生がやってきて、千明たちのことはなんとかかたがっていた。

さすがにテントで寝るのは無理なので、3人とも今夜は鳥羽先生の車で車中泊するらしい。

いろいろあつたけど、なにはともあれ一件落着というわけだ。

さて、ボクもいい加減帰るとしますか。

「先生、ボク帰りますねー」

「え？ やまなかさんかえつちやうんですかあ？」

「はい、もう暗いんで」

まだ美人教師成分が残っている鳥羽先生に帰る旨を伝える。

完全にグビ姐になっちゃうと、なし崩しにここに残ることになっちゃう気がしたからだ。

「え、双葉ちゃんほんまに帰ってまうん？」

「もう真つ暗だし泊まっていけばいいじゃねえか」

千明とあおいが引き留めてくる。

二人の言ってることはもつともだ。たしかに今から帰るのはちよつとめんどくさい。けど、明日はバイトだ。

ここからそのままバイトに行ってもいいけど、さすがに一回家に帰りたい。

心配してくれている二人には悪いけど今日はもう帰ろう。

「せつかくだけど、リンから借りてきたガスと薪返さなきゃいけないし、もう帰るよ」

「あ、わたしの家もとすのほうなんで明日しまさんの家までとどけますよー」

頬を赤らめた鳥羽先生がそんな提案をしてきた。

酔ってるせいでちよつと舌足らずだけど、その目は心配するようにボクを見ていた。

たしかに、荷物は軽いにこしたことはない。そういうことならここはお言葉に甘えておこう。

「すみません先生。お願いしてもいいですか？」

「はい。やまなかさんも気をつけてくださいね」

了承する先生に会釈してジャケットのチャックを上まで押し上げ寒さに備える。きつと寒いだろうなあ。

ま、たまにはこういうのもありか。

「お二人とも、今日はありがとうございました。お鍋おいしかったです」

おじさんたちもとい飯田さん親子にお辞儀。ほんところの二人にはすごいお世話になった。感謝してもしきれない。

「帰り道、気をつけてくださいね」

「お、気をつけるんだぞー」

「はいー！」

笑顔で会釈してテントを後にする。その瞬間、猛烈な寒さが身体を包んだ。

うわ、これ思った以上に寒いや。こんなところでキャンプなんて、よほどの準備しないとできないな。ボクも気をつけよ。

「かーえろつと」

と、その前に千明たちのテントに置いてきた薪とガス、取りに行かないと。

「双葉ちゃんー！」

そう思って歩き出したボクを誰かが呼び止めた。振り返る。恵那がボクを見ていた。「どうしたの?」

ボクが聞くと、恵那がちよつと嬉しそうに目を細めた。

「今日はほんとにありがと。それと心配かけてごめんね」

「ほんと気にしなくていいって。ツーリングの途中で寄つたみたいなものだしさ」

「薪とガス満載で寄り道しただけってのは、無理があると思うな」

「うぐ……」

凶星を突かれ思わず唸る。

助けるつもりで来たのは間違いない

ど、それを大っぴらにするのはなんか恥ずかしいのだ。

恵那なら空気を読んで合わせてくれると思ったのに。

「ふふふ、ありがとね。双葉ちゃん」

「う、うん……」

どこかからかうような感じでそう言われ思わず顔が熱くなる。なんか、調子狂うなあ。

「これからお家帰るんだよね?」

「そうだよ」

「南部町だよね。けっこう遠くない？」

「そうかな？ まあだいたい70キロくらいだよ」

南部町方面なら比較的街灯も多いし、寒い以外はとくに問題はない。帰ったらすぐにお風呂入ろつと。

「え、そんなにあるんだ……」

家までの距離を聞いて、恵那が驚いたように口を半開きにした。

「そう？ 大した距離じゃないでしょ」

「ううん、大した距離だよ」

どこか真剣な表情で恵那は言った。

いつもニコニコしている印象が強かったから、なんだか今の恵那は別人のように見えた。

「恵那たちにはいっぱい良くしてもらってるし、このくらい当然だよ」

恵那たちは自覚してないだろうけど、ボクはこれ以上のものをたくさんもらっている。

恩返ししてわけじゃないけど、ちょっとくらいはお返しをしたい。まあけつきよく取り越し苦労になっちゃったけどね。

でもそれでいいのだ。

「……やっぱり優しいね双葉ちゃん」

前にも綾乃に似たようなことを言われた覚えがある。あの時は否定しちやつたけど、今はそうじゃない。

「だって恵那もボクの大事な友だちだもん。友だちが困ってるのになにもしないなんて、ボクやだよ」

リンだって真つ暗な本栖湖まで助けにきてくれた。

リンみたいにかっこよくはいかないかもしれないけど、ボクだって同じようにしたい。

「それにさ」

「うん？」

ポケットから恵那に選んでもらったニットキャップ出してを被る。

暖かくなる頭。暖かくなる心。思い返してみれば、友達にこういったものを選んでもらったのなんて生まれて初めてだった。

「帽子、選んでもらったしね」

「え、あ、うん」

恵那がボクのひと言にきよとんとする。

なんか自分で言ってる恥ずかしくなってきた。いい加減帰ろう。じゃあねと言って

人差し指と中指をこめかみでシュツツと振る。

「寒いし、風邪ひかないようにねー」

背を向けて歩き出す。やばい、なんかどどん恥ずかしくなってきた。早く帰ろ。

「おやすみー！ 双葉ちゃん……ううん、双葉！」

後ろから聞こえてくる声に振り向かず、手を振る。あれ、今ボクのこと呼び捨てにしてたような……

「ま、いつか」

呼び方なんてなんだっていい。恵那がボクのことを友だちと思ってくれているのなら、それだけで十分だ。

けどまあ、ちよつとだけ嬉しかったりするのもまた事実。なんだかい気分になつて思わず鼻歌を歌う。

「あ、リンに電話しないと」

スマホを出してリンを電話をかける。

「1コールもしないうちに電話がつながった。こつちにも心配かけちゃったみたいだな。」

「もしもしリン？」

『あ、やっと電話きた。鳥羽先生から聞いたよ。3人とも無事だったんだな。よかった』

「うん。みんなリンに感謝してたよ。ありがとうーって」

『ふっ、心配かけさせやがって。月曜会つたらちよつと説教だな。それで、双葉はこれから帰り?』

「みんなには一泊してけつて言われたけど、明日バイトだし帰ることにしたよ」

『そつか、ならわたしの家泊まりなよ。こつちのほうに近いでしょ』

たしかにリンの家のほうが近いし、バイト先もすぐだ。どうしよ。

『お父さんとお母さんにはもう言つてあるから大丈夫だよ。どう?』

さすがリン。もう根回しはすんでいるみたいだ。ほんと志摩家にはお世話になりつぱなしだなあ。

「ありがと。お世話になるね」

それに家に一人でいるよりも、リンと一緒にいたほうが楽しいしね。

『じゃあ待つてる。まだそこまで遅くないけど暗いんだからあんま飛ばすなよ。あと帰つたらすぐ風呂だからな』

慣れてるから大丈夫つて言つてるのに、リンはやつぱり心配性だな。でもそんなところが大好きなんだけどね。

「はーい」

『あと双葉』

電話を切ろうとしたボクをリンが呼び止める。どうしたんだろう。

『その……ありがとう』

なにに対してのありがとうなのか。いちいち聞き返したりはしない。そんなことは聞かなくてもわかる。

自然と笑顔になっていくボクの顔。

「じゃあお助け料1300円」

そんな満たされた気持ちのまま冗談を言う。いつぞやのガソリンスタンドのお返しってやつだ。

『おい、金取るのか』

「うそうそ。今度キャンプにでも連れてってよ」

『ふっ、わかった。なら双葉が帰ってくるまでにいろいろピックアップしとくよ』

「うん。できればあんまり寒くないところがいいなーなんて」

『りよーかい』

寒い冬。寒い夜。吐いた息が白く濁る。ここは寒い。早くリンのところに帰るとしよう。

18話 清水屋 雨畑茶アイヌ 300円（税込）

18—1

「これが河口湖でしょー」

「わあ、こっちの富士山も綺麗だね」

スマホに映った写真になでしこが目を輝かせる。

そんなボクたちからちよつと離れたところで、図書室の備品のストープがごうごうと暖かい熱気を出していた。

「で、次が西湖。めっちゃキャンプ場あった」

画面をスライド。うーん、他の写真に比べると西湖だけ写りが悪いなあ。

「あれ？ 西湖ってこんなちよつちよつちよつか？」

と、恵那が言う。やっぱりそう思うよね。

「なんか、キャンプ場が多すぎて端っこからしか撮れなかった。こんなことなら向こう

岸のほうに行けばよかったよ」

ちよつと失敗したな。おのれキャンプ場め。

「まあ、いつか行った時にでも撮ればいいだろ」

リンが写真を見ながら笑った。そうだ、また今度行った時にでも撮ればいいよね。

「で、精進湖行つてー本栖湖行つてー」

画面をスライドして写真をパラパラとめくつていく。

「それから斉藤たち助けに行つてまた山中湖だろ？ 改めて聞かされると、めっちゃ

ハードだな」

どんくらい走つたんだろう。確実に200キロ以上は走つたと思う。軽いツーリン

グのつもりだったのに意外とがつつり走つてしまった。

「ほんと、リンと双葉と鳥羽先生に感謝だよ。3人がいなかったらどうなつてたか」

「わたしも本栖湖でリンちゃん和双葉ちゃんに助けられたことあるよ！」

「ボクも本栖湖でガス欠した時にリンに助けてもらったなあ。あの時のリン、すごく

かっこよかつたよ」

「わーい！ わたしたち本栖湖仲間だ！」

「うん！」

お互いに手をあわせてハイタッチ。

「なんだそりゃ」

ボクもわからない。なにがわーいなんだろう。まあ楽しいからいいや。

「でもまあ、斉藤たちがなんともなくてよかったよ。今度から気をつけるよ」

「はーい」

月曜、放課後の図書室。

ボクはリンとなでしこと恵那の四人でこの前のハプニングのことで盛り上がっていた。た。

「ほんとだったたら千明とあおいにも言つてやりたいところだけど、今日はあいつらバイトだしな」

全員そろっていている時は校庭で、そうでない時は図書室で集まるのが最近のボクたちの習慣だ。

「ボクもなでしこもバイト始めちゃったし、だんだんみんなが集まれる時間減ってきちゃったよね……」

「ちよつと寂しいよ。オヨヨ」

「だよねー オヨヨ」

ふざけて嘘泣きするけど、実際本当に寂しかったりする。しかたないことなのはわかっているけど、やっぱり寂しいものは寂しい。

「そ、そんなに寂しいならわたしたちで臨時野クルでもやる？」

リンがなんだかおもしろいことを言ってきた。臨時野クル、なにするんだろう。ストーブでお餅でも焼くのかな。

なんかおいしそう。

「お、いいねー 臨時野クル」

「やりたいやりたい！」

「ボクも！」

「す、すごい食いついてきた……」

ボクたちのあまりの食いつきっぷりに、リンがちよつと恥ずかしそうに頬を赤くした。

それにしてもリンの口からこんな言葉がでてくるなんて驚きだ。

「あ、でもわたし今日用事あるからもう帰るねー」

それだけ言つてそそくさとカバンを抱え歩き出す恵那。用事つてなんだろう。実はバイトだったりして。

「またね恵那ー！」

「また明日ー」

手を振つて見送るボクたちに軽く手を振り返して恵那が廊下に向かって歩き出す。

「またな……え、恵那」

リンがぼそつとつぶやいたひと言に恵那が一瞬立ち止まる。

あれ、今リン恵那のこと名前で呼んだよね。

「……………うん！　また明日、リン！」

恵那はいつものニコニコとした感じとは違う、それこそ満面の笑みとしか言いようのない表情でにつこりと笑ったあと、足早に去っていった。

そして静まり返る図書室。ストーブがやかましく燃え盛る。

「な、なに二人してニヤニヤしてんだよ」

「べつにく　ねー双葉ちゃん」

「ねーなでしこ」

照れるリンを見ながらなでしこ肩を並べて読書用のテーブルに肘をつきにつこりと笑う。

「あ、あつそ」

こんな微笑ましいリンを見れるようになるなんて思ってもなかった。人ってやつぱり変わっていくものなんだなあ。

「そ、そういえばなでしこ。この前ソロキャン行くなって言ってたけど、あれからどうなったの？」

リンがごまかすように話を切り替える。そういえばこの前までこの家に行ったときそんなこと言ってたな。

「うん。今週行こうかなって思ってる。まだ場所は決めてないんだけどね」

「そっか。なら早めに場所決めといたほうがいいよ。場所によるけど予約しないといけないところもあるし」

「だよね。でもいろいろ探してるんだけど全然決まらないんだ。リンちゃんと双葉ちゃんはいつともうやって決めてるの?」

「わたしは先に行きたい場所決めて、次にその付近のキャンプ場調べて、あとは口コミとかキャンプブログとか見てって感じ」

リンの話聞き終わったのでしが、ボクのほうに顔を向ける。次はボクの番か。

「ボクもリンとほとんど同じかな。行きたいところ決めて、あとは行ってから」

うーん、我ながらすごい雑な説明だ。でもそうとしか言いようがないしなあ。

「べつにキャンプ場じゃなくてもテント張るのOKな公園とかあるし、そういうところでもやるのもありかも。琵琶湖行った時もそうだったし」

そういうえば、綾乃今ごろどうしてるんだらう。元気にしてるかな。

「公園……ってことは無料!」

無料って言葉に目を輝かせるのでしこ。まあキャンプってお金かかるしね。

「うん。けど、だいたいそういうところって焚き火禁止なところが多いけどね」

「そっか、焚き火できないのかあ」

あからさまに落ち込むなでしこ。気持ちはわかる。やっぱりキャンプするなら焚き火はしたい。

「市営のキャンプ場なら無料で焚き火もOKのところもあるし、いろいろ探してみなよ」

そんななでしこをフォロワーするようにリンが付け足した。

「そうだね。わたし探してみるよ！ あ、ここ良さそう——」

赤く染まった西日が差し込む図書室で、3人であれやこれやと話し込む。キャンプってやっぱり楽しいな。

そう思うボクなのであった。

「ふむふむ……なるほどなるほど」

それからボクたちは、なでしこのソロキャンデビューについてあれこれ話し合った。

「わからないことあつたらいつでも聞きなよ」

「うん！」

ソロキャンに関して右に出るものがないリンの的確なアドバイスのおかげで、な

でしこもずいぶんと自信がついたらしい。きつきとは目の輝きが違う。

「二人ともありがと！ よーし、わたしもソロキャンデビューするぞー！」

キラキラと目を輝かせ意気込むなでしこ。やる気は十分みたいだ。

「大丈夫だろうけど、なにかあつたらすぐ電話してね。すぐ駆けつけるから」

とはいえ、守らなきゃいけないことをちゃんと守れば、キャンプはなにも危なくない。なでしこはそういうところはちゃんとしている子だ。

たぶんこの分なら大丈夫だろう。

「双葉がそう言うのと、マジでどこにでも来そうだな」

「150キロ圏内なら5時間以内に駆けつけるからね！」

「もー双葉ちゃん心配しすぎだよー じゃあわたし帰るね。また明日ー！」

「また明日ー」

鞆を持って廊下に向かって駆け出すなでしこをボクとリンで見送る。

廊下から聞こえてくるなでしこの元気な足音。そんな足音もやがて聞こえなくなり、図書室に再び静けさが戻ってきた。

「行つたか。ほんと元気だよなあいつ」

「だねー」

それだけ言つてリンが読んでいる途中だったらしい本に視線を戻す。ボクもスマホ

に目をやって保存した写真を眺める。

とくになにか話すわけでもなく、ただただお互いにやりたいことをやる。知り合ったばかりのころは気まずかった沈黙も、今ではなんか心地が良い。

「……そういえば、斉藤のやつ双葉のこと呼び捨てにしてたな」

ふと、リンが思い出したみたいにそんなことを言い出した。

「先週までちゃん付けだったよな」

「そういえば、そうだったね」

ボクのひと言にリンの目が細まる。

「あいつとなんかあったの？」

「いや、とくになにもないと思うけど……」

強いて言うなら山中湖での一件だろうか。

でもボク本当になにもしてないしなあ。実際に助けたのはリンと飯田さん親子と鳥羽先生だし。

うーん、悪い気はしないけど謎だ。

「ふうーん……」

首を傾げるボクを光のないじとーっとした目が見つめる。

「ど、どうしたのリン」

な、なんか怖いんだけど。

「……べつに、なんでも」

それだけ言うとしんはプイツとボクから目を逸らした。ほんとにどうしたんだろう。お互いになにか話すわけでもなく、なんとも言えない気まずい時間が流れる。

「……今週の土日、空いてる？」

そんな気まずい沈黙の中、不意にリンが本のページをめくりながら聞いてきた。
「うん」

先週はたまたま助っ人で入ってたけど、基本的に土日は空けるようにしている。ボクは暇だった。リンも同じように暇らしい。

「行く？」

だからボクはいつものように聞いた。

「ん」

そしてリンもいつものように返事をした。

静かな図書室。ストーブだけがやかましく燃えていた。

「天気いいからちよつとあつたかいね」

枯れ木の山脈と、青い空の広がる県道37号。そんな道をボクとリンはいつものように走っていた。

『でも夜マイナス5度らしいよ』

「さむ」

トコトコと走っていくピアノをのんびりと追いかけていく。のどかな山道に4ストと2ストのエンジンが鳴り響く。

『そつちはいいだろ。どうせストーブあるんだし。たまにはわたしにもよこせ』

「じゃあ一緒に寝る？」

『まあ、それなら……』

「あ、うん」

冗談半分で言ったつもりだったが、思いのほか本気で返されてしまった。

『どうしたの？』

先を走っているリンがちらりとミラーでボクのほうを見る。

「ううん、なんでもない」

なんていうか、山中湖での一件以来、リンが素直になつたような気がする。

「ふふ」

『なんで笑ってるんだよ』

冬が春になるように、人もまた変わっていく。必ずしもいいことばかりとはかぎらないけど、かといつて、悪いことばかりでもない。

「なんでもー」

県道37号線。枯れ木の生い茂る冬の山道を二人静かに走っていく。

「ぴ、びーす」

古ぼけた民家をバックに写真を一枚。

「……なんか、絵面が地味だな」

撮り終わった写真を見たリンがひと言。

笑顔と真顔の間の中途半端な表情。全体的に茶色っぽい背景。ピースサインこそしているけど、なんていうかやり慣れてない感が半端ない。

「やつぱ、なでしこたちみたいにはいかないかあ」

「ぼっちが揃っても、ぼっちが二人になるだけだもんな」

「リン、笑えないよ」

「わたしも言つて後悔した」

じゃあなんで言ったのさ。

そんななんとも言えない微妙な空気のまま古い民家の立ち並ぶ急勾配の坂道を二人で歩いていく。

「ここ、赤沢宿って言うんだっけ？　すごいね、こんな山奥に集落があるなんて」

「昔、身延山とかにお参りに行く人たちの宿で栄えてたんだってさ。で、その辺にある古い家屋は当時のままなんだって。つて、ネットに書いてあった」

「へえ」

石垣で作られた急勾配の坂道とか、そんな坂にしがみつくように建っている古い家屋。

朝の人気のなさもあいまって、まるでここだけ昔にタイムスリップしたかのような、そんな趣きがある。

「いいね、こういうの」

「わたしも好きだな。こういうところ」

家から100キロも離れてないところにこんな素敵な場所があるなんて知らなかった。ボクもまだまだだな。

そんな趣きのある集落、ひんやりとした朝の匂いを嗅ぎながら、ブーツの靴底を地面に打ちつけていく。

心地のいい風景、心地のいい風、心地のいい時間。
けど……

「き、きつい……」

坂めつちやしんどい……

「ちよ、ちよつとペース間違えたかも……」

お互いにぜえぜえと息をしながら坂をゆつくりと登っていく。バイクばかり乗ってるから鈍つちやつてるのかなあ。

そんなボクたちを追い討ちするかのように冷たい風が吹き荒ぶ。

「さ、さみい……」

「そ、そうだね」

話し言葉すら白いもやとなってボクたちの周りを漂う。

ほんと、バイクに乗ってる時はなんとも思わないんだけどなあ。不思議だ。

「ここ古民家カフェあるみたいだし、ちよつと寄ってかない？」

「だね、ちよつとあつたかいもの飲んでこうか」

カフェという言葉に、少しだけ元気が湧いてくる。

リンについて歩き出す。古めかしい石垣に二対のブーツの足音がコツコツと鳴り響いた。

「ふい〜」

年季の入った和室。いぐさの香りに包まれて、四肢をだらしなく投げ出しこたつに沈み込む。

「餅がいる……」

中身のはみ出した焼き餅みたいにこたつに全身を委ねるボクを、リンがおもしろ半分に写真に収める。

「双葉って、こたつ入るといつもそうなるよな」

「だって好きなんだから」

「ま、気持ちわかるけどさ」

そう言うリンの顔もいつもよりもだらけている。しょうがないよね。こたつ気持ちいいもんね。

「なんか、家にいるみたいだな……」

「めっちゃわかる〜」

こたつに溶け合うボクとリン。尊厳をかなぐり捨てて顔までこたつにべったりとくつつける。

ああ、あつたかい……

「寝るなよ」

「……………わかつてる」

「その間はなんだ」

「おやすみ〜」

「おい……つたく。まあいいや。わたしもちよつと寝よ——」

「おまたせしましたー」

「は、はい!」

店員さんのひと言で全ての眠気が吹き飛び身体をピンと起こす。びっくりした。すごいびっくりした。

「ぶつ、ふ、ふふ……」

ボクの起き方があまりにもおかしかったのかリンがうつむいてめっちゃこらえている。

うう、また変なところ見られた。恥ずかしい……

「ふふ、おまたせしました。ご注文の甘酒とコーヒー、豆餅と雨畑茶アイスになります」
微笑ましいものを見るような顔でボクたちを見る店員さんから注文したものを受ける。

「ではゆっくりどうぞ」

「どうも」

ボクのアイスとコーヒー、リンの豆餅と甘酒。正反対の組み合わせだけど、どっちもおいしそうだ。

「じゃ、食べよつか」

「だな」

「いただきます」

まずはじめにコーヒーをひと口。苦味と酸味が口の中に広がり、芳ばしいコーヒーの香りが鼻の中を通り抜ける。

うん、おいしい。

「ずず……うめえ」

リンの甘酒もおいしそうだなあ。

「じー」

そんなふうじつとリンのことを見ていると、リンがボクを一瞬見返した後、無言で甘酒の入った湯呑みを差し出してきた。

だからボクもなにも言わずにコーヒーのカップを差し出した。

「ずず……」

甘酒をひと口。口の中に広がるどろどろとした濃厚な麴の甘み。息をはくと、甘ったるい香りが鼻の中をとおり抜けていった。

こっちもおいしいな。

「コーヒーもうまいな……」

「寒い時に飲むコーヒーって格別だよね」

「わかる……まあでも、わたしは双葉の淹れたコーヒーのほうが好きだけだな」

「え？ あ、うん……あ、ありがとう」

さらっと言われた言葉に面食らう。

みんなからはおいしいとは言われているけど、こうして面と向かって言われるとなんていうか、すごく恥ずかしい。

顔が熱くなつていくのが自分でもわかる。

「え、えへへ……」

でも、すごい嬉しい。

「アイス溶けちゃうよ？」

「へ？ あ、そ、そうだね！」

慌ててカップと湯呑みを再び交換し、スプーンでアイスをすくって頬張る。

「……………」

舌の上をとろりと溶けていく冷たいアイスクリーム。牛乳と砂糖の甘みをお茶の苦味が引き締めていく。

「うまあ……」

やっぱりこたつで食べるアイスは最高だあゝ

「じー」

そんな歓喜に打ち震えるボクを、一人のソロキャンガールが睨みつけた。

なにを求めているのか、言わなくてもボクにはわかった。

「リンもひと口食べる？ これすっごいおいしいよ！ はい！」

スプーンでアイスをすくってリンに差し出す。ちよつと行儀悪いけどたまにはいいよね。

「い、いいよ。自分で食べるから」

「ほら、溶けちやうよー」

「……わ、わかったよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめたリンが身体を乗り出してアイスをパクリ。見開かれるリンの目。

「……うまつ」

「でしょー そつちの豆餅はどう？」

「食べる？」

「うん！」

「こ、こぼすなよ」

ちよつと恥ずかしそうなリンが差し出してきた豆餅をひと口。

「おいしいね！ リン」

「……ふふ、そうだね」

二人で笑い合う。昼前の古民家カフェで、こたつで暖まりながらの楽しいひと時。

けつきよくこのあと、お互いにお互いの食べているものが食べたくなって追加注文するはめになるボクたちなのであった。

恐るべし古民家カフェ……

18—2

「でか……」

天高くそびえ立つ杉の大木。風化し苔の生えた樹皮が、この木が積み重ねてきたであろう歴史の重みを感じさせる。

「天然記念物、湯島の大杉……そのまんまだな」

リンが大木のそばに建てられた石碑の文字を読み上げつぶやいた。

まあそれ以外言いようがないしね。逆に二つ名とかつけられてても困るけどさ。

赤沢宿で小腹を満たしたボクとリンは県道37号を北進し、湯島にある大杉で小休止を入れていた。

「どうせだし写真撮ろうよ」

「うん」

スマホをその辺の石に立てかけ杉をバックに一枚。スマホを回収して写真の出来栄

えを確認。

「なんか、なに撮ってるのかよくわかんないな」

「ボクも思った」

杉が大きすぎるのがいけないんだろうか。どうすればいいんだろう。あ、いいこと思いついた。

「リン、こうしようよ」

耳元でゴニョゴニョと説明。どうでもいいけど、べつに耳元で言う必要なかったな。

「……恥ずいからやだ」

「聞こえないーい聞こえないーい。リン、スマホセットしたよー。早く早くー」

杉に抱きつきながらリンを急かす。こういうの一回やってみたかったんだよね。

「……しようがないなあ」

呆れたような声をあげながらリンが渋々といった様子で杉に抱きつく。

3、2、1、スマホのシャッター音が鳴り響き思い出また一枚増えた。

「どれどれ……」

「なっ……」

撮影した写真を確認して、リンが嫌そうな声をあげた。

「ぶふっ、抱きついてる。リンめっちゃ抱きついてる」

思わず吹き出す。写真には、歴史ある大杉に顔を埋め抱きつくリンの姿が映っていた。

ボクはちやつかり顔をカメラに向けている。うん、いい笑顔。

「……せ」

「え？」

「け、消せー！」

よほど恥ずかしかったのか、顔を真つ赤にしながらスマホを奪いにくるリン。そうはいかないもんねー！

詰め寄るリンをひらりと回避。

いつもみんなしてボクのことからかうからこうなるのだー、ふはは。

「はやっー！」

「へへーんだ。みんなに送っちゃうもんねー」

ちなみにこのあとスマホは普通に奪われた。

「あーあ、いい写真だったのになー」

『まだ言うか』

まだまだ雪の残る37号。崖下に流れる早川を眺めながら前を走るビーノに向けて呪詛を送る。

「リンももつとはつちやけちやえばいいのに。クール気取ったつていいことなんてないよー」

『双葉は逆にはつちやけすぎだろ。知り合つたときと全然性格違うじゃん』

「そうかなー?」

『そうだよ』

言われてみればそんな気もする。

たしかに、あの頃のボクなら自分から友だちをからかったりはしなかったと思う。

ほんと、成長したよねボクも。

『そういう話変わるけど、斉藤がさつきラインでバイト始めたつて言つてた』

「へえ、恵那も始めたんだ」

『コンビニだつてさ。どこのコンビニかは教えてくれなかつたけど』

「あはは、なんか恵那らしいや」

なんてことない話に興じながら先へ先へと進んでいく。

山梨の奥だけあつて、右を見ても左を見ても見えるのは山と木々そして川ばかり。

『改めて思うけど、とんでもない山奥だな』

「たしかに」

この前行った富士五湖は一応国道と繋がっていたから車のおりも多かつたけど、この道はほんとうになにもない。

聞こえてくるのは風切り音とエンジンの唸る音ばかり。耳を澄ますと川のせせらぎすら聞こえてくる。

湿り気のあるひんやりとした山の空気。その中をひたすら進んでいくボクとリン。

『……なんかいいな』

「だね」

知らない道、知らない景色。未知の世界を二人で切り開いていくような、そんなワクワクする冒険。

一人で黙々と旅するのも楽しいけど、こうして友だちと話ながら行く旅もまた楽しい。

「なでしこは今ごろついてるのかな」

この場にはいない、もう一人の友だちのことを思い浮かべる。

『富士宮でしょ？ 電車で1時間ちよつとだし、もうついてるんじゃないかな』

「なんか焼きそば食べるって意気込んでたよね」

『言つてたなそんなこと』

「焼きそばか……いいなあ、おいしいんだろなあ」

焼きそばの話したら腹が空いてきちやつた。この先の奈良田湖にお店あるみたいだし、ついたら寄つてみようかな。

『あれだけ食つたのにもう腹減つたのか……ほんと、そのちっこい身体のどこに入つてるんだ？』

「リンだつて大して変わらないじゃん」

『いや、わたしのほうがでかい』

じやつかん食い気味に返してくるリン。やっぱり気にしているんだろうか。

「ふうんだ。いつか抜かしてやるもんねー！」

とか言つてリン以上に気にしてるのは考えないことにする。

『……ふっ』

「今、鼻で笑つたなー！ 覚えてろよー！」

口では言い返すけど、何年経つても抜かせる気がしないのは気のせいだろうか。なんなら今以上に差が広がりそうな気がする。

き、気のせいだよな？

そうやって二人で馬鹿話をしながらしばらく山道を走っていくと、ボクとリンの操る2台のヤマハは奈良田トンネルと書かれた大きなトンネルの中に飛び込んだ。

その瞬間、とてつもない寒さがボクの身体に叩きつけられた。

『さむっ』

まるで冷凍庫の中に身体を突っ込ような寒さに思わず二人で悲鳴をあげる。

これだから冬のトンネルは苦手なんだよなあ。寒いつたらありやしない。

『さ、さむいい！』

「リンはシールドについてるんだからいいじゃん！ ボクなんてゴーグルだよお！」

おかげでネックウオーマーに覆われた鼻と口が寒さで悲鳴をあげる。やばい、これほんとに寒い！

『シールドの中に風が入り込んでくるんだよお！』

ああ、そういうえばジェットヘルメットのシールドって風入り込むんだっけ。

リンはボクみたいに口元までマフラーで覆ってるわけじゃないみたいだから、そりゃ寒いかな。

って、いっちゃまえに語ってるけどボクも寒い！

「は、早く行こう！」

『そ、そうだな』

スロツトルを回して加速するボクとリン。

風が強くなつて余計に寒くなつた気がするけど、一刻も早くトンネルから出たかつた。

暗く長いトンネルを進んでいく。しばらく走ると視界の向こうに光が見えた。やつた。出口だ。

トンネルを抜ける。一瞬、強い光で目が眩んだ。

『あ、見えた』

前を走るリンが左を指差す。きらりと反射するエメラルドグリーン。

奈良田湖だ。山梨なのに奈良。なんか変なの。

『ちよつとそこの脇の駐車場写真撮つてこう』

「わかった」

ウインカーを出しながら左に曲がるリンを追いかけてボクも駐車場に入っていく。

ビーノの横にビーちゃんを止めてエンジンを切ると、まるで時間を止めたみたいに周りに音が消え去つた。

「わあ……」

ガードレールに手をかけて、視界いっぱい広がるエメラルドグリーンの湖面を目に

焼き付ける。

雪が降ったからか、向こう岸に見える木々の枝には雪が積もっていて、白と茶色のコントラストがなんとも言えない美しさを生み出していた。

「左手に見えるのが水門かな？ あ、奥のほうに吊り橋かかっている。行ってみたいなあ」
「双葉、こっち見て」

「うん？」

振り向く。リンがスマホを構えていた。

「にひひ」

にっこりと笑いかける。

パシャリと音がしてリンが小さくうなずいた。うまく撮れたみたい。あとで送ってもらおうと。

「わたしも撮ってもらっていい？」

リンからスマホを受け取って画面に収める。うーん、もうちょっと奥行きがほしいな。

いろいろとアングルを変え試行錯誤していく。よし、ちょっと斜めから撮って駐車場が映るようにしよう。

「リン、撮るよー」

エメラルドグリーン湖の湖をバックにリンの姿を写真に……
「ん？」

リンの背後に広がる駐車場。その一角に見覚えのある水色の車が見えた。あの車つてもしかして……

「どしたの？ ふた……」

何事かと思つて振り返つたリンがそのまま固まつた。

見覚えのある眼鏡をかけた長い黒髪の女の人がボクたちを見ていた。

「やっぱり、リンちゃんと双葉ちゃんだったのね」

そう言つて、桜さんはボクたちに笑いかけた。

囲炉裏にかけられた鉄瓶から噴き出す湯気をぼんやりと眺める。

「コーヒーとココアシフォンケーキで」

「えつと、わたしはえごまチーズケーキで」

座布団ふかふかだなあ。あつたかいなあ……

「そちらのお客様は？」

お腹空いたなあ。

「お客様？」

「へえ!? あ、えと、鹿肉のトマト煮で！」

びっくりした。

あつたかいからついうとうとしちゃった。二人とも笑っちゃってるし。

ひよんなことから桜さんとぼったり出会ったボクとリンは奈良田湖にある古民家カフェでひと休みしていた。

囲炉裏で燻る炭の匂いなんともいい雰囲気だ。赤沢宿とは違うけど、こういうのも悪くない。

「ごめんなさいね。ツーリングの邪魔しちゃって」

「あ、い、いえ全然」

返事をするリンは心なしかそわそわしているようにみえた。そういえばリンと桜さんってあんまり話したことなかったはず。

「さつき大杉のところで見覚えのあるバイクが停まつてるの見て、もしかしてって思ったけど。やっぱりあれリンちゃんたちだったのね」

ボクはよくないでしこの家に遊びに行くから、桜さんがボクのバイクを覚えていてもならおかしくない。

ということとは、大杉でふざけあつたときにすれ違つてたつてことか。

「桜さんはドライブですか？」

「ええ、奥山梨のほうまで行ってみようと思って」

「じゃあボクたちと同じですね」

「へえ、これからどこに行くの？」

「えつと、どこだっけリン」

「雨畑湖。ていうか朝言ったじゃん」

「近頃物覚えが悪くてさあ」

「まあ一番年上だもんな」

「それ、間に（笑）ってついてない？」

あ、目逸らした。

「なんか言つてよー！」

そんなくだらないじゃれあいをしていると、横からくすくすと笑い声が聞こえた。

「ふ、ふふ、二人はとっても仲がいいのね」

ツボにハマったのか、肩を震わせふるふると笑う桜さん。ここまで笑ってる桜さんを見るのは初めてかも。

「ふ、ふふ」

「ふふふ」

そんな桜さんにつられるように、ボクとリンもくすくすと笑う。この様子ならリンも桜さんと打ち解けられそうだ。

ボクは笑いながらそう思うのであった。

「へえ、インカムで話しながら」

「はい！ リンが考えたんですよ。ねー」

「考えたっていうか、ネットに書いてあったの真似しただけっていうか」

「ふふ、あんまり夢中になりすぎないようにね」

「はーい」

各々注文をしたものを食べ終え、お茶を飲んでひと息つきながらボクたちは桜さんをお喋りをしていた。

「そういえばボク思っただけだし、ラインでやり取りしてるなら、車の中にも話せるよね」

「そりやそうだけど……ああ、そういうことか」

べつに特別な無線機で会話しているわけじゃないから、たとえば車の中にいるなでしこや千明とも話せるはず。

「そうそう。今度みんなでキャンプしにいくときできたらやってみたいなーって」

「それ、なんかあれみたいだな」

「あれって——」

「まるで原付の旅みたいね」

ボクたちの会話を横から見守っていた桜さんが突然割り込んできた。しかも食い気味に。

「もしかして、リンちゃんも好きなの？」

「は、はい、この前クリキャンした時にみんなで見えてそれで」

妙な圧を放射する桜さんに、リンが困惑しながらそう言った。桜さん、大好きだもんね、あれ。

「そう……」

ちなみにボクは桜さんによつてすでに洗脳済みである。

「桜さん、よかつたら雨畑湖まで一緒に走りませんか？ ハンズフリーなら走りながらでも会話できると思うんで」

桜さんのメガネがきらりと光る。

表情こそ変わらないけど、ボクも桜さんとはそこそこの付き合いだからわかる。うん、これは悩んでるな。

「……………やめておくわ」

断るまでもものすごい間があつたのは、気にしないでおこう。

「……………リンちゃんに双葉ちゃん。いつもありがとうね」

そんな和やかな雰囲気の中、ふと桜さんがそんなことを言った。

「どうしたんですか？　桜さん」

リンの疑問にボクもうなずく。二人とも桜さんにお礼を言われるようなことをした覚えがなかった。

「なでしこのことよ」

「なでしこ？」

「わたしたち、引越してまだ日が浅いでしょ？　あの子、ああ見えてすごく不安そうにしてたのよ」

綾乃からも似たようなことを聞いた覚えがある。あの元気の塊みたいな子もそんなふうになる時があるのか。

「それもそうよね。生まれ育つた街を離れるわけなんだから」

「そりやそうですよね……………」

「けど、今は家に帰るといつも二人のことばかり話すのよ。それもすごく楽しそうにね」

なでしこのことを語る桜さんは、それはそれは優しげな表情を浮かべていた。桜さん。なでしこのことが本当に大好きなんだな。

本当にいいお姉さんだ。ボクは改めてそう思った。

「あの子、いろいろ抜けてるし迷惑かけちゃうかもしれないけど、二人がよかつたらこれからも仲良くしてあげてちょうだい」

そう言つて桜さんは微笑んだ。

「はい！ もちろんです！ ね、リン」

「うん」

断る理由なんてあるわけがない。むしろボクのほうからお願ひしたいくらいだ。

ピコン！ ラインだ。なでしこからかな。

なでしこ：双葉ちゃん双葉ちゃん！

双葉：どうしたの？

なでしこ：じゃじゃーん！

添付された写真には眺めのいい景色となでしこの見切れた顔が写っていた。

双葉：綺麗だね

なでしこ：各務原なでしこ。ただいまキャンプ場に向けて登山中であります！

なでしこ：双葉ちゃんの真似してわたしもいっぱい写真撮つたんだー！

パソコンパソコン。怒涛の勢いで送られてくる写真。綺麗な景色。おいしそうなご飯。

写りが悪かったり逆光だったり、お世辞にも綺麗に取れているものばかりとは言えないけど、どれもすごく楽しそうなのが伝わってくる。

「あの子から？」

「はい。すごく楽しそうですよ。ほら」

未だに鳴り続けるボクのスマホを覗き込む桜さんとリン。

「あいつ、どんだけ写真撮ったんだ」

バッテリーなくならないといいけど。予備バッテリーは持つて言つてたし大丈夫か。

「楽しそうね。あの子」

メガネの奥の桜さんの瞳が嬉しそうに輝いた。そうだ。いいこと思いついた。

「桜さん！ リン！ ボクたちも写真撮りましょ！」

スマホのカメラを起動する。そうすれば意図を察したリンが、ボクの肩に顔を乗せるように顔を近づけた。

首筋にリンの髪が当たって少しくすぐつたい。

「桜さんも撮りましょ！」

「わ、わたしも？」

「桜さんがいないと意味ないじゃないですかあ！」

「……ふふ、それもそうね」

一度微笑んでリンと同じように顔を肩に乗せてくる桜さん。そうして横並びになつた3人の顔をスマホをパシヤリ。

うん。いい感じ。なでしこにおーくろ。

双葉：3人で古民家カフエなう

なでしこ：えっ!? おねちゃ

「ふっ、あいつ誤字ってやがる」

「どんだけ慌てるのよ」

リンが桜さんがスマホを覗きながら笑つた。

顔を見なくてもわかるなでしこの慌てぶり。きつと今ごろ目を白黒させて驚いてるんだらうな。

「「ふふふ」」

なんだか面白くなって、3人で笑いあう。

こうして、ボクとリンと桜さんの束の間のひとときは過ぎていくのであつた。

「ああ〜」

「リン、くつろぎすぎでしょ」

「風呂上がりのマツサージチェアやべえ〜」

聞いてないし。まあ気持ちはわかるけどね。ボクもあとで使おうかな。

あれから桜さんと別れ奈良田湖を後にしたボクたちは、来た道を戻り雨畑湖に訪れていた。

そして今は絶賛湯上がりの真つ最中。温泉気持ちよかつたなあ。

「やっぱ温泉はちよつと熱いくらいがちよつどいいよね」

「ああ〜 え？ あ、うん、だな〜」

返事が適當すぎる。今絶対聞いてなかつたな。まあいいけど。

火照った身体を休ませながら、穏やかな時間をすごしていくボクたち。窓から見える景色はもう夕闇に染まりかけていた。

後少しでここも真つ暗になるだろう。これからまた走るのはちよつとめんどうだなあ。まあいつものことだけどさ。

「あつ、そつういえば……」

リンが思い出したかのようにはつとして、マツサージチェアから身体を起こした。

「双葉、なでしこから連絡来てる？」

「ううん。言われてみればたしかに来てないね」

奈良田湖でのやり取りが最後だ。

あれからもうけつこう時間が経っている。念のためスマホを取り出して確認。うん。やっぱり来てない。

「やっぱりか。わたしもなんだよね」

どうしたんだろう。

キャンプ場電話悪いのかな。ああいうところって場所によっては圏外だったりするしなあ。

「ちよつと電話してみる」

スマホでなでしこに電話をかけるリン。しばらくすると電話を切ったリンが無言でボクに首を振った。

やっぱりダメだったか。大丈夫かな。一抹の不安が頭をよぎる。

「山中湖みたいにめつちや寒いわけじゃないから大丈夫だとは思うけど……」

「ちよつと心配だね」

「……うん」

なんともいえない沈黙がボクたちの間に流れる。

大丈夫だとは思ふ。たまたま電波が繋がらないとか、そんなところだとは思ふ。様子を見に行つたところで楽しげなでしこが見れるだけだろうとは思ふ。

けど、それで納得できるかといつたらそういうわけじゃない。この前あんなことがあつたばかりだから、なおさらだ。

「むむ……」

リンが悩ましげに顔をしかめる。きつと、リンはボクと同じことを考えている。

「リン、ボクなら大丈夫だからね」

だからボクはリンの不安が少しでも晴れるようにそう言った。

なにか大丈夫とは言わない。そんなものは言わなくても伝わる。リンになら伝わる。

「……いいの？」

一瞬嬉しそうな顔をして、すぐにもうしわけなさそうな表情を浮かべるリン。

「なでしこにこの前言ったこと覚えてる？」

なにかあつたらどこにでも駆けつける。冗談でもなんでもない。ボクは本気でそう思っている。

だつてボクはあの子の友だちだからだ。

「ふっ……そうだったな」

「じゃ、行こっか」

「だな」

二人で同時に立ち上がる。

雨畑から富士宮までだいたい60キロ。全然大した距離じゃない。パパッと行ってパパッと帰ってこよう。

「双葉」

歩き出すボクをリンが呼び止める。

「……よろしく」

「うんー」

さてと、風呂上がりひと走りしますか。

「ほんとに圏外になってただけだったね」

「まあ、どうせそんなことだろうとは思ってたけどさ」

なでしこがキャンプしている富士宮のキャンプ場をあとにし、二人で駐車場に向かう。心配になって二人でここまで来たわけだったけど、けっきょく想像していたようなこ

とはなにもなかった。

「なでしこのやつ、楽しそうだったな」

「だねー」

二人でこっそり覗いた先にいたのは、キャンパーの子供たちと楽しそうにキャンプご飯を食べるなでしこの姿だった。

あの笑い声を聞けば、ボクたちの心配が杞憂でしかないことは一目瞭然だ。もうここに用はない。お邪魔虫はさっさと帰るとしよう。

すっかり暗くなった夜道を二人で歩いていく。なでしこ、なに食べてるんだろう。ボクもお腹空いたな。

「もう真っ暗だ……」

リンが空を見上げる。月明かりに照らされて、雲が夜空を流れていった。

「キャンプはできそうにないね」

これからキャンプ場に行くっていうのも無理があるだろう。しかたない。今回はおとなしく帰るとしよう。

「ごめん。付き合わせちゃって」

もうしわけなさそうに謝るリンにちよつとだけムツとくる。

「リンー?」

「……ありがとう」

「うむ。よろしい」

しばらく無言で見つめあつてそれから二人で笑い合つた。

「……そういえば双葉つて、こういうときどうしてたの？」

「うーん、近くの道の駅とかに行つて野宿かな」

どうしてそんなこと聞くんだろう。

というか話してたら懐かしくなつてきた。思い返してみればあれから一回も野宿してないのか。

2月になつたらまた遠くに行きたいな。今度はリンも誘おうかな。なんか今なら来てくれそうな気がする。

「……ここら辺つて道の駅あつたっけ？」

「麓のほうにあつたはずだけど。なにか買いたいものでもあるの？　もう閉まつてると思うけど」

「いや……野宿つてどんな感じなんだろうなあつて」

リンがもじもじとどこか恥ずかしそうに言う。まさかリンの口からそんな言葉で出てくるなんて驚いた。

「本気？　めっちゃ寒いよ」

キャンプに慣れているとはいえ、野宿は勝手が違う。リンには悪いけど、正直おすめできない。

「やってた本人が言うなよ……双葉だつてやってたんでしょ？ ならわたしだつて大丈夫でしょ」

「いや、普通にダメでしょ」

「うぐ……だよな」

ボクの家みたいな放任主義（物理）みたいな環境じゃないかぎり、年頃の女子高生に野宿なんて咲さんが許さないだろう。

そういえばお母さん今どこにいるんだろう。この前ハワイでめっちゃ楽しそうに銃撃ちまくってる動画送ってきたけど。

ほんと、なにしてるんだらうあの人。謎だ。

「寒いしき。今日は帰ろうよ。キャンプはまた今度しょ？」

「……わかった。約束だからな」

「うん！」

暗がりの夜道。寒い風が吹き荒ぶ冬の富士宮。そんな場所を二人で一緒に歩いていく。

「寒いな」

リンが言った。吐いた息が白いもやになって宙に溶けていった。

「寒いね」

ボクは言った。

「……手、つないでいい？」

小さくうなずくと、冷たくなったボクの手、冷たくなったリンの手が重なった。

「冷たいね」

「そっちなもな」

手を繋ぎ、二人で一緒に歩いていく。今夜のことは、なでしこには内緒だな。

「夜なに食べる？」

「双葉が好きなのでいいよ」

「じゃあカレー麺」

またかと言って、リンが小さく笑った。そんな寒い夜の出来事だった。

ちなみにこの後、ボクたちと同じようになでしこの様子を見にきた桜さんとぼつたり出くわして、抱き合いながらみつももない悲鳴をあげたことは、またべつの話。

19話 キタコ ドリブンスプロケット 37T 1,
805円(税込)
19—1

「伊豆キャン?」

「おうよ!」

放課後。もはや第二の溜まり場と化しつつある図書室で、リンの言葉に千明が元氣よく相槌を打った。

「なんでまた伊豆?」

リンの問いに千明を除いたボクたち全員がうなずいた。

「いやあ、そろそろ1年生も終わるしよ、最後のシメにグルキャンしてえなあって思っ
な。んで昨日の帰りにパトカー走ってるのみて、そしたらロリ子が伊豆行つてたの思い

出してよ」

「ああ……」

「どうしたの？ 双葉」

「な、なんでもないよ恵那」

忘れかけていた黒歴史が蘇る。熟睡、パトランプ、肩トン……うつ、頭が。

けどしかたないじゃないか。あのときのボクはまだポッチのダークサイドに染まっていたんだから。

ポッチのダークサイドってなんだろう。まあいいや。

「そーいや双葉ちゃん、伊豆で警察に捕まったゆうとつたな」

「ぶっ!？」

ああいがい思い出さなくてもいいことを思い出す。ああ、ボクの黒歴史が衆目に晒されていく……

「双葉、なにしてんだよ……」

「つ、捕まってるから！ ちよつとその辺の道で寝てたらお巡りさんに肩トントンされただけだから！」

ソロキャンガールのジト目を掻い潜り、必死に弁明する。

なんの言い訳にもなってる気がするのはたぶん気のせいだと思う。

「いや、十分アウトだろ」

だよねー

ほんと、なにやってんだろボク。次はもつと人目につかないところで寝ないと。いや、そうじゃないって。

「ふ、双葉ちゃん、悪いことしちやダメだよー!」

「してないよー」

「あははは! 捕まった、捕まったって! なにしてんの双葉!」

なでしこがあわあわして、恵那が爆笑する。いつもは静かな図書室も、6人も集まるとやかましい。

「うおっほん。本題に戻るぞー」

そんな風に横道に逸れかけた軌道を千明が修正する。こういうときの千明のリーダーシップは本当に頼りになる。

「伊豆キャンやったよね? そういやこの前山中湖で助けてくれた飯田さんたちも伊豆から来たゆうとったな」

たしか酒屋をやっているって言ってたつけ。どうりで鳥羽先生と話が合うわけだ。

「そっか。ならお土産持っていたほうがいいよね」

「ああ、もちろんだ。命の恩人だからな。それに、リンも正月伊豆に行こうとしたんだろ

「？」

「うん。けつきよく渋滞で行けなかったけどね。そういえばなでしこって伊豆行ったことあるの？」

「ううん。家族で遊びに行くときはいつも愛知だったし、伊豆は行ったことないんだよねー」

「ふむふむ、つまりここにいる全員が伊豆に因縁があるってわけだねー」

「恵那、間違っていないけど言葉のチョイスがなんか……」

「それだとまるで6人で伊豆に敵討ちに行くみたいだに聞こえるんだけど……まあいいや。」

「とにかくだ。全員異存はないよな！ んじゃあ伊豆キャン行きたい奴は挙手！」

「はいはいはい！ わたし行きたい！」

「もちろんわたしも行くで！」

「ボクもボクも！」

「当たり前のように野クルは全員参加。残る二人はというと……」

「わたしも行くよ。え、恵那はどうする？」

「うん。もちろん行くよー」

リンも恵那も当然のように承諾。これで全員揃ったわけだ。うん！ なんか楽しく

なってきたな。

「ふふふ、それにしても」

そんな和やかな雰囲気の中、恵那がニヤニヤしながらリンを見た。

「な、なんだよ」

「今日は斉藤、じゃないんだね」

恵那のひと言にリンがボフンと爆発した。

「なっ、ど、どうでもいいだろ」

目をキョロキョロさせながら必死に話を逸らそうとしている。うんうん、平和だなあ。

「リン、こんなにたくましくなって……お母さんは嬉しいわ。オヨヨ」

「聞けよ」

微笑ましいやりとりにボクは心が暖かくなるのを感じた。

ボクが変わったように、リンと恵那の関係も少しだけ変わったように見えるのは、気のせいじゃないと思う。

些細な変化かもしれないけど、ボクはそれがすごく嬉しかった。

「おし、決まりだな！ じゃああたし鳥羽先生に相談しに職員室行ってくるわ」

「あ、わたしも行くー！」

「ボクもボクも」

「うちも行くで」

「わたしも」

「あ、わたしも」

「つて、全員来るのかよ。ま、いいや。よーし行くぞーお前ら！」

「「「「おー」」」」

放課後の図書室にボクたちの元気な掛け声がこだまする。

「またなー」

「うん、またね」

「また明日〜」

校門の向こうに消えていく千明たちをボクとリンで見送る。

空はすっかり夕焼けに染まっていて、まるで畑のうねのような雲がどこまでも続いていた。

「よかつたね。鳥羽先生も伊豆キャン考えてて」

「あんなことがあったばかりだし、反対されても不思議じゃなかったけどね。鳥羽先生

が優しい先生でよかったよ」

「先生、双葉が伊豆行ったって話聞いたらめっちゃ驚いてたな」

「東北まで行つたことあるって言つたらどんな顔するのかな」

「そんな遠くまで行つたことあるのかよ」

「津軽海峡綺麗だったよー」

「原付で行く距離じゃねえ……」

むしろ原付で行くからこそおもしろいのに。あの非力感がたまらない。

「3月か……けっこう先だな」

「まだ1月だもんねー」

ひと月先に控えているだろう伊豆キャンを思い描く。

あの時は走ることしか興味がなかったけど、今は違う。今回はちゃんと観光したいな。

どんなキャンプになるんだろう。きつと楽しいんだろうな。

「そーいや千明が言つてたけど、3月ってあおいとなでしこの誕生日なんだっけ」

「うん。二人とも3月の4日生まれなんだって」

千明が大塩平八郎と同じ誕生日とか言つてたけど、なんでそんな教科書に一行くらいしか書かれてない人の誕生日知つてたんだろう。

「ちようどキャンプと被るわけか。ちゃんとお祝いしてあげないとな」
「うんうん」

誰かの誕生日をお祝いしたことなんてないけど、ボクはボクなりに精一杯喜んでもらえるようにしよう。

「……帰るか」

「そうだね」

夕焼けに染まる駐輪場を二人で歩いていく。隣り合わせで停めているビーノとビーちゃんに互いのキーを差し込む。

オイルランプとニュートラルランプが点灯し、バッテリーに連動したガソリンメーターの針がゆっくりと動いていく。

「このまま帰るの?」

横でビーノを押していたリンが聞いてきた。

「ううん、ちよつと甲府のほうまで行って工具買ってくる」

メガネレンチ一式、買わないと。今までは普通のレンチで我慢してたけど、さすがにちゃんとしたものを買っておいたほうがいいだろう。

「たしか前にバイクの改造するとか言ってたっけ」

「今週で1月も終わるしね。いい加減取り掛かろうかなって」

改造が終わったら試走もかねて伊豆とはべつにまたどこかに行こう。

たしか2月の中旬ごろに3連休があったはずだし、そのときにでも行くかな。

最近寒い思いばかりしてるし、暖かいところに行きたいな。海とかよさそうだ。

「わたしもついてついていい？ キャンプに使えそうなパーツあるかもしれないし」

「それってわざわざ聞く必要がある？」

「……それもそうか」

ボクがニヤリと笑って言うのとリンもふつと笑った。校門の前でバイクを停める。

ボクがアイスブルーのヘルメットを被り、リンがアイボリーのヘルメットを被る。

シートに跨る。チョークを引く。キックペダルに足をかけ軽く三回踏んで一番重く

なったところで止める。

蹴り飛ばす。プラグが火花を飛ばし、シリンドラーの中のガソリンに引火する。

三回ほど空ぶかし。ブウォンブウォンとやかましいエキゾースト音が鳴り響き煙が

あたりに立ち込めた。

エンジンがトトトトとアイドリングし、その鼓動に合わせてヘッドライトのバルブが

チカチカと点滅を繰り返す。

チョークを戻す。ゴーグルを目にかける。スモークの入った傷だらけのレンズが、西

の空で赤く燃え盛る太陽に影をさした。

「リン、オツケー？」

ビーノに被ったリンが無言で手を上げる。

「じゃあ、しゅっぱーっ」

「ういー」

走り出す。風が顔に当たり背後に流れていく。

「これで、よしっ」と

そんなことがあった週の日曜日。家の庭先でボクは一人腕を組んでいた。

目の前には、まな板の上の鯛ならぬ、ジャツキに持ち上げられたY B ー ー が無防備な姿を晒していた。

まだまだ寒さの残る2月。冬と春の境目。ボクは、来るべく新たな旅に向けて準備を進めていた。

「ぐへへ、どこからバラしてやろうか……なーんてね」

ピコン！ ラインだ。誰だろう。

なでしこ：双葉ちゃん！

双葉：どしたのー？

なでしこ：暇だよー

双葉：バイトは？

なでしこ：今日は休みなんだよー お姉ちゃんはお出かけちゃったし、お父さんとお母さんは買い物行っちゃったしなにもすることないよー

なでしこ：だから双葉ちゃんのお家に遊びに行こうと思います！

なでしこ：お昼ごろ行くから一緒にご飯食べよ！

なでしこ：またねー

返事をする前に一方的に話を打ち切られる。ボクのスケジュールなんてとつくの昔になでしこに把握されている。

そしてボクが断らないのも当然知っているので、こういうことは珍しくない。

「ま、いつか、昼までには終わるよね」

そうと決まればとつとと作業を終わらせよう。

まずはシートからかな。ラチェットレンチを手に取りシートを固定しているボルトを外す。

「ほんと狭いなもう」

メットホルダーだのサイドバッグだので埋もれてるボルトを外すのはなかなかめんどくさい。

なんとかボルトを外してシートを取り外し、ついでにサイドバッグも外しておく。メツキのかけられたチェーンカバーを取り外し剥き出しになったチェーンを見て顔をしかめる。

この前掃除して注油したばかりなのに、もう錆と汚れがついている。それに心なしか弛んでいる。これもう寿命だなあ。

後輪を手で回してチェーンを回し、留め具を見つめる。ラジオペンチを手に取りU字型の留め具を取り外しピンを引き抜く。

そうすれば、繋がっていたチェーンが切れてだらんと地面に垂れ下がった。

「あとは引き抜いて……あ、前のカバー外さない」と

寒空の下、一人黙々と作業を進めていく。

手袋をしていないせいで、手は油で真っ黒だ。汚いけど、手袋なんてしてたら細かい作業はできない。

けど、こういうのはそんなに嫌いじゃない。

シートに跨ってハンドルを握ったその瞬間から、ボクとこの子は一蓮托生なのだ。この子がちゃんと動かなかったらボクは走れないし、ボクがいなくてもこの子は走れない。

だからどんなに汚れたとしても、どんなに面倒だとしても、一緒に走っていくなら

ちやんと見てあげなくちゃいけない。少なくともボクはそう思っている。

垂れ下がったチェーンの端を持って引つ張れば、スプロケットに噛み付いたチェーンがするすると抜けていった。

よし、あとはブレーキを外してそしたらリアタイヤを外してつと。

「たしかボルトのサイズは17、19、24だったはず……」

手を油で汚し、思考を巡らせ一人と一台の世界に入り込んでいく。

「よいしょつとー！」

メガネレンチを力一杯右に締めていく。

本当ならトルクレンチを使わなきゃいけないところなんだろうけど、あいにくそんなものはない。手ルレンチで我慢我慢。

「えい！　えい！　よしー！」

綺麗にハマった後輪を手で回してみる。くるくると回る車輪。

とくに変なところはなさそうだ。仕上げにペダルとブレーキを連動させ、ボルトに脱落防止用の割りピンを差し込む。

チェーンを取り付けアジャスターナットを締めて弛みを取り、カバーを取り付ける。

最後にサイドバッグとシートを取り付ければ……

「できたー！」

組み上がったビーちゃんを眺める。ところどころ錆びてボロボロだったスプロケツトはピカピカの新品に交換され、見違えるように綺麗になった。

伸びきっていたチェーンも新品に交換したことでツヤツヤと真新しい油をてからせている。

ブレーキだつて徹底的にオーバーホールしてシユーも新品に交換した。きつとよく効くだろう。

念のためブレーキペダルを踏んでみる。よし、問題なしと。

「ふう、終わった〜」

額に滲んだ汗を手で拭う。今何時だろう。時計をチラ見。ちようどお昼か。そろそろご飯にしないと。

すると、まるで待つてましたと言わんばかりにお腹がぐうつと鳴った。

「お前も腹が減ったのか」

手、洗ったらご飯だな。試し乗りはその後にしよう。

「双葉ちゃん、遊びに来たよ……およよ？」

軒先から聞き覚えのある声がして振り返る。門の向こうから桜色の髪の毛の女の子

がこちらを覗いていた。

なでしこだ。

「わわっ！ 双葉ちゃん、顔真つ黒だよ!？」

目を丸くするなでしこ。ビーちゃんのミラーで顔を確認。うわ、たしかに真つ黒だ。こりや念入りに洗わないとだめだな。

「やつほー、なでしこ」

そう思うボクなのであった。

「またねー双葉ちゃん」

「またね〜」

自転車に乗って元気よく去っていくなでしこを見送る。赤い自転車がみるみる小さくなっている、やがて曲がり角の向こうに消えていった。

「行っちゃったか。なでしこが作った焼きそば、おいしかったなあ」

いつもボクの料理をおいしいって言ってくれるけど、なでしこもかなり上手だと思う。

食べるのが好きで作るのも好きって、もはや永久機関だよな。

「さて、と。ボクも行くとしますか」

ヘルメットを被って顎紐もしっかり締める。ただの試し走りだし、さきつと走って帰ってこよう。

「どんな感じになったのかなあ〜」

ビーちゃんに跨ってチヨークを引いてキックペダルに足をかける。ついでにプラグも新品に変えたから、きつと始動性もよくなってるはず。

「よいしょつと！ わっ」

今までとは明らかに違う手応えに一瞬驚く。うん、さすが新品。かかりかたがまるで違う。

暖気も兼ねて空ぶかし。2ストローク単気筒のエンジンが威勢よくぶんぶん唸る。タコメーターがあつたらきつと元気よく回つてるところだろう。

「あははっ、これいい！」

本当だったらもつとぶんぶん回したいところだけど、ご近所迷惑になりかねないから自重する。

「そろそろいいかな」

いつものようにクラッチを握ってギアを変えウインカー&後方確認。よし！

「しゅっぱーっ！ わわっ」

走り出した瞬間、一瞬エンストしそうになって慌ててアクセルを煽る。そうだったギア比が変わったんだった。

すぐに立て直し、順調に走り出していくボクとビーちゃん。2速、3速と変えていくたびに変わっていく景色。

「さてと、とりあえず甲府にでも行ってこようつと」

2月の風を切り裂いて、ただ一人走っていく。

「うんうん、いい感じいい感じ」

赤信号で止まりながら誰に言うわけでもなくつぶやく。スプロケットとブレーキを交換したことで、乗り味は劇的に変わった。

「これなら伊豆も楽に走れるだろうなあ。燃費もよくなっただろうし、いいことづくめだ」

最初のころの少しでもアクセルワークを間違えると即ウィリーしてしまうようなピーキーな乗り味はなくなってしまったけど、こっちのほうが断然いい。

「ボクも変わったよなあ」

信号が青に変わったのでクラッチを離してゆっくりと発進させる。これもちよつと

前だったら信号が変わったら即ダツシユが基本だったのにな。

「なでしこたちに会ったからなのかなあ」

思い返してみれば、無茶な運転を控えるようになったのはなでしこたちと友だちになつてからのような気がする。

なでしこ会つて、誰か一緒にいることの嬉しさに気が付いたり、リンと会つてキャンプの楽しさに目覚めたり、綾乃と会つてご飯のおいしさに気が付いたり……

誰かと知り合うたびに、ボクの世界がどんどん広がっていく。きつとこれからもボクはいろいろな人たちと出会つて、いろいろな世界に触れていくんだろう。

そう思うとなんだかちよつとワクワクしてくる。

「伊豆の前はどこか行きたいなあ。どこにしよつかなあ」

どうせなら徹底的に海辺がいいな。伊豆は3月に行くし、となると……

「あれつて、リンのバイト先か」

次の旅先をどこにしよつかとあれこれ考えていると、一軒の本屋が見えてきた。あれつてたしかリンのバイト先だったよね。

「店番してたりして」

本屋の前を通過するほんの一瞬だけ横を見る。店内には綺麗に陳列された本と丁寧に掃き掃除をするお団子頭の……

「ふふっ」

今めつちや目合つてた。あとでおつとめご苦労様ですってラインしとこ。

そんなことを考えながらいつ見ても珍しい形をしている上沢交差点を通過。新早川橋に向かう。

あの橋の向こうにあるスーパーと酒屋であおいと千明がバイトしてるわけか。二人とも今日も働いてるのかな。

「おつとめおつとめ……うん？」

ちようど交差点を渡り切つた先の歩道で、どこかで見たような茶髪が見えた。

あの髪色にあのシルエット……間違いない。自転車を見てるみたいだけどなにしているんだらう。

ウィンカーを出し、減速しながら近づいていく。

「おーい、あおいー……あれ？」

気のせいかな。なんかあおい小さくない？ まあいつか。

小さな違和感を抱きながらビーちゃんを停車。邪魔にならないように歩道にちよつと乗り上げてから降りる。

ヘルメットを脱いで挨拶。気分もいいし、元氣よくいこう！

「やつほー！ あお……」

「うん？ お姉ちゃん誰なん？」
あ、これ違う人だ。

ボクは今、窮地に立たされている。

「あ、あわ、あわわ」

ど、どうしょ。間違えて声かけちゃった。思いつきりやつほーって言っちゃったよ。

「むー……どないしたん？ めっちゃガタガタしとるけど」

小さな女の子、たぶん小学校高学年くらいの子がボクをじとーつと見つめる。

やばい、なんか言わないと。

「な、なんでもないよー き、今日はいい天気だねー」

うん、なんだろう。もうちよつとましな返事はできなかつたんだろうか。

「少し曇つとるやろ」

曇ってた。

「……そ、そうだねー」

女の子の目がじとつとしたものからもはやどんよりと言うほかないものにかわる。

ま、まずいこのままだと不審者扱いされて……

「もしかして……」

「ひゃ、ひゃい」

「お姉ちゃん、不審者なん？」

ああ、目がどんより通り越して雨模様になつてる！

「ち、違うよー！ ボク不審者じゃないよー 怪しくないよー」

必死に取り繕うボク。うーん、この惚れ惚れするような圧倒的不審者ムーブ。

「女の子は自分のことボクなんて言わんやろ」

ですよー

ボクもずつと思つてた。だつてしょうがないじゃん。癖なんだもん。文句なら小学

生のころのボクに言つてほしい。

「むむむ、怪しい……」

「ま、まつて！ 全然怪しくないから！ ボク普通の女子高生だから！」

小学生相手に、どう考えても不審者にしか聞こえない本気の弁明をする女子高生は、

一体どこの誰なのでしょう。

そう、ボクです。

「お巡りさん、呼ぶぞい」

まずい、最後通告来た！

「ま、まっつて、話せばわかるよ！　そ、そうだ自己紹介！　自己紹介しよ！　ぼ、ボクの名前は山中双葉！　山中湖の山中に双葉町の双葉！　つて言つてもボクが生まれてすぐ合併でなくなつちやつたけどね！」

今は甲斐市だっけ？　つて、なに言つてるんだろボク。みんなごめん。ボク一緒に伊豆行けないかも。

「うん、知つとるよー」

「そっか、よかつた……………うん？」

あれ、気のせいかな。今、知ってるつて言つてたよな。

「キヨリガバのお姉ちゃんやろ？　あおいちゃんからよく聞いとるでー」

「あおい……………ちゃん？」

あおい……………つて、あのあおいだよね。

改めて女の子のことを観察する。見覚えのある明るい茶髪、輪郭こそ幼いものものどこかで見たことのある顔だち。

そしてボクを見るまるで子供落書きみたいなふざけきつた目。こんな目をする人を、ボクは一人だけ知っている。

「もしかして、あおいの妹さん？」

「せやでー！ 犬山あかり、よろしゅうな！」

そう言つて、女の子が元気に挨拶をした。

「そ、そっか」

全身の力がどつと抜けていく。よ、よかつた……

妹がいるつて前に言つてたもんね。どうりで見間違えるわけだ。ほんとうにそっくりだなあ。

「ち、ちなみに不審者っていうのは」

「うそやでー 双葉ちゃん写真で見たことあるもん」

「あ、うん。そっか」

この子、間違いなくあおいの妹だ。そりゃ、ボクのことくらいあおいから聞いてるか。

「にひひ、双葉ちゃんおもろいなー！ まって！ はなせばわかるー！」

「や、やめてー！ 黒歴史をほじくり返さないでー！」

「なーなーバイクでいろんなどこ行つとるつてほんとなん？ この前琵琶湖行つたんや

ろ？ ネットシーおつた？」

「ネットシーはいなかつたかなー あ、あはは」

冬だというのに身体中が猛烈に熱くなつていく。小学生相手に必死に弁明して……

なにしてるんだろボク。

なつかしいな。この感じ。うん、これだよこれ。このクソザコ感。これでこそボクだよ。いや、なにが？

「そ、それでどうしてこんなところにいたの？」

思い出すだけで顔が火が吹きそうになるほどの黒歴史に必死に蓋をして話題を変えろ。もちろん目線を合わせるのも忘れない。

すると、あかりは明るい表情を一変させ、どこか憂鬱な表情を浮かべた。

「わたしな、新しい漫画買いにその本屋さん行ったんやけど……」

「けど？」

「チャリ、動かなくなってもうた……」

ボクの相槌にあかりが自転車に目を向ける。よく見るとチェーンがギアから完全に外れていた。あかりの言うとおりに、これじゃあ走ることはできないだろう。

「そっか。大変だったね……」

「あおいちゃんもバイトやし、スマホも置いてきてもうたし……ほんまどないしよ……」
不安そうに目を伏せるあかり。きつとさつきまでの態度は空元気だったんだろう。本当はすごい怖かったんだろうな。ボクも昔似たようなことがあった。

旅の帰り道。家までまだ100キロ以上もあるところで自転車のギアが完全に壊れ

て立ち往生しかけた。

帰る手段が一つしかないのに、肝心の手段が壊れて使えないのは本当に怖いのだ。

あのときは自分でなんとかするしかなかったけど、今のボクなら……

「大丈夫だよ。あかりちゃん」

「へえ？」

小さな頭に手を置いて撫でる。いつ調子が悪くなってもいいように、工具一式は常に持ち歩いている。

見たところ、ただ外れているだけみたいだ。この程度ならなんとでもなるだろう。

「ちよーつと待っててねー」

サイドバッグの工具ケースからドライバーとレンチを取り出し自転車の前に座り込む。

「とりあえずペダルを回してみるか……」

が、動かない。よく見たらチェーンカバーとクランクの間にチェーンが挟まってしまっているみたいだ。

「チャリ、直せるん？」

「うん、このくらいならすぐ元通りだよ」

ドライバーを突っ込みながらペダルを回し、挟まっていたチェーンを取り出す。

チェーンをクランクに噛み合わせ、後輪ギアも同じようにドライバーを使ってチェーンをはめる。

ついでにレンチを使ってチェーンの弛みも取っておく。自転車のチェーンが外れる原因は、基本的にチェーンの弛みか無理な変速の二つしかない。

そしてこの自転車に変速機はついてない。よって原因は単純にチェーンの劣化だろう。

よし、終わりつと。約3分つてところか。ひさしぶりだから思ったより時間かかったな。

本当なら注油と清掃もしたいところだけど、あいにくと今は持つてない。

「ほら、直ったよー」

試しに後輪を少し持ち上げてペダルを回してみせる。ペダルの回転に合わせて車輪がくるくると景気よく回った。

「わあ！ほんまに直つとる！どうやったん!？」

目をまんまると開いて鼻がぶつかるとかあるんじゃないかってくらい勢いで詰め寄ってくるあかり。年相応で微笑ましい。

「昔ちよつとね」

「ありがとうなー！キヨリガバのお姉ちゃん！」

「うん、どういたしまして」

それにしても距離ガバのお姉ちゃんって……あおい、ボクのこと家でどう話してるんだろう。すごい気になる。

まあいいや。そろそろ行こう。ヘルメットを被る。

「え、お姉ちゃんもう行っちゃうん？」

ちよつと残念そうにボクを見るあかり。することもないし一緒にいてもいいんだけど、まだブレーキの慣らしが終わってない。

「うん。気をつけて帰るんだよ。また自転車で困ったことがあったら呼んでよ。あと、あおいによろしくね」

ビーちゃんに跨りエンジンに火を入れる。プラグを交換したばかりのエンジンが威勢よく回りモクモクと煙を吐き出す。

「じゃーねー」

「あ、お姉ちゃんちよつとまってーな！」

あかりが自転車のカゴに入れていたコンビニのレジ袋からお菓子の袋を手渡してきた。

「前のコンビニでこうてきたお菓子、うちで食べようと思つとつたけどあげる！」
受け取る。ピーナッツだった。チョイスが渋い。

「くれるの？　ありがとう」

手袋越しに小さな頭を撫でると嬉しそうに目を細めた。やばい、めっちゃかわいい。ボクにも妹がいたらこんな感じだったのかな。

そりや桜さんがなでしこのこと猫可愛がりするわけだ。

「チャリ直してくれてほんまありがとうな——」

キラキラとした目がボクを射抜く。なんか、ちよつと照れるな。ゴーグルしておいて助かった。

クラッチを握って1速に変え、アクセルを煽る。ウインカー、後方確認。よし。

返事の代わりに敬礼の真似をしてバイクを発進させる。

「ほなまたな——」

ミラーに映る小さな影がいつまでも手を振っていた。

「ふう……」

眼下に広がる甲府盆地を眺めひと息つく。

いつぞやリンと一緒に来た和田峠のみはらし広場で、ボクは一人黄昏にひたっていた。

「あかりちゃん、家帰れたかな？」

たしか犬山家つて波高島にあつたはず。あそこなら歩いてもすぐに行ける距離だ。きつと大丈夫だろう。

「そろそろ帰——」

着信音、電話だ。あおいだった。

「もしもし？」

『もしもし双葉ちゃん？』

独特のイントネーション。いつも思うけどあおいってなんで関西弁なんだろう。山梨生まれつて聞いたんだけどな。

「あ、バイト終わったんだ。お疲れー」

『おおきになー それでな、今さつき妹から聞いたんやけど、チャリ直してくれたんやつて？ ほんまありがとうな』

「よかつた。ちゃんと帰れたんだね」

『ふふ、めつちや喜んでつたで。お姉ちゃんが助けてくれたーつて』

「ちよつとチエーン外れてたの直しただけだし、気にしなくていいよつて言つといて」

あの程度のトラブルなんてちよつと硬い棒があればすぐに直せるものだ。褒められるようなことじゃない。

『もう、双葉ちゃんはちいと謙遜しすぎやで。今度ちゃんとお礼するから、待つててな』
 「ほんとに気にしなくていいのに。けど、わかった」

『妹のこと助けてもろうてありがとうな、双葉ちゃん』

混じり気のない純粋な好意。照れくさいけど、すごく嬉しい。

「……うん。どうしたしまして」

なにより嬉しいのは、それを素直に受け取れるようになったボク自身の成長だ。本当にみんなには感謝してもしきれない。

『そういえば、双葉ちゃん今どこにおるん?』

「甲府の和田峠だよ。すごい綺麗だよ。あとで写真送るね」

『さつき身延おったばかりなのにもうそないなとこまで行つとるのか……これからどないするん? 夕方やしもう帰るん?』

「そうだね。明日からまた学校だし」

『そつか……せや! ほなら帰りにわたしん家寄つてかへん? お礼つてほどやないけど夕飯ご馳走するでー』

「えー? 気にしなくていいよー」

『きーにーしーまーすー 大事な妹助けてもろうたのになにもせんなんて、犬山家の名折れや』

「大げさだなー、あおいは」

『ちゆうか双葉ちゃん、最近までしこちゃんとリンちゃんとはつかし遊んで、全然うちの構つてくれへんやん。わたしだつてちよつと寂しいんやでー』

まさかあおいからこんなことを言われるとは思つてなかつた。まあなんだかんだ言つて千明の次に長い付き合ひだしね。

『あかりも会いたい会いたいゆうとるし、せやから、な？』

これ、なにをどう言つても無駄だろうな。どうせ夜ご飯の支度もすんでないし、ここはあおいに甘えておこう。

「わかつたよ。じゃあ帰りに寄るね」

『ふふ！ 待つとるで！ 今夜はお鍋やから楽しみに待つとつてな！』

「はーい。じゃあね」

『あんま遅いと先に食べてまうからな』

「えー」

『うそやでー ほな、帰り道気をつけてな』

「はーい」

電話を切る。一人の時間が戻ってきた。なんか、大したことしてないのにえらい感謝されちゃつたな。

けど、ボクが同じ立場だったら同じように思うだろうし、不思議でもなんでもないので。

そんなことを思いながらオレンジに染まる街を眺める。

ピコン！ ラインだ。

綾乃：おっすー

双葉：おっすー

綾乃：なでしこから聞いたよー 伊豆行くんだってね？

双葉：そうだよー

綾乃：いいなー 伊豆わたしも行きたいなー

双葉：来ればいいじゃん。近所でしょ？

綾乃：まあそうなんだけどね。コンビニに定休日はないのですよ。トホホ

双葉：あちや残念

綾乃：と、いうわけで、双葉の遠出について行こうと思います

綾乃：どうせ今月もどっか行くんでしょ？ 連れてけよこのやろー！

双葉：連れてくよこのやろー！

綾乃：行き先決まったらよろしくねー

綾乃：じゃ、わたしバイトだからこれで

綾乃はいつもこうだ。勝手に人の懐に入り込んできて、勝手に絆を結んでいく。それも固結びで。

まるでどこかの桜色の髪の毛の食欲モンスターみたいだ。こういうところ本当にそつくりだね。さすが幼馴染。

「ちよつと、喉乾いちやつたな」

あおいと電話したからだろうか。水なんて持つてきてないし、麓に降りるまで我慢するしかないか。

「お疲れ。はいこれ」

横から差し出されたお茶を受け取る。ちよつとよかった。

「うん、ありがとリン……………え？」

なんでボク、ありがとリンなんて言ったんだ？ そういえば。このお茶って……………横を見る。

「双葉……………や、やつほー」

リンがボクに向かって手を振っていた。

……

……

……

「え、ええー!? リン、リンなんで!」

「驚きすぎだろ。ふ、ふふ」

ボクの反応がよほど面白かったのか、口元を押さええてふるふると震えるリン。

「え、いや、だつて、え? いつからいたの?」

「電話してるときから。ていうか、ずっと後ろからビーノで追いかけてたのに気づいてなかったのかよ」

「ええ……」

ミラーはちよくちよく見てたはずなんだけどなあ。

「さつき本屋の前の交差点で子供のこと助けてたでしょ。やるじゃん」

「あ、見てたんだ」

「あの子本屋に来てたんだけどさ、バイト帰りにコンビニ寄ろうとしたら双葉とあの子が一緒にいてちよつと気になって覗いてた」

覗いてたつて言うけど、どうせボク一人じゃ手に負えない感じだったら助けに来てくれただろうな。

「あの子、あおいの妹のあかりつていうんだけどね。自転車のチェーンが外れちゃったみたいで直したんだ」

「どうりで見覚えあると思った。そういえば、前に自分でパンク修理してるとか言つて

たっけ。自転車も詳しいの？」

「それなりには。バイクに乗る前は自転車がメインだったしね。今でも持ってるよ。ロードバイク。今度なでしこも誘ってサイクリングでも行く？」

ずっとバイクばかりだったから、たまには乗ってあげないとなあ。たぶん体力なくなってるだろうけど。

「久しぶりにチャリ乗るのもありかもな……わかった。考えておく」

「うん！ 楽しみにしてるね。あ、そうだ。ピーナッツ食べる？ さつき自転車直したお礼にあかりちゃんからもらったんだ」

「なんでピーナッツ？」

「さあ？」

二人で夕焼け空を眺めながらピーナッツを食べる。ほどよく塩気が効いてておいしい。

「伊豆、楽しみだね」

「双葉はどこ行きたいとかある？」

「まだあんまり考えてないけど、峠とか走ってみたいな。前は海沿い走るだけだったから」

前と違って今回は時間もたっぷりある。きっと楽しい旅になるにちがいない。

「ならば、西伊豆の高原に原付でも走れる道路あるみたいだし、行ってみようよ」
「なにそれめっちゃ楽しそう」

「あ、それとお母さんが双葉に峠の下りで前ブレーキは絶対かけるなだってき。前にそれで落ち葉踏んでこけそうになったんだって」

「あれ？ 咲さんバイク乗ってるの知ってるの？」

「バイクの話したら勝手に自爆した」

「あつ……」

「ご愁傷様咲さん。あなたのことは忘れません……いや生きてるけどさ。」

「今度双葉も話聞いてみなよ。お母さん隠してるつもりみたいだけど、たぶんめっちゃ詳しいと思う」

「だろうなあ。なんなら工具とかまだ持ってそうだ。」

「どうりで本栖湖でガス欠したボクをリンが助けてくれたとき、ガソリン携行缶を持ってたわけだ。」

「原付レベルで携行缶なんて持つてるわけないから不思議に思ってたけど、そういうことだったのか。」

「それで、これからどうするの？ もう帰るよね。どうせご飯まだでしょ？ 家寄ってきなよ」

いつの間にかリンの家に寄るのも当たり前になったよなあ。また咲さんにお菓子持ってかないと。ついでのバイクの話も聞こう。

「ありがと。でもこのあとあおいの家に行く予定だからまた今度ね。あかりちゃんもボクに会いたいんだって」

この前のクリキャンであおいが作ってくれたすき焼きはすごくおいしかった。きつと鍋もすごくおいしいに違いない。

「お鍋ご馳走してくれるんだって。楽しみだなあ」

「……へえ、ふーん、そっか」

ボクの横でリンが言った。気のせいだろうか、声のトーンがめっちゃくちゃ低い。

「リン、どうしたの?」

ボクが聞くとリンがプイツと目を逸らした。

「もしかして、怒ってる?」

顔を覗き込むと、リンはつまらなさそうに遠くを眺めていた。表情をみるかぎり怒ってるわけじゃなさそうさ。ほんとにどうしたんだろう。

「……べつに、拗ねてるだけ」

あ、拗ねてはいるんだ。リンがそんなこと言うなんてちよつと意外。

「まあ、うそだけだな」

「うそかー」

しばらく無言の時間が続く。

曇っていた空はいつのまにか晴れていて西の空に綺麗な夕日が輝いていた。

「……そうだ。双葉」

そうやって二人で夕焼けを眺めていると、リンがボクの名前を呼んだ。

「なに、リン」

「3月は伊豆行くって決まったわけだけど、今月はどうするの？ どうせどっか行くんですけどよ？」

と、リンがわかりきったことを聞く。

「うん、もちろん。終わりのほうに連休あるしね」

「そういえばそうだったな。でも、もうテスト前じゃん。大丈夫なの？」

「ふっふっふ、こう見えてもボクは学年順位でいつもトップなのだー」

「まじで？」

「まじだよ。ってなにその目！ さては信じてないなー！」

「いや、べつに疑ってないけど。普段の様子見てると……で、どこ行くの？」

「それなんだけど、まだ決めてないんだよねー」

「そっか、決まったら教えてよ。ついてくから」

「え？ いいの？ めっちゃ遠く行くかもしれないよ」

「最近キャンプに付き合わせてばっかりだったし、たまには双葉の旅にもついて行ってみたいなって。行つとくけど、とんでもないところだったら行かないからな」

「行かない行かない。ちゃんと常識的な距離だから」

「だいたい片道400キロ以内つてところかな。それなら16、7時間くらいでつけるし。」

「なに一つ安心できねえ……」

ふふふ……リンも早くおいでよ。楽しいよ。距離ガバ。

「その顔やめろ。で、どうするの？ どうせアヤちゃんも来るんでしょ？ 3人でどっか行こうよ」

「どうしよつかー」

そう言いながらピーナッツを一粒頬張る。うん、おいしい。

ピーナッツ、ピーナッツか。

あつ、ピーナッツ！

「そうだ。千葉行こう」

2月。ボクの新しい冒険がまた始まろうとしていた。

20話 東京湾フェリー 特殊手荷物料金 125cc

未満 片道 1,800円 (税込)

20—1

「ち、千葉、ですか？」

2月、放課後。まだまだ寒さが続く校庭で、鳥羽先生がボクのひとつ言に目を丸くした。

3月に控えた伊豆キヤンの打ち合わせの最中のことだった。

「はい、伊豆行く前にちよつと行ってこようと思ひまして」

あそこらへんは冬でも比較的暖かいつて聞かし、ひとつ走りするにはうつつけだらう。場所によっては寒いらしいけど、沿岸部なら比較的暖かいはず。

まあなんにせよ、ここよりはずつと走りやすいに違いない。

「ちよつとつて距離ではないような……ちなみにどこまで？」

「ぎっくりとしか決まっていますけど、フェリー乗って房総半島行って銚子くらいまでは行くのかなって思っています」

あそこは房総フラワーラインをはじめとして、ツーリングの名所として有名だ。

キャンプ場もそこそこあると聞いたけど、今回の目的はツーリング。キャンプはたぶんしないだろう。

「ちよ、銚子って、かなり遠いと思うんですが……」

どこか懐かしさを感じるリアクション。そういえば、鳥羽先生ってボクがよくツーリングに行くの知らないんだっけ。

「せいぜい400キロ弱なんで、なんてことないですよ」

南部町から久里浜まで約150キロ。そこからフェリーで金谷港に渡り200キロちよっと。

帰りは東京経由で帰るとして、総走行距離は約650キロ。

往復1000キロにも達してない。やろうと思えば日帰りでも行ける距離。ボクにとってはいつものツーリングの範疇だ。

「よ、400……」

ボクが言うとうと鳥羽先生がなんだかけっそりとした顔で天を仰いだ。この反応なんか懐かしいなあ。

「鳥羽先生。この子昔からこうなんで、あんま深く考えんといってください」

「そういやロリ子去年も琵琶湖行つてたもんな……なんかもう慣れたわ」

「あと、リンと浜松にいるボクの友だちもついてきます」

関西弁とメガネのあんまりな言い草をスルーしつつ今回の旅の道づれ……もとい同行人を伝えると、「えっ」と驚く声が聞こえた。

「リンちゃんも行くの!?!」

なでしこが目を丸くする。綾乃がついてくことには疑問を抱いてないのはこの際気にしないでおこう。

そういえば綾乃、この前も伊豆のほう行つてきたとか言つてたっけな。どうせなら一緒に行けばよかった。

「うん、ついてくつもり」

「おお、やるねえリン」

「がんばつてね! リンちゃん!」

「なんとか死なないようについてつてみる」

「くそつ、手遅れだったか……」

「聞こえてんぞ千明。まだ大丈夫だから」

さつきからなんかさんざんな言われようだなあ。まあいいけどさ。いつものことだ

し。ていうかまだってなんだろう。

「志摩さんまで……二人とも、本当に行くんですか？」

「はい、2月の終わりの連休に行くってくる予定です。だよね双葉」

「うん、そうだよ。って言っても連休まるまる使うわけじゃないけどね」

「そういや行きと帰りにアヤちゃん泊まるとか言ってたっけ」

リンの質問にうなずく。綾乃だけ浜松から来るのでちよつと遠い。だから行きと帰りにボクの家に一泊していくことにしたのだ。

なしくずしにリンまで泊まることになったのは予想外だったけど。そういうのもたまにはありだろう。

「えっ、アヤちゃんこっち来るの!？」

「うん、そうだよ。フェリー間に合わないしね。なでしこも来る？　夜の11時くらいに行けば会えると思うよ」

「行く行く！　わぁー！　楽しみだなー！」

幼馴染との思わぬ再会に目を輝かせるなでしこ。最後に会ったのって正月か。もうひと月経ったのか。元気にしてるかな。

「にしてもフェリーなんて出とるんやな。東京方面から千葉行くのってアクアラインだけかと思っと思ったわ」

「東京湾フェリーですね。三浦半島と房総半島を結ぶ定期便です。私も妹と一緒にキャンプしに行ったときに乗りました」

「船旅かあー！ いいなあ、あたしらも行きてーなー！」

「アキちゃんはその前にテストなんかしよーねー」

「うぐつ、そうだった……」

「お二人も勉強のほうは大丈夫なんですか？」

鳥羽先生が聞く。テストがある日は月末。ちようど旅から帰ってきたらすぐだ。教師としてはごく当たり前の心配だろう。

「はい、もちろん。ね、リン」

とはいえ、そこらへんも当然抜かりはない。今回も心配するようなことはなにもないだろう。

「はい、それなりに自信はあるつもりです」

リンもボクや恵那、なでしことしよつちゅう勉強してるしたぶん大丈夫だ。

「そうですか。ならいいのですけど……」

まだちよつとだけ納得してないといった様子の鳥羽先生。しばらく考え込むように目を伏せたあと、やがて諦めたかのようにため息をついた。

「その……くれぐれも無茶だけはしないでくださいね。たしか山中さんも志摩さんも原

付でしたよね？ そのお友達のかたも含めて、事故にだけは本当に気をつけてください
ね」

3月には伊豆も待っている。絶対無事に帰ってこよう。せつかくの楽しいキャンプ
なのに、ボクたちだけいなくなったら意味がない。

「はい！」

「ついたらちゃんと連絡してくださいね」

「はい」

「それと、ちゃんとご家族の方にもちゃんと報告するように」

よほど心配なんだろう。ほんといい先生だよなあ鳥羽先生って。でもちよつと心配
しすぎなのは、気のせいだろうか。

「あと——」

長い……

それから、約5分ほど先生の注意は続くのであった。

「よろしいですか？ 二人とも」

「は、はい……」

や、やつと終わった。

「よ、よーし！ そうと決まれば房総半島の名物とか調べとこうぜ。そうすりゃあたし

らのお土産も……ぐへへ」

「あ、ごめん千明。伊豆も控えてるからあんまりお金使いたくないし、お土産はまた今度ね」

「ぐへへ、お土産がいつぱいずら……まじで？」

「まじで」

「……まじか」

がつくりとうなだれる千明。そんなにお土産期待してたのか。

さすがにかわいそうだし、ちよつとくらい買ってこようかな。ピーナツツとか。

「まあまあ元氣だしなって。伊豆で豪遊するんでしょ？」

恵那が千明の背中をポンポンと叩く。この二人、いつの間にかすっかり仲良しになつてゐるし。

「ふふふ、それじゃあ話を戻して伊豆キャンの計画を立てましょうか。みなさんどこか行きたいところがありますか？」

「あ、先生。うちの妹も連れてつても——」

キャンプ、そして旅。二つの冒険が始まろうとしている。

新しい景色、新しい風、新しい匂い。新しい冒険。そんな未知を思い浮かべるだけで、ボクの胸は期待に膨らむ。

どんな旅が待ってるのかな。

ピンポーン！

玄関のベルが鳴る。来たみたいだ。パタパタと玄関に駆け寄ってドアを開ける。見慣れた黒髪と桜色の髪の友だちがドアの前でボクを見ていた。

「双葉ちゃん！ 遊びにきたよー！」

「ど、どうも……」

いつもどおりのなでしことは打って変わってモジモジしながらどこか恥ずかしそうなりん。

そういえばリンってボクの家に来るの初めてだったっけ。

「いらっしやい！ 入って入って〜」

「は〜い」

「お、おじゃまします……」

そんな二人をリビングに通す。なでしこがいるのはいつもどおりだけど、リンがいるのがなんだか不思議だな。

「でか……」

「リンちゃんもそう思うよね。わたしも初めて来たときびっくりしちやったよ」

「もしかして、双葉ってお嬢様のなやつなのか……全然見えないけど」

「あ、リンちゃんリンちゃん！ 双葉ちゃん家ね！ お風呂もすごい広いんだよ！

あとで3人で一緒に入る！」

「いや、温泉じゃないんだから……てか3人も入れるのか」

「二人とも、ずっと立ってないでこたつ入ろーよ。お茶出すよ。あ、なんか食べる？ プ

リン作ったばかりなんだー」

「わはあ！ プリン！ 食べる食べる！」

ここうして、まず初めにリンとなでしこが来て……

「久しぶりー」

「お疲れ、綾乃」

夜11時。予定通り綾乃が到着。相変わらず元気そうだなにより。

「あ、アヤちゃんだ！ アヤちゃん！」

リビングのほうからなでしこがパタパタと駆け寄ってくる。そして、そんななでしこについてくるようにリンも歩いてくる。

「人の家なんだから走るなって……あ、ひきしぶり、アヤちゃん」

「お、なでしこにリンちゃんも。久しぶりー」

「わあ、本物だ。本物のアヤちゃんだあー！」

「あはは、近いつてなでしこ」

満面の笑みで綾乃にじゃれつくなでしこ。なんていうか、飼い主が出張から帰ったときの犬みたいいな感じ。尻尾があつたらぶんぶん揺れてそう。

「……ワンコだな」

「ワンコだね」

「もう大変だったよー すぐそのくせにめっちゃ渋滞しててさー」

「えへへ、そうなんだあー……ん？」

綾乃となでしこが仲睦まじくする様をリンと二人で眺める。嬉しそうに話している二人を見ると、ボクも嬉しくなってくる。

「あ、双葉、お風呂借りていい？ 身体冷えちゃってさー」

「うん。もちろん」

「あ、わたしも一緒に入るー！」

「さつき入ったばかりだろ」

「じゃあ四人で入っちゃおう？ ていうか、入れるの？」

綾乃がボクの家の大きさに驚いたりして、時間は過ぎていった。

ちなみにお風呂はみんなで入り直した。さすがに湯船に四人は窮屈だったけど。

「金谷ついたらそのまま沿岸に沿って走って……」

リビングのソファに腰掛けながらスマホで明日の計画の確認をする。

「あれ？ まだ起きてたんだ」

声がして振り返る。湯上がりで火照った顔の綾乃がボクを見ていた。

「ちゃんと寝ないとちっこいままだぞー」

「はいはい」

綾乃がボクの隣にドスンと座り込む。湯上がりからそこまで時間が経ってないからか、まだシャンプーの匂いが漂っている。

どうでもいいけど綾乃の髪からボクと同じシャンプーの匂いがするって、なんか不思議な感じ。

「二人は？」

「二人なら部屋でぐーぐー寝てるよ。とくになでしこは綾乃が来るまで眠いの我慢してたみたいだし」

「べつにそこまでしなくてもいつでも会えるのにねー」

「それだけ綾乃が特別ってことだよ。ちよつとうらやましくなっちゃうな。ボクそーい

う幼馴染とかいかなかったし」

「はあ、しようがないやつだなあ……」

綾乃の口元が、嬉しそうに綻んだ。

「で、双葉はなにしてるの？ もう寝ないとまずいでしょ。明日早いでしょ？」

「予定の確認。もう覚えてるんだけど、一応ね」

「真面目だなー えっと、11時に久里浜つてところでフェリーに乗るんだよね？」

「うん。11時25分のフェリーに乗る予定。だから遅くても5時には出発しないといけないかな」

「へえ、思ってたより余裕あるじゃん」

「この時期はいつもより便が多いみたいなんだ。で、港にいたら房総半島ぐるっと周って九十九里通って銚子にある海水浴場で一泊」

「九十九里つてあれだよな。日本で一番大きい砂浜」

「あれ？ 一番大きいのつて鳥取砂丘じゃなかったっけ？」

「あそこつて砂浜なの？」

「さあ……まあそんな感じ。大した距離じゃないし、ちょっとした観光だよ」

「だね。あ、お母さんが味噌ピーナッツ買ってて言つてたから、行きか帰りにお土産屋寄つていい？」

「わかった。で、帰りなんだけど、東京通って富士山内回りして——」

「東京っ！ 東京通るの!!」

ものすごい勢いで詰め寄ってくる綾乃にびつくりする。あんまりにもすごい勢いで詰め寄ってきたので鼻がぶつかりそうになる。

「わっ、ど、どうしたの？」

「だって東京だよ！ 東京タワーだよ！ スカイツリーだよ！ スクランブル交差点だよー！」

「ボク行ったことあるけどそんなに——」

「絶対！ 絶対寄ってこー！」

テンションを抑えきれないと言わんばかりに横に座るボクの膝と肩に手を乗せ、垂れ気味の目をギラギラと輝かせている。

「時間には余裕あるし、大丈夫だけど……行く？」

「やったー！ 東京だー！ 双葉大好きー！」

「はいはい」

「もう、てきとーだなー できでさ——」

弾む会話。あれを見たい。あそこに行きたい。そんな話をしながら目の前に広がる未知に胸を膨らませる。

夜は過ぎていき、そして……

まだ日も昇らない早朝。夜と見紛うばかりの暗い空。吐いた息が白く凍るような寒い空気の中で、ボクたちはそれぞれのバイクの前に立っていた。

「ふああ〜 じゃあ、みんな気をつけてね〜」

半分寝ぼけているなでしこが、ふらふらしながら言った。

本人に起こしてくれって頼まれたから起こしたけど、やっぱり寝かせてあげておいたほうがよかったかな。

「なでしこ、冷蔵庫におにぎり作ってあるから食べていいからね」

「はあく〜い」

「え、双葉、戸締まりとかどうするの?」

リンが当たり前と言えは当たり前のことを聞いてくる。

「あ、大丈夫暗証番号教えてあるから」

「おい、それでいいのか」

「いいんじゃない? わたしもなでしこに家の合鍵とか渡してまし」

「お母さんもいいって言ってたし、いいんじゃないかな? ていうか、むしろお母さんの

ほうから教えておけって言ってたし」

「……そ、そういうもんなのか？」

「ボクもよくわかんない」

たぶん、本当はあんまりよくないと思う。でもまあ、なでしこだしいいや。そろそろ行かないと。

「二人とも、準備はいい？」

「オツケーだよー」

「わたしも大丈夫」

荷物の締め付けもバツチリ、充電器も財布も持った。ガソリンとオイルは満タン。タイヤの空気も入れたばかり。

ここでするべきことはなにもない。あとは行くだけだ。

ヘッドセットを耳にはめ、ヘルメットを被る。顎紐を締める。

シートに跨る。

キーを差し込んでスイッチをオン。右のワインカー、左のワインカーよし、ブレーキランプもよしと。

クラッチ、ブレーキ、問題なし。燃料コックを捻り30秒ほど待つてからチョークを引く。

キックペダルに足をかけ何度か踏む。ピストンが圧死点に来たところでいったん止める。

「行こうか。ビーちゃん」

蹴り飛ばす。ピストンが回り、キャブレターによって空気と混ぜ合わされたガソリンがシリンダーの中に噴射され、プラグの火花に引火。爆発する。

燃焼と排気、吸気と圧縮を交互に繰り返し、トコトコと回りだすエンジン。

チョークを戻しアクセルを煽る。スロットルを回すたびにブウォンブウォンとエンジンが唸り、マフラーが白煙を吐き出す。

エンジンの鼓動に合わせて微かに点滅するヘッドライトとメーターランプ。

キュルキュルと鳴るセルモーター、力強く唸る4ストエンジン。2台のヤマハと1台のホンダが、そのエンジンの音を鳴り響かせる。

焼けたオイルの匂い。燃えたガソリンの匂い。甘く焦げた匂い。旅立ちの匂い。

「なでしこ、行ってくるよ」

「お土産楽しみにしててねー」

「行ってくる」

「いってらっしゃい。ついなら写真送ってねー」

眠そうだなでしこに手を振ってウインカーをつける。

カチカチと点滅するランプが日の出まへの薄暗い町をオレンジに染めた。

後ろを向く。リンと綾乃も同じようにウインカーを焚いていた。カチカチ、カチカチ、カチカチ。それぞれ微妙に違うウインカーの音がヘルメット越しに頭の中で鳴り響く。

クラッチ、ギアペダルを踏む。軽い衝撃とガコツという音と共にギアが1速に変わった。

アクセルオン。回りだすエンジン。ハンドル越しに伝わるエンジンの振動が突き上げるようなものから痙攣のような震えに変わっていく。

吹き出した白煙が、ヘッドライトに照らされて視界の端に漂う。

クラッチを離す。進み出す車体。肌を感じる風と共に、薄暗い世界が回りだす。

トコトコと走り出す車体。そんなボクに続くようにビーノとエイプが走り出す。

51cc、99cc、49cc。それぞれ違うエンジンが、それぞれ違う音を奏で、それぞれ違う煙を吐き出し、それぞれ違うタイヤで進み出す。

スロツトルを戻し、クラッチを叩きながらシフトペダルを踏み込みシフトアップ。

2速、3速、4速。ギアを上げるたびに風が強く流れていき、身体を冷たく包み込む。

朝焼けすらこない暗がりの早朝。しっとりとした風の匂いを嗅ぎながらボクたちは走り出す。

『さぶつ』

『アヤちゃん大丈夫?』

『うん、平気。ちよつと寒くて驚いただけ』

薄闇を行く三つのテールランプ。12ボルトの淡い光が、暗がりのアスファルトを照らししていく。

空を見る。東の空が微かに赤く染まっていた。もうすぐここにも日が昇る。

『あーあ、早く春にならないかなー』

綾乃が言った。

「なるよ、必ず」

そんな旅だちの朝。

「必ず、ね—— くしゅんっ!?!」

『しまらねー』

『あはは、それでこそ双葉って感じ』
「うるさい。うえ、鼻水出てる……」

日が昇ってまもない箱根の峠道。肌を切り裂くような冷たい風の中を 3人ひた走る。

コーナーを曲がるたびにミラーに反射するヘッドライトがチカチカと顔を照らす。

朝の峠道は車の通りもなく不気味なほど静かで、そんな中を走っているとまるで自分たちがべつの世界に来てしまったかのような、そんな錯覚に陥る。

リンも綾乃もボクも、誰一人喋ろうとはしない。ただ、黙々と粛々と、目的の場所に向けて寒空の下を――

『ヤむい、いー！』

走つていこうとして、綾乃が耐えきれずに叫んだ。

『こんな寒いなんて聞いてないよおー！』

浜松っ子の綾乃に、朝の箱根の寒さは身に堪えるみたいだ。

太平洋に隣接した浜松で氷点下を割ることなんて滅多にないだろうし寒いに決まっ

ている。

『山の中だし、しょうがないよ』

「もう少ししたら日も上がってくるし、少しは暖かくなるって」

『二人はなんでそんな平気なのさー!』

「まあ、慣れてるし」

『こつちだと氷点下で走るとか当たり前だもんな』

「山梨ってほんとはどこ行っても寒いもんねー」

とくにリンはちよつと前まで冬しかキャンプしないっていう剛の者だったし、寒さにはめっぽう強いんだろう。

ちなみにボクはたんに厚着しまくっているから平気なだけである。今度ダウンジャケットの下にダウンベストも着てみようかな。

『顔が! 痛い!』

迫真すぎてもはやダミ声になっている綾乃。きつとすごい寒いんだろうけど、なんだろぅ……

『ぶ、ぶ、ぶ……』

「ぶ、ぶ、ぶ」

『あー! 笑ったなー!』

「ご、ごめん。声が迫真すぎて……ふ、ふふ」

『わたしもリンちゃんみたいにシールドにしとけばよかったよー！ リンちゃんあとでわたしのゴーグルと交換してー！』

『麓についたらな』

『ありがとリンちゃん！』

『はいはい』

千葉への道は、いまだ遠い。

信号が青になる。

アクセルを吹かしながら左に曲がると、ヘッドライトの向こうにある防風林と堤防が、視界の右端に流れていった。

曲がりながらスロットルオフ。一瞬だけ緩むチェーン。クラッチを叩くように握りすかさずシフトペダルを踏み込む。

シフトアップ。同じ動作を繰り返し3速、4速と上げていく。

「こっから流れめっちゃ早くなるから気をつけてね」

『はいよー』

『へーい』

どこまでも続く松の防風林。白いガードレールで隔てられた黒々としたアスファルトの上を走っていく。

『江ノ島、茅ヶ崎……』

最後尾を走るリンがボクの頭上を通り抜けていった標識の地名をつぶやいた。

箱根を抜けたボクたちは、国道1号を走り小田原を通過。湘南、鎌倉へとつづく長い一本道である国道134号に足を踏み入れた。

『なーんか高速道路みたいだね』

『わかる。まあ自転車走ってるけど』

『あ、ほんとだ』

二人は初めての道路に興味津々みたいで、さつきまでと違ってずいぶんと賑やかだ。

「二人つてここ走るの初めてだっけ？」

『双葉は来たこと……あるに決まってるか』

「うん。東京行ったり神奈川行くには

ここが一番楽だからね」

国道1号から続くようにつながっている134号は、神奈川の沿岸部を一本で結ぶ関

東の主要な幹線道路の一つだ。

全長60キロと他の国道に比べれば大して長くはないけれど、どこまでも続く一本道はいつ見ても圧倒されるものがある。

そんなどこまでも続く一本道をボクたちはひた走っていく。途中、国道1号からやってきたトラックや乗用車がボクたちを猛烈な勢いで抜き去っていった。

『はえー』

『みんなせつかちだなー』

「みなさん、後方にご注意ください……なんて——いてっ」

飛び跳ねた砂つぶが、ボクの頬を掠めた。ボクもリンのシールド借りてみようかな。

ガソリンタンクのキャップを開けて、キャップをキャップ置き場に乘せる。

気化したガソリンのツンとした匂いが鼻をくすぐる。

あれから5キロほど走ったあと、綾乃のエイプのガソリンがなくなりそうだったので、湘南大橋の近くにある大きなガソリンスタンドで燃料を補充することにした。

「レギュラー、満タン、現金つと」

タッチパネルを操作して小銭を投入……あ、ここ小銭ダメだ。しょうがない、お札投入。

無機質なガイド音声に従い確認ボタンを押してから、静電気除去シートをペタペタ。赤いノズルを手にとって給油口に突っ込みレバーを引く。

セルフ式はいちいち頼まなくていいからちよつと楽だ。ギリギリまで入れられるし。まあたまに欲張りすぎてこぼれるけど。

「リットルくらいでいいかな」

スプロケットを変えたおかげか、はたまたリンの速度に合わせているおかげか、心なしか前よりもガソリンの消費が穏やかだ。

「レギュラーマンタンゲンキンデー……なんてな」

ぼそりとつぶやく声。顔を向けると、ちよつどボクの向かいのレーンでビーノにガソリンを入れているリンがいた。

「ん?」

きよんとした顔で首をかしげるリン。もしかして聞かれたの気づいてないのかな。「ううん、なんでもないよ」

ひよつとしてボクの真似なんだろうか。まあ追求するとはぐらかされそうだから聞かないでおこう。

「ふーん。そういえば、さっきの橋すごかったね」

「湘南大橋のこと?」

リンの言葉にボクは今さっき通り抜けたばかりの橋のことを思い浮かべた。

「うん。ずっと同じような道走ってからだろうけど、解放感すごかったね」

134号線は、隣接する茅ヶ先海岸からやって来る砂と強風を防ぐために何十キロにも渡って防風林が続いている。

おかげで風も砂もまったく来ないので走る分には快適なんだけど、単調な景色がずっと続くので、バイク乗りにとってはあまり楽しい道じゃないのだ。

「江ノ島のほう行ったらもつとすごいよ」

「江ノ島か。生しらす丼食べたかったなあ……」

リンがガソリンを入れ終わったノズルを戻しながら、遠くを見る。目線の先にはきらきらとしたしらすの群れが泳いでいるんだろうか。

「ボク生のしらす食べたことないんだけど、どんな味なんだろう」

「一回だけ食べたことあるけど、おいしかったよ。バイト代貯まったらまた行くか……首を洗って待ってろよ。しらすどもめ」

「うんうん」

どうでもいいけど魚に首つてあるんだろうか。まあいいや。

「ていうか、双葉いつまでガソリン入れてるの？ そろそろ溢れちゃわない？」

「大丈夫大丈夫、いつもギリギリまで入れてるし……つと」

二人で一緒に笑う。

本当は笑つちやいけないんだろうけど、綾乃叫びがあんまりにも迫真すぎて耐え切れなかった。

「こらー！　そのキャンパーとライダーー！　笑うなー！」

あ、やば、バレた。早く小銭受け取る。

小さな谷を抜ける。そこには、海と道路だけで構成された世界が広がっていた。

太平洋の荒々しい波が押し寄せる海岸線。

海水を含んで灰色になった砂浜に、黒っぽい波が打ち付られ、白い泡となってまた海に帰っていく。

澄んだ青空の下、遙か彼方にたたずむ三浦半島。

鎌倉、七ヶ浜海岸。ボクたちはそんな道を走っていた。

『わあ！　この道テレビで見たことあるやつだ！』

『アニメとかでけっこう使われてるよね』

『あつ！ 今通り過ぎた踏切バスケのやつだ！』

東からくる風はこの時期にしてはどこか暖かく、柔らかくボクたちを包み込んだ。

後ろの二人の盛り上がる声に耳を和ませつつ心地のいい日差しを一身に受け、スロットルを回していく。

『ねえねえ双葉！ 左に見える線路って江ノ電だよね』

「そっだよ。あ、ちょうど向こうから来たみたい」

噂をすればなんとやら。

海を眺めるように建てられた小さな駅から、緑とクリームの小さな電車が走ってきて、ボクたちとすれ違って行った。

2両編成の小さな車両の中に、たくさんの人が押し込められるように乗っていて海を眺めたりスマホをいじったり、思い思いのことをしている。

あの人たちも観光に来てるのかな。

『あはは、おーい！』

ミラーをチラッと見ると、綾乃が元氣よく手を振っていた。ほんと、元氣だなあ。やっぱなでしこの幼馴染なだけある。

『リンちゃん！ 双葉！ 楽しいね！』

楽しいげな声。

スピーカー越しでも綾乃がどんな顔をしているのか簡単に想像がついた。

『アヤちゃんさつきからテンション上がりすぎでしょ』

「はしやぎすぎて港ついたときにへばらないでよー」

『平気平気！ まだちよつと走っただけだし』

「それもそっか」

『だね』

スロットルを回す。トンビが一羽、風を受け凧のようにゆらゆらと空を舞っていた。

『……………だね？』

ふふふ……………

それからボクたちは、ひたすら海岸を走っていった。

由比ヶ浜でヨットやサーフィンに勤しむ人たちを横目に見つつ鎌倉を通過。

逗子市に入り、チェックポイントである久里浜に向かってラストスパートをかける。

潮の匂いが漂う海沿いの景色は、いつの間にか山と道路、そして民家といった、ボクたちには馴染みのあるものに変わっていた。

山々の間を縫うように、時には貫いて、ボクたちはのんびりと走っていく。

『なんか横須賀つてもつと都会つぽいつて思つてたけど、あんまこつちと変わんないだな』

「関東つて言つても端つこのほうだしね。それにこの山だらけの地形じゃ街とかあんまり作れないだろうし」

『それもこつちと同じつてことか』

『山国だもんねー日本つて』

どれだけ離れていても、似たような地形なら、似たような景色になっていくらしい。『けど似てるけど、あつちと全然違うね』

リンの言葉にうなづく。どんなに似たような景色でも、やっぱり違う。

それは車のナンバーだったり家の作りだったりいろいろだ。

たとえば、山梨では杉の木ばかりだけど、こつちでは広葉樹が植えられてたり、あるいは交差点の信号が全部LEDの薄型だったり、街ゆく人たちの服装が、山梨よりもちよつと薄着だったり。

違いは些細なものだけど、明確に違う。ボクたちは今遠く離れた土地にいる。そのことを見せつけられる。

徐々に徐々に変わっていくから気がつかないけど、改めてみると全然違っている。

これだから旅はおもしろい。

でも、そんな旅路ももうそろそろ折り返しになる。

「金谷行きフェリー乗り場……」

少し離れたところにある青い道路標識を読み上げる。これ以上ないくらいわかりやすい目印。

「リン、綾乃、お疲れさま。もうすぐだよ」

神奈川県横須賀市、久里浜港。ボクたちはついに千葉への入り口へとたどり着いた。

「原付3枚お願いします」

ガラス窓のついた受付の向こうにいるおばさんにお金を払ってチケットを受け取る。

「1枚1800円……ぐぬぬ」

フェリーにしたら安いほうではあるけどちよつと高い。でも陸から行くとかかなり大回りだししょうがない。

チケットを無くさないようにポケットにしまってチケット売り場がある建物から出る。

自動ドアをくぐり外に踏み出すと、山梨とは違う、どこか暖かさすら感じるような空気が顔を撫でた。

「やっぱこっちはあつたかいなあ」

目の前にある白線でマス目のように区切られた待機スペースに足を伸ばす。

待機スペースでは、ボクたちと同じようにフェリーに乗ろうとしている人のバイクや、高そうなロードバイク、そして自動車など、いろいろな乗り物が勢揃いしていた。

この人たちもみんな観光しにくのかな。ていうかやけにゴルフバッグ持った人多いけどゴルフ場でもあるんだらうか。

どうでもいい疑問に頭を悩ませながら、リンと綾乃の待つ港の駐車場にある待機スペースに戻る。

ボクが戻ると、綾乃がエイプのシートに腰掛けて足をぶらぶらさせていた。

「チケット買ってきたよー」

「あ、サンキュー」

「はい、チケットとお釣り」

綾乃にチケットともらったお金のお釣りを渡して綾乃と同じようにビーチちゃんのシートに腰掛ける。

「リンは？」

「向こうで写真撮りまくってみたい」

綾乃の目線の先に目をやる。

少し離れたところで、見覚えのあるニット帽が猛烈な勢いで写真を撮りまくっていた。

「チケツト渡さない」と

「あと40分くらいだっけ？ フェリーでるの。けっこう早くついたね」

綾乃にそう言われて時計を見る。到着予定よりも20分は早い。たぶん早めに出発したおかげだろう。

「まあそのぶんゆっくりできていいじゃん」

「それもそっか。あ、そうだ。せっかくだし3人で写真撮ろーよ」

綾乃がシートからピョンと飛び降りてボクの手を掴んで走り出す。

「ちよっ」

「リンちゃんー！」

風で冷やされた手がボクの手を引っ張っていく。この子と友達になってそこそこ時間が経ったけど、このちよつと強引なところは相変わらずだ。

でも、ボクは綾乃のそんなところが大好きだ。

「うおっ!?! あ、アヤちゃん?」

いきなり腕に組みつかれて目を丸くするリン。

「写真撮ろ！」

驚いていたリンだったけど、綾乃の屈託のない笑顔を見ると優しげに微笑んでうなずいた。

「双葉もこっちこっち。あ、ごめん腕塞がっちゃうから写真撮って」

もう、しょうがないなあ。スマホを取り出して、3人で顔を寄せ合う。

シャッターを切る。思い出がまた一枚増えた。

直列、並列、単気筒、2気筒。大きかったり小さかったり、うるさかったり静かだったり、いろんなエンジンの音が久里浜の港にこだます。

「どうぞー！」

従業員の人の合図に従って、ボクの前に停まっていたバイクが走り出した。ボクも行かないと。

前のバイクについていくようにアクセルを吹かしながらクラッチを離して車体を転がす。

後ろからついてくる二人をミラーで見ながら、まるで口を開けたジンベイザメみたい

なフェリーの船内に飛び込んでいく。

鉄のゲートを潜ると、岸壁と棧橋の段差をタイヤががっこんと乗り越えた。

タイヤから伝わる路面の感触が、慣れたしんだコンクリートからゴツゴツとした鉄の感触に変わっていく。

転ばないように気をつけつつ、ギアを下げながらゆつくりとフェリーの船内に入っていく。

船内は、鉄づくりの白い鉄の壁で覆われていて、壁には浮き輪やロープといった見慣れないものがたくさん吊るされている。

緑一色に塗られた床には白と線が引かれていて、さながら駐車場だ。

まるで、駐車場をそのまま船の中に作ったような、そんな空間。どんなものなのかは知っていたけど、実物を見るのはこれが初めてだ。

奥のほうでスタンバイしていた従業員の人の誘導に従ってビーチちゃんを壁端に停める。

「ハンドルロックは切らないで、そのままでもいいですよ」

「あ、はい、お願いします」

エンジンを切ってビーチちゃんから降りると、従業員の人は手慣れた様子でビーチちゃんを壁にロープで固定し始めた。

へえ、ああやってやるんだ。おもしろいなあ。

「双葉ー！」

作業の様子を眺めていると、後ろから綾乃に声をかけられた。その横にはリンもいた。

「ここにもあれだし、中行こうよ」

「だね。いこつか。双葉」

リンにうながされて一緒に歩きだす。目指すは階段の上にある客室だ。

「遅いぞー！ 二人とも！」

「もう登ってるし」

いつのまにか階段を登り切っていた綾乃が上のほうでボクたちを呼んでいた。

「リン、ボクたちも早く行こー！」

冷たい鉄の手すりをつかんで、急な階段を登っていく。

「転ぶなよー ていうか双葉」

声をかけられ振り返る。ちよつと困ったような、不思議そうな顔をしたリンがボクをじいっと見つめていた。

どうしたんだろう。

「ヘルメット、船の中持ってくるの？」

「あつ」

脱ぐの忘れてた。

どこまでも続く青い空、どこまでも続く深く青い海。水平線の向こうに流れる白い雲に船の影。

磯とも違う、水気と塩気をたつぷりと含んだ、まさに海の匂いとしか言い表せない空気を胸いっぱい吸い込む。

白い鉄柵に手を乗せて下を覗いてみる。ゆらゆらと揺れる船体。揺れるたびに波飛沫が飛び散り白い泡になってまた海に帰っていく。

「ほんとに船の上なんだ……」

「落っこちるぞー」

声がある。横を向くとリンがちよつと離れたところで立っていた。

「あ、リン」

ボクが名前を呼ぶと、リンが近づいてきて、ボクと同じように鉄柵に手をかけて海原

を眺めた。

「落ちそうになったらリンが引つ張って」

「物騒なこといなし」

リンとバカ話をしながら揺れる船の上から大海原を眺める。久里浜を出たボクたちは、船に乗って浦賀水道を進んでいた。

「風気持ちはいいね」

「だね」

ニット帽からはみ出したリンの髪が風に揺れる。

「リン髪伸びた？」

「そう？ いや、そうかも。双葉もけっこう伸びたんじゃない？」

リンが手を伸ばしてボクの髪を触る。肩口で切り揃えていた髪は、いつの間にか肩にかかるくらいまで伸びていた。

「いい加減切らないとなあ」

「そのままでもいいと思うけどな」

「そう？」

よくわからないけど、リンが言うならそうなんだろう。どうせならリンと同じくらい伸ばしてみようかな。

やっぱやめとこ。手入れめんどろそうだ。

「つて言ったら恵那怒るんだろうなあ」

「なんで恵那？」

「なんでも。そういえば綾乃は？」

「まだ客室でうんうん唸ってる。吐くほどじゃないみたいだけど、きついみたい」

「船酔いかあ、大変だよね」

乗る時は一番テンションが高かった綾乃だったけど、船が出航して一番テンションが下がったのも綾乃だった。

「こればかりは体質だからしかたがない。」

「リンは大丈夫？」

「なんとも。うちの家族、みんな乗り物酔い強いし」

一族レベルでバイクに乗ってるんだから乗り物酔いも強くて当然か。

「双葉は？」

「……リン、船酔いってね。海を眺めるとよくなるんだって」

「酔ってるんだな」

「はい」

出航して10分。ボクは早くも船酔いに見舞われていた。

「大丈夫？」

ちよつと心配そうに顔を覗き込んでくるリンに手を振る。

「軽い車酔いくらいだから平気。ボクはもうちよつとここにいるよ。心配してくれてありがとねリン」

「そつか。わたしアヤちゃんのところ戻るけど、そつちも気分良くなったら戻りなよ」

「はい」

ぐらりと揺れる船。フェリーつてもうちよつと揺れないと思つてたけど、けつこう揺れるんだな。でもなんかちよつと慣れてきたかも。

「写真撮ろ……つてライン来てる」

千明からだ。

酔いそうだから電話にしとこ。通話ボタンをタッチ。ほどなくして電話がつながった。

「あ？　もしもし、ボクだよ」

『おう！　ロリ子、写真見たぜ。今どこらへんいるんだ？』

「ちよつどフェリー乗つてるところ。海のだ真ん中。ていうか、携帯繋がるんだね」

まあ大した距離ないし当たり前か。でもなんか不思議な感じ。

『もうそんなところいるのか。いいなー、あたしも行ってえなあ』

「千明もいつかバイク買って行こうよ。山梨からたつたの150キロだよー」

『……あー、やっぱやめとくわ。で、どうよリンと綾乃の様子は』

「綾乃が船酔いでダウン。リンは今のところピンピンしてる。口に出してないけどたぶんめつちやテンション上がってる。さっきも写真撮りまくってたし」

『あ、その写真さつきあたしらにも送ってきたわ。リンって意外と写真好きだよな。ていうか綾乃は大丈夫なのか?』

「そんな距離ないし大丈夫でしょ。向こう着いたら休憩もするしね」

『あんま無茶させないでやれよ。ただでさえあいつだけ浜松から来てるんだから……ていうか、よく浜松から来ようと思ったな』

綾乃も浜松でいろいろ走ってるみたいだし、もう慣れっこだろう。

リンがちよつとだけ心配だけど。どうせ走ってるうちになにも思わなくなってくるから大丈夫。

……

……

……

「なんか、不思議だなあ」

ふと思つたことを口走る。

『ん？ いきなりどうしたんだ？』

少し前までボツボツ言ってたのに、今じゃこうして友だちと3人でツーリングしてる。

いろんな人と知り合って、いろんな人と友だちになって、いろんなことを知って。頼ったり、頼られたり、助けたり、助けられたり。

人生ってバイクと同じくらい、なにが起こるかかわからない。

「ううん、なんでもない」

『いや、言えよ！ 気になるだろ！』

本当になんでもないことだ。

昔はどうであれ、今はもう違う。過ぎたことをいちいち考えたってなんの意味もない。

「秘密だよー」

だから教えない。教える必要もない。それに、お調子者の千明にそんなこと言ったらからかわれるに決まっている。

あ、でもあれだけは言っておこう。

「そうだ。言い忘れてたけど、ボクと友だちになってくれてありがとう。大好きだよ」

『は？ え？ い、いきなりなんだよ』

突然のひと言にスピーカーの向こうで驚く声が聞こえる。

「べつにー、思ったこと言っただけ」

『そ、そっか。まあいいけどよ。へ、へへ、なんか照れるな。も、もう切るぞ！ あんま無茶すんなよ！ あとお土産忘れんなよー』

「大丈夫！ あとたつたの200キロだし。じゃーね」

電話を切る。本当に、みんなボクにはもつたいたくないくらいの友だちだ。

まあ、そんなこと言ったらまたリンとかなでしこに怒られるから言わないけどさ。さて、酔いもだいたいマシになってきたし二人のところに戻ろうかな。

「戻ったよ」

広々とした客室に戻り、ソファアに座る二人の背に向かって声をかける。が、返事はない。聞こえなかったのかな。

「おーい——」

「しー」

振り向いたリンが口元に指を当ててボクに合図してくる。どうしたんだらうか。

回り込んでみると、答えはすぐにわかった。

「すう……すう……」

綾乃がリンの肩にもたれかかって眠っていた。

すごい気持ちよさそうに寝ている。この分なら酔いは大丈夫そうだな。ちよつと安心。

「重い」

リンがぼそり。

「代わろつか?」

「ううん、起きてまた酔ったりしたらかわいそうだし、このままでいいよ」

「それもそっか」

手足をだらしなく伸ばして眠りこける綾乃はなんだかちよつとおもしろい。きつと起きるころにはついてるだろう。

「ふふっ」

「な、なに?」

いきなり笑い出したボクに、リンがいぶかしむ。

「やっぱリンって優しいんだなって」

ボクが言うと、リンの顔がちよつと赤くなった。べつに照れることないのにね。

「べ、べつにしかたなくっていうか……」

目をキョロキョロと泳がすリン。これが噂に聞くツンデレってやつなのだろうか。

「もう、素直じゃないなあリンは。まあ、リンのそういうところ大好きだけどね。ボクもちよつと寝よつかな。肩貸りるねー」

「ちよつ、おい」

そう言つて、リンの隣りに座り込み、頭をリンの肩に乗せる。もふもふのマフラーが顔に当たつてちよつとくすぐつたい。

「重てーよ」

セリフは嫌そうだけど、声色は全然嫌そうじゃない。まあつまり、いつものリンつてことだ。

「ついたら起こしてー」

目を瞑る。揺れる船に意識を任せていると、なんだか少し眠くなってきた。ボクも疲れてるのかな。

「勝手に人の肩枕に………つて、もう寝てるし………しょうがないなあ」

ほんとに眠くなってきた。少し、寝ちやおう。

「おやすみ、双葉」

意識が落ちる寸前、そんな声が聞こえた気がした。

海を渡り、波を越え、ボクたちを乗せた船は進んでいく。そんな、長いようで短い船旅もやがては終わる。

『ご乗船のお客さまにお知らせします』

船内のスピーカーから流れるアナウンスに耳を傾け、船窓の外に広がる大地を眺める。

『当船は間も無く金谷港に着岸いたします。お忘れ物ございませんよう——』

徐々に近づく岸壁。甲板の上で、ロープを持った作業員の人々が忙しく動く。

「ついた……」

リンが、つぶやく。

「ついたね」

ボクは言う。

「ついた！」

綾乃が、叫ぶ。

「「ついたあー!!」」

ボクたちが、歓声を上げる。

千葉県房総半島。ボクたちは、ついにたどり着いた。さあ、冒険の幕開けだ。

21話 道の駅潮風王国 真サバ開き2枚 500円

(税込)

21-1

「「ついたあぁ!!」」

潮風を胸いっぱい吸い込みながら、3人で歓声をあげる。

瞳の先にある海の遙か向こうには、ボクたちがさつきまでいた三浦半島がぼんやりと映っていた。

千葉県房総半島、金谷港。ボクたちは、海を越え千葉の大地へと足を踏み入れた。

「うーん、やっとなついたあー!」

リンが背伸びをしながら言う。まさかリンとこんなところまで来るなんて、ちよつと前までなら考えもしなかったな。

「なに笑ってんの?」

「べつにー　なんか、あつという間だったね」

「たしかに、わたしももつとかかると思ってたよ」

「二人とも寝てただけじゃん。しかも人の肩に頭乗せてさ。おかげでめっちゃ肩凝ったわ」

「ふひひ」

笑うボクと綾乃にリンがふつと微笑んで肩をすくめる。

「ま、いいけど。それで、これからどうすんの双葉」

リンが話を切り上げてボクに質問してくる。綾乃もうんうんといった感じでボクを見てくる。

「とりあえず、房総半島ぐるっと回って、銚子まで行く。以上」

「めっちゃ適当だな」

「あはは、双葉らしいや」

ちよつと呆れた感じの二人。やっぱそう思うよね。ボクも思うし。でもこれがボクなのだ。

「ボクの旅はそういうもんなの。まあ行きたいところあったら言ってよ」

「あ、はいはい！」

綾乃が元氣よく手をあげる。さつきまで寝てたからすごい元氣だ。

「わたし灯台行きたい！」

「灯台？」

「行く前に調べただけど、こちら辺めっちゃ灯台あるんだって。せつかく来たんだし、ちよつと見てこーよ」

「あ、いいかも。双葉は？」

「ボクも賛成。ちよつと調べて行ってみよつか。でもその前に……」

ぐうつという奇怪な音が鳴り響く。音の発生源は言うまでもないだろう。

「ご飯にしない？」

ボクは言う。そして、二人は笑った。さて、なにを食べようかな。きつと3人で食べればどんなご飯だっっておいしに違いない。

口の中に残る海鮮の後味を感じながらゴーグルをかける。港だけあつてけっこうけっこうおいしかったな。高かったけど。

「準備いい!？」

後ろのリンと綾乃に声をかける。ビーノに乗ったリングが手を上げ、綾乃は返事の代わりにエンジンを空吹かしさせた。

大丈夫みたいだ。よし、行くとするか。手で合図してエンジンの回転数を上げ、クラッチを離す。

エンジンが唸り動きだす車体。ギアを上げていくたびに風が身体を流れていく。

港を後にしたボクたちは、島をなぞるように国道127号、内房なぎさラインを走っていた。

『めっちゃ海だ』

最後尾を走るリンが感心したように言った。

崖に沿ってくねくねと曲がった道路。その下の岩礁に、考えるのも馬鹿らしくなるような大きさの海原から押し寄せた波が飛沫となって打ちつける。

ボクたちが走っているのは、まさにそんな道だった。

『懐かしいなー 伊豆もこんな感じだったよ』

『え、アヤちゃん伊豆行ったことあるの?』

『うん。近いしキャンプするついでにちよつと走ってきた』

『……ついで? ついでで行ける距離なのか?』

そういうえば、2月の頭くらいにそんな話をした気がする。どうせなら一緒に行けばよ

かったな。

『つて言っても観光とかはしてないけどね。給料日前だったし』

「暖かくなったらまた行けばいいよ」

『それもそつか。ならさ、春休みなったら3人で行こーよ。ね、リンちゃん』

『え、わたしも?』

『むしろリンちゃんいなかったらどうすんのかって感じ』

リンはボクたちの貴重なバイク仲間。当然一緒に行くに決まっている。もちろんリンが嫌だったらそのかぎりじゃないけど。

『……考えとく』

『『やったー!』』

『いや、まだ行くって……はあ、しょうがないなあ』

「あ! せっかくなんだしまた琵琶湖とかもいいんじゃないかな! そのころなら桜も咲いてるだろうしさ」

湖を眺めながら満開の桜並木の、道を走る。きつとすごい綺麗なんだろうな。

『お、いいね。でもどうせならもつと遠く行こーよ。1日でたどりつけないところとか
』

「なら一日400キロ走るとして二日かければ——」

『やめろ。まじやめろ。ほんとにやめろお!』

潮風の吹く海沿いの道に、リンの叫びが響きわたる。

暖かい日差しの差し込む静かな社に、ボクたちの手拍子が鳴り響いた。

「二人はなにをお願いした?」

「ボクはとりあえず交通安全」

「わたしも」

「あはは、わたしも。ぶっちゃけいきなりお参りっていつでもそれくらいしか思いつかないよね」

鶴谷八幡宮。金谷港から約20キロほどのところにある大きな神社で、ボクたちはお参りをしていた。

「標識があつたから寄つてみたけど、なんかいい感じ」

お参りを終えてバイクに戻るために、石造りの広々とした境内を歩いていく。

落ち葉だらけの境内は、人気のなさもあつてどこか浮世離れしている気がする。

「けっこう有名らしいよ。お母さんたちも昔バイクで走ったとき寄つたみたい」

「へえ、リンちゃんのお母さんもバイク乗ってるんだ」

「今は乗ってないけどね。お父さんも乗ってたし、おじいちゃんも乗ってる」

「わたしのおじいちゃんも昔乗ってたんだー。じゃあわたしたち孫ライダースだ」

「なんだそりゃ。そういえば双葉のお母さんもバイク乗ってたりするの？」

リンが聞いてきた。

「バイクは乗ってないけど、この前アフリカのサバンナでバギー乗り回してる写真なら送ってきたよ」

二人の目が点になる。まあ、やっぱそういう反応するよね。

「……………なんでそんなところにいるの？」

綾乃のしごくもつともな疑問。

「……………さあ」

ほんとなんでなんだろう。

もう16年も生きてるのに、未だにどんな仕事してるのかすらよくわかってない。

正直ボクはあの人が宇宙から写真を送ってきたもなにも驚かない自信がある。

「双葉もいろいろ変わってるけどさ、ぶっちゃけ双葉のお母さんが一番謎だよね」

「めっちゃわかる」

ボクもわかる。

コンクリート作りの岸壁を3人で走っていく。

目の前に広がる砂利とコンクリで作られた道は風で飛んできた砂でところどころ埋もれていて、あんまり道つぼくない。

劣化して凸凹になった道をゴトゴトと走っていく。フロントのサスペンションがカタカタと音を立て忙しなく動く。

『めっちゃ道ガタガタしてうおっ!』

後ろを走るリンが悲鳴をあげた。たしかに、スクーターでこの凸凹道はきついかもしれない。

『大丈夫? リンちゃん』

「もうちよつとスピード落とす?」

『なんで二人ともそんな平気そうわっ?!』

悲鳴をあげるリンを引っ張りつつ走っていくと、小さな島が見えてきた。「ついたつと」

砂利の駐車場にバイクを停めてヘルメットを脱いで改めて島を眺める。

沖ノ島。館山市の端にポツンと浮かぶ小さな無人島。リンが行きたいと言ってた場所だ。

「ここが沖ノ島か。思ってたよりちっこいな」

「ふうーん、陸続きになってるんだ。なんかおもしろいね」

「陸繋島って言うんだって。波が静かなところに砂が集まるとできるんだってさ。なんか看板あるし行けるみたいだよ。行ってみる？」

「さんせー」

「わたしもー」

3人で200メートルほどある砂浜の橋を渡っていく。水を含んでいるのか、それとも砂の種類のせいなのか、思っていたより歩きやすい。

「めっちゃ生い茂ってやがる」

島を見てリンがひと言。

砂の橋の向こうの島は、なんていうか草なのか木なのかわからない緑でボーボーになっていた。

「なんだろう……手入れサボった盆栽？」

「小学生が放置した夏休みの朝顔」

「廃校寸前の小学校の花壇」

3人でそれぞれ島に対する感想もとい暴言を吐いていく。自分たちで言っておいてなんだけどひどい言い草だなあ。

そんなこんなで浜を渡り終わり島の中に足を踏み入れる。島に入る志摩リン……

「しまりん島を——」

「10点」

「まだなにも言っていないのにー」

「安直すぎ。出直してくるんだな」

「どこに？」

リンをからかおうとして返り討ちにあいつつ、ボクたちは島奥へと進んでいった。

島の中はちゃんと道が作られていて、外から見ただけよりかは整備されているようだった。た。

けど、道の両橋に生い茂る雑草と、背の低い木のせいでまるでジャングルにいるみたいだ。

「()神社あるんだって」

綾乃が立て札を見て言う。どうせだし行ってみようということになって、3人で案内に従って森の中を進んでいく。

木々に覆われた狭い道を抜けると、開けた場所に出た。ちょうど島の端にあるみたい

で、鳥居の向こうには海が広がっている。

「ちっこい……」

リンがぼそり。目線の先にはちっこい社。たしかに、古い住宅街とかにたまにある神社くらいの大きさしかない。

けど、周りの木とか草がものすごい生い茂ってるせいでなんか妙に神々しい。

「であい伝説、だつてよ。リンちゃん、双葉」

鳥居のそばに建てられた立て札に書かれた文章を綾乃が読み上げる。白い蛇と赤いイワシが出会つてどうたらこうたら、らしい。

ありがたいお話なのかもしれないけど、なんかよくわからない。

「お参りしてく？　なんか出会いあるかもよ」

「いいや」

「ボクもいいや。もう二人と出会ってるし」

……

……

……

「出会っちゃったかー」

「出会っちゃったんだな」

微笑ましいとも、苦笑いととれるような二人の……いやこれ普通に半笑いだ。
やばい、めつちやはずい。

「今の忘れて」

「やだ」

ひどいよリン。

そんなこんなで一人のクソザコが心に傷を負いつつも何事もなく沖ノ島を後にする
ボクたちなのであった。

ちなみに綾乃は島を出るまでずっと笑っていた。ちくしょう！ おぼえとけよー！

「おおー！ 絶景！」

空に向かって突き立つ白い灯台。眼下に広がる房総の大地と相模湾。青い空にふわ
ふわと流れる白い雲。

沖ノ島から一キ口。洲崎から望む南房総の絶景は、ボクたちの心を奪うには十分な
代物だった。

潮風で風化してザラザラになった展望台の柵に手をかけながら、相模湾の向こうに広
がる景色を眺める。

「向こうにある島影が伊豆半島で、あっちの島が伊豆大島か」

「こうして見るとほんとにおっきいよね」

「3月になったらあそこに行くのか……」

リンが感慨深げにつぶやく。

「楽しみ？」

「楽しみ」

うなずき、微笑むリン。あそこではどんな旅が待ってるのかな？

「リンちゃん、双葉ー！こっちで写真撮ろー」

「はーい」

二人で綾乃のもとに駆け寄っていく。太陽が西に傾きはじめる。昼ももうじき終わろうとしていた。

潮風と太陽、大海原と花々。そしてどこまでも続く道。

海風の冷たさと、太陽の暖かさを同時に感じながら広大な道路を走っていく。

ボクたちは今、県道257号線を伝って房総半島の最南端を進んでいた。

南房総の沿岸線をなぞるように敷かれた257号線は、別名房総フラワースラインとも呼ばれている。

フラワースラインの名の通り、道に花が植えられ、季節を問わず訪れた人たちの目を和ませている。

視界に飛び込んでくる景色には木も建物もなく、目に映るのは道路と海と草と花々だけ。

写真だけ見れば、ここが外国だと言われてもきつと信じてしまうだろう。

『すげえ……』

『きれいな……』

「気持ちいいねー！」

絶景とも言うべき道を走りながら、ほとぼしる感情を叫んでいく。来てよかった。心からそう思う。

『なでしこのやつにも見せたかったな』

『絶対喜ぶだろうな』

目をキラキラさせてはしゃぐ姿が容易に想像できる。

キャンペーンするときはいつも山梨とか静岡だし、たまにはこういう景色のところでキャ

ンブするのも楽しいだろうな。

けど、移動手段がないんだよなあ。桜さんに頼むにしても限度があるし。でも、正直あの人ならなでしこが頼んだら連れて行きそうな気がする。

そうだ。いいこと思いついた。

「ならば、綾乃が連れてけばいいんだよ」

『え？ どうやって』

免許を取ってから1年経てば、二人乗りをしてもOKになる。綾乃のエイプはパワーもあるし、なでしこを乗せても問題なく走れるだろう。

「バイク、乗ってるじゃん」

『あ、そっか』

遠くに離れてしまつて寂しいのなら、会いに行けばいい。一緒に行けないのなら、連れていけばいい。

「なんだってできるよ。だって、バイクだもん」

どこにだつて行けるし、なんだって乗せられる。

夢も荷物も友だちも、乗せようと思えばなんだつて乗せられる。それがバイクという乗り物だ。

『うん、そうする。あーでも、ちょっと怖いし、なでしこ乗せる前に練習付き合つてよ』

「ボクでよかつたらいくらでも」

『約束、忘れんなよー』

「忘れないって、絶対」

免許を取って一年つてなると、来年の秋ごろか。楽しみがまた増えたな。

『リンちゃんもさ、わたしがなでしこ乗せられるようになったら4人でどっか行こうよ』

『え、わたしも?』

スピーカー越しに聞こえるきよとんとした声。なにも驚くことなんてないのに。

『なーに言ってるの。リンちゃんがいなかったら意味ないじゃん。ね、双葉』

「そうそう」

なでしことボクが騒ぎ、綾乃が茶化し、リンがつっこむ。簡単に想像がつく光景。4人ならきつとどこに行つたつて楽しいに違いない。

『……そっか』

ミラーのすみにチラリと映るリンの顔は、ヘルメットに隠れてよく見えないけど、声でなんとなく想像がついた。

『……ちよつと前走つていい?』

ミラーに映っていたリンのビーノが見えなつて横からエンジン音がした。

首を向けると、最後尾にいたはずのリンがいつのまにかボクを追い越していった。

ビーノって意外と速いんだなあ。ボクは加速していくビーノのエンジンを聴きながら、そんな場違いなことを考えた。

いきなりどうしたんだろう。もしかしてリン照れてるの？

「つて、リンどこ行くのー!」

『ちよつと海見てくる』

「まってよー」

『お、競争だー』

4速から3速。スロットルを回し急加速。

2ストロークのエンジンが唸り、メーターの針がぶるぶると震え、マフラーが白煙の軌跡を描いて走っていく。

昼下がりの南房総。そんなボクたちを太陽が暖かく見守っていた。

それから257号を抜けたボクたちは、410号、128号と国道を渡り南房総を後にした。

鴨川、勝浦……太平洋の水平線を眺めながら、外房総を進んでいく。房総半島はとも広大でバイクで、それも原付で渡るにはそれなりに疲れる距離だ。

バイクによる長時間のツーリングは自分との戦いだ。

絶え間なく身体を圧迫し続ける風圧に耐えつつ、どんどん過ぎ去っていく景色の中から障害物や歩行者、信号などを見分け、適切にバイクを操縦しなければならぬ。

冷え切った身体。風によって乾いていく喉。振動によって痺れていく腕。こつていく肩、固まった関節。

出発してからすでに10時間以上が経過している。太陽は沈みかけ、冷たく暗い夜が訪れるのも時間の問題。

ちよくちよく休憩は取っているものの疲れはどんどん溜まっていく。なにが言いたいかというと、ボクたちは疲れていた。

『ふたばあ、あとどんくらい?』

「九十九里入ったからあと60キロくらい」

『リンちゃん、あとちよつとだよ……』

『そ、そうだな……』

普段のリンからは想像できないくらい疲れ切った声。

走行距離が200キロを超えるまではまだ二人とも余裕があった。けど、250キロを超えたあたりから口数が少なくなり、今ではこのありさまだ。

ちよつと休憩したほうがいいかな。バイクから降りて、椅子に腰掛けて暖かいものを

飲んでちよつと休めばまた少しは疲れも取れるに違いない。

「二人とも、ちよつと海見に行こう?」

だからボクはそう言った。

「白里海岸、九十九里有料道路……」

道路の標識にしたがつてハンドルを右に切る。バイパスの下に作られた小さなトンネルをくぐり抜けると、砂塗れの駐車場に出た。

積もった砂にタイヤを取られないように気をつけながら適当なところにビーチちゃんを停めてエンジンを切る。

風の音に混じって聞こえていたやかましい音がなくなつて辺りが少しだけ暗くなつた。たぶん、ヘッドライトが消えたからだろう。

歩く。歩く。3人で歩く。

ブーツの靴底に感じるアスファルトの感触が、砂の掬えどころのない感触に変わった時、ボクたちは歩みをその止めた。

砂と海。

頭の中によぎったのは、その二文字だった。それしか思い浮かばなかった。

ただ、砂と海がどこまでも続いていった。

他に言いようがなかった。だって、ボクたちの目に映る世界は、その二つしか存在しなかったからだ。

「……すー」

誰かがつぶやいた。たぶん、リンだと思う。

西の空は燃えるように赤く、東の空は凍えるように暗く、流れる雲は鮮やかなサーモンピンクに染まり、ただボクたちの頭上を流れていく。

押し寄せた波が砂浜を濡らし、鏡のように空を映し出す。

誰もいない。ボクたちしかいない。圧倒的な静けさ。まるでべつの世界に来てしまったかのような、そんな気がした。

初めて月に降り立った宇宙飛行士も、きっとボクと同じようなことを考えたに違いない。

「綺麗……」

誰かが言った。たぶん、綾乃だと思う。

風と波。静かな世界に、二つの音がこだまする。ボクたちは、なにも言わずただその

音に耳を傾けた。

「リンちゃん、髪ボサボサ……」

「……そっちもな」

ふと視線を感じて首を向ける。リンと綾乃がボクをじつと見ていた。

「爆発してやがる……」

「しやがってるね」

おもむろに自分の髪に手を伸ばす。案の定すごいことになっていた。

「あつ、ほんとだ」

……

……

……

「「ふふふ……」」

3人で笑う。

おかしいってわけでもないし、滑稽ってわけでもない。バイクに乗ってればだいたいみんなこんな髪になる。

でも、それが楽しかった。砂と海の世界に、ボクたちの笑い声が吸い込まれていく。

「あーあ、おもしろかった。なんか笑ったらお腹空いてきちゃったね」

「ここでご飯にする？ 双葉は？」

ボクは返事をしようとした。けど、ボクが口を開く前にぐうつという変な音がした。お腹の音だった。

二人はまた笑った。返事は必要なかった。

21—2

網の上で魚の焼けるいい音がする。風が吹くと、サバ特有のちよつと臭みのある濃厚な香りが漂ってきた。

醤油をちよろつと垂らす。網の上に溢れて、焦げた脂と醤油のいい匂いがする。

「うわあ、めっちゃおいしそう……」

覗き込んできた綾乃がサバの香りに目を細めた。

「そつちはどう？」

「あとちよつとで全員分焼き上がるよー」

綾乃の手には3つの割り箸に突き刺さったおにぎりが握られていた。表面には醤油ダレが塗られていて、ところどころ焦げて黒くなっている。

「コンビニのおにぎりバーナーで焼いて焼きおにぎりにするなんて、よく思いついたね」

「ツーリングに行った先でよくやってるんだ。ごめんねーこんな適当で」

「キャンプのご飯なんてそんなもんだよ。わたしだってちよつと前までカレー麺ばっかだったし」

「リンはまだいいよ。ボクなんて菓子パンだけだよ」

「……それ、平気なの？」

リンがちよつと心配したような目で見てくる。

ボクが旅先でちゃんとご飯食べるようになったのってリンと仲良くなる前だったし、知らないのか。

「……カロリーは取れるよ」

「カロリーしか取れないの間違いだろ」

「そうともゆー」

ふざけて返事する。ランタンに照らされたリンの表情が険しくなった。ほんとりんって心配性っていうか、おかん気質だなあ。

「言つとくけど、もうしてないからね」

「それならいいけど……」

「リンちゃん、味噌汁どんな感じ？」

綾乃と一緒に首を上げて、リンが煮込んでいるコツヘルを覗き込む。

味噌汁だ。アジのいい匂い。よく見ると、汁の中にアジのお頭が見え隠れしている。

南房総の道の駅で買った干物だろうか。

「そろそろだな。刻みネギを入れて……できた」

それぞれできあがったものをテーブルの上に並べていく。味噌汁、ご飯、焼き魚。旅先とは思えないくらい豪華なメニューだ。

うん、これ絶対おいしいやつだ。

「あーもうお腹空いたー！ 早く食べよー！」

「だな」

「うんうん」

「「いただきます」」

夕闇に染まる九十九里をバックに、ささやかな晩ごはん。

まずはご飯から。焼きおにぎりから割り箸を引っこ抜いてひと口。

焼き立てのおにぎりはサクサクで、噛むたびに醤油の味が染み出してくる。ちよつと焦げた醤油の苦味がアクセントになってすごくおいしい。

「……おいしい！」

「……うん！」

「ふひひ、だろー」

綾乃が自慢気に笑うのもよくわかる。これで焼きおにぎり。ボクも今度やってみよ

う。

よし、次はサバだ。箸を手に取って紙の皿に乗せた身を口に入れる。うん！ こっちもおいしい。

脂の乗った塩気の効いたサバ。たまらず焼きおにぎりを頬張る。やばい、これめっちゃうまい。いくらでも食べられる。

「サバ2枚しかないんだからあんま食べすぎるなよ……うん、うまい」

ひと口、またひと口と食べていると、リンから苦情がきた。そうだった。

大きいのを買ったつもりだったけど、3人で突いていくとあつという間になくなっちゃいそうだ。

「もっほかえはよはったねえ」

なに言ってるかわからない綾乃をスルーして味噌汁に行く。コッヘルに注いだリン特製の味噌汁をすすする。

「……うまつ」

口の中いっぱい広がるネギの香りとアジの出汁。一回焼いてあるからだろうか、ほのかに香ばしい。

「はあ……」

ほっと息をはく。ほんと、味噌汁ってどうしてこんなにほっとするんだろうね。

「うまい……なでしこに感謝だな」

ボクと同じようにほっと息をはきながらリンがぼそり。

「なでしこがどうしたの？」

「行く前になでしこに干物使ったいいキャンプご飯ないかって聞いたたら、焼いた干物で味噌汁作るとおいしいよって教えてくれたんだ」

このレシピ、なでしこが教えたのか。どうりでおいしいわけだ。

「骨も頭も入れてるから、出汁がすごい……」

「味噌汁に入れてもうまいなんて……ふっ、アジなやつだぜ」

……

……

……

綾乃もボクも、そしてリンもなにも言わなかった。というより、なにも言えなかった。唐突にブツ込まれたオヤジギャグ。しかも、めちやくちやつまらない。

こういうとき、なんて言えばいいんだろうか。とりあえず味噌汁をひと口。

「おいしいね……」

「……うん」

なんとも言えない微妙な空気。気のせいだろうか、最近リンがだんだんポンコツに

なつてきているような……

まあ、ここは同じポンコツのよしみとして流しといてあげよう。これもまた優し——
「ぶふつ、あははは！ アジだから味つて……リンちゃん！」

「わ、忘れろお！」

だいなしだよ。

青とも橙とも紫とも黒とも表現できない、まさに夕闇としかいいようのない空をぼんやりと眺める。

風の音、波の音、砂の音、通り過ぎていく車の音。そしてボクたちの息遣い。

大きな音や小さな音、いろんな音が寄り集まって一つの音の塊となり耳を騒がす。

静かではない。だけど、なぜだかボクはとても静かに感じた。それはたぶん、ボクたち以外に人がいないからなんだと思う。

「なんかいいね。こういうの……」

綾乃がつぶやいた。ボクはうなずいた。

世界が滅びてボクたちだけが生き残ったとしたら、こんな景色を見ることになるんだろか。

砂と海の世界はすごく寂しいけど、不思議とどこか心地よい。かなうことなら永遠にここにいたい、そんな風にすら思ってしまう。

なにかするわけでもなく、昼が夜になっていくさまを見続ける。

「おいしかったね。ご飯」

「味噌汁おいしかったなー 帰ったらあたしも作ってみよ。リンちゃん、あとで作り方教えてよ」

「わかった。て言ってもめっちゃ簡単だけどね」

会話が終わり、再び静けさが訪れる。

太平洋の空の果ては驚くほど暗く黒いけど、不思議と怖くはなく見ているとどこことなぐ安心する。

「この海に向こうってなにがあるのかな？」

なんとなく思ったことを口にしてみる。

「うーん、アメリカとか？」

「その前にグアムとかハワイじゃない？」

どうでもいいけど、グアムとハワイってどっちが日本に近いんだろう。

「向こうでも、ボクたちみたいに海を眺めてたりするのかな」

「たしかアメリカ西海岸の時差は17時間。今は5時過ぎだから向こうは朝の10時くらいか。」

「ここからじゃ見えないけど、海に向こうにも人がいて、ボクたちとは違う景色を見て、ボクたちとは違う空気を吸って、ボクたちとは違う暮らしをしている。」

「そこではきつと、こことはなにもかもが違っていて、それを想像すると胸の奥底から、表現できないなにかがこみ上げてくるのがわかった。」

「行ってみたい？」

隣に座ったリンが、まるで心を読んだみたいに聞いてきた。

「え、なんでわかったの？」

知らない間に声に出てたのかな。ボクが聞くと、リンはこつちを見て微笑んだ。

「そういう目、してるよ」

「……お見通しだね、リンは」

決して長くはないけど、深い付き合いだ。

ボクだってリンの顔を見れば考えていることはだいたいわかる。リンだってボクの

顔を見ればわかるんだらうな。

「顔に出やすいもんねー双葉って」

「そんなに出やすいかなー?」

ボツチ時代は無口無表情がデフォだった気がするんだけど。変わったんだらうか。

「ほら、今もめっちゃ眉毛下がってる」

海の向こうに思いをさせ、なんてことない話をする。そんな楽しい時間。

けど、楽しい時にかぎって時間はどんどん過ぎていく。来た時はまだオレンジだった東の空もいつも間にか黒く染まっていて、空の彼方には星々がぼんやりと輝きはじめていた。

「来てよかったな……」

誰かがつぶやいた。たぶん、リンだと思う。

でも確かめる必要もない。なぜならここにいる全員が同じことを思っているに決まっているからだ。

「写真、撮ろうよ」

そんな思い出を少しでも形に残したくて、ボクは二人にそう言った。

「そうだな」

「そーいや九十九里来てから一回も集合写真撮ってなかったっけ。撮ろ撮ろ」

ちょうどいいところに骨ぐみだけになったライフセーバー用の監視塔があったので、スマホを立てかけタイマーセット。

カウントダウンにそってチカチカと点滅するスマホのライト。早く行かないと。

「双葉、早く早く！」

「わかつてるよー」

ダッシュで二人に駆け寄って、リンを中心に3人で肩を組む。

「なんでわたしが真ん中なんだよ」

「リンちゃんが真ん中ならちようど背の順になるし」

「絵的にアヤちゃんのほうが……あ、そろそろだよ」

点滅の間隔がどんどん短くなっていく。そろそろだな。

「一たす一は？」

「「にー!!」」

フラッシュが焚かれる。どんな写真になったかな？ スマホを回収して撮った写真を確認する。

「暗過ぎて海なんも見えねー」

リンの言うとおりちゃんと写ってたのはボクたちと砂だけ。なんとなく想像はついてたけど、案の定ちゃんと撮れなかった。

「スマホだし、しょうがないよ」

「バイト代貯まったらカメラ買おうかな……」

最近はやい一眼レフとかもあるし、ありかもしれない。帰ったら調べてみよう。

それにしても……写真に写った自分たちの姿を見る。

「めっちゃ目瞑ってる……」

暗いところにいきなりフラッシュ焚いたからびっくりしちやっただらうか。

「あ、よく見たら双葉目半開きになってる」

「あ、ほんとだ。気持ち悪」

「リンちゃん、めっちゃいい笑顔だけどすんごい目瞑ってるね」

「綾乃とか、両目瞑って肩組みしてダブルピースとか完全に変な人じゃん」

「……」

耐えられずに吹き出す。ボクたちの笑い声が人気のない砂浜にこだます。まあこれはこれでいい写真かもしれない。

ボクは笑いながらそんなことを思った。

「そろそろ行く？」

ひとしきり笑ったあと涙目になった綾乃が思い出したかのように言った。

時計を見る。もうすぐ6時だ。ご飯を食べてすっかりまったりムードになってたけ

ど、ボクたちはまだ旅の途中なのだ。

「あとどんくらいだっけ？」

「こつからだどだいたい50キロかな」

「なんだ、そんだけか」

なんてことないようにつぶやくリン。

ここにくるまでに300キロは走っている。それに比べれば50キロなんて散歩みたいなものだ。ようやくリンもわかってきてくれたみたいで少し嬉しい。

「じゃ、ばばっち行っちゃおっか」

「おー！」

駐車場に向けて歩き出す。旅ももうじき終盤だ。残り50キロ。頑張るとしますか。

「……………50キロはそんだけじゃねえだろ」

「ふふふ……………」

靄のかかった夜の道をヘッドライトの明かりを頼りに走っていく。息を吸うと、靄の

中にかすかな潮の匂いがする。

たぶんこの靄は舞い上がった海の波が作っているんだろう。前に夜の海辺で寝泊まりしたときも同じようなものを見た。

街灯の明かりが靄に乱反射して滲むように光輝く。見ている分には綺麗だけど、視界が悪くなるから十分に気をつけないといけない。

ちよつと前まで街だった景色は今ではすっかり港に様変わりしていて、電灯の明かりに照らされた何隻ものヨットが黒いシルエットとなつてボクの視界の横を過ぎ去つていった。

ヨットハーバーを通り抜けると、電灯の明かりに照らされて砂浜が見えた。よし、写真で見た通り。ここに間違いない。

「ついたよー」

後ろの二人にそう言つて、ビーチちゃんを隣接した駐車場に停める。

シートから降りてヘルメットを脱ぎ、潮の香りを思い切り吸い込みながら身体をほぐしていく。

銚子マリーナ海水浴場。山梨からはるばる370キロ。ボクたちはついに目的の場所にとどり着いた。

時計をちらりと見ると9時を指していた。出発したのは朝の5時だから、計16時間

走ったことになる。

「うーん、楽しかったー！」

一日でこんなに走ったのは久しぶりだ。やっぱりバイクに乗るからにはこれくらい走らないとね。

久しぶりだったからけっこう疲れたけど、すごく充実した一日だった。

「おつかれー二人とも」

しーん……

返事がない。あれ、どうしたんだろう。恐る恐る二人を見る。うん、二人ともちゃんという。

「リン、綾乃？」

あ、倒れた。

ボタンキュー、言葉にすればたぶんそんな感じでリンと綾乃が駐車場にくたばった。二人ともピクリとも動かない。まるでしかばねだ。

って、実況してる場合じゃないよ！

「だ、大丈夫?!」

慌てて二人に駆け寄る。よかった息はしてるみたいだ。

「な、なげえよ……」

と、リン。

「さ、さすがにこれはわたしでも……がくつ」

力尽きる綾乃。でもよく見ると右手がサムズアップの形になっていた。なんだ、余裕あるじゃん。

相当疲れてるのか、二人とも駐車場に突っ伏したまま指一本動かそうとしない。

うーん、これどう見てもテントジャンケンしようとか言える雰囲気じゃないよね。

「テント、3人一緒によかつたら張つておこうか？」

答えはわかりきっているけど一応聞いてみる。といつてもまともに動けるのがボクだけなので、どうあがいてもボクが張るんだけどね。

「お願いします」

即答だった。そりやそうだ。

テントの天井でランタンの明かりがゆらゆらと揺れる。テントの向こうでは波が砂に打ち付けられる音が絶えず鳴り響いていた。

狭いテントの中を這いながら前室で燃えているバーナーのコックを締め、ヒーターの勢いを弱めていく。

室温計とかはないけど、たぶん18度くらいはあると思う。すぐくあつたかい。なんならインナーだけになつてもいいくらいだ。やっぱこれ買って正解だつたなあ。

「……ぬくい」

「くらくじやあ……」

と、床に転がっているかつてリンと綾乃だつた寝袋の芋虫どもがつぶやいた。

駐車場の目の前にある浜辺にテントを張つてからずっとこんな調子だ。

「大丈夫？ 二人とも」

「身体が動かねえ」

「リンちゃんと同じく」

ほぼ丸一日走りっぱなしだつたし、こうなるのもしかたない。ボクも乗りはじめたころはこんな感じで突つ伏してたっけなあ。

ちよつと悪いことしちやつたかも。

「ごめんね。無理させちやつて」

初つ端から370キロ近くはまずかつたかもしれない。せめて300キロにするべきだつたかも。

「いいよ。行きたいって言ったのわたしだし。アヤちゃんは大丈夫？」

返事がない。

「アヤちゃん？」

「……………えっ!? あ、うん、おいしかったねー」

「なんの話だよ」

「どうやら寝てたみたいだ。」

よく考えたら綾乃は浜松から来てるわけで、600キロ近く走ってるのだ。なんだかんだいって一番疲れてるんだろうな。

「めっちゃ疲れた……………もう動けないぞらあ」

「あれ？ アヤちゃん行く前余裕とか言ってなかったっけ？」

「ちよつと挑発するようにリンが言う。出発する前と比べると、リンもずいぶんと遠慮がなくなった。」

「ごめんなさい調子乗ってました。300キロくらいなら走ったことあるから全然余裕かと思っただけ全然そんなことなかったよ……………」

「しょうがないよ。綾乃だけ浜松から来てるんだし」

「なんか、一ヶ月分くらいバイク乗った気分。もうしばらく乗らなくてもいいかも」

「めっちゃわかる」

旅の興奮の余韻が残っているのか、ワイワイってほどじゃないけど話が盛り上がる。

「あ、そうだリンちゃん。地図見てみなよ」

寝袋にくるまっていた綾乃が、身体を横に向けてリンに話しかける。

「地図？」

「いいからいいから。騙されたと思ってさ」

たぶん、あれを見せたいんだろう。ボクは綾乃と琵琶湖に行ったときのことを思い浮かべた。

「……まあ、いいけど」

眠そうな目を擦りながらリンがのそのそと起き上がりゴソゴソとスマホを探し出す。

「あれ……スマホどこお？」

そう言いながら自分の胸元をずっと探し続けるリン。普通に話してたから気が付かなかったけど、リンもかなり寝ぼけてるみたいだ。

「さつき自分で荷物の中入れてたでしょ」

「んー？ そうだったっけ？」

「ボクのスマホ使う？」

「うん……ありがと双葉」

ボクからスマホを受取ったリンがゆらゆら揺れながら画面をいじる。もう眠くて眠くてしかたないんだろう。

「……こんな遠くまで来てたのか」

淡々としたセリフ。けど、そのひと言に込められた感情はひと言では言い表せない。
「ほんとに日本の端っこいるんだな……」

リンの瞳が揺れる。眠そうな目がどどん見開いていく。

「家、遠っ……」

「ふふっ、驚いた？ わたしも初めて琵琶湖行つたとき同じこと思つたよ。ほんとにこんなところまで来ちやつたんだなって」

「……うん。なんか全然現実感ないけど……」

ボクにはリンの気持ちがよくわかった。自分が遠くに来たのはわかっている。けど、現実感がまるでない。でも、地図を見れば自分はたしかに遠くにいる。

「ほんとに来たのか……」

そして理解する。自分が遠くに来たことに。

「夢みたいだな……」

「ちがうよ。リンが自分の力でここまで来たんだよ」

山を越え、海を越え、誰の力も借りずにこんなところまで走ってきた。

リンはボクについてきただけかもしれないけど、ここまで来たのは間違いなくリン自身のだ。

「これでリンちゃんもわたしたちと同じヘンタイの仲間だね」

「その言い方はないでしょー 綾乃だつて距離ガバのくせに」

「誰のせいだと思つてるの。誰の」

「さあ？ どっかのちっこくてメガネかけてて一人称ボクのクソザコのせいじゃない？」

「あはは、こんにやろーめ」

笑いあう。ランタンの明かりで浮かび上がった黒いシルエツトがゆらゆらと揺れる。

誰もいない銚子の海。風の音が鳴り響く砂浜で、ボクたちの笑い声が鳴り響く。

「……ふっ、たしかにヘンタイ、だな」

リンはそんなボクたちを見て、それはそれは満足そうにはにかんだ。

砂浜と駐車場を隔てる階段に腰かける。

「さむっ」

身体を撫で付ける潮風に思わず悲鳴を漏らす。暗闇の奥にうつすらと見える砂浜には黒い波が絶えず押し寄せて、また海に戻っていく。

波の音に耳を澄ませながら空を見上げると、靄の向こうにうつすらと星々がまたたいていた。

「けっこう見えるんだなあ」

クリキャンの時に見た星とは比べ物にならないくらい弱い光だけど、それでもボクにとっては十分だった。

「楽しかったなあ……」

星を眺めながら今日一日を振り返る。

高速道路みたいなの134号。フェリーから眺めた浦賀水道。どこまでも続くフラワールード。まるでべつの世界に来たみたいなの九十九里。あれは本当にすごかった。

美しいなんて言葉は陳腐だけど、どの場所もボクの目には輝いて見えた。キャンプも大好きだけど、ボクが一番好きなのはやっぱり旅なんだと改めて思った。

「あ、そうだ。鳥羽先生に連絡入れないと」

すっかり忘れてた。心配してないといんだけど。スマホを出して先生に電話。1コールもしないうちに電話が繋がる。

「もしもし、山中です」

『や、山中さん？ほんとに山中さん？』

「はい、野クルの山中双葉です」

ボクが改めて名前を言うと、スピーカーの向こうからひどく安心したようなため息が聞こえた。

『よかった。志摩さんから全然連絡がないから心配してたんですよ!』

「ごめんなさい。すっかり忘れてて」

『もう! ほんとに心配したんですからね! それで、銚子には無事に着いたんですか?』

「はい、テント張ったんでもう寝るだけです。明日になったら帰ります」

『そうですか……帰りもかなり遠いですし、東京は交通量もかなり多いので、ほんとにほんとに気をつけてくださいね』

顔を見なくても、先生が本気でボクのことを心配してくれているのがよくわかった。ほんとにボクたちにはもったいないくらいにの顧問だよ。

「はい。ありがとうございます」

「こないだいい人を悲しませるわけにはいかない。無茶も無謀も絶対にしないようにしないと。」

『それにしてもバイクで銚子ってすごいですね。妹にも話したらすごく驚いてました。ツーリングが趣味なんですか?』

「はい。小さいころ女の子がバイクで旅する小説にハマってて、それから知らない場所に行くのにすごく憧れるようになって」

『それってもしかして……』

先生が本のタイトルを口に出す。まさにボクの好きな小説だった。

「え、先生も知ってるんですか？」

『はい。わたしも好きなんですあれ。今でも全巻持ってますよ』

「へえ、そうなんだ……ちなみにどの話が一番好きですか？」

『どれも好きなんですけど、強いて言うなら人の心がわかる国の話が——』

思いもよらないところで同じ作品のファンに出会って外だということも忘れて盛り上がる。

ただひと言連絡入れるだけのつもりだったのに、気がつけば5分くらい話し込んでしまった。

「ごめんなさい話し込んで。じゃあそろそろ切りますね」

『すいません。わたしのほうこそ。楽しくてつい話し込んでいました。明日、本当に気をつけてくださいね。なにかあったらすぐ連絡してください。ではおやすみなさい』

「先生も、おやすみなさい」

『あ、山中さん！ 一つだけ気になったんですけどもしかして山中さんが自分のこと僕って——』

「おやすみなさい。お土産買ってくるんで楽しみにしてくださいね」

『あ、ちよっ』

電話を切る。危ない危ない。黒歴史をほじくり返されるところだった。もうリンのときのようにはいかないぞー

「さむっ、戻ろ」

立ち上がってテントに向かう。ランタンはついてるけど人影は見えない。もう寝ちやつてるかな。起こさないようにしないと。

大きな音を立てないようにそっとテントの中に入り込む。予想通りリンと綾乃はもう眠っていた。

「うう、さむさむ」

リンと綾乃の間に敷いてある寝袋に潜り込む。カイロ入れてたおかげでぬくぬくだ。

「えへへ、あったかいなあ」

「誰と話してたの？」

「うひゃ——」

口から飛び出そうになった叫び声は、あったかい手で遮られた。

「しー」

リンがボクの口に手を当てながらジエスチャーする。

反対側に首を向けてみると、綾乃が寝息を立てて眠っていた。胸の位置で寝袋がわずかに上下に動く。かなり深く眠ってるみたいだ。

「ありがとう」

起こさないように小声でお礼を言う。

「疲れてるみたいだし、寝かせてあげよう？」

ささやくようにリンが言う。リンの言うとおりで。一番疲れてるだろうし起こしたらかわいそうだ。

「ていうかりん、起きてたんだ」

「外で話し声がして目が覚めた。誰と電話してたの？」

「鳥羽先生に到着したら連絡するように言われてたから」

「あ、忘れてた。ごめん双葉」

「ううん。ボクも忘れてたし。それより聞いてよりん。先生もあの小説好きなんだつて」

綾乃がうるさくないように、お互いに見つめ合いながらひそひそと話す。

「あの小説って……ああ、あれか。へえ、だからあんなずっと話してたんだ。あんまり長話してたから風邪ひくぞって言いに行こうと思ってたわ」

「あはは、ごめん。つい話し込んでさ」

「意外だな。鳥羽先生そういうの好きなんだ」

「まさか先生があんなに知ってるなんて思わなかったよ。また話したいなあ」

「ふうーん……」

ランタンの光に照らされたリンの顔がちよつとだけ険しくなった。

「ん？ どうしたの？」

「なんでもない……」

セリフと口調が合っていない。

そういえば前にも似たようなことがあった気がする。ずっとボツチだったせいであんなにうしろのよくわかんないんだよなあ。今度あおいに相談してみようかな。

「リン？」

「……双葉」

「なに？」

「帰ったらさ、その本わたしにも貸してよ」

「全然いいけど。リン読んだことあるんじゃないやなかったっけ？」

たしか中学のときハマったとか言ってた気がする。

「べつに……また読みたくなっただけ」

ただ読みたいだけにしてはなんか様子が違う気がするんだけど……まあいいか。

「そっか。どうせ帰りにボクの家寄るし、そのとき貸すよ」

「……ありがとう」

それだけ言うるとリンは寝返りを打ってボクに背を向けた。やっぱり様子が変だ。

「双葉って、けっこう鈍いよな」

「え？ え？ どういうこと？」

唐突に言われたひと言に頭がはてなマークでいっぱいになる。ボクが鈍い？ むしろけっこう敏感なほうだと思っただけ。

「……べつに、なんとなく思っただけ」

「あ、うん。そっか」

会話はそこで途切れた。静まり返ったテント。聞こえるのは波のさざめきと綾乃の寝息だけ。

ちよつと気まずい空気。ボク、なにか気に触るようなこと言っちゃったのかな。

「今日はさ、その……ありがと。連れてってくれて」

不意にリンが絞りだすようにつぶやいた。

相変わらず背を向けているせいで顔はわからないけど、声を聞けば本気で言ってるのがわかった。

「めっちゃ疲れたけど、めっちゃ楽しかった。見たことない景色いっぱい見れたし。原付でこんな遠くまで行けるなんて思ってもなかった。それに アヤちゃんとも、もっと仲良くなれたし」

背を向けたリンの声はすごく楽しくそうで、それを聞いてるとボクも嬉しくなった。

「ツーリンググって、楽しいね」

「そっか。えへへ、よかった。また行こうね」

「うん……けど、やっぱりわたしが一番好きなのはキャンプだな。今日一緒に走って思
い知ったわ。双葉くんなことよく毎週できるな」

「ボクもリンと同じこと思った。キャンプも好きだけど、やっぱりボクが一番好きなのは旅なんだって」

「似たものどうしって……やつか……」

「ふひひ、そっくりだね。ボクたち」

お互い一人好きの変わり者。

リンはキャンプが好きで好きでしかたなくて、ボクは旅が好きで好きでしかたない。
結局のところボクたちの違いはそれくらいだ。

「……だな」

リンはひと言つぶやくと、再びボクに顔を向けてきた。とろんとしたすごく眠そうな
目がボクを見る。

「ふたばあ……」

舌足らずな声がボクを呼ぶ。

「なあに？」

大きなあくび。リンの瞼がどんどん閉じていく。

「こんどは……いつしよに、きやんぷ………いこう……な」

そして閉じられる瞼。

ほどなくして、リンから小さな寝息が聞こえてきた。寝ちやつたか。

「……うん。行こうね」

返事はない。でも、わざわざ言葉にしなくたってリンはわかっているだろう。

二人が寝静まり、聞こえてくるのは寝息と波の音だけになった。静かな時間。一人だけの時間。

「……そろそろ寝よ」

二人ほどじゃないけど、ボクだつてたくたたなのだ。実をいうともう眠くて眠くてしかたない。きっと今夜は朝までぐっすりだろう。

灯りを消して横になる。

二人用のテントに無理やり3人が入ってるせいで、寝袋ごしにリンと綾乃の体温が伝わってくる。でも全然不快じゃない。

心地よい疲労に身を任せ、目を閉じる。意識が沈んでいく。

長いようで短い旅も、もうじき終わりを迎えようとしていた。

「おおー」

犬吠埼。水平線の遙かかなたで燃え盛る朝日に歓声をあげる。

一晩ぐっすり眠ったボクたちは朝一で出発し、最後のしめに3人で日の出を眺めていた。

大海原に太陽がキラキラと反射し、白い灯台がオレンジに染まる。

「さーて、日の出も見たしあとは東京見て帰るだけだー!」

あれだけ昨日疲れた様子を見せてたのに、すごく元気そうな綾乃。そんなに東京行きたかったんだ。今度一緒に行こうかな。

「なんかめちやくちや長かったはずなのに、こうしてみるとあつという間だったな」
リンが言う。あ、ついにリンもボクたちの仲間に入ってくれたのかな？

「リンもやつぱさそう思う?」

「と、思ったけど気のせいだったわ」

「ほんとは気のせいじゃないくせにー」

綾乃が茶化すように言うと、リンはぶいっと顔を背けた。相変わらず素直じゃないなあ。

「あ、せっかく東京寄るんならついでに奥多摩湖——」

「絶対やだ！」

「えー」

「えーじゃねえよ。殺す気か」

「さ、さすがにそれはわたしもちよつと……あ、あはは」

ダメか。今の二人ならもしかしてついてきてくれるかなって思ったのに。まあいや。

3人で東の空に昇っていく朝日を眺める。なんてことない朝日なのに、なぜだかすごく綺麗に見える。

「帰ろっか」

冒険は終わった。あとは、家まで無事に帰るだけ。

「だね」

「そうだな」

朝日に背を向けて、3人で一緒に歩き出す。

「今度いつ行く？」

「気がはえーよ」

「今回は双葉たちについてったんだから、次はわたしにつきあえよな」

「じゃあ次は静岡だな」

「あれ？ リンちゃん気がはえーっていつてなかったけ？」

「聞こえなーい」

「あはは」

帰ろう。そして、帰ったら疲れたって言い合いながら旅の思い出を語り合うんだ。そうだ。なでしこにも自慢しよう。千明にも、恵那にも、あおいにもだ。

きつとすごく楽しいだろうな。

「あ、バイクだ」

綾乃がつぶやく。顔を向けると、バイクが一台ボクたちのほうに走ってきた。

あの人も朝日を見にきたのかな。ていうかあのバイクどっかで見たような。あのフォルム。たしかトライアンフの……

そうこうしているうちにバイクがボクたちの前で停まった。ライダーが降りてヘルメットのバイザーを引き上げる。

「え？ おじいちゃん!？」

リンが目を見開いて声を上げた。

その言葉にはっとして改めてライダーの顔を確認する。

「リン……もしかして、リンなのか？」

リンのおじいさん……新城さんが驚いた顔でボクたちを見ていた。

「あ、うん……え？ おじいちゃん、なんでこんなところにいるの？」

「キャンプの帰りに朝日でも拝もうと思ってな」

そういえばリンがいろんなどころキャンプしてるって言ってたっけ。ここにいてもなんも不思議じゃないのか。

「それよりもリン。まさか……ここまで原付で来たのか？」

「そうだよ」

間髪入れずにリンが答えると、新城さんはますます驚いたような表情になった。

「そ、そうか……よくやるな。遠かっただろうに」

「死ぬかと思った」

「軽口が言えるなら大丈夫だろう。それでそっちの二人は、双葉さんに……」

「お久しぶりです」

「どうやらまた孫が世話になったみたいだな。そっちの君はたしか……」

「あ、土岐綾乃です。リンちゃんと双葉の友だちです。正月に浜松で会いましたよね」

「そうだったな。思い出した。自己紹介が遅れてすまない。新城っていうもんだ。聞いて

ての通りリンの祖父をやらせてもらっている。まさか君も浜松から来たのか？」

「はい。すつごく楽しかったです。ね、二人とも」

「そ、そうか……あそこからここまでずいぶんと離れてる気がするんだがな……」

「ちよつと遠かったですけど、走ってみたら意外とすぐでしたよ」

綾乃のひと言にあんぐりと口を開けて驚く新城さん。この人のこんな表情見るの初めかも。

「近ごろの若いもんはずいいな……」

「いや、わたしたち双葉についてきただけだから。おかしいのは双葉だけだからね。誤解しないでねおじいちゃん」

なんかサラツとひどいこと言われた気がするけど黙っておこう。

「双葉さん……」

なんとも言えない表情の新城さんがボクを見る。

「はい？」

「その……なんだ。気持ちはわかるがほどほどにな」

「あ、はい」

自重しろつてことだろうか。うん。気をつけよう。次行くとしたら片道300キロ以内とどめておこう。

「双葉、次は16時間ぶつ続けで走りつばみたいなことにならないようにしろよ。ほんとにマジで死ぬから」

「わかってるよ。せめて半日に収まるようにしとく」

「休憩なしなら400キロ走れるとか言うなよ」

「ソウダネー」

「棒読みやめろ」

「冗談だよ。300キロくらい」

「それなら許す」

「……………これはもう手遅れかもしれないな」

朝日が照りつける犬吠埼に、新城さんのぼやきが吸い込まれていく。

こうしてひとつの旅が終わり、また新しい旅が始まる。

旅は、冒険は、終わらない。次の旅はすぐそこで待っている。今度は伊豆だ。

どんな旅が待ってるんだろうか。考えるだけでわくわくしてくる。

けど、まずはその前に家に帰りたい。もうくたくただ。ご飯を食べて、お風呂に浸かって、暖かいベッドに横になろう。それはそれは気持ちよく眠れるに違いない。

だから帰ろう。ボクたちの街に。

「いや、300キロってどう考えてもおかしいだろ……」

「ふふふ………」

22話 ムーンアイズ エマージェンシータンク 2

2,000円(税込)

22-1

年が明けて2ヶ月が経ち、今年も3月に入ろうとしていた。

道端の残雪もずいぶん小さくなり今や溶けるのを待つばかり。静から動、冬から春へ、刻々と移り変わっていく。

長い冬が終わりを迎えようとしていた。

「つて、言ってもまだまだ寒いよねー」

暦の上では春だけど、実際のところ冬と言っても過言ではない3月。当然のごとく山梨も冬の寒さに包まれていた。

「せやなあ」

すっきり日も暮れた身延町。甲府のほうから家に帰ろうとしている車の赤いテール

ランプを眺めながらあおいと一緒にバイト帰りの道を歩く。

「3月でも雪降ったりするし、まだまだ油断できひんわ」

「そういえば何年か前すごい大雪降ったよね。自転車乗れなくてすごい困ったよ」

なにを血迷ったのか行けると勘違いして、擦り傷だらけになって帰ってきたのは今でも覚えている。

「あつたなーそんなん。なんや懐かしいわあ。今年は降らんとええけどなあ……」

「さすがに今降られるとボクも困るなあ。そういえば自転車で思い出したけど、あかりちゃんの自転車どう？ 調子悪いとか言ってない？」

「ううん。おかげさまでめっちゃ乗りやすうなつたつて喜んでつたでー」

以前偶然あおいの妹の自転車を直したボクだったけど、しよせん応急処置にすぎないので、千葉の帰りに改めて整備しなおしに行ったのだ。

チェーンとスプロケットの清掃にブレーキワイヤーの張り直し。ヘタつていたブレーキシユアの交換。我ながらいい仕事だったと思う。

「なあ、ほんまにパーツ代とか払わんでええの？ なんやいろいろ交換したみたいやけど」

「気にしないでいいよ。家にあつたの持ってきただけだし」

「おおきになー双葉ちゃん。やっぱ双葉ちゃんはほんま優しいなあー そんなええ子は

「こうやー」

手を伸ばしてボクの頭を撫でるあおい。手袋越しだったけどすごく暖かくて思わず目を細める。

「あはは、くすぐったいよー」

とはいえまるで妹みたいに扱われるのは人生の先輩として納得がいかないので断固抗議する。

「もー言つとくけどボクのほうが年上なんだからなー」

「知つとるでー えらいえらい」

まるで聞いてない……まあいいや。あおいがしたいって言うならそのままさせてあげよう。

それも優しさというものだ。だからもつと撫でるのだ。

「そんでな。なんやサイクリングが趣味になったゆうてて今じゃいろんなところ行つとるんよ」

まるで誰かさんみたいやな。とつづくわえるあおい。嬉しそうな、それでいてちよつと寂しそうな瞳に夜の身延が映り込む。

「ちよつと心配？」

ボクが聞くとあおいが白い息をはきながらうなずいた。

「まあ……心配は心配やけど、こーやって大きくなるんやなって思つとる。姉としてはちよつと複雑な気分やけど」

「あはは、そんなもんだよ。ボクも小学生のころよく自転車で海まで行つてたし」

「それえらい遠い気がするやけど……」

「そう？ 甲府と同じくらいだよ？」

「三つ子の魂百まで……言つたもんやなあ……」

「どゆこと？」

「あ、気にせんでええでー」

まあいいか。

そんな風になんてことない話をしながら歩いてみると、新早川橋にさしかかった。

いつもはここでお別れだ。押していたビーちゃんに跨りヘルメットをかぶる。

「氣いつけてなー」

「うん。じゃ、またあし——」

『おーい！』

エンジンに火を入れようとしたところで後ろのほうからボクたちを呼ぶ声があった。

振り返る。千明がぜえぜえ言いながらこつちに走つてきていた。

「お、お前ら……バイト、早上がりだから……一緒にラーメン、食いに行こうつて……ラ

インしたのに、置いてくれたあ、いい度胸じゃ……ねえか」

膝をついて呪詛を口にする千明。え？ なんの話？

「大丈夫？ お茶飲む？」

とりあえず喉が乾いてそうだったので持っていたお茶を差し出すと無言で受け取って飲み始めた。

あ、全部飲まれた。

「ふう、サンキューな。つてちがーう！ お前ら！ よくも勝手に帰りやがったなー！

ラインしたのに！」

ぶんすかつとといった感じで怒る千明。もうしわけないけど話がまったく見えてこない。

「そないなラインきとらんで。なあ双葉ちゃん」

「うん」

だいたい来週伊豆行くのにラーメンなんて食べに行つていいのだろうか。いや、千葉行つてるボクが言える立場じゃないか。

「はあ？ んなわけ……あつ、送信されてなかったわ」

「アキー」

「へへ、めんごめんご」

ボクとあおいはそろつてため息をついた。まあ、そんなことだろうと思つたよ。

「ほな、また明日なー双葉ちゃん」

「うん。あおいも気をつけてね」

「おい！ あたし無視すんな！ なーなー久しぶりに野クル初期メンバーでメシ食いに
行こうぜえ」

あおいとボクの間に入り込んで肩をがっしりと組んでくる千明。これ、うんつて言わないと絶対離してくれないやつだ。

「うーん、どうしよう……」

ラーメンの話聞いてたらちよつとお腹空いてきちやつたなあ。

「あたしあそこ行つたことないんだよーめっちゃ気になるんだよー！」

「最後のが本音かいな……ていうか、あとちよつとで伊豆なのになに外食しようとしてんねん」

「あたしだつてうまいもん食いたいんだよー！ リンとロリ子だけ千葉いきやがつてー
！」

向こうでうまいもんさんさん食つたんだろーと詰め寄ってくる千明。まあ、ちよつと
くらいならいいかな。

「調子に乗つて餃子とか頼まないようにね」

ボクが言うと、千明は白い歯を見せてにっこりと笑った。

「へへっ、わーってるって」

「……しゃーないなあ。おばあちゃんが晩御飯作つとるからちよつとだけやで」

口ではそう言つても口元が緩んでるあおい。なんか久しぶりだなる人でご飯とか食べるの。

「ありがとよお前らー！ 愛してるぜー！」

「はいはい、早う行くで」

「じゃボク先待つてるねー」

「あー！ 一人だけバイクとかずりーぞ！ あたしも乗せろー！」

「捕まるからやめいや」

そんな懐かしさを感じつつ。キックペダルに足をかけるボクなのであった。

「これが洲崎灯台だろ」

「おお、おっきな灯台」

リンの細い指がスマホの画面をめくる。

「で、これが鶴谷八幡宮」

「莊嚴ですなー なのお願いしたの？」

「交通安全」

「あは、めっちゃありきたりなやつだ」

「どうせなら世界平和にすればよかったかもね」

「逆に壮大すぎるわ。それで、これがフラワーロード。菜の花が綺麗だった」

「へえ、ほんとに花が植えられてるんだ。千葉ってこんな道あるんだね」

「すごい気持ちよかった。途中でめっちゃめかぶ臭いところあったけど」

「めかぶ？」

恵那の目が点になる。

「あはは、あつたねそんなところ。浜に海藻が打ち上げられててさ。それがめっちゃめかぶの匂いだったんだ」

「匂いがめかぶそっくりだったから笑っちゃったよな」

3人で走りながらめかぶだめかぶだつて妙なテンションになってたっけ。楽しかったなあ。

「醤油持ってきてたんだし、かじってみればよかったかも」

「腹壊しても知らねーぞ」

「あはは、すごい楽しそうだね」

放課後の図書室に恵那の笑い声がこだまする。

伊豆キャンまで残すところわずか。ボクたちはいつものように図書室で旅の話をしていた。

「けど、これもうキャンプっていうよりツーリングじゃない？」

「二応、九十九里でご飯食べたし銚子の海岸でテント張つたし、キャンプでいいんじゃない？」

「普通のキャンプは片道370キロも走つたりしねーよ。もう二度とやらんわ」

「ふーん、ほんとにー？」

向かい側に座つたリンの顔を覗きこみながら聞くと、リンの目がキョロキョロと泳いだ。

「ま、まあ、春休みとか、ゴールデンウィークとかなら……」

「やったー」

「ニヤニヤすんな。ていうか、その前にキャンプ付き合えよな」

「うん、わかつてるよ」

だつて約束したもんね。どこがいいかな。やっぱ本栖湖とかかな。いや、それはリンにお任せしよう。

「ふふふ、そのキャンプ。ちよいと待つてはくりやせんか？」

「……いきなりどうしたんだ？」

「恵那？」

いきなり変なことを言い出した恵那。ほんとにどうしたんだろう。

そんなボクたちをよそに、恵那が悪い笑みを浮かべながら一枚のカードを取り出しテーブルの上に置いた。

「マジか……」

「えっ……いつの間に？」

カードを見たリンとボクはそれはそれは驚いた。

なぜならそのカードは、運転免許証だったからだ。しかも恵那の顔写真付き。

「ふっふっふー、リンと双葉が千葉行ってる間に取ってきちゃいましたー」

誇らしげに笑う恵那。

原付一種なら1日で取れるから不思議でもなんでもないんだけど、まさか恵那が免許を取るとは思わなかった。

「最初は18になつてから車の免許取ろうつて思ってたんだけど、二人がすごい楽しそうだからわたしも乗りたくなっちゃったよ」

リンと恵那とボクの3人で、よく図書室で話してたっけ。バイクの話。そっか、恵那もバイク乗れるようになったんだ。

「これでもう背中を見送る必要ないよね。だからあんまり置いてけぼりにすんなよー」
 そう言って、恵那はニカッと笑った。誰に向けての言葉なのか。ボクにはなんとなく想像がついた。

リンが恵那のことを大事な友だちだと思っっているように、恵那もまたリンのことを大事な友だちだと思っっている。

ただそれだけのことなんだろうな。

「そっか……そう、だな……うん、そうだな」

向けられた想いを咀嚼していくようになんともうなずくリン。夕陽に照らされたリンの顔は、これ以上ないくらい笑顔になっていた。

「今度、一緒にツーリングとか……行く？」

「うんー」

……ボクはちよつとお邪魔虫かな。山中双葉はクールに去るぜ。なんてね。

クールに去ろうとしたボクの手が横から伸びてきた恵那の手にパシッと掴まれた。

「て、言ってもまだバイクないから、まずはそれからだけどねー 双葉、なんかいいのない？」

さりげなく掴んだ手を解こうと試みるけど、思いのほか力が強くて解けない。これじゃクールに去れない。

恵那だつてたまには二人きりで話したいとは思わないんだろうか。そう思つて目配せする。けど、恵那は首をかしげるばかり。

「ふふ、どうしたの？ 双葉」

……いや、これたぶんわかつてやつてるな。しょうがない。こうなつたら奥の手だ。

「ごめんね。ボクこれからバイトあるからまた——」

「双葉今日にもないだろ」

リンー！ 空気読んでよー！ ていうかなんでちよつとムツとしてるんだよー

「おやおやおやあ？ どうして帰ろうとしたのかね双葉くん？」

わかつているくせにニヤニヤ笑う恵那。

いつもは恵那がリンをからかっているのを笑いながら見てたけど、いざされる側になつてみるとなかなか厄介。

「どうせ遠慮して帰ろうとか考えてただろ」

そして相変わらずムツとしているリン。しかもバレてるし。ボクのボツチ時代に培つたスキルが通用しないなんて……

よし、ここまできたらなんとしても二人きりの時間を作つてやるぞー

「えつと……あの、その、えとえと……」

「……なに？」

「はい、なにもないです」

作れませんでした。

力なく席に座り込む。ボクみたいなクソザコにうまい嘘がつけるわけがなかった。

「あはは、変な双葉。それでね、どうなのがいいかな？ リンと同じビーノにしちや
おっかなー」

「おそろいとかやめろよ」

「うーん、キャンプするならやつぱカブとか——」

夕陽が差し込む静かな図書室。ボクたちは新しいバイク仲間を歓迎した。ストーブ
がごうごうと音を立てて燃える。

「ううーさむさむ」

「さむいねー」

暗がりの南部町。ライトに照らされた自転車の赤い反射板を追いかけながらペダル
を漕ぐ。

「べつにボク一人で行けるしついて来なくてもよかったのに」

いつものように、ボクの家に突撃してきたなでしこ（最近はずり手に入ってくるように

なった。まあいいって言ったのボクだけ」と伊豆に持っていくつもりのお菓子を買いにコンビニまで走っていく。

「だって、あんまん食べたかったんだもん」

「あんまり食べすぎるとまた桜さんに本栖湖何周もさせられちゃうよ」

「自転車漕いでるから大丈夫！ それにしても、双葉ちゃんのお自転車かっこいいね」

なでしこが一瞬だけ後ろを見てそう言う。

「ロードバイク？ ってやつだよ。かっこいいですな」

「旅行用の自転車でランドナーっていうんだ。お母さんのお下がりなの。もう4年くらい乗ってる」

ボクは自慢するように銀のクロモリのフレームを手で叩いた。久しぶりに乗ったけど、やっぱり自転車もいいなあ。

「だから荷台ついてるんだ。いいなーわたしもそういうのほしいなあ」

「あとで乗ってみる？」

「えっ、いいの!?! 乗る乗る！」

ちよつとしかギアの付いてないミニベロで鼻歌歌いながら南部町から本栖湖まで走れるなでしこが、1.8段変速で1ーキロちよつとしかないランドナーに乗ったらどんなことになるんだろう。

なんか開けてはいけないパンドラの箱に手をかけているような気がするのは気のせいだろうか。

と、ゆるふわフィジカルモンスターの誕生の予兆に戦々恐々していると、目的のコンビニにたどり着いた。

「さむさむっ、はやく中入ろ！ あんまんがわたしを待っているー！」

「もー目的変わってるよー」

ペダルのトゥークリップから爪先を引き抜き自転車を降り、なでしこと一緒に暗闇の中に青白く浮かび上がるコンビニに入っていく。

「いらっしやいませー」

聞き覚えのある声。はっとして顔を上げるとコンビニの制服を着た恵那がレジの向こうに立っていた。

「あれ？ なでしこちゃんに双葉？」

「えっ!? 恵那ちゃんここでバイトしてたの!？」

「コンビニでバイトしてるとは聞いてたけど……」

「ふっふっふ……バレてしまっちゃあ、しかたない。なでしこちゃんたちにはここで消えてもらおうじゃないかー！」

レジのバーコードリーダーを向けてくる恵那。銃のつもりなんだろうか。

「ふふつ、なーんてね。あーあ、ついにバレちゃったか」

スパイみたいでおもしろかったのにと笑う恵那。いつからバイトしてるんだろわか。リンと二人でツーリングした時の話的に1月ごろかな。

「教えてくれればよかったのに」

「だってそつちのほうがおもしろいでしょ?」

まあ、恵那らしいといえば恵那らしい。

「それで、二人はどうしたの?」

「えつとね! あんまん買いに来たんだ!」

「いや、伊豆キャンのお菓子でしょ?」

「ソ、ソウダツタネー ワ、ワスレテナイヨー」

忘れてたんだな。

「そういうことだから、ちよつとお邪魔するね」

「はいはい、ではごゆつくりどうぞー」

仕事の邪魔にならないように恵那とわかれ、カゴを取りお菓子コーナーに足を運ぶ。

どれにしようかなー

「眠気覚ましにガムとかいいかも……」

走っていると喉乾くしのど飴も買っておこう。小腹が空いたときのためにカロリーメ

イトも買っておこうかな。飲み物は……水でいいか。

「ポテチに、ビスケット……あつべピーカステラだ！ わたしこれ好きなんだー みなで食べたいし三袋くらい買っちゃおうかなー」

となりを見ると、なでしこがまるでかきこむようにカゴの中にお菓子を次々に入れていた。

「そんなに買ってお金大丈夫なのー？」

「大丈夫！ お父さんがお小遣いちよつと多めにくれたからー」

「それお土産用のやつな気が……」

まいつか。なでしこだってそれくらいわかってて買ってるだろうし。あ、そういえばお母さんに伊豆キャン行くなって言つとかないとな。

「お会計お願いしまーす！」

カゴにお菓子を満載してなでしこがレジに向かう。あれお金大丈夫なのかな？

「はいはい……合計4234円になりまーす」

「……………へ？」

ぴしりと音がしそうな感じでなでしこが固まる。あ、お金足りなかったんだ。というかそんなに買おうとしたのか……

「ど、どうしよう双葉ちゃん！ あんまん買えないよー！」

「減らせばいいんじゃないかなあ」

というかそれしかないと思う。ボクが払ってもいいんだけどなでしこそういうの断るだろうし。

「だよねー……ごめんね恵那ちゃん。ちよつと戻してくるよ」

「ううん。しょうがないよ」

「……とほほ」

トボトボと去っていくなでしこ。ちよつとかわいそうと思ってしまうボクなのであった。

「じゃあ先にボクの会計すませてもらってもいいかな?」

「うん。わかった」

恵那がうなずいてレジで品物をスキヤンしていく。そうだ。あれも買っておこう。

「あ、あとあんまん3つもらってもいい?」

「3つ? 2つじゃなくて?」

きよとんとする恵那。べつに不思議がることもないと思うんだけど。

「3つであつてるよ。ボクとなでしこ、あと恵那の分」

「えっ? いいよ! 気にしなくて」

手を振っていらないう恵那。こういうリアクションさせられると俄然食べさせたく

なってくる。少し前のボクもこんな風に見えてたのかなあ？

「聞こえないよーだ」

「……もう、しょうがないんだから」

渋々といった感じであんまんを袋に詰めていく。ちよつと予算オーバーだけど、まあいいか。

「伊豆キャン、楽しみだね」

お金を財布から出していると恵那がそんな話をしてきた。

「うん、恵那も楽しみ？」

「もつちろん！」

「そういえば、ちくわちゃんは来るの？」

「うーん、本当は連れてきたかったけど、まだまだ寒いからお留守番かな」

「そっか」

本音を言えば会いたかったけど、寒い思いをさせるわけにはいかない。けど、それももうしばらくの辛抱だろう。

「今度写真送るからそんな残念そうな顔しないの。あ、それでね。最近ちくわつたらキャンプって言うのとピクって反応するんだー」

「へえ、クリキャンよつぽど楽しかったのかな？」

「そうじゃないかな」

あのときのちくわ、かわいかったなあ。また会いたいなあ。今度遊びに行つていいか聞いてみよ。

「ごめんおまたせー」

なでしこが戻つてきた。さつきと比べると、カゴの中身がずいぶんと減っている。心なしか表情もちよつと暗い。

「なでしこー！ あんまん買ったから一緒に食べよー」

「えっ！ ほんとっ!？」

ばあつと明るくなるなでしこ。そのあまりの切り替えつぷりに思わず笑ってしまう。

「あ、わたしももう上がりだし、よかつたら途中まで一緒に帰らない？」

恵那が言う。断る理由なんてあるわけがない。ボクは笑顔でうなずくのであった。

「ふおお！ 双葉ちゃんこれすつごい走りやすいよおー！」

「あんまり遠く行きすぎないでよー」

ボクは歓声をあげながら暗がりの中を爆走するなでしこを見送りながらそう言った。

「双葉つてロードバイクも乗ってたんだ」

隣で恵那が自転車を押しながらなでしこが操るロードバイクを眺める。

「バイクに乗り換えるまではずつとあれでいろんなところ行つてたんだ。たまにはあの子も乗つてあげないとなあ……」

「双葉つてほんと乗り物大好きだよ。将来バイク屋さんになつちやえば？」

「それもありがたも。ていうかなでしこどこまで行くつもりなんだろう」

すつかり遠くまで行つてしまつてもはや豆粒にしか見えない。

けどなでしこの気持ちもわからなくもない。ボクも生まれて初めてロードバイク乗つたときはすごく感動したっけな。

「あ、戻つてきたみたいだよ」

恵那が指差す。豆粒みたいな大ききだつたヘッドライトの灯りが猛烈な勢いで大きくなつて、ボクたちの前で止まつた。

「双葉ちゃん！ これすつごいね！ ちよつと漕ぐだけでぐーんつて進んで！」

手をぶんぶんと振つて感動を伝えようとするなでしこ。よつぽど衝撃的だつたらしい。

「びつくりしたでしょ？」

「うん！」

「あ、もしかしてなでしこちゃんハマつちやつた？」

「えへへ、ちよつとほしくなつちやつた。これでキャンプ行ったらきつと楽しいんだろ
うなあ。ま、お金ないんだけどねー」

自転車を交換しながらなでしこが笑う。たしかに、いい自転車つて高いんだよね。

「実際どんくらいなの？ 双葉」

「ママチャリに比べたら高いけど、普通に乗る分なら5万円くらいのやつで全然十分だ
よ」

「へえ、けつこう安いんだね。お金貯めて買っちゃえば？ なでしこちゃん」

「5万円、バイト代2ヶ月分くらい……ほんとに買っちゃおうっかなー あ、でもキャン
プグッズも欲しいし。わーん、どうしよ双葉ちゃん！」

「まあ焦つて決めることでもないんだしゆつくり考えなよ。そうだ。よかつたらボクの
自転車しばらく貸そうか？」

「えつ、いいの？ だつて……」

さつきお母さんのお下がりつて言ったのを気にしてるんだろうか。

「うん。どうせ全然乗つてないしさ。乗つてくれる人に乗ってもらつたほうがこの子も
喜ぶだろうしね」

そう言つてボクは自転車のドロップハンドルを叩いた。

「試しにキャンプとか行つてみて、それで本当にほしくなつたら改めて買えばいいじゃ

ん」

「ありがとー！ 双葉ちゃん」

「詳しい話はまた今度しよっか。でもその前に伊豆キャンだけどね」

未来の話をするのも楽しいけど、今は目の前にあるキャンプのほうが大事だ。

「そっかあ、来週から伊豆キャンだもんねえ。楽しみだなー」

「だよねー」

「だねー」

3人で伊豆に思いを馳せる。

海を眺めながらで温泉に浸かったり、伊豆のおいしいご飯を食べたり、みんなでテントでアニメ見て夜ふかしとかするんだらうなあ。

楽しみだなあ。きつと……ううん、絶対楽しいんだらうなあ。

「カピバラ温泉、見てみたいよねー」

「金目鯛バーガー、どんな味なんだらう」

「西伊豆スカイライン、早く走りたいなあー」

そろいもそろつてももののみごとに目当てのものがバラバラ。なんだかおもしろくて3人で一緒に笑う。

伊豆、どんな旅が待ってるんだらうなあ。

そして数日が経ち……

とくに緊張することもなく、いつものようにドアベルを鳴らす。ほどなくしてドアの向こうから足音が聞こえてきて玄関のドアが開いた。

「いらつしやい、双葉」

ドアを開けた部屋着姿のリンがボクを見て微笑んだ。

「今夜はよろしくねリン。おじやましませーす！」

リンと一緒に家の中に入りいつものように「元気よくあいさつする。

「いらつしやーい双葉ちゃん」

廊下の向こうからひよつこりと顔を出した咲さんがつこりと笑った。

「すいません咲さん。お世話になります」

「そこ寒いでしょ？ ささ、早く上がって上がって」

咲さんに急かさされるままリンと一緒に廊下を歩く。

伊豆キャンを明日に控えた今日。ボクはリンの家に泊まるために家にお邪魔していた。

「今さらだけど、泊まらなくてもよかつたんじゃない？ 今夜新城さん来るんでしょ？」

明日南部町で落ちあうのでもよかつたのに」

暗に邪魔じゃないかとたずねる。けど、リンは気にもしていない様子。

「それこそ今さらだろ。何回遊びに来てると思ってるんだよ」

「それもそっか」

言われてみれば今さらだった。もう来すぎてリンの家の間取りとか覚えちゃってるし。なんなら歯ブラシとかも置いてある。

「あとは一応念のため一緒に出発したほうがいいかなって。お母さんもそっちのほうがいいかなって」

車で拾うとかならともかく、原付で行くのなら一緒に出発したほうがいいか。

「あと、話変わるけどこの前話してた荷台とUSB電源届いたよ」

「あ、届いたんだ」

「今お父さんが点検に出したビーノ取りに行ってるから、戻ってきたら取り付けるつもり。手伝ってもらってもいい？」

「もつちろん」

「二人ともーお茶入ったわよー」

「はい。行く、双葉」

「うん！」

ドアの隙間から差し込む夕陽がどんどん濃くなっていく。ボクは出発の時刻一刻と近づいていくのこの身で感じるのであった。

「できた……」

「かんせー！」

パワーアップしたビーノを眺め、二人で歓声をあげる。荷台にUSB電源、そしてスマホホルダー、どれもバイクでの旅をサポートしてくれる便利アイテム。

整備から帰ってきたばかりのビーノが、ピカピカの外装を誇らしげに輝かせていた。

「最後に電源だけ点検してつと……リン、スマホビーノに繋いでもらってもいい？」
「わかった」

リンがスマホをビーノに接続したのを確認して、キーをオンにする。すると、バッテリーに連動してスマホの充電が始まった。

オフにする。よし、今度はちゃんと充電されないぞ。

「…………どう？」

後ろからリンが恐る恐るといった様子でビーノを覗きこんでくる。

「うん、大丈夫。ちゃんとリレーが動いてる。ヒューズも大丈夫そうかな」

ボクが言うと、リンがほっとしたように息を吐いた。

ヘッドライトの配線から分岐させようかとも思ったけど、やっぱりちゃんとリレーを使つていて正解だった。これならしつかり役目を果たしてくれるだろう。

「ありがと、手伝つてくれて。わたしこういうの詳しくないしめっちゃ助かった」

「ボクも昔つけようと思っていろいろ調べたんだよね。またなにかあつたら言つてよ」

ちなみにリンから相談を受けて3日ほど調べまくつたのは内緒だ。おかげで無駄にビーノに詳しくなつてしまった。

「うん。そのときはよろしく」

「二人とも、大丈夫そうかい？」

ガチャリと音がして振り向く。リンのお父さん、渉さんが立っていた。心配して見に来てくれたらしい。

「うん、終わったところ」

「へえ、なかなかいい感じじゃないか。だいぶ走りやすくなつただろう」

できあがつたビーノをしげしげと眺めて感心する渉さん。

「もうナビの案内に悩む必要ないな」

「だね。これからはどう見ても直進なのに音声だと斜め右って案内されてバイパスに案内されて死にかけたり同じところをぐるぐる回ったりしなくてすむってわけか……」

「やけに実感こもってやがる」

「リンも一人で走ってたらいつかわかるよ……」

基本的に優秀だけどもたまにポンコツになるんだよなあ、あのナビ。最近は道見ればなんとなくわかってきたけどさ。

「うん、僕の出番はなさそうだね。そういえば話は変わるんだけど双葉さんのバイク、少し変わった？」

涉さんがボクのビーちゃんに目を向ける。涉さんの言うとおりボクのビーちゃんにも少しだけ変化があった。

「あ、ほんとだ。荷台ついてる」

シートの後ろ、テールランプの上に荷台を取り付けた。オークションでたまたま売ってたから買ったのだ。

「あのシート、かっこよくて好きなんだけど荷物が積みにくかったんだよね。でもこれでもう安心……高かったけど」

「絶版車のパーツは全体的にお高めなのだ。数が限られてるからしかたないんだけど

ね。

「たしかにこのタイプのシートは載せづらいかもしれないね。咲も昔ぼやいてたよ」

荷物が載せづらいシートってことは、もしかして咲さんけっこうやんちゃんカスタムしてたのかな？ 気になる。

「あとは……ハンドルも変えたんだ。前より高くなってる」

「はい、間にハンドルポスト挟ませてかさ上げしました。低いほうがハンドリングはいんですけど、長距離走るならこっちのほうがいいかなって」

「なるほど……よく考えてるんだなあ」

「これでも普通のバイクに比べたら低めですけどね」

「いいんじゃないかな？ 伊豆は峠が多いからね。とくに下りはバイクと身体の距離が近いほうが——」

「お父さーん、双葉ー」

呆れたようなリンの声。ゆっくりリンのほうに顔を向けると、むすっとした顔のリンが腕を組んでボクたちをじとーっと見ていた。

「あ、ああ、ごめんリン」

「ご、ごめんね」

「べつに……怒ってないけどさ。おじいちゃんも来るんだし、もう戻ろうよ」

「そうだね、戻ろっか。ごめんね双葉さん」

「いえ、全然こちらこそ。あ、また話変わっちゃうんですけど、咲さんって昔どんなバイク乗ってたんですか？」

「咲かい？ けっこうすごいやつ乗ってたよ。たしかヤマハの——」

「あなた——！」

声がある。振り向くと玄関の前でおたまを持った咲さんが立っていた。

そしてリンとそっくりな顔をむすつとさせてボクたちを……正確には涉さんを睨みつけていた。

「双葉ちゃんに恥ずかしいこと言わないでよも——！」

顔を赤くしておたまを振り回す咲さん。いつも思うけどそんなに恥ずかしいものなのかな。

ボクも同じ年になればわかるのかな？

「べつに恥ずかしがることないじゃないか。なあ双葉さん」

「はい！ めっちゃ気になります！」

「わたしも気になる……」

けどそこまで頑なに隠されると余計に気になるのが人という生き物。たぶんキラキラしているだろうボクの目と、リンのちよつとキラキラしている目が咲さんを射抜く。

「リンに双葉ちゃんまで!? もー! 3人してなんなのよー! あなた! 絶対教えな
いでよ! あとご飯、もうできるからね!」

そう言つてぶんすかと戻つていく咲さん。ちよつとからかいすぎたかも。

「はいはい。じゃあ僕たちも行こうか」

「だね」

「です」

道具を片付けて家に戻る準備をする。今日はどんなご飯のかな。楽しみだなあ。

そんな時だった。遠くからバイクの力強いエンジン音が聞こえてきたのは。ボクと
リンはこのエンジンの音を知っている。

ヘッドライトの向こうに見覚えのあるシルエット。

「おじいさん、来たみたいだよ。リン」

ボクが言うと、リンは笑顔でうなずいた。今夜はきつとにぎやかになるだろうな。

近づいてくるバイクを見ながら、ボクはそんなことを思うのであった。

「二人とも、準備のほうは大丈夫? 忘れ物とかない?」

テーブルの向かいに座った咲さんがお茶を飲みながらボクとリンに聞いてきた。

「はい。ボクは大丈夫です」

「わたしも大丈夫」

「なにか足りないものあつたら気にせず持つていっていいからね」

渉さんが付け加えるように言う。

「なに、二人なら心配するようなことはないだろう。なんせ原付で銚子まで行くくらいだからな」

そう言って、新城さんがニヤリとボクたちを見た。

「あの時はほんとにびびくりしたわあ。リンから写真がきたと思つたら、お父さんが映ってるんだもん」

その時の集合写真は印刷してボクの部屋のコルクボードに飾つてある。楽しかったなあ。また行きたいなあ。

「私も驚いたよ。まさかリンとあんなところで会うなんてな」

新城さんはこう言つてるけど、ビーノのスクリーンを届けるためだけに愛知から来ているこの人も十分びびくりだと思う。

けどまああのトライアンプなら大した距離じゃないか。

二人にとってはもう伊豆なんて大したことないだろうが、十分気をつけるんだぞ。あ

そこは車の流れが早いからな」

「はーい」

「はい」

友だちと食卓を囲むのとはまた違う暖かさを一身に感じながら返事をする。

お母さん今ごろどうしてるのかな。いつもだと、そろそろ家に帰ってくる時期なんだけど。あとで連絡してみよ。

「そういえば双葉ちゃんのお母さん、ちょうど二人が伊豆から帰ってくる日に帰ってくるのよね？」

「え？　なんで知ってるんですか」

ボクが驚いて聞くと、咲さんが不思議そうに目を丸くした。

「あら？　もしかして聞いてなかったかしら？　私、けっこう前にツイッターで双葉ちゃんのお母さんとお友だちになってたんだけど」

なにそれ今初めて知ったんだけど。

「いえ、まったく。どうせこっさり帰って驚かせようとしてもしてるんだとおもいます。あの人そういう人なんだ」

で、ボクが驚かなくてしよんぼりするまでがワンセット。

うるたえたとときのクソザコっぷりを見ると親子なんだなあとしみじみ思う。身長も

大して変わんないし。

「そ、そうなの……」

「まあ、でも……」

つぶやきながら緩んだ口元を手で隠す。そっか、久しぶりにお母さんに会えるんだ。

やばい、めっちゃ嬉しい。

「嬉しそうだな、双葉」

「べ、べつにそんなこと……ちょーっとはあるけど……」

照れ隠しするボクを見て志摩家のみんながニコニコと笑った。この人たちと知り合
いになれて、本当によかったな。

ボクは改めてそう思った。

「あ、忘れてた。双葉ちゃん、ちょっとあなたに渡したいものがあるの」

「渡したいもの、ですか？」

咲さんに聞くと、ちよつと待っててねと言って廊下の向こうに消えていった。

渡したいものってなんだろう。考えていると、咲さんが手にボトルみたいなものを
持って戻ってきた。

「これ、私が昔使ってたバイク用の携行缶なんだけど、よかつたら双葉ちゃんにあげる
わ」

「えっ！ くれるんですか？」

「古くてもうしわけないんだけど、中は錆びてなかったしパッキンも交換したし大丈夫なはずよ」

「あ、ありがとうございます」

革のホルダーに包まれた銀色に光る携行缶を受けとる。容量は1リットルくらいだろうか。ホームセンターで売ってるような安いやつじゃない、すごいちゃんとしたやつだ。

「伊豆はガソリンスタンドも少ないし、これがあればなにかと安心できるんじゃないかしらっ？」

「はい……でも、これ本当に受け取っていいんですか？」

ステンレス製らしいボトルそのものも高いだろうし、分厚い本革のホルダーなんて、買ったらいくらになるんだろうか。

「いいのよ。こんなおばさんが持つてもしよぅがないしね。それに双葉ちゃんにもう怖い思いをしてほしくないのよ」

怖い思い……きつと本栖湖でのガス欠のことを言ってるんだろう。

「だから、ね？」

咲さんはボクを見てにつこりと笑った。こんな目で見られたら受け取るしかない

じゃないか。

ほんと、なんでボクの周りの人ってこんなに優しい人ばかりなんだろな。

「……ありがとうございます。大事に使わせてもらいます」

またいつかちゃんとお礼持っていこう。けど、まずは無事に帰ってこないと。

お母さんも待つてることだしね。

「ふああゝ ねむい」

リンが目をしよぼしよぼさせながら大きなあくびをした。

「そろそろ寝よっか」

「だなー」

パチンと部屋の照明が落とされ部屋が暗闇に包まれた。

なんやかんやでボク専用と化しつつある布団に潜り込み天井をぼんやりと眺める。

「そーいや双葉が風呂入ってる間に千明からライン来たんだけど、二人の誕生日プレゼント買ったってさ」

3月4日はあおいとなでしこの誕生日。せっかくみんなで伊豆に行くんだから、ついでにお祝いしようということになったのだ。

「そっか、二人とも喜ぶといいんだけど」

「わたしも一回見てきたけど、あれならきつと喜ぶと思う」

「リンが言うなら大丈夫そうだね」

「なでしことばったり出くわしてびびったけど」

「そんなに入り浸ってるんだ」

「そういえば2月に入ってから一回もキャンプ行ってないってばやいてたっけ。」

「カリブーでキャンプ成分を補給してるのかな。」

「ちよつと悪いことしちゃったね。ボクたちだけ千葉行っちゃって」

「べつにいいんじゃない。楽しかったんだし。お土産たくさん買って帰ったんだから大丈夫でしょ。実際千明めっちゃ喜んでたし」

「殻付きのピーナッツ買ってきたら最初はピーナッツかよって言ってたくせに結局誰よりも食いまくってたのはよく覚えてる。」

「それもそっか。明日何時くらいに出る?」

「遅くても4時くらいには出たいかな。起きなかつたら起こして」

「もー少しは自分でも起きなよー」

「わかってるー おやすみー」

最近のリン、ボクのほうが早起きってわかってるからか一緒に寝ると自分で起きよう

としないのだ。まあいいけどね。

そうこうしていると、部屋が静かになった。身体の力を抜いて布団に身をゆだねる。
「楽しみだねリン」

「……うん」

ベッドの向こうでリンが小さく、けど力強く返事した。

「あーあ、綾乃もこれればよかったんだけどなー」

バイト嫌じゃーってラインしてきたのはつい昨日のことだ。やっぱ大変なのかな？
コンビニバイトって。

「あ、言い忘れてたけど、アヤちゃんが3月の中ごろにキャンプしようだって。双葉のほうにも連絡いつてるんじゃない？」

ボクのスマホ夜になると自動でおやすみモード入るから、気づかなかったのかな。

「わかった。明日確認してみるね」

「今度はなでしこも一緒に4人で行きたいって。どうする？ ……って聞くまでもないよな」

「うん、よろしくって言つといてー」

「ういー」

真つ暗な部屋で話しているとだんだん意識にもやがかかってくる。明日も早いし、そ

ろそろ寝てしまおう。

「せっかく……なびみやすくなっただし……あしたは、さきはしつてよお」

「めんどおい」

「じゃあこうたいこうたいでー」

「わかったあ」

ボクもリンも全然呂律が回らない。きつと寝ぼけてるんだろな。と、沈みゆく意識の中で考えた。

いよいよ明日か……なんかあつという間だったな。

「いっばいたのしもうねー、りん」

返事はない。帰ってくるのは寝息ばかり。きつと寝ちやっただろな。

まあいいや、ボクも寝ちやお。目を閉じる。意識が沈んでいく。

エンジン音と風の音、流れていく海や木々。リンやなでしこたちの笑い声。頭の中に雑多な光景が泡のように浮かんでは、泡のように消えていく。

3月。春がもうすぐやってくる。

23話 伊豆オレンヂセンター 河津の桜まんじゅう

15個 1,400円(税込)

23—1

目を開く。たぶん朝だ。なんとなくそんな気がする。

自慢じゃないけど寝起きはかなりいいほうだ。すぐに布団から起き上がり時計を確認。よし時間どおり。

「そうだ。リン起こさない」と

電灯の豆電をつけて部屋をちよつと明るくし、ベッドの上に転がっている掛け布団の塊を揺らす。

「リン、リン、朝だよ」

何度か揺らすと布団の塊がピクつと反応した。あと少しだな。

「リン、おーい」

揺らしながら声をかけると布団がモソモソと動いて、のそのそとリンが出てきた。
「え、もうあさあ?」

寝ぼけているのか、見当違いな方向に話しかけるリン。まだ眠いのかな?

「ふたばあ、いまなんじ?」

「3時半だよ。そろそろ準備しよつか」

「んーわかつたあ」

寝起きのリンの引つ張って一階の洗面所に向かう。

「ねむい……」

「ボクもちよつと眠いや」

二人してあくび。まあ朝の山梨をひとつ走りすれば眠気も吹き飛ぶだろう。

「なでしこちゃんと寝れてるかなあ」

テンション上がりすぎて寝れてないとかありそう。まあボクたち以外は車だし、眠くても平気か。

そんなことを考えながら洗面所に入って朝の支度を済ませていく。

「ふあば、はぶらしとつてー」

と、相変わらず寝起き全開なリン。ボクといるときはいつもこんな感じだ。もう出発

なんだから少しはしゃんとしてほしいんだけどな。

「しようがないなあ」

けど文句を言いつつも、なんだかんだいって面倒を見てしまうのもまた事実。こんなんだからリンも余計に甘えてくるんだらうなあ。

こうして、朝のひと時は過ぎていく。出発のときは近い。

「リン、準備いい？」

「オツケーだよ」

ジャケットのジツパーを襟元まで上げて空気が入らないようにする。

荷物のほうは昨日のうちにビーちゃんに積んでおいた。あとは出発するだけだ。

「もう行く？」

「だね、行こっか」

ヘルメットを取って部屋を出る。あまり音を立てないように階段を降りて玄関に向かう。

「下田までどうやっていく？」

「139号から行こうと思う。こっちのほうは車少ないし」

「今日は混むだろうしね。わかった」

ちよつとした算段を立てながら玄関でブーツに履き替える。

「あれ……」

「どうしたの？」

「おじいちゃんのブーツなくなってる」

言われてみればたしかに新城さんのブーツが見当たらない。昨日はあつたはずなんだけどな。

「もしかして帰っちゃったのかな？」

「だとしても早すぎるだろ」

「よくわかんないけど、とりあえずでよっか」

「それもそうだな」

靴を履きおえリンがドアの取手に手をかける。

「あ、そうだ」

リンがぐるりと振り返り、行ってきますと、ひと言つぶやいた。ボクも真似して行ってきますと言う。

「ま、寝てるだろうけど」

けど、言わないと気がすまない。きっとそんなところだろう。

「案外陰で見てるかもよ」

「そうかな？」

「そういうもんだよ。お母さんって」

そんな話をしながら玄関の外に出る。粘り気のあるひんやりとした空気がボクたちを包み込んだ。

「さむっ」

腕を抱き寄せて震える。わかってはいたけどやっぱり寒い。ヘルメットを被れば少しはマシになるんだろうか。

「来たか」

ふと声が出た。ボクたちははっとなって声のほうに顔を向けた。

「二人とも、よかつたら途中まで一緒に走らないか？」

そう言つて、新城さんはニヤリと笑った。かたわらのトライアンフがシルバーのタンクを輝かせていた。

キーを回す。コックを捻る。息をはく。白く濁る。

燃料がエンジンに行き渡るまできっかり30秒待機。

手袋越しに空気の冷たさを感じながら、ハンドルに手をかけてチョークレバーを左に引く。

折り畳まれていたキックペダルを足で出して小刻みに踏み、踏み応えのある位置で止める。

そして蹴る。

ゴスつと音がしてピストンが空気を圧縮する。けどエンジンはかからない。

もう一度。同じくエンジンはかからない。ペダル越しにピストンが回る感覚がするばかり。

「大丈夫?」

ヘルメットを被ってすっかり準備を終えたリングが、白い息をはきながら心配そうに聞いてきた。

「大丈夫、いつものことだから」

そろそろかかるころだろう。さらにペダルを蹴り飛ばす。

ゆっくりと振動しながら回っていくエンジン。今までとは違う、明確な手応え。すかさずチョークを戻しながらスロットルを回す。

エンジンが唸る。青白い煙を吐きながらブルブルと唸る。アクセルを煽ってガソリンを追加してやれば、エンジンが元気よく応えてくれた。

「あとはシリリンダーがあつたまるまでまつてと……」

エンストしないようにしっかりと暖めておこう。寒いからちよつと時間がかかりそう
だ。4ストだったらそこまで気にしなくていいんだけどな。

右手の手袋を脱いでシリリンダーに手をかぎす。まだまだ冷たいな。

「なんか、大変なんだね」

「適当にやると拗ねてちやんと動いてくれないんだよね。もう半分生き物だと思つて
やつてるよ」

高度に電子化された今のバイクと違って、ビーちゃんはデジタル的なパーツはほぼ使
われていない。

電子的な部品はせいぜいC D Iの制御に使うトランジスタくらいだろう。それ以外
は全てアナログ。エンジンをかけるだけでも気温や湿度、気圧などを考慮しないといけ
ない。

これでも、点火の間隔すら手動で操作しなきゃいけない戦前のバイクとかに比べたら
楽なほうなんだけどね。

「大変なんだな。ビーノならスイッチ一つでできるのに」

「こういうのが楽しいのさ。だろう？ 双葉さん」

トライアンプの横でボクを待つてくれている新城さんがニヤリと笑った。さすが昭

和世代、よくわかってる。

「はい！ やつぱバイクはこうでなくっちゃですね」

「ふうーん……」

ボクと新城さんのバイク談義に今ひとつついていけない様子のリンが、ちよつとつまらなそうに相槌を打つ。

「リンも乗ってみればわかるさ。古いバイクつてのも味があつていいもんだぞ。手間はかかるがな」

「ですね。プラグ被つたりしたらほんと地獄だし」

おかげでプラグレンチまで積まないといけないから面倒極まりない。

「にしても、もっとゆっくりしていけばよかったのに。お母さんだつてそつちのほうが喜ぶでしょ」

ビーちゃんのエンジンを暖めている間、リンが新城さんにそんなことを聞いた。ちよつとボクも同じことを思っていた。

「届けるもんは届けたんだ。あまり長居してもしかたないだろう。それにだ」

新城さんがリンの顔を見る。そして微笑む。

「たまにはおじいちゃんにもいい思いをさせてくれ」

どんなに渋くてかっこよくても、本質は孫が大好きなどこにでもいる普通の人つてこ

となんだろう。

ほんといいおじいちゃんだよなあ。ボクも歳をとったらあんな風になりたいなあ。

「……わかった」

「すまん。わがままに付き合わせてしまつて」

新城さんのひと言に、リンは少し考えるような素振りを見せたあと、やがてにつこりと笑つた。そんなリンに、新城さんはそれはそれは嬉しそうに笑うのであつた。

「そろそろ行こうか。双葉さん、エンジンのほうはどうだい？」

「もう大丈夫だと思えます」

シリンダーに手をかざす。さつきとは違つてほんのり暖かい。このくらいでいいか。あとは走つていけば自然と暖まつていくはず。

走れるようになったので手で二人に合図。

「なら行こう。リン、双葉さん、ついてきてくれ」

ヘルメットのバイザーを下ろし、バイクに跨る新城さん。

ほどなくしてトライアングルのエンジンに火が入り、ボクやリンの原付とは比べ物にならないくらい力強いエンジン音があたりに鳴り響く。

後を追うようにリンがビーノのエンジンに点火して、トコトコと小さな音が鳴つた。

暗がりの山道に鳴り響く3台のエンジン音。もういつでも走り出せる。

トライアンフがウインカーを焚き、ビーノとビーちゃんウインカーを鳴らす。

あとは新城さんが走り出すのを待つばかり。ボクはふと視線を感じて玄関のほうを見た。

ドアの隙間から、咲さんがボクたちを見守るように見ていた。リンも新城さんも気づいてないみたいだ。

こつそり手を振ると、咲さんもこつそり手を振りかえしてくれた。

出発の時間だ。

走り出すトライアンフ。テールランプの赤いLEDを追いかけて、ビーノがゆっくりと走り出す。

クラッチを握り、ギアを上げてスロットルを回す。エンジンが唸る。クラッチを離す。

走る。

顔にまわりつく冷たい風。だけど、ボクは不思議とその風が暖かく感じた。

『もうすぐ春だね』

前を走るビーノから、そんな声が聞こえた。

「……だね」

3月の頭の出来事だった。

駿河湾を眺めながら、海沿いの414号線を二人で走る。

朝の西伊豆は、東伊豆のほうと違って比較的車のおりが少なく心なしかゆつたりとした気持ちで走ることができた。

朝の潮風を浴びつつ複雑に入り組んだ湾を横目にひた走っていく。

「リーン、スクリーンどう？」

『めっちゃいいー!』

前を走るビーノから嬉しそうな声が聞こえる。新城さんからもらったスクリーンはその性能を遺憾なく発揮しているみたいだ。

『双葉、右』

本栖と書かれた白いナンバープレートを追いかけて小さな橋を渡っていると不意にリンが右を指差した。

脇見にならないように気をつけながら右に意識を向けてみる。

「あ、富士山だ……」

建物の向こう。雲一つない青空の下でこんもりと雪を被った青白い富士山が、ボクたちを見守るようにたたずんでいた。

『山梨で見るのとまた違う感じだな、富士山』

「そうだね。あつちの富士山も綺麗だけど、こつちの富士山も好きだなー」
『わかる』

冬は空気が澄んでいるから、富士山も綺麗に見えるんだろうか。この前来た時よりもずっと綺麗に見える。

きつと写真で撮ってもこの素晴らしきは残せないんだろうなあ。

風を浴びながら、潮の匂いをかぎながらスロットルを回す。まるで自分が風と一つになつたような一体感。

車や電車では絶対に味わえない、バイクに乗っている時だけのご褒美だ。

「晴れてよかつたね」

『うん！』

スピーカーから聞こえるリンの声も心なしかうわずっている。でも、そんなの当たり前だ。

知らない景色、知らない道、知らない匂い。

目に次つぎと飛び込んでくる未知が、心と身体を否応なしに踊らせていく。

この先にはなにがあるのか、どんなものが待っているのか。それを考えるだけで、身体が勝手に進んでいく。

それが旅をするってことなのだ。

「たしか行きたいところあるって言ってたよね？　なんだっけ？　迫真樹林？」

走りながら次の目的地をたずねる。

『ビヤクシン樹林だから。なんだよ迫真樹林って』

「さあ？　森の木がめっちゃ荒ぶってるんじゃない？」

『てきとー言うな』

と、この時点ではただの冗談のつもりだったボクたちだけ……

「ほんとに荒ぶってやがる……」

「荒ぶってるね……」

目の前の幹がねじれにねじれて見事に荒ぶっている木々を二人で眺める。

身延から3時間と少し。距離にしておよそ90キロ。静岡県沼津市大瀬崎、ビヤクシン樹林。

荒ぶる自然を眺めながら、ボクたちは伊豆の旅の第一歩を踏み出していた。

「とりあえず写真撮っとく？」

「うん」

とくに段取りしたわけでもなく、自然と肩を寄せ合つてツーショット。

「……今回はちゃんと撮れてるな」

「九十九里で撮った時ひどかったもんねー ボクたちもちよつとは上手くなつたんじゃない?」

「かもな」

「うん、かもかも」

それから写真の出来栄に満足したボクたちは、払った拝観料1000円（税込）を無駄にしないためにもビヤクシン樹林を歩き回ることにした。

空から見るとまるでドーナツのように真ん中に大きな池（神池というらしい）がある大瀬崎。その池を取り囲むように広がった樹林の中を二人で歩いていく。

「朝だから人が少なくていいねー」

「うん。早めに出といて正解だった」

山梨じゃまず見ることができない光景に二人で感嘆の声をあげる。

千明日く、伊豆のこういう場所はジオスポットと呼ばれていて、伊豆の各地にそれぞれ数えきれないほどあるらしい。

「前に行った時はこんなところがあるなんて知らなかったなー」

「前はどうかやって行ったんだっけ？」

「沼津入ってずーっと海沿い走って熱海から帰っただけ」

「で、帰りに捕まったと」

「だからー！ あれ捕まってないって何回言ったらわかるんだよー！」

「はいはい」

太陽を浴びてキラキラと輝く神池を眺めながらボクたちは歩く。伊豆の旅はまだ始まったばかりだ。

「リンは知らなかった……自分がこのあと大変な目にあうということに——」

「変なナレーション入れるのやめろし」

「ふひひ」

『ふっ、ちよろい峠だぜ……』

そう言いながら、リンがリーンアウトで大きくビーノをバンクさせ、最小限の減速でコーナーを曲がっていく。

大瀬崎を後にしたボクとリンは、みんなとの合流地点である下田を目指して、国道1

7号を走っていた。

勾配の激しい伊豆の地形に沿って敷かれた17号はあまりよろしくない路面状況も合わさってなかなかスリリングだ。

急な上り坂に下り坂、S字やヘアピンが続く峠道を二人で走っていく。

下り、見通しのきかない急な左。バイク乗りにとって一番危ないコーナー

ビーノの減速に合わせてアクセルオフ。リアブレーキをかけつつ荷重を抜いてリーンアウト。

バンクさせつつスロットルを回してトラクションをかけ、コーナーを切り抜ける。

「リン、だいぶ上手くなったんじゃない?」

前を走るリンの腕前に感心する。

スクーター特有の重心の高さとホイールベースの短さを逆手にとったコーナーリング。

ボクがビーノに乗ったとしても、あそこまで上手く操ることはできないだろう。

『なんだろう。どうすればこいつが曲がってくれるのか、なんとなくわかってきたんだ』

「そっかー」

『たぶんどっかの誰かにさんざん連れ回されたからだろうな』

「誰だろうねー」

『双葉しかないだろ』

うん、知ってる。

荒れた道も峠もなんのその。話ながら進んでいくボクたち。

しばらくすると展望台らしき場所が見えてきたので少しだけ寄ってみることにした。

「船多いな……」

眼下に広がる景色を前に、リンがひと言。

ボクたちの視界の先には、さつき行つた大瀬崎と同じように、湾を囲むように岬が広がっていて、囲われた湾の中にたくさんの船がぶかぶかと浮かんでいた。

目を凝らしてみると、岬の内側はちよつとした公園のようになってるのがわかった。

形は大瀬崎とそっくりだけど、中は全然違うみたいだ。ちよつと気になるな。

「たしかあそこって御浜岬だったよね。まだ時間あるし、ちよつと寄ってみる？」

「うん。せつかく伊豆来たんだし、行けるだけ行ってみようよ」

「だね。行こっか」

そう言つて、それぞれのバイクに戻るボクたち。

ボクがいつものようにキックペダルを蹴り飛ばし、リンもいつものようにセルスイッチを押す。4ストと2ストのエンジンが唸り、マフラーが煙を吐く。

走り出す。東の空に浮かんだ太陽はまだまだ低く、朝の風は冷たくも気持ちよかつ

た。

「とーちやーく、つと」

松林を通り抜け、岬にそつて広がる堤防を左に進む。小さな上り坂を登ると、大きな駐車場にたどり着いた。

「おお……」

そして、目の前に広がる景色に目を奪われた。

海、果てしなく続く海。荒々しい冬の波が崖下の岩礁に打ち付けられてザブンザブんと音を立てる。

右を見れば富士山が岬を見下ろすようにそびえ立つ。

「いいなーんっ」

スマホを出して目の前の景色をパシヤリ。あとでなでしこたちに送ろつと。そうだ。

「リンー」

「ん？」

ちやうどヘルメットを脱ぎ終わったばかりのリンにスマホを向ける。ふつと笑つてボクにピースしてくれたリンを写真に収める。

うん。いい写真。

「どうせだし、ここでちよつとコーヒーでも飲んでかない？」

「まあいいけど……そんな余裕そうにして平気なの？」

「なでしこたちとは11時に合流する予定だ。まだ8時前とはいえ、リンの言うこともつともだった。」

「平気平気、いざとなつたら飛ばすから」

と言つたところでリンの顔が険しくなる。やっぱりオカンだな。

「つてのはもちろん嘘だけ……リン、けっこう眠いでしょ？」

「えっ……なんでわかつたの？」

びつくりしたように目を開くリン。どうやら隠してるつもりだったみたいだ。

「だつて朝からずつと眠そうだったじゃん。あ、もしかして興奮して眠れなかった？」

ニヤニヤしながら聞くと、恥ずかしそうに目を背けた。凶星だったみたいだ。

「べつに、そういうわけじゃないけど……ていうか！　そ、そつちだつて何回か起きてた
だろ」

「ソ、ソソナコトナイヨ」

朝かかつて思つてスマホつてみたらまだ1時間しか経つてなかつたなんてことは
一切ない。

ないっつたらないのだ。

「凶星かよ」

「はい」

凶星はボクでした。だって楽しみだったんだもん……

あれ？ ボクが起きること知ってるってことはやっぱりリンも起きてたんじゃないか。

「な、なに？」

「ふふっ、べつつにー」

リンも子供っぽいところあるんだなと思っただけだ。

「この先も長いんだし、甘いコーヒーでも飲んで休憩しようよ」

「それもそっか。じゃ、お願い」

「はい」

こうして、伊豆の岬でちよつとしたコーヒープレイクが始まった。

コンクリのベンチに腰掛け、テーブルの上に置いたコツヘルに極細に挽いた豆を投入する。

「あれ？　いつものと違うんだ」

いつもと全く違う淹れ方にリンが不思議がる。普段ならドリッパーとフィルターを用意するところから始めるから、リンが不思議がるのも無理はなかった。

「うん。ずっと同じだと飽きちゃうでしょ？　たまにはこういうのもいいかなって」

「……べつにそんなことないけど」

「ありがと。で、同じくらしいの砂糖を入れるつと」

「コツはちよつと多めに入れることらしい。」

「え、まさかこのまま煮るの？」

驚くリンにうなずいて、いつものより少なめの水を注ぎ、バーナーの火にかける。五徳の間から漏れた青白い火がごうごうと風に揺れる。

「それにしても、なんか不思議な景色だな」

「たしかにね」

コーヒーを火にかけている間、ボクとリンは目の前に広がる不思議な光景に目をやった。

「湖っぼいのに漁船浮かんでるし砂浜もあるし、変な感じ」

ボクの言葉にリンがうなずく。

目の前の、湖にしか見えない内湾にはたくさんの漁船が浮かんでいて、すぐそばの向こう岸の町と合わさって、なんだかイタリアの地中海のような印象だ。

ボクたちは、そんな湾を囲うように伸びる岬の内側にある砂浜にいた。

「ここ海水浴場らしいよ。さつき看板に書いてあった」

「駐車場大きかったし、夏になると人がいっぱいくるのかな？」

そんなことを話していると、コーヒーが煮立ってきた。水と一緒に煮出しているから、いつものコーヒーとは違って匂いが濃い。

「さつきから思ってたけど、それどういう淹れ方なの？」

「ターキッシュって言ってね、トルコのコーヒーの淹れ方なんだ。もうすぐおもしろいのが見えるよ」

コーヒーの混ざった黒い水が、まるで茶色いマグマのようにふつつつと揺らぐ。揺らぎは大きくなり、やがて無数の泡となってコツヘルをもこもこと上りはじめた。

「あ、溢れそう」

「大丈夫大丈夫。泡が上がってきたら火から離してっと」

コツヘルを火から遠ざける。みるみるうちに下がっていく泡。下がりきつたのを確認し、また火に近づける。

しばらくすると、また同じように泡がモコモコしてきたので、同じように火から離す。

「なんで何回も沸騰させてんの？」

「こうすると粉が下に行つて飲みやすくなるんだつて。あと、口当たりがなめらかになるみたい」

「ふーん……こういう淹れ方もあるんだなコーヒーつて」

「いっぱいあるよー サイフォンとか、パーコレーターとか、ネルとか」

「なに言つてるか全然わからん……」

「知らない人にとってはそんなもんだらうねー パーコレーターなんか一度にたくさん淹れられるし、粉入れて焚き火にくべるだけでいいから、キャンプで使う人も多いみたいだよ」

「へえ……今度調べてみるか」

「リンももしかして気になる？」

「うん。ひと通りご飯とか作れるようになったし、そろそろキャンプでべつのことしてみようかなつて。また今度教えてよ」

「うん！ あ、もういいかな」

カップにできあがつたコーヒーを注いでいく。いつものと違って透明感のないドロドロしたコーヒー。砂糖とコーヒーの混じった香りが鼻をくすぐる。

「ありがとう、いただき——」

「あつ、リン！ ストツ」

プつと言おうとしたところでリンが嘔き出した。それはもう見事に吹き出した。

しまった。遅かった。

「な、なんだこれ!?!」

目を白黒させて驚くリン。それもそうだろう。なにせ粉を直接飲んだに等しいからだ。

「ごめんねリン。ターキツシユはカップに注いだけばかりだと粉っぽくておいしくないんだ。先に言っとくべきだったね」

持っていたポケットティッシュを手渡しながら謝る。

「そ、そうなんだ」

「だから、トルコの人たちは粉が沈むまでお話しながら待つんだって」

「へえ……」

「ま、今は景色でも見よつか」

「だな……」

黙って湖のような海に浮かぶ船を眺める。

「思ったけど船沖に浮かんでるよね」

ふと思った疑問を口にする。

「うん」

「あれってどうやって乗るんだろ」

「さあ、泳ぐじゃないの？」

「めっちゃ寒そう……」

この時期に乗ろうとしたら、死を覚悟しないといけなさそうだ。まあ、本当はボートで乗るんだろうけど。

「もういいかな？」

くだらない話をしているうちに時間がたった。もう粉も沈んでいることだろう。

「うん、いいと思う」

「じゃ、いただきます……」

リンがコーヒーに口をつける。すると頬にふつと色がさした。

「なんだこれ、不思議な味……」

「でしょ？　じゃボクもつと」

コーヒーをすすする。水っぽさを感じないクリームのようなドロドロした喉ごし。砂糖とコーヒー豆と一緒に煮たことよって生み出される炭のような独特の風味。

「……うまい」

「うんうん」

ひと口、またひと口とすすっていくボクたち。もともと少なめに淹れているだけあつて、あつという間に飲み切ってしまった。

「これ、残ったやつは飲めないんだよね？」

「うん、トルコだと残った粉をソーサーにひっくり返してコーヒー占いかするらしいけど」

「あ、それ映画で聞いたことあるやつだ。ふーん、コーヒー占いてそうやるんだ」

主人公の父親が意外と鬼畜だったり、ラスボスが無理やりお辞儀をさせようとしてくる魔法学校の話かな。

「あれって何作目だっけ？」

「たしか……あれ、なんだっけ？ 主人公がいきなり大きくなってびっくりしたやつ」

「えつと……3作目じゃなかったっけ？ 時間巻き戻したりめっちゃ怖い幽霊出てくるやつ」

「あ、それだ。たしかにあれめっちゃ怖かったよな」

「ボク初めてあれ見たとき夢に出てきたよ。怖すぎでしょあれ」

「めっちゃわかるわ」

「なでしこ」か今でもダメそうだな。今度試しに一緒に見てみようかな。いや、やめと

こ。どうせ自爆するだろうし。

ピコン！ ボクとリンのスマホが同時に鳴る。

「あ、恵那からだ。伊豆入ったんだ」

「やっぱ寝てやがったな、なでしこのやつ」

恵那から送られてきたラインには、伊豆に入ったというメッセージと、爆睡するまでしこ（アプリで落書きされまくっている）が添付されていた。

「ボクたちもそろそろ行こっか」

「だな。休んでばっかもいられないし」

立ち上がる。今から出発すれば、ちょうどいい時間に着けるだろう。

「さーて、あと60キロ。走るぞー！」

「おー」

二人で同時に天に拳を突き立てる。

伊豆、御浜岬。風に揺られて松ぼっくりがコロコロと砂浜を転がっていった。

23—2

「じー……」

穴の中を覗き込む。

オレンジとブルーのグラデーションが映えるサイの角みたいなガラスの彫刻。その真ん中にポツカリとくり抜かれた穴。

そんな穴を覗き込むと、ちょうど円の先の沖に同じように穴が空いた岩が海面から飛び出していた。

「だから穴空いてるんだ……」

ここは大田子海岸。御浜岬でささやかなコーヒーブレイクをしたのち、ボクたちは下田へ向けての旅路をのんびりと進んでいた。

「なに見てんの？」

左を向くと、さつきトイレに行くと言っていたリンが横に立っていた。

「リンも見てみなよ。おもしろいよ」

「ふーん……」

場所を交代してリンが彫刻の穴を覗き込む。

「なんか犬みたいだな。あの岩」

「え？ どっちかっていうと横向いた猫じゃない？」

「そうかな……」

考え込むように穴の先を覗き続けるリン。見ているのに集中しているせいで全然こつちに意識が向いてないみたいだ。

そんなリンにちよつとだけいたずら心が芽生える。

バレないようにそつと指を頬にくるのように近づける。あとはリンが振り向けば風で冷え切った指が頬に突き刺さる寸法だ。

「リン、そろそろ行かない？」

笑うのを我慢しながら言う。

「あ、そうだった。行こつ——つめつ!？」

小さい悲鳴を上げながらリンがのけぞる。ふひひ、大成功。

「子供かよ……」

呆れるリン。自分でもそう思う。でも楽しいからいいのだ。

「ふひひ、じゃそろそろ行こっか」

「じー……」

さつさと出発しようとするボク。そしてそんなボクを無言でじっと見つめるリン。光のない瞳がボクを射抜く。

「ど、どうしたのリン？」

ちよつと嫌な予感がしてたずねる。にゅつとリンの両手がボクの顔に伸びてきて……

「うひゃあ!？」

冷え切った両手がボクの頬をむにゅつと挟み込む。なんだこれ!? つ、冷た!

「双葉のほっぺめっちゃ冷たいな」

「つ、つめたいからやへてー!!」

ボクの謝罪など意にも介さずむにゅむにゅと頬をもむリン。忘れてた、リンはいたずらすると仕返ししてくるのだ。

「……やわい」

感心したように揉みつつけるリン。心なしか目がキラキラしているような気がしな

くもない。

「も、もうゆるひてよー!」

「やだ」

これがちよつと前に流行つた倍返しつてやつなのか!

このあとリンが満足するまでの間、揉まれ続けるボクなのであった。

うん、やっぱ慣れないことはするもんじゃないね。ボクはまた一つ賢くなった。

釣具店の前で右に曲がる。

県道16号線はずれ、浜に向かって山道を下っていく。山肌を掘って作つたらしい道は、昼間だというのに薄暗く、日光が入らないせいですっきりとしていた。

そんな道をしばらく走っていると、だんだんと木々が開けてきて、やがて民宿が立ち並ぶ宿場町のような場所にてた。

ガードレールの向こうに広がる砂浜と海を眺めながら左折。目的の場所に向かってトコトコと進んでいく。

『あれじゃない?』

前方、崖下に沿うように小さな駐車スペースが広がっていた。

ビーノがウインカーを焚いて駐車場の手前に停車。ボクも同じようにシフトダウンしながら停車。

「ここが竜宮窟か」

リンがつぶやく。出発する前に話し合って行こうと決めていた場所だ。見たところあまり大きくないしすぐに見終わるだろう。

「洞窟の天井が吹き抜けになってるんだっけ？」

「みたい。まだ時間大丈夫だし寄ってみようよ」

「だね」

そう思つてエンジンを切ろうとしたそのとき、ある看板が目に入った。というか入れざるをえなかった。

「駐車料金500円……」

赤字で大きく書かれた文字。

静まり返るボクたち。ビーノとビーちゃんがまだー？　と言いたげにトコトコとエンジン鳴らす。

500円……500円かあ……

せつかく来たのだから寄っていききたいという気持ちと、500円を払いたくないというしみつちい気持ちかせめぎ合う。

500円vs思い出。稀に見るしようもない戦いの火蓋が切られようとしていた。

「……リン、どうするっ？」

恐る恐るたずねる。

「む……」

無言。ヘルメットのバイザーの中で、いったいどんな思いを抱いているのだろうか、ボクには伺い知ることがきでない。

なぜならそれはリンの心の戦いだからだ。

どうするリン？ ボクはついてくよ。

……

……

……

「あっ」

すいーつと、ビーノが走り出す。

それはもう滑らかな走り出しだった。たぶん教習所なら文句なしの百点満点。

『双葉、下田まであと7キロだってさー』

まるで、ちよつと地図を見ようと止まっただけですよと言わんばかりにリンは走って

いく。

……まあ、うん、だよねー

「りゅ、竜宮窟……どうする?」

『……っ、次来たとき』

ごめんなさい、500円はボクたちにはちよつと高いです。

こうして、いそいそと逃げていくボクたち……もといクソザコ二人なのであった。

「二ついたあー」

目の前に広がる南伊豆の海を眺めながら、二人で盛大に身体を伸ばす。

身延から180キロ。山を越え、森を抜け、ボクたちは集合場所である下田のまどが

浜海遊公園へと足を踏み下ろした。

「双葉、今何時?」

「11時。ちょうどいい時間」

道が空いてたからなんとか遅刻せずに着くことができたみたいだ。

「あいつらもう来てるのかな?」

二人で公園の駐車場を見回す。

先生は火熾しお姉さんこと妹の涼子さんから借りたオレンジのミニバンで来ると言つてたけど、それらしい車は見当たらない。

「いない……」

「車だからもう来ててもおかしくないんだけどな」

なんならボクたちが見つけなくても向こうが見つけて声をかけにくるだろう。

「ちよつとラインしてみるか」

リンがスマホをポチポチいじる。少しして着信が入った。

リン：下田ついた

双葉：リンどこー？

リン：お前の目の前だよ

恵那：おー、時間ぴったり

恵那：ごめんねー 今河津のほうですごい渋滞にハマっちゃつて、ちよつと遅れる

と思う

あおい：桜ごつつうきれいやでー

あおいのメッセージに添付された写真には満開の桜並木が映っていた。この時期に咲くなんて珍しいなあ。だから混んでるのか。

あかり：リンちゃんとおねーちゃんの分も桜まんじゅう買つとるから、あとでたべよ

うなー!

双葉：ありがとー!

千明：とまあそんな感じだから、わりいけどもう少し時間かかりそうだね

リン：わかった。じゃあ来るまで双葉とその辺ブラブラしてくる

千明：了解つと。んじやついたら連絡するぜ

リン：うい

双葉：はい！　　そういえばなでしこは？　　まだ寝ちやつてる？

なでしこ：わたしはこのとおりピンピンだよー！　　あ、その辺足湯あるらしいから、温泉の前にちよいと疲れを癒していくつてのも乙でっせー!

なでしこ：……………

なでしこ：……………だよー!

「千明だね」

「千明だね」

スマホをしまう。なにかあったのかと思っただけど、みんな元気そうでよかった。

「とりあえず、足湯でも浸かっとくか」

駐車をあとにし海辺の公園を歩いていく。ボクもリンもめちやくちや早足だったのはたぶん気のせいじゃないと思う。

冷え切った足の指先をそつと湯面に差し込む。

親指がお湯に入った瞬間、まるで足がお湯に溶けていくかのような気持ちよさに満たされた。

「ふああ〜」

両足をお湯に浸して身体の力を抜く。これやばい。めっちゃ気持ちいい……

「これやばすぎい……」

隣に座るリンの顔は、まるで煮込みすぎたお雑煮の餅みたいにゆるゆるになっていた。

「ふああ〜」

「溶けてやがる……」

ボクもだった。

「このまま全身浸かりてえ……」

「みんなと合流するまでの辛抱だよお」

「わかってるう、わかってるけどさあ」

まるで子供が駄々をこねるみたいに身体を左右に揺らすリン。足湯って気持ちいい

けど、結局普通にお風呂に入りたくなっちゃうのがな。

どうせあとで入るんだし、それまで我慢我慢。

「ふう……」

熱いお湯に足を浸しながら、潮風に揺れる入り江をぼんやりと眺める。

ポツンと浮かんだ小島。岸壁に停泊している白い大きな船、ごついしたぶん海上保安庁の船だろう。

岸壁に打ち付けられる波の音に耳を澄ます。

「平和じゃのう……」

「でたなおばあちゃん」

千明たちには悪いけど、渋滞にはまってくれてよかったかもしれない。

スムーズに合流していたらこうしてゆっくり足湯に浸かることもできなかっただろう。

「こうして見ると、けっこういろいろあるな。あ、あの島とか行けるのかな」

まったくムードのボクとは対照的に、リンは下田の景色に興味津々の様子。

「ふうん、犬走島っていうのか……ちよつとその辺散歩してくるよ。双葉も来る？」

「ううん、ここにいます」

一回休みモードに入っちゃうとなかなか走る気にならない。バイク乗りあるあるだ。

「わかった。じゃあちよつと行つてくる。先生たち来たたら連絡して」

「はい」

支度をすませてすたすと去つていくリンの後ろ姿を眺めながら港の空気を満喫する。

前来た時もここには来たはずだけど、足湯があるなんて知らなかった。

ひたすら前へ前へと進んでいくのは楽しいけど、たまにはこうして足を止めてのんびりするの悪くない。

走つてばかりじゃ見えないものもあるってことなんだろうなあ。

やばい、あつたかすぎでちよつと眠くなってきた。

「どうせまだ時間かかるだろうし、ちよつと寝ちやおつと……」

波の音に耳を澄ませ、目を閉じる。脳裏にここまでの景色を思い浮かべながら、ボクの意識はゆらゆらと沈んでいくのであった。

「——ちゃん、——ちゃん！」

なんか聞こえる……なんだろう？ まあいいや、眠いしもうちよつと寝てよう。

「えい」

「ぴやああ!」

うなじになにか生暖かいものがピトツと触れて思わず飛び跳ねる。浸かっていた足湯のお湯が飛び跳ねる。

「え!?! え!?! な、なに!?!」

「にしし! ひっかかった!」

突然のことに目を白黒させていると、後ろから聞き覚えのある幼い笑い声。振り返る。

「こんなところで寝とると風邪ひいてまうでー おねーちゃん」

「あかりちゃん?」

小さな両手をわしやわしやさせながら、あおいそっくりの顔がにと笑う。さつきうなじにあたったのはあかりの手だったんだ。

「おねーちゃん、さけび声おもしろいなー ぴやああつて!」

楽しそうに笑うあかり。やられたほうとしてはたまったもんじやない。これはちよつとお仕置きだな。

「やったなこのー」

手袋を脱いでキンキンに冷えている両手であかりのほっぺを挟み込む。

「うひゃー！ なんやこれー！」

さすがのあかりも参つたみたいで、猫が全身の毛を逆立たせるようにびくりと震える。

「つ、冷たすぎやろー!?!」

「ふはは、これが冬のバイク乗りの手なのだー どうだーまいったかー」

もちもちのほっぺをモニョモニョする。なんだこれ、柔らかすぎでしょ。

「あはは、かんにんしてー」

口ではそういつつも満更でもない様子。やばい、あかりかわいすぎる。このままお持ち帰りしたい。

「お、いたいた」

「さっそくやつとるなあ」

あかりとじゃれあっていると、あおいと千明もやってきた。駐車場のほうに目を向けると、オレンジのミニバンの側でリンたちもいた。どうやら寝ている間に到着したらしい。

「よっ、ロリ子」

「おはよう。お疲れ、渋滞抜け出せたんだね」

「ほんま大変やったわあ。いくら時間経っても全然進まへんし」

「あはは、おつかれ」

「なーなー！ あおいちゃん！ おねーちゃんの手、むっちや冷たいで！」

いつのまにかボクの手から抜け出していたあかりがボクの手を掴んであおいの手に触れさせる。

「うわっ、ほんまや。双葉ちゃんの手カチコチやん。なんかあつたいもん飲んだほうがええんとちゃう？」

心配そうにボクの顔を覗きこんでくるあおい。

バイクに乗っているとこういうのは当たり前なんだけど、乗ってない人からするとびつくりするらしい。

「てかようみたら手、カサカサやん！ ハンドクリームとか塗つたらんの？」

よくわからないけど、あおい的にはひどいらしい。口を開けてびっくりしている。

「ハンドクリーム？ 塗ってないけど」

乾燥しているとはいえ気にするほどのものじゃないと思うんだけど。いつも塗ってないし。

「あかんでもう！ ひび割れでもしたらどないすんねん。うち持つてきとるからちよつと待つとつてな」

オカンモードになったあおいがそんなことを言い出した。どうせすぐに出発するし、

いらなと思うんだけどなあ。

「ええ、べつにめんどくさ——」

「ちよつと、待つとつてな」

「おねがいます」

ギリリと光る眼光に気圧されてうなずく。そんなボクを見てしようがないといった感じで車に戻っていく。

「おねーちゃん、相変わらずへタレやなあ」

やめて、追い討ちやめて。

「イヌ子のロリ子に対する過保護っぷりは相変わらずとして。で、どうだったよ。そっちは？」

「こつちは楽しかったよ。いろいろ見れたしね。写真も撮ったしあとで見せ合いつこしよ」

「おう！ ま、今はとりあえず先生のところ戻ろうぜ」
「だね」

すつと足湯に浸かってたせいでふにやふにやになった足を持ってきたタオルで拭いてブーツに履き替え、先生たちのところに歩き出す。

「あ、おねーちゃん桜まんじゅうこうとるからあとであげるで——」

「ははー！　ありがたきしあわせー」

「ほな、300万円」

「ふふ、じゃあローンでお願い」

こうして、いよいよボクたちの伊豆キャンが本格的にその幕を上げるのであった。

「ちなみにトイチなー」

「レートが鬼畜すぎる……」

「ふう、おいしかったー」

「すっごいおいしかったねー！」

　なでしここと二人でお腹をさすりながらさつき食べた金目鯛バーガーのおいしさを讃えあう。

「もう、二人ともさつきからそればかりじゃん」

　そんなボクたちを恵那が呆れたように笑う。

「だっっておいしかったんだもん。ねー双葉ちゃん」

「ねー」

無事下田で合流を果たしたボクたちは、近くの道の駅でちよつと豪華なランチをとつた。サクサクのフライとソースの絡みが絶妙な金目鯛バーガー……フライドポテトも揚げたてで最高だったなあ。

「でももーちよつと食べたかったかも」

「あ、わかるー ちよつと物足りないよねえ」

「いや食い過ぎだろ。どんだけ食べる気だよ」

「リンちゃん！ おかわりは別腹、なんだよー！」

「そうだよリン！」

で、結局食べすぎてちよつとお腹が痛くなるまでがセット。まあなでしこはそれすらなさそうだけど。

「ふっ、はいはい」

「二人ともほんと食いしん坊さんだな」

リンと恵那がしようがないなと言いたげに微笑む。

「先生、これからどうないします？」

駐車を歩きながら、あおいがこれから予定をたずねる。

「そうですね……今のところ順調そのものですし、予定通りスーパーに買い出しに行つ

て、それから爪木崎で野営、ですかね」

野営？ キャンプじゃないのかな？ いや、似たようなものか。

「温泉！ 温泉行きはりますよね!？」

「ええ！ もちろん」

先生の言葉にあおいが嬉しそうに笑う。あおいってほんと温泉好きだよな。まあボクも好きだけどさ。

「リンたちがビヤクシン樹林に御浜岬、大田子海岸。んで、あたしらが城山。で、このあと爪木崎と……っていうことは今日でジオスポット5ヶ所回るってことか。思ってたよりペース早いな」

「双葉ちゃんたちだけで3ヶ所やる？ やっぱバイクの機動力えげつないわ」

「まあこっちは道も空いてたしさ」

その気になれば3日くらいで伊豆のジオスポットの大半を回ることだってできるだろう。ほぼ確実にデスマーチになるだろうからやらないけど。

「ねえあおいちゃん、明日ってどこ行くんだっけ？」

「えつとな、たしか稲取にある細野高原やる？ トンボロは……そうや、明後日やったな」

恵那の質問にあおいが的確に答えていく。

「なあなあ、あおいちゃん。トンボロってなんなん？」

「豚トロの仲間やでー」

「へえ、知らんかったわー おおきになー」

「ええでー」

息を吐くように平然をホラを吹くあおい。トンボロは自然現象で、決して豚トロの仲間などではない。

「イヌ子って妹にも容赦ないんだな……」

「あかりちゃん、強く生きるんだよ……」

そんな壮絶な姉妹の生き方に戦慄するまでしこと千明。

でもボクは知っている。あかりがトンボロのことを知っていることを。

なぜなら、ボクがあかりの自転車を直しにいったときに教えたからだ。つまり、ホラを吹いてるのはあおいだけではない。

「「ふふふ……」」

子供の落書きみたいなふざけた目で見つめ合う。もとい睨み合うホラ吹き姉妹。

「な、なんて恐ろしい姉妹なんだ……」

その壮絶な生き様に、畏敬の念を禁じえないボクなのであった。

「なにしてんだお前ら……」

ボクもわからない。

『リンちゃん、おい！』

スピーカーの向こうで、なでしこの元気いっぱいの声がこだます。前を走るミニバンのリアウインド越しに、なでしこが手を振るのが見えた。

『なに？ なでしこ』

『えへへ、呼んでみただけ』

『なんだそりゃ』

ボクの斜め後ろを走るリンが呆れたように言う。セリフこそあれだけど、ミラーに映るリンの顔は楽しそうに綻んでいた。

『双葉ちゃん！』

あ、今度はボクの番だ。

「なにー？」

『呼んでみただけー！』

「はーい」

下田をあとにしたボクたちは買い出しを終え、今は県道116号線を下り今日のキャンプ地である爪木崎へと向かっていた。

右へ左へとうねる道を走っていく。

『なでしこー あんま話しかけてよそ見させんなよー』

ヘッドセットから聞こえる車内の音には、千明の声も混じっていた。

『えへへ、原付の旅みたいでテンション上がっちゃつてさ』

普段、ボクとリンはスマホを使うことによつてバイクに乗りながらも会話をしている。

スマホにヘッドセットを繋いでラインで会話しているだけなので、車の中にいるなでしこたちと会話をするのは、さほど難しいことじゃなかった。

『へえ、二人ともいつもこないして話とつたんか』

あおいが感心したように言う。

『なんか楽しそうだよねー』

スピーカー越しにみんなの声が聞こえてくるのはなんとというか不思議な感じだ。

『あ、あおいちゃんお菓子とつてー!』

『あんたさつき食うたばっかりやろ』

『あ! わたしも食べたい食べたい!』

『お前らこのあとキャンプ飯あるの忘れんなよー』

『わたしもちよつと食べちゃおっかな。先生も何か食べますか?』

『あ、でしたら——』

電話がつかつたままだから、車内の様子が丸聞こえだ。ワイワイと楽しそうなのはいいんだけど——

『あー! なでしこちゃんUFO! UFO飛んどる!』

『ええ!? どこ!? どこあかりちゃん!』

『いや、どう考えたってホラに決まってるだろ……』

『あはは』

……

……

……

『うるせえ……』

「あはは、ちよつとね」

リンも同じ気持ちみたいだ。まあずつと耳元で騒がれたら誰だつてそう思う。

「でも、たまにはいいんじゃない? こういうのもさ」

たしかにやかましい。けど、鬱陶しくはない。

『……それもそっか』

そんなやりとりをしながらくねくねと折り曲がった道を走っていく。この先を行けば爪木崎だ。

『お二人とも、聞こえますか？ あと少しですよ』
いつたいどんなキャンプになるのかな？

青い空と青い海。岬の向こうにポツンとたたずむ灯台。そんなまるで絵画のような世界を歩いていく。

右を見ればさつき走ってきた岬の海岸線と、伊豆半島が太陽に照らされて光り輝いていた。

爪木崎。ボクは、今日のキャンプするはずだった公園を一人歩いていた。
「まさかキャンプできないなんて……」

和気藹々と爪木崎にたどり着いたボクたちを待ち構えていたのは、キャンプはできないという観光協会の人の無慈悲なひと言だった。

なんでもここら辺一帯は何年か前に地主の意向でキャンプが禁止になったらしい。ここで野営する気まんまんだったボクたちにとってこれは完全に寝耳に水だった。

とはいえ来たからには観光しようということ、いろいろ見て回っている次第だった。

「でもまあ、最悪野宿すればいいだけだしなあ」

出鼻をくじかれたボクたちだけけど、実をいうとそこまでショックを受けてなかった。

ぶつちやけこんなのよくあることなのだ。みんなは最悪車中泊って怖がっていたけど、底辺を経験していると何事にも動じなくなるというのは本当らしい。

「なんだろうあれ」

なんとなく一人で歩きたくなくて、みんなと離れて岬の道を歩いていると、ハートをかたどった金属のアーチが目に入った。

近づいて足を止める。

恋する灯台といういかにもな立て札が置かれたアーチ。よく見ると灯台がハートの輪の中に入るように作られているみたいだった。

千葉で沖ノ島に寄ったときも思ったけど、とりあえずなんでもかんでも恋愛に絡めようとするのはどうしてなんだろうか。

「双葉ちゃん！　おーい！」

ハートのアーチと睨み合っていると、ボクを呼ぶ声があった。振り向く。

俵磯に行っていたはずのなでしこが手をブンブン振りながらボクに駆け寄ってきていた。

「俵磯どうだった？」

「えつとね！ めっちゃ鉛筆だったよ！」

たくさんさんの六角形が集まってできた岩場とは聞いている。見ようによつては鉛筆に見えなくもないんだろう。

「へえ、あとで行ってみよっかな」

「うん！ 一緒に行こ！ そういえば双葉ちゃんさつきから何みてるの？」

無言でハートのアーチを指差す。

「あ、ハートだ」

ハート型のアーチに気がついたなでしこが不思議そうに首をかしげる。

「なんでハート？」

「わからない。でもかわいいからいいんじゃない？」

「そっか……そっか？」

観光地にある謎のオブジェクトにいちいち意味を求めてはいけない。置いた人もノリで置いただけだろうし。

「そういえばリンとあかりちゃんは？」

千明たちが灯台のほうに行っているのは知っている。

なんせ今も視界のはじめに騒いでる姿が映っているからだ。

『あーイヌ子もうちよつと口開いて灯台を食べてるみたいになー』

『アキー！ 地面むつちや冷たいんやけどー！』

さつき集合写真撮ったばかりなのに、また変な写真撮ろうとしているみたいだ。あとで見せてもらおう。

「今来てると思うよ。双葉ちゃんが気になって先に来ちゃったんだ。もう来てるんじゃないかな？」

あたりを見回すなでしこ。ボクも真似して見回す。いた。崖ぞいの小道からリンとあかりがこつちに近づいてきていた。

「あ、いた。おーい！ リンちゃん！ あかりちゃん！ こつちで写真撮ろー！」
そんな感じで集まって……

「ほな撮るでー」

「なんでわたしが真ん中……てか近えよ」

「えへへ、3人で写真撮るの久しぶりだね」

「ね」

「……ふっ、そうだったな」

ボクとなでしこで、なんだかんだいって満更でもなさそうなりんを挟み込んで写真を撮ったり……

「ああ、ほんとにどうしましょ」

「大丈夫ですよ先生！ どうしようもなかつたら野宿すればいいだけですから！ むしろしましょ！ 気づくと顔に虫がついたり雨が降つてたり、不良の溜まり場になつてたりすることがあるけど慣れれば全然大丈夫ですから！」

「大丈夫な要素が全くねえ……」

「なんでロリ子はノリノリなんだよ……」

「忘れとったけどこの子こっちが本業やったわ……」

ノリノリで野宿を進めたり（当然却下された）して爪木崎での時間は過ぎていった。

そして――

ぶるぶると震えるシリンドーに手をかざす。うん、だいぶあつたまつてきた。

ミニバンの運転席に座る先生に合図すると、先生が微笑んでうなずいた。

「ではそろそろ出発しましょうか。お二人とも大丈夫ですか？」

そんな先生に二人でうなずく。目指す先は稲取にある細野高原。

キャンプ場所が使えないっていうトラブルはあったけど、山中湖で千明たちを助けてくれた飯田さんのおかげでそれもなんとかなった。

ちよつと予定は変わったけど、それもまた旅の楽しみの一つだ。

「リンちゃん双葉ちゃん！ 走りながら原付の旅ごっこしよ！」

「お、楽しそうだねー」

「なんだなんだ？ あたしも混ぜろー！」

「なでしこちゃんあたしもあたしも！」

ワイワイ騒ぎだす車組。あつちはあつちで楽しそうでいいな。

「あんたら運転の邪魔になるからやめいや。ごめんなー2人とも」

あおいの太眉が、もうしわけなきそうに垂れる。楽しいだろうけど、たしかにずっと話されるとちよつと困るかもしれない。

「少しくらいなら平気だよ。だよね双葉」

「うん！」

ボクたちが言うのと、あおいはにっこりと笑ってくれた。そろそろ出発の時間だ。

「先生、ゆっくりしていると日が暮れちゃうし行きましよう?」

「ふふ、ですね」

窓が閉まり、ミニバンが走り出す。リアウインドから見えるみんなの背中と白いナンバーを眺めながら、ビーちゃんを走らせていく。

少しだけ傾きはじめて太陽の下、潮風に満ちた思い出を振り返りながら、爪木崎をあとにする。

鳴り響く3台のエンジンの音。次はどんなものが待ってるのかな?

24話 モンベル クルピカ55 3,080円(税込)
24—1

爪木崎をたち東伊豆道路をひた走ること約20キロ。

小学校と住宅地に挟まれた道路の隅にある、細野高原と小さく表記された標識のある小道にボクたちは入っていった。

『ここから先はかなり急な登り坂なので気をつけてくださいね』

「わかりましたー!!」

『こうして我々は、前人未踏の地を目指して、伊豆の奥地へと足を進めるのであった……』

千明がわけのわからないことを言う。当然今からいく場所は前人未踏でもなんでもない。

『変なナレーション付け足すのやめいや』

『この道の先に、いったいなにが待ち構えているのでしょうか……』
『しようかー!』

「ふふっ……」

そんな様子の子の車組に笑いつつみんなの家々に挟まれた登り坂を走っていく。

坂を登っていくと、足元のエンジンの勢いが弱まってきた。3速じゃそろそろ限界らしい。

スロットルを離しクラッチを握り、踵でシフトペダルを蹴る。ガツコンとギアが2速に変わる。

クラッチを戻しながらアクセルを開くと、さつきよりも元気な音が足元から聞こえてきた。

F5Bエンジンが、ボクの体重と84キロの車体を進ませるために猛烈な勢いで回っていく。

けど、どれだけスロットルを回しても、スピードメーターは40キロを行ったりきたり。実際には30キロ前後しかでてないだろう。

『おねーちゃんのバイク煙すごいことになつとるで!』

リアウインド越しにボクを見ていたあかりが、声を荒げて聞いてきた。

振り向いてたしかめてみると、マフラーからまるで飛行機雲のような白煙が何メートル

ルも伸びていた。

『あ、ほんとだ。大丈夫？』

「あ、気にしないで。もともとこういうバイクだから」

心配そうに聞いてくる恵那に大丈夫だと伝える。

『ほんと、いつ見ても煙の量すごいよな』

「2ストだからねー」

むしろこれがいい。

やかましいエンジンサウンド、立ち込める白煙、オイルの焦げた甘い匂い。電子制御マシマシの今のバイクにはない、魂に訴えかけてくるような魅力がたまらない。

って言うってもボク新しいバイク乗ったの教習のときだけだけど。いつかビーノ試して乗らせてもらおうかな。

「そういえば、昔はビーノも2ストだったみたいだよ」

『へえ、そうなんだ』

「改造なしで80キロでるんだってさ」

『おっかなすぎる……』

90年代の原付は下手なバイクよりも速いのがたくさんあったらしい。

かくいうビーちゃんも、もとはFSIっていうスポーツバイクのエンジンを流用して

作られたバイクだから、カスタム次第では80キロくらい出るポテンシャルはあるみたいだ。

なんでも500ccのくせに9000回転、90キロはでたそう。昔の人たちは原付になにを求めてたんだらうか。

『そーいや恵那、この前原付買いたいか言ってたけどなに買うとか決めたの?』

バイクの話で思い出したらしいリンが、恵那にそんなことをたずねた。ボクは出発の少し前に図書室で恵那と話したことを思い出した。

『うーん、それがちよつと悩んでるんだよねえ。リンみたいにスクーターにしてもいいんだけど、双葉の話聞いているとマニュアルでもいいかなーって』

マニュアルだとやっぱリカブあたりだらうか。いや、Jazzとかマグナかもしれない。

まさかNS-1とかRZ50ってことは……なわけないか。誰が好き好んでちよつと改造するだけで100キロでるような原付に乗るんだらう。

『えっ!! 恵那ちゃん免許取ったの!?!』

『あ、そういえばみんなには言っていなかったっけ。じゃじゃーん取っちゃいましたー』

『うおー! すげえ!!』

『恵那ちゃんかっこいい!』

『ふふ、ただの原付だろ』

楽しそうに騒ぐ車組に、リンも楽しそうに笑う。

「リン。いつかき、みんなでツーリングとか行けたらいいね」

綾乃となでしこ、ボクとリン、そして恵那。千明とあおいは鳥羽先生と車かな？ もしかしたらあかりもいるかもしれない。

みんなで行ったらきつと楽しいに違いない。

『……うん。行きたいね』

噛み締めるようにリンがつぶやく。でも、それはまだ先のこと。でも、きつとそう遠くないうちに実現することだろう。

水分をたっぷりと含んだ冷たい空気がボクの顔にまとわりつく。

見上げれば首が痛くなるだろう杉の木々の中、鼻から息を吸い込むと、ツンとした森の冷気が身体の中を通り抜けていった。

「深い森だなあ……」

細野高原へと続く一本道を走っていく。

登り始めたばかりのころはたくさんの方々が立ち並んでいた登り坂は、いつの間にか

杉の木が立ち並ぶ鬱蒼とした森の中の道へと様変わりしていた。

古ぼけてひび割れたアスファルトの上を、泥のついたタイヤがゴロゴロと転がり、サスペンションがキシキシと音を立てる。

エンジンの音と風の音、枝の音。そしてボクの息遣い。しずかで落ち着いた世界。
「あ、ソーラーパネルだ」

木々の合間からのぞくたくさんのパネルが、太陽を反射し銀色の光を反射する。

『高ボツチでも似たようなのあったよな』

「あったねたしか」

思い出話をしながら深い森の中を進んでいく。

バイクといったら峠や海辺が定番だけど、こういう山道を走るのも悪くない。

ビーちゃんなら少しくらいの不整地なら走れるし、今度林道でも走りに行ってみようかな。

『二人とも、そろそろみたいだよ』

『ういー』

「はーい」

恵那の言葉に返事をしつつ、ツリーハウスのコテージが特徴的なキャンプ場を右折。

右手に広がる車が何十台も停まれそうな大きな駐車場を通り過ぎ走っていく。

たぶん、そろそろだろうな。そう思ったそのときだった。

視界が晴れ、太陽の日差しが目を覆い尽くす。

視界の左右を遮っていた杉のトンネル。そのトンネルを抜けた先に待っていたのはなにもない丘だった。

枯草の丘の向こうに広がるこんもりとした形の山々。

枯れ草色の絨毯を山の上から覆いかぶせたかのようなならかな山肌が山頂のほうまで続き、白い風力発電機がまるでまち針のように稜線に何本も突き刺さっていた。

「す……」

目の前に広がる光景に、息をするのも忘れて見入る。なでしこの楽しげに驚く声が耳元で響いていた。

『これ、頂上までどうするんだ』

と、リンがひと言。言われてみればたしかに、風力発電機が設置された山頂までは目視でもかなりの距離がある。歩いていくのかな？

そんなことを考えていると、車の窓が空いてなでしが顔を出してボクたちを見てきた。

「二人ともー、先生が車で上まで行けるってー」

どうやら上までバイクで行けるみたいだ。なんだ、てつきり歩いていくのかと思っ

た。

「狭くて急らしいから気をつけてねー」

「はい」

たぶん、ここまで来るのに通ってきた道よりも何倍も険しいはずだ。

青いタンクをポンポンと叩く。ビーちゃんにはちよつと頑張ってもらおうとしよう。

そう、意気込んでいたボクなのだったけど……

「一般車両、二輪車の乗り入れは遠慮ください……」

道の入り口を塞ぐようにしてかけられたチェーンにぶら下がっている案内を読む。

「マジか……」

横を見ると、ボクの隣で同じように案内を読んでいたリンがあんぐりと口を開けていた。

細野高原、三筋山の頂点へと続く細い道。山頂のそばまで乗り物で行こうとしていたボクたちだったけど、どうやら聞いてた話とちよつと違ってみたいだ。

「なんか行けないみたいです。先生」

小走りで入り口の手前で待機している車組のところに行き、案内の内容を伝える。

「お、おかしいですね。たしか山頂まで車で行けると聞いてたんですが……」

先生にとつても予想外のことだったらしい。目を白黒させてあたふたしている。

「あっ!? 先生! ここちよつと前から車の乗り入れ禁止になつとるみたいですよ!」

後部座席でスマホで調べていたらしいあおいがげっそりした様子で言った。

「えっ!? ほ、本当ですか犬山さん」

「なんやひと月くらい前から景観保護の観点から一般車進入禁止に変わったみたいで」

「ま、またですか……」

あおいの言葉にがつくりとハンドルに額を打ちつける鳥羽先生。

「しよ、しょうがないつすよ先生。こういうこともありますつて」

「そ、そうですよ先生。わたしたち全然気にしてないんで」

「うう……ごめんなさいみなさん」

「元氣出して先生! 車で行けないならみんな歩いて登ればいいんですよ!」

「ですが、かなり距離が……」

はげますなでしこたちと、この先の道のりを想像して心配する先生。実際頂上まで歩いていくとどれくらいかかるんだろう。

「あ、先生。この道2キロくらい行くともう一個駐車場あるみたいですよ」

「どうしようかみんなで悩んでいたところ、恵那が嬉しい知らせを持ってきてくれた。マジか！ それならちよつと山登りするだけで行けるじゃねえか。でかしたぞ恵那！」

「せつかく来たんだし、ここで帰ったらもつたいないよ！ ねえみんな！」

「せやな！ これからキャンプでご馳走食うわけやし、ちよつとくらい身体動したほうがええもんな！」

「思いもよらない朗報に、ボクをふくめてみんなが喜びに湧き立つ。」

「うんうん。身体動かしたほうが温泉も気持ちいだろうしねえ」

「そーや！ なら上までみんなで競争や！」

「明日もあるんだからあんまはしやぎすぎるなよ」

「「「「はーい！」」」」

はしやぐみんなに、ボクの心も湧き立つてくる。こうして野クルの細野高原プチ登山が始まるのであった。

「だけど、ボクたちは知らなかった。これが地獄の始まりだということに……」

山頂へと続く道は長く、そして険しかった。言葉にするのならアップ、アップ、アップの連続。

斜度30はありそうな坂と、高原の冷たい風が、ボクたちの体力を容赦なく奪っていく。

はつきり言つてボクたちは山を舐めていた。そして、山はそんな存在を許しはしない。

「千明いいい!!」

まず初めに千明が力尽き……

「アキイイイ!?!」

次に千明が高原にその屍を晒し……

「アキちゃああん!!」

そしてまた一人、千明が――

「つて! 全部あたしじゃねえか!」

「と、かつて千明だった屍が叫んだ。それはまるであの世から千明が――」

「おい! 変なナレーション入れんな! こっちは、まじで、しんどいつてのに……」
膝をついて息も絶え絶えな千明。これで何回目だろう。千明がくたばるのは。

「ふひひ、ごめん」

千明には悪いけどついおもしろくなってからかってしまった。

「だ、大丈夫アキちゃん?」

「アキちゃん、またくたばつとるんか?」

「アキ、ほんま体力ないなあ」

マンボウ並みに紙耐久の千明に、あおいとあかりが呆れたように肩をすくめる。

「いや、お前らなんでそんなピンピンしてんだよ。こっちは死にそうだったのに」

「どう考えても調子に乗って開幕ダツシュしてたせいだろ」

「うぐっ……」

リンの容赦ないひと言が千明に突き刺さる。

たしかにきつい山道だけど、ちゃんとペースを守っているボクたちは千明ほど疲れていない。一番乗りだぜーとか言つてダッシュした千明の自業自得だ。

「くそう！ バイトで足腰鍛えられたと思つたんだがなあ」

「大丈夫？ お茶飲む？」

さすがにかわいそうになつてきたので持つてきたペットボトルのお茶を差し出す。

「す、すまん助かる」

差し出したお茶を飛びつくように受けとるとぐくぐくと飲みはじめる。よつぽど喉が乾いてたみたいだ。

あ、また全部飲まれた。

「アキちゃん！ 山頂まであと15分だつて！ ファイトだよー！」

なでしこが指差す方向には、山頂までの道をしめす看板と、頂上まで続く木組みの階段があつた。

ここまでけつこう歩いてきたけど、そろそろ頂上らしい。

「くそう！ やつてやんよー！ 野クル部長の意地を見せてやるー！」

叫びながら走つていく（微妙にフラフラしてる）千明を目で追いつつ眼下に広がる絶景に目を向ける。

西に傾きはじめて太陽は山の斜面を黄金色に染め、澄んだ空の下には伊豆の大地がくつきりと浮かび上がり、その先に広がるのは太平洋の大海原。

「でもほんと綺麗だよねー」

恵那が言う。

「ほんと、諦めて帰らないでよかったよね」

「うん。わたしもそう思う」

3人で口々に目の前の景色を讃える。ここに来るまでもいろいろな景色を見てきたけど、ここは格別だ。

「へえ、あんなところに島あるんだ」

恵那が指差すほうに目を向けると、水平線の向こうにいくつかの島陰が飛び出していた。

「遠くに見えるのは伊豆大島ですね。右の小さい島は利島だと思います」

「あれって房総半島行ったときに見た島と同じだよな双葉」

「みたいだね。それにしても風強いなあ」

こうしている間にもびゅうびゅうと吹き荒ぶ風が耳元を騒がしている。ニツトキャップを被り直し風で飛ばないようにする。

けどいつもなら聞こえるはずの雑踏の音や枝の音がなく、風の音しかないせいで目を

閉じればまるで空を飛んでいるかのようだ。

「ここは太平洋からつねに風が来るので、パラグライダーのスポットとしても人気だそうですね」

「へえ、楽しそうですね」

パラグライダーかあ。こんなところから飛んだら絶対楽しいんだろなあ。怖いだろうけど。

「ほんと、綺麗だなあ……」

「……だね」

もう何度目になるかわからない二文字をつぶやく。やっぱり、旅って最高だなあ。

「リン！ 双葉！」

恵那が階段をかけ上がり、ボクたちの前に躍り出る。

「来てよかったね！」

そしてにつこりと笑う。ボクたちは、互いに見つめ合ったあと、返事の代わりににつこりと笑った。

「せんせー！ アキちゃんがまたくたばったばつとるー」

「も、もう動けないはず……」

「お、大垣さん？ だ、大丈夫ですか!? 大垣さん!? 大垣さん!?!」

慌てて走り出す先生に思わず3人であははと笑う。

「リン、双葉、わたしたちも行こ？」

「じゃあ3人で競争しよ！」

「お、負けないぞー リンもほらー！」

「……ふっ、はいはい」

走り出す先生。そんな先生を追いかけてボクたちは山を駆けていく。

黄金色に染まる細野高原。遠くのほうで白い発電機がブンブンと元氣よく回っていた。

「撮りますよー」

パシャリ。細野高原から眺める伊豆の大地をバックにみんなで写真撮影。

ありがとうございますと、先生にみんなでお礼を言って、ボクは山頂に設置された木の展望台を登った。

「三筋山山頂、標高831メートル……」

展望台の看板に白いインクで書かれた標高は意外にも低かった。なんなら山中湖よりも低い。

「静かだなあ……」

さっきまで吹いていた風はいつのまにか吹き止み無音に包まれる。聞こえるのは自分の鼓動とみんなの話し声ばかり。

まるで宇宙にでもいるようなちよつと不思議な感じ。こういうところにいると、自分が普段どれだけたくさんさんの音に包まれているのかよくわかる。

「ふう、ほんとうに静かですねえ」

「あ、先生」

いつのまにか展望台に登ってきた先生が、髪をかきあげながら言った。

『リンちゃん、ここ空飛んでるみたいだねー!』

『はしやぎすぎて足滑らすな——』

『あうっ!』

『バカな女だぜ……大丈夫?』

『えへへ、ありがと〜』

展望台の少ししたの広場では、こけたなでしこをリンが手で引つ張り起こしていた。

舗装されているとはいえさつきまできつい山道を登ってきたとは思えないはしや

ぎつぷりだ。

「ふふふ、各務原さんはいつも元気いっぱいですね」

「ほんと、見てるこっちも元気になってきますよね」

笛吹公園でキャンプしたときもすごい健脚っぷりだったって聞かし、もし入った部活が野クルじゃなくて登山部だったら、今ごろ一年のエースだったかもしれない。

「先生、このあとどうしますか？」

「そうですね……少ししたらここをあとにして温泉に行こうと思います」

「やった温泉だー！」

温泉という二文字を聞くだけで、どうして心がこんなに踊るんだろうか。やっぱりそれだけ日本人の魂に刻まれているってことなんだろうか。

「おそらくあと40キロくらいは走ることになると思いますけど……大丈夫ですか？」

ボクたちが朝からずっと走っていることを心配してくれているんだろう。先生だつて疲れてるはずなのにね。

でもこの場において先生の心配はまったくの杞憂でしかない。

「あ、はい全然。いつものことなんで」

今日はまだ200キロくらいしか走ってない、バイク乗りにとってはこれからが本番といったところだ。

自分がどこに向かっているのかも、なんのために走っているのかもわかっていっているうちに、はまだまだ余裕。

400キロ超えたあたりから半分記憶喪失みたいになって、最終的にバイクと一体化してからが本番だ。

「そ、そうですか……す、すごいんですね……」

先生がなにか理解できないものを見るような目でボクを見る。楽しいのにな、走るので。

やっぱりボクをわかってくれるのは綾乃とリンだけだよ。

「双葉——！ 先生——！ こっちで一緒に景色見よ——！」

「は——い！ 行きましょ先生——！」

ボクたちを呼ぶ恵那に手を振り返し、先生の手を引っ張って走り出す。

西の空がかすかにオレンジに染まりはじめ、世界がだんだんとセピア色になっていく。

伊豆での1日が、もうじき終わろうとしていた。

右ハヤピン、アクセルオフ、クラッチ、シフトダウン。

身体のを抜いて、上半身をコーナーの内側に投げ出す。近づくアスファルト、路面スレスレのリーンイン。

アクセルオン。タイヤのトラクションを感じながらコーナーの出口へと頭を向け続ける。耳元でエンジンの音が喧しくがなりたてる。

ミラーをちらり。右斜め後ろからリーンアウトで追従するビーノ。これくらいなら楽勝つてところかな。

『なんやあれ、むっちゃ速いやん』

『あいつらつてあんなに運転うまかったんだな』

『かつこいいよ！ 二人とも』

いつの間にか大きく距離を離してしまっていた車組から聞こえてくる驚きの声にちよつと恥ずかしくなる。

けどこれも全て温泉のためなのだ。

「先生！ 温泉まであとどれくらいですか？」

細野高原をあとにしたボクたちは県道15号線、婆娑羅峠を進んでいた。

木々の立ち並ぶ峠道をフルスロットルで駆け抜けていく。目指す場所はキャンプ場、

そして温泉！

『あ、あと10キロくらいです』

『あとちよつとだな。早く行こ双葉』

「りよーかい！」

コーナーの終わりでアクセルを吹かしながらシフトアップ。

加速していく車体。昼間に比べるとずいぶん冷たくなった風が、身体にあたっては後ろに流れていく。

「うーん！ やっぱ峠って最高だね！」

『調子乗ってハングオンとかすんなよ』

「そういうリンもバンクさせすぎて車体擦ったりしないですよ！」

『そ、その私この車あんまり乗りなれてないんで、できればもう少しお手柔らかにしていただけると……』

山も峠もなんのその。オレンジ色に染まった空の下、エンジンの音を鳴り響かせ駆け抜けていく。

温泉は目と鼻の先だ。

「ふああ……」

全身を包み込む熱い湯に、思わず変な声が出てしまう。これはもはや極楽としか表現できないよ……

「これあかんわあ……ほんまにあかんわあ……」

「あかんよねえ……」

あおいとなでしこの溶け切った声がぼんやりとした頭に反響していく。周りを見れば、ほかのみんなもだいたい同じような顔をしていた。

湯気の間こうに広がる大海原と今まさに沈もうとしている真っ赤な夕陽を眺める。

「絶景ですねえ……」

「ですねえ……」

「つすねえ……」

先生と恵那と千明のお湯にふやけたような声。みんなけっこう疲れているらしい。

「いろいろあつたけど、なんだかんだ言っただけで楽しかったなあ」

「恵那ちゃん、まだキャンプご飯がまつてるよお」

「あ、そうだったつけえ？ 温泉がきもち良すぎてわすれてたあ」

「わかるう」

朝の3時からずっと走りっぱなしの身体にこの温泉は凶悪すぎる。

ちよつとでも気を抜くと温泉に溶けてしまいそうだ。まあでも、それもいいかなあ。

気持ちいいし。

「明日はゆつくりできるし、今日は夜更かしすらあ」

「アキい、そない頭こつくりさせて夜更かしなんてほんまにできんのお?」

「そういうイヌ子だつて目え半分つむつてんじやねえか……」

「あ、ほんまやあ」

「細野高原けつこうきつか……」

あれ?　なんで喋れないんだろう。あ、そつか。顔の半分が温泉に沈んでるからか。

まあいいや。このまま沈んじゃお……ぶくぶく。

「なんや視界がかたむいてきとるなあ……」

「このまま沈んじまおうぜえ……」

みんなでぶくぶく温泉に沈没していく。なんて極悪な極楽さだあ……

「せんせー!　みんなが温泉に溶けてもうたー」

「おふろあがりにびーるう……」

「つてせんせーも溶けとるー!」

ぶくぶくと沈没していく先生。

というかまだ運転しなきゃいけないしビールダメなような……まあいいや。

みんな温泉に溶けていく。あとはみんなでキャンプ場でご馳走を食べて、そしたら

終わりだ。

今夜のご飯はボクとまでしことあおいが担当。みんなに喜んでもらえるようがんばろう。

ボクはそんなことを考えながら、紫色の夕闇を眺め沈んでいくのであった。

ちなみにリンはとつくの昔に隅っこで温泉と一体化していた。

24—2

温泉沈没事件のあと、ボクたちは風呂上がりの一杯を満喫したのち、キャンプ場へと向かった。

途中、いつものノリで風呂上がりのビールを飲もうとした鳥羽先生を慌ててとり押さえたりといったハプニングを挟みつつ（死ぬほど焦った）ボクたちは無事にキャンプ場へと辿り着いた。

駿河湾に面したこの岬は、黄金崎の名のとおり、夕方になると夕陽に照らされてまるで黄金のように美しく輝くという。

残念なことにボクたちが来たときはもう夜になっちゃってたけど、それでもここがいキャンプ場だということは一目でわかった。紹介してくれた飯田さんに感謝だ。
なにはともあれ観光は終わり、これからはキャンプの時間だ。

「えい、えい」

地面に突き立てたペグをレンチで打つ。よし、このくらいかな。あとはフライシートのロープをペグに結びつけピンと張れば完成だ。

初めのうちはもたついていてテントの設営もすっかり慣れて、今では目を瞑ったつてできる。

「テントできたよー」

「早えなー、もうできたのかよ」

隣で感心したようにボクを見る千明。まだテントにポールを通してある途中みたいだ。

「ふっふっふ、ボクにかかればこのくらい造作もないことなのだよ」

「うわ、すげえドヤ顔」

ちなみにたんに家の庭で猛特訓したおかげなのは内緒。だってそっちのほうがかっこいいし。

「家でめっちゃ練習してたもんな」

リンがぼそり。

「なんで言っちゃうんだよー！」

あたりと焚き火を熾しているリンに抗議の視線を送る。ピイツとそらされる。そりやリンにはたたくさんアドバイスとか聞きたいけどさあ。

「ふふ、双葉もすっかりキャンパーだねえ」

みんなもそんな微笑ましい感じで笑わないでよ。うう、恥ずかしい。

「そ、そっち手伝おっか?」

恥ずかしいので話を逸らす。8人分のテントを張るのはなかなかの重労働だ。

「双葉ちゃん! こっち来てご飯作るの手伝つてくれへん?」

と、あおいがボクを呼ぶ声。そうだった。こっちもやらなきゃいけなかったんだ。

「今行くー! ごめんね、あとお願い」

「おう、まかしとけ! ちなみに、今日はなに作るんだ? なんかでつけー肉買ってたけ

ど」

「ふっふっふ、それは見てからのお楽しみってやつだよ! あ、そうだ。ちよつと千明に

借りたいものがあるんだけど——」

そんなこんなで、ボクたちの伊豆キャンが始まるのであった。

トングで掴んだロース肉を、バーナーの火にかけたスキレットの上に静かに乗せる。熱々のスキレットに肉が乗った瞬間、肉を焼く心地よい音とともに牛肉とハーブと胡椒のなんとも言えない良い匂いがあたりに漂いはじめる。

ジュウジュウと煙を出しながら焼けていく牛肉。肉を焼く音って、どうしてこんなに心地いいんだろうね。

表面に十分に焼き目をつけたらトングで肉を転がして別の面を焼いていく。

煙と音と匂いで口の中から涎がふつふつと湧いてくる。もうこのままでも食べちゃいたいくらいおいしそうだけど、我慢我慢。

「はあ、いい匂いですなあ〜」

いつのまにか隣に座り込んでいたなでしこが、ボクの手元を覗き込んでうっとり。

「音だけでも幸せになれるよねえ」

「だよねえ〜 そういえば、双葉ちゃん何作ってるの?」

そう言いながらボクの周りを物色するなでしこ。料理好きのなでしこならきつとすぐに検討がつくだろう。

「ふむふむ、アルミホイルにブロック肉……あつ!」

手を叩いてパアッと表情を明るくさせる。どうやらわかったみたい。

「わかった! ローストビーフだ!」

「大当たりー」

そう、今日ボクが作るのはローストビーフだ。

簡単に作れるうえにおいしい。そして見た目も豪華。これほどキャンプに適した料理もあんまりないと思う。

「クリキャンのときは鶏肉だったから、今回は牛肉にしよっかなって。そっちはどう？」
「ちようどあおいちゃん作り始めたところだよ。あっちもすっごくおいしそうだよー」

「アヒーなんとかって料理だったよね」

野菜と魚介を買い込んでいたのを覚えている。

たしかスペインとかそっちの料理だった気がする。どんな料理なのかな。楽しみだなあ。

「あれ？　なんて名前だったっけ？　アヒーホ？」

「ふふ、それだと雄叫びになっちゃうよ」

「アヒージョやでー」

ボクたちが料理の名前に頭を悩ませていると、あおいが答えを教えてくれた。

「スペインの料理でな。オリーブオイルとニンニクでいろんな野菜や魚介を煮込む料理なんよ」

手元の鍋に具材を敷き詰めていくあおい。マッシュルーム、パプリカ、長芋、ナス……すごい具沢山だ。

風に乗ってただよってくるオリーブオイルとニンニクの香りがなんとも食欲をそそる。匂いだけでわかる。これは絶対おいしいに違いない。

「ちよーど煮込み始めたところやからもうちよい待っててな」

「はーい！」

元氣よく返事をして、自分の料理に意識を戻す。うん、そろそろかな。

表面を十分に焼いた肉をアルミホイルを素早く包んでいく。

こうすると肉の熱がアルミホイルで反射して、まるでオーブンで焼いたのと同じようになるのだ。

今日は寒いので熱が逃げないようにアルミは二重、さらに新聞紙とタオルで包む。

「あとは30分じつと待つのです……」

アヒージョを食べているころには完成してるかな？

「はあ、楽しみですなあ〜」

「ですなあ〜」

二人でローストビーフの味を妄想しながらあおいのところに戻っていく。もうお腹がペコペコだ。

ニンニクの香り漂う長芋に、あおいが竹串をすつと差し込む。

オリーブオイルを張った土鍋にはプロッコリーやマツシユルム、タコ、エビといった具材がごろごろと転がり、ニンニクの香りとともにふつつつと煮えていた。

「ど、どう?」

恐る恐るたずねる。

「ころあいやな……」

あおいが神妙な顔でひと言。

……

……

……

『いただきまーす!』

8人の元気な声がキャンプ場にどよめく。待ちに待ったご飯の時間だ!

「おいひ〜」

「お、あたしもあたしも! うめー!」

おいしいおいしいと声を上げるみんなを見ながら、ボクも鍋に浮かんだマツシユル

ムに串を刺す。

そしてパクリ。口の中に広がるオリーブとニンニクの香り。旨味たっぷりのマツシユルームを鷹の爪がピリリとひしきめる。

これ……

「なにこれおいしいー！」

あまりのおいしさに、思わずあおいに詰め寄る。きつと、側から見たらボクの目は茸みたいになっていることだろう。

「あおい！ これすっごいおいしいね！」

「やろー?！」

得意げに八重歯をのぞかせるあおい。ドヤ顔も納得のおいしさだ。

「多めに作つとるから、たくさん食べてええからな！」

「やったー！ あおいちゃん大好きー！」

「ありがとあおいー！」

「口ん中火傷せえへんようになー！」

「あちち」

火傷しそうになりつついろいろな具材を口の中に放り込んでいく。

うん、全部おいしい！ オリーブオイルとニンニクで煮ただけなのにこんなおいしい

なんて反則だよ。

「くうー！ 疲れた身体にワインが沁みますねー！」

ワイン片手にご満悦の鳥羽先生。たしかキャンブ代捻出とかであんまり（鳥羽先生基準）飲んでなかったんだっけ。

「あ、みんな。これ残ったオリーブオイルにパンつけて食ってもおいしいでー」

「ほんとだー！」

「……うまい」

わいわいともりあがる食事。やつぱりみんなでやるキャンブはこうでなくちゃね。

時計を確認つと。うん、そろそろいいかな？

「あれ？ 双葉どこいくの？」

「ふっふっふ、お楽しみは一つだけじゃないんだよー恵那」

「あつ！ ローストビーフ！」

「えっ！ おねーちゃんお肉あるん!？」

さつき横で見ていたなでしこと、育ちざかりのあかりが目を輝かせボクに詰め寄ってくる。

「そだよー、ボク用意してくるからみんな食べていいよー」

ボクのそんな言葉とは裏腹にじーつとボクを見つめる7対の瞳。このパターン、クリ

キャンのときも見たなあ。

「見る？」

コクコク（リンだけこつくり）とうなずくみんな。

「ふふ、はいはい」

ボクはそんなみんなに笑いながら、肉を切り分ける準備にとりかかるのであった。

ミニテーブルの上のまな板に置いたハーブと胡椒の香りが漂うローストビーフの固まりに包丁を差し込む。

ほどよく弾力のある柔らかい肉を切ると、綺麗なピンク色の断面が現れた。うん、ちゃんと火が通ってる。

「「じー……」」

強い視線。見なくても誰なのかわかる。顔を上げると、予想通りなでしことあかりがボク……ローストビーフを穴があくほど見つめていた。

「食べる？」

首が取れそうな勢いでうなずく二人。最初はボクが食べようと思ったけど、まいっか。

「はい、あかりちゃんあーん」

「わー！ あーん！」

「あつ あかりちゃんずるいよー」

凄まじい形相で肉を凝視するなでしこをスルーして、切れ端を摘んであかりの口元に持っていつてあげる。

「あむっ」

パクリ。もぐもぐと食べるあかり。

「ど、どう？」

ちゃんと作れたかな？

「おねーちゃん……」

食べ終え、じつとボクを見つめる。ご、ごくり……

「これむっちゃうまいなあ!!」

まるで花が咲いたみたいにペアッと笑顔になるあかり。よかつたあ……

「ふ、双葉ちゃん！ わたし！ わたしもちようだい！」

さつきお預けを食らったなでしこが、まるでわんこみたいにボクに詰め寄ってくる。しようがないなー

「はいはい、あーん」

「わーい！ あむ！ おいひい〜」

おいしそうに口をもぐもぐさせるなでしこ。そんななでしこを皮切りに、みんながわたくしもわたくしもと詰め寄ってくる。

「ごめん、誰か手伝ってもらっていい？」

「あ、じゃあわたし手伝うよ」

恵那と一緒に肉を分けてみんなで食べはじめ。さて、ボクもひと口。

「……んま」

口の中に広がる柔らかい牛肉の味。噛めば噛むほど旨味が口の中に広がっていく。そして、そんな旨味をハーブと塩胡椒が引き締めていく。

「ん、んまあ……」

お、おいしすぎる。お肉高かったけど、作ってよかった……

「おいひ〜」

「シーフードもええけど、やっぱり肉もええなあ〜」

「お肉には……あつた！ 赤ワイン！」

これはおいしい。素直においしい。

今度は焼いた時に出た肉汁で作ったタマネギソースをつけてもう一切れ。

うん！ おいしい！

「リンちゃん！ おいしいね！」

「え？ あ、ごめん、まだ食べてない」

返事するリンだけど、さつきよりも身体の揺れがすごいことになっている。

「り、リンちゃん！ お皿！ お皿傾いてる！」

キャンプ場に着いたときからリンはずっとこんな調子だ。よっぽど疲れてるみたいだ。

「リン、ほんとに大丈夫か？ さつきからめつちや眠そうじゃねえか」

「んあ？ あ、だいじよぶだいじよぶ。千葉行つたときにくらべればこんなのぜんぜんだし……」

ふらふらするリン。耳を澄ますと16時間とか、600キロとか、まるで呪詛みたいな言葉がぶつぶつと聞こえてくる。

そんなにきつかったのか。次は500キロくらいにしとこ。

「リンちゃん、ご飯どうする？ 食べさせてあげよつか？」

「ん……おねがい」

志摩リンからしまりんと化したリン。緩みきつた表情も合わさってまるで子供みただい。

「リンちゃん、あーん」

ローストビーフを箸で摘んでリンの口に運んでいく。

「……うまい」

もぐもぐと咀嚼するリン。よかった。リンも気に入ってくれたみたいだ。

「リンちゃん、口にソースついてるよ」

「え？ どこ？」

「今拭いてあげるからねー」

「……ありがとう」

うん、お母さんだ。

まるで親子みたいな二人にみんなでほっこりする。

「あはは、リンったら寝ぼけすぎでしょ！」

恵那が悪い笑みを浮かべながらカメラをパシャリ。これ絶対あとでからかうんだろ
うなあ。リンが爆発する様が思い浮かぶ。

「朝からずっと走ってますものね。きつとお疲れなんですよ。ゆっくり休ませてあげま
しょう」

「ですね」

おつかれリン。心の中でそう言う。

「いや、双葉ちゃんも同じ距離走つとるやろ。いくらなんでも元気すぎひん？」

「あ、言われてみればたしかに……大丈夫か？」

あおいと千明がはつとしたようにボクを見る。心配してくれるのはうれしいけどボクはなんともない。

「ふっふっふ、千明、あおい。ボクの目をよく見て」

「え、目がどうした……ってバッキバキじゃねえか」

あんぐりと口をあける二人。たぶん二人から見たボクの目は充血とかくまですごいことになっているだろう。

「お、おねーちゃん、ほんまに大丈夫なん？」

「大丈夫だよー まだ自分が誰なのかとどこににいるのとかわかってるから」

そう、この程度なんてことないのだ。丸一日走ったときに比べれば、こんなのなんてことないのだ！

「知ってる？ 疲れてるって自覚しているうちはね、まだ大丈夫なんだよ」

本当に疲れているときは横になったり座ったりした瞬間に気絶する。ソースはボク。

「アキ……この子どもどこに向かっとなん？」

「さあ……」

「あはは！ 双葉目バッキバキじゃん！」

「や、山中さん？ よ、横になったほうがいいんじゃないですか？」

だから、だからここで寝るわけにはいかないのだ。まだアヒージョもローストビーフもなしこの金目鯛料理も残っているのだ！

そんなこんなで、バイク乗りとしての経験をフルに使いなんとか最後まで料理を堪能したボクなのであった。

ちなみにリンは途中で脱落した。

「あおいちゃん、この銀髪の子の靴下どうなってるん？」

あかりがタブレットの画面に映し出されたアニメのキャラを指差す。いわゆるガーターベルトつけてやつをつけてるみたいだ。

かわいいとは思うけど、高校生でその格好はどうなんだろうか。

「な、なんやろなー？」

言い淀むあおい。これはちよつと説明しづらいだろうな。

「なしこちゃん知ってる？」

「あ、あめん！、こ、怖すぎて画面みれなくてー」

目を両手で隠して、毛布にくるまってぶるぶると震えるなしこ。

ご飯を食べ終えてアニメを見はじめてからずっとこんなちようしだ。

でもよく見ると指の隙間から目が覗いている。そこまでするなら普通にみればいいのに。

まあ気持ちはわかるけど。ボクも前に家で見てたときも同じポーズで見てたし。

「べつに今怖いシーンやないで？」

「無理無理無理！ 超怖いよおー！」

「なあ、そんなに怖いならべつののにするか？」

コクコクと首を横にふるなでしこ。

「どうやら怖いけど気になるらしい。わかる。ホラーって妙に続き気になるんだよね。適当に選んだやつだったけど、けっこうおもしろいな」

「たしかにおもしろいけどオープンング詐欺すぎひん？ こんなん絶対勘違いするやろ」

「普通のほのぼの系かと思ったらまさかのゾンビものだもんねー」

「わんこかわいかったなあ。ちくわ今ごろどうしてるかな？」

千明みたいな髪型の女の子がスコップを振り回しているシーンをぼんやりと眺めながら今日の旅を振り返る。

綺麗な景色においしいご飯。見たことないものばかりで、すごくすごく楽しかった。

みんなで集まる機会も減っちゃったから、余計にそう思う。

明日は堂ヶ島に行つて、西伊豆スカイラインを走つてキャンプ場の予定だ。どんなところなんだろうなあ。

「ふああ〜」

大きなあくびが口から飛び出る。瞼が重くなつてきた。心なしか頭もぐらぐらする。

「双葉ちゃん眠いん？」

隣のあおいの優しげな声が頭にずんと響く。

「……うん」

「ずっと走つとつたんやろ？ リンちゃんも寝とるし、双葉ちゃんもそろそろ寝たほうがええんとちやう？」

大した距離じゃないけれど、明日もそれなりに走る。あおいの言うとおりもう寝たほうがいいんだろうな。

けど、正直なところボクはまだ寝たくなかった。もやのかかった思考を巡らして言葉を探していく。

「だよね……でも……」

「でもっ」

「ひさしぶりにみんなとキャンプできたから、寝たくないなあ……」

重くなつていく瞼を必死にこじ開けて言葉を紡ぐ。

みんなやらなきゃいけないことが増えて、みんなが集まる時間はずっと減ってしまっ
た。

高校生ってというのは、いろんなことを考えないといけない時期だ。遊んでばかりはい
られない。

しょうがないのはわかっている。でも、やっぱり寂しい。

「次いつみんなと集まれるのかなあつて思ったら、寝るのがもつたいなくなっちゃつて
さ……」

頭が重い……ねむい……けど寝たくない。寝たら今日が終わってしまう。

「ボクさ、友だちとかいなくなかったからさ、こういうのずっと憧れて……だから、みんな
と友だちになれて、やっと夢がかなって……それで……その……」

眠い……寝たくない。こんな楽しいのに終わりたくない。

「双葉ちゃん……」

「ごめんね、へんなこと言っちゃって」

「ううん、ええよ」

あおいの優しい声が頭に響いていく。視界が傾く。ねむい、でもおきてないと……

「あおい……ねそうに……なったら……おこしてくれない」

せつかくみんなで夜更かしするって決めたのに寝たくないよ。だから起きてない

……

「……双葉ちゃん、ちよつとええ？」

「え？　なあに？」

ふと、肩に暖かい感触が伝わった。眠気で力の入らない身体はそれだけで倒れてしまった。

そして頭を感じる柔らかくて暖かい感触。横になったことで身体の疲れが抜けていくのがわかる。

そっか、ボク今あおいに膝枕されてるんだ。

「リンちゃんはもう寝とるし、双葉ちゃんも寝よ？」

あおいのささやきが頭に染み込んでいく。

「で、でも……」

「キャンプなんていつでも行けるんかやら、夜更かしはまたそんなときな？」

ぼんぼんと頭を撫でられ、そのたびにどんどん眠気が押し寄せてくる。

「今までは夢やったかもしれないけど、もう夢やないんやから、いつだってできるんやから

……な？」

「うん……」

モワモワと意識にもやががかっていく。起きようとする気力はいつのまにかなく

なっていた。

「それに……明日も走るんやろ？　むっちゃ疲れとるんやから、今日はもう休んで、それで明日いっぱい楽しんだらええ」

あおいの言うとおりかもしれない。せっかくのキャンプなのに無理して起きて、疲れを引きずったつていいことなんて一つもないか……

それにキャンプなんてこの先いつでも行ける。べつに今日無理して全部やらなくてもいいんだ。

だって、また行けばいいんだから。

「あとはこちらで運んだるから、今はゆっくりおやすみ……な？　双葉ちゃん」

「……うん」

ぼんやりとした頭でうなずいた途端、暖かさに包まれてボクの思考はみるみると沈んでいった。

そんな心地よい感覚に身を任せ、目を閉じる。沈んでいく。

「おやすみ……あおい」

「ふふ、また明日なあ。双葉ちゃん」

沈む。

今日はきつといい夢が見れそうだ。

不意に寒さを感じて目を開く。全身を包むシャカシャカとしたナイロンの感触。これは寝袋だ。

「……あれ？」

ボクどうしたんだっけ？ みんなとアニメ見て、すごく眠くなってあおいに膝枕されて……

「あっ」

思い出した。たぶんあの後寝ちゃったんだ。寝袋に入ってるってことは、みんなが運んでくれたのかな？

自分がどういう状況にいるのが理解したとき、ボクの右側でなにかがピクリと動いた。

え？ な、なに？

「……ぞんびい」

と、なでしこらしき声。なんだ、寝言か。身体力がどつと抜ける。

あれ？ なでしこってリンと同じテントじゃなかったっけ？ というか今何時だろ

う？

真つ暗な中、枕元を手探りで漁ると腕時計が見つかった。バックライトをつけて時間を確認。

「4時10分かあ……」

ずいぶんと早起きしちやつたみたいだ。

身体を起こしてあたりを見回す。だんだんと夜目がきいてきて周囲が見えるようになってきた。

「あ、リンの寝袋……」

なでしこを挟んだ向こうにリンの寝袋らしきものが見えた。どうやら3人で寝てたらしい。

たぶん寝落ちしちやつたボクをここに寝かせて、後からなでしこがここで寝たつてことなんだろう。あとでお礼言わないと。

というかテント5つあるんだからわざわざ3人で寝なくてもよかったのに。

「そういえば、リンどこ行つたんだろう」

うつすら見えるリンの寝袋はもぬけの殻。ボクよりも早く寝てたからもう目が覚めちやつたんだろうか。

「……寝よ」

もう一度寝袋に潜り込む。

みんなが起きるのもどうせもつと後のことだろうし、そもそもこんな早くに起きたつてすることがない。

スマホをいじろうにもなでしこが寝ている。

「おやすみい〜」

目を閉じて寝袋の暖かさに身を任せる。眠気はないけど、こうしてただ横になるのも悪くない。

静かなテントの中でなでしこの寝息と波の音だけがこたます。

ザツザツザ、不意にそんな音がテントの外から聞こえてきた。足音だ。どんどん近づいてくる。リンだろうか。

足音がテントの入り口の前で止まり、ジツパーがそつと開かれ誰かが入ってくる音がした。

「……まだ寝てるか」

リンがぼそり。

「寝てる」

ボクもぼそり。

「起きてんじゃん」

「おやすみー」

深呼吸をしてもう一度眠りに入ろうとするけど、ちつとも眠気がやってこない。寝起きが良すぎるのも考えものだなあ。

「……えい」

そんな声とともに頬に冷たいものが突き刺さった。

目を開ける。枕もとにリンがしゃがみ込んでいてボクの頬に指を突きつけていた。

「なに?」

「仕返し」

太田子海岸のことかな。仕返しならもうすんでるような……まあいいや。

「……柔らけえ」

そう言つてつんつんと指を押し込むリン。前もそうだったけどボクのほっぺのなにかいいんだろう。

「つめたいからやへて」

「やだ」

「なんで!？」

「うそだよ」

リンがちよつと名残惜しそうに指をどかしてくれたのを見計らって身体を起こす。

「おはよーリン」

「うん、おはよ」

挨拶すると、リンも笑つておはようと言つてくれた。

「早いね。まだ4時だよ」

「早く寝すぎた」

たしかにリンが寝落ちしたのは9時くらいだったはず。こんな朝早く起きちやうのも無理はないか。

枕元に置いてあつたジャケットやバイク用のズボンを着て外に出る

「寝るんじゃないの？」

「無理だった」

「あつそ」

日も昇つてない黄金崎は真つ暗で、青白い月明かりがうつすらと浜辺を照らしていた。

「さむっ」

「さみい」

とてもじゃないが暦の上では春とは思えない寒さだ。山梨に比べれば氷点下じゃないだけマシだけど、寒いものは寒い。

「焚き火でもする?」

「こんな時間に?」

「こんな時間だからいいんだよ」

薪はいっぱいあるし、少しくらいなら大丈夫だろう。それにちよつと悪いことしてるみたいで楽しい。

「……寒いしいいか」

「決まりだね。じゃあボクやるよ。あ、コーヒー飲む?」

「おねがい」

ボクはいつものように返事のわかりきっていることをリンにたずねるのであった。

メラメラと薪が燃え盛る。赤い炎が風にゆらめき、時折パチパチと爆ぜる。

「はい、おまたせ」

「ありがとう」

薪に座って肩を並べながら、風に乗って漂ってくる煙の匂いを嗅ぎながら淹れたばか

りのコーヒーをすすする。

炎に照らされて、白い湯気がモクモクとボクたちの間を漂っていく。

砂糖とミルクをまじまじにした熱いコーヒーをすすすると、苦味と甘みがぼんやりしていた意識をはつきりさせてくれた。

「昨日わたしが寝たあとなにしてたの？」

「みんなでアニメ見てた。ゾンビのやつ」

「なでしこのやつめっちゃ怖がってただろ」

「手で目隠してひいひい言ってた」

「ふふ、だろうな」

あれからみんなどれくらい起きてたんだろ。

たぶんかなり遅くまで起きてたんだろ。起きるのはきつと当分先だろ。

「今日は堂ヶ島行って、西伊豆スカイライン走ってだるま山でキャンプか」

焚き火にあたりながら、リンが今日の予定をぎつとおさらいする。

「そうだ。伊豆スカイライン走るとき、前走らせてもらおうよ」

「あ、それいいな」

「でしよ？」

西伊豆スカイラインはツーリングのスポットとして有名ならしい。写真でちよつと見

たけど、まるでヨーロッパの山道みたいだった。

楽しみだな。早く行きたい。

「で、キャンプ場ついたらあおいとなでしこの誕生日パーティーか」

「だね」

「千明のやつ、誕生日プレゼント忘れてたりしないよな……まあ、あいつなら大丈夫か」

「なんだかんだいって、そういうところはしっかりしてるもんね。千明って」

2月のテストだって、ちゃんと勉強していい点とってた。本人曰く、やるときやるってやつなんだろう。

「二人とも、喜んでくれるかな？」

友だちの誕生日とか祝ったことなんてないからちよつぱり不安だ。

「むしろ喜びすぎてやばいんじゃない？ とくになでしこ」

「ふふ、だといいいね」

そう言つてコーヒーをすすする。突き刺すような空気に白い息がモワモワと舞つていく。

「そういえばさ、誕生日で思い出したけど、双葉の誕生日っていつなの？ たしか春だったよね」

「あれ？ 言つてなかったっけ」

首を振るリン。そういえば言う機会もなかったし、言う必要もなかったから、言っ
てなかつた気がする。

「もしかして、お祝いしてくれるとか?」

「当たり前じゃん」

「あ、う、うん……そ、そっか。そうだよね」

いつもみたいに照れ隠しながらうなづくのかと思つたら、まさかのど真ん中スト
レート。

「ふっ、照れてやがるぜ」

「追い討ちやめてー」

手で顔を覆い隠す。

うれしいけど、恥ずかしい。そんなボクに気をよくしたのかリンがニヤニヤする。

「で、いつなの?」

「え、えつと4月の28日」

なんとか復帰しながら誕生日を教える。そういえば人に誕生日教えるのなんて生ま
れて初めてだなあ。

「でもさー笑っちゃうよね」

「え? なにが?」

リンがきよとんとする。まだ気づいてないみたいだ。

「だつて、28だよ？」

ボクの言葉にリンは少し考えこむように黙り、しばらくしてはつとしたように顔を上げた。

「あ、だから双葉²なのか」

「うん、語呂がいいからだつてき。お母さんったらほんと適当だよね」

意味なんてあとからついてくるつてお母さんは言つてたけど、娘としてはちよつと複雑な気分。

まあ残念なことにその性質はボクにもちやつかり受け継がれていたりする。

Y Bだからビーちゃんつて、人のこと言えないよ。

でも、そつか……お祝いしてくれるのか……なでしこたちもお祝いしてくれるのかな？

きつとしてくれるんだろうなあ。なんか、変な感じ。

「リン」

隣で焚き火にあたっているリンの肩に頭を乗せる。

「……なに？」

ぶつきらばうだけど、すごく優しい声に思わず目を瞑る。

誕生日は誰にだって特別な日だ。ボクだって例外じゃない。だから、ちよつとくらいわがまま言つても、いいよね？

「ボク、友だちに誕生日お祝いされるの生まれて初めてなんだ」

「……そつか」

ちよつと悲しそうな声。リンはほんとに優しいなあ。

「だから、すつごい期待しちゃうからね」

きつと、間違ひなく一生の宝物になるだろう。

プレゼントとかくれるのかな？　もしかしたら泣いちゃうかもしれないなあ。

「ほんとに！　すつごいすつごい期待しちゃうからね！」

「……はいはい」

リンはそう言つてぶつきらぼうに返事したあと、ボクの頭をほんぽんと撫でるのであつた。

「えへへ、リン大好き」

「……わ、わたしも、す、好きだよ」

照れながらも、言葉に詰まりながらも、リンははつきりと言つてくれた。

「えへへ、そつかあ」

思わず顔がニヤける。寒い寒い伊豆の朝。けど、ボクの心はいつもよりずっとずっと

ぼかぼかしていた。

リンと、みんなと友だちになれてよかった。ボクは本当に幸せものだ。本当に、本当にそう思う。

「あーあ、誕生日楽しみななー」

あと約2ヶ月か。きつとあつという間なんだろうなあ。

「……ふつ、気が早えよ」

リンが笑う。楽しみななあ。すごく、すごく楽しみな。

「ねえ、これからどうする?」

そんな幸せに浸りながら、ふと思ったことを聞いてみる。

「どうするって?」

「どうせ千明たち起きないだろうし、暇じゃん」

起きたとしても昼くらいだろう。それまではリンと二人だけの時間だ。

「たしかに……」

時計を見るとまだ6時にもなっていない。

朝ごはんを食べて荷物をまとめて……それくらいしかすることがない。本を読むにしても暗いし寒い。

「昨日アニメ見てたんだけ?」

「うん。っていつても途中で寝ちやっただけどね」

「……じゃあさ、そのアニメ見せてよ、朝ごはんでも食べながらさ」

そういえばローストビーフがちよっと残ってたはず。それと昨日のパンの残りを使ってサンドウィッチでも作ろう。

「それでさ、そのあと温泉にでも行こうよ。近くに朝からやってるところあるみたいだし」

二人で抜け駆け温泉……なんだかとてもワクワクする響きだ。断る理由なんてあるわけない。

「うん！　さんせー！」

「じゃ、決まりだな」

「はーい！　あ、コーヒーおかわりいる？」

「おねがい」

「うい」

「わたしの真似すんのやめろし」

「わかったし」

じいーつと睨みあうボクラ。

「いふいふ」

暗がりの黄金崎。暖かい焚き火にあたりながら二人で一緒に笑い合う。

伊豆キャン2日目の朝、静まり返った世界のなか、どこか優しくな月の光がボクたちを暖かく見下ろしていた。

24—3

ヘルメットを脱ぐ。心地のいい潮風が顔を撫で付ける。

「おおー 綺麗」

ガードレールに手を乗せて、身を乗り出し目の前に広がる景色を眺める。

「いいな、（ハハ）」

リンがスマホをかかげて目の前の景色をパシャリ。

あれから朝食を済ませたボクとリンは、黄金崎を散策したあとキャンプ場から9キロほど走ったところにある浮島海岸へと立ち寄っていた。

左右をゴツゴツとした岩の小山に挟まれた浜はよく見ると大小様々な形の岩で作られていて、駿河湾の荒波で磨かれたのか、どれもツルツルしている。

「さすが伊豆。どこ行っても絶景だらけだねえ」

「だな。あ、洞窟ある」

リンが指さすほうに目を向けると右のほうの小山に洞窟があった。よく見るとその下を海水が通っているようだ。

さらに目を凝らして見ると、浜を行った先に通路があつて洞窟を近くで見れるようになっていているらしい。

「近くまで行けるみたいだね。行ってみる?」

リンがうなずく。ピーちゃんにヘルメットを引つ掛けて少し歩いた先にあるコンクリートの階段を下る。

階段の先は浜と直接つながっていて、洞窟の近くに行くためにはむき出しの岩場を歩かなくちゃいけないみたいだ。転ばないように気をつけないと。

「リン、足元気をつけてうわっ!」

「あっ!」

足の踏み場を間違えてバランスが崩れる。けど、転ぶ寸前にボクの腕を掴んでくれたおかげで転ばずにすんだ。

「だ、大丈夫?」

「あ、ありがと」

「足場悪いんだから、気をつけろよな」

「えへへ、ありがと」

笑いながらお礼を言って再び歩き出す。駐車場から見たときはこんなに歩きづらいなんで思わなかったのに。

やっぱり自然をなめたらいけないってことか。

「ちよつと待って」

リンの言葉に立ち止まり振り返る。

「どうしたの？」

ボクが聞くとリンは頬をかきながらおもむろに手を差し出してきた。

「ん」

まるでなにかを催促するかのように手のひらをボクに突き出す。

「うん？」

意味がわからなくて聞き返すと、リンは少し恥ずかしそうに目を背けた。

「……手、つなごうよ。それなら転ばないでしょ？」

「……うん！」

差し出された手を握り返すと、リンの細い指がボクの手をしっかりと握り返してきた。

「リンの手、あったかいね」

「ポケットの中でカイロ握ってた」

二人で手を握って、洞窟を目指しゴツゴツした岩場を歩いていく。

転ばないように気をつけながら歩いていくと洞窟のすぐそばまでたどり着いた。

「うわ、海めっちゃ透き通ってる」

「あ、ほんとだ」

小山にそって敷かれたコンクリートの道から洞窟と海をながめる。

天然のトンネルの下を通る海はまるで宝石のように透き通っていて、底の岩礁の形まではっきりとわかるくらいだ。

そして降り注ぐ太陽が、青や緑のグラデーションとなって海面を彩っている。

「ここで泳いだら気持ちいいだろうなあ」

まあボク泳げないんだけどね。暖かくなったらリンに教えてもらおうかな。

「今泳いだら死ぬほど寒いだろうなあ」

「まだまだ冬だしね。あーあ、早く春にならないかなー」

本格的に暖かくなってくるのは4月のはじめか、3月の終わりごろだろうか。

そのころには桜も咲きはじめていて、ボクたちは2年生になっていて、新しい部員と
かも増えたりして。

そっか、もう2年生かあ……

「どうしたの双葉」

「ううん、なんでもない。春になったらどこ行く？ ボク花見キャンプ行きたいなあ」

一瞬だけ頭によぎった考えを振り払いもうすぐやって来る春のことを考える。

「それいいな」

「あ、そういえば琵琶湖にいっぱい桜の木が植えてある道あったよ。きつと咲いたらすごい綺麗なんだろうなあ」

「いや、遠すぎるだろ」

「大丈夫だよーそんな遠くないし。距離もこの前銚子行ったときとだいたい同じだよ」

なんなら琵琶湖のほうが20キロくらい近い。

「へえ、そうなんだ。意外と近いな」

「まあ一周とかしたら900キロ近くにはなるけどねー」

「……………マジか」

「リンも慣れたし、春休みくらいに行けたらなーって」

そう言つて、上目遣いでじーっとリンを見つめる。けど、正直言うとなんまり期待していない。

リンにはリンのやりたいことがあって、ボクにはボクのやりたいことがある。

全部一緒ってわけにはいかない。寂しいけどそれはしかたがない。

「……わかった」

だから、リンの返事はボクにとっては予想外だった。

「え？ いいの？」

きよとんとするボクを見て、リンがふつと笑う。

「なんで自分から聞いておいて驚いてるんだよ」

「だってあんまり遠く行きたくないって言ってたし……嫌なのかなって」

「千葉は遠くじゃないのか……たしかに言ったけど、休みあったら行くっていったし」

観念したように肩をすくめるリン。いつみために曖昧な返事じゃない。

「ほんとに？ 900キロだよ？ めっちゃ遠いよ!？」

「おーい、正気に戻ってるぞ」

「あっ」

いけないいけない。最近近場ばかりだったから感性が一般人に戻りかけちゃってるみたいだ。

片道300キロは近所、片道300キロは近所……よし大丈夫。

「ほ、ほんとに行ってくれるの？」

「……ていうか行きたいっていうか。ああもう！ 何回も言わせんな！ わたしだって

双葉と一緒に行ききたいの！」

顔を真っ赤にして叫ぶリン。

考えとくでも、行けたら行くでもない。明確に行くって、行きたいって言ってくれている。

なんだろう、言ってることはいつもと同じなのになんだかすごく嬉しい。すごくすごく嬉しい。

「わーい！」

「うおっ!？」

だからボクは、気がつくことリンの腕に抱きついていた。

「絶対！ 絶対一緒に行こうね！」

間近で見るリンの瞳に映るボクの顔は、これ以上ないってぐらいの笑顔だった。

「はいはい……言つとくけどちゃんと休憩入れろよ」

「うん！」

リンも、そんなボクを見て楽しそうに微笑むのであった。

「そろそろ行く？」

リンにうながされて時計を見る。時刻はもう8時を過ぎていた。

「次温泉だっけ？」

「うん。ここからちよつと行った沢田公園つてところに露天風呂があるみたい」
「そっか。じゃあ早く行こー！」

洞窟をあとにして走りだす。太陽は出ていているとはいえ、ここはまだまだ寒い。

岩場に飛び降りてびよんびよんとバイクに向かう。目指すは温泉！ 熱い湯がボクを待っている！

「リーン、置いてつちやうよー」

ゆっくりとついてくるリンを急かす。

「そんなに走ったら……」

「あうっ!？」

うえ、こけた。

「……愚かなやつめ」

一言一句その通りだった。痛い。膝打った。

「また手、繋ぐ?」

「……お願ひします」

手を繋いで歩き出す。伊豆キャンの二日目はまだまだはじまったばかりだ。

ちやぼん。湯気の舞う温泉に身体をひたす。あ、あつたかくて気持ちいい……
「ああ〜」

リンとボクの間抜けな声が澄み切った青空に吸い込まれていく。

「やべえ、気持ちええ……」

「だねえ〜」

浮島海岸をあとにしたボクたちは、

136号線を3キロほど南下した先にある小さな露天風呂で、抜け駆け温泉と洒落込んでいた。

「景色、最高だなあ」

「そだねえ」

雲一つない澄み切った青空の下眺める駿河湾は絶景というほかなく、貸し切り状態もあいまってまさにこの世の天国だった。

「千明たちうらやましがるだろうなあ」

「いいだろ。あいつら車で楽しってるんだし」

「それもそつか〜」

腰を落として温泉に肩まで浸かる。外が寒いからか、熱い湯がとつても心地いい。

キャンプ場を抜け出して綺麗な景色を眺めながら、誰もいない温泉に二人きり。なん

だか悪いことをしてるみたいだ。

「たのしいね、リン」

隣のリンに笑いかける。

「うわ、こいつめっちゃ悪い顔してやがる」

「そういうリンもニヤニヤしてるくせにー」

顔を見合わせて、悪そうに笑う。これ帰ったらみんなうるさいだろうなあ。ま、いつか。

「戻ったらなでしこたちになんて言い訳しよつか」

そんなボクの言葉に、リンはちよつと考えこむように下を向いた。静かな露天風呂にお湯の流れる音だけが響く。

「……あ、あのさ」

顔を上げたリンが言いにくそうにボクを見る。

「どうしたの?」

じーっとボクを見つめるリン。その顔はよく見るとさつきよりも赤くなっていた。温泉でのぼせたのかな。

「あ、うっ」

見つめ返して首を傾げると、もつと赤くなった。

「い、このまま……」

目を四方八方に泳がすリン。さつきから本当にどうしたんだろう。

「このまま……」

黙るリン。しばらくすると、まるでなにかを振り払うみたいにブンブンと首を振った。

「や、やっぱなんでもない」

「えー！ 教えてよー！」

ボクの文句にプイツと顔を背けるリン。あれだけ思わせぶりな態度でそれはないよ。

「教えてよーリン」

「絶対やだ」

ついには背を向けて断固拒否といった様子。

「なんでー!? 気になるよー!」

肩を掴んで揺らす。なにを言おうとしたんだろう。やばい、めっちゃ気になる。

「だ、だつて……ああもう！ 絶対言わないからなー!」

リンの叫び声が伊豆の空に吸い込まれていく。

結局、リンは最後までなにを言おうとしていたのかを教えてはくれなかった。

表情からしてそこまで深刻なことでもなさそうだけど、やっぱり気になる。いつか教

えてくれるかもしれないし、そのときまで我慢しよう。

「そろそろ上がる?」

「あと5分」

「はい」

とまあ、そんなこんなでボクたちの抜け駆け温泉逃避行は幕を下ろすのであった。

「もー! おねーちゃんとリンちゃんだけずるいわ!」

「あはは、ごめんごめん。でもみんな寝てたしさ」

心太をもりもりと食べながら抗議するあかりをなだめながら、ボクも海鮮丼をモリモリと食べる。

温泉をあとにしたボクたちは、昼前になってようやく起き始めた千明たちと合流し、堂ヶ島のそばにある食堂へと向かった。

海鮮で有名な食堂だけあって、鰹出汁のきいたタレと新鮮な刺身がご飯に最高にマッチしていておいしい。何杯でも食べられそうだ。

「あかりちゃんの言うとおりでよ! 二人だけでさっぱりしちゃってさ!」

と、ボクの後ろの席に座ったなでしこが口元にご飯粒をつけながらお冠の様子。温泉から帰ってからずっとこんな調子だ。

「なでしこ、口にご飯粒ついてるぞ」

「ほんと？ リンちゃん取ってー」

「いや自分で取れよ」

「取ってくれないと許してあげないもーん」

「……はあ、わかったよもう」

「お、リンったら大胆」

「やかましいわ」

後ろの席の仲睦まじいやり取りを聴きながらお茶をすすり窓の向こうに広がる景色を眺める。

空はすっかり明るくなっていて、ちやうど真上に昇った太陽が、海をキラキラと照らしていた。

「あ、ついでにジオスポットもちよつと見てきたよ」

「お、どこ行ってきたんだ？」

「えっと、黄金崎でしょ？ それで浮島海岸に、あと沢田公園も」

スマホで撮った写真を見せる。昨日と今日だけでもう何百枚も撮っちゃっている。

帰ったらパソコンに取り込まないとスマホのデータがやばい。

「海が透き通ってて綺麗ですねえ」

「温泉の眺めも最高だったし、いい朝だった」

「いいなーリンちゃんたちだけ」

「だってみんな寝てて暇だったんだもん」

「まあうちら寝たのたしか3時くらいやったもんなあ」

「ずーつとアニメ見てたもんね」

「ま、今日は普通に寝たほうがいいだろうな。明日帰るわけだしよ」

「せやなあ」

そっか、明日になったら帰っちゃうのか。なんかあつという間だなあ。ちよつと寂しいなあ。

「千明、今日は堂ヶ島行ったらキャンプ場直行だよな？」

「ああ、昨日山登りだのなんだのしたせいで疲れてるしな。今日はまったりのんびり行こうぜ」

どういうルートで行くんだろう。どうせなら、昨日通らなかつた道走ってみたいなあ。あとで先生に言ってみよ。

「つーわけで、伊豆キャン二日目。気合い入れていくぞー！」

おー！ と、みんなで拳を突き上げる。

ざぶざぶと大海原から押し寄せる波と沖に浮かぶ小島を眺める。

あれが三四郎島か。上から見たときは4つあったのに、ここからだると3つしか見れないや。

「まだかなあ」

と、なでしこが言った。

「まだだねえ」

と、ボクは言った。

「お前らそのやり取り3回目だろ」

と、リンがぼやいた。

食堂で豪華なランチをとったボクたちは、堂ヶ島公園で天然洞などを見たのち、今日のメインであるトンボロを一眼見るために三四郎島のそばまで足を運んでいた。

「潮が引くと橋みたいになって向こうの島まで渡れるんだよね」

いわゆるトンボロ現象って言うらしい。何語なんだろう。

「ネットで見たけど、千葉行ったときに寄った沖ノ島にちよつと似てたよ」

そう言ってリンがスマホの画面をボクに見せてくれた。

「ほんとだ。あの島もこと似たような形だったもんね。」

「いいなあ、リンちゃんたちいろいろなところ行けて。今朝も二人だけで温泉行っちゃおうしよー」

ボクの横に座ったなでしこが顎に手を当てて不満気に頬を膨らます。

「……わたしもバイクあればいいのになあ」

そうつぶやくなでしこの目はどこか少しだけ寂しそうだった。こういうとき、なんて声をかければいいんだろうか。

「なでし——」

「なら……」

ボクが口を開こうとした瞬間、リンが先になでしこに話かけた。

「それなら、あたたかくなったら自転車でキャンプ、行かない？」

「……自転車？」

きよとんとするなでしこ。

「場所は……本栖湖とか、前に風邪引いて行けなかったところとか……なでしこの行きたいところでもいいからさ」

目をキョロキョロさせながら言葉を紡いでいくリン。

「その、最近一緒にキャンプ行けてないし、また一緒に行きたいっていうか……」

セリフはたどたどしいけど、リンがなでしことキャンプに行きたいっていう気持ちがある言葉の端々から溢れて出ていた。

「どう、かな？」

「リンちゃん……」

リンの言葉になでしこの目が徐々に見開いていく。そして、見開いた目が猛烈な勢いで輝きはじめる。

どうやらエンジンが入ったみたいだ。

「な、なでしこ？」

「リンちゃん!!」

間にボクがいるのも忘れてリンに詰め寄るなでしこ。よっぽど嬉しかったらしい。

「な、なに？」

「行く！ 絶対行く!!」

それはそれは嬉しそうに笑うなでしこ。さっきのボクもこんな感じだったのかな？

「……あんま遠く行くなよ？」

そんななでしこに、リンも優しげに笑うのであった。

「えへへ、約束だよ！ あ、リンちゃんリンちゃん！ どこかおすすめの場所ある？」

「えっと、チャリで行くとなると……麓っぱらキャンプ場は……そこは行ったことあるよな。あとは——」

……ボクはちよつとお邪魔虫かな？ そう思つて立ちあがる。

そういえばそろそろ向こうの島には渡れるかな？ 心なしかさつきよりも潮が引いてる気がする。近くで見てこよつと。

「ちよつとボク岸のほう行つてくるね」

「あ、双葉ちゃん！」

「双葉」

歩き出そうと一歩踏み出した瞬間、両方の手が同時に引つ張られた。首を向けると、

2人がボクをじいつと見ていた。

「双葉も行くでしょ？ キャンプ」

「双葉ちゃんも一緒に行くー！」

まるで来るのが当然と言いたげな2人の目。

「ボク、たまには一人旅したいんだけどなあ」

なんて見え見えの嘘をつく。

いつかできることと、今しかできないこと、どっちが大切かなんて、言うまでもない。浜松でも似たようなことを言った覚えがある。ちよつと前は旅さえできればよかつ

たのに、ボクも変わったなあ。

「で、本音は？」

ボクの考えなんてお見通しのリンがニヤリと笑いながら聞いてくる。

「めっちゃ行きたい」

ボクの言葉に二人がニツと笑う。

「やったー！ 3人でキャンプだー！」

どこ行こうかなあと、楽しげに話すなでしこ。

そんななでしこの姿が本当に楽しそうで、ボクも思わず笑顔になる。

「おーい！ お前らー、そろそろ行こうぜー」

「あ、みんな待つてよー！ リンちゃんも双葉ちゃんも行こー！」

なでしこがボクとリンの手を掴んで走り出す。

よく見るとほかの観光客の人たちもちらほらと島に渡りはじめているみたいだ。

そういうえば、あたりはまだトンボ口知ってることあおいに言っていないのかな？

「トンボ口楽しみやなー あかりもそう思うやろー？」

なんて白々しいセリフなんだ……

「うん！ あ、アキちゃん！ 早うトンボ口げんしよー見にいくでー！」

「お！ ならどつちが先に島に渡れるか勝負しようぜ！ 負けたほうがジュースおごり

な！」

「その勝負、乗ったー！」

ばつと走り出す千明とあかり。二人は元気でいいなあ。

「若いつていいねー」

恵那が笑いながら走り出す二人をスマホで撮る。

「二人ともそんな走って転んでも……え、今なんて？」

あ、言つてなかったみたいだ。

「わあ！ほんまに橋みたいになつとる！おもしろいなートンボロ！」

先に行つたあかりが楽しそうに笑う。

そしてゆつくりとこつちに首だけ向けあおいを見た。それはそれは悪そうな笑顔だった。

うわあ……

「な、なあ、双葉ちゃん……」

そんなあかりとは対象的に錆びついたような動きで顔をボクに向けてくるあおい。

ようやく真実に気がついたみたいだ。

「あ、あの子、もしかしてトンボロ知つとつた？」

「うん」

「い、いつから?」

「前に自転車直しに行つたときに教えた」

「……ほんまに?」

「ほんまに」

ボクの種明かしに口をあんぐりと開き、啞然とするあおい。

「な、なんやと……」

衝撃のカミングアウトにがっくりと膝をついて打ちひしがれる。よつぽどシヨックだったみたいだ。

「う、うちが、ホラで騙されるなんて……」

いや、シヨック受けすぎでしょ。

「あかり、知らんうちに大きくなつて……ぐすん」

わざとらしくすすり泣く……いや待つて、これ本気で泣いてるよ。どんだけホラに命かけてるんだ。

「……なんなんだこの姉妹」

「あ、あはは……」

リンのもつともすぎるツツコミと恵那の空笑いが、昼下がりの青い空に虚しく吸い込まれていくのであった。

「いやあー 買った買った」

「これで今夜のご飯もバッチリだね！」

食材の詰まったスーパリーのレジ袋をぶら下げてほくそ笑む千明と恵那。

楽しそうに笑っているけど、笑いの理由はきつとご飯だけじゃないだろう。

「まだ足が冷てえ」

リンが足をもじもじさせながら顔をしかめる。たぶんボクもだいたい同じ顔してると思う。

「海、冷たかったもんね」

さつき渡った三四郎島に渡ったときのことを思い出し思わず身震い。

まさか3月に海に素足を浸すことになるなんて思わなかった。靴を濡らさないために裸足で行ったけど、どうせならもつと潮が引いてから行けばよかった。

「こんなことなら防水ブーツ履いてくればよかったなあ。うう、冷たい」

「だ、大丈夫？ 双葉ちゃん」

「うん、大丈夫。ありがと、なでしこ」

口ではそう言っても寒いものは寒い。

身体は厚着すればどうとでもなるけど、手足だけはやっぱり寒くなってしまうのが冬のツリーリングの嫌なところ。

「そういや二人ともバイクだもんなあ。どつかに足湯でもあればいいんだが」

「そうですねえ……」

「あ、先生。わたしたちがいるスーパーからちよつと戻った安城岬つてところに足湯スポットがあるみたいです」

「お！ でかしたぞ恵那！」

「でしたら、ちよつと休憩してから行きましようか。まだ時間もありませんしね。みなさんもそれでいいですか？」

先生の提案にみんなでうなづく。そういえばあれ言つてなかったな。

「先生、休憩終わつたらキャンプ場までボクたちが先走つてもいいですか？」

「わたしからもお願いします」

「そういえば西伊豆スカイライン走りたいと言つてましたもんね。わかりました。お二人なら平気でしょうが、くれぐれも気をつけてくださいね」

「はい」

どうせだし今朝行つたルートとは違う道から行つてみよう。

たしかここからちよつと走つたところから山道に入れたはず。そこから行つてみる

か。

「んじやあ先導頼むぜ！ お前ら」

「あんまりうちらのこと置いてかないでな」

「うい」

「はーい」

「ふふつ、じやあそろそろ出発しましよつか」

そう言つて、先生はにっこりと笑つた。

安城岬で冷え切つた足を温めたあと、ボクたちは西伊豆町を離れ県道59号線を北上。今日のキャンプ地であるだるま山高原へと向かいはじめた。

伊豆の大地に敷かれた道は、どれも個性的で同じような道は一つとない。

目も回るようなワイディングや、緩やかな山道。そして太平洋の荒波を間近に走る海岸線。

スロツトルを回すたびに、目まぐるしく変わっていく景色。青や緑、白や黒。冬と春の入り混じつた色彩がボクたちを包みこんでは消えていく。

ボクたちが走っている西伊豆スカイラインも、そんな道の一つだった。

『すげえ綺麗……』

「だね……」

エンジンの音を響かせながら、目の前光景に息を呑む。

『空の上、走ってるみたいだな……』

リンの言葉に静かにうなづく。

県道127号線、西伊豆スカイライン。

仁科峠と船原峠を越えた先に待っていたのは、文字通り空の道だった。

なだらかな稜線に沿って敷かれたどこまでも続く道と、手を伸ばせば掴めそうな雲を
ゴーグルのレンズを通して眺める。

ギアを上げながら緩やかなカーブを曲がる。眼下に広がる伊豆の山々が否応なしに
ボクのテンションを上げていく。

そうして走っていると、なんだかゴーグルをしているのがもったいなくなつてゴーグ
ルを押し上げる。スモークのかかっていた視界がクリアになる。

雲の白さ、空の青さ、アスファルトのひび割れ、枯れ草の乾いた色。目に映る全てが
鮮明になつてボクの目に飛び込んで消えていった。

ものすごく冷たくて、思わずゴーグルをつけたくなるけれど、なんだかもったいない気がして必死に目を開けて目の前の景色を頭に焼きつけていく。

「綾乃にも見せてあげたかったなあ」

今ごろコンビニでひいひい言ってるだろう友だちを思い浮かべ口元を緩める。自慢したらきつとوراやましがるんだらうなあ。

『また来ようよ。今度は3人……いや4人か』

リンが言う。

ボクとリンと綾乃、そして今ごろ車の中で目を輝かせているだろう女の子。

「うん！ また行こうね！」

いつ行こうかな。夏かな、秋かな、それとも春かな？ 考えるだけで楽しみになってくる。

モノクロの未来絵図に色を塗りながらスロットルを回していく。

50ccのエンジンが白煙を撒き散らしながら唸り、17インチのタイヤが溝を削りながらアスファルトを蹴りつける。

小さなボクと小さなバイク、小ちやなボクたちが、伊豆という大きな大地を進んでいく。

だるま山はすぐそこだ。

「い、い、くり……」

息を呑みながら、そつとステンレスの型を抜いていく。型を抜き終わると、フライパンの上にフワフワのパンケーキが現れた。

竹串を刺して生焼けしてないか確認……よし。大丈夫そうだ。あとは両面をきつね色になるまで焼いてつと……

「みんなー！ パンケーキできたよー」

「へえ、どれどれ？」

料理の準備をしていた千明たちが興味津々に近づいてくる。そしてお皿の上の分厚いパンケーキに目を丸くした。

「おっ！ すげえなこれ！」

「ほんとだ」

「でしよでしよー」

「めっちゃ分厚いなおい」

「お店みたいだねえ」

ボクを褒める声に思わず鼻が高くなる。

あれからボクたちは西伊豆スカイラインを通り抜け、無事だるま山高原にあるキャンプ場へとたどり着いた。

そして、仕事は終わったと言わんばかりにお酒を飲もうとした鳥羽先生を、なでしことおおいとあかりの3人とともに車に追いやり観光に行かせた。

理由はもちろん2人の誕生日パーティーの準備のためだ。

「これすごい分厚いね。4センチくらいあるでしょ。あ、写真撮っていい?」

「ふはは、もつと褒めたまえー」

「うわ、めっちゃドヤ顔」

お菓子作りはボクの数少ない特技の一つなのだ。

ちなみにほかの特技はゲームの徹夜とバイクの押しがけだ。うん、ろくな特技がねえ。

「久しぶりにメレンゲ作ったら腕パンパンだよー あとのデコレーションはお願いしてもいいかな?」

「わかった。恵那、手伝ってくれる?」

「りよーかい! じゃあいつちよやりますかー」

「うい」

デコレーション用の生クリームのスプレーや果物を持って誕生日ケーキの作成に取

り掛かる2人を横目に千明のところに行く。

「千明、盛り付け手伝うよ」

「お、サンキューな。でもごめんなあ、昨日も料理番だったのに手伝わせちまってよ」

「大好きな友だちの誕生日なんだもん。手伝うに決まってるよ」

「友だち……そっか、友だちだもんな！」

ボクの言葉に千明はそれはそれは嬉しそうに何度もうなずいた。

「よし！ そんじゃあ、あいつらの目玉が飛び出るくらいすげえの作ってやろうぜ！」

「うん！」

そう言つて、ボクたちは目を見合わせて、ニカッと笑い合ったのち料理の準備に取りかかるのであった。

そして……

『誕生日おめでとー！』

寒い寒い夜の高原に、ボクたちの祝いの言葉が鳴り響く。

「えへへ、ありがとみんなー!」

「みんな、ほんまありがとうなあ」

なでしことあおい、今夜の主役の前にさつき作ったケーキが運ばれる。

ただのパンケーキだったそれは、リンと恵那の手によって、ホイップクリームと果物で綺麗にデコレーションされたパースデーケーキへと変貌していた。

「わあ、ケーキだー!」

「みんなで作ったんだよー!」

「誕生日プレゼントもあるよ」

「えっ! なにそれ! 見せて見せて!」

「見てもいいけど蝋燭ケーキに垂れるぞ」

「あつ、そうだった! あおいちゃん! 一緒にふーってしよー!」

「ふふつ、せやな!」

顔を見合わせて嬉しそうに笑うなでしことあおい。この笑顔を見ただけで、準備したかいがあつた。

「さあさあ、なでしこちゃん、あおいちゃん、ひと思いにフーってしてやってくださいー」

「なんだその言い方……」

「こつちのほうが個性的でいいかなーって。あ、先生、動画撮ってもらってもいいですか

「？」

「ええ！ もちろんです」

恵那の頼みに先生が笑顔でスマホのカメラをかかげる。

ほんと、昨日から先生にはお世話になりっぱなしだなあ。旅が終わったらちゃんとお礼しないとね。

「いいですよー！」

始まる誕生日の歌。寒い夜の高原がポカポカと暖かい喜びに包まれる。

そんな暖かい空気の中、1人昨日から始まった旅を振り返る。

たった2日だけど、本当にいろんなことがあった。いろんなものを見た。

どれもこれも目新しいものばかりで、楽しくて楽しくてしかたなかった。

本当に綺麗なものをたくさんみた。来てよかった。心からそう思う。

だけど……

「いくでーなでしこちゃん！」

「じゅんぴオツケーだよ！ あおいちゃん！」

どんな絶景よりも、どんな景色よりも、今日の前にいる2人の笑顔のほうが、ずっとずっと、とてもとても綺麗なものは、わざわざ言うまでもないことだろう。

「せーのー！」

だってボクの大好きな友だちだもんね！

25話 ただいま 0円（おかえり）

25—1

突き刺すような寒さの中、息を吐く。白く濁った息が、暗く静かな薄闇に溶けていく。歩きながら後ろを振り返る。

緩やかに、けどたしかかな存在感を持つてうねる西伊豆の山脈。

果てしなく続く稜線を眺めていると、まるで自分が鯨の背の上にも乗っているような、そんな気分になった。

「えっほ、えっほ」

そんな静かな世界で、ひとときわ元気な掛け声がこだます。

「だっるつまっやま〜」

楽しそうに歌を歌いながら山を登っていくなでしこ。まだ日の出前だというのにすごい元気だ。

「暗いんだからあんまはしゃぐなよ」

「はーい！ だつるつまつやま〜」

「ほんとにわかつてんのかあいつ」

ボクのちよつと後ろを歩くリンが先を行くなでしこにぼやく。

でも、そんなことを言うリンの顔は薄闇の中でもはつきりとわかるくらい綻んでいた。

「双葉、今何時？」

リンがボクにたずねる。ジャケットの袖を捲り時計を見る。

「5時半過ぎだよ」

「ありがと。日の出には間に合いそうだな」

「だね」

誕生日パーティーも無事に終わり、そして迎えた伊豆キャン最終日。

ボクたちは、だるま山の頂で最後の旅のはじまりを迎えようとしていた。

「リンちゃん！ 双葉ちゃん！ こっちこっちー！」

いつの間にか遠くまで行っていたなでしこがボクたちに手を振る。どうやらあそこ

が頂上みたいだ。

「リン！ ボクたちも早く行こー！」

そう言つてボクは振り返りながらリンに手を差し出した。

そんなボクに、リンはなにも言わず、少し微笑んでからゆつくりと手を握り返してくれた。

冷え切つた手がボクの手をしっかりと握る。

「じゃ、しゅっぱーっ！」

「……しゅっぱーっ！」

寒くて暗い、風の音すらしない朝のだるま山。

空気すら凍りつくような寒さでも、手のひらに感じる大好きな友だちの感触が、まるで春の朝日のようにポカポカとボクの心を暖めてくれるのであった。

「はい、できたよ」

「わあ、ありがとう」

「ありがとうね、リン」

マグカップをリンから受け取る。

カップに注がれた熱々の味噌汁から立ち上った湯気が、伊勢海老の濃厚な香りとともにボクもメガネを白く曇らせた。

火傷しないように気をつけながら味噌汁をひと口とする。

「……あ、おいしい」

口に含んだ瞬間、濃厚な海老の風味が口いっぱいになり、息を吐くと白い湯気とともにさつと通り抜けていった。

「……海老の香りすごいね。これ昨日の伊勢海老の殻使ってるんだよね」

「うん。ていうか出汁とるの2回目なのにちゃんと味出るんだな」

「でしょ？ 前にお母さんに教えてもらったんだ」

「ずず……うまい……」

「そうじゃろー？ うまいじゃろー？」

得気に笑うなでしこ。ボクも料理はかなり得意だけど、こういう応用はやっぱり敵わない。

ボクもまだまだ修行が足りないな。帰ったら料理の勉強でもしようかな。

3人で味噌汁をすすりながら、眼下に広がる伊豆の広大な大地を眺める。

薄闇の中にぼんやりと浮かぶ黒いシルエットを眺めると、ボクたちがいかにかちっぽけな存在なのかよくわかった。

「伊豆ってほんと広いよねえ。2人とも、走ってみてどうだった？」

「めっちゃ楽しかった」

笑いながらリンが言う。思えばリンも、会ったばかりのときに比べてずいぶん変わったよね。

「……そっかー あ、リンちゃん！」

「なに？ なでしこ」

「また行こうね！」

「……うん！」

……いや、変わったわけじゃない。ただ単に、好きなものが増えただけなんだ。

「双葉ちゃんは？」

なでしことリン、二対の瞳がボクを見つめる。ボクがどう思っているかなんて、そんなの今までの態度を見ればわかりきっていることだろう。

でもそうじゃない。大事なのはそういうことじゃない。

楽しかったら楽しかったと、嬉しかったら嬉しかったと言葉にする。思いを伝える。

キャラじゃないとか、柄じゃないとか、そんなのどうでもいい。ポツチもリア充も関係ない。

「すっごく楽しかったよー！」

2人の顔がパアッと笑顔に包まれる。

だって、友だちが嬉しそうにしてて、嬉しくならない人なんてこの世にいないもんね。
「また行こうね。今度は、綾乃も一緒にさ」

「うん！ 絶対行こー！」

笑顔でうなずくなでしこに、ボクも笑顔でうなずき返す。

さて、日の出まであとどれくらいかな？ 時計を見る。うん、あとちよつとだ。

そんなときだった。一陣の風が、ボクたち3人の背中を殴りつけるように吹いた。

「さむっ〜」

味噌汁をこぼさないように気をつけながら両腕で自分の身体を抱きしめる。

「さみい」

「さむいよねえ。あ、そうだー！」

隣のなでしこが勢いよく味噌汁を飲み干す。空になったカップを地面に置き、そして

……

「うお!?」

「わわっ!?!」

突然身体を引つ張られる。右腕に感じる暖かい感覚。

なでしこがボクたちを抱き寄せたのだと気づくのはそこまで時間はかからなかつ

た。

「こうすれば寒くないよね！」

「……ふっ、そうだな」

「だね」

3人で身を寄せ合つてもうすぐ見えるだろう朝日を待ちわびる。千明たちもそろそろ来るかな？

「ひい、ひい、や、やつと着いたあ」

「お、思ったよりきつかったねえ……」

「せ、せやなあ」

噂をすればなんとやら、息も絶え絶えな千明たち一行が到着。

「さ、さみい〜」

「おつかれ。味噌汁、飲む？」

寒さに震える千明たちにリンが味噌汁をふるまい、6人で東の空の果てをのんびりで見守る。

「今日で終わりかあ。なんか寂しくなるなあ」

「なんちゆうかあつちゆうまやつたな」

「それなあ〜」

千明とあおいがこれまでの旅路を振り返るように言った。

東の空が燃え盛るように赤く染まり始める。星の丸みをなぞるように、赤く赤く燃える空。

もうじき日が昇る。また一日が始まる。

「楽しかったよねえ」

「だな」

「みんな！ 旅はまだ終わりじゃないよ！」

なでしこが立ち上がって元気よく言った。そうだ。旅は終わってない。まだ、やるこ
とが残っている。

「飯田さんにお礼しに行つて」

「チヨコちゃんモフモフしに行つて」

「そんでカピパラ温泉やあ！」

後ろから聞こえてきた一際元気な声に振り返る。車で寝ていたはずのあかりがそこにいた。

「お、起きたなーチビイヌ子」

「おはよーあかりちゃん」

「ふう、あ、あかりちゃん、ま、待って……」

遅れてやって来た鳥羽先生も合流して全員がそろった。

日の出まであとどれくらいだろ——

「みんな、見て！」

恵那の言葉にはつとまって空を見る。

夜のとほりを切り裂くように燃え盛る光が溢れ出す。

溢れ出した光が空を明るく染め上げて、目に映るなにもかもが美しく彩られていった。

「綺麗……」

誰かが言った。たぶん、ボクだったと思う。けど、誰が言ったかは大して重要じゃなかった。

だって、この場にいるみんながきつとおんなじことを思っているに違いないからだ。

「さーて、伊豆キャン3日目、張り切って行きますかー！」

「カピパラちゃん！ 待っててなあー！」

「ふふつ、あんたほんまそればっかやなー」

「チヨコちゃん待っててねー！」

「おいおい、恵那もかよ」

眩い日差しを一身に浴びて、みんなで顔を見合わせ、あははと笑い合う。

そこから先は、あつという間だった。

パパッと東伊豆にある大室山に向かい飯田さんたちと再会。

「山梨からよう来たなあー」

「ふふ、いらつしやい」

「この前は本当にありがとうございました」

みんなでお礼の品を渡して精一杯の感謝の気持ちを伝え、

「あはは、チョコちゃんくすぐったいよー」

「はっはっは、チョコは嬢ちゃんのこと気に入ったみたいだにー」

「こつちにもおいでーちくわー……あつ、ごめんチョコちゃん」

「そろそろ帰らんとあかんわこれ」

恵那がちくわ欠乏症にかかったりしつつ、お姉さんとチョコちゃんと一緒に大室山に向かい、

「おねーちゃん来たでー!」

「うん!」

『はーい、撮りまーす』

「ぴーす!」

あかりと一緒にリフトの上で写真を撮ってもらったり、

「みなさん撮りますよー！」

お姉さんに8人全員で富士山をバックに集合写真を撮ったりして時間はどんどん過ぎていった。

「かわええなあ、カピバラちゃん」

「せやなあ〜」

温泉に浸かってまどろむカピバラをみんなで眺める。

大室山を後にしたボクたちは最後の目的地である伊豆シャボテン動物園に寄っていた。

「あかりちゃん、よかったね」

「うん！」

待ちわびていたカピバラを前にして、あかりが嬉しそうにはにかむ。

そんなあかりの笑顔を見ると、こっちも嬉しくなって一緒に笑う。

「おねーちゃん！」

「うん、どうしたの？」

「またキャンプ、連れてってな！」

キラキラと目を輝かせてボクを見るあかり。この3日、ずっとはしゃいでたし、よっぽど楽しかったんだろう。

「もつちろんだよ！」

うなずきながらあかりの頭を撫でる。また一人キャンプ好きが生まれたってことなのかな？

「ついにチビイヌ子もキャンプハマったなー」

「あかりちゃん！ また一緒に行こーね！」

「みんなまた誘ってなあ！ 仲間はずれにしたらおこるでー！」

「はいはい」

そうしてカピバラのかわいさを堪能したボクたちはその足で触れ合いコーナーに向かい、

「あはは、く、くすぐったいよー！ だ、誰かたすけてー！」

「双葉ちゃん大丈夫!? い、今行くね！」

「いや、べつになんか嬉しそうだし行かなくていいんじゃないやね？」

「ほんまや、思いつきしにやけどるやん」

「そ、そんなー！」

「カピバラ……かわええ」

触れ合いコーナーでカピバラの大群に襲われて怖いんだかかわいんだかよくわからない目にあったりして、伊豆での最後のひと時を過ごすのであった。

「お前らーお土産買ったかー?」

道の駅の自動ドアから出てきた千明が、開口一番にそう言った。その両手にはパンパンに詰まったレジ袋がぶら下がっていた。

「ばっちりやでー! ていうかむっちゃこうてるやん」

「お金使っちゃったし、またバイトしないとねー」

「そーいや、そうだったなあ。忘れてたわ……はあ」

千明が財布の中身を覗いてげっそりする。そういえばボクいくら使ったんだろう。

……怖いから確認するのやめとこ。

「……あたし、この旅が終わったら宝くじ買いに行くわ」

「露骨にフラグ立てるのやめいや」

ふざける千明がおもしろくてみんなで笑う。

「そーいやチビイヌ子は?」

「車でぐっすり寝とるでー よっほど疲れとったんやろな」

「今日1日はしゃぎ回ってたもんなあ」

朝のだるま山、そして大室山に動物園。朝起きてから、あかりの笑顔が絶えることは

一度たりともなかった。

「それだけ楽しかったってことだよ」

「ふふっ、双葉ちゃんの言うとおりやな」

そう言つて、空を見上げる。昼下がりの空は昼間見たときよりも少しだけ暗くなつていた。

帰るころにはもう真つ暗になっていることだろう。

「……もう終わりかあ。なんか寂しくなっちゃうなあ」

「ほんまになあ」

楽しい時間つていうのはいつだつてあつという間に終わつてしまう。あれだけ楽しみにしていた伊豆キャンも、あとはもう帰るだけ。

旅が終わりを迎えようとしていた。

「お二人とも、本当にここまで大丈夫ですか？」

鳥羽先生が心配そうにたずねる。

先生たちはすぐそこにある大仁中央ICに入れば、あとは高速に乗るだけで帰れる。でもボクたちは原付。一緒には行けない。先生はそれが心配なんだろう。

「下道で一緒に帰つてもいいんですよ？」

「あ、いえ。あかりちゃんも疲れてるだろうし、早くお家に帰らせてあげてください」

「そうですか……わかりました」

了承しつつも、まだちよつと心配そうな顔でボクたちを見る先生。

「大丈夫ですよ先生。すぐそこですしね」

「いや、こつから山梨まで100キロくらいあるような……」

「なんだ、そんなだけでしょ。4時間くらいだよね」

リンがボクのセリフに乗つかるように言う。4時間か、それなら……

「あつという間だね」

「だな」

「お、お前ら……いや、もういいわ」

呆れる千明を横目に見つつ、ヘルメットを被つてビーちゃんを軽く点検しながら出発の準備を整える。

ガソリンは……うん、大丈夫そうだ。

そういうえば咲さんにもらつた携行缶使う機会なかったなあ。でもまあ、トラブルなんてないにこしたことはないし、それでいいのかも。

「リンちゃん、双葉ちゃん！ 寂しかったら一緒に帰つてもいいんだよ！」

「ほんとに大丈夫だって。リンもいるしね。ね？ リン」

そうやって、隣で準備を整えているリンの顔を覗き込む。

「……そうだな。もう、1人じゃないしな」

リンが言った。ヘルメットのバイザー越しに見える顔はそれはそれは優しげに微笑んでいた。

「えへへ、そっか」

「なんでそんな嬉しそうなんだよ」

「ふふ、なんでもないもーん」

「なんだそりゃ」

なでしこの気持ちだが、ボクにはわかる気がした。

1人が好きから、1人も好きに。変わったのはたったの一文字だけど、すごく嬉しい一文字だ。

「リン、もういい?」

「うん。いつでも行ける」

うなずきながらビーノに跨るリンに続いて、ボクのビーちゃんに跨る。

「よろしくね。ビーちゃん」

ボクがキックペダルを蹴り飛ばし、リンがセルスイッチを押す。

ぶるんと唸る2台のヤマハ。トトトと吹き出す白い煙。

旅立ちの時間だ。

「じゃあもう行くね」

「行ってくる」

スロットルを回して空吹かし。2ストロークのエンジンがぶるんぶるんとやかましく唸る。

「おう、事故つたりすんじゃねーぞー」

「気をつけてなあ」

「またね！ リン、双葉」

「気をつけてねー！」

見送りの言葉に手をシュツと振ってゆつくりと走り出す。ミラーに映ったビーノが、ボクに続いてゆつくりと走り出す。

エンジンを回しながらギアを上げていく。冷たい風がボクたちを包み込み、また後ろに流れていく。

旅が終わる。

暗闇に包まれた52号線をひた走っていく。右手に流れる富士川が月の光を反射して、一瞬きらりと輝いた。

時折やって来る車がテールランプの光の尾をなびかせながらボクたちを抜き去っていくのをぼんやりと眺める。

あの人も家に帰るところなのかな？

「こうやって知ってる道走ってるとき、なんていうか、ほっとするよね」
『わかる』

走りながらリンと話をする。

この道をまっすぐ行けば、ボクの家につく。なでしこたちはもう家でまったりしているところかな？

そういえば、お母さんはもう帰ってきているんだろうか。まあ、帰ればわかるか。

そっか、家か……

「もうすぐ、帰ってきちゃうね」

『……寂しい？』

前を走るリンが一瞬だけボクのほうに首を向けた。

「お見通しだね」

『わたしも、ちよつと寂しいからさ』

「そっか、リンもおんなじなんだ。うん、ちよつとね。だって、すつごくすつごく楽しかったからさ」

話していると、これまでの思い出がまるで洪水のように心の中に溢れ出してきた。

リンと、みんななどいゝんなところに行つて、いろいろな景色を見て、いろいろな食べ物を食べて……

楽しくて、楽しくて、ただ楽しくて。どの記憶をたどつても頭に浮かぶのはその3文字だけ。

『また、行けばいいじゃん』

リンが言う。

また行けばいい。たしかにその通りだ。今度はいつになるんだろうか。春だろうか、夏だろうか、それともまた冬だろうか……

「いつ行く?」

『春とか?』でも、どうせならアヤちゃんが二人乗りできるようになってから行きたいし、やっぱり3年になってからかな』

そのころにはボクたちはいつたいくつになつていゝるんだろうか。

いつまで、こうしていらゝれるんだろうか……

『双葉?』

「えん? あ、ごめん、なんでもないよ」

『……どうしたの?』

「べ、べつになんでもないよ」

『ふうーん』

一瞬頭によぎった考えを悟られないように必死にごまかす。せつかく楽しい旅だったんだ。最後まで楽しいままで終わらせたい。

『……べつに、誰も聞いてないよ』

けど、そんなボクの浅はかな考えなんて、リンにはお見通しだったみたいだ。

「えへへ、やっぱバレちゃったかあ」

『どれだけ一緒にいると思ってるんだよ』

「まだ半年も経ってないよ」

11月からはじまって、今日で5ヶ月。一緒にいたのはたったのそれだけ。

『そうだったっけ？ なんかもっと長いと思ってた』

「ずっといろんなところ行ってたもんね、ボクたち」

まるでパノラマのようにボクの脳裏に浮かんでは消えていく思い出の数々。

かけがえのないボクの宝物……

「ねえ、リン」

『なに？ 双葉』

「ボクたちさ、いつまでこうして一緒にいられるんだろうね」

ずっと思っていたけど、言い出せなかったことを告白する。

春が来れば2年生になって、夏になって、秋になって、冬になって、そしてまた春になって……

みんなそれぞれやりたいことがあって、やらなきゃいけないことがあって、そして……

楽しいから、楽しかったに変わっていく。そうやって、大人になっていく。なってしまおう。

「みんな、いつか離れ離れになっちゃうのかな？」

時がたてば人は変わっていく。ずっと一緒だと思っても、その時はいつも突然やってくる。

ボクはそれをよく知っている。

「……ごめんね、変なこと言って。早く帰ろっか。あはは、早く家でお風呂入りたいたいー肩バツキバキだよー」

ネガティブになった思考を空元気で塗りつぶしていく。こんなものはただの気の迷いでしかない。

家に帰って、お風呂に入ってゆつくりすればきっと元に戻っている。

視界が滲むのは、きっと夜風が目に染みるせいだ。

きつと、そうに違いない。

『双葉』

「えへへ、なに？」

『ちよつと、休憩しない？』

断る理由もない。

ウインカーを出すビーノについて行つて街灯の下の路肩にビーちゃんを停めた。

シートから降りて、ヘルメットを脱ぐ。寒い夜風がボクの髪を乱暴に撫で付けた。

エンジン切る。あたりがしんと静まり返る。

「さむさむ。リン、なんか飲——」

飲む？ そう言おうとした瞬間、ボクの視界が黒く染まった。

リンがボクを抱きしめていることに気がつくのには、大した時間はかからなかった。

「り、リン？」

いきなりのことに驚いて、身体を動かさそうする。

けど、そんなボクの行動は頭と背中に回されたリンの手によって阻まれた。

身体を動かすたびに、リンの腕がボクの身体をきつく抱きしめていく。

「り、リン、苦しいよー」

「離れ離れになんて、ならないよ」

不意にリンが言った言葉に、ボクの心はまるでナイフを刺されたみたいにくゅつと苦しくなった。

「ずっと、一緒にいればいいじゃん」

「ずっと、一緒に？」

リンの言葉が頭の中で反復していく。

「大人になっても、おばさんになっても、おばあちゃんになっても、ずっと、一緒にいればいいじゃん」

ずっと、一緒にいればいい。たしかにその通りだ。リンはただ当たり前のことしか言っていない。

ただどうしてだろう。なんでこんなに心に染み込んでいくんだろう。

リンの首元に顔をおしつけ、やり場を失って固まっていた自分の腕をリンの背中にそっと回す。

「ずっと、一緒にいてくれるの？」

「うん」

「おばあちゃんになっても？」

「う、うん」

「そっか……」

リンがそう言うなら、きつと本当にそうなんだろうな。なんだ、心配してたボクが馬鹿みたいだ。

無言のまま2人で抱き合う。

「リンの服、冷たいね」

「ずっとバイクで走ってたしな」

「このまま抱きついてたらあつたかくなるかな？」

「なるんじゃない？」

「じゃあ、そうしよっかなー」

ずっとこのままこうしていたい。そう思ったその時だった。

ピコン！ ボクとリンのスマホが同時に鳴る。

「誰だろう」

「どうせなでしこだろ」

「心配してるだろうし、連絡してあげよっか」

「だな」

そう言ってお互いに回していた腕を解いてスマホを取るために離れる。

「あつ……」

離れる瞬間、リンの腕の力が少しだけこわばったような気がしたけど、たぶん気のせいだと思う。

そして、そんなリンの腕を名残惜しいと思ったのも、きつと気のせいだと思う。

ポケットからスマホを取り出して、ラインを開く。

なでしこ：リンちゃん！ 双葉ちゃん！ 今どこー？

……

……

……

顔を見合わせる。それから、ボクたちは同時に微笑んだ。

「……帰るか」

「帰ろっか」

2人でうなずきあう。帰ろう、ボクたちの街に。待っている人がいるあの街へ。

なでしこにあと少しで帰るとだけ返信して、ヘルメットを被り直しビーちゃんに跨る。

南部町はもう目と鼻の先だ。早く帰ってゆっくりお風呂に浸かろう。

エンジンをかける。

「行くか……げっ」

ビーノに跨ったリンが急にうめき声をあげた。

「どうしたのリン?」

「ガソリン、やばいかも」

振り返ったリンの顔はさつきまでの雰囲気とは打って変わってものすごくげっそりとしていた。

「なくなりそうってこと?」

顔を青くしながらうなずくリン。

「たぶんこの調子だと身延までもたないと思う。うわあ、やつちまった……ここら辺のスタンドもう閉まってるだろうし……マジでどうしよう」

べつにそんなに心配しなくてもいいのに。だってあれがあるしね。

「大丈夫だよリン。あれ使えばいいじゃん」

「あれ?」

ボクはそう言ってビーちゃんから降りて、エンジンを覆うダウンチューブにくくりつけた携行缶を手にとった。

「リンのお母さんからもらった携行缶。まだガソリン入れたままだから、リンにあげる」

ボクがシルバーマメッキの携行缶を見せると、リンがはつとしたように目を見開いた。

「忘れてた。そうだった。ごめん、ありがと。マジで助かる」

「じゃあ入れちゃうね」

「あ、タンク開けるね」

「はい」

リンのビーノに携行缶にガソリンを入れていく。

「リットル分しかないけど、ビーノの燃費なら余裕で身延まで行けるだろう。」

「帰ったらお母さんにありがとって言っとこ」

「咲さんさままだねえ。よし、これで完了っと」

「ほんとにありがと」

「これで本栖湖での貸しはチャラだね」

「ふふ、そうだな」

顔を見合わせて笑う。1人だったら途方に暮れるようなトラブルも、2人でなら旅を

盛り上げるスパイスでしかない。

「じゃ、行こっか」

「うい」

エンジンをかける。静まり返った52号線に2台のエンジン音が鳴り響く。

再び走り出す。

ヘッドライトの淡い光に照らされた富士川街道を眺めていると、なんだか急にお母さ

んの顔を見たくなくなってきた。

『あ、あのさ双葉』

そんなことを考えていると、リンがふと話かけてきた。

「なに？」

『こ、このまま……』

「このまま？」

『……ううん、やっぱなんでもない』

「えー、気になるよー」

『言おうと思ったけどなんかどうでもよくなったわ』

そう言われると余計に気になるんだけど。

まあ、どうせここでボクがなに言ったって教えてくれないんだらうけどね。

っていうかどうせなに言いたいかだいたいわかってるし。

「リン」

『なに、双葉』

「また、2人つきりでどこか行こうね！」

『……うん！』

嬉しそうにうなづくリン。

『約束だからな!』

「忘れないよー!」

『絶対だぞ』

「はいはい」

大好きなリンとの約束だ。忘れるわけがない。

どこに行こうかな、なにをしようかな。そんな思いが溢れ出す。

『あ、ついた』

リンが指をさす。気がつけば、ボクの家ofすぐそばまでやって来ていた。南部町、ボクの住む町。

見慣れたたけのこタワーを見ると、なんだかすごいほつとした。

やっぱり家が一番だな。ボクは改めてそう思うのであった。

「リンちゃん! 双葉ちゃん!」

ふと、遠くのほうでボクたちを呼ぶ声が聞こえた。ボクたちはこの声をよく知っている。

ヘッドライトの光に照らされて、声の主があらわになる。

「リンちゃん! 双葉ちゃん! おーい、おーい!」

ボクたちの親友が、こっちに向かって手をぶんぶんと振りながらぴよんぴよんと跳ね

ていた。

なでしこだ。

『あいつ、もしかして待ってたのか？ 心配しすぎだろ』

「まあ気持ちはわかるけど、リンも人のこと言えないよね」

こっそりなでしこのソロキャンを見に行つたの忘れてないぞ。

『うぐ、まあそうだけどき。ていうか隣の人誰だ？』

「え、隣？」

リンの言葉で、ボクはなでしこの横にもう一人の人がいるのに気がついた。

その人は女の人だった。

ボクと同じようなメガネをかけて、ボクよりもちよつと身長が高くて、そしてなによりボクと同じような顔だった。

ううん、違う。この場合はボクが、似ているんだろ？うなあ。

まあ、誰かなんて、今さら言わなくてもわかるよね。だって、ボクのことをこの世で一番よく知っている人なんだから。

そう、ボクのお母さんだ。

スピードを落とし、2人の前に止まる。バイクを降りて、リンと一緒に2人の前にいく。

そっか、本当に帰ってきたんだな。なら、言うことは一つしかないよね。

「ただいまー！」
つてね。

どこまでも続く海岸線。果てしなく続く太平洋。

伊豆、国道135号。曲がりくねった道路を時速50キロで駆け抜けていく。

容赦なく吹きつける太平洋の海風に負けないよう、両足でしっかりガソリントankを挟みこむ。

家を出る前に磨いたばかりの青いタンクが、朝日を反射してキラキラと輝いた。

スロツトルを回す。2サイクル単気筒エンジンが毎分6000回転で振動、ブーツの靴底を規則正しく揺らす。

100メートルくらい先に休憩所が見えた。あそこで一旦休もう。

ギアを落とし、バイクを崖沿いの駐車場に止める。

エンジンを切る。火を消したばかりのエンジンは、まだパチパチと音を立てていた。

ちよつと高回転で回しすぎた。エンジンが冷めるまで少し休もう。

シートから降りてゴーグルを取り、ヘルメットを脱ぐ。

吹き荒れる海風がボクの髪をぐしゃぐしゃにした。

「あつたかい」

春の心地よい風に思わず目を瞑る。

崖側のガードレールに両手を乗せて、さんさんと降り注ぐ朝日を浴びてキラキラと光

り輝く大海原を眺める。

水平線、地球の丸みすらわかるほどの大パノラマ。相も変わらずこの世界は美しい。

「綺麗だな」

「だね」

隣のリングが、スマホをかかげて海をパシヤリ。

「双葉、こつち見て」

「はーい」

振り返りピースする。パシヤリ。シャッター音が鳴る。

「リンも撮ってあげるよ」

「ありがとう。でもあとでいいよ。どうせあいつらもうすぐ来るだろうし」

「そういえばさつき連絡あったもんね。今どこらへんかな？」

「リンちゃん、双葉ちゃん！　おーい！」

春の暖かさに負けないくらい、元気いっぱい声がボクたちを呼んだ。

声のほうに振り向く。2人乗りの青いエイプがボクたちの前に停まった。

「おはよーリンちゃん！　双葉ちゃん！」

「いえーいとハイタッチしてくるなでしこ。バイクがよつぽど楽しかったらしい。

「おはよなでしこ。それに久しぶりアヤちゃん」

「2人も、おひさー」

綾乃はそう言つて、にっこりとボクたちに笑いかけた。相変わらず元気そうだなによりだ。

今日は待ちに待った伊豆キャンリベンジ。

これまでいろいろあつたけど、ボクたちは相変わらず旅ばかりだ。

「それじゃあ全員集まったことだし！　出発しよっか！」

「「おー！」」

ヘルメットを被り、シートに跨る。

イグニッションスイッチをオン。メーターランプが淡く光り燃料計の針が動いていく。

キックペダルを足で引つ張りだし、蹴り飛ばす。春の日差しで暖まったエンジンが威勢よく唸り、白い煙が春の風に溶けていく。

それじゃあ行こっか、ビーちゃん。

「みんな行くよー！」

ギアを上げ、クラッチをつなぎスロットルを回す。

走り出す。ゆつくりと景色が流れていき、だんだんと早くなっていく。

風を切り、道路を蹴り、ボクたちは走り出す。ボクの、ボクたちの旅がまた始まる。

さあ、今日はどこに行こうかな！

ザ^{ボク}の旅

おし
ぎ。

おまけ ベルメゾン フォトアルバム 3,351円（税込）

自転車キャンプと春のハンバーガーセット（1）

リン：双葉、なでしこ、起きてる？

なでしこ：おきてるよー！

双葉：zzz……

リン：こ、こいつ、寝ながらスマホいじってやがる……！

リン：まあいいや。あのさ、伊豆キャンプのとき自転車でキャンプに行こうって言ったの覚えてる？

リン：よかったらさ、今度のテスト明けに3人で行かない？ 場所はそっちで決めて

いいからさ

双葉：いくー！

なでしこ：いくー！

リン：……………

リン：はいよ

自転車を担いで玄関の外にでる。銀色に輝くクロモリフレームが陽光を反射して鈍く輝いた。

「お前もひさしぶりだなー」

ボクはそう言つて、久方ぶりに世話になるもう一人の相棒の車輪をくるりと手で回した。

「さーて、荷物積みますかー」

銀色のランドナーをコロコロと転がし軒先に停め、今日のキャンプの荷物を積んでいく。

パニアバック、マットレス、寝袋、テント……前輪と後輪についている荷台に荷物を載せ、ロープで縛り付ける。

5分もしないうちに荷物を積み終わり、最後の仕上げに薄めたスポーツドリンクがたっぷりつまつたボトルと空気入れをフレームのホルダーにそれぞれ差し込む。

「これでよし」と

荷物を積み終わった自転車を改めて眺める。

前輪と後輪におつきな鞆をぶら下げ、荷台にキャンプ道具を満載したランドナーは独特の迫力がある。

やっぱりランドナーは荷物を積んでこそだ。この感じ、懐かしいなあ。

車体を軽く前後に動かしブレーキを確認。うん、ブレーキもとくに問題ないな。荷物のぐらつきもなしと。

「それにしても……」

空を見上げる。冬の空と違って、どこか柔らかさをを感じる青い空。

わたあめを千切って散らしたかのような白い雲がふわふわとボクの頭の上を流れていく。

「いい天気だなー」

キャンプをするのに、これほどいいコンディションはないだろう。

時計を見る。待ち合わせにはちよつと早いけど、もう行っちゃおう。

「じゃ、行こっか」

グレーの布張りのヘルメットを被り、使い込んだ指ぬきのサイクルグローブをはめる。

最近カリブーで買ったマウンテンパーカーの袖を肘までまくり、ハーフパンツの裾をキユツと絞つたら準備は完了。

サドルに跨り、ところどころはげた革張りのドロップハンドルに手をそえる。

使い込んでちよつと黒ずんだ白いスニーカーを、傷だらけのペダルのトゥークリップに差し込み漕ぎ出しやすい位置まで回す。

乗るのはずいぶんと久しぶりだけど、身体はちゃんと覚えてたみたいだ。

「忘れ物はなしつと……あ、そうだ」

首をくるつと玄関に向け、ドアの隙間からじーつとこつちを覗いてくるボクによく似た人影を見る。

……普通に外に出て見送つてくれればいいのに。不審者かもしくは心霊現象にしか見えないからやめてほしい。

まあいいけどさ。どうせいつものことだし。

「行つてくるね！ お母さん！」

手を振つてペダルを漕ぎ出す。

そんなボクに、お母さんもドアから手をにゅつと出して振り返してくれるのであった。

春真つ盛りの5月。

朗らかな春空の下、陽光をたっぷりと含んだ春の風を浴びながら、ボクはいつものように旅をしていた。

ペダルを漕ぐ。

フロントギアに噛み付いたチェーンが景気よく回り、チリチリと音を立てながら幅35mmのタイヤをぐんぐんと回していく。

久しぶりのバイクとはまた違う解放感に懐かしさを感じながら、ダウンチューブに取り付けられたレバーに手を伸ばす。

今ではめつきり使う人のいなくなったシマノ製のダブルレバー式シフターを奥に倒せば、後輪の変速機がガチャリと音を立て、ギアに噛み付いたチェーンをより小さなギアに巻き付けていく。

さつきよりも少し重くなったペダルを漕ぎ、世界をさらに加速させていく。

春の日差しを浴びながらしばらく走っていると、赤い屋根の一軒家が見えてきた。

玄関の側の駐車場には見慣れた青いSUV。最近知ったけどラシオンって言うらしい。そう、なでしこの家だ。

「お姉ちゃん、行ってくるねー!」

玄関が開いて、中から見慣れた桜色の頭がぴよこんと出てきた。なでしこだ。「あつ！ 双葉ちゃんだ！ おーい！」

リュックサックを背負ったなでしこが、ボクに気づいてぴよんぴよんと飛び跳ねながら手を振ってくる。

自転車旅だからなのか、薄手のスタジャンにショートパンツとラフな格好だ。

「おはよー」

そんななでしこにボクも手を振りながら挨拶。レバーを手前に起こしてギアを下げながらなでしこの前で停車する。

「おはよー！ なでしこ」

「おはよー！ 双葉ちゃん！」

パチン、につこりと笑い合いながらハイタッチ。

「にしてもずいぶん早いね。待ち合わせまでまだ30分くらいあるよ」

腕時計を見ながら言うのと、なでしこは照れ臭そうに頭をかきながら笑った。

「えへへ、待ちきれなくてこつちから迎えに行っちゃおうかなって」

どうやらボクもなでしこも考えることは大して変わらないみたいだ。

「あとはリンが来るのを待つだけだね」

「早くこないかなーリンちゃん」

そわそわしながら手で額の上にひさしを作り左右を見渡すなでしこ。

「あはは、まだこないでしょ」

たしかリンのお父さんが車でここまで送り届けてくれるらしい。

折りたたみ自転車に乗ってるって聞いてたけど、それなら車に積むのも簡単だろうな。

「そうだ！ 今からリンちゃんのこと迎えに行こーよ！」

「それ入れ違いになったら悲惨なことになるからやめようね」

握りしめた拳を胸元で構えやる気まんまんなでしこを諫める。

「あ、そっか。そだったね」

でへへと照れ臭そうに笑う姿は本当に楽しそうで、そんな姿を見てみると、ボクも自然と顔が笑顔になっていくのであった。

そうやって笑いつつ、今日の予定の話をしているとガチャリと横で音がした。

振り向く。なでしこの家のドアが開き、中からすらっとした美人が出てきた。

桜さんだ。

「あ、おはようございます。桜さん」

「おはよ、双葉ちゃん」

ボクが挨拶すると、桜さんは眼鏡の奥の瞳を細めながら優しくに微笑んだ。

「どしたの？ お姉ちゃん」

「忘れ物、届けに来てやったのよ」

首をかしげるなでしこに桜さんはなでしこに近づいて頭の上になにかを乗せた。

「わっ!?! ……ヘルメット?」

なでしこがきよとんとししながら頭の上に乗ったものをペタペタと触る。

桜さんがなでしこの頭に乗せたもの、それは自転車用のヘルメットだった。

水色のかわいらしいヘルメット。

ロードバイク用の穴のたくさん空いたやつじゃなくて、スケートボードに乗る人が被るような感じの丸っこい形。

春の空を連想させるような淡い水色がなでしこの桜色の髪にマッチしていてすごく似合っていた。

「それ、あんたが小学生の時使ってたやつ。遠く行くんでしょ？ ヘルメットくらいは被っていきなさいよ」

「あ、ほんとだ。わあ、懐かしいなあ。お姉ちゃん探してきてくれたの?」

「……べつに、たまたま押し入れの奥にあったの見つただけよ」

あ、目逸らした。

たぶん、ていうか絶対自転車でキャンプ行くつて聞いてわざわざ探したんだろうな。

「えへへ、そっかゝ ありがとうお姉ちゃん」

なでしこもわかつていているんだらう。お礼の代わりに嬉しそうに笑う。

「……どうしたの？ 双葉ちゃん」

「ふふ、なんでもないですよー」

そんな2人が微笑ましくてボクも思わず笑ってしまうのであった。

「そう？ そういえば、双葉ちゃんはヘルメットつて……持つてないわよね？」

ボクの頭を見ながらちよつと心配そうに眉尻を下げる桜さん。

「たしか家にまだあつたわよね……ちよつと待つて、今——」

「あー！ 待つて桜さん！」

家の中に戻ろうとした桜さんを慌てて呼び止める。

「大丈夫です。この帽子、ヘルメットなんで」

ボクはそう言いながら被つていているグレーの帽子を叩いた。コツンというプラスチックの音に2人が目を丸くする。

「えっ！ 双葉ちゃんそれヘルメットだったの！ ずつと帽子だと思つてた」

「でしょ？ ボクがこの自転車乗り始めたころにお母さんが買つてくれたんだ」

「触つてもいい？」

驚きながら触つていいかと聞くなでしこにうなずきながら言う。

「ほへえ、ほんとにヘルメットだあ」

まるでワンコのようにボクの周りをうろうろしながらヘルメットをコツコツと叩いていくのでしょ。

「なでしょ、頭響くからやめて」

「わわっ、ごめん！」

「……ふふっ、大丈夫そうね」

そんなボクたちを見て、桜さんは楽しそうに笑うのであった。

さてと、あとはリンさえ来れば……

「あ、リンちゃんだ！ おーい！」

噂をすればなんとやら。

なでしこが飛び跳ねながら手を振る先で、見覚えのある車が近づいてきた。

運転する涉さんの横でリンがボクたちに手を振る。これで役者は全員揃ったってわけだ。

さてと、今日はどんな旅になるのかな？

ボクは空を見上げながら、これからはじまる旅に思いを馳せるのであった。

「リン、忘れ物とかは大丈夫かい？」

「ううん、大丈夫。ありがとうお父さん」

車のハッチから取り出された折り畳まれた自転車を組み立てながら、リンが渉さんに言った。

「こつちもなでしこと同じく、薄手のパーカーに6部丈のデニムと動きやすそうな格好だ。」

「わかった。じゃあ明日になったらまた迎えに行くね。帰ってきたら連絡よろしく」

「はい」

「それじゃあ、双葉さん、なでしこちゃん。リンをよろしく頼むよ」

「各務原なでしこ！ 任されましたー！」

「はっ！ 必ずや娘さんを五体満足で送り返してみせます！」

「そう言つて渉さんに敬礼をするボクとなでしこ。」

「……言つとくけどお前ら、これから行くのただのキャンプ場だからな。戦場じゃないからな」

「そんなボクたちをリンがいつものように冷めた目で見て、

「ははっ、2人とも元気そうだなによりだね。それじゃあ僕はもう行くね」

渉さんも楽しそうに笑うのであった。

「あ、そうだリン」

帰ろうとしていた渉さんが、なにか思い出したかのように言った。

駆け足で車に戻ると中から頭ほどの大きさのある白い物を持って戻ってきた。

どこかデジヤブを感じさせるやり取り。ボクの予想だとこのあとは……

「はいこれ」

渉さんがリンに手に持った物を手渡す。

「なにこれ？ ……ヘルメット？」

渉さんが手渡したものの。それはなでしこのときと同じく自転車のヘルメットだった。

空気穴のたくさん空いた、メロンパンみたいな見た目のよくある自転車用のヘルメットだ。

トだ。

「あれ？ こんな家にあつたつけ？」

「こんなものなにも、それ買ったのリンだろ？ 覚えてないのかい？ キャンプはじめ

たばかりのころ、自分で買ってたじゃないか」

「言われてみれば……うーん、買ったようなないような……」

「押し入れに入れっぱなしだったのを母さんが見つけてくれたんだよ？ せっかくな

だから被っておきなさい」

「……そっか。あとでお母さんにお礼言つとかないとな」

こめられた意味を受け取って、リンがどこか嬉しそうに微笑む。どこの親も、考えることはけつきよく同じってことか。

ボクは頭に被ったヘルメットをコツンと叩きながら、このヘルメットを買ってくれた人のことを考えた。

なんか、いいお土産あつたら買って帰ってあげよう。

そう思うボクなのであつた。

「よし、こんなもんだな。おまたせ」

白いヘルメットを被ったリンが、キャンプ道具を積み込んだ自転車に跨りながらボクたちを一瞥する。

「すげえ久しぶりだな。チャリに道具積んでキャンプ行くのなんて」

リンが自転車のハンドルに手を添えながら、昔を懐かしむように笑う。

「わたしと初めて会ったときも自転車だったよねえ」

「そういえばそうだったな」

「懐かしいよねえ」

リンはキャンプしに行った。
なでしこは富士山を見に行った。

ボクは本栖湖を見に行った。

それはまったくの偶然で、ちよつとでも歯車がズレていたら、ボクたちはきつと出会わなかつただろう。

まるで奇跡としか言いようがない偶然。いや、本当に奇跡だつたんだろうな。

あの日はそんな素敵な日だつた。ならきつと……

「じゃ、行くとするか」

「しゅっぱーっ！ しんこー！」

「おー！」

今日も素敵なことが起こるに違いない。

「行つてくるねーお姉ちゃん！」

そんな確信めいた予兆を感じながら、自転車のペダルに足をかける。

荷物は積んだ。道は覚えた。空は晴れ、風が気持ちよく吹いている。こんな日はきつと、最高に楽しいキャンプになるだろう。

「3人とも、ちよつといい？」

今まきに出発しようとするボクたちを桜さんが呼び止める。その手に持ったスマホ

がボクたちに向けられる。

なにをしたいのかなんて、聞かなくてもわかる。

「「いつてきまーす!!」」

3人で、ニカッと笑ってピースサイン。パシヤリと撮られる一枚の写真。

桜さんがふつと微笑む。きつと、素敵な一枚になったんだろう。あとでボクにも送ってもらおう。

「3人とも、気をつけてね」

手を振って走り出す。

ペダルを漕げば、チリチリと音が鳴ってタイヤがぐんぐんと回っていく。

眼鏡の向こうに広がった、春の朝日をたつぷりと浴びた世界。

視界に飛び込むなにもかも色が色づいて見えて、そんな世界を走っていると、なんとも言えない高揚感が全身を隈なく包み込んで、風に流され消えていく。

流れる雲を、瞳で追う。シフトレバーを指で押す。走っていく。

若草が瑞々しく背を伸ばす春の南部。水面に浮かぶ青々とした稲苗を横目に眺めながら、ボクはクラシックをクルクルと回していくのであった。

自転車キャンプと春のハンバーガーセット（2）

静岡に向かって52号線をひた走っていく。

ペダルを漕げば、タイヤがシャーシャーと音を立てて回り、暖かい風と心地よい太陽がボクたちを包み込んでいく。

「えへへ、楽しいね！ リンちゃん、双葉ちゃん」

前を走るなでしこが、楽しそうにペダルを漕いでいく。

いつも見送ってもらってばかりだったから、こうして背中を追いかけるのはなんだか新鮮だった。

「そーいやなでしこ。今日どこ行くんだっけ？ 川沿いってのは聞いてるんだけど」

ボクの後ろを走るリンがなでしこに聞く。

「えっとね、興津川の上流にあるキャンプ場だよ。無料で、しかもちよつと先に温泉があるんだって」

「なにそれ、めっちゃいい場所じゃん」

「でしよ〜 アヤちゃんが教えてくれたんだあ」

綾乃かあ。そういえばこの前そんな写真送ってきてたっけ。

琵琶湖行ったり千葉行ったり、吊り橋巡りしたり、もうすっかりベテランキャンパーだ。

52号線から眺める身延の山々は、どれも瑞々しく輝いていて、空の上で輝く太陽に、ハンドルに取り付けたベルがキラリと輝く。

「気持ちいいなあ」

ペダルを漕ぎながら、そつとつぶやく。やっぱ自転車も好きだな。改めてそう思う。

速くはない、走るたびに疲れて、なにかと不安定。バイクのほうが乗り物としての利便性は圧倒的に上。

だけど、息を荒くして、心臓の鼓動とともにペダルを回していく一体感は自転車でしか味わえない。

「たまにはお前も乗ってやるか……」

ハンドルを握りしめつぶやく。よーし、ちよつと本気、出しますか。

走りながらダウンチューブのシフターに手を伸ばす。左側のレバーを掴み、手前に引く。

ガチャリ、フロントのギアが3段に変わり、ペダルが一気に重くなる。ドロップハンドルの下を掴み、腰を持ち上げる。

そして漕ぐ。思い切り漕ぐ。

引き足と踏み足をフルに使い、車体を左右に小刻みに振りぐんぐんと加速していく。

「あ、おい！」

「待つてよー双葉ちゃんー！」

「ふーははー！ 2人とも、おっさききー」

ぐんぐんを通り越して、ぎゅんぎゅんと加速していく車体。2人には悪いけど、ちよつとお先に行かせてもらおう。

ごうごうと耳元を騒がす風切り音。じゃーじゃーと猛烈な勢いで回転していく車輪。

きつと40キロくらいは出てるだろう。太めのタイヤを履いてるとはいえ、やつぱ怖いなあ。

荒れた息。脈打つ心臓。額に滲んだ汗が春の風に流されて乾いていく。

「ふう……ふう……」

久しぶりだからちよつと疲れてきた。いいかげん普通に漕ごう。さて、どんくらい離れたかな。

後ろを振り返る。

ボクのすぐ後ろを走るなでしこと、はるか後方で豆粒のよう小さくなったリン。向こう折りたたみ自転車だし、ちよつと大人気なかつたかな。

……

……

……

「……あれ？」

なんか、おかしくない？ 落ち着け、もう一度見てみよう。

すぐ後ろで追走するなでしこ、だんだん近づいてきたリン……

うん。なんで、なでしこいるの？

「わああん！ 待ってよお！ 双葉ちゃん！」

べそをかきながら猛烈な勢いでペダルを回すなでしこ。

……おかしいなあ。

ボク今少なくとも30キロ以上は出してるはずなんだけどなあ……

「お前ら、いきなりペース上げんなよ」

あ、リン来た。ていうか、リンも速くない？ さつきまで50メートルくらい離れて

たよね。

「やっぱ身体動かすと気持ちいいね！ そーだ！ 3人で次の信号まで競争しよ！」

負けた子がジューズ奢り。そう言いながらでしこがボクを軽々と抜き去っていく。
「あ、おい！……つたく、しようがないな——！ 双葉、行こ？」

リンがボクを抜き去っていく。

おかしいなあ。リンが乗ってるの、ただの折りたたみ自転車のはずなんだけどなあ。

「あ、あはは……」

もしかして、ボクは実はとんでもない子たちとサイクリングをしちゃっているのではないのだろうか。

「双葉ちゃん！……こっちこっち——！ 川綺麗だよ——！」

って、もうあんな先まで行ってるし！

「待ってよ2人ともお——！」

ギアを下げ必死にペダルを漕ぎながら、2人に追い縋る。あ、やばい、足疲れてきた。
あーもう！ 調子に乗るんじゃないやなかつた——！

5月、富士川街道。ボクの情けない悲鳴が春の風にかき消されていく。

ちなみに勝負には負けた。ぶっちぎりでビリだった。ちくしよー、おぼえてろよお

(息切れ)

「ふっ、ふっ」

左右を杉の木々に囲まれた登り坂を息を荒くしながら登っていく。

富士川街道を8キロ走っていくと、そこはもう峠道だ。

いつもなら原付で楽々と登っていた道も、キャンプ道具を積んだ自転車でとなると、けっこうな重労働になる。

一番軽いギアで、なるべく体力を消耗しないようにリズムよく漕いでいく。

「チャリだと、こんな、きつかったっけ！」

「わ、か、るっ——！」

リンとひいひい言いながらきつい登り坂を登っていく。

静岡と山梨を結ぶ峠道は、春とはいえひんやりとしていて、冷たい空気が火照った身体に心地いい。

「見て見て——！ 富士宮市だっ——！」

ちよつと先を走るなでしこが、楽しそうに青と白の道路標識を指差す。

「しぐれ焼き、また食べたいなあ〜」

「……あいつ、なんであんな平然としてやがるんだよ……」

キャンプ道具を満載したリュックサックというハンデを背負っているのにもかかわらず、楽しそうに漕いでいくなでしこにリンがげっそりとする。

「リン、ボクたちはボクたちのペースで行こう。じゃないと、死ぬ」
「……だな」

ちよつと喉が渴いた。フレイムのホルダーに差し込んだボトルを手に取り、走りながらスポーツドリンクを流し込んでいく。

うん、ぬるいけどおいしい。

「リンも飲みなよ」

「ごめん、ありがと」

ちよつとスピードを落としてリンに横付けし、ボトルを手渡す。

「あれ？ これどうやって飲むんだ？」

ボトルを眺めながら首をかしげるリン。

そっか、自転車乗ってる人じゃないとこういうのあんまり使う機会ないもんね。

「押せばそのまま出てくるよ」

ボクが教えるとリンが飲み口を口につけ、ごくごくと飲み始めた。

「うめえ、ありがと」

返されたボトルをまたホルダーに戻す。自転車はこうやって走りながら飲み食いできるから楽しいんだよなあ。

「そろそろちよつと休憩したほうがいいかもね。たしか、この先にコンビニあったはず

だし、そこでちょっと休憩しようよ」

ついでにちよつと食材も買っておこう。まあほとんど持ってきてるから大丈夫だろうけど。

「ういーにしても……」

リンがしんどそうな顔でペダルを漕ぎながら前を見る。

「ふつじのみやく しつぐれやく」

前から聞こえてくるなでしこの楽しそうな歌声。ボクたちは額に汗を滲ませひひい言ってるというのに……

「めちやくちやく元気だな、あいつ」

「だよねー」

このキャンプが終わったらちよつと自転車に乗る機会を増やそう。そう思うボクであつた。

髪をなびかせながら、長い下り坂を駆け降りていく。

「ふおおおー！」

前を走るなでしこが楽しげに叫ぶ。

「あんまスピード出しちゃダメだからねー」

「はーいー」

前輪と後輪のブレーキを交互に効かせ坂を降りていく。

バイクと違ってちよつと握り込んだだけで簡単にタイヤがロックしてしまうから、慎重にブレーキを握っていく。

とはいえ、重い荷物を積んだ自転車だ。スピードはみるみるうちに上がっていった。

風とともに流れていく山の景色。朗らかな風が滲んでいた汗を吹き飛ばしていくのがなんとも心地いい。

着込んでいたパーカーのジッパーをちよつと下ろす。流れ込んだ風が熱くなった身体を冷やしていく。

流れる雲。爽やかな風。青い空に心地よい日差し。

ゴーグルをしていないせいなのか、それとも速度が遅いせいなのか、いつも走っている道なのに、見え方がまるで違う。

「たまには自転車も悪くないな」

後ろを走るリンが言う。ボクにはリンの気持ちがよくわかった。

同じ景色のはずなのに、乗り物が違うだけでこんなにも違って見える。それがなんだかおもしろい。

遠くに行くだけが、旅の楽しみじゃない。そういうことなんだろう。この2人いると本当にいろんなことを教えられる。

「リンー！ 誘ってくれてありがとうねー！」

「……ふっ、どういたしまして」

リンが言う。

後ろを走っているから顔は見えなかったけど、たぶんきつと、笑ってくれているんだろうな。

そんなことを考えながら身延道をどんどんと南下していく。

「……およ？」

カントリークラブの入口を通過したところでなでしこが不意に自転車を停めた。

「どうしたのーなでしこ」

たずねるボクになでしこが無言で指をさす。指の先には木でできた看板が立ててあった。

「人情あつい、茶の里実原……」

「お茶は急須が一番ずら……」

看板の手書きの文字を2人で読み上げる。

看板のとおりよく見ると看板の横に茶畑がある。そういえばここら辺お茶が有名

だったっけ。

「双葉ちゃん、喉渴いたずら」

「なでしこ、スポドリ飲むずら」

「ありがとずら」

「お腹空いたずらね」

「この先のコンビニで休憩するずら」

「さんせーずら」

「お前ら、早く漕げずら」

写真を一枚撮って、先を行くりンを追いかけて走り出す。

そんなボクたちの上を飛行機が一機、雲を引きながら飛び去って行くのであった。

「「いただきまーす」」

パクリ、3人でアメリカンドッグにかぶりつく。

ほんのりと甘いサクサクの生地と、魚肉ソーセージの塩気が疲れた身体に染み渡っていく。

「いつ食べてもおいしいよねい。アメリカンドッグ」

「なーんか、たまに無性に食べたくなるよねえ」

「あー、それなんかわかるな」

「でも、なんでアメリカンドッグなんだろうね」

「わかんないけど、なんかアメリカっぽいよね。ソーセージに生地つけて揚げるとか、いかにもアメリカン人って感じじゃん」

「アメリカン人かあ」

「アメリカン人だな」

「うん、ただの言い間違えだからね。そんな何回も言わなくていいからね」

コンビニをあとにする軽トラックを目で追いかけているが、残ったアメリカンドッグに齧りつく。

顔が熱いのは気のせいだ。気のせいだったら気のせいなのだ。

そんなボクたちの前をいろんな荷物を積んだトラックが走り去っていく。ここら辺は工場や倉庫がたくさんあるから、走るとき気をつけないとな。

「まあでも、なにもつけないで食べるとちよつとくどいな」

そう言いながらリンがなにもつけてないアメリカンドッグを齧る。

わけあってボクたちは買うときについてきたケチャップとマスタードをつけずにたべていた。

「Hey! リンちゃんや、真のキャンプのためには我慢も必要なんじゃよ! HAH
AHA!」

「アメリカンお婆ちゃん……」

楽しそうに話す2人を眺めながら、停めてある自転車に目を向ける。

グレーと赤の折り畳み自転車。なでしこの自転車はしよっちゅう見てるけど、リンの自転車を見るのは初めて会ったとき以来かもしれない。

あのときは暗くてよく見えなかったけど、今ならよく見える。あ、この自転車よくみたら……

「今気づいたけど、2人ともダホンの自転車乗ってるんだね」

「へっ? 駄本?」

ボクの言ったセリフになでしこが首をかしげる。あつてるんだけど、なんかニュアンスが違う。

「ダホン、アメリカの折り畳み自転車のメーカーだよ。なでしこのは前から知ってたけど、リンもそうだったんだね」

「へえ、わたしお父さんが買ってくれたの乗ってただけだから知らなかったな」

「けっこういいやつだよ。乗りやすいでしょ?」

「言われてみればたしかに、ママチャリより全然走りやすいな」

「そっかあ、リンちゃんとお揃いなんだあ。えへへ」

「なんでそんな嬉しそうなんだよ……ていうか、わたしのチャリより双葉の自転車のほうがすごいだろ」

そう言いながらボクの自転車を観察するリン。たしかに、ロードバイクけっこう見かけるけど、ランドナーはあんまり見る機会ないだろうな。

「鞆4つもついでるし、前のギアとか3枚あるし、どこのメーカーなの？」

めっちゃ荷物積みやすそうと、リンがうらやましそうに見てくる。

「これ、ボクも詳しく知らないんだ。お母さんは知り合いの自転車職人に頼んで作ってもらったって言ってたけど」

自転車のサドルを叩きながらこの自転車について知っていることを話す。

「えっ!? 双葉ちゃんこれ手作りなの?」

手作り自転車というパワーワードになでしこが目を見開いて驚く。まあ普通そうだよな。

「うん、みたい。鋼材溶接して作ったんだって。ボクのお母さんの体格に合わせてフレーム作ってあるからすごい乗りやすいんだ」

普通この手の自転車って最低でも150cmくらいはないとかなり乗りづらいはずなんだけど、これはそんなことは一切ない。

きつと身体を隅々まで採寸してミリ単位で調整したんだろう。まさに職人の腕が光る逸品だ。

……でも、なんでそんな人と知り合いなんだろう、ボクのお母さん。ほんと、謎すぎる。「そろそろ行くか。そういえば今どのくらい走ったっけ」

串にこびりついた衣のカスを齧りながらリンが言う。

「たしか、15キロくらいだったはず。キャンプ場まで40キロだから……」

「三分の一つとところか。久しぶりだからやっぱ疲れるな」

そう言いながら腕や足を伸ばすリン。きつと原付なら楽勝なのにか思ってるんだろ。まあボクもだけど。

「明日絶対筋肉痛だろうねー」

「うぐつ……まあしょうがないか」

「温泉浸かればきつと大丈夫だよ！ それにお父さんも言ってたよ！ すぐに筋肉痛になるのは若さの証拠だって！ 誇っていいんだぞって！」

微妙に哀愁の漂うなでしこパパの言葉になんとも言えない感情に包まれる。

「……とりあえず行くか。筋肉痛にならないうちに」

ゴミを片づけ、リンがスポーツドリンクをひと口飲んでから自転車に跨る。ボクもボトルからひと口。

よし、残り25キロ、頑張つて走るとしよう。

「しゅっぱーっ！」

「おー」

走り出すまでしこ。そんなまでしこに続いていくボクたち。目的の地は未だ見えず。

燦々と輝く陽光に照らされた興津川を横目で眺めながら、キャンプ場を目指し自転車を漕いでいく。

あれからコンビニをあとにしたボクたちは、52号線を下り興津川を渡ったのち75号線に入った。

ボクが覚えているかぎり、この道を走るのは初めてだ。初めての道を走るのは、いつだって気分が高鳴る。

「わはあ」

「おお……」

それは2人も例外じゃないみたいだ。前を走るまでしこことリンから楽しそうな声がする。

表情は見えないけど声と雰囲気では想像はつく。

降り注ぐ太陽と風を浴び、高鳴る鼓動に身を任せてペダルを漕いでいく。もうちよつとスピードがほしいな。

漕ぐのをやめレバーを奥に向かってめいっばい倒す。変速機がスパンスパンとギアを変えていき、ペダルが一気に重くなる。

ペダルを漕ぐ。目まぐるしく変わっていく景色。進めば進むほど、濃くなっていく草花の匂い。

ほのかな期待が、大きな期待に変わっていく。

「よーしー！ キャンプ場までこのまま一気に引っちやおー！」

「おー！」

「……おー」

灰と赤、そして銀。6つのタイヤを転がして、ボクたちは川を上って進んでいく。

ペダルを漕げば漕ぐほどに、風を受ければ受けるほどに、山は濃く、そして深くなっていく。

はじめはちよろちよろと流れているだけだった興津川も、今ではすっかり大きな流れになっていた。

「あつ、2人とも！ みてみて！」

先頭を走るなでしこが左のほうを指差す。なにか見つけたみたいだ。

「……あれって」

「吊り橋、だね」

ききいと音を鳴らしながら自転車を止め、コンクリート作りの堤防から向こう岸に架けられた小さな吊り橋を眺める。

「へえ、こつちにもあるんだな。吊り橋」

「なんかあれ思い出すね。3月のキャンプ」

向こう岸に通したワイヤーに板を敷いただけの簡易的な橋を見てみると、3月に綾乃とリンたちの4人で行った静岡のキャンプを思い出す。

「あれ楽しかったよねえ。また4人で行きたいなあ」

「だねえ」

どうせ浜松まで100キロちよつとしか離れてないんだし、綾乃も誘えばよかったかな。

まあ綾乃の場合、呼ばなくても勝手に来るんだけどね。

この前だってボクがソロキャンプ楽しんでたら、しれつとやってきてなし崩しに2人キャンプになつちやつたし。

なにが『来ちゃった』だよ。いや、まあめっちゃ楽しかったからいいけどさ。

「この形……夢の吊り橋に似てるな」

「まああれよりちっこいけどね」

「リンちゃん、双葉ちゃん！ こっちこっちー！」

いつの間にか吊り橋の中ほどまで移動していたなでしこがジャンプしながらこっちに手を振る。

「もう渡ってやがる」

「あんなところでジャンプしたら……」

「あわわっ!? め、めっちゃ揺れてるう！」

「言わんこっちゃんえ」

「あはは……」

「……あーもう！ 今行くからじつとしてろよー！ 双葉も行こ？」

リンがボクの手を掴んで吊り橋に向かって走り出す。

そうだ。あとで写真でも撮って綾乃に送ってあげよう。そう思うボクだった。

そんなちよつとしたハプニングを挟みつつ、キャンプ場目掛けて自転車を漕いでいく。

川にそって敷かれた大きな右のカーブを抜け、高速道路の橋の下を通り抜けたとき、

それは突然現れた。

「……なんだありゃ?」

リンの言葉を皮切りに、向こう岸に突然現れたそれに、ボクたちを目を釘付けにされた。

カーブを抜けた先の隅に自転車を停めて3人で謎の物体を観察する。

「んー なんだろね。ひょうたん?」

「とつくりのお化け……」

それはコンクリートで作られた巨大なとつくりみたいなのにかだった。高さはちよつとしたビルくらいある。

本当に唐突に現れたからすごいびっくりした。思わず二度見しちゃったよ。

「えつと……あ、あった。給水塔だつて、あれ」

スマホをいじるなでしこが、ボクたちに謎の物体の正体を教えてくれた。言われてみればたしかに給水塔に見えなくもない。

「でもなんであんな形なんだろ」

「うーん、市長さんがすごいお酒好きだったとか?」

「いや、鳥羽先生じゃないんだぞ」

鳥羽先生でもそんなことしないんだよなあ。一応写真撮つとこ。

スマホをかがけて写真を一枚。場所が悪いからあんまりうまく撮れなかったけど、旅の思い出にはちょうどいいだろう。

あ、ついでに鳥羽先生にも送つところ。

双葉：先生が好きそうな建物、見つけました！

鳥羽：なるほど、これはいい徳利ですねえ……つてそこまで飢えてませんよ！

「ふふっ」

わりとすぐ来た返信にくすりと笑いつつ。自転車に跨る。

「そろそろ行くっか」

「そうだな。よし、あともうひと踏ん張りだ」

「リンちゃん双葉ちゃん！ あの給水塔のすぐそばにお茶屋さんのカフェあるんだって

！」

今まさに走り出そうとしたボクたちを、なでしこが呼び止める。

「じー……」

振り返つたなでしこが、ボクたちを見つめる。それはもうキラッキラした目で見つめる。

行きたいって言えばいいのに。

「……今日はなでしこが主役のキャンプなんだから、ボクたちはついてくだけだよ。ね

？ リン」

ボクがリンに目配せをすると、リンはなでしこを見てから優しげに微笑んだ。

「いいかげん疲れたし、ちよつと休憩してくか」

「わあ！」

その言葉になでしこの目キラキラした目が、さらにいつそうキラキラと輝く。

「やったあ！ じゃあ行くこ！ しゅっぱーつ！」

土煙が出そうな勢いで走り出すなでしこ。よつぽど行きたかったらしい。

「あ、おい！ 行くこ双葉！」

「うん！」

そんななでしこに置いていかれないよう、ボクとリンも慌ててペダルを漕ぎはじめる。

「えっほ、えっほ……」

「ほっ、ほっ、ほっ……」

「ふう、ふう、ふう……」

なでしこ、リン、ボク。3人の息遣いが静かな山道にこだます。

あのあとカフェでおいしいお茶とアイスクリームでひと息入れたボクたち3人は、キャンプ場へ向けての最後の道を進んでいた。

さつき道沿いの小さなスーパーで足りない食材も買い足したので、あとはキャンプ場に行くだけだ。

南部町からここまでおよそ40キロ弱。

距離としてはそこまで遠いわけじゃないけど、ここに来るまでのきついアップダウンもあって、けっこうな疲労を感じていた。

左右に広がる竹林の中を走っていく。

ひび割れたアスファルトの上をタイヤが通ると、ハンドル越しにガツンと衝撃が伝わって、荷台に積んだ荷物がガチャリと音を立てて揺れていく。

「なでしこ、あとどんくらーい?」

リンがちよつと気だるそうにたずねる。さすがにリンも疲れてきたらしい。

「2人とも、あとちよつとだからファイトだよ!」

「うー」

しんどそうにペダルを漕ぐボクたちとは打って変わって、元気いっぱいなのでしこに先導され竹林を抜けていく。

開ける視界。溪谷の中により集まった畑と民家の中を走っていく。

「橋でけえ……」

遙か頭上にある山と山を結ぶように架けられた巨大な橋を3人で見上げる。

「たぶん中部横断自動車道だね。間近で見るとやつぱは迫力あるなあ……」

高速の真下を通るなんて、あんまり経験がないからなんか変な感じ。

「こんなのどうやって作っただろ……」

3人で思い思いのそんな大きな橋が作り出す大きな影の下を通り、ポツンポツンと立ち並ぶ民家を後にし、川に架けられた橋を渡っていく。

そして……

なでしこの自転車が橋の出口で止まる。振り返る。

「おつかれ！ ついたよー！」

そう言って、にっこりと笑った。荒れた息を整えながら、ゆつくりとあたりを見回す。丸っこい石の敷き詰められた河川敷。青々とした草木。脈々ながれる興津川。

川にそって広がったサイトにポツンポツンと張られたテント。間違いなくキャンプ場だ。

「うーん、やつとついたあー！」

「長かったねえ」

身体を伸ばしながら、たどり着いた喜びに打ち震える。

「2人とも、おつかれい！」

自転車から降りたなでしこが、ボクたちの前で手を上にあげる。なにをやりたいのかはもうわかつている。

「「いえい！」」

パチン、3人でハイタッチ。小気味のいい音が春の興津川に鳴り響く。

「それじゃ、このあとどうする？ もうテント張る？ それとも、どつか寄ってく？」
「リンだったら、わかつてるくせに」

ボクの言葉にリンがニヤリと笑う。

「ふふふ、だよねだよねえ」

なでしこもおんなじようにニヤリと笑う。

「じゃあ3人でどこ行くか一斉に言おう！」

なでしこの言葉に3人で顔を見合わせる。これからどこに行くかなんて、そんなの決まっている。

「せーの！」

「「おんせーん！」」

そう言って、ボクたちはにっこりと笑い合うのであった。

自転車キャンプと春のハンバーガーセット（3）

「極楽じゃった……」

「極楽じゃったのおく」

「極楽じゃったねえ」

3人でボタンと畳に寝転がる。温泉で火照った身体に休憩所のひんやりした畳が心地いい。

「温泉のあとの畳って、なんでこんな気持ちいいんだろ」

ボクの横で寝つ転がるリンが、顔をゆるゆるに緩ませてつぶやく。

「もうこのまま寝ちやいたくなるよねえ」

「それもいいかもなあ……」

だんだんと声がすぼまっていくな。ボクも眠くなってきたなあ……

「温泉……寝る……はっ!？」

リンの横で寝ていたなでしこが、突然飛び起きる。

「どしたのーなでしこ、そんな慌てて」

首だけ向けて、まるでこの世の終わりみたいに顔を青くしたなでしこに聞く。

「リンちゃん！ 双葉ちゃん！ 寝ちゃダメ！ また日が暮れちゃうよー！」

「またあ？」

なでしこのあまりの慌てっぷりに身体を起こす。

そういうえば千明たちと笛吹公園でキャンプしたとき、寝過ごしたとか言ってたっけ？

まさかトラウマにでもなってるとか？

「まあまあ、おちつけ、なでしこ。ちよつと、ちよつとだけよこになるだけだからあ……」

むにやむにやと半分寝言みたいにつぶやきながら畳の深淵に沈み込んでいくリン。

あ、これ寝るな。

「リンちゃん！ 起きて、起きてよー！」

なでしこが慌てふためきながらリンを揺らす。

「むむむ……あと、ぐん……」

「リンちゃんー！」

竹酢の香り漂う温泉に、なでしこの悲痛な叫びが響き渡る。ちなみにリンは5分後にちやつかりと起きた。

そうやってしばらく温泉でまったりしたのちボクたちは温泉をあとにした。

建物の外に出ると、春の柔らかい風がまだ少し日照りの残った身体をいい感じに冷やしてくれた。

駐車場に停めた自転車に、温泉で売ってた薪を積む。

「むっちゃ気持ちよかった……ぬるめの温泉も悪くないな」

「だねえ。そういえば一回入場券買うと、閉まるまで出入り自由みたいだし、ご飯食べたらまた寄ってく？」

「それいい！ また夕方になったらまた行こーよ！」

「決まりだな。ま、でもその前に——」

「キャンプ！」

リンのセリフに乗っかるように、なでしこが元気よく言う。

そう、ボクたちは温泉に入りに来たんじゃない。キャンプをしに来たんだ。

「薪も買ったし」

「食材も買った」

「それじゃあ春の自転車キャンプ、はじめろぞー！」

「おー！」

拳を突き上げそれぞれの自転車に跨るボクたち。走り出す。風が吹き、枝葉が風に揺

れていく。

それからボクたちは3キロほど自転車を漕ぎ、再びキャンプ場へと戻った。

自転車を降りて興津川を眺めながら、青い葉を揺らす桜並木のサイトを歩いていく。

こういうところは大抵混んでるんだけど、今日のはあんまり混んでないらしい。運がよかった。

「どこら辺に設営しよっか」

「あんまり奥の方だとあれだし近場にしよう。あ、こことかいいんじゃない？」

この中では一番経験豊富なリンの助言に従って、トイレと洗い場から少し歩いたところにある木の下でテントを設営することにした。

「うんうん、いい感じですねえ」

「日陰すぎないし、日向すぎないし、ちょうどいいね」

「それじゃ、テント張ってくか」

3人で分担してテントを張っていく。まずはグラウンドシートを敷いて、インナーテントを張ったらペグを打ってつと……

「あ、待って双葉」

「リン？」

ペグを取り出したボクをリンが呼び止める。どうしたんだろう。

「ペグ、使うならこつちにしたほうがいいかも」

そう言いながら見るからに頑丈そうなペグを手渡される。いつも使ってるものよりも心なしかずつしりしている。

「これ、鍛造ペグって言うんだけど、ここの地面硬いから、こつちのほうがいいと思う」

「あ、言われてみれば……」

試しに地面を蹴ってみる。

これはたしかにボクのテントに付属してきたペグじゃうまく刺さらないだろうな。最悪曲がっちゃうだろう。

「ほほお、さすがベテランキャンパー」

「……ふつ、なでしこも一回ペグ全滅させてみたらわかるよ」

「あつ……」

リンが暗い笑みを浮かべながらペグを打っていく。

……うん、あんまり深く聞かないでおこう。誰にだって黒歴史はある。

そんなやり取りを挟みつつものの数分でテントを張り終える。

「よし、テントはこんなもんか。あとはタープ張って……」

「あつー！ ホイル焼きのお姉ちゃんだ！」

ふと、声がして振り返る。

小学校低学年くらいのかわいらしい男の子が、ボクたちを驚いた顔で見ている。誰だろう？

当然ボクの知り合いじゃない。リンも首をかしげているから違うだろう。となると

……

「あつー！ ひろとくん！ 久しぶりー」

なでしこが顔をほころばせ、男の子にパタパタと駆け寄っていく。やっぱなでしこの知り合いみたいだ。

「お姉ちゃんもキャンプに来たの？」

「えへへ、そうなんだ。あ、今日は友だちも一緒なんだよ」

「なでしこ、知り合い？」

状況がさっぱり読めないリンがなでしこにたずねる。

「あれ？ リンちゃんには言っていなかったっけ？ わたしが富士宮ではじめてソロキャ

ンしたときに知り合っただんだー」

「ああ、あのとき話してたもがっ!?」

突然横からリンの手が伸びてきて、ボクの口を塞ぐ。ちよ、いきなりなんだなんだよー!

「およ? どしたの2人とも」

「な、なんでもない! なんでもないから! な? 双葉」

あ、そうだった。ボクとリンがなでしこの様子見に行ったの秘密だったんだ。

口を塞がれたままコクコクとうなずく。ていうか、苦しいからもう離してよー!

「ひろとー、さっきから誰と話して……」

騒ぐボクたちに釣られてか、また1人近づいてきた。今度は女の子だ。歳は、小6くらいだろうか。

ボクたち、正確にはなでしこを見て目を丸くする女の子。どうやらこの子も知り合いのようだ。

「お姉ちゃん見て見て! ホイル焼きのお姉ちゃんだよ!」

男の子がキラキラした目で女の子の手を引きながら言う。たぶん姉弟なんだろう。

「はるかちゃんも久しぶりー!」

「あ、ども。お姉さんも久しぶりです」

手を振るなでしこに、はるかと呼ばれた女の子がちよつと嬉しそうに手を振りかえす。

「今日はお父さんとキャンプ？」

「うん、今日はママも一緒なんだ。お姉さんは……」

そう言つて、女の子がさつきから蚊帳の外のボクとリンを一瞥する。

「今日はぼつちじゃないんですね」

そして微笑んだ。それはそれは優しげな笑みだった。なんか変な勘違いされてるみたいだ。

「あれはソロキャンつて言うんだよー！」

なんだかすごく仲がよさそうだ。ほんと、なでしこつて人と仲良くなる天才だな。

「聞いて聞いて！ 今日ね、自転車で来たんだよー！」

「えっ、自転車？ たしかお姉さん山梨住んでたような……」

「ねーねー！ そつちのお姉ちゃんたちはー？」

あ、そうだった。まだ自己紹介がまだだった。横にいるリンをちらり。リンもボクをちらり。

そしてお互いになずきあい、ボクたちは一歩前が出る。

「えっと、ボクの名前は——」

「わたしの名前は——」

春の日差しを浴びて、キラキラと輝く興津川の清流を眺めながら、椅子にゆつたりと腰掛ける。

どこからともなく聞こえる鳥のさえずりと、コポコポと沸き立つケトルの音、そして川の流れる音がボクを夢見心地にさせてくれる。

春の日の川辺って、なんでこんなに心地いいんだろう。

「平和だねえ〜」

「平和だな」

テーブルを挟んで隣に座るリンが、本のページを一枚捲る。

テーブルの下に作られた日陰は、暑くもなく寒くもなく、肌触りのいい春の風がボクたちの髪を優しく揺らす。

「なに読んでんのー」

両手を頭の後ろにやりながら、リンに聞く。

「吸血アメリカザリガニ vs 宇宙ハツカネズミ」

「……おもしろい?」

「それなりに」

毎回思うけどこういう変な本いつもどうやって見つけてくるんだろう。今度一緒に本屋でも行ってみようかな。

『うひゃー！ やったなあー！ それー！』

『あははは！ お姉ちゃん冷たいよー！』

川のほうから響いてくる楽しいな声に顔を向ける。

タープの影の向こうになでしこと、さつき会った男の子が川で遊んでいる姿が目に入った。

「あんだけ走ってたのにほんと元気だなあいつ」

「まあ鼻歌歌いながら南部町から本栖湖まで行けるような子だしね」

あのボクよりもちよつと大きいだけの身体のどこに、あんなパワーが隠されているんだろう。桜さん鍛えすぎだよ。

『リンちゃん！ 双葉ちゃん！ 冷たくて気持ちいいよー！』

裸足で川底を歩くのでしこが、ボクたちに手を振る。そんななでしこに2人で手を振りかえす。

「ボクたちも行く？」

「服濡れるからやだ」

「だよねー」

楽しそうではあるけど、ただでさえクタクタなのに、これ以上なにかやったら完全にバテちゃうだろうな。

「にしても」

ボクはそう言つて、バーナーの五徳に乗せられたケトルに目をやった。

「意外だね、リンがパーコレーター買うなんて」

そう、目の前のコポコポと沸き立つケトル改めパーコレーターはボクのではない。

前日にわざわざコーヒード道具は持つてこなくていいって言われたからなにかあるんだらうなとは思つてたけど、まさかパーコレーターを持つてくるなんて。

「ずっと双葉にコーヒーク淹れてもらうのも悪いかなくて。それにちよつと興味あったし」

「えへへ、そつかあ。いいよねえ、コーヒーク」

「うん。あ、そろそろだな」

リンがバーナーの火を止めて、パーコレーターのコーヒークをマグカップに注ぐ。

モコモコとした白い湯気とともにドリップで淹れたのはまた違う、爽やかなコーヒークの香りが辺りに漂う。

「できたよ」

「ありがと。いただきまーす」
すすする。

口の中いっぱいフルーティーなコーヒーの香りと苦味が広がり、ほのかな酸味と甘みがあとからやってきて、さつと消えていく。

「リン！ これおいしいね！」

ドリップで淹れるのと違ってコクはあんまりないけれど、まるでお茶のようにゴクゴクと飲みたくなるおいしさだ。

「おじいちゃんに淹れ方のコツ、聞いたんだ。口にあつてよかつたよ」

リンがちよつと誇らしげに微笑みながらコーヒーをすすする。

「そつか新城さんかあ、なら納得」

あの人ならコーヒーとか絶対淹れられるだろうな。なんならボクより上手かも。

「この前家に来たときにコーヒーに興味あるつて言つたら、ミルと一緒に豆送つてきてくれたんだ。行きつけの喫茶店の豆なんだつて」

「へえ、ちよつと気になるなあ」

「まだ家にたくさんあるし、よかつたら少しわけてあげよつか？」

「え！ ほんと！ ほしいー！」

「じゃ、今度家に来たときにも渡すよ」

「えへへ、やった」

「ふふつ、現金なやつめ」

「うんうん、現金現金」

ずっとマンデリン一筋だったけど、たまには冒険してみようかな。そんなことを考えながらコーヒーをすすする。

「せっかくリンがコーヒー淹れてくれたんだし、ボクもお菓子作ろつと。バーナー借りるね」

「うい」

とりあえずスモアでも作ろつかな。間に板チョコも挟んでつと。

荷物から食材を取り出してバーナーでせっせと作っていると、ザツザツと砂利を蹴る足音が近づいてきた。

誰だろ？ 振り返る。女の子が一人こっちに歩いてきていた。なでしこの知り合いの子だ。

「こんにちはー」

ペこりと挨拶する女の子にボクたちも挨拶をかえす。

「どうしたの？ えつと——」

「はるかです。ひろと……弟の様子見に来ました」

「ひろとくんなら今までしこと遊んでるよ」

リンが川のほうを指差す。視線を川に持っていくと、相変わらず2人は楽しそうに遊んでいた。

『あつ！ お姉ちゃん！ 川ちよー冷たいよー！』

「ひろとー！ あんまお姉さんに迷惑かけないのー！」

『えー！ でも楽しいよー！』

『はるかちゃんもこつちおいでよー！ 気持ちいいよー！』

ぶんぶんと手を振る16歳児と小学生。遠くから見るとぶつちやけ小学生に見えなくもない。

「……まあ、あんなだから気にしないでいいよ」

「なんか、ごめんささい。お姉さんたちは自転車でキャンプ来たんですか？」

なでしこの椅子に腰掛けながらはるかちゃんが聞いてくる。

そういうえばさつきはちよつと自己紹介してすぐわかれちゃったつけ。

「うん、そうだよ。テントの横に停めてるやつ」

「あ、ほんとに自転車で来てるんだ……」

はるかちゃんがテント脇に停めた3台の自転車に目を丸くする。たしかに自転車でキャンプってあんまりしないよね。

「今日は自転車だけど、普段はリンとかと一緒にバイクでいろんなところ旅してるんだ。写真見る？」

「あ、見たいです」

スマホを出して大量に撮った写真をめくっていく。

「うわ、ほんとにいろんなところ行ってる……すごっ」

日本各地で撮った数々の綺麗な景色に、はるかちやんが目をキラキラと輝かせる。

「ほんと、いろんなところ行ったよな」

「だねえ、半年で何キロ走ったっけ？」

「わたしのメーターはもう5000超えてたな」

「あ、もうそんないったんだ」

「オイル交換これで5回目だよ」

金が飛んでいくぜ、と遠い目をするリン。オイル高いもんね。

「そっちはいいよな。継ぎ足すだけだし」

「そりや2ストだもん。リンも2ストのビーノ乗ればいいのに」

「この2スト信者め。そんなんだから身体オイル臭くなるんだぞ」

「えへへ、そんな褒めないでよお」

「褒めてねえよ」

「ていうかリンだつてけっこうガソリン臭いときあるよ。最近だと『あ、リンの匂いだ』つてすぐわかるもん」

「えっ、うそ?」

顔を青くして慌てて服の袖を嗅ぎ出すリン。やっぱり普通の女子は匂いとか気になるものなんだろうか。

オートループの匂い最高とか思ってるボクはきつともう手遅れなんだろうな。

「まあ、うそなんだけいたっ!」

リンが頬を膨らませながらボクの頭をぽかりと叩く。最近のリン、ほんと容赦ないなあ。

「ふふふつ、お姉さんたち仲いいんですね」

くすくすと笑いながらボクたちを見るはるかちゃんに、思わず顔が熱くなる。やばい、ちよつと恥ずかしいところ見られちゃった。

「ま、まあ知り合つてまだ半年ちよつとしかたつてないけどね」

リンが顔を赤くしながら言う。言われてみればまだそれだけしかたつてないのか。

「えっ? そうなの?」

「うん。わたしも双葉も同じ学校だったんだけど、全然仲良くなかつたんだ」

リンの言うとおり、リンもボクもお互いの認識なんて図書室によく来る背の低い子く

らしいの認識しかなかった。

「でもなでしこが山梨に引越してきて、一緒にいろんなところでキャンプするようになって、おいしいご飯食べて、綺麗な景色見たり、温泉入ったりして……」

リンが川で遊ぶなでしこを見る。

「気がついたら相手のことがどんどん好きになっていつて、こいつらともっといろんなところ行きたいなって思うようになって……」

そこまで言つて、リンが突然黙り込んだ。黙り込んだっていうより、フリーズしたつて感じた。

「なつて？」

顔を覗き込むとその理由がわかった。リンの顔はまるでリンゴみたいに真っ赤になつていた。

たぶん話してる途中で恥ずかしくなっちゃったんだろうな。

「ま、まあそんな感じ……な、なに？」

たぶんニヤニヤしてるだろうボクをリンがいぶかしむ。

「ボクもリンとなでしこともっともつともつといるんなところ行きたいって思ってるからね！」

「お、おう……」

頬をかきながら目を泳がすリン。うん、照れるな。

「なんか、ほんとに楽しそうですね。ちよつとوراやましいな」

「はるかちゃんもいつか友だち誘ってみればいいんだよ」

「来てくれるかな？」

「絶対来てくれるよ。だって、キャンプってすつごい楽しいもん。ね、リン」

「うん」

キャンプは楽しい。それがボクとリンの……ううんボクの友だち全員の共通認識だ。

「……わたしも、今度誘ってみよっかな」

「うんうん！」

なにかを決意したようなはるかちゃんに思わず笑顔になる。あ、そうだ。

「はるかちゃん、あーん」

できたばかりのスモアをはるかちゃんの口に持っていく。きつと気に入ってくれるはずだ。

「え、いいの？」

「いいよいいよ。これすつごいおいしいんだよー」

「ありがと……い、いただきます」

パクリとスモアにかぶりつく。かぶりついた瞬間、はるかちゃんの目が見開いた。

「なにこれ!? おいしー!」

目を輝かせ両手を頬にあて、満面の笑みでもぐもぐと食べるはるかちゃん。

よかった。気につてくれたみたいだ。

「でしよでしよー スモアつて言うんだ。材料いっぱいあるからはるかちゃんも食べよ?」

「うん!」

「あ、コーヒーもある——」

言いきる前に猛烈な勢いでぶんぶんと首を横に振られる。やっぱり小学生にコーヒーは無理か。

「なでしこのやつも呼ぶか」

「だね」

リンにうなずいて、バーナーの火でマシユマロを炙る。

『リンちゃん! 双葉ちゃん! なんかい匂いするけどなに作ってるの!』

『あー! おねーちゃんだけずるーい!』

わたしもちよーだいと叫ぶながらこっちに走ってくるなでしこと、はるかちゃんの弟。

呼ぶまでもなく来ちゃったよ。3人だけのキャンプのはずだったのに、なんだかすつ

かり騒がしくなっちゃったな。

「ま、それもいつか」

「ん？」

「なんでもないよー」

だつて楽しいしね。キャンプなんてただの遊び。遊びは楽しければ楽しいほどいい。

昼下がりの興津川。マシユマロの焦げる甘い匂いが風に乗って流れていく。

「もー！ リンちゃんたちだけずるいよー！」

「あ、ごめんなでしこ……つて、なでしこお前びつしよびしよじゃねえかー！」

「えっ？ あ、ほんとだー!? どうしよリンちゃんー！」

「と、とりあえず焚き火用意して」

「お姉ちゃん、なんか焦げくさーい」

「ほんとだ。なんだろ……あっ!? お姉さんマシユマロ、マシユマロ焦げてる！」

「あっー!? ボクのマシユマロがあー！」

わいわいがやがや。時間は楽しくすぎていく。自転車漕ぐのは大変だったけど、来てよかった。

そう思うボクだった。

ちなみにこの後、マシユマロはボクが責任を取って食べた。

ただの炭だった。まずかった。

空の上の太陽が赤く染まり始めたころ、ボクは焚き火の火で熱々になった鉄フライパンにそつとパティを乗せた。

家で冷凍してクーラーバッグに入れて持ってきた牛豚のパティが、ジュージューと音と煙を出しながら焼け始め、油の甘い匂いと胡椒のツンとした香りが辺りに漂い始める。

続けざまに残りのパティを全て乗せ、フライパンを軽くゆする。

「んふふふ やっぱお肉の焼ける匂いって最高だよねい」

「だよねえ〜」

ナイフでトマトや玉ねぎをスライスしているなでしこと一緒に肉の焼ける匂いとうつとりとする。

肉料理で一番楽しいのは、やっぱこの焼き始めた瞬間だ。ただ焼くだけなのに、なんでこんなにテンションが上がるんだろう。

「双葉、いつのまに鉄フライパンなんて買ったの？」

スキレットでじゃがいもをつついていているリンが、鉄フライパンを興味深そうに見る。

「これ、家にあつたの持つてきたんだ」

「え、そんなの持つてきてよかつたの？」

「いいよいいよ。どうせ最近あんまり使つてなかつたし」

使うといい料理に仕上がるんだけど、手入れがなにかと面倒でついテフロンに甘えてしまふのだ。

「そういえば、鉄のフライパンとスキレットつてなにが違うんだろ。リンちゃん知ってる？」

「えつと……たしかスキレットが鑄造で、鉄フライパンが鍛造じゃなかつたっけ？」

「たんぞー？　なんか人の名前みたいだね」

「ちげえよ」

リンとなでしこの話に耳を傾けながら、フライ返しでパティをひっくり返していく。そろそろベーコンも入れるか。パティをちよつと寄せて、空いたスペースにコンビニで買ったベーコンを乗せ、焼くこと数分。

両面にしつかり焼き目がついたら、仕上げにパティの上にスライスチーズを乗せる。

そうすれば溶けたチーズが肉を黄金色にコーティングし味がしそうなほど濃厚な肉

とチーズの香りが鼻をくすぐる。

これで準備はOK。あとはトマトとレタス、玉ねぎ、カリカリベーコンを焚き火で温めたバンスで挟み込めば……

「できたー!」

3人で歓声をあげる。

チーズの香りが漂う分厚いパティをたつぷりの野菜で挟んだハンバーガーに、じゃがいもとニンニクのバターソテー

最後にマグカップに注いだコーラを添えれば立派なハンバーガーセットの完成だ。

「おほほお! ハンバーガー! めっちゃハンバーガーだよお!」

「すごっ! ハンバーガーだ! リンハンバーガーだよ!」

夕暮れ時のキャンプ場に突如現れたハンバーガーに、なでしことボクのテンションが爆上がりする。

「いや、見りゃわかるだろ」

とかいいつつリンも目を輝かせているように見えるのは気のせいじゃないだろう。

「とりあえず食べるか……って、なんでハンバーガー4つもあるんだ?」

そう言つて皿の上にポツンと置かれたハンバーガーを不思議そうに見るリン。

「えへへ、ちよつと材料買いきちやつて。大丈夫、ちゃんとボクたちが食べるから」

ボクの言葉になでしこが得意気にならず。けっこうポリウムあるけど、まあボクたちなら余裕だろう。

「あつ！ リンちゃんの前も残しとくからね！」

「そんな食えんわ」

「もー、そんなんじや大きくなれないよ。リン」

「お前もな」

「…………と、とりあえず食べよっか」

それを言うのは反則だよ。リン…………まあいいや。

「「「いただきまーす」」」

手のひらよりも大きいハンバーガーに思い切りかじりつく。

……

……

……………

「うまつ!？」

口の中いっぱい広がる肉のうまみ。

焚き火でじっくり焼いたパティは、おどろくほどジューシーで、噛めば噛むほどに肉の旨味が溢れ出る。

そんな肉の旨味を、一緒に挟んだ野菜とベーコンチーズが引き立て、マスタードとケチャップがぴりりと引き締める。

このためにわざわざぎなにも付けずにアメリカンドッグ食べたかいたがあった。

「……うまつ、なにこれ、うまつ」

リンが語彙力を消失させながらハンバーガーにかぶりつく。

「おいひいよお〜」

なでしこは言わずもがな。3人でうまいうまいと言いながらハンバーガーを食べていく。

「ん〜!」

やばい、これうますぎる。作ってよかったー! 付け合わせのバターソテーもおいしいし、ほんと最高!

マグカップに注いだコーラを飲む。酸味と炭酸がハンバーガーの脂を洗いながしてくれる。

やつぱハンバーガーと言ったらコーラだよなあ。

「まさかキャンプでハンバーガー食べられるなんて思わなかったな」

「思ってたより作るの簡単だったし、また作りたいね」

「だな」

「ん〜 おいふいよお〜」

「うまそうに食いやがる……」

あれ？ リンの鼻……

「あ、リン、動かないで」

「えっ？」

ティッシュを出して、リンの鼻先についたケチャップを拭ってあげる。

勢いよくかじりついたからついちやっただらうな。

「なっ!？」

「ケチャップついてたよー」

「あ、ありがと……」

ボクに拭ってもらったのが恥ずかしかったのか、リンの顔がまるで焚き火のように

真っ赤になる。

「はあく〜 おいしかったあく〜」

そんなやりとりをしていると、なでしこがあつとうまにハンバーガーを食べ終えた。

「もう食べ終わったのかよ」

リンが目を見開いて驚く。今さっきいただけきましたばかりだもんね。

「えへへ、だつてすっごくおいしかったんだもん」

「だよなー」

ティッシュで口についたケチャップを拭いて、残ったじやがいもを食べていく。ちなみにボクも今しがた食べ終えた。

「つて、双葉もかよ。お前から早すぎだろ」

「気づいたらなくなってた」

「……いやまあ、たしかにうまいけどさ」

そう言いながらハンバーガーにかじりつくリン。リンも意外とペースが早い。やっぱり自転車漕いだからお腹空いてるのかな。

「双葉ちゃん！ 残ったハンバーガー半分個しよ！」

「さんせー！ 冷めちやう前にはやくたべよ！」

「……ほんとよく食べるなあ」

「あ、あのー！」

残ったハンバーガーの処遇を話し合っていたところ、ふと聞き覚えのある声がボクたちを呼んできた。

振り向く。焚き火の明かりに照らされて、声の主があらわになる。

あ、この子さっきの……

「あー！ はるかちゃんに、ひろとくん！」

突然の来客になでしこの顔が笑顔になる。

「こ、こんばんはー」

「お姉ちゃんたちこんばんはー!」

手に湯気の立つお皿を持ったはるかちゃんとひろとくんが、ボクたちにペコリと会釈する。遊びにきてくれたのかな?

「あ、あの! ご飯、作ったから、よかつたら食べてください」

そう言つて、手に持った紙の小皿を差し出してくる。この匂い、カレーだ。

「えっ! いいの?」

「う、うん、この前のホイール焼きのお礼」

顔を赤くして恥ずかしそうに話すはるかちゃん。

「そっか、ありがとうはるかちゃん」

「ぼくもいっしょに手伝ったんだよー!」

「ひろとは野菜切つてただけじゃん」

「お姉ちゃんだつてママにめっちゃおしえてもらつてたじゃん」

「ま、まあそうだけど……」

「えへへ、ありがと〜」

なでしこがそれはそれは嬉しそうに笑う。その笑顔を見ていると、ボクとリンも自然

と笑顔になっていった。

「お姉さんの言ったとおり、キャンプでご飯作るの、楽しいね」

そう言って、はるかちゃんがにっこりと笑った。

当事者じゃないボクたちには、なでしことこの子たちの間になにがあつたかはわからない。

でもこれだけははっきりしている。

なでしこがまた人を笑顔にしたってことだ。

それにしてもカレーか。じゃあこつちもお返ししないとね。

「ボクたち、さつきハンバーガー作ったんだけどさ、よかつたら食べる？ いいよね？」

なでしこ」

「あつ……うん！ うんうん！ もちろんだよ！」

ボクの問いかけに、なでしこがパアッと顔を笑顔にしてうなずきかえす。

「……ふふつ、こいつらの隣にいるとほんと騒がしいな」

「なにか言った？ リン」

「ううん、なんでも」

リンが笑う。それはそれは楽しそうな笑みだった。

カラスが一羽、空で鳴く。もうじきこも日が暮れる。

「星、綺麗だね」

夜の帷が下りた興津川。

風のさざめきとジージーと鳴く虫の声がこだます中、なでしこがつぶやいた。空を見上げると、黄色く輝く半月の向こう側にポツンポツンと星々が瞬いていた。

「ここら辺でもけっこう見えるんだな」

スマホから流れるアコースティックギターの優しい音色に耳を澄ましながら、パチパチと燃え盛る焚き火に手をかざす。

「薪継ぎ足す？」

「ううん、大丈夫」

「やっぱ山奥だからちよつと冷えるよねえ」

と、そんな奥さんに！ となでしこが言いながら荷物からなにかを取り出した。

「でた！ 秘密結社ブランケット！」

「ふっふっふ、双葉ちゃんもブランケットの虜にしてくれよ」

「あーやめてー」

抵抗虚しくもふもふのブランケットに包まれるボク。あ、あったかい。ブランケット最高。

「そんなもん持ってきてたのか……どうりでリュックパンパンだと思ったよ」

「ふおっふおっふお、次はリンちゃんだあ!」

「うわなにをするやめ……ぬくい」

秘密結社ブランケット(春バージョン) 爆誕! 3人でブランケットにくるまりながら春の夜を満喫する。

「ふいいゝ 今日には楽しかったねえ。はるかちゃんたちにも会えたし」

なでしこが嬉しそうに微笑みながら、焚き火を眺める。今日は本当にいろんなことがあったな。

たった40キロの短い冒険だったけど、たくさんの思い出ができた。すごく疲れたけど、すごく楽しかった。

「カレー、おいしかったよね」

「ふふっ、ちよつと焦げてたけどな」

「きつとこれから、もつともつと上手になるよ」

燃え盛る薪が、炭となって崩れる。火の粉が舞い、煙の匂いがボクの鼻をくすぐる。

「リンちゃん、今日は誘ってくれてありがとうね! すごくすごく楽しかったよ!」

につこりと笑うなでしこ。ボクも本当に楽しかった。疲れたけど、疲れたからこそ、楽しかった。

「そっか……」

「だから、また行こうね！」

「……また今度な」

微笑むリンになでしこが笑う。嬉しそうに、楽しそうに。

きつと今ごろ頭の中でどこに行こうかとか、なにを作ろうかとか、いろいろ考えてるんだらう。

「双葉ちゃんも！ また行こうね！」

「……うん！ 絶対行こ！」

薪がまた一つ炭になる。この火ももうじき消えるだらう。そんな消えゆく火を眺めていると、だんだんと眠気がやってきた。

「明日、どうしよっか。どっか寄ってく？」

目を擦りながらこれからのことを考える。明日はどうやって帰ろうか。来た道を戻るのもいいけれど、どうせなら違うところに行ってみたい。

「そうだ！ ならしぐれ焼き食べに行こーよ！ すっごくいいお店知ってるんだ」

「あ、それいいな」

「えへへ！　じゃあ決まり！　双葉ちゃんもそれでいい？」

「……うん、いいよお」

閉じていく目を必死に開けながら、なでしこに返事をする。やばい、あつたかくなってきたら眠くなってきた。

「めっちゃ眠そうだなおい……わたしたちもそろそろ寝るか。焚き火もそろそろ消えそうだし」

「うん、そだね……あつ」

最後の火が、風に揺られてかき消される。あたりが一気に暗くなる。静まり返る。

「……ねよっか」

「そうだな」

「だね」

今日は疲れたね、帰る前にはるかちゃんたちに挨拶しなきゃ、そんなことを言い合いながら、3人でテントに戻っていく。

今日は疲れた。こんな日はきつとぐっすり眠れることだろう。

「おやすみ」

「おやすみい」

「おやすみ」

パチン。灯りが消える。

「あつ」

「どうしたの？」

「……足、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。たかが40キロだし」

「そっか、だよな。たった40キロだもんね」

「明日も走るんだし、もう寝ろよ」

「うん、おやすみー」

「おやすみ」

この時のボクとリンは知らなかった。

後日、重度の筋肉痛で足をめっちゃプルプルさせながら登校して、恵那と千明に爆笑される運命が待ち受けているということに……

く春編、おしまいく

セミとお猿と奥多摩キャンツー（1）

ホンダ モンキー50

1960年代、とあるテーマパークの遊具として生み出されたこのバイクは、他に類を見ない独創的なデザインと手軽さから発売から瞬く間に大ヒット。世間に4ミニとばれるジャンルを確立させた。

ハンドルを折り畳めば車のトランクにすら収まる極端にコンパクトな車体に、49cc 3.4馬力の4ストロークエンジンとリターン式の4速マニュアルトランスミッションを搭載。

子供の遊具のような見た目からは想像もできない走りに対するこだわりと、原付大のプラモデルとまで呼ばれるほどの改造の手軽さも相まり、生産開始から半世紀以上が経過した現在でも、国内国外を問わず根強いファンが存在する。

ボクの目の前に停まっているバイクは、そんなバイクだった。

「じゃじゃーん！ ついに手に入れちゃいましたー」

8月の暑い日差しを浴びて、額に汗を滲ませた恵那がボクに自慢気に言う。

「うわあ！ モンキーだ！」

原付バイク好きなら避けては通れない名車を前にして、ボクのテンションが上がっていく。

バイクを手に入れたと聞いて甲斐大島駅のそばにある恵那の家まで遊びに来たけれど、まさかモンキーにお目にかかれるなんて。

「おほほおーほんとにモンキーだあ」

庭に停められたモンキーの周りをぐるぐると回って観察していく。

真っ赤なフレームにちっこいホワイトのガソリンタンクがなんともかわいいらしい。

「ふふ、ちっこくてかわいい」

「でしよー？ なんかちくわみたいじゃない？」

「言われてみれば見えなくてもないかも。まあこの子はお猿さんだけどね」

「ふふつ、モンキーだもんね」

「そういえばちくわちゃんは？」

「暑くて外出たくないみたい。今は家で扇風機の前で寝っ転がってるよ」

「かわいいなあ、ちくわ……あとで撫で撫でさせてもらおうと。それにしても原付買っ

たとは聞いてたけど、まさかのモンキーかあ。ボクはてつきりカブ買おうと思ってたよ」
50ccモデルは何年前前に生産終了しちゃったし、モンキー自体すごく人気のあるバイクだ。

仮に中古だとしてもかなりのプレミア価格になるはずなんだけど、こんなところで手に入れたんだらうか。

「お父さんの仕事先の知り合いの人がね、何年前前に買ったはいいけど全然乗ってなくて誰かに譲ろうと思ってたんだって。それで、お父さんがわたしがバイク買おうとしてる話したら安く譲ってもらえることになったんだー」

「ええ、めっちゃラッキーじゃん」

「でしよでしよ？ これも日頃の行いがいいからかな」

「あはは、かもねー」

なんてうらやましい話なんだ。ボクも誰かピカピカの旧車譲ってくれないかな。

「もう乗ってみたんだっけ？」

「うん。この前リンと甲府のほうまで行ってきたよー やっぱ難しいねマニュアルって」

「大丈夫、すぐ慣れるよ」

「うん！ わたし、バイク乗るの生まれて初めてだけどすっごい楽しいね。わたしハ

「マっちゃんいそうだよ」

「うんうん！ だよねだよねえ！」

新しいバイク好きの登場に、自然と顔が笑顔になっていく。

「そういえば、アヤちゃんは来てないの？ 双葉の家泊まりに来てるんだよね？ ラインしたとき一緒に来るって聞いてたんだけど」

「あーそれなら全然起きないから置いてきちやっただ。さつき涙目で走ってるスタンプ送ってきたしそろそろ来るんじゃないかな？」

「あ、あはは……双葉けっこう容赦ないね」

「だっていくらゆすつても毛布剥がしても全然おきないし——」

話していると、セミの鳴き声に紛れてバイクのエンジンの音が聞こえてきた。ちよつと野太い4ストロークのエンジン音。エイプの音だ。

どうやら来たみたいだ。振り返る。寝巻きで着ていた半袖にパーカーを羽織っただけの綾乃が、必死の形相でエイプを転がしながらこつちに近づいてきていた。

ウインカーが点滅し、ボクたちの前でエイプが止まる。

「や、やっとなついたあゝ」

「アヤちゃん久しぶりー」

「あ、恵那ちゃんおひさー……って双葉ー！ なんて置いてつちやうんだよー！」

エンジンを止めてエイプから降りた綾乃が、ぷりぷりと怒りながらボクに近づいてくる。どうやらお怒りの様子。

「だって起こしても起きないんだもん」

ちなみに寝るときに抱き枕代わりにされて苦しかったなんて事実はないのだ。ないっただけなのだ。

「だって双葉の家のベッドすっごいふつかふかだったんだもん」

「はいはい」

「ふふふつ、相変わらず仲良いね……にしても今日あつついなあ」

恵那が額の汗を拭いながらちよつと恨めしげに空を見上げる。

「だねえ、山梨ってほんと暑いね。わたしもつと涼しいって思ってたよ」

「まあ盆地だし」

「わたしあんまし暑いから来る途中でパーカー脱ごうかと思っちゃったよ」

「あんまおすすめしないよ。それやって腕の日焼けが3ヶ月くらい消えなかった人見たことあるから」

「それって双葉のこと？」

「……ノーコメントで」

ノーコメントもなにもボクのことである。3ヶ月くらい腕時計の跡が消えなかった

ときは本当に恥ずかしかった。

「あ、あはは……」

「双葉つてさ、たまに滅茶苦茶女子力低いよね」

うるさい。最近はやんと塗ってるからいいのだ。ていうか塗らないとあおいとかあおいとかあおいが怖い。

ほんと、あおいってなんでボクにだけ年上みたいな感じになるんだろう。

「そういえばアヤちゃんっていつまでこっちいるんだっけ？」

ボクが今頃スーパーでレジを打っているだろう友だちのことを考えていると、恵那が綾乃にそんなことを聞いた。

「なでしこともキャンプしたいし、とりあえず来週まではいるつもりだよー」

「べつにもっといてくれてもいいのに」

「わたしも本当はそうしたいよー でもほら……ね？」

綾乃がそう言いながら空中で何かを書くようなジェスチャーをする。言うまでもなく宿題だろうな。

「こっちでやればいいじゃん」

「あ、それいいね。なでしこちゃんも呼んで勉強会しよーよ」

「せっかく山梨まで遊びに来たのに宿題なんてやりたくないんだよー！」

双葉代わりにやってーと抱きついてくる綾乃をスルーしながらモンキーに目をやると、綾乃もはつとしたようにモンキーに目を向けた。

「それでそれで？ ほほお、これが恵那ちゃんの単車かー えーモンキーじゃん！
ちっこくてかわいいい〜」

ボクと同じようにぐるぐるとモンキーの周りを回りながら目を輝かせる綾乃。同じホンダ乗りとしてシンパシーを感じるのかな。

「うわ、ピツカピカじゃん。これもしかして新車？ って、なわけないか」

「ふふつ、いいでしょー？ でね、ちよつと2人に頼みたいことがあるんだけど——」
ちよつとだけ恥ずかしそうに頬をかきながら恵那が言う。

今日は待ちに待った夏休み。そんな日にバイク乗りが集まれば、することなんて一つしかない。

そう、旅だ。

『あつづい〜』

「わかる……」

降り注ぐ太陽にうんざりしながら、田園の続く田舎道を走っていく。

『日本の夏って、なんでこうジメジメしてるのかなあ〜』

「綾乃、心を落ち着けてバイクと一体になるのです……」

『むうーりいー』

「だよねー」

だいたいバイクと一体になったところでバイクも太陽でバカみたいになつて暑くなつてから意味がない。

車と違つてエアコンも屋根もないし、夏というのはバイク乗りにとつて地獄のような環境なのだ。

『それにしても、山梨ってほんと田んぼいっぱいだよねー』

「まあ、ぶつちやけ田舎だし。夜カエルの鳴き声とかすごいよ」

何百匹もゲコゲコと鳴く光景は、なかなか迫力がある。

『でも、なんか落ち着くな。双葉がバイクで走り回る気持ちもわかるよ。あっち車多いんだよねー』

すぐ煽られるしーとぼやく綾乃。たしかにこの時期の国道1号は混んでるだろうな。

そんなことを話つつ、走っていると今日の待ち合わせ場所の甲斐大島駅が見えてきた。

駅前の広場にはすでに恵那がキャンプ道具を積んだモンキーのそばでボクたちに手

を振っていた。

「おまたせー」

ボクたちも手を振りつつ停車。ヘルメットを脱いで髪を振りほどく。

「おはよ恵那。待たせちゃったかな？」

「はよー恵那ちゃん」

「おはよー2人とも。ちょうど来たばつかだよ。それにしても、今日も暑いねー」

そう言いながら空を見上げる恵那。

恵那の言うとおり、空は清々しいほど青く、ソフトクリームみたいな入道雲がどっしりと遠くのほうで浮かんでいた。

「ほんと、なんでこんなあつついんだよお」

ヘルメットを脱いでハンドルに引っ掛けた綾乃が、うんざりしたように言う。

「やつぱ浜松のほうが涼しい？」

「うん、ぶつちやけもうバテそう。髪がさーすつごい暑いんだよー もうバツサリ切っちゃおうかなー」

そう言いながら髪を指でつまむ。綾乃の髪はけっこうなロングだ。たしかにその髪の長さじゃ熱も籠るだろうなあ。

「あ、だったらわたしが切ってあげようか？ こう見えてもけっこう得意なんだー」

「えっ、恵那ちゃん髪切れるの？」

「本格的なヘアカットは難しいけど、長さ変えるくらいなら大丈夫だよ。この前も双葉の髪切つてあげたし。ね、双葉」

「うん、ありがとね。おかげですつきりしたよ」

リンがなんで切つちやつたんだよと文句を言ってきたけれど、ぶつちやけ暑くてしかたなかったからしょうがない。

「へえ、それなら頼んじやおつかな」

「その気になつたらいつでも連絡してねー それじゃあ全員そろつたことだし……」
「だね、じゃあ行こっか」

3人で顔を見合わせ、それぞれのバイクに戻る。恵那はモンキーに、綾乃はエイプに、そしてボクはビーちゃんに。

ヘルメットを被り、ゴーグルをかけ、キーを回し、キックペダルを蹴り飛ばす。

ぶるんと唸るエンジン。隣に停まった綾乃が同じようにエンジンをかける。

「やつぱ2人とも慣れてるねー じゃあ、わたしもつと」

よいしょという掛け声とともに、恵那がモンキーのキックペダルを蹴り飛ばす。

小さな車体には似つかわしくない、小気味のいいエンジン音が鳴り響き、マフラーがペペペと煙を吐き出していく。

「準備おっけーだよー！」

「こっちもいいよー」

出発の準備を整えた2人に手で合図して、クラッチを握りシフトアップ。

片足をつきながらUターンし、ウインカーを出しながら車道の手前で停まる。車はなし、いつでもも行ける。

「じゃあ、行くよー！」

走り出す。そんなボクに続いてエイプとモンキーも走り出す。

今日はどんな旅が待ってるのかな？

『どう、ちゃんと聞こえる？』

『うん、ばっちりばっちり』

「大丈夫だよー」

耳元で鳴り響く風切り音に混じって、ちよつとくぐもった恵那の声が聞こえてきた。国道52号線、甲府に向けていつもの道をボクと恵那と綾乃の3人で走っていく。

『それにしても今日もいい天気だねー めっちゃ暑いけど』

『こんな暑いとアイス食べたくなるよねー』

『いいねー コンビニ寄ったら買ってこようよ』

『いぎなーしー！』

2人の楽しげな話声に耳を傾けながら、シフトペダルを蹴って4速からニュートラルに落とし、赤信号の前でビーちゃんを止める。

恵那のモンキーお披露目から2日たった今日。ボクは恵那と綾乃の3人でキャンプツーリングに出かけていた。

信号が青になるのを待ちながら後ろを振りかえる。

信号が変わるのを待ちながら、4スト特有の重たいエンジン音を響かせるエイプとモンキー やっぱホンダはエンジン音がいいな。

『そういえば双葉、言われたとおり長袖来てきたけど、こういうのでよかったかな？』
キャンブ道具を積んだモンキーに跨る恵那を見る。

デニムのジャケツットにグリーンのカーゴパンツ、足を覆うのは青のハイカットスニーカー、ブーツ代わりだろうか。バイクに乗るには十分な格好だろう。

「うん、全然大丈夫だよ」

『そっか、リンにも言われたけどバイクって夏でも長袖なんだね』

「やっぱ転んだとき危ないしき。薄着でもあるとないとしや全然違うしね」

たまにTシャツ短パンサンダルで乗ってる人見かけるけど、怖くないんだろうか。少なくなるとボクだったら絶対できないな。

『でも意外、もつと暑いと思つてたから意外と涼しくてびっくりしたよ』

『服が風の通り道になるからね。下手な半袖よりも涼しいでしょ?』

『止まると地獄だけどねー』

『あはは、たしかに止まるとあつついよねー あ、そろそろじゃない?』

恵那に言われて前を向く。右手に見える信号が黄色になつていた。

クラッチを握りギアを1速にして青信号に備えアクセルを吹かしていく。

『いつも思うけど、双葉つてほんと空吹かし大好きだよねー』

「しょうがないじゃん。低速スカスカだから吹かさないと進まないだもん」

青信号。スロットルを回しクラッチを離す。2ストにしては割と大人しいエンジン音と共に車体が進み出す。

夏の52号線はひどく暑く、カンカン照り太陽に温められた空気が、熱風のごとくボクの身体に当たっていく。

『いやー本当に暑いねー さつき道路に足ついたとき、足の裏まで暑くなっちゃったよ』

「大丈夫、もうちよつと辛抱だよ」

『そういえば今日つてどこ行くんだっけ?』

恵那が聞いてくる。たしか恵那はキャンプツーリングに連れて行つてと頼んだけど、そのあとのことはノータッチだったっけ。

「今日は甲州のほう行つて大菩薩ラインに入つて、一之瀬高原にあるキャンプ場で一泊、明日はそのまま東に進んで奥多摩湖でゴールだよ」

『奥多摩湖かあ。けつこう遠くに行くんだねえ』

「あそこはボクのお気に入り道の道なんだー 恵那と綾乃も絶対気に入るはずだよ！」
『うん！ 期待してるね』

「だいたい往復で240キロくらいかな。今日は途中でキャンプするしそこまでキツくはないはずだけど、なにかあつたらすぐ言つてね」

『りょーかいであります！』

『あります！』

「ふふつ、はいはい」

ノリノリの恵那と綾乃に笑いつつ。甲州へ向けての道を走っていく。

モンキー、エイプ、そしてYB-1。2台のホンダと1台のヤマハが50ccと100ccの煙を吐きながらトコトコと進んでいく。

雲はどこまでも白く、空はどこまでも青く、燃えたぎるような太陽と、熱風がボクたちを旅の興奮へと誘っていく。

セミとお猿と奥多摩キャンツー（2）

52号線を北上し、甲府市を東に進むと甲州市という街に出る。

桃と葡萄の一大産地であるこの街は、今日も太陽の光をたっぷりと浴びた桃の木が、緑の枝葉を瑞々しく輝かせていた。

『へえ、畑ばつかだ。これ、全部桃とか葡萄なんですよ？』

最後尾を走る綾乃が周りをキョロキョロと見ながら言う。

『そうだよ。日本に出回ってる桃の6分の1がここで作られてるんだって。すごいよねー』

『そんな作ってるんだ』

『匂い嗅いでみて？ ちょっと桃の匂いがするでしょ？』

『いやいやあ、そんなわけ……ほんとだ！』

『いや、しないって』

あまり接点のない2人だけど、仲良くやれてるみたいだ。

「ちようど旬の時期だし、帰りに笛吹公園でフルーツパフェとか食べに行ってもいいかもね」

そんな2人にほつとしつつ、思いついたことを言う。

『おつ、いいねー』

『はいはい！ わたし行きたーい！』

「はいはい、じゃあ決まりだね。ちよつと遠回りになつちやうけど、休みだしいいよね」

『はいーい！』

3人で楽しく話をしながら、奥多摩へ向けて大菩薩ラインの緩やかな登りを駆けていく。

道のはるか彼方にそびえる、太陽光を存分に浴びた甲州の山々はいつにもまして雄大で、これからあの山脈を走るのがかと思うと、ボクの胸は否が応にも高鳴っていくのであった。

ギアを落とし、トルクを稼ぎながら大きく右に曲がっていく峠道を走っていく。

左右に生い茂る青々とした木々と、狂ったようなセミの鳴き声が夏の峠を走っていることを実感させてくれた。

『セミすごいねー ヘルメット被ってるのに全然音小さくならないよ』

「恵那ジエツベルだもんね。フルフェイスだったらもうちよつと静かなんだろうけど」

『わたしも最初はモンキー譲ってもらった人からもらったフルフェイス被ろうとしたんだけど、ちくわがすごい怖がっちゃってさー』

オフロード用のゴテゴテしたやつだったんだけど、と言う恵那。想像するとちよつとシニールな光景だ。

『いつかドッグキャリーとか使って一緒にお散歩とかしたいし、買い直したんだよね』

『ドッグキャリーってリュックみたいに背負えるやつだっけ？』

『そんな感じ。いきなり乗せると怖がっちゃうだろうから、まずは自転車で慣れさせてあげようって思ってる。今度写真送ってあげるよー』

『あは、それ絶対かわいいやつじゃん』

リュックから顔だけちよこんと出したちくわ……絶対かわいいやつだ。リンとかめっちゃ見たがるだろうな。

『でも、まずはわたしがバイクに慣れないとね。双葉、道案内お願いね』

「りょーかーい！」

きつくなってきた坂に合わせてギアをさらに落とす。エンジンがブンブンと唸り、マフラーが白煙をモクモクと吐き出していく。

「よーし、張り切って行こー！」

フルスロットル。エンジンが出せる限界の速度でトロトロと峠を駆け上がっていく。

『げほっ!? ふたばっ！ めっちゃ煙かかてる！』

「あつ、ごめん」

スピードを落として最後尾に戻るボク。

『あ、あはは……どんまい双葉』

なんともしまらないボクなのであった。

大菩薩ラインをさらに進んでいくと、山はどんどんと深くなり、道はますます険しくなっていく。

『わわっ』

前を走るモンキーがフラフラしながらコーナーを曲がっていく。

「大丈夫？」

『あはは、まだ峠あまり慣れてなくてきー　なんかコツとかってある?』

「バイクの大きさが全然違うから参考になるかわからないけど、上半身に力が入りすぎかも、手はハンドルに添えるくらいでいいんだよ」

『でも、それだと曲がらなくない?』

「バイクつてよくできててき、こつちがなにもしなくてもちやんと走ってくれるんだよね。ボクたちはただそれに寄り添うだけでいいんだ」

思うに、バイクというのは生き物だ。こつちが怯えているとバイクも怖がってちやんと走ってくれない。

けど、バイクを信頼して身を委ねればバイクもそれに応えてくれる。どんなカーブだって曲がってくれるし、どんな坂だって登ってくれる。

大型バイクだろうがスクーターだろうが、それは変わらない。

「タンクをしつかり挟んで、視線は前じゃなくて行きたい方向に、あとはスロットルを回していけばバイクが勝手にその方向に曲がって行ってくれる」

曲げるのではなく、曲がる。

セルフステアやコーナリングフォース、バイクの曲がる仕組みはいろいろあるけれど、本質はこの一つしかない。

「最初は怖いかもしれないけど、恵那ならきつと慣れるよ」

『うん、頑張ってみる』

『おー 真面目に先生やってるねー』

「も、もう！ 茶化さないでよー」

おそらくニヤニヤ笑っているだろう綾乃の言葉にただでさえ暑いのに、さらに暑くなっていく。

『双葉先生ー！ ギアチェンのコツ教えてください！』

「恵那まで乗らないの！ 同じホンダなんだから綾乃に聞いてよー」

だいたいビーちゃんロータリーミッションなんだからリターン式のコツなんてわかるわけがない。

『えっ？ わ、わたし？ え、えっと、パッと握ってサツと緩めてスパツと変える？』

『先生！ 擬音だらけでわかりません！』

『ふ、ふたばあー！』

「はいはい、しようがないなー」

泣きつく綾乃に笑いながら、3人でバイクの話で盛り上がる。

ミンミンと喧しいセミのオーケストラの中、トコトコと峠を登っていく。ゴールは未だ見えず。旅はまだまだはじまったばかりだ。

『ここで左でいいんだっけ？』

「そだよー」

ボクの言葉に、綾乃のエイプが陸橋の手前にある小道に入っていく。

大菩薩ラインを進むこと20キロ弱。ボクたちは今日のキャプ予定地である一乃瀬高原へと足を踏み入れた。

『うわ、めっちゃ山道じゃん』

鬱蒼とした細長い山道を走っていく。敷かれてからかなりの年月がたっているのか、アスファルトの大半がひび割れ、中には大きくかけているところもある。

舗装こそされているものの、ほぼ林道と言っても差し支えないだろう。

『ぐえっ、めっちゃガタガタするよお』

『ほ、ほんとだね。み、道間違ってたらしらないよね双葉』

『い、一応合ってるはず……』

『めっちゃ心配になってきた……』

『だ、大丈夫だよ。ちゃんとストリートビューで確認したから……手前まで』

『い、今なんか嫌な言葉聞こえた気がするんだけど！』

「……山奥すぎてストリートビューなかった」

『キャンプ場予約したんだよね？ なら大丈夫だよ……きつと』

『ま、まあちよつとした冒険だと思えば——』

綾乃の声が唐突に途切れる。何かかと思いいバイクを停めるボクたち。深い山奥に3台のバイクのエンジン音が鳴り響く。

「いきなり聞こえなくなっちゃったね。今朝充電してきたばかりなんだけど……」
そういいながらスマホを取り出す。原因はすぐにわかった。

「あ、圏外じゃん」

綾乃がつぶやく。画面の左端のアンテナマークに表示される圏外の2文字。山奥すぎて電波が届かないらしい。さすがにこれは予想外。

「ま、まあ大声で話せば聞こえるよ」

いいわけがましいボクの言葉が山の喧騒に吸い込まれていくであった。

「よつと」

ステップに乗せた足を伸ばし、立ち乗りしながら大きなひび割れを乗りこえていく。サスペンションが大きく沈み、ハンドル越しに衝撃が伝わってくる。

「あんま無茶して転ぶなよー」

「わかつてるわかつてるー！」

心配する綾乃に返事をしつつクラクケースにくつつけたくるぶしでバランスを取りながら険しい林道を走っていく。

さつきは予想外の険道にたじろいだボクたちだったけど、いざ走ってみるとそこまでひどい道でもなく拍子抜けた。

オフロードバイクじゃないと走れないような道だったらどうしようかと思っていたけど、これなら大丈夫そうだ。

水溜まりの上を走り抜ける。跳ねた水が少しだけ足元を濡らす。大きな窪みをスラロームのように避けていく。

スピードを出して風のように走っていくのも好きだけど、こうしてゆっくりと地道に険しい道を踏破していくのも、バイクの楽しみの一つだ。

「けっこう涼しいねー！」

前を走る恵那が言う。

「だよね、やっぱ標高高いからかな？」

キャンプ場へと続く林道は夏とは思えないほど涼しく、山の木々に清められた風がここまでの道程で火照っていた身体に当たって気持ちが悪かった。

深い森の中、うねる林道を走りどんだんを走っていく。

息を吸えば、むせかえるような山の匂いが胸いっぱいに入りこみ、木漏れ日がヘッドライトのメツキをキラキラと輝かせる。

知らない道、知らない匂い、知らない景色。やっぱバイクはこうでなくちゃ。

「……綺麗だね」

前を走る恵那が言う。その言葉には、いろんな感情が詰まってるように聞こえた。

ボクもはじめてバイクで遠出したときはこんな感じだったな。

楽しくて、ワクワクして、でもちよつと怖くて、この角を曲がればどんな景色が見えるんだろうとか、もうちよつとスピードを出してみようとか、本当にいろいろなことを考えた。

恵那もきつとそんな気持ちなんだろう。

「この先に展望台あったはずだから、そこでちよつと休憩しよつか」

「はい」

2人の元気な掛け声とともにスロットルを回す。流れていく景色。3つのエンジン音が山の緑に吸い込まれていく。

「「おぉー！」」

目の前に広がる大自然に、3人で感嘆の声をあげる。

一之瀬高原を登ること約4キロ。ボクたちは山を登りきった先にあつた大栗展望台にたどり着いた。

「うわー、山しかないんだけど」

「ほんとだ……わたしたち、こんな山奥まで来てたんだ」

木組の柵の向こう側に広がるのは、どこまでも続く深い山々。標高がたかいからか、雲が山のとっぺんに帽子を被せている。

「リンにも見せてあげたかったな」

恵那が写真を撮りながらつぶやく。

「ちょうどお昼だしライン送ってみてあげれば？」

「うん、そうだね。電波も繋がるみたいだしちよつと連絡してみるよ」

そう言いながら恵那がスマホをポチポチといじり、少ししてボクのスマホが震え出す。

恵那：一の瀬高原とーちやーく

リン：めつちや山奥

双葉：ボクもいるよー

綾乃：わたしもいるよー

リン：知ってた。恵那1人でこんな山奥くるわけないしな。あんま無茶させんなよ

双葉：大丈夫！ 往復たったの200キロちよつとだから

リン：なにも大丈夫じゃねえよ

恵那：そつちはどう？ 友だち作れましたか？ ご飯は食べれていますか？ お母さ

んは心配です。いつでも帰ってきていいからね。オヨヨ

リン：お母さんやめろ。けっこう楽しいよ。教習おもしろいし

綾乃：今免許合宿行ってるんだっけ？

リン：うん。バイク楽しい

恵那：ファイトだよリン！

リン：ありがと、そろそろお昼終わるから切るね。じゃあまた

恵那：はーい、免許取ったらわたしのこと後ろに乗せてねー

リン：捕まるわ。来年になったらな

恵那：うん！ 楽しみにしてるね！

リン：うい

スマホをしまう。楽しそうだなによりだ。

「リンちゃんがバイクかー ずっとスクーターだったからあんまイメージわかないね」

「ビーノでもどこでも行くもんね」

リンはセンスいいし、きつとすぐ免許取って帰ってくるだろうな。そしたらまた一緒にどこかに行こう。

「4人でツーリングとかできたらいいよね」

「だね」

「うんうん」

夢が広がっていく。きつと、そう遠くないうちにかなうことだろう。いったいどんな旅になるんだろう。

そう思うボクだった。

「ねえ2人とも、そろそろお昼にしない？ わたしお弁当作ってきたんだー」

「えっ、ほんと？ やったー！ わたしもうお腹ぺこぺこだったんだよねー」

楽しそうに笑い合う恵那と綾乃。やっぱりバイクは人と人を結びつけるなにかがある。

「双葉も食べよ？」

「……うん！」

笑顔でうなずく。ちなみに恵那のお弁当はすごくおいしかった。

それからボクたちは山道をぐるつと回り、目的のキャンプ場へとたどり着いた。

「おおー」

目の前に広がる手つかずの大自然を前に驚きの声をあげる。

まず目につくのは林の中を流れていく清流。透き通っていて、川底の苔や岩の形が丸見えだ。

そして次に目に入るのはほとんど人の手の入っていない木々。まるで山をそのままキャンプ場にしたようなそんな印象だ。

「なんか、キャンプ場っていうより秘境っぽいね」

「わかる」

綾乃の言葉に静かにうなずく。

さつき受付をしてなかったら、ここがキャンプ場だなんて信じられなかつただろう。

「じゃあ気を取り直して、キャンプはじめよー！」

「おー」

こうして、恵那のはじめてのツーリングキャンプがはじまるのであった。

椅子に座りながら、ランタンの灯りをぼんやりと眺める。

空はいつの間にか真つ暗になっていて、木々の隙間から見える漆黒の闇の中に、星が点々と浮かんでいた。

得体の知れない虫の鳴き声や、カサカサとなにかが動く音、風で揺れる枝葉。

夏の山はとにかく生き物の気配で満ち溢れている。最初のころは怖かったけど、今じゃどこか愛おしさすら感じる。

「あ、まだ起きてたんだ」

そんな声がして振り返る。恵那が眠そうな目を擦りながらボクを見ていた。

「どうしたの?」

「鳴き声とかがすごくて起きちゃった。夏の山ってほんとすごいよね」

「わかる。なんていうか、生命が溢れてるって感じだよね」

出っっぱなしにしていた椅子に恵那がちよこんと腰掛け、夜の山に耳を澄ます。

夜の一の瀬高原は8月とは思えないほど涼しく、時折吹く風が枝葉を揺らし、なんとも言えない心地のいい音を奏でる。

「今日はごめんね。いきなりこんな山奥走らせちゃって。もつと調べておけばよかった

よ」

「ううん、すっごい楽しかったし、全然気にしてないよ」

「そっか、ならよかった」

「でもお風呂入れなかったのはちよつと気にしてるけどねー」

「うぐつ、明日温泉寄るからそれで許して」

「ふふつ、よかろー」

たじろぐボクに恵那が楽しそうに笑う。

「旅してるとお風呂入れないのとか普通にあるからさ、適当になつちやうだよ。リ
ンにも言われたよ」

いきなり首筋に鼻を突つ込まれて臭いと言われたときは、ショックで2日ほどトラウ
マになった。

「あはは、ダメだよー女の子なんだから」

「うん、最近は気をつけてる」

「そういえば、明日はどうするんだっけ？ 奥多摩湖行くんだよね？」

「そうだよ。朝一で麓まで行ってそのまま東に進んで奥多摩湖に行く予定。景色がすご
く綺麗なんだ。恵那もきつと気にいるはずだよ」

「うん！ 楽しみにしてる。そ、それでね、ちよつと頼みたいことがあるんだけど……」
恵那が頬をかきながら少し恥ずかしそうにボクを見つめる。

「よかったら、明日はわたしが一番前走ってもいいかな?」
「もしかして、ハマっっちゃった?」

ボクがニヤリと笑いながら聞くと、恵那が小さくうなずいた。
いつものいたずら好きな恵那とは正反対の姿に思わず笑いが込み上げてくる。

「わ、笑わないでよお!」

「ふふっ、ごめん。恵那のそんな顔見るのはじめてだったからさ」

「わたしだって普通の女の子なんだよ?」

「うん、わかってる」

愛犬が好きでちよつといたずら好きな、そんなどこにでもいる女の子。ボクの大事な友だち。それが恵那だ。

「双葉、バイクって楽しいね」

「にひひ、でしょ?」

ボクが笑うと、恵那も笑った。心のそこから楽しそうな笑みだった。また一人、バイク好きが増えた。そういうことでいいんだろうか。

「じゃあわたしもう寝るね」

「うん、おやすみー」

「おやすみー 双葉ももう寝ないとダメだぞー」

「はい」

自分のテントに戻っていく恵那に手を振って椅子から立ち上がる。ボクもそろそろ寝るとしよう。

足音を立てないようにゆっくりとテントの中に入る。

「おしるこお……」

「どんな夢見てるんだ……」

変な寝言を言う綾乃を見つつ、ブランケットを被って自分のマットレスに寝転がる。

「むむむ……ふたばあ」

「ちよっ」

日焼けした手がにゅつと伸びてきて、ボクの身体をがしりとつかむ。

またか……暑いからやなんだけどなあ。

「綾乃、暑いから離れて」

「すう、すう……」

「聞いてない……」

一緒に寝るといつもこんな感じだ。そんなに抱き心地いいのかなあ？

「……しようがないなあ」

頭をほんぽんと叩き、ランタンの灯りを消す。綾乃はいつも一緒にいられるわけじゃ

ないし、たまにはいいか。

「おやすみ」

目を瞑る。

こうして、ボクたち3人の1日が幕を閉じるのであった。

そして、日は昇り……

「わあ！　大きいねー！」

ダム縁に手をかけた恵那が、楽しそうに叫ぶ。

次の日、キャンプ場をたつたボクたちは411号線を東に進み、目的地である奥多摩湖へとたどり着いた。

総走行距離124キロの旅。ボクたちにとってはちっぽけな旅だったかもしれないけど、恵那にとっては大冒険だったはず。

「ここもう東京なんだよね？　なんか全然そんな感じしないや」

「あはは、それなー」

「バイクつてすごいね。こんなところまでこれちゃうんだ」

「まだまだこんなもんじゃやないよー！　琵琶湖行ったり、鹿児島行ったり、バイクならどこにだって行けるんだよ！　ね、綾乃」

「ねー」

24時間不眠不休で走ったり予定にない豪雨で着替えが全滅したり、バイクの旅は楽しいことがたくさんあるのだ。

たんに苦行とも言う。

「あはは、それはちよつと遠慮しとこうかなー」

ダメカー　やっぱリンのようにはいかないなあ。

「そういえば、双葉つて夏どこ行くのー？」

綾乃がダムを覗き込みながらボクに聞く。見ててヒヤヒヤするからやめてほしい。

「野クルで夏キャンして、あとは最後のほうに鹿児島まで行ってこようかなって思ってる」

「うはー　また遠く行くねー」

「せっかくの休みなんだし、うんと遠出しないとね」

「ふーん、じゃあ日程決まったら教えてよ。ついてくから」

「うん！ わかった……え？」

あまりにもさらつと言われた言葉に思わずきよとんとするボク。そんなボクを綾乃が不思議そうに見つめる。

「ついてくるの？」

「うん。ていうか前言ったじゃん考えとくって」

考えとく……はじめて綾乃と琵琶湖に行ったときの話だろうか。そんなのよく覚えてたな。もう一年近く前の話なのに。

「めっちゃ遠いよ？」

「今さらでしょ？」

「そっか……」

この様子だと、誘わなくても待ち伏せされて勝手についてきそうな感じだな。

1人で行こうと思っていたけど、まあいいか。

「じゃあ、よろしくね」

「はいよー」

「ふふっ、気をつけてね2人とも」

「はーい」

「でも、たまにはわたしもツーリング誘ってねー」

そう言うてにつこりと笑う恵那。

「うん！」

そんな恵那に、ボクと綾乃もにつこりと笑い返すのだった。

「じゃ、せっかくついたんだし、3人で写真撮ろつか。すいませーん、写真撮ってもらってもいいですか？」

「ああ、構わんよ」

どこかで見たことのある渋い声のおじさんにスマホを持ってもらい、3人で肩を並べてピースする。

……っというか、リンのおじいさんじゃん。

なんでこんなところいるんだろ……いや、気にしたら負けか。

「撮るぞ」

「「ピース」」

パシヤリ。また思い出が一枚。